文學博士 佐々醒雪
巖谷小波 校訂

俳諧叢書第四冊

俳論作法集

東京 博文館藏版

解題

俳諧或問

脩竹堂著

延寶六戊午八月版（江戸芝神明前鶴澤九兵衞板行）

中本二冊本にして談林派の俳論なり。下卷には同派の附句百數十句と、一時軒惟中が獨吟を梅翁宗因が點したるとを載す。書中、常に一時軒のみを推賞して、梅翁、一時軒と並稱し、ことに一時軒は貞德、立圃の長所をも捨てず、集めて大成せるものなりといひ、且つ好んで和漢の故實を引用したるは、一見、惟中が門流の筆と見ゆ。著者修竹堂は、序文より見れば、關西より來りて江戸に住みたりといへど、何人なるか明かならず、疑ふらくは、惟中の變名にはあらぬか。書中に修竹堂の句といふもの一句も見えざるも訝しく、江戸談林の人々を梅翁に親炙せずとて輕んじたるより見れば、梅翁の直門らしくして、しかも惟中のみを推重して、大阪壇林第二世といはるゝ西鶴や京都の總本寺高政などの名をだに擧げざるも疑はしく、集中に引用せる句の作者に、惟中の生國なる備前を初め備中、美作、因

幡の人最も多きも故ありげなり。且つや當代の談林派にして、これ程にだに讀書の素養ありしものは、先づは惟中一人なりしが如くなれば、よしや修竹堂は門人の名なりとも、俳論は總て岡西惟中の説と見て大差なかるべし。當時、匿名又は門流の名にて俳論を公にして、己が名を賣らんとすることの流行せしは、俳諧史に通ずるもの〻、夙に熟知せるところなるべし。但し、惟中東上のこと、未だ所見なし。

本書は柳亭種彥の舊藏にして、チャンバレーン氏の文庫より、今、上田博士の文庫に移れるもの、蓋し稀有の珍書なるべし。元來談林派の俳論中に於てや〻理路の辿るべきもののあるは惟中の著書のみにして、就中本書の如きは簡潔にしてよくその俳論の要を盡せるものなるべし。

俳諧增補提要錄

松露庵白井鳥醉の俳談をその門下の記せるものにして、安永二年に一たび上梓せられたりしに、七年二月火災にて板木を失ひしかば、更に增補して出版せし由を記せど、歲次は明かならず、編者の名をも記さず。但し「古人五百題集（松露庵二

世編」にならべて、初登の門人の助ともならんと菴に藏刊す」とあるより見れば、松露庵にて編みて藏版とせしものなるに似たれど、增補中に見えたる俳諧に、烏明の發句、百明の脇、烏醉の第三なるものと、百明の發句にて烏明と兩吟せしものとを採り、且つ百明の發句を多く擧げたるを見れば、松露庵烏明か土龍庵百明か、この二人の中にて編みしものなるべし。孰れにしても一世松露庵烏醉が門人なり。

その俳論は、江戸風の佶倔難解の俳風に反對して、專ら炭俵調の平易なるを尊びたるは、麥林の流風なほ保存せるを見るべし、且つ天爾波切字などを細説せんと企てたるは、やがて白雄を出すべき源流とやいはん。蓋し烏醉は麥林の門人柳居の門に出でて、二世烏醉、烏明、百明、春秋庵白雄等をその門下に出したる寶曆、明和年代の名家にして、未だ蕪村、曉台等が新俳風に接するに及ばずして、明和五年に歿したれば、門人等は、天明調にも反抗する必要上、亡師の俳語を錄してその門流を戒めしものに似たり。されば天明調の小反動としても、天保調の前驅としても、ともに一讀の價値あるべきか。唯史的の興味にとる、その説に傾倒するに

はあらず。

貞享式海印録　曲齋著

(安政六年序)

枕本六册より成れる大著述にて、七部婆心錄とともに曲齋が一代の心血を注ぎたるものと見ゆ。一卷より五卷までは木板にて、安政當時の板なるべけれど、第六册は銅板なれば明治初年の開板なるべし。全編芭蕉の傳書といふ貞享式、一名二十五條を根據として、許多の俳諧に例證を求め、蕉門俳諧の式目を歸納的に論斷せんとしたるものなり。かの二十五條が芭蕉より其角、去來に傳り、去來より支考に傳りたりといひ、又は支考の僞作なりといふ、その當否は今必しも定むるを要せず、曲齋は芭蕉の出席せる俳諧の卷々を悉く調査し、その足らざるものを、直門の高足等が俳諧によつて補ひて、實例を根據としたる通則を發見し、これを二十五條及び貞德風と比較したるものなれば、蕉門の式目としては、既に疑念を挿み難き斷案を下したるものといふべし。其式目の價値如何は、芭蕉及びその高弟の責任にして、曲齋が研究者としての事業は極めて忠實正確なりといは

ざるべからず。引用せる俳書數百部、芭蕉とその高弟との著は成し得る限り渉獵せるものにして、天明期以前の俳諧の形式は殆どこゝに盡きたりといふべし。その尨然たる大冊にして、本卷の過半に當ることを厭はず、その校正の極めて困難なることを避けずして、これを收錄せしは、主としてこれが爲なり。

但し原書は恐くは出版を急ぎたると、出版費用を節せんとせるとの爲に、版下の校正頗る疎漏にして、ことに第六卷の如きは細字三十四行の銅板なれば、字體の不明なるものも尠からず。總て俳諧の方式を歸納することを主としたれば、その方式に關係なき部分には、往々誤字あり、脫漏あり、殆ど讀み下し難き句もあれど、今一々出處に就いて校合せんことは、短時日の間に成し得べきことにあらねば、已を得ずして原版に從へり。讀む人校正者の疎漏なりとなすなくんば幸なり。

俳諧寂栞

春秋庵白雄撰
拙堂增補

(文化九年板)

寛政の寫本を基として、これを安永本にて補ひ、更に拙堂の私見を增補したるよ

し、凡例に見えたり。全部三卷、上卷は發句の論、中卷は附句の論、下卷は主として句作の修辭を說き、別に頁外一卷ありて天爾波を論ず。總て平明暢達、初學者の耳に入り易からんことを力めたるは、雪中庵の小鑑とともに、俳道入門書の双璧とすべし。但し附句論中の自他の論の如きは、既に海印鎌にも論破したる所にして、歌學者の自他の說より思ひよりて、强ひて一箇の私見を樹てんとしたるもの、蕉門の通說とは言ひ難かるべく、天爾波の說の如は、勿論、今日より見れば殆ど噴飯すべきものなれど、歌人だに文法語格等の智識に乏しかりし時代の著書としては、强ひて非難すべきには非ざるべきか。

加舍白雄が春秋庵の開祖として、蕪村曉台等の、古典的學者的俳風に對抗して、專ら平明通俗にして、一種の纎細優美なる調子を創めしは世人の悉知せる所、その末流こそは天保の俗調に墮したれど、白雄その人の格調は、俳壇の異彩とすべし。加ふるに本書の如き叮嚀親切なる著書あり。春秋庵一派の繁榮も所以ありといふべし。

拙堂といふ人、春秋庵派なる江戶の俳人と見ゆれど、その傳未だ考へず。卷尾に

誠拙禪師といふ人の句あり、その名と關係あるにか。增補は忠實なりとはいふべし、殆ど創見といふべきものなし。

蕉門格外辨　一冊　車蓋編　半化叟補

（寛政二年十一月京菊舍板）

蕉門俳諧の破格的なる實例を集め、類別して示したる小册子にして、その多くは勿論海印錄中にも見えたるものなれども、異例の主要なるものを拾ひたるが頗る索引に便利なるべければとて、こゝに採錄せり。

車蓋は天明寛政頃の俳人にして、半化發句集、發句三傑集、冬の日解、七部拾遺、桃のしろみ、蕉門季寄等の著あり。半化房闌更の門人なるべし。

葛の松原　野盤子支考述　潛淵庵不玉撰

（元祿五年著。出板年代不詳、京井筒屋板）

本書の終には元祿壬申（五年）五月十五日と記したれば、これ宛も支考が芭蕉の門に入りし年にして、支考が第一の著書といふべし。されはにや、芭蕉のみならず其角、嵐雪、正秀、去來などを初め、同門の句をも多く推賞して、後年の支考に見るが

如き、我獨り蕉風の骨髓を得たりとなせる自負心を示さず。說くところも頗る穩健にして、往々言語の選擇にも論及せざるにあらねど、主として蕉風の風雅の本體を明かにせんとせり。支考の俳論としては、第二編にその代表的俳論といふべき十論の注釋書を出したれば、今は簡單にして平明なる本書をとり、相對照してその一斑を想見せしめんとす。

撰者として署名したる不玉は出羽の人なり。支考は、本書にも見ゆるが如く、元祿五年に東奥に行脚したれば、かしこの特志家に本書を與へたるものなるべし。されば著作の年は元祿五年なれど、出板年月は稍後なるべし。

發句小鑑

雪中庵蓼太述
雪太郎三駱著

(天明七年板)

附合小鑑

雪中庵蓼太編
雪星觀牛家著

(安永四年板)

二書ともに、僅々十數葉の小冊子、活字にすれば、數頁のみ。されど從來の俳論と稱するものが、多く高尙を衒ひ、以心傳心を說いて、頗る難解曖昧なるを、蓼太が眞

の素人にも理解せしめんと企てたるは多とするに足るべく、すべて具體的に説明せんとして、良き句のみならず拙き句の作例をも示したるは、この時代より見れば、實に叮嚀親切なりといはざるべからず。就中、附合小鑑中の執中の法や煙草盆の傳の如きは、極めて巧妙なる例證にして、初學者に俳諧の附味を教ふるには此方法に如くものなかるべし。その俳論の根據は、雪中庵と稱すと雖も、實は主として支考の著書より來れるに似たれど、その説明の通俗にして、よく門外漢にも理解せらるゝことは、蓼太の功とすべし。

蓼太の句は、或は蕪村の高調に摸し、或は麥林の俗調、江戸座の異調をも學び、その趣味の純正を缺くことは、何人も認むる所なるべし。蓼太は趣味の高き俳人にはあらざりき、唯句作に長じたると、かゝる平易なる俳諧作法の説明に巧なりしことが、三千の門葉を擁し、數箇所の別莊を建て、駕に乘り從者を伴ひて全國を周遊することを得しめたる主因なるに似たり。されば蓼太を見んとするには、その句集よりも寧ろ二冊の小鑑に於てすべきか。その終焉記に、歿する前日まで小鑑の編述に從事したりといふも、亦自ら知れるものといふべし。同書に更に

手爾波小鑑を著す企ありしといへど、その書の成らざりしは惜むに足らざるべし、蓋し文法學の未だ成らざりし安永天明の世に、俳人が說きし天爾波論に見るべきものあらんことは、豫期し難ければなり。附合小鑑の末にある、假名遣ひの事」の一節を見ても、その語學的素養は想見するに難からじ。二書ともに、門下高足の著として公にせられたれど、その說は總て蓼太の說なるべく、皆蓼太の校閱をも經たるものなり。

本編に收錄せるもの、上延寶より、下天明に及ぶ。これを第一二編の注釋書類と參照せば、大抵元祿を中心とせる蕉風の俳諧を窺ひ得べきか。唯談林以上と寬政以後とに及ぶこと能はざりしと、鬼貫、許六などの俳論を逸したるとは頗る遺憾なれど、紙幅の許さざるが爲に、如何とする能はざりしなり。

大正三年五月　　佐々醒雪識

凡例

一　俳論作法の集、古へより其類多き事汗牛充棟も啻ならず、所謂雲上人の手に依つて、纔に連ね歌の餘興に趣きを添へつゝ、漸々發芽の力を逞しうなし來れる俳諧の附合が、一度民間人士の手に培はるゝ事の深くなるまゝに、自然の數として、法式の書は相前後して出で、俳論は甲乙の間に絕ゆる事なくして今日に至れるが、要するに異なる見解より生ずる意義を擁しながら、千萬繰返しても確的なる歸着點を得る事は不可能なる可し。

一　當初本卷の編集に際し、俳論或は作法集の書册は、机上に堆積せしが、それを撰擇する事の困難は云ふに及ばず、徒らに名高くして其の實質そはざるものあり、或は單に自己の都合または一派の偏見を述べたるものあり、殊に作法の諸集に至つては其弊最も甚だしく、公平なる見地より首肯に値ひする程の論斷を爲せるものは容易に見當らず、故に本卷は專ら實質內容を本位として、必らずしも珍本奇書を採らず、以下の諸篇を可なるものと認めて收錄なせるも

のなり。

俳諧或問　俳諧增補提要錄　貞享式海印錄　俳諧寂栞　格外辨

葛の松原　俳諧發句小鑑　同附合小鑑

以上の八篇は俳論作法の上に於いて、決して絕對權威あるものとは思はざれども、大概偏僻に傾ける自說を主張し、虛僞を構へて得意とする點尠き而已ならず、歷史上俳諧の盛大時代なりし元祿年間に在りて、其の芭蕉歿後に於いて俄に唱へ出されたる俳論と作法は、良もすれば後世を過つものあり、或は文辭の間誇大に秘事口傳を叫ぶ輩が、自己の衣食の資に滿てん爲め、陋劣なる手段を弄して金錢を貪り、俗習到底度し難き俑を作れる者ありしに比すれば、根柢に於いて其の用意の上に多大の相違あり。今俳諧或問を採りながら、次いで起りし許六支考のものを（葛の松原のみは支考が述作中に在りて、且つは不玉の選せるものなれば、最も穩當なるものゆゑ、これを揭ぐる事とせり）除きしは、俳諧硏究者に對し聊か婆心の存する處あると共に、旣に廣く世に刊行出版されたるものあればなり。

一　俳諧或問は文學博士上田萬年氏の所藏にして、種彦の藏印あり、青表紙上下二册本の完全なるものなり。今借覽し精密に傳寫して版に附するに至る。一般世間に知られざるの珍書なり。吾人は特に上田博士に謝す。

一　俳諧增補提要錄は紙魚の爲め、貞享式海印錄は後半木版の細字磨滅の爲め甚だしく判讀に困難せり、殊に貞享式海印錄は、傳寫の際誤れるものと見え、處處に引用の句と原本との間に相違あり、依つて氣付きの分は一々其の原本に憑り校訂せしかど、猶遺漏を保し難し、他日を待つてさらに一層精細なる校訂を爲す所あるべし。

一　俳諧寢栞と格別辨は昔しより携帶に便なると、索引の要を得たるとに依つて知られたる書なるに、兩書共引用の句と原本との間に尠からざる相違あり幸ひにして當引用書が校訂者自身に所有しあるものは兎も角、さもなき分は一々他より借覽或は纔に古本を得て對照校訂せり。

一　俳諧發句小鑑及附合小鑑等は、初學者の爲め必須の參考書として知られたるものにして、既に世に廣く流布されしものなれども、爰に校正の不正確なる

爲め、往々にして其意味不明瞭なるものあり、要するに原本の正しからざるものに憑れる爲めなるべければ、今松木鯉雨氏より借覽せる完全なる版本によ り正確なる校訂をなせり。特に松木鯉雨氏に謝す。

一　なほ俳諧寂栞の引用句に相違あるものは、其の傍に一々何々ともあり、または何々として聞ゆ。校訂者誌すとなし、格別辨の分は斷る迄もなく一々引用原本通り訂正なせり。

一　前卷同樣木曜會員橋本小舸君の助力を多とす。

大正三年五月

巖谷小波識

俳諧叢書第四編 俳論作法集

目次

目次終

俳論作法集

文學博士 佐々醒雪
巖谷小波 校訂

俳諧或問上

脩竹堂の主人といふ者あり。關西より來りて東武のかたはらに僑居す。黄金千層の富を談笑して、素實半間の雲に臥す。性俳諧を好んで、梅翁の種を莊子が南苑に栽ゑむとす。またかたからずや、一日客あり其の書窓をたゝく、主人出でむかへ、酒茶あるにまかせて、飽けば即ち休する事を解す。客の曰く。人は時に逢ふを喜ぶべし。金革を衽にして命を日暮に待つもの、猶戈を横たへて詩を賦するの

風雅あり、いかにいはんや、予と我れと幸ひに太平の代に生れて、堯日を扶桑の巓にあふぐ、願ふらくは樂みを衆と共にして、興を花月に寄せん事を、主人莞爾として云ふ。人の性たる各好む所あり。淵明が菊、和靖が梅、餘香ある事を知らず、杜豫に左傳の僻有り、予れもと草莽の家に長つて、詩歌の奥深き林に游ばず、唯俳諧を好んで群を郷里の小兒と共にす、衆と共にたのしむにあらずや、客の曰く。鶴九皐に鳴きて其の子これを和し、虎嘯けば風生じ龍吟ずれば雲起る。嗚呼先生是を興す者也。何ぞ問ひを發して、そのうたがひを決せざらむや。

一或人問ふ。俳諧はいづれの時より發りたるや。答へて云ふ。いまだ是を詳にせず。貫之が古今集に俳諧歌を載て和歌の一體とする時は、名義の傳はりし事は久し。蓋し連歌の類なり。一句を兩吟するは源頼朝公上洛有りし時、森山を通らせ給ふ折ふし、梶原源太御側ちかく打ちけるが「森山のいち子さかしく成りにける。と有りしに、梶原取敢ず。「むばらがさぞやうれしかるらん。とつけ侍る。覆盆子を小兒に取り荆棘を老婆によせたり。詞和歌のごとくならず。體また連歌に異なり。是などをや其の初めとも申し

侍らんか、歌に連歌有るは詩に聯句あるがごとし。俳諧は詩と歌とをあはせ、體を連歌にかりて活法を振舞ふものとしるべし。

一問ふ。俳諧は、連歌の類なりとは古今の陳言也。歌と詩とを合はするとはいかなる義ぞ。

答へて云ふ。俳諧に用ふる俗語はいふに及ばず。歌に讀まぬ漢語は皆俳言也。たとへば、梅の花と云ふべきを、梅花といひ、佛の教へといふべきを、佛道といふの類是なり。殊更古詩の言葉古詩の心をまじへたるに、秀逸の句も有る物なり。漢語梵語の嫌ひなく、しかも風雅にするはいかいなれば、さて歌と詩とをあはするとは申すなり。

一問ふ。俳諧の義は命を聞きぬ。中頃の俳諧と、今のはいかいとは體製はるかに異なり。宗因より以前にもかゝる風も有りけるにや。

答へて云ふ。日本武尊東征してより後、和歌變じて連歌出で、連歌變じて俳諧の名有り、中頃より、漸うあれども二字の心に叶ふ人もなかりしか、亦文献のたらざるゆゑか、慥かに見當りたる事も侍らず、正しくは荒木田守武なん深く俳諧の心に達し、神明の御告にまかせて、此の道を興起す。今世におこなはるゝ守武千句是なり。其の巻を見るに、盡く寓言を以て本とす。かゝる絶世の才有りしかば、神明の内證にも通じけん。白日に登仙しぬ。其の後は其の跡を繼ぐ人もなかりしに、山崎の宗鑑、其の九分を學び得て、犬筑波集を撰し。一家をたてんとす。その外愛に心ざす輩すくなからず。あるは和歌は流にそしられ、または世のをさ〳〵しからぬに逢うて、此の道いとすぢの如くなり。天運時到り、四海浪うち治まり、萬の事むかしにかへる。今の御代に梅翁先生出で給ひて、絶えたるをつぎすたれたるをおこし。神路山の言葉の花、秋津洲

の内にひらかしむ。今は早世に妨ぐる者之なく、都鄙其の風をしたふことゝ成りぬ。殊には備陽の一時軒、梅翁に親炙して悉く其の妙を傳へ、莊子が寓言の俳諧にかなふ事を論じて、後學にみちびく。されば俳諧の道は、守武草創し、宗鑑討論し、梅翁一時軒潤飾すと申すべし。

一問ふ。守武、宗鑑の後にも俳諧の好士おほし。今なほ京、江戸の點者おほくは貞德の門より出づれ共、寓言を本とすとも見えず。風儀また宗因にことなり。寓言とはいかなるを申すにや。

答へて云ふ。貞德はさすがの才德なれば、爰に心なきにあらず。只故習にひかされ、または時勢にはだされて、新奇を出す事なかりしにぞ、其の書き置ける物を見て知るべし。寓言とは、我心に思ふ事を、物に比し事に託して云ひ出すの義也。抑も莊子が心は、道は太極の前にあれば天、地、人、物、有情、非情ひとつとして爰にもるゝことなし。物我本同根なれば、かれを善とし是を惡とすべからず。この道は音もなく臭もなく、さしていふべき形もなし。萬物を消息すれども己が功とせず。古今に亘れども己が德とせず。我れも亦此の德にひとしく、萬物とともに往來して、無窮の樂みを樂むべし。おもへり其の意味は逍遙遊、齊物論を讀みて考ふべし。かく逍遙自在の道を體して、萬物をひとしく見る眼なるゆゑに、かりにも外物にあづからず。心にうかぶ千差萬別、一毫の私意按排なく言出せば、是を非とし、非を是とし。眞僞を混る言葉の自然と、無爲の道に歸する、是を莊子が寓言といふなり。本朝にては源氏一部の大意よく此の心にかなへり。一條の禪閤兼良公の御說にも、牡丹花肖柏の講ぜられしにも、おもては莊子が寓言なりとの給へり。其の餘は兼好がつれづれにしくはなし。心にうつり行くよしあし事を、そ

こはかとなくかきつくるといひ、下戸ならぬをよしとし、四十にたらずして死にけんと云ひ。子孫あらせじといへるを好ゝ、文は南華の篇と云ひ、全篇老莊の心なり。扨俳諧の二字は、たはふれかたるとよみたれば、月をうらやみ花にめで、折ふしの興に任せて、ひやうふつと云ひ出す言葉の、みづからも腹をかゝへ、人の耳目をよろこばしめて、衆と共に樂むを俳諧の骨子とす。是莊子が心にあらずや、猶くはしくは一時軒の蒙求に見えたり。彼の晉の八達が塵世を脱出して、赤裸になり、大酒を飲みて清談したる、其の清談は皆俳諧ならん。

一問ふ。然らば寓言は、是非邪正を混り、あらざるうそをいふ事か。

答へて云ふ。其の言にあらはるゝ所をいへば、かくのごとくなれども、道體の廣大なるを形容する所より出でたるものなり。此の心老莊の書のみに非ず、儒道にも此類おほし。しひていはば、易に、龍野にたゝかふ。其の血玄黄なりといひ、詩經に崧嶽の神降りて、申伯と成りたるといへり。其の外皇天上帝を立て、人物の禍福を鑑ん事を論ず。果して此の衆冠底い人有りとせんや、是只其の理形容して人に告げたる也。されば楊龜山も逍遥の一篇は、子思い意なりといへり。朱文公も、道士の名に託して參同銘に註せられたり。歌道を以ていへば、京極黄門の、柿本躬貫として、ことごとしくいはれたるは、人麿、躬恒、貫之の三人を合せたる作り名也。松岩寺大臣善成公河海抄を作りて、物語博士源惟良といへるば、源氏、惟光、良淸をあはせてつくれる也。これみななき事を有るやうにいひなしぬれば、寓言といはざらんや。

一問ふ。詩歌は國家のもてあそび物なれども、其の言の邪正を以て其の人の志しを察し、其の

國の政を知る、尤も世に補ひあるものなり。
吾子がいふ所の俳諧は、一時の狂言にして、寓言の僞りを本とすれば、才德の人のすることにあらざるべし。
答へて云ふ。人生れて靜なるは天の性なり。物感じて動くより、自然の言に發るを詩歌と云ふ。其の初め異樣も有る可らず。雷變じて列國の詩となり、國風變じて騷となるよりこのかた、必らず、古風のごとくならず。ことさら唐朝には詩人おほく、後の詩を學ぶ者手本とすれども、其の詩人盡く賢才の人にあらず。半ばは不德の人とうけたまはる、ことの端をもてかならず其の人をとらば、王莽荊公を用ふるの誤まりに近からん。いかにいはんや、時に應じ物によつて、一時の興をやるたはふれ、何の妨げ候はん、詩經にも能く戯謔すれ共謔をなさずといふ、孔子も前の言は戯れのみと宣へば、聖賢もかならず戯れなきにあらず。詩歌俳諧は、人々まじはりて一時の興をす。和を尊らとするなれば、さのみ深く論ずるは風雅の徒に非らず。
一問ふ。先生の言、誠に俳諧の道において餘蘊なかるべし。されども彼の心を以て此の心を說かば、あるひは牽强附會のそしり免かれがたからんか、俳諧は寓言とし戯言とし、慥かに此の事に用ひたる和漢の證侍るや。
答へて云ふ。余かつて是を聞けり。吾子八雲の御抄を見ずや、俳諧の體九名をあげて狂言といふを記せり。狂言は今の俳諧也。俳は宗書に雜戯也。諧は語也。又偶なりとも註したり。偶字も戯と註したり。前漢書に、談笑類ニ俳偶一と云ひ、呂與叔が詩に、文似ニ相一如ニ反類レ俳と云ひ、鄭綮が詩に、詩語多ニ俳諧一と云ふの類、あげてかぞふべからず。大史公言譚辯捷の人を集めて滑稽傳を作れり。姚察が註に、滑稽者猶ニ俳諧一

と見えたり。是等の心にて能々考ふべし。豈に予が私言ならんや。

一問ふ。寓言の本意、俳諧の心、雲霧をひらいて青天を見るがごとし。敢へて問ふ。發句はいか樣に仕りたるが能く候や。

答へて云ふ。發句は一卷の初めなれば、たけたかく幽玄にして、しかも手の有るやうにすべし。餘りに言の緣にひかるれば句體せまり、大きにせんとすれば手もなく風情面白からず。春は花下に歸らん事を忘れて、胡蝶の夢をむすび、夏は淸き流れに嗽ぎて、一味の涼をもてあそび、秋はあれたる軒をいとはず、峨眉山の月を爰元に移し、冬は北窓の寒さを忘れ、香爐峯の雪をうらやみ、見ぬ戀にあくがれては、一の宮のむかしをあはれみ、あかぬ別れを恨みては、馬嵬の原の泪を浮ぶ。からのやまとのある事なき事取合せ、我が身心其のさかひにうちまはりて、聊かも餘念なく、例の寓言をまじへなば、などか堪能の作もなからん。付合なほかくのごとし。細川玄旨の歌のよみかたにも、作をば天地にめぐらし、詞を尋ね手をわけて、面白く詠めと遊ばしたり。是ぞ誠の龜鑑なるべし。その意味中中筆につくしがたし。これぞとおもふ發句を、爰に書き侍る。されどもその趣向風體は、人々の好む所あれば定めがたし。

春　五句

候らはん見えわたりたる山ざくら　一時軒
ぬかみそや殘んの雪の朝かんかき　備中衆
花にいはゞむべ山風やあらしんき　胤及
山といつぱちりひぢりめん花衣　風蜘
春の禮や思へば伊勢と小笠原　京　次末

夏　五句

すりこ木や青狩衣に蓼ゑぼし　作州　備中衆
蚊柱やいはゞ浮世の嵯峨丸太　一花

鮎なます會稽の鉢をすゝぐとかや　野田氏

不斷着や我身ひとつの土用干　江戸 正友

釣船や沖にちひさきはつかつうを　同 松意

秋　五句

散れば薪是も柳の德ならずや　五十村氏 自木齋

芋頭あらはせて御覽空の月　清家氏 朶木

袖に散るやいとはかなく紋柳の葉　江戸衆

秋津洲や蜻蛉むすび今朝の露　一時軒

夕露や麓四卷のつれ〴〵草　風蜘

冬　五句

霜高し半夜の鐘のひゞき殿　因州 自取

雪に鷺是ぞ深野のきり〴〵す　備前 長時

河豚の醉ひと君は知らずや水增水　作州 一帆

宵の雪やあした一ぺんの門をはく　作州衆

手盥に寒水たゝへて餅のごとし　木むら 踏雪

一問ふ。連歌には古事古語を、用ひ所慥かにするゆゑに、和漢の學に通せざれば堪能の名も取り難し。俳諧は只國俗のいやしきを撰ばず。故事付をば嫌ふゆゑに、一文字引かぬ輩も功者の名を得るといへば然るや。

答へて云ふ。尤も俳諧には俗語稗說嫌ひなく、あらゆる事をつらぬといへども、其の極にいたりては、中々疎學のおよぶ所にあらず。和漢の才に通せずんば、いかんぞ堪能の句も有るべきや、結句連歌には禁ずる詞、さしあひ、法式、嚴密なれば、前句により古事古語もちひがたきも有るべし。俳諧は、さしあひ等もあながちならず。法式ゆるす所おほければ、古事古語力量に任せ用ゆべし。句の善惡は其の人巧拙によるもの也。是は世上の連歌の、齷くちたるやうの俳諧師、又は文盲なる俳諧師の、己がしらぬに任せ、たとへよき句とても古事付は惡しきなどゝ、用ひぬ事のやうにいひなすと見えたり。梅翁、一時軒などは、いかなる句にてもあぐむ事なく、

其の巧拙によつて批評せらる。

ころは二月中々の事

旣に瓜をすゝむは春のきたい坊　一時軒

梅翁褒詞に　（皇帝の歸依坊にや。）

是は唐の玄宗の御時、花淸宮の園に瓜を種ゑしが、溫泉の地もとより溫かなれば、瓜は夏熟する物なれども、二月の中にはや瓜を奉りぬ。玄宗是を賞して、宮女と共に口腹の樂みとし給ふ。其の事を王建が花淸宮詩に。

內園分二得溫湯水一。二月中旬已進レ瓜

と作りしを、今爰に用ひたり。

付きさしも一ぱい〳〵また一盃

明朝琴もだいてねゝせん　一時軒

（此のねゝせん李太白もうなづくべし。）

是は李太白が山中に對して酌む詩に。

兩人對酌山花開

一盃一盃復一盃

我醉欲レ眠君且去

明朝有レ意抱レ琴來

と作りたるをねゝせんとむすびて戀の句とせり

其のほか惡魚鰐のかるぐち

火々出見の尊も腹をかゝへられ　大阪　山平

（神代のかる口も是にはよもや。）

是は日本記神代の卷に、彥火々出見尊其の兄火闌降命の鈎を失ひ、兄の神甚だ責りしかば、終に龍宮に入りて尋ね給ふが、玉依姫を幸して龍神の聟となり給ふ。龍神何とてこゝに來り給ふと問へば、しか〴〵のよしを告げ給ふ。龍神かの鈎をも赤女の口より得て奉り、おもくもてなし三年まで住み給ふが、歸らんとする時に、一尋の鰐に乘つて、一日のうちに送り奉る事あり。是等の古事誰れも知る事なれども、上手のしたて點者の僅かなるをしらせん爲めに、雜々しく書付侍る。此のたぐひにあらねども、予が獨

吟に、一時軒ノ判せられし句ども少々爰に記す。予がつたなきをもかへり見ぬは、先生の博學をしらしめん爲めなり。

莊子が銘を嶺のしら雲
九萬里に羽うつて歸る雁啼きて
（さては大鵬雁に化せしや珍重。）

是は莊子逍遙游に、北冥有レ魚名爲レ鯤。鯤之大不レ知ニ其幾千里一也。化而爲レ鳥。其名爲レ鵬。鵬之背不レ知ニ其幾千里一也。怒而飛翼若ニ垂天之雲一。是鳥也。海運則將レ徙ニ於南冥一云々。鵬之徙ニ於南冥一也。水擊三千里。搏扶搖而上者九萬里と有るを用ひたり。

春風は二十五絃の琴にひゞき
民の慍りも解くるしらゆき

是は孔子家語に、舜彈ニ五絃之琴一歌ニ南風之詩一曰。南風之薰兮可ニ以解ニ吾民之慍一兮。南風之時兮。可ニ以阜ニ吾民之財一兮。と有るを用ふ。

まつさかさまにしらみ落行く
湯のわくを聞けば焦熱地獄にて

是は山谷が演雅詩に
虱聞ニ湯沸一猶血食とあるを用ひたり。

寔に予が拙きにも、聞きふれたる古事どもを用ひたるを、少しも殘さず千金の詞をくはへられし、是又人にすゝむる教へなるべし。いかに古事古語をもつて付くるとも、したて惡しく拙ければ、何の風骨もなし。或人の句に、

富士山にならぶ程なる忠義也
扶桑國裡の陳平張良

○

佛をそしる春のあけぼの
金衣鳥溫公家儀や鳴きぬらん

かやうの句、いかに古事を用ひたりとても、一句面白からず、長高からず、俳諧とも見えず。詩とも見えず。宋儒の語錄を如レ讀。

一問ふ。梅翁、一時軒合點の句を見るに、詞の縁をふみ、言ひかけのしたておほし。世上に宗因風といふ物は、云ひかけの句は、曾て不レ好と見えたるはいかゞ、いづれをかとらん。

答へて云ふ。俳諧は只そげたる物を取合せ、自然と言の縁たえず、上下くだ〳〵しからず、しかも俳言たしかなるをよしとす。言ひかけとえんとは、雲泥の違ひあり。いひかけとは或卷に、

是は〳〵のねはんのありさま
をしなべて誰れも哀れとお舍利けり

舍利弗は佛弟子の張本、おしやるとは言語の俗語なれば、是をむすびあはせ、ねはんに付けたり。その折入しを自慢と思ふ句體なり。かやうの句をきたなき云ひかけとはいふ。是を嫌ふは尤もなり。

ふるわんぼうをまきの尾の山
質札や清瀧川にながるらむ　一時軒

親の跡ふんでは惜しむ雪消えて
死一ぱいをなせ金衣鳥　由平

かやうの類、自然の風情にて、黑白なる物取りあはせて、我れ知らず言葉のかよふ、是をえんをふむといふ。爰にこそ巧拙の入る所にて候。此のさかひを知らざれば、俳諧にはなりがたし。

一問ふ。右のごとくならば、そぎ次の體、一聞言葉の縁なきは惡しく候や。

答へて云ふ。梅翁、一時軒に送られし文に、古人の敎へとやらん、紙子に紙子に錦のえりをさしたるやうに、一興あるを俳諧と申すとかや、此の頃の句どもは、紙子なれば錦にて是非ともに理を正しくいひつめて、或ひはつよ過ぎあるはうつくし過ぎ、興なく覺え候、又實を僞りにし、僞りを實にいひなすは、俳諧の本意と承り候と見えたり。また一時軒の獨吟前書に、いかなるか是守武が餘風、目前の一卷、火うち袋

に山部公と書かれたり。是等はかの寓言をせよとのをしへなり。いはゞそぎつぎなるべし。前に引きし句、皆此の心なり。質札は大事にして藏に入れ、なほ箱に納むる物、いかで淸瀧川に流るべき。金衣鳥は無情のもの、いかで借錢を負ひ候はんや、通ひたる言葉は自然の緣なり。よく／＼心得べし。但しえんもなく、きれはなれたる句、是又最上の句にあるものなり。

鼻さきたかき天のかくやま

白妙の衣ほすてふ猿田彦　一時軒

（さし出の尊と聞え候）

胡蝶も共にとんだ作肴の

のら猫に羽をはやして囀らせ　由平

（換骨羽化したる句體に候）

前の句、天のかく山に白妙の衣ほすをつけ、はなさき高きに猿田彥の衣聞きも及ばず。後の句のら猫胡蝶とともに飛ぶべし。羽をはやして囀らせたる絶妙の所なり。

一問ふ。今宗因の風とて、世になる點者ども、そぎ次の句ならねば、何程の句にても寓言なしとて、點に及ばず候はいかゞ。

答へて云ふ。前に申す如く、紙子にしきをつぎたるやうの句、秀逸もある物なり。然かはあれど、人々により會席のうちにて、前句によつてそぎつぎのならぬ事候べし。かやうの所は唯その體ならずとも、前句にしたがふべし。會席のみならず、獨吟のうちにてもおほき事なり。

すら／＼とねぶるがごとく

秋をとへば童子對へず頭をたれ　一時軒

（秋聲賦見るがごとし）

門徒の寺の燒けて／＼

おたすきやれ今度の我等が一大事　胤及

（御門徒の朝暮のことは、いまだ諷ひに不ㇾ申新しく候。）

是等は通ふ心はともあれ、面はそぎつぎとも見えねども、秀逸の句なれば梅翁長點に及べり。此のわかちまた生死の關なり。

一問ふ。今の俳諧に謠付を専らとこのむは何のゆゑぞ。

答へて云ふ。俳諧はあまねく世上の慰種となりて、老父と老婆とが茶を呑むにも、一句つぶやけばやさしくなり、世をいきどほりて閑居する人も、句を求むれば彼の事此の事うち忘れ、朋友かたらひて野山をかけ廻るにも、我れはかくして其の句にはかく付てといへば、千里の道も遠からず、和樂を以て專用とす。されば誰れもすべき俳諧なれば、力を不レ入して、和漢の跡詩歌の片端をもしらせんとするに、謠によきはなし。此の謠自然と國風のやうになりもて行き、高きもいやしきも、後紐とくより聞きもならひもすれば、我れも人も能く覺えぬ。其の内には儒佛神道詩歌の話、凡そ聞きふれたる事おほし。ことさら物いはぬ草木鳥獸に物いはせ、死したる人をよび起す、其の意趣聊か寓言のはだへあれば、さてこそ用ひ候。

一問ふ。右のごとくに候はゞ、謠にしるす所の古事悉切なる事にや。

答へて云ふ。船の字を君にすゝむと讀み、遊子伯陽が月を愛せし事、唐土の佐國は花に身を捨つる事、しうこうが手をいたしはんろうが涙の事、白樂天が日本へ來りし事、何も考ふる所なしと見えたり。又小野頼風が女郎花の事、深草の四位の少將が小町に通ふ事も、謠に作れり。此の兩人は公卿補任にも見え侍らず。然れ共其の語勢自然のふしありて、人の耳目をよろこばしめ、本より作り物語なれば、正さずとも可なるべし。そのなき事をいひたるは、却つて面白し。且つ俳諧の義に預らねば、無用の辯なり。

一問ふ。梅翁、一時軒各點の卷に、やり句の體を褒せられし事おほし。やり句にも妙句候や。
答へて云ふ。前より云ひもて來り入れ、ほかになりて何ともさきへゆかぬ時は、一座興をさまして退屈す。かゝる時に前になづまずはなれず、後の句に助け有るやうに云ひやるをやり句といふ。是にこそ功者の入る所にて候。蒙求に梅翁の句を引きて、くはしく書けり考へ見るべし。其の外百韻のうちには用付、うはさ付の句、心いき。取なし等いづれも俳諧の一體なり。是を古風には、はなはだいみけるにや。
一問ふ。世に宗因風と號して自負するものを見るに、貞德、立圃を排するをおもてとし、其の句をみては唾はきして、笑ひ罵しる。我が子はしからず。間助くる言葉おほきは何ぞ。
答へて云ふ。今時の俳諧師らが、文盲なるをもかへりみず、梅翁の骨髓をも不レ知。眼の開きたる人、其の人の才を惜しみて評する事をきゝならひて、貴なる口吻をもつて才德を譏る、分をしらずと云ひつべし。貞德、立圃はこの道の達人にて、和漢の才をかねたれば、今の人その籓籬をも不レ可レ窺。紅梅千句は俳諧の準繩なり。はなひ草は俳諧の規矩也。されば一時軒は貞德の言を引きて、俳諧の法を證し、はなひを以て式とせる事おほし。一時軒は集めて大成すと申すべし。
一問ふ。今江戸に俳諧談林とて、九人の點者出で自ら梅翁の的流と稱し、人もなげにいひちらす、江戸中大方其の風に歸したり。吾友曾て俳諧法花論といふ書を選みて是を排したり。談林の輩は皆梅翁の正風と云ふべきか。
答へて云ふ。その法花論も見申して候。評する所いはれなきにあらず。予をもつてみれば、大きなるあやまりなり。凡そ天下の事、物修復す

る事甚だかたし。いはんや興起するにおいてをや、昔し周の代おとろへ、秦の政暴逆にして、儒を坑にし書を焚き、周公孔子の道跡かたもなくなりしに、漢の代おこりて經書漸く出で、註疏も次第に出來たり。宋朝に至りていよ〳〵盛んになり、宋明の儒者、性理の學を本として、漢儒の非を揚げて其の說を云ひ削る事古來休まず。其の論まち〳〵なりといへども、經書の文字正しく訓詁して古へに通ずる事、漢儒より善きはなし。若し漢儒の訓詁なくんば、いかんぞ宋明の性理の學もおこらんや、今江戶には、我れは貞德の門人也、又は季吟子が流也と稱して、時勢をもしらず連歌の鹽ぐちたるやうの事をして、人にも敎へ、憖に宗因をこばむにより、宗因の風に歸する人もすくなかりしに、此の輩出でゝみづから親炙せずといへども、久しく其の風をしたひ、談林の名を立て、守武、宗鑑、宗因を本尊として、世の俳諧を濟度し、人の耳目をあらたにす。十百韵行はれてより、句の巧拙はともあれ、當風はかゝる事と、こてつきたる俳諧をあらため、未だ二三年も過ぎぬ内に、江戶中其の風に歸して、高位の人々まで宗因の風を俳諧の本意とおもひ、普く翫ぶ事ひとへに彼の人人の功也。其の心ざし嘉みしても猶あまり有るものなり。

俳諧或問上終

俳諧或問下

一問ふ。付合の句いかなるをかよしとせんや。
答へて云ふ。右にもいふごとく、俳諧は極まりし付合もなし。其の折に從ひ、新奇を出すべし。但し初心なるうちは、上手の卷を見て、その短なる所をすて、長ずる所を取りて我が風の助けとすべし。予が見聞及びたる句ども、あらかた記し侍る。よしと思ふ人は學ぶべし。終りに一時軒惣點の卷を載するは、此の道の正式、予が尊とぶ所なればなり。

前後を忘する揚屋なりけり
三味線に而も乘りたる駒さへ臥し　作者不知
夕霧樣と一座しにけり
妙句とも雲井の雁の御聲にて　因州 風蜘

秋風吹けば山さきの町
赤松や梢をならべきつて出で　因州 風蜘
雨脇の松原さして急ぐなり
心ぼそくも飛車角のみち　同
取りはづしたり松風の音
山の腰腹中寒くひえぬきて　同
中門のまへに春は來にけり
海老鎖のはねにも鳥の囀りて　備前 長時
生田川ながれて淸き樽の口
あぶらとろ〳〵布引の瀧　同
苗代水に蜂や飛ぶらん
口笛を蛙の歌にふきあはせ　同
小船一艘二さう三さう
爰許へ名乘り出でたり浪のすけ　京 次末
牛若丸の雪の夕暮
まつ初段さて三味線の駒留めて　同
やれ〳〵といふ嵯峨の山彦
珍しや赤栴檀のほとゝぎす　同
旅裝束に木曾の麻衣

瀬田よりもまた三百のまし駄賃　京　次末
　金銀を流るゝ水のごとく也
將棊の駒は晝夜にとゞめず　備前　木畑定之
　たくはへのかねの音又念佛の聲
さては帳面も墨染のそで　同
　故郷の庭に啼く蟲ぐすり
きざみぬる桔梗かるかや女郎花　同
　阿彌陀の方へ夢に聟入
紫の雲をふとんにふたりねて　備前　胤及
　異國人心つくしの秋の風
木の間の月に耳の垢とろ　同
　もし天狗かと人はいふ也
我庵は都むら雲の辻なれや　同
　さつさ時雨に庭の蟬の音
夜る／＼は螢の尻も紅葉して　同
　御太儀々々々順の峯入
いや重きまさかり歸る聲はして　大阪　利方

　蓬萊の藥もんぢやく又しても
鐵砲はなつ玉のありかは　大阪　旨如
　三方へいかのぼりとぞ見えにける
鎌倉すでにやぶれ巾着　同所　似仙
　あゝ是は佛のときしふのり也
弘誓の船のよるみなと紙　江戸談林　松意
　葛籠に入れし實盛が沙汰
揚屋より直に往生つかまつり　同
　かの人丸の頭痛はなはだ
あんまとり是より上にたゝん事　同所　正友
　はすはが出たち山の端の月
肩先に紅葉みだるゝ戀ごろも　同
　勢州鈴鹿のかよひ箱也
御藥煎るに君のせんじやう　作州　灰流
　隱居して今は兵庫の浦淋し
知行殘らずゆづりはのたけ　同所　自木齋
　三里に灸をすうるたゞのり

かはらけをみれば旅宿の臺にすへ
　奥州かたへ飛ぶ濱千鳥　作州 自木齋
金のつるつゝた所がおもしろい
　宇治の網代にかゝる獄門　同
博奕うちみな火おどしの鎧着て　同所 朱木
　よわき馬には小歌うたはせ
盃をさすが難所の大河なり　同
　あくるわびしき蒔繪重箱
岩橋の餅をちぎるも絶えぬべし　同
　無念たぐひはなき火用心
のぼりはし腰越よりも追ひ返されし　同
　忠度の最期に狀をかく計り
そこのき玉へ人々御中　守梅
　鳶とんで天にいたれる驕者
借錢の淵に魚をどるなり　同
　鴈金やいろはにほへと渡るらん
草木黄ばみちりぬるをわか　同
　さとりをひらく穴藏の内
火事の沙汰本來一物なき時に　守梅
　佛も衆生も油斷なる體
下帶を四十餘年ぞときたまふ　同
　代官殿にあふさかの關
年貢米鳥のそらねははかるとも　同
　蕨繩にて富士のまきがり
去間御馬そへには五升桝　同
　大工の積り黒雲一むら
入札の落つる所をゐのはやた　同
　地獄の釜ににゆる味噌汁
難産は箱根につゞく二子山　同
　八景を先づぬれえんに移されて
鉢にうゑたる漁村のせきしやう　同
　はやとも綱をとく遊山船
御酒一つすゝめ申せば判官も　作州 一花
　ゆくゑもしらぬ駕籠舁の袖

風に靡く富士の煙りはやい火にて　作州 一花
名乘つて出づる鯲汁なり
朝倉や木の丸殿の山桝の粉　同
世の有様はへちまなりけり
出でいなば心かる石といひやせん　同
とかうせし間に短夜の月
御使はひた物たゝく水鷄にて　同
使者男須磨の浦波たち出でゝ
干鱈十枚箱崎の松　同
かく年月を備える生菓子
重箱や御身いかなる家に入る　同
夢はやぶれてつゞらなりけり
松風にいざ〳〵月の鏡とがう　同
武藏野のはらの痛みや留るらん
其溫石をけふはなやきそ　同
しらゆふかけし極月の空
借錢やそののちかつらの御はらひ　同所 一聲子
神無月御前において難儀あり
ひざ口よりもしびれふるらし　作州 一聲子
ちりの付たる寸白のむし
またぐらにこはくの玉や下るらん　同
氣遣たえぬ玉だれのうち
病人は有りしむかしにかはらねど　同
開帳は備前の國の事成るに
刀一腰あんあみのさし　同
浦の男と茶事中さん
黑大豆を廿五日の夜にいりて　同所 伊丹や
奈良の都をつめりぬるかな
取はづしけふ九重に匂ふらし　同所 油や
無念は今に有馬山かせ
竹細工木曾とくまんとたくみしに　備中衆
謀叛をすゝむる灯の影
飛びかふや抑も治承の夏のむし　江戸衆
淸水をくみてかへるふり袖

年のころ十七八丁あなたなる　山崎 鼠穴
　神代のむかし作事もよふす
棟上にうつや手なつちあしなつち　同
　かまくら中を見物々々
駕籠舁錢およそ八百餘文也　同
　印判の弓手も馬手も敵也
義經みやこをひきおひの事　江戸衆
　明けくれなげきし出女の袖
はやり瘡甘泉殿の壁にうつし　大村氏 梅風
　上臈客に逢坂のやま
歌かるた闕の此方にて讀みたれ共　同
　晝食も今人倫におよんでは
長歌短歌の船頭むまかた　我風
　先陣に天の羽衣旗となり
むさしかいそんみほの松ばら　下山氏 一帆
　燒食も子故に身をやこがすらん
野邊のきじまの里いぬのころ　同

　夜日十四五度露ぞしぐるゝ
下り腹色付山のゆふあらし　下山氏 一帆
　小便や波にたゝへて影し
橋のゆき桁はづす下帶　同
　懷中したる鎌倉のやま
たばこ入あけもやすらん星月夜　濱島氏 一平
　稚をすかすやうなる松の風
琴をまくらにねんねこ〳〵　江戸 言幽
　忍びあふ夜のおとりはしゆんだ
戀のいきさらば口説いて聞かせうぞ　同
　大ふり袖も爰に寄らなん
鹽竈は伽羅の烟りとうけたまはる　同
　弓簶を負ふ日傭とり
晝食を鬼一口に喰うてけり　同
　勿體つくる海づらの景
使者男沖の小島のはかまきて　作者不知
　手本にせよといふ水の月

紅葉鯖腹十文字に掻切りて　一聲子
ひたと茶をのむ秋のゆふ暮
小便の其色としもなかりける　同
慈悲の心をてらす月影
初あらし小松殿をやさそふらん　同
ひねりもくさの跡の村雨
獨魂おのれなかうか啼くまいか　同
後の朝とふものおもひかほ
下帶も解くるにまとふ雪の肌　大阪 珍也
子規本尊かけたかもん跡に
五月雨はれて日光の山
今此の娑婆に秋風ぞふく
渡る鴈寶にも安樂世界より　面山 一笑
三味線の品かはりたる殺生に
小歌一ふしうたふやすかた　同
小町も出すにぎりこぶしを
なんこをも只弱々と讀むとかや　同
浦のとまやのひよんな公事さた
御分別花も紅葉もなかりけり　面山 一笑
うきねぞかよふ旅ねの有樣
唐瘡をさて忠度とかゝれたり　同所 一興
着到付くる念佛の聲
西方は十萬餘騎の勢ぞろへ　同所 一空
勸進帳咳氣聲にや讀みぬらん
大事の關所を落つる水ばな　梅木
御門跡駒の手綱を引返し
汝一所に彌陀の本ぐわん　同
わけいかつちの大阪のさた
米の直も虚空にあがらせ玉ひけり　市村氏 鐵丸子
杖でそろ〳〵いなんどぞおもふ
はゝき瘡身はうき草のねをたえて　同
錢を題にてよむ歌の席
地黄煎つよからぬ樣也よわからす　同
時の聲にてくだる腹中

はな紙を大手搦手もみ合せ　伊勢衆
　月の暮大津の町に札立てゝ
勸進相撲せきやま三里　同
　名乘る中にも七不思議あり
先づすゝむ鈴才の三郎龜井の水　同
　書状の中をあけて悔しき
御音信浦島が子の箱さかな　同
　夜晝六度四辻にたつ
切賣りの西瓜の責めは是とかや　同
　白狀の聲高き富士の根
そくたくは三日かけて以前より　江戸青山住
　さしみにつくる罪科により
まな板にのがれかねたる淀鯉の　同
（十二葉闕く）
　ろくに〱と石風呂のうち
さいの目の一のうらめし筋氣持　同
　命なりけり覺えなりけり
年たけて又小指をや結ぶらん　江戸青山住
　鯷いわしをさそふ東風風
本膳のむかふにあたつて花の山　因幡衆
　闇のうきよの戸まよひをして
杜にてうつゝの夢かひたいぐち　同
　守敏弘法露ぞみだるゝ
荻薄嵯峨の帝のおほん時　同
　餘情一種の春日野の原
なりひらの面影うつす買手衆　江戸衆
　極樂もどく江戸の海つら
城米の菩薩も爰に天降り　同
　蘆原國の粽喰ひけり
燒鹽を正にみたりし翁なり　同
　末期の水に墨すりながし
貝がらに龍の姿のあらはれて　同
　かりの此世の藥喰なり
薄鍋の浪の立居も何ゆゑぞ　江戸本郷梅枝

三味線のかは氷きえつゝ
氣はれては風になりたやと謠出し　江戸本郷 梅枝
糸くり返し呑みし丸藥
下つ腹杉の下枝にとまりたり　仙石氏
烏帽子かり衣赤飯の色
せいろうを一木の松に掛られたり　芝 重治
人しれずこそおこる煩惱
長老樣戀すてふとはの玉へど　堺 元順
柳にやれと中なほすなり
鶯の音は法花宗淨土宗　同
きのふの往生けふの弔ひ
蠟燭もながるゝ水の飛鳥川　同
芋喰坊主も謹上再拜
百貫の足柄箱根玉津島　花養軒
阿波の鳴戸ににぎる燒食
ほえかゝるゑのころ島や淡路潟　同
鳥は八聲を告ぐる子小姓

夜振廻後段の一天明けわたり　花養軒
まつ先かけて名乘る鶯
若武者の心はやたけ呉竹に　同
水のみどりも清き指先
十露盤の廿五絃や彈くらん　同
空よりもこぬかみだるゝ天の河
湯手につかひし布曳の瀧　同
旅宿のうさをしる人ぞしる
水風呂は野中の淸水ぬるけれど　同
しめるばかりの中や絕つらん
茶臼には千曳の石や成りぬらん　同
金輪際より引くうでの疵
知音する若衆無頭の竹生島　朱木
かたぎへだつる夫婦の者あり
鐵砲の八千代をこめし玉椿　同
胸の木札に田鶴啼き渡る
和歌の浦にしほみちくれば片輪物　梅仙

揚屋町へ通はせ玉ふ友衞
その一座には須磨あかし樣　梅仙
あはてぬる夜ぞ團子なりける
石臼を引わかれ行く袖よりも　堀內氏
身のなる果は提重の內
そぎ揚枝花咲く事もなかりしに　守梅
墨に染めたるせゞなげの水
熊手にて先をかけんとおとなげなし　同
夕立に三笠の山や詠むらん
天のこやねも軒もたまらず　作者不知
付さしに世擧りて皆醉へり
汝はさんやの太夫にあらずや　同
古來稀れなる住よしの浦
七十の齡ひさしききしの松　同
草庵に入らんとてこそ時鳥
齋米荷ふかたをかの森　同
雁がねも鼻そがれてや鳴きぬらん
月のかつらのまをとこぐるひ　作者不知

右付合たゞ心にうつるにまかせぬれば、作者重出と、趣向の異同を論せず。見る人選んで可也。

獨吟　一時軒拜

俳諧は何ぞ。莊因がいへらく、滑稽なりとはなんぞ、是なるを非とし非なるを是とし、實を虛になし虛を實になせる、一時の寓言を云ふならんかし。荒木田のなにがし、此の心を得たり。西山の翁かの道を學び得たり。予もひそかに習ひて、今の翁に見せ奉まつりて、得たる所得ぬ所を窺ふものならんかし。

西翁先生答へ

守武が後、俳諧連歌の好士のみ世になりわたりしに、滑稽體今こゝにして、耳初めて明らかになり候〳〵。

文をこのむきてんはたらく匂ひ哉

一から十に飛ぶは鶯

隣とりに價千金の年越えて

札物となるあし引の山

よいきれや古きを尋ねて殘るらん

さびてもかたなの作は有りけり

月も御存じうかとかまへぬ地さぶらひ

とつておさへてやらぬ初雁

秋ウ風やたまりもあへずぬけぬらん

あしのまろやの酒樽の露

(つぶしたがはじ)

ちよこ〳〵と難波男が聟入に

世帯やぶりのかねひゞくらし

むら〳〵にゑんこ薪の松見えて

わづかに方丈事たりにけり

念佛を申してやみぬ雨三反

(長明が行座思ひやられ候)

すら〳〵すらとねぶるがごとく

(愚老がねがひ事にて候)

秋をとへば童子答へず頭をたれ

(秋聲の賦見るがごとし)

つめくはへたる落月の前

とりはづし遥に聞ゆ孤雲の上

(石火矢ほどの音と聞え候)

歌ウまくら物しり顔にかんがへて

宗匠らしく上に立つなり

かどびしも有るに任する角頭巾

なんでもきくまい弓矢八幡

最早死に極り果てたるをとこ山

河にはなてばまたもとの魚

(放生の心さても〳〵)

一休ののみこまれたる空の月

(喉の穴いかやうに心えなく候)

不審はないぞ極樂の露

(いかにも一休髄か成るべく候)

正眞のころもの玉はこがねにて
　さても〳〵のうゐろうの能
八九間またうへもなきまりの品
　是は〳〵のゑぼしかりぎぬ
花の春御禮の次第官次第
　今の天下のすゑの永日
三人皇百十三代の朝かすみ
　御製ぞうかむあまのつり舟
　　（後鳥羽の御筆こそは所望に候）
和田の原やそしまかくるよこ物に
　ふたつにわれたみよし野のやま
　　（取はづしたる物心もとなく候）
花の木のまさかりにあふ南無三寶
　悟道をしては何もなひはる
二地ごく餓鬼修羅人間の雪解けて
　世界をながれわたる川水
口すぎはかよふ千鳥のあし〳〵に
　かんだうをうつ須磨のうら波
たてにつくうしろの山や高からん
　あひ言葉とてえいや大ごゑ
ちからづく連理の枝を引つぱりて
　　（あひことばいかやうにかかけつくとみえ候）
　貴妃をはなさぬ玄宗皇帝
第一儀我朝までも聞ゆなる
　五千餘巻は有明の月
むかし〳〵莊子が筆法秋たちて
　そげたる風の庭の蟲の音
鼻のさき露しん〳〵たる夕間暮
　何やらくさいあだし野の原
　　（別の物にては有まじく候）
　さてもひいたり一ぺんの雲
天津風乙女の姿頭痛して
　　（すがた一目見申し度く候）

豆をほち〳〵神のしらゆふ
おるあやは杉の下枝にとまりたり
（衣の掛りたるより面白く候哉）
七乞食して啼くほとゝぎす
五器のめげ昔しの世をや忍ぶらん
うつ火のひかりさらに昨日
（昨日珍重）
山臥は竹馬にいざやのりの聲
（竹馬昨日に覺え候）
抑もうやまつて皆土なやみ
栗せうが牛房大根ふとのつと
（みな折ふしの好物に候）
鈴参らせんさか月のかげ
うたひ出す千秋樂には犬をなで
（さても〳〵と存じ候）
悦び極まりなきはりこなり
ひな事に萬細工をつくされたり

源氏の君をさく花にして
（紫の細工も有りさうに候）
春の氣色書きおほせたる千話文に
そろべくそろりかへるかりがね
峯の雲一割半や殘るらん
仕舞かねたるふじの白雪
田子の浦や打出でみれば無拍子に
（をさめかねたる拍子一句は聞く事に候）
おりずやかたりあまの羽ごろも
七夕もはたりくさりと身過して
内證うすきひさかたの月
腹中のむしの忍びね哀れなり
ゆうべのかすのふるさとの庭
君まさでけぶり絶えにしせん藥に
（用意の藥いたづら事にや）
白銀茶碗かたみなりけり

傘言も皆質物に置くべきか
きのふの雲の跡式もなし
一門の根葉をからしてちる花に
法度をそむく宿のうぐひす
（いかやうの法度有之候哉）
七句さらぬ春こそ空に來にけらし
はなさき高きあまのかく山
白妙の衣ほすてふ猿田彦
（さし出の尊と聞え候）
神代のむかし入る土用中
大原や小鹽をまずる小豆餅
はや木高かれ家のむね上げ
酒はやし松の葉分の秋の月
ながしてふ夜は六尺をとこ
ウ
唐衣おつとり直してちやうとうつ
高こしおろせひらの山かせ
ふれごとを音信れてゆく時鳥

この草庵におとぎ申さう
（申さうやうもなく候）
なき人を頓阿が歎にあはれみて
傘好も又なみだなりけり
つれ〳〵なるまゝに添へたるからしあへ
ちやつよりふかきおくの山里

愚墨長三十

天滿西翁判

奥書に

此の道中頃の好士批言なきは、みな平點なるべしと書ける、そののち其の例稀れなるゆゑ、うゐ點合とや申すべからん。

書俳諧或問之後

友兄修竹叟選俳諧或問兩卷。夫俳諧存活活於心地發萬言於詞葉者也。從守武以來以文名于世者不少。然其徒或嘗連歌之糟糠。或爲卑賤之詞語。未達此道之本旨矣。幸逢梅翁先生出。摘英連芳。一復守武之舊章。墜風再興而都鄙將歸之。余欲使世人盡識眞所謂俳諧者。恨無書文可徴者也。此書果行則豈徒使人知其梗槪而已哉。亦足以解彼庸々者之惑。余爲之歎曰。立論也太公。評判也精密。爲當世說之也切。爲後生告之也審。學者不過其實毀者不失其眞可謂俳林之正史也。嗚呼守武既歿。俳諧不在斯哉。

延寶六戊午八月吉辰

作陽　大村氏花陽軒識

于東武之旅館

俳諧或問下終

俳諧増補提要録卷之上

發語

發句をなす事、天地の造化をのみ見て、心を先にする事なかれ。本の起りはものに感じておのづから言葉にあらはれたるなり、去るから題を得て案ずるとも、題の景物の姿を自然久しく見るにしくはなし、見るとならば、其もの〳〵に任せて、天地を廣く其物のあるべき所を殘すべからず。造化の姿調ひ、情にうつりて句を作る時、古人の氣情にすこしもおとらじと思ふべし。心くだりぬれば及ばぬものなり。我祖ばせを翁には、とても及び難くと卑下する人もあれど、甚だ意懸惡し、人麿赤人も我等とてもおとり奉るべからずと、貴き心をつかふべし。聊かも卑下しつればせられぬ道也と、某の卿仰せられける。蕉門に入りてその翁を學ぶに、先づこゝらまでにしてと、こちらより私を入るゝ事あるまじや、師や古人に及ばぬと勵むはよし、およばぬと廢るはつとめぬ人なり。不强不達不勞無功、つとむる意をもて句をなして見よ、古人のごとくなるものぞ、いかんとなれば、姿の自然にまかせて私を入れず、久しく見る事をつとむるが故也。

發句といへる名目は、百韻五十員の首におけるものから發るといふ事なり。一章にていふにはあらずといふ事もあれど、すべていできて後は脇と承け、第三と轉じて遊ぶものなれば、たゞ發句といふべし。

（師常にいへらく、發句に主人公といふ事、歌に餘情といふが如しとぞ。西上人の「清水流るゝ柳影しばしとてこそ立ちとまりつれ、涼しき餘情いかにも涼し、「六月や峯に雲おく嵐山、翁の吟にして暑きを主人公といふべし。誠に六月の眼前、草木

そよりともせず、炎暑のさまいかにもあつし、そ
れいはずや、姿を專らにするがゆゑに、餘情とも
主人公ともなるものぞ、倭歌はさらにしもいはず、
俳諧にも姿うすく情つよきもあり、こは意得有る
べき第一なり。姿を先にして情を後にする事を、
よく辨へたる人はなす事なり、おのづから句中に
姿あらはれ、情より姿に移り、すがたより情にう
つるが如し。しかしながら上手名人といへども、
姿をそのまゝにいひはらひて、句中に思ひやるほ
ど情のこもりたるは、感ずるあまりに涙こぼるゝ
ぞかし、かゝれば、姿を先とする事第一なり。詩
は畫に聲のあるが如し、千載の姿を眼前になすも
のなり。朱簾暮捲西山雨・晩興いふに絶えたり。
遥看一片雲、深映碧山霽。深の字妙也と、映ずる
姿眼前たり。其ものに感じては言にあらはしたる
を、人にふたたび聞かせて見るが如く、稱しさせる
を、秀作とも佳章ともいふなるべし。

（師常にいへらく、發句に一作はあるべし、工み
をば捨つべし、工みによりて姿を失ふなりとぞ。
發句に一作あるは、一章の力なり、工みと心得る
は誤まりなり。姿を得ると工みを求めたるとを辨
ふべし。見るものに對し聞くものになぞらへ、自
然なるを一作といふなり。「早苗とる手もとや昔し
しのぶ摺」忍ぶずりの石はみちおく忍郡にあり、
その石に對して、忍ぶずりのむかしを思ひやりて
興じ給へる感、是見るものにして一作也。又「綿弓
や琵琶になぐさむ竹の奥」とは大和國竹のうちと
いふ所は、千里が古鄕なれば、そこに淹着の折か
ら、綿弓の音を秋の暮の寂しみになぞらへ給ひし、
是聞くものゝ一作也。比、賦、興は俳諧もおなじ、
既に古き歌にも「象潟の櫻は波にうづもれて花の
上こぐあまの釣舟」あるは「芳野川花の音して流
るめり霞のそこの風もそゞろに、花の上漕ぐとい
ひ、花の音するといふが如き工みたるにはあらず、

そこに臨みて姿あるさまに興じたるを、其まゝにいひなせる也。再び此歌を吟する人、勝地の奇なるを驚くに至るぞ、然るを都て天地自然のすがたを、有の儘にいひなしてはたゞ言也とて、私を入れて工みをかさね、却つて自然を失ふは歎かはしき哉、一作と工みとの惑ひを、よく〳〵辨ふべき事なり。

（師常に曰く、一章のうちに言葉のぬしといへるは、句中の佳言を稱して、一句のあるじなりといふ事也とぞ。然るをひたぶるに工みて、火をも水といひなすと覺えし族もあり、こは師説をとくと聞かず、俺念にしてまどへるもの也。歌に制する辭といへるは、凉しく曇る白雨の空、あるは「まして消えなむ露の夕ぐれの類は、かしこき事にし給ふとかや、我が俳諧に制しとゞむる言葉はなけれど、能く辨へたる人は愼みてせざるなり。かく斗りの奇言なるがゆゑに、言葉の主とはいふぞかし。

しかあるを、何ぞ風のうづまくとか、露を撓むるとかいへるを、辭の主と思ふは、瓜田に冠を整さず李下に履を納めずと覺えたるに等しき僻言なるべし。ある席にて、同門に對し、工みは發句の病ひ也といふ事を議論せし時、ある人のいへらく「湖にあと先ぬれて天の河。といふ句を、烏居士出來たりと稱し給ひし事ありいかむ。是は工みなれども、姿あるゆゑに稱されたるべし、しかしながら「荒海や佐渡に横たふの自然を感ずべし。烏居士の稱し申されし其時を辨ふべし、至らざる人は物に倦く事多し、暫く惡きを緩くし、能きを頻りに頌して學にすゝまする方便、仰ぐべき事ならずや、大悟勘破して、佛を麻三斤とも摺小木とも差別せざるは、覺道豁然たる時なるべし。かゝる事しるべきもあらず、たゞ糞といふとも味噌といふとも腹あしくせず、美人にたとへ金銀に比するとも、歡ぶ事なき造化を目當にしてなす業なれば、有の

儘なるより外さらになし、ことしも〳〵と工みにたくみ、遠生涯同じ所に目を消し給ふまじよ。

(十七文字の發句とやう〳〵なりても、ものに紛るゝをふれるといふ、譬へば、時鳥になり初雁にもなる、蜻蛉かと思へば胡蝶とも聞え、蛙の聲の静かなるかと感ずれば、きり〴〵すの寂しみにもふれるあり。師常にいふ。初學の人の案ずるを聞けば、春は春・秋は秋と時候も正さず、扨そのものそのものの姿と聲とを辨へざる故に、一章につゞりても必らずものにふれる事多し、春秋の姿あり、其のもの〳〵の聲の急緩あり、しかあるをたゞ人の珍らかなる詞を求め、是を句の中に入れん事のみ思量し、あるは情をしたひて自然を見る事なく、案じて一章となすゆゑに理窟に落ち、あるは寄せもの集めものとなるのみか、例の紛るゝものとぞなれりけり。その姿の有様を慇懃に見定むる時は、ふれぬふれるの論舍つてなし。就中四季の月、春秋の雨、すがたをよく見て感じたる人のなしたる章に、ものに紛るゝといふことはなし、假令ば疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏といふ詩の、二句を聞いて梅花を見る如くに感ず、あるは「月見むと契りて出でし古郷の人もや今宵袖ぬらすらん、是秋の月ならではいづれの月なるぞや、今宵といふこと葉に、圓かなる光り哀れなる姿迄見ゆるを思ふべし、我が俳諧のをかしみに押しこなして、

「蒟蒻のさしみもすこし梅の花。華と時とに春季おのづから催ふして、酸もの好ましきは誠に春なるべし、「草の葉を落つるより飛ぶ螢哉、おつるよりとぶといふ言葉に、夕暮のさまあり〳〵として、露やおつると見たるに、飛行くひかりは螢ならでいづれの蟲なるぞ、俳諧はかみなかしもとて述べざるといふ事なし、四時ものを鬻ぐ聲を聞いても、ものに動きふれざる事をしるべし、花落に藻雲海雲と呼ぶ聲は、やがて花も喚び出づべく、四條の

板橋を東へわたる人そゞめき、いかにも陽炎もえて日影うら／＼と見ゆ。又江戸のさま、打水片側にかわける中を、いかつげなる男、縿や／＼とあわたゞしく走るさまこそ、夏日の夕ぐれならめ、生海鼠々々々鰹や／＼は、降りみふらずみの空薄墨の如く、うち時雨たる冬枯なりけり。言語は自然なるゆゑに、人にそなはりたる也。その備はりたる人の口よりして出づる言葉なれば、姿をよく見能く味はふ時は、ふれる紛るゝの論はなし。

（師つねにいへらく、四時の景物のさま／＼に、姿あり、本情あり、姿を得る時は本情そなはりて逸作となる、其得る事は難し、その證は名人とても得ざるものあり、草木鳥獸を感ずる時も、そのものに寄るものあり。これはおのづから氣色なり、いはゞ露霜の類ひ、木には月夜雨中のさま、鶯に啼、花はさら也、緑竹の中、鹿には峰、野中は萩薄の類ひ、先づ姿の寄るべき定式なり。其の定まりたる氣色に拘はらずして名句と稱するあり。又その曲輪のうちを出でずして妙句あり、これらは新古一概には論ずべからずとなり。鳴呼敎へて倦まざる事を感ず。又曰く、鳥獸草木の姿を見て、感じつゝ發句となすは常也。鳥獸草木にあらざれば其の意をなす事あるまじ、賤男しづの女などの事は、人情ひとしければ、情より出づる發句には、其のものゝ意を察して、其の人の自の章になす人もあるべし。風流ならず、はた一章つらぬきて、其の人の章にはあらねど、半ばは其の人の章にして、なかばはおのれが章なるあり、はづかしき事なり、是またく情をもて察し量るゆゑに、かゝるあやまちとはなる也。又句柄、人柄、愼しむべしとあり。わきて僧などの身にては、僧にあるまじき句がらは、たとひ佳なりとも忌むべき事也。かりそめになす發句も、望まれては短册にも認むるもの也と、急と心をつくべし。かへす／＼も僧たる人に似合

ざる章は恥づべき事にこそ、又曰く。題の景物によりては、上五文字のや、霧か、稲妻やといふ題を、一章の何のなかばに置くには心得あるべし。又題を上よりいひ下して、しも五文字に至りて、夕べ哉あした哉、山路かな、野中哉などは別して工夫有りたし、事によりて題はよそへものとなりなむ。眼前の姿感じたる吟には、自然あれば違ふ事あるべからず、題詠には心を付けて、後と無心ならざれば、自然を失ひ顧ざるあるべしと也。其のほどほど考へしるべし。ある夜の物語に、此のほど探幽畫の寒山拾得を見しが、帚を捨てゝ一巻を讀め入りたるさま、活けるが如し。かゝる姿は千載は過ぐるとも見るたびに變るべからず。年を經て胡蝶飛べども去らず、果蘆桃花結んでみのらずといへるにさも似たり。今畫の筆意驚きぬ、帚を手に持たせたるは古きとやいはむ。さりやとて帚に一巻のみ書きたるはぬけ過ぎて、今様の洒落にやならむ、手にもちし帚を、おのづから捨てゝ餘念なく一巻を見とれ入りたるさま、筆力にあらはれて、誠に神に入りたるといふべしや、其の後うき世繪に名におふ何某が、畫ける女三の宮猫に戯ふれる姿を見たり、さも艶に美しき丹青なりけり、例の猫の引綱を緋の袴の細腰にはさみたゝせたり、作意過ぎて拙し、風流の趣き殊更に心がけ有るべき事ぞかし。

俳諧はをかしきを風流とせり、寂しみの實を旨とす。歌舞伎狂言の大晒と、能狂言のをかしみを味ふべし、乞食袋、夜の柱、何くれとなく意を附けざれば得がたき道ぞかし、思ふべし愼むべし。

一發句に、其の場、其の人、時節、時分、天相、觀想、おもかげ、色立、時候、堅の句、

一名所をこめて名所になづまざる意得、次に名所に臨みての心得。

一名所に臨みて古詩古歌用ゆる意得、つかうて遣

はれざるの意得。

一文字餘り疊字の格。

一換骨の法、奪胎は其の意を摸して、語を改め用ゆるなれば俳諧に好まず。

右之條々は、鳥居士遺されし囊中史に、委しく證したる發句を著はし置かれたり。

發句手尓於葉

(上の句におくや文字、たとへば、鶯や、卯の花や、名月や、こがらしや、すべて歎美の助字にして、哉のごとし。

寂しさや花のあたりのあすならう

名月や池をめぐりて夜もすがら

(腰の句におくや文字。疑ひあり、自得あり、自得とは、よに通ひなにかよふ、はじめにすこしく疑ひ後にさだむる助辭。

今宵誰れよし野の月や十六里

(うたがふ裏に歎美の意をそなはれり。)

やす〳〵と出ていざよふや月の雲

(よともなとも情かよひて、頌美なす也。)

(かな、かは商量と計りはかる賞歎の意裏にありなは歎ずる聲のあらはれたる辭也。

梅が香にのつと日の出る山路かな

猪もともに吹かるゝ野分哉

(がな、望請する裏に、歎きの意を帯べる助詞。

それと聞く空耳もがなほとゝぎす

曉を引板にかはる妻もがな

(かも、二種あり、かは例のかなのかの如し、もは疑ふ意とうたがうてその儘にさし置かれぬ意と也閣ぬ意は、裏に歎ずる意具はれり。

雨に登る雲雀は春になれしかも

(うたがふのみ)

翌はさくと人も見るかも花木槿

(人も疑ふも我心に思ふ意あれば、捨ておかれぬなり。)

(けり、深去來、來去來、語する爲の助辭。

春の夜は櫻に明けてしまひけり
夕顔にかんびやうむいて遊びけり
(けらし、ものを察していふ助辭。
そのかみは谷地なりけらし小夜碪
月雪とのさばりけらし年の暮
(こそ、こその留は、エケセテネなり。五韵第八、彼れを擧げて、此の儀に歸する辭、疑ひ驚く意ありて、情の餘りたる助辭、よく得る時はヘメエレエにもかぎらず。
元日に田每の日こそ戀しけれ
さればこそ荒れたきまゝの霜の庵
(霜の庵なれど、言葉を添へて留むる句法也。)
(そ、そといへる助辭は、ものを極め、又うたがふ意あり。
草の戸も住みかはる世ぞ雛の家
(ぞと定めたり)
秋ふかく隣りは何をする人ぞ
(ぞと疑うたり)
(か、は與なり、商量して歎ずる助辭。
ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音
草まくら犬もしぐるゝか夜の聲
(にて、は於也、又斯くもあらんやと、定めずして歎美する助辭、
わすれずばさよの中山にて涼め
(にては於なり)
辛崎の松は花よりおぼろにて
(花よりも朧に松をこめたて粧ひ、たゞならずやと、ただ定めざる所に却つて歎頌の意つよきといふべし、彼れをおとしめ是を擧ぐるは俗意也)
(なり、は也なり。語の終りの助辭。
嚔のあとしづかなり夏の山
何事も寢入るまで也紙衾
(ぬ、は事を定むる語すゑの助辭。
かぞへ來ぬ屋敷々々の梅柳

ひとつ脱いで後に負ひぬ更衣
（し、は情の定まりたる語末の助辭。
山里は萬歳おそし梅の花
父母のしきりに戀し雉子の聲
（じ、は彼れを觀じ察しながら極らざる助辭。
箱根越す人もあるらし今朝の雪
馬士はしらじ時雨の大井川
（らむ、「や「か「たれ「誰か「いつ「いかになどの助辭を用ゆべし。よく心得たる時は自他彼是のいはれにて、らむと留まる。
西行の庵もあらん花の庭
おもしろし雪にやならむ冬の雨
（む、しかあらんと欲する語末の助辭。
紙衣の濡るとも折らむ雨の花
五月雨に鳰の浮巣を見に行かむ
（な、は歎美自得の助辭。
二日にもぬかりはせじな花の春
（是自得なり。）
むざんやな兜の下のきり〴〵す
（是歎美なり。）
すべてなも、よも、やも、通ふといふ事は「葎さへ若葉やさしや破れ家、やさしよとも、やさしなとも、「ひよろ〳〵と猶露けしなども、思ひ〳〵に自得する意なり。
（よ、は望請自得の助辭、うらに歎意そなはれり。
うき我れを寂しがらせよ閑古鳥
（望請するうちに、歎きの意そなはれり。）
稻づまにさとらぬ人の尊さよ
（自得するうちに、歎きの意そなはれり。）
（さへ、はあるが上にそへる助辭、副の字にあたれり。
むかし聞け秩父殿さへ角力取
馬をさへ詠むる雪のあしたかな
（だに、は歎じ又望む意ある助辭。

世の中に老し我れだに着そはじめ
（底意に望む意あり）

蟋蟀かゝる夜をだに夜たゞ鳴く
（歎ずる意つよし）

（ね、は多く不の字にあたる語なり。

今宵もと空頼まれねほとゝぎす

酒飲めばいとゞ寝られね夜の雪

（やといふ疑ひの助字はさら也。語の餘りなるやあり。

水雞なくと人のいへばや佐屋泊り
（人のいへば佐屋に泊るといふを、いへばやと、やを餘して助ろく也。時鳥なくや、閑古鳥なくやの類皆おなじ。）

木隱れど茶つみも聞くや時鳥
（疑ふ也。うたがひのやも、かゝる所をよく味ふべきなり。）

（口合のや、は隔語にして、言をへだつのみ、降るや雪、春雨や降るといはむ如し。春雨や降るは句作によつて心あるべし。語絶すといふにはあらず。夫ゆゑ哉とも留まる。

（名所のや、は哉と留まるといふに論なし。但し名所を呼出すやといひ、置字の如し。又斯くのみにも限るべからず「象潟や雨に西施が合歡の花。は歎美のやなり。

（つゝ、はかへしつゝ、ながらつゝのふたつ也。雪は降りつゝは幾度もかへしつゝ也。しりつゝなどは、多くながらづゝなり。しりながらといへる言葉なり。

【増】哉留の譯を補ふ。先づ哉に浮沈の二種あり。うき哉は留まらず。沈み哉は留まる、たとへば、思ふ哉、匂ふかな、又浮きかな、むかなの類なり。思ひかな、匂ひ哉沈み哉にして留まる。たとへうき哉なりとも、押へ字抱へ字あらば切字にはならずとも、一句は一句たるべし。「凩の身は竹齋に似たる哉、是る哉ながら、はと押への字に抱れば

難なし。また「きのふ見し木槿は垣にしぼむ哉。是む哉ながら、はと押へにと抱しなれば論なし。翁の「夕顔や秋は色々の瓢かな、秋はと押へて切りたるものなれば、落着慥かなり。捨や捨哉と見るべし。「道灌や花は其世を嵐哉。上のやは名所のやに準ず、花はその世をと。押へ字抱へ字すべて押へ字は「て「は。抱へ字は「に「をの類と工夫あるべし。

【増】哉も疑ひの哉に紛るゝ治定の哉あり。「どの歌に較べん今朝の花野かな。此章上に疑ひの字あれども、下の七文字にて治定あれば、心はふたつになつて、上七文字は疑ひ下七文字へ治定なれば、隨て哉留然るべし。上に疑ひあれば哉は留らずと論じ難じ、人の章に墨など引くなどには心を附くべき事なり。手に葉にけりをけらしと延びたるあり。又けりをきと約めたるあり、けりの反しきなれば也。又らしのかへしはり也。なかりけりの約め言葉はなかりき也。俗中々しと濫りにいはず、歌は雅言を專らにいふはさらなり、俳諧は今日の俗を體として雅言をあしらへば、歌とは體と用なるべし。たとへば、嬉しきをうれしい、悲しきをかなしい、嬉しう、悲しうの類ひ、きをいうといへるは皆平言なり。

【増】中の哉腰の哉ともいふ。「此の頃の思はるゝ哉稲の花、歌に、「忘れてはうち歎かるゝ夕べ哉我れのみ知りて過ぐる月日を、これらにてとくと味ふべし。思はるゝ哉といひ下して、其の景物を下に置き落着す。

【増】發句の哉留に通ふ字あり、て、に、けり、なり、此の類ひ也。すわりたる文字也。にてに通ふ習ひあり、第三のに留に心を付くべき事也。いひ切りてすわりたる「に文字あり。又したにての字を入れてにてとなるあり。決してすまじき也。たとへば、

筆結ひの夏毛冬毛を窺ひに　（是いひ切りしに也）
屋敷守帶取る手の暖かに　（是あかたゝにてとなるゆゑ也）

（發句は太始に形はじまり、切字をもて陰陽とわかつなり。なる處の好惡は格別、優に美なる句體をよしとする也。

（脇の句は發句の位よりすこしは劣るとはいふなれど、發句とわきと俳諧歌一首となるものなれば、發句をなせる人のいふ事と知るべし。都て姿をもとゝするものなれば、脇も亦姿をもて附くるなり。爰に意得あるべし。發句のすがた脇の姿と、別に竝ばぬやうにすべし。さなければ、肌の合はざるものなり。謎する處は、發句の言外の餘情をおぎなふといふが如し。

但し詞客訪うて贈れる發句に、脇の句の案じ方は又格別也。是も古人にその禮あれば、雅兄たる人によく聞きて辨へ置くべし、ものを委しく尋ね知りてすると覺悟せざるとは、暗夜に灯を頼まざるが如く、探りあへるのみにては心もとなし。

（第三は萬物の生ずる所にして、轉じ起る意あり。發句にも似かようて紛るゝものなれば、手尓於葉の文字をもて留めつ、終りを輕うして附句を待つ意あり、かたき處也。

（第四句めは百韵五十員となる所にして、輕きに調うて次第に續け行く也。

右發句、脇、第三、四句目の證とする言葉は、例の囊中史に委し。

（附合に自他をよく辨へしれといふは、附くと附かざるの論也。しかし人に敎ふるには、自他の差別なければ附きたるも附かざるもわからず、あるは自に自を附けて三句目轉ずる句法、あるは打越の人に遁れんとして遠きを開き無を思ふ句法、あるは打こしを自他にて遁るゝ句法、あるは中に橋

といふ句ありて、左右に人情有るを遁るゝ句法、他に他を向はせる句法、誰れも常に他に他を向はせ附くれども、多く竝びて肌合はず、或は他に他と附けたるを自にて向ふ句法、或は自より他を向はせる句法、附合は無量なる物なれば、いひ盡す可らず。併しせめて大概をだに學びしる時は、工夫にて年々辨まへらるゝぞ、知らざれば迷ふ也。疑ふは學ぶのなかば也。疑ひ迷ふものも又なきもの也。たゞ辨へずして附來りたる人は、是にてもよきと我意に濟す人に論せば、水をもて石に投ずる如く受くる事なし。師に倣ひ得て後、わきまへざる人を見れば、益なく會する毎に心を勞し費すもの哉と思はるゝぞかし。斯くいへばとて今初めて誰れが工夫したるといふにはあらず、翁よりして世々の古哲達遺し置かれたる證據あり。然りといへども、師を得て後に書を見るにあらざれば、數多の中に散在してあれば、璧を得る事稀れなりといふべし。翁の法をよく覺えて能くしる時は、一卷の去嫌ひ、人情の打越しにくるしむ事なく、師に問ふ事もなく、詞友と論ずる事なくして、おのれが非を改めんのみか、必らずかざるまでに及ぶぞかし、我黨の人々よ、努めて强ひて達し給ふべし、都ては此の段の附合のおもむきは、例の嚢中史に委し、且つ後に歌僊兩卷を出しぬるまゝ、句法を照し見るべし。

俳諧增補提要錄卷之上終

俳諧増補提要録巻之下

師常に、余が發句は、蕉翁の高きに登らんとする門人、せめて階子ともなれかしと謙し申されし、今猶思ひ出して慈くしこひしければ、遺章を題す。

畠掘るやもめがらすや春の雨

夕飯のけふりて這入るつばめ哉

鶏の若宮めぐるわか葉かな

蟬なくや一木がもとにひとりづゝ

亡魂ならばと、東の一圓窓にむかひて故園を思ふ。

迎ひ火や上總へ向けば月が出る

野となりて畑となりて鶉かな

しばらくは千鳥にくもる旭哉

かくれ家にあるものは皆氷かな

右

いかむ〜といはれざれば余いかんともする事なしとは、かしこくも歎息の仰せごとなりけらし、師ある日密に、發句は殊によ、附合に至りては疑ひを散じて問ふもの稀れ也。汝等日々に余を責む、欣しい哉、をこがましけれど、余滅後の便りともなるべき趣きを、けふは遺すべしとて、歌仙一巻を興じられける、記念の指南を爰にしるす。

閑居吟

南浦松露庵に遊ぶ、王程萬里行の岐を去る事僅か十歩にして、誠の閑を得たり。

人や來し折戸を蝶のはなれぬる　烏明

頭あぐれば匂ふ春風　百明

鑪ふむ者ども桃に木陰れて　烏醉

とぎれ〜の堤なりけり　泉之

そのくもり月より晴れてはこび雲　孚石

弓弦の音に露しぐれ降る　平礎
ウ關守ればこゝろの秋も秋ならず　西奴
古郷遠く老いにけらしな　鳥明
子育てのひとりのみかはあの如く　百明
あやめの蔓長くみじかく　鳥醉
ほとゝぎす巳ふたつ頭を啼過ぎる　泉之
戀のほだしを旅にわすれし　李石
筑摩江に淺妻船のたゞよひて　平礎
しまきては月〳〵　西奴
たてさまにかざり帶のうすしらけ　鳥明
寮もいほりも晝つとめする　平礎
わすれもの花の山から馳使ひ　眠山
我れもはたちの春はありけり　泉之
ニ青海苔に二見の垢離の思はるゝ　鳥醉
明けはなしたる葛籠三つ四つ　百明
操（くりとり）を長もろともにとりもちて　李石
つかみ料理に柴（ふしづけ）の魚　鳥明
かりそめの雪見に出でゝ旅まくら　西奴
明けちかき迄四位を隱しつ　鳥醉
ひたものに蘆毛の駒の斷ふ也　平礎
空長月の風もそゞろに　眠山
中々に月にわかれのうしろ影　百明
市女ふりあふ椎の葉の袖　鳥醉
いかに思ふ梶井の宮の門がまへ　鳥明
颷の跡に鳩の凋れこゑ　李石
ウやゝしばし三里扣けば出たうなり　泉之
常に和尚の醉ふと訪はるゝ　百明
陰はやく夕風さそふもと町　千鷗
淺くも水の音たてゝゆく　西奴
春の夜を我れは目覺めし花の夢　鳥醉
瓶に活くれど椿ちり敷く　執筆

右

（ある日師に蕉翁（せうをう）の遺章（あしやう）の惑はしきを問ふ。師の曰く、詩は解すべし解す可らず、將詩に解（かい）なし、

詩はかならず裏心をいはざれなど古人示されぬ。こは所謂妙所に至らずして膚受するのみの人、言外の意を聞いて情高きにうつるばかりにて、句をなすゆゑに、理に屈して姿を失ふがゆゑに解なしともいへるなるべし。おのれ〳〵執行上達すれば、おのづから驚く斗りに意味の深きを知る、然はれど、師は惑ひを解くもの也と推して尋ぬるなれば、いはずしもあらず、余がおもふ心を説くものなり、余にまかせて譲る事なかれ、發明は其人々にあるぞかし、故人いはずや後人を恐るゝと、

(行く春をあふみの人とをしみける

問ふ。此の章の、人とをしみけると留りたる、又常に聞く闕を閑といふべからず、樂しみを樂しみといふべからず、苦を苦と言ふ可らず、體をいふ事なければ意味深長なりと、をしむ事を惜しむというてあはれなるはいかに。答へ、句中の意を推して見よ、勝地はいふにや、わきて春色のとゝのひたる事他に超えたり。翁眺望し給ひ、其の地の詞友と行く春を歎じ給ふ、胸中いはむかたなかるべし。かゝる咨嗟の詞外に溢れたるものにして、猶未だ句中に打明けがたく、殘る意限りなし。はたけるといふ語末の助辭は、○そと押へねば留らざるは自然なり。此章の中に○とと置かれたるは、とと抱ふれば、決してとより生るゝ言葉あり、たとへば、としてとあればといふ類ひ、いはゞ近江の人とぞとも添へて聞くべしや。

(見わたせば詠むれば見れば須磨の秋

問ふ。人もいふ見渡せばとは、明石より淡路の風景に及べる、詠むればとは舊事を思ひ歎ずる也。見ればとは須磨の眼前をいふなるべしと、理り的中して侍るが、小子等しばらく疑ふ意あり。いかむ、答へ、見詠の二字能くあたれり。

見れば須磨の秋といへる、見ればを思ふに、詠むればの言葉のうちに、さま〴〵案じて後、須磨の秋といへれば、詠むればのうちより出でたる觀想の觀なるべし。翁の胸中推量る時は、見ればの見るは、必らず觀の字にあたれりと。余は決したると也。

(明月や池をめぐりて夜もすがら

此の章や分明にして、隱れたる所なし。例の言外の意髣髴と明らむれどもはかり難し。答へ、解すべし解すべからずとやいはむ。いはゞ池をめぐりての七文字に、詩歌の骨髓を籠められけむと思へよ。小子等首を低れて思へば、頭を擧げて山月を望むも、首をたれて古郷をおもふも、ふたつなきものと思ひし空の月の、水底に出づるを見て驚かる。明は又最中の秋も過ぎぬべしの歎息も、皆池をめぐるの言葉に籠るや、翁の姿今猶在すが如く、目に浮みて言外の意味いひ盡すべからず。おそれても恐るべき眞心なる哉。

(猫の戀やむ時閨のおぼろ月

春の夜の煙りなき哀れをもいはず、聲もするどにすさみありきたるも、いつしか衰へぬる時は月もおぼろ〳〵なるを、憐れみ歎きしられたるとは思ひながら、閨の字に至りていさゝか意とどまり、小子等は疑ふといへり。答へ、いづちともなく迷ひありきし家豹も、衰老の姿をなして、傍に眠りゐたるやうにも何とやら思はるゝとありし、烏乎微細にも思ひ迴らされたるものよ。

(春もやゝ氣色とゝのふ月と梅

問ふ。翁にはかゝる句柄折りとしてあり。古人も月にあらず、梅にあらず、たゞ朗詠なりと稱しける、「雲雀なく中の拍子や雉子の聲。などいへる意味にも侍るや。答へ、翁の全體を知るべきなり。題を得てはじめて情を起す滑稽にはあらず、其の時その場にあたりて、詠歎の餘りを言に

あらはし給ふもの也。去るから、是は雲雀の養句、是は雛子の養句といへるにはあらず。郊外の春望也。年々歳々仲春野望する毎に、雲雀は聲を奏して、蒼天をさして登れば、きゞすはおのが住む野も、はづるゝばかりの聲をなしたるこそ驚くなれ。月と梅の養句の意明らかなり。言外の深長はいふに絶えたりと申されき。

(枯枝に烏のとまりけりや秋の暮

此の章を聞いてより後は、かゝる姿を見る度に、寂しみ心に徹して寂寞たり。句の調べ易らかに遲る事なきは、字餘りの咎とも申すべきや。答へ、けりやのやは再案ありし時なりとぞ。けりと斗りにても意はなすべけれども、や文字にて自得の意猶具はりたるなりと。「わりなしやうかりける人を泊瀬の山おろしよのよの字の如く、、是や此やの字の如し。去ればこそ「擣うつて我れに聞かせよや坊が妻としるなれ、我れに聞かせよにても意はなすべきを、よやとしひて泣かれたるは、芳野の古郷に至りて、衣打つ音を聞かまほしき情、言外に響きけりや、枯枝に烏のとまりたるは、春夏ともに寂しみのあはれはあれど、秋にいたりてのさみしさ詠嘆の餘りといふべし。「人すまぬ不破の關屋の板びさしあれにし後はたゞ秋の風、と言外の餘意にて人を泣かしむるをも、猶おもひ出でふたゝび涙をそゝぐ。

(蓑むしの音を聞きに來よ草の庵

問ふ。みの蟲は秋風吹けば父戀しと啼くと、はやくも人はいへり。人はいざ知らず、小子等つひに聞きける事なし。答へ。古往はいざ、中興聞えける人は我翁なり。蓑蟲の寂しみ思ひやるべし。素堂隱子も、來よに隨ひ往きて聞きけるに、翁來よと待たるゝ人は、三千の門人の中にもをゆびをかゝなふるにすくなしと、弦なき琴を聞く器ならでは、翁の友なるべからず。烏乎

閑を得るは難い哉。

【増】はつしぐれ猿も小蓑をほしげなり

此の章や、翁伊賀の山越に古郷へ歸り給ふ、その時の句にして、言外の意今見る如く、初冬の景色草木黄ばみ落ち。寂しさに寂しみをかさね、空はうす墨流したる大雲だちし、一村しぐれに翁も岩の頭に杖を築げ憩ひ給ふ。折ふし、年經たる親猿、小猿を小脇にして洞やある木蔭やあると空を見。驚きたる顔色の尋常ならず、誠にそこを去らず、猿も小蓑をほしげなる眼前實境の姿、おそれても恐るべき幻術也。禽獸の淺ましきも、此の一句に腸を斷ちて叫びしも宜ならずや、爰に時候を思へば、白雨のけはしきほどを經、此の上あられ霙雪中の渠らがくるしみも想像して驚きたる姿に。初の字の眞心を得給ふ事、感じても餘りありとやいはむ。

【増】名 月 や 疊 の 上 に 松 の 影

晋子其角の集にして、世に知る如く、打聞えたる通りにして仔細はなきやうなれども、名人上手の場に至りては、句の魂といへる事のあり、汝等よく此の句の意を貫くべし、今宵の清光疊の上に園中の松の影うつりしは此の上もなき風情おもしろきは句の表也。まこと眞如實相の月を見るには、その面白き姿に心を奪はれず、大悟看破の上は、其の松影すら心の妄執なれば、何もなき清光に向はむとある心。感じても感ずべきと也。

【増】松蟲のりんともいはず黒茶碗

此の自然なるを見よ、數寄屋の寂寞、殘暑に朝込の茶の湯、つくばゐ、手洗鉢、刀掛、風爐前、窓のいまだ小ぐらきには、此の蟲のりん〳〵たる音色にもおとらぬ釜のたぎり。主人茶を喫する茶碗は、能古なるべしや、その器の手あつきは言外の意に現はれて、通れの會席たるべし。そ

のさまをよくもいひ叶ひしは、嵐雪の寂しみ又
奥床しく思はずや。

夏日の長きをたのみ、師が跡を賦しつゝ雨
吟してたどるまことのことば。

光りそふ在明月の牡丹かな　土龍庵 百明
おもひもうけず時鳥聞く　松露庵 烏明
旅なれや樋守に近う膝ぐみて　同
作りもはてぬ蓑はさけたり　百
から風に暮れかゝりたる冬氣空　同
つきぐ〵しくも檜皮幾棟　烏
百年の身は有難き時にあふ　百
祈りもせねど雨つきのよさ　烏
圍棊好のけふも青田の直路して　百
袈裟ゆりくる袖のひらつき　烏
くり石に塵すら置かず玄關前　百
月の出ぬ間の高き忌竹　烏
女まじりいかき角力におくられて　百
さがなき言を誰が霧の中　烏
せめてもの朝戸明くれど病ひがち　百
いつつきしやら掌の墨　烏
薫しく御室の花の花の陰　百
うなゐ子どもの地蟲釣りつゝ　烏
何につけ歸路をぞおもふ日の長さ　同
絶えて故院を夢にだに見ず　百
半蔀へそぼ降り出でし雨の音　烏
老うぐひすの茂みかくれに　百
さゝやいてゐるはわりなき男やら　烏
うしろ姿も宵のうかれ女　百
出る船は跡しら波の世なりけり　烏
やみがてにしつくさめ屢々　百
靜さは栗鼠ありく笠置寺　烏
あらそひたてる松に立枯　百
食鷹しく木賃の客に月明り　烏
きぬたをやめて母に手傳ふ　百

帷子のちゞみ上りし秋のさま　烏
禪定のうちの久しかりしか　百
敷ちにたゞそく／＼と落瓦　烏
鷄のあまたに倦かず啄ばむ　百
日の晝をいざなひ來ませ花の友　烏
袂もわかず春の夕暮　百

右

師の梯を得て登らんとする發句をしるす
同門の詞友に對してかゝる事をせられよ
といふにはあらずかし。蕉翁申されずや、
我れに似なと、愼みつゝしむべし。

四節

朝日影さすや野守が梅わかな　土龍庵 百明
卯の花にしひて雨ふる朝氣哉
はつ雁や思へば宵の大あらし
冬籠こらへかねてや呵る聲

藤さくやまゝ登る蟲くだる蟲　四季庵 孚石
井の内に動きもやらずかたつぶり
けふの月遠くも海の匂ひけり
おく霜に鐵砲提げて戻りけり

醉中風流に夸る

月ひとりかゝる夜半には雲もがな　土龍主人

蟻の如く集まりて、東西にいそぎ、南北にはしる、高きあり賤きあり、老いたるあり若きあり、行く所あり歸る家あり、夕べに寢ねて朝におく、營む所何事ぞや、生をむさぼり利をもとめてやむ時なし。身を養ひ何事をか待つ、たゞ期すべき所老いと死とにあり。其來る事速にして、念々の間にとゞまらず、是を待つ間なむの樂しみかあらん。惑へるものは是を恐れず、名利におぼれて先途の近き事をかへり見ねば也。愚かなる人は又是を悲しむ、常住ならむ事を思ひて、變化の理をしらねばなり。

雲の峯諸は無常のけふり哉　松露主人

【增】今はむかし、一とせ師は湘中大磯鴫立幽澤に冬籠りありて、その朶雲に、黒谷大師法語。

彌陀如來本願の名號は、木こり菜つみ水汲みの類ひのごとき者の、内外かけて一文不通なるが唱れば、かならず淨土へ生るゝと信じて、眞實に願うて常に念佛をもをすを最上の機とす。もし智惠を用ひて生死を離るべくば、源空いかでか彼の聖道門を捨て、淨土門に赴くべきや、聖道門の修行は、智惠を極めて生死を離れ、淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂に生ると知るべし。流祖ばせをつねの常語は、詩歌連俳の四門の下にたてども、心は向上の一路に遊ふべし。

烏醉曰く、我が學ぶ俳諧は、其木樵菜つみ水くむ類ひの爺々婆々の、知れた詞の姿もて句とすべし。かならず中華の語や、萬葉のことばや膚受して、是を飾り夸具とせず、たゞ中品以下の耳に、をかしと思はせて、人情のよく通ずる修行を尊とむのみ。

知れた名に聲嗄らしけり寒念佛

師の正しき敎へを見よ、今の人謾らに俗中々々とて、古代のことばあるは歌の詞のみになづみ、何がな新らしく俗人の耳を驚かし、萬葉の言葉ならでは、發句ひとつい ひ出すべきもあらじと迷ふはいかにぞや、その迷ふ心からは、あの歌を見、此言葉を聞きはづりて一句となし、我れこそ適れと出かし顔こそ拙なけれ、剰さへ其言葉の出所も正さず、かくも有るべきやとおのれすら解せざる源氏、さごろもなど古き物語の語を、我れしり顔に人にも傳へ、いみじと思へるは、俗中といへる言葉よりは、却つて心はづかしく拙なしとやいはむ。古哲曰く、小人の學は耳より入りて口へ出づる事早しと、文盲なる心からは、適れ此の言葉は見出したり、彼の詞は解し得たりと、珍らしく思ふは、甚だ拙なし。明達の人は、心にこめて其奥こそ床し、

近ゝ頃桃翁七部の風儀風調行はるゝに、冬の日、春の日、ひさご、あるはあら野、猿蓑、前後炭だはら、おの〳〵心の寄る所に遊び、又は虚實栗に遊ぶは勝手次第、人は兎も角も知らず、我徒は翁の遷化まへ、五七年の所に遊ぶべし。發句、附句ともにからびたる風調、あるは幽言體をもはらに、其譯すら辨へざる人の、たゞ一句を弱く作り、何がな優美なる體になさむとして、一句の體を失ない、歌とも連歌とも附かず、あるは感情にばかりかゝりて、俳諧の本意なきもまゝ見え侍るはいかにぞや、歎かはし。心を種として萬の言の葉をいひ出し、天地の造化を自在となし、男をゝなの中を和らげ、猛きものゝふ目に見えぬ鬼神をも感せしむるは、假初ならぬ大切の業なるに、萬葉の口まねや、古今の歌の切嵌めに斗りかゝりて、何ぞ感情起る事やある、今日の素人怖しにて、誠の志にあらず、既に祖翁おくの細道に。「蚤虱馬のはりつく枕もと「涼しさを我宿にしてねまるなり。是等の風流をおもへ、心は向上にして今日の俗言をよく取扱うたるものなり。又同じ紀行に。「野を横に馬引きむけよほとゝぎす。是は彼のおもふべき雲井ならねど時鳥駒牽向けてしたふ聲哉。これらは古歌より思ひ寄せ給ふにや、古歌の遣ひやう、風雅の眼の附所をとくと味ふべし。俗中々々とも行かず、雅言雅言とも行かず、曾縦横自在を學ぶべし。又「夏草や兵どもが夢のあと「むざんやな甲の下のきりぎりす。此二句の手強きを見よ、萬葉の優美もなく古今の媚もなく、其覽古に至りて夢にも詞をかざらず、有りの儘に、夏草に兵共を憐れみ給ひ、實盛が甲にきり〳〵すの哀れを寄せ給ひしは、今に至つて此二句を開く人、その所へ至らずして涙を墜し、腸を斷つ思ひをなすはいかにぞや、すべて此紀行の變化をもて、俳諧の紀行の鑑とも尊むべしとなり。

【增】師常にいへらく、發句は題を案ずる事を專らとすべし。先づ春興ならば、梅、柳、鶯、是歌の題なり。藪入、凧巾、俳諧の題と始めに分別して、歌題には俳諧の力をこめ、俳諧題には雅言を用ひて、其風流を全うすべし。「梅が香にのつと日の出ると俳諧のちからを味ひ「餅に糞する緣の前と、平言に鶯の手づよきを感ずべし。又「凧巾しづ心なく暮れて行く「雛棚やむかし有りける女顔。斯くの如く、題俳諧なれば、むかし有りけるなど雅言を用ひて、一句に感をなさしむ、既に翁「六月や峯に雲おく嵐山「水無月や鯛はあれども鹽くぢらこれら歌題俳諧題のわかる自在を見よ、上に六月やと平言を冠らせて、下十二文字に雅言をたしかにし、水無月と異名を何の頭に置きて、跡を平言となす、其骨折を尊むべし。

【增】師常にいへらく、近年初學の輩、哉とさへすれば、留まる樣に心得、文字さへ足らねば哉と置くなど甚しき事也。既に歌にも「風をいたみ岩うつ波のおのれのみ碎けてものをおもふころかな。是稱歎のかな留第一と承はりぬ。俳諧にも其景物に對して稱美の哉最も然るべし。「八九間空に雨降る柳かな。哉の正しきを見よ又「よく見れば薺花さく垣根哉。これらにて工夫すべし。題い薺を垣根まで一句につらぬき、かきね哉と、その場を見出したる骨折にて、哉の動かざる所を尊むべし。あるは、其題の景物を句中に置いて、哉と留むる句題の稱美を第一になせば、浮哉にてもくるしからず。浮哉なりとて憎むにはあらず、その心得もなく哉とさへいへば切字となりて、留まる事よと心得たる輩もあれば、そのわかちを述ぶるのみ、總てにをはの事は大切なるものにして、師說を專らに學ぶべし。唐土はいざしらず、我朝に生るゝ人は、產聲をあぐるより、アイウヱヲカキクケコの語韵相通の事は、其人々の持前ながら、何ぞ倣

はずして是を辨へ得べきや、蕉門者流の人々、翁を師とせざるものやある、師として道を學ぶといへども、遷化百年の星霜、今日導く人なければ、いたづらに日を消し、其意味深長に入る事難し、既に猿蓑集の序にも、句に魂の入らざるは、夢にゆめ見るに似たるべし、彼の西上人の骨にて人つくりたるに、反魂の法の全くたましひ入りたるは、アイウエヲ能くひゞきて、いかならん吟聲も出でぬべしと、晋子の言葉最も尊むべし。人產れ出て五つの聲はわかるとも、導く人に學ばざれば、反魂の法のおろそかにも似たるべし。たまたま蕉門に入るといへども、導く人なければ論はなしとやいはむ。又いふべくもすれば、女かな、男哉爺哉、婆々ア哉など、譯も知らず置く事甚だしき也。既に晋子「生身魂酒のさがらぬ親父哉此おやぢ哉とくと工夫あるべし。一句の仕立、題の生身魂を、親父哉迄つき貫きたる分骨・中々尋常に及ぶべきにあらず、かやうに作り得らるゝならば、女かな、男哉いかほどもあるべし。又言ふ。五文字の上に、櫻かな、月見哉、など置く事初學にある事也。上古より歌に聞かず、祖翁生涯かゝる體なし。其後古人にたま〳〵ありといへども、前にいへる親父哉にひとしく、體の轉倒の法など用ひたるあり、多くは稱歎の哉なれば、上に斷わる事有るべからず、何々といひくだしてこそ歌もあるべけれ、添へていふ。初登の輩、やゝもすれば、常に案ずる題取の發句に、名所を入れて句作なすあり。是はいさゝか譯ある事にて、多くはその名所に望みたる句となりては詮なき事となりて、題を脇へなしたる章粗あり。今宵誰れよし野の月や十六里。其場を想像せねば、名所にての眼前實境の如くなるものぞ、例の嚢中史に委しくすれば、筆は贅せず、

既に此の帖や安永巳の年に成就して、世に行るゝ事六とせ、同七年二月池魚の災ひに合うて滅す、ことし師の追善集のついで、遺語の殘れるを補ひ、出版して古人五百題集にならべて、初登の門人の助けともならんと、庵に藏刊す。

俳諧增補提要錄卷之下終

自序

吾翁はじめ道を吟叟に學んで、あしのまろやのみをつくし、浪速の一ふしも探り得しを、頓て深川の林泉に浴して、遂に腸をあらひ眼をさらせり。或とき輪藏を押して法句經を閲し。「森羅及萬象一法之所」印。言一法所謂一心也。是以即攝一切世間出世間法。即是一法界大總相法門體。唯依妄念而有差別。若離妄念唯一眞如。故言海印三昧也。といへる心を汲みつゝ、驚きて濁りてし虚誕の古臭を拂ひ更めて、清みたる虚實の正風を起せり。徒見る處法制恒なくして、心の儘に流るゝに似たれど、露もあめつちのことわりに違はぬば、普く眞如の月を照して、等しく海印の華を詠める故なり。此機關をわづか五々條に約めて、これを二三子に傳へ給へり。其のむね一理萬通の確論なれば、之を伸る時は乾坤にわたり、その月、日、星の廻より、風になびく雲、雨に交る雪、秋の木草の衰へて、

春の魚鳥の盛んなる、四時の朗詠山水の奇觀、神釋あれば戀無常あり。人間一世の所樂、衣食器財日用の行事、文字てにをはの訣きに至る迄、言の葉の道に、よみとよみゆく濱の眞砂は、千ひろの海にをさめたれば、諸弟子これを心々に拾寫して、我家々々の鑑としつるを、照しあはせてそれが明しを挑げ、爰に貞享式海印錄と號く、人もし妄盡懸源の觀をなして、芭蕉の海印中に心を澄ましなば、彼のいふ差別の波風たゝじ。これいにし世に逆のぼる祖師のかたみの水馴竿、その節々も疑ふな、潮の花もうらあかればと、正風復古の願ひを起して、同じ流れに遊ばゝやと、四方の風士をいざなふものは、周南鼓の浦人。

安政六未彌生　曲齋

○目録

(一の巻)發句。脇、身柄の論。第三の節。三物。表物。
(二の巻)表不レ苦物。四句目。裡移り。匂の花。擧句。奉納。夢想。追善。人倫と噂の辨。支體。病。述懐。山類。水邊。雜場。居所。
(三の巻)戀。旅。名所。神釋。無常。降。聳。風。乾坤門。時分。夜分。時節。四季。雜。
(四の巻)月。素秋。日。星。花。植物。生類。
(五の巻)塡字。別吟。字去。留字。てには。體言。用言。
(六の巻)數字。送り字。飲食。衣類。彩字、色立。器財。書體。火體。疊付。一字一點。准付。軍事地獄。死活。一句立。兩體用。輪廻。内外。禁物並變格。爰に洩れし物は續編に錄す。

○引書

本書。貞享式。(一名廿五條―又新式𪜈)
○(ウ陀)廿五條の口訣は先師の奥儀にして、是を知らざる時は俳諧の道にくらし、世に執心の人なき事を先師常に歎き給ひし也。
(晏月日)新式は貞享二の春、晋子頻りに一流の傳目を授からむ事を望む、故に漸く工案成りて、同四の五月翁自筆にて授與あり。其後晋子翁に議して八條目を作れり。去來は增補して四十餘條とす。元祿七の冬、晋子去來に相議し、新式の闕漏を補へり。末後の門人此傳書ある事をしらで、支考が僞作也といふは、大いなるひが言也(約文)
▲兩補書未だ見ず。さて許子の書に、元祿五に相傳の由あり。其後篇突宇陀法師等を著せり。支考は元祿八に、去來より傳へて後古今抄をあめり。今摺卷寫卷にて世に行るゝ本書

は去來傳の儘を、獅子庵の文庫より寫し弘めし物也。此故に傳を知らざる人は、僞書とも言ひけむ。按ずるに其角、許六、去來の傳書、文句各々違ひ、其精なるは去來の也。そは文中に、元祿六の冬の、炭俵の引句あるにて明か也。其角のは貞享なれば。「色々の名もと云ふひさごの脇もなき故に、追々に補ひけむ。さて流布の本書皆鳥、焉、馬の違ひ多し。

秘書要訣▲白砂人集に出たり。元祿六の春、翁より許六へ授與の書なれども、卷中凡そ古式のさたにて、吾家の式ならず、辭の論多けれども、其比は古學未開の時也。切字、辭、假字等の事は本書にも用捨多し。

誹諧三部書▲卷停にばせを在判とし、奥に寶曆九發行とあるのみ。序跋もなきは書肆のわざにや、大方古式のさたにて、本書に反すれば用なし。

梧の一葉▲桃青著とあり。上卷に附句の論あるはいとよし。去嫌の事少しあれど、古式の寫しなれば用捨物也。下卷に辭の事あるは、例の論に及ばず。

○芭蕉談、去來抄、旅寢論（去來述）○篇突、新々式、宇陀の法師、花の藥（寫）湖東問答、浪花問答（許六述）○本書口訣傳（寫）古今抄、葛松原、續五論、十論、爲辨、東西夜話（支考述）一卷傳（寫）▲支考より慈竹へ傳とあり。俳諧の論は常體なれども、歌道の事あるは皆非也。後人さかしらを加へしは、寫傳物にはさる事多し。○北枝考（寫）○雁木傳（寫）（竹翁）○ツヤムヤの關（重厚）○三冊子（土芳）○獨言（鬼貫）○金言鈔（寫）（廬元）

▲此等皆名稱る人の論ひし翁の遺訓也。そが中に未だ說きたらぬ所ある物は補ひ、又其非なる由もいはでは人の惑ふらむ事のあめるは、もだし難き所々を擧げ、辨へ准らへて其非のしるき事どもは都てもらしつ。此外一極

秘傳抄「寂栞等の類數多あれども、あるは古式を混じ、或は寫在の違ひ、或は臆說の紛れ、或は難陳の得失等ある物も、此次手に辨解せまほしけれど、雜なれば暫し止みぬ。假令何人の說也とも、心に照し見て、道理に背かばとるにたらずとは、先哲の遺訓なりけり。

○廿五條註▲闌更著、註者しれねども、加賀三越の中にて、支考歿後の門人也。本文の寫誤は元より、口訣もしらぬ人と見え。白馬奥儀解と書名も混じたり。尤も道の事を說きし儀は大方よし。附句、去嫌の註は推量のさた也。此書寫傳物を其儘に上木せしか、註にも亦寫誤多ければ、別に論じて爰には是非せず。

祖翁出席卷

（別集再出物は下に集名一字記す）

卷印（●百　百句●五ノ　五十句●四ノ　四十四●未　カ仙未滿
●牛　牛カ仙●カ仙ハ無印●端物ハ　七八十十二ト記ス）

延寶五丁巳正風始（證句ノ頭には、上の略名を用ふ）

一」葉集　此梅に牛も「梅の風俳諧(百)

俳」諧集　吁何ともな昨日は過ぎて鰒と汁(同)

(六)

同　嘸な都淨るり小歌は爰の花(同)

一　物の名も「須磨ぞ秋「見渡せば(同)

古拾」遺　呑まれけり都の「青ばより紅葉

實にや月間口「鹽にしていざ

(七)

一　色づくや豆腐に落ちて薄紅葉(百)

古拾　忘草米飯につまむ年の暮

(八)

幽」蘭　さゝげたり二月中旬初茄(八)

天和元年酉

次句　鶯の足雉脛長し繼ぎそへて(五ノ)

春澄にとへ稻負「世に在りて家立は(百)

(二)

古拾　時節さぞいがの山越花の雪　俳諧

武藏」曲　錦とる都(百)「生舟や櫻雪

みの」蝨庵　胡草垣ほに木瓜もなき家かな

さいつ比　重々と名月の夜や茶臼山

(二)

金」蘭　花にうき我酒「夏馬の連れゆく

虚栗　詩商人年を「あくやことし心と

貞享元甲子

冬」日　狂句凩の身は「初雪のことしも　・チハリ

包みかねて「炭賣の「霜月や

蓬」萊島　海くれて鳧の聲仄かに白し　「三

三」カ仙　旅ねよし宿は師走の夕月よ(半)「俳

元」篠風句　師の櫻昔拾はむ落ばかな　・ミノ

△イガ越年、夫よりナラ、京、伏見、大津より

ヲハリに出で

(一)

元　花に遊ぶ虻なくらひぞ友雀　・イセ

蓬　何とはなしに何やら「イゝと榎の花　・チハリ「三

圓」衛　杜若我れにほ句の思ひあり(未)

拾」遺　牡丹しべを深く「時鳥爰を西へ　「金幽

東藤亭　思ひたつ木曾や四月の櫻がり(十二)「一

根本」式　涼しさのこり砕くるか水車(百)・江戸

(三)

鶴」の步　日の春をさすがに鶴の步みかな　「初懷紙 花故事

拾　久かたや雁なれ〳〵と初ひばり　「一

一橋　花咲いて七日鶴見る埜かな

其俗　蜻蛉の壁を抱へる西日かな(半)

△此間カシマ行き、八月廿七歸庵、後明秋迄卷

不レ知。

(四)

句餞」別　時は秋「江戸櫻(半)時雨々々(十)「白銀(十)

拾　冬景や人寒からぬ市の梅(半)

續虛」栗　たび人と我名よばれむ初しぐれ(四ノ)

桐葉亭　旅人と我れ見はやさむ笠の雪(半)・尾張

傍　京迄はまだ「星崎の闇を
桃白　ため附けて雪見にまかる紙衣哉　「拾
金　凩の寒さ重ねよいなば山(未)　「桃白
雲花　磨直すかゞみも清し雪の花
冬團」扇　珍らしや落葉の頃の翁草
拾　箱根こす人もあるらしけさの雪　「雪丸
(五)　△イガ越年
俳　何の木の花ともしれぬ匂ひかな　・イセ
一幅」半　紙衣のぬるともをらむ雨の花(半)
△吉野、ワカノウラ、スマ、アカシ、京、大津、
ミノ、鵜川見。
俳　ひる顔のみじかよ眠る晝間哉　・近江
蓮」池　蓮池の中にもの花変りけり(五ノ)・ミノ
拾　初秋や海も青田の一みどり　・チハリ
秋」ノ日　粟ひえに乏しくもあらず草の庵
元祿元戊辰九月改
△越人荷兮を伴うてミノ、更科より深川に入る。・江戸

カシマ」紀行　白菊に高き鶏頭恐しや(半)　「ツキハシ
桂」曆　月出でば行灯けさむ座敷哉(半)
あら」の　雁がねも靜かにきけば喧すや
拾　其かたち「雪の夜は「雪毎に
繼ハシ　雪やちる笠の下なる頭巾迄(半)
二見　皆拜め二見の注連を年の暮(未)　「金
(二)
ヒナ」懷紙　水仙は見る間に春を得たりけり　「俳
春と秋　衣裝して梅改むる匂ひかな　「眞句翁
ダテ」衣　陽炎の我が肩にたつ紙衣哉　「鵜・下野
雪丸　秣おふ人を栞りの夏野かな　「ムツ・ムツ
俳」表紙　風流のはじめや奥の田植歌　「雪丸
ダテ　隱れ家や目立たぬ花を軒の栗　「俳
拾　涼しさを我宿「起きふしの廂に　・出羽「奥
雪丸　五月雨を「すゞしさや「お尋の
花摘　有がたや雪をかをらす風の音
初茄　珍らしや山を出羽の初茄

アツミ」山　あつみ山や吹浦かけて夕涼
雪丸　文月や六日も(未)「星と宵師に(未)・エチゴ
花故」事　殘暑しばし手毎に料理れ瓜茄(半)・カヾ「雪丸
コセム」六ノ　しをらしき名や小松ふく萩薄(四ノ)「金
印」の竿　ぬれてゆく人も(五ノ)あなむざんやな
ツバメ」カ仙　馬かりて乙鳥追ひゆく別れかな　「卯辰
桃白　野嵐に鳩吹き立つる行脚かな(半)・ミノ
ヒナ　早くさけ九日も近しきくの花
拾　色々の菊も一つの匂ひかな　・ヲハリ
萩枕　一泊り見かふる萩の枕哉　・イカ「芭

△御遷宮詣

タコ」ノ碑　いざ子ども走りありかむ玉霰　・イカ
俳　曉や雪をすきぬく數の月(五ノ)
士」生山家　霜に今ゆくや北斗の星の前
舟竹亭　後風鳶の身ぶるひ倘寒し(未)「金

(三)

△ナラより、浪花、京、さが、越年、又浪花よりイガ。

壬　鶯の笠落したる椿哉
みの　木の下に汁も鱠もさくら哉　「拾
風葉亭　同　上(四十)「一
己」家光　種芋や花の盛りに賣步行く　「初便
ひさ」ご　木の下に汁も「色々の名も　・近江

△幻住庵入

サル」ミノ　市中は物の匂ひ「あく桶の雫
アメ」子　秋立つて干瓜「しらがぬく枕の(半)
夕貌」歌　月見する座に美しき顏もなし
サル　鳶の羽も刷ひぬ初しぐれ
拾　引起す霜「さびしさの底拔
ヤヘ」櫻　半日は神を友にや年いもひ　・京「物の親

(四)　△乙州亭入

サル　梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　・近江
俳　ひら〳〵と上る扇や雲の峰　「奥
サガ」日記　芽出しより二葉に茂る柿の核(五)・京

俳　蠅並ぶ早初秋「御灯の消えて夜寒　・近江

既望」集　安々と出でゝいざよふ月の雲　「奥

星合」―　牛部屋に蚊の聲せはし秋の風　「桃白

菊ノ露　うるはしき稲のほ並の旭かな　「幽

後ノ旅」集　もらぬ程けふは時雨よ草のやね(半)　・ミノ「けふ

梅人亭　水仙や白き障子のともうつり(十二)・尾張

茶」冊子　其匂ひ桃より白し水仙花　・二河

△江戸入

桃白　此里は山を四面や冬ごもり　・江戸

(五)

百囀　鶯や餅にふんする縁の先

賣」若菜　菎蒻にけふは賣りかつ若菜哉(半)　「四山

俳　水音や小あゆのいさむ二股せ(同)　「金

未來」記　雨の手に桃と櫻や草の餅

翁」草　朝がほや夜は明切りし空の色

小文」庫　帷子は日々に冷まじ鵙の聲

サル廻シ　初茸やまだ日數へぬ秋の露　「既望

深」川　靑くても「刈株や(半)「洗足に「口切に

匂」寒　けふばかり人も年よれ初しぐれ

ウヤムヤ　松杉にすくひ上げたる霙かな(十)

桃白　月代を急ぐ(十六)「凩にうめる間(半)　「ヒナ

桃實　水鳥よ汝は何を恐るゝぞ

句兄」弟　打ちよりて花入さぐれ梅椿

幽　小傾城行きてなぶらむ年の暮(八)

(六)

ヒナ　野は雪にふぐの「傘に押わけ

續寒」菊　五人ふち取りてしだるゝ柳かな

續サル」ミノ　八九間空で雨ふる柳哉

松島」獨吟　松の花苦家見にくる序哉　「雪丸

炭」俵　空豆の花咲きにけり麥のへり

桃白　名月や(半)「いざよひは「十三夜　「ヒナ

炭　振賣の雁哀れなり「雪の松折口

ヒナ　芹燒くや裾わの田井の初氷

寒菊」隨筆　寒菊や小ぬかのかゝる臼の端(未)　「初便四山

キソ」ノ谷　生ながら一つに氷るなまこ哉　「續寒
沾圃亭　いさみたつ鷹引居うる霰かな　「金
續サル　いさみたつ鷹引居うる嵐哉
（七）
幽　年たつや家中の禮は星月夜（八）
炭　梅が〻にのつと日の出る山路哉
ヒナ　しの〻露袴に「風流の誠を
別座敷　あぢさゐや藪を小庭の別座敷
小文　新麥はわざとすゝめぬ首途哉
笈」日記　水鷄なくと人のいへばや佐屋泊　・チハリ
△イカ
續有」ソ海　牛流す村のさわぎや五月雨
砥」並山　鶯に旭さす也「藥隱をこけ出　・京砂川
市ノ庵　柳こり片荷はすゞし初眞桑
拾　夕がほやつるに場をとる夏座敷（二卷）
續サル　夏の夜や崩れて明けし冷し物　・近江
鳥ノ道　秋近き心のよるや四疊半

けふ」の昔　あれ〳〵て末は海ゆく野分哉　・イカ
玉　粒々とはゝき木、殘る蚊に袷（未）
みかむ」の色　松風に新酒をすます夜寒哉（五ノ）
續サル　さるみのにもれたる霜の松露哉
俳　松茸やしらぬ木の葉のへばり付き
土芳亭　松茸や都に近き山の形（十六）
住吉」物語　舛買うて分別かはる月見哉　・大阪
俳　秋の夜を打崩したる咄し哉（半）
其使　此道やゆく人なしに秋のくれ（同）
菊ノ塵　白菊の目に立てゝ見る塵もなし

幽蘭。俳諧。金蘭。袖冊子。一葉等の年次、各錯亂あり。參考して愚按を加へたれども、猶後考する所あらむ。備右等の書に、翁一世の卷を拾ひたれど、尚洩れし物多からむ。希くば是を藏むる諸君其の寫しを書肆に贈り玉はゞ梓して世に挑げむ。直弟子のも希ひ侍る。貞享より享保の間に出梓の書多けれども、今求め難き物有りて、證句乏しき物

は又補はむ。其の次手諸君の明監をも加へまほし
ければ、此の錄中に異見あらむ事は告げ給へかし。

門人卷

（●物　三物●オ　表●タ　短歌●カ　カ仙●長　長歌　●合　取合）

貞享二丑
春」の日　カ三　越人
（三寅）
一橋　カ十　清風　新山」家　カ一　其角
（四卯）
續虛　合七　其角　誰」家　百三　其角
元祿元辰
續の原　カ五　不卜
（二巳）
あら　カ九　荷兮
（三午）
ひさ　カ三　珍碩　花摘　カ六　其角
其俗　カ七　嵐雪　草刈」笛　合五　牧童
ヤヘ　カ十二 百二牛　示右　アメ　カ三　之道
（四未）
雜」談集　百二 カ七　其角　卯辰」集　カ三　北枝
奧」栞　カ六　支考　行脚」戻　カ五　凉莵
（五申）
深　カ二牛　洒堂
（六酉）
桃實　カ一牛　兀峯　萩の露　合四　其角
（七甲戌）
炭　カ三 百一　野坡　句兄　カ九　其角
續サル　カ一　沾圃　枯」尾花　カ五 百二　其角
別座　カ四　子サン　藤の實　カ四　素牛
住吉　カ三 オ二　青流
（八亥）
笈　カ八　支考　後旅　カ六　如行

砥　カ三　浪化　翁　カ七三　里圃
行狀」記　合三　路通
(九子)
小文　カ二　史邦　匀　カ七　許六
(十丑)
ムツ」衛　カ十五百二　桃隣　錦」繡段　カ三　其角
(十一寅)
新百」匀　百一　支考　サル廻　五ノ一　種文
西花」集　オ廿六　支考　小弓　カ十二　東鷲
鳥劫　カ五　芙雀　續有　カ五　浪化
(十二卯)
梅のさが　カ四　三惟　餅搗　カ一　乙孝
東花」集　オ四十二　支考　皮古摺　カ五　凉菟
(十三辰)
櫻山」伏　百二　支考　一幅　凉菟
冬蔦　オ四　杉風
(十四巳)

梻」表紙　カ物廿四一　吾仲　焦」尾琴　カ十四五ノ一　其角
ソコ」の花　カ一百一　萬子　射」水川　合四オ三　十丈
(十六未)
ヤワ」の狂　百一合二　宇中　トテ」シモ　オ三カ七　月尋
百歌仙　カ六十四　天垂　浪」化追善　カ十五百一　支考
(十七甲申)
桃花」千句　一順十二　木因　類」柑子　百三半カ十三　其角
白ダラ」ニ　合四　従吾　山中」集　カ八　凉菟
キワ　カ三　岱水　渡鳥　カ六半　卯七
三匹」サル　百三　支考　千句」塚　オ四ノ十一　除風
寶永二酉
三日」カ仙　カ六　支考　春の鹿　合五　魯九
(三戌)
東山」萬句　オ百四　支考　汐」とろみ　カ十　凉菟
百鳥　カ五　宇中　後櫻」山伏　カ二百一　歌十
(四亥)
市の庵　カノ二　酒堂　庵の記　カ五　露川

ナム俳諧　百一　支考　四幅」對　カ四　東怒
（五子）
越」名殘　合八 オ十六　支考　桃盜」人　カ四　柳士
夏衣　カ四　支考　東六」鳳　合四　宇中
（六丑）
白扇」集　合四 オ六　支考
（八卯）
東山國」直　百一　白狂　タツ」ノワ　カ四　白狂
正德二辰
ツルモ」草　カ二　左角　キク十」カ仙　伯兎
（四甲午）
山琴」集　合六 オ十二　巴兮　八夕」暮　百一 カ三　乃露
衛　カ三　知足　七さみ」だれ　カ七　里冬
（五未）
發願文　カ一　蓮二　梅の別　カ一　吾仲
（六申）
ブリ」俵　カ十　竹司　江戸筏　カ廿三　沾洲

享保三戌
三日月」塚　長一　蘆元
（五子）
雪の光　カ三 オ二　百花
（六丑）
其日」カ仙　カ二　吾仲
（七寅）
夕顔　カ五　圓入
（八卯）
難」陳二百　カ二　ソ守　十七」廻　カ廿五 百五　淡々
シ、」物狂　物十 カ三　蓮二　山カタ」集　合九　六之
（九甲辰）
三千」化　オ百　蓮二　ハノ」雫　百二 カ二　倫里
（十巳）
鎌」倉海道　カ四　千梅　黄山」口評　合三　童平
（十一午）
本朝」八仙　カ三　昇角　梅十」論　百二 カ十　蓮二

文月」往來 合四 嵐枝　八鳥」放生 オ百十二物十 野坡
(十二未)
雪白」河 カ十一物十三 尊九　初茄 カ三 呉天
桃」首途 長一タ廿四 蘆元　鴫」矢立 カ四 鷗笑
笠」松集 合十四 連支　文操 合三 蓮二
(十三申)
其鑑 カ三 葉圃　ツクモ」ハシ 合四 イ吹
イセ」行 合二 蓮二　瓜」名月 カ三 昇
歌」枕 合八物十一 風草　門司硯 カ半物六 程十
水仙」傳 合三 杏雨　キシン」能 カ一オ十二 露月
市の海 カ三半 路圭　長良」川 タ四長一 有琴
(十四酉)
さみ」だれ山 カ三 玉蘭　麥」林集 カ二 素道
(十五戌)
天河 カ七 ソ由　藤」首途 合十一 蘆元
(十六亥)
五色」墨 カ六 長水

(十七)
文星」觀 合廿六 蘆元
(十八丑)
名匡 カ二半 十知
(十九)
竹の秋 合二 冠那
(廿乙卯)
コノハご」ツケ 合九百一 子島　節文集 合四 壷平
三物」拾遺 蘆元　續花」摘 カ十六 湖十
元文二丁巳
僧」口話 オ二百八十二 蘆元　西椿 合九オ十五 時人
(三午)
旭川 合三 白々　都鳥 タ一 閑水
冬紅葉 カ半 苔路　六行」會 カ四オ十一 野坡
(四未)
星」月夜 カ五半 原松　冬の梅 合十五 蘆元
(五申)

二顔」合 カ三 長一 曲 紫 庵みかの」 合十二 オ廿三 梅 從
寛保二戌
江湖」集 長一 オ五 此 杜 秋の風 カ一半 兎 士
(三亥)
青 瓢 オ廿九 タ一 玉 之 六の巻 合六 巴 靜
兩法會 一順 二 蘆 元 芭」蕉林 合四 朶 雲
貞享元甲子
俳諧切 カ一 希 因 五日月 合三 一 色
(二丑)
百 囀 長一 風 竹
(三子)
足」 鼎 合四 何 聲
(四卯)
續新」百句 杜 菱 野の庵分 カ一 オ七 イ 流

此所に擧げざる引書は、題名の傍に、○を加へたり。

二||引書也。文短き所は、と云へりと切りて、愚按を續けたり。引書に並べて▲を入れ、低く書きたるは愚按也。但し愚按のみの處は、高く書き出して印を省く。

一口大部分△小部分也。其部下に㋬あるは、六の巻に變格ある印、此の印ある所には、多く例を省く所あり、句頭に㋬あるは、其の部の句去より近き物也。

一部下に七部略。多例省。と書きたるは、大方の人の知りたる事なれば、證少し擧げたり。古へは何去とあるは、貞門の事也。

一句頭に、|一面の見渡。|面去。||ウ|折去。||一折一面等の印を入れたるは、大方歌仙也。百句は ニオ ノウ など印したり。

因みに云ふ。歌仙の折附に、二オ二ウ。源氏七十二候に、三オ三ウとかくは非也。五十句のみは半物なれば、二オとかくべし。又初平假名にて、うとかゝば、二お三うと終り迄平かな也。

又表はオモテなればヲとかくは非也。さて古來終りの折を、名おナウと云ふは俗習なれば、後とも末とも改めなむ。都て名殘と云ふは、其の事終りしあとに、其の名の殘りたる事也。爐のわかれを名殘りと云ふも非也。たゞし初夏ならば名殘ともいはめ、別れを惜むと云ふも、其の人の姿見ゆる限り也。姿隱れて後は名殘といへり。

一長短書は附句也。中を隔てしは長短同寸に書きたり。又部分に、或ひは三去とありて、引句の間に印なきは、皆三去の例也。其の中にて二去、四去の句あるには、間に二四と印す。面去には皆此の印あり。

一註の中に「　」の限りあるは、本文也。傍に‖○●△▲□■あるは要文、其の餘の印其所に辨あり。

一凡そ二去の物は歌仙に六七ヶ所。三去物は四五。五去、面去物は二三。折去物は百句にても三つに過ぎず。古今抄には「面を去りて、百句に八折を去りて四とあれど、そは大意の論也。

一昔しより季寄の端に出せる去嫌書は、古式を寫し傳へし物なれば、甚だ用捨多し。今席上の便りに此の卷を拔萃して、掌中海印錄と云ふ折卷を著はし置きたり。

貞享式海印錄一

曲齋 述

□發句に切字の道理ある事

(本書)ほ句の切字といふは差別の心也。(中略)假令切字あるほ句とても、心の切れぬ時はほ句にあらず。「桐の木に鶉なくなる塀の内」。此の句上五もじにて心を隔てたる也。「傳に云ふ。萬物は一に始まりて相對する時は二となる。其の一は虚に起り、其の二は實と成りて姿を備ふる也。

(古今一)切字の用といふは、物に對して差別の義也。夫は是ぞと埒を明けて、物を二つにする故に始めあり終りありて、一句一章のほ句とはなれり。

▲切字とは古來俗習の名也。蕉門に切字と云ふは、ものを裁ちきる事ならず。一句の中、詞滯ほ

りて種々の餘情を含む處をいへり。此の故に強ひて定めたる文字なし。凡そ俗言もていはゞ、卅字もあらむ事を、辭に持たせ餘情に包みて、十七言に約めたる物をほ句といひ、只句面に顯はれたるのみにて餘情も曲節もなく、十七字に事盡きたる物を平句といへり。爰を「假令切字あるほ句とても、心の切れぬ時はほ句にあらずと云へり。偖切字の事に就きて、直弟子の諸書多かれども、その頃は御國の學衰へし時なれば、紛らはしき事もあめるを、鈴屋翁の打開かれてより、今は初の山ぶみのわらはべも、獨り千代の古道に分入るべき時代と成りければ、其の栞を傳へかし、世には俗談平話の俳諧に、和歌の辭、假名遣は無用の物好といふ人もあるよし、歎かはしき事也。俳諧のをかしみ寂しみといふも、皆詞のあやのみなれば、須臾もはなるべき道ならず。抑も神の御國に生れて言靈の幸はふ理

に闇きは、いと悔しき事と思ひ起して、せちに心がくべき事になむ。

△ほ句像やうの事

(本書)ほ句は屏風の畫と思ふべし、己が句を作りて目を閉ぢて畫に准らへて見る時は、死活自らあらはるゝ物也。此の故に俳諧は姿を先にして情を後にすといふなり。都てほ句付句ともに、目を閉ぢて、(心なし)眼前に見るべし。心に置きてするは見ぬ事の推量也。

▲此の段は、實景に叶ふか叶はざるか、分別せよとの誡め也。

(爲辨九)翁は眼界に只今の姿を浮べて、夫を其の儘に作れる故に、明暮の咄の古からぬ如く、其の句は其の日に新也。我輩の目を塞ぐ時は、唐、高麗の書物に覺えたる、詩の體の歌の樣のと、昔しより言傳へし上手のほ句の邪魔に成りて、一字も只今の姿は見えず、かくても人のせかむ時は、詞の切屑を取集めて、上手の細工は論に及ばざらむ。

▲此誡め老婆心切也。循ほ句に種々の心得、篇突、旅寢論、去來抄、三冊子等にくはしければ爰に略す。

△卷頭の事

(ウ陀)百句の卷頭なれば、たけ高き句第一也。平句に延びたる句ある時は、ほ句見落さるゝ也。ほ句は、大將の位なくては卷頭に立たず。平句は士卒の働きなくては鈍にして其の用に立たず。師曰く。惣別ほ句は取合物としるべし。題の中より出づる句は、よき事は邂々にて、皆古しと申されける。

根本百句　◦涼しさの凝り碎くるか水車　清風

鶴　◦日の春をさすがに鶴の歩みかな　其角

櫻山　◦山伏の山といつぱや山ざくら　許六

八夕　●夕ぐれを飾るやきりに村もみぢ　蓮二

雑　●雲に鳥弓手に瀧や櫻がり　ソ守

新百　○凩の一日吹いてをりにけり　固友

○

桃千句　○先達や各笈に桃の花　木因

山コト日千句　●名月の雲にひゃくや普門品　音吹

○

山萬句　○ばせをはも苔の下萠見る世哉　遊行

三千五十カ仙　○梅がゝに迷はぬ道の岐かな　丈草

八鳥五十カ仙　●鶯や古翁風雅の頭鳥　杉風

▲眞に前説のごとく、百句、千句、万句等勢の多少によりて、大將の撰あるべし。若し百騎の主將に千騎を任せば、其の軍進まず危ふからむ。

□脇の事

（本書）脇は體かりと匀字にて留むといふは、先づは初心への敎へにて、定の字の心に叶へむ爲め也「色々の名も紛らはし春の草「打たれて蝶の目を覺しぬる」此の句は始めて俳諧の意味を尋ぬる人の、俳諧の名目紛らはしとて惑ひたるを、そこに一棒を與へられて、蝶の目を覺しぬる所、一句相對して、わきの體となれば、匀字、辭の詮義もなし。とかくに脇はほ句の餘情、景色の面白くなる樣にすべし。脇の身柄持ちたるは脇の心にあらず。（口傳能ノ丁）ほ句は客の位にして、脇は亭主の位なれば、己が心を曲げても、ほ句に言殘したる山川草木の一字二字の風情を加へて、客の餘情を盡すべき也。此の脇も蝶の一字にて尋ねあるく樣を見るべし。

▲（ヒサゴ）色々の名もむつかしや春の草「打たれて蝶の夢は覺めぬるとあり（三册子）は本書の通りなるを考ふるに、瓠の方先按にてこは再按なり。むつかしと云ふより、紛らはしと云ふ方、草の姿にてつし、夢よりも目を覺すと云ふ方、驚きたるけしきよし。

「傳に云ふ。脇に匂字といふ事は、必ず七もじの終りをいふに限らず。意の對する字をいふ也。脇は附句の始まる所なれば、爰を辭にて留むる時は、歌一首の樣に成りて、二句と分らぬ故に、字にて留むる也。此のわきも、草に蝶と對し、覺の字意對して、匂字慥かなる故に、辭留苦しからずと也。

▲匂字とは、古風にわきの留字をいふ俗習の名目也。翁は其の名を假用ひて、ほ句の魂を言ひ顯はす眼字、釘語の名とせられたり。是を傳に「意の對する字をいふと云へり。蕉門には古風に言ひ習はしたる詞を假りて、意の違ふ所に用ひたる事多ければ、文によりて兩義に聞分くる事あり。さて辭留は、過去と現在との辭は常體なれども、未來と、言餘す辭にて留むるは、大方逆附に(前へ廻テツケ云)する也。しかせざる時は、意餘りて平句のごとくなる句もあり。證句の中の〇●△▲印を分け置きたり。

「口傳能のこととは、太夫を本として脇はやし狂言に至る迄、太夫を賞するごとく、ほ句を脇にて助くるをいへり。又世に、ほ句は客のする物、わきは亭主の付くる物と心得たれど然らず。ほ句は客位脇は亭主位といふ句情の事也。

(東花)されば客と成りて其の日の善惡を口にいはず。けふの料理は何々ならむと心に能く通じて、溫和にしらぬ顏なるは、一句に心を餘したる趣の字の風情也。亭主は己が心ならずとも、客の心に思うて口に言はざる所を推量して、其の好みに隨はゞ客のよしあしは亭主に定まりなむ。是わきの心也。(文納)

▲本書の身柄と云ふは、ほ句の一字々々に、委は立てずして、脇者自己の情を作るをいへり。贈答、祝ひ、追善等のわきに、主客向合俗談するごとく、自他を分くるは身柄にて脇體にあらず。贈答とは互に挨拶句する事なれば脇なくて

も贈答也。一方の句に脇せしのみにては贈答といはず。答の字をわきもて返答する心と思ふは非也。抑も脇とは謠一つをシテとワキと二人してする心の名なれば、客に順ふ亭主、夫に任する妻のごとし、偏にほ句の意を汲みて、景色、場所、人品、言語の姿を立て、句主の自句に作りて付添ふる事にて、二句合する時は一體と成り、放す時は別々となる心也。此の故に挨拶句に、引受ならぬ他人の脇するも作意かはる事なし。挨拶の意は前書迄にて、わきに至りては只のほ句と見る也。譬へば包物を祝義土產などゝいふごとく、前書は包紙、口上にて、ほ句は中の品物なれば、脇者の手に渡る時は、一變して包紙、口上はなき故に、只其の品物を翫ぶごとし。又活花の正心に添枝するごとく、今一體かへて短きほ句する心也。此の故に「山川草木の風情を加へよと云へり。こは祖翁始めて立て給ふ法なれば、古風とは違へり。所謂貞門にて相對脇と云ふは、爰に嫌へる身柄の事也。さすがに古執の名殘盡きざるか、翁の門に入りながらも、邂には身柄脇せし人のあるを、翁は例の强ひて咎めず、座俳諧には許されしもあれば、其の宜べなるを撰みて證とせよ。下に擧ぐる「　」の句は、かくては脇體ならずと假に作り設けて其の惑ひをとく落草のわざ也。「　」の中に二三言を書きたるは一體ある付方の印也。さりながら、細かに體をわかたば、百千とも限りなからむ。そを隨類得解して、只一體に縮めて懷にせむ事、學者の宗とする所になむ。

(ウ陀)ほ句三月に渡る季ならば、脇にて其の月を定むべし。

(去來抄)去來歲旦のわきに、「梅に雀の枝の百生」としたるを、此の梅は二月のけしき也と評し給へり。(文約)

△梅は正二月に渡れども、作によりて年始に取りあはず。季の用ひ方変をもて自知し給へ。

(ヘンヅキ)賀、挨拶、追善、懐舊、紀行、移徙、餞別、留別、神祇、釋教、戀、讃類、前書格、古賞、古歌取格、右ヶ様の題、常式花、鳥、風、月の按じ所とは格別也。

△此類選に情を許す事は、其の姿の言ひたらぬ所を、其の題端書の保ちて助くる故也。さるを脇付くる時は其の言たらで、平句らしき所を、姿を添へて補ふ事脇の所詮也。今変にあぐる證例は、此題類を専らとす。凡そ此等の句は、脇もて情ほ句を姿ほ句に仕立直す心也。又常の花、鳥、風、月の句は自姿慥かに獨立したれば、一景を添へてほ句の位をすり上ぐるを、脇の任とする也。

△謁　師

色々の名も紛らはし春の草　珍碩
打たれて蝶の目を覚ましぬる　翁

ほ句は俳道の紛れを問ひけるを、脇者は只草の句と見立、色々の草の紛れを尋ね迷ふは、何ものかと窺ふに、人にはあらず、若草の上をひらひら飛廻る蝶也。其の蝶いかにと見るに、心當に思ふは此の草ならずやと止らむとする機みに、強き葉に彈かれて、はつと立上りたり。是其の紛れを自得の姿也と思ひ取りて。「打たれて蝶のとは付けたり。今是を(合體)付と號くるは、ほ句は春の芽出の紛れを思ひ煩ふ情の句にて、いはゞ言ひたらぬ所ありて、平句に近きを其の思ひ煩ふ物を、蝶と定め、草に打たれてと詞をからみ、脇を合せて一句の姿と成したる故也。たとへば「てふ〳〵も尋ね惑へり春の草と。姿情備はりたる句に仕立直すがごとし。若し此のわきも、

「うてばこてふの目を覚ましぬる

とする時は、うつ物は杖か扇となり、打つ人は翁の身柄と成りて、春草の姿立たざれば、平句

に墜入り脇の所詮を失はむ。本書に此の一句を證に撰びたるは、強ひて體字留、辭留の論のみならず。かゝる挨拶句は情を許す物なる故に、得てはその情にかまれて身柄になりたがれば、其の惑ひを解かむ爲めに是を二三子に遺訓し給へり。當門に身柄を嫌へるは、身柄にては動きありて、いかなる句へも通ひ、定の字の心にならぬ故也。さるに、今も古風とは不知々々まねて、かゝる句には、

「ともに探らむ霞む野の奥
　朧はやがてあけぼのゝ空

などゝ自他謙退の詞をかまへ、道の深意を問ひたる前書に當惑して、ほ句の姿は見立たず、其の人をほむとか、自然任せとか、我れはしらずとか、偕に學ぶとかいふ心に作らでは、不辭義と思ふ人もあり。ほ句の姿を受けざるこそ不禮なれ。わきの辭義とは、句主に低頭する詞を作る事にあらず。

　笈　奥底もなうて冬木の梢かな　露川
　　　小はるに首のうごくみのむし　翁

初めて翁にまみえ懇なる敎へを喜びての挨拶也。さるを奥底なしとは、ちり果てし躶木と見立、其の梢見えすく中に、目だつ物を見出でゝかく付たり。今是を(見立)付と號くるは、何者の意に拘はらず、只景氣ほ句と見立てゝ脇する故也。常人ならば何一つなき梢なれば、降物か鳥などゝ寄すべきを、みのむし一つ殘りたる姿を見出し、小春に首を動かせたるは、枯木に魂を入れたる妙手段也。

「くるゝもしらず短日かげ

と己が物語の心を述ぶるは身柄也。偕令世八を鳥獸にすといふ俗論あり。俳諧は詫物比興なれば彼をもて此をいふ迄也。珍碩を蝶に比するにあらず。自らみのむしになるにあらず。只春草

冬木の姿を立つるのみぞ、假令鶯、鶏といふとも、其の場其の時の興なれば、何の尊卑かあらむ。さるを(評註)我身を謙退し、蓑蟲の樣なる此方も、「君が憐れみの小春の温かさに、首を動かすといふ脇也」といふは、何の誑言ぞや、假令露川を高貴ともし、脇は謙辭を述ぶる物ともせよ、飢ゑ勞れたる人の、一椀に助けたるごとく、君が憐れみなどゝ、かしこくも祖翁を言ひ汚したるは、爪彈きすべき事也。近代の俳士頗る惑へり。只是を見て淚を流す者はたぞや。

近よれば山又高し里の月　風草

砧に亙ゆるしらかべはなし　蓮二

歌

音に聞えしよりも名人也と稱したる句なるを、山里に近付たる旅人の、こは却つて邊地に入りけりと、傍ら見廻す樣と見立、宿求めむと砧しるべにたどり來つるに、さるべき家も見えず。伏家まばらなる、いづこに一夜を明さむと、月かげに眺めたる體を付たり。是も(見立)也。

「世に捨てられし蔦の細窓

とせむは私也。元より山高しといふは、山の事なるを、己が藝能と引受けて、謙だるは、却つて無禮なる故に、當門には相對付を身柄と號けて誡め給へり。

(花故事)翁曰く。むかし貞德老人脇四道ありと立てられけれども、當時は古く成りて景氣を言添へたるを宜しとす。

▲古く成りと云ふは、從容の詞也。某の四道の中、殊に相對脇の誡めを含みたり。又景氣を言添へしは、上にいふ(見立)の事也。凡そ脇は十に八九は見立にてつくべし。此の卷中に何體々々と號けたるも、大方見立の中なる小割名也。

(三冊子)昔しは必らず客より挨拶句をなす。脇も答へるごとく受けて挨拶を付けり。師曰く。脇、亭主の句をいふ所良挨拶也。雪月花の事のみ云ひ

たる句にても挨拶の心也(約文)

▲こは翁へ挨拶の句に、只景氣言添への脇あるを、古風の腹もて怪しみ見て、雪月の事のみいふも挨拶の心かと思ひたるを、師に託して書きたる物也。此の書には翁の正説あり。聞紛れあり。自己を託したるあり。宇陀法師の寫しあり。又後人のさかしらを加へたるあれば、明かに察せよ。

△客挨拶

樫木の花にかまはぬ姿かな　翁
家する土を運ぶ双乙鳥　秋風

三

花の中なる樫の姿を見て、花の都に住みながら、世に交はらぬ隱逸を稱したるを、只樫の花にかまはぬ一物の姿を見出し、夫を土運びに閙がしき乙鳥として、かしの場を軒近き植込と定めたり。是を(換骨)付と號く。此の例亦多し、若し己が境界を譽められし事と思ひて謙だり。

「――――に垢す――――

と云はゞ私也。

杜若我れに發句の思ひあり　翁
麥穗浪よる潤ひの末　知足

衛

其の場の一景を添へて漣たつ池の見越に、緑穗の波なす體をよせ、潤の字に花の色を深めたり。我れには句の思ひと、前より――詞係りたる故に、只其の場を結びたり。此の付方附合にいと多し。さて客もてなしの心を述べて。

「矢立にくすむ夏の澤水　と云はゞ私也。

面白し雪にやならむ冬の雨　翁
氷をたゝく田井の大鷺　自笑

衛

面白しと打眺めたる向ふの一景を添へたり。大の字見所也。

「氷をたゝく庵のせんじ茶　と云はゞ私也。

笈　山陰や身を養はむ瓜畑　翁

石井の水にそゝぐ帷子　落梧

こは實景也。稲葉山の城跡に古井あり。其の邊り瓜畑にて、山の茂りいと涼しきに、身を養はむと云ふは、涼を愛したる樣と見立、苔清水汲上げて、そゝぎ捨つる潔きけしきを、瓜畑かけて見る樹下の體を付たり。

「杖止どめたる三伏の頃

といはゞ身柄持ちてうごく故に、いかなる句にもつかむ。

花故　殘暑しばし手毎に料理れ瓜茄　翁

短さまして秋の日のかげ　一泉

手毎と云ふ閙しき樣より、短日の體を見出たり。

「擧り寄りたる緣の夕月

と云はゞ註也。

羨しうき世の北の山櫻　翁

雪消え殘る細根大根　句空

浮世の裡を羨むと云ふは、菜根を咬んで百事をなす隱者を羨む體と見て、大根とよせたり。雪は北と櫻の字眼也。

「都の春もしらぬ隱れ家

と己が住ひを羨まれし事と思ひて、誰だるはなめしき上に、かくても付けなば何れへも間に合はむ。羨しといはゞ羨むべき物を付、美しといはゞ美しき物を付くるこそ脇體なれ。

雪丸　秣負ふ人を栞りの夏野哉　翁

青きいちごをこぼす椎の葉　翠桃

途中の吟の挨拶也。秣刈の伴ひつゝ道終勞を慰めむと、いちご折りくるゝを手に受けて。「笥にもる飯を椎のはにと云ふ古歌誦したるに、未だ甘からぬ青いちごの、夫だにこぼれける草深道の哀れを見せたり。ほ句途中のさまならば、内にてわきしても途中の樣を付くる事勿論也。

「迎へて笈の汗さます緣

と云はゞ自也。

興　薬欄に何れの花を草枕　翁
　萩の簾を揚げかくる月　棟雪

こは醫師なる故にかく即興あり。いづれの花と云ふは、簾を上げつゝ望みたる姿と見て、かく付けたり。もし

「簾を上げて見する夕月　と云はゞ私也。

笈　月代や膝に手をおく宵の宿　翁
　萩白けたる聖行灯　正秀

草庵に月をまつ庭前の景をよせたり。白くとは、月代のうつろひにて、聖行灯に風流を盡くせり。

「風さへくゞる縁の下冷　と云はゞ自己也。

神な月初め明照寺にたびの心を澄ます。

尊がる涙や染めてちるもみぢ　翁
　一夜しづまる張笠の霜　李由

日夜止まらぬ抖藪の笠も、今宵は爰に座を鎮めて、樹下石上の観に明す様にて、張笠はちるもみぢの受也。

「荒れたきまゝの霜枯の庵　と我詞を作らばほ句の殊勝を失はむ。

鳥道　秋近き心のよるや四畳半　翁
　しどろにふする撫子の露　木節

其の路地に心のよる景物を見出で、秋降りの體を付たり。

「――あれし――」といはゞ庵主の身柄と成りて、ほ句の餘情とならず。脇は己が手柄をほ句に與ふる物也。平句は己が力に任せて、前句を言曲げて奪ひとる物なれば、與奪の境天地遙か也。

田植とて、日剛れぬことぶきの設けせられければ。

花故　旅衣早苗に包む食乞はむ　ソラ
　わたりの堤菖をらすな　翁

飯乞はむと、渡りの堤より手を出せば、いざと應へて飯持ちくる男の、堤際の菖蒲跨ぐるを見て、それ折らすなといふ樣也。是を(設言)の格とす。事なき處に事を設けていふ一體也。此の脇に庵主等躬がすべきを、翁代りてせられ、等躬は第三したり。他より付けても句體同じ。(肩にタと印す)

笈　寒菊の隣りもありや活大根　許六
　冬さしこむる北窓の煤　翁

ばせを庵菊畑の隣りに、活大根あるを見ていへるを、脇者は、庵の隣りありやなしやと尋ぬる句と見立て、窓閉めたれば北隣りは見えず。前の菊畑大根畑のみ見ゆる樣を付たり。外にての句を、内にていふ詞と句者の意を(移轉)したり○(評註)かゝる家は必らずさしこめて小暗きに、すゝの落ち懸かりたる山邊の古家と見たりと云ふは。移轉の法をしらぬ故也。

拾　此里は山を四面や冬ごもり　支考
　青うて細く煙る炭竈　淡水

四面の中より一物を見出でたり。今(執中)と號く、物多端なる時に、其の中の一つを執りてひびかする事、附句にもあり。

「わびしき烟見する――　と云はゞ私也。

三物　秋の夜をさらば覺らむ草枕　助叟
　獨り熟柿の落つる木の下　二川

草枕を樹下と定め、柿の獨り落つるをさらばと默頭て己れも獨り觀ずる樣也。若し己が家の不自由を佗びて、

「月やゝ寒き柴の栞戸　と云はゞ私也。

同　訪二獅子庵一
　暮るとても賴む松あり木葉掻　木ス
　空に小春の山も眠らず　蓮二

假令木のはをかきくらすとも、木の下陰の宿は賴

みありと云ふ句と見て、其の場を山陰と定め、山も眠らず守りゐれば、虎狼も恐しからじといふ心を付たり。さるを前書に應對して、

「雪に明りを見する門先

と云はゞ私也。

三月寒未レ盡と、主の心配に閨暖か也。

紙衣にてあしらはれたり春牡丹　木因

三物

いびきは聞かず夜の海棠　巴雀

夜は石臺を床に上げ、紙衣に窓の風を防ぐ鉢植好の體と見立、同鉢物の海棠を並べたり。其角の句「海棠のいびきを悟れねはん像」と云ふ(傺取)の一體也。牡丹も海棠も紙子圍に眠る花の、いびきなからむ。此のわきは下にいふ對句付也。

「忘れ霜ふる草の戸のさび

など〻、客より暖といへば寒しと應へ、淸しといへば、賤しといふを、違付とて今も倘する人あり。貞門ならさもあらむ。蕉門にて脇にて此方の挨拶を兼濟す法はなし。贈答したくばほ句せよ。世間にて双方物贈る事を贈答と云へり。只添けなしと貰ふのみは、贈答といはぬにてもしるし。

元祿の初め都に上り。落柿舍を叩きて

京入や鳥羽の田植のかへる中　卯七

渡鳥

うれしと包む初茄十　去來

ほ句は尼舟より鳥羽上りして、さが道を早乙女に尋ねつ〻、笠着連れて來しと云ふ心なるを、脇者は京入と云ふ詞を尤め、京より鳥羽の田植見に行きし戻りに、物する樣と(換骨)して、其の道邊の家にて初茄を見付、家つとに求むる體を付たり。

「――ほどく――

ときがへ持ち來たるを受くる體をいはゞ、京人と鳥羽の風情を失はむ。元より鳥羽もさがも茄作りて京へ販ぐ所なれば、さがにて嬉しとはいはれもせず。

崎江十里亭に落着。

渡鳥　朝ぎりの海山こづむ家居かな　イ然
　此頃秋のいわし賣出す　卯七

海邊に家居の小つみたるは、漁村と見て、朝まだきいわし販ぎに市出する體を付たり。若し前書に對して、

「笠を預くる宿の秋さび　と云はゞ私也。

同　浦人をねせて海見る月夜哉　去來
　渡り仕廻うて雁靜か也　素行

浦人をねせてと云ふ物柄を(換骨)したり。かりかりと喧く鳴き渡りて、浦人をねせざりし雁の、渡り仕廻うて海見てゐる様也。

　久しく逢はざる人にあひて。

白扇　如月の心もとけて柳かな　浪化
　きれいに霧の渡る若芝　厚爲

心も枝もとけてもつれぬは渚の朝と見て、若芝に其の場を定めて、二月のけしきをいへり。若し前書相對して。

「回りあふ瀬の風も和らぐ　と云はゞ私也。

　尾の錬兵堂にて。

冬梅　鎗梅のはたらきいはゞ寒の中　盧元
　雪のしなへの竹にとぶ鳥　丁牧
　△主挨拶。

其の稽古場の體を、同園の植物もて(對句)したる草體の付にて、飛ぶ鳥ははたらきの字眼也。

幽　宿參らせむ西行ならば秋の暮　雷枝
　ばせをと應ふ風の破れ笠　翁

西行かと尋ぬるは杖笠衣の相似たる姿を、鴫立澤ならでも、夕ぐれに定めかねたる體と見て、風に亂るゝばせをの本を過ぎゆく僧の、破れ笠傾むけてばせをと應ふる門先の體を付たり。笠といはでは、西行に似たる姿も顔のしれぬ様も聞えず。是を(自答)と號くるは、西行かと問へば芭蕉と應ふ

と云ふことを、自問自答する故なり。○(諸書)相對詞と云ふは、脇は必らず相對の物とおぼえたる腹もて見る故也。是を翁の詞にする時は、風の破笠と容體を眺めたる詞叶はず。偖破笠の二字を「良寒と置きかへなば忽ち相對とならむ。さる時は只間違咄しの空論のみにて、西行かと疑ひし故は聞えまじ。そは自己の情のみ運びて、ほ句の姿を立てざる故也。

幽　花のさく身ながら草の翁かな　勝延
　　秋にしをるゝ蝶のくづをれ　翁

任官せば高祿の花さく身なれど、夫を羨まず捨家棄慾し給ふは、尊き事哉と稱しける句なるを、只翁草の花さかでしをれたる句と見て、秋にしをるる蝶と云ふ（ヒゞキ）もて、草に吟ふ蝶の姿を添へたり○(評註)我身を人の惜しみたるに驚きて、是は〱恥入りたる御詞。秋にしをるゝ蝶の、見るかげもなきくづ折れたる身にて社候らへと、謙

退の詞也と云ひ。またの所には、都てほ句、脇は人と問答するごとく、或ひは問ひに答へ、或ひは人の詞に應じ。あるは人の詞を反して、いや〱左にはあらずといふ樣につくるべし」と云へり。そは吾翁の、姿先情後と法を改め給ふ正風をしらず。尙情先空戲の古風に執着せし人の、過ちを習ひ傳へたる惑ひ也。

三　我櫻年魚さく枇杷の廣葉哉　秋風
　　筧にうごく山ふぢの花　翁

櫻の本にあゆ割きてびはのはに並ぶる體と見て、潔き筧の水に洗上げたる魚を、あざれさせじとそこの藤葉をもみて、魚の腹につむる樣を付たり。動の字は藤葉引切りし姿なれども、未だ魚の生きてゐる風情を見せ、櫻に藤と(潤色)したり○(評註)場付にてさせる意なし傳と云ふは、句面に人情なくて、身柄のこぢ付叶はぬ故也。是も古人の教へし失りなるぞ。

後旅　霜寒き旅ねに蚊屋をきせ申す　如行

古人かやうの夜の風　翁

純子の夜着に温めて、一夜化なる夢見せむよりも、蚊屋寒がらせて、古人も旅にやせし夜の風の寂をしらしめむと、わざと計らひたる様を付たり。是を（起情）と號くるは、理なき所に情を起して死を活に轉ずる故也。あゝ如行貧しからずば、此の吟あるまじく、祖翁ならずば此の脇あるまじ。

「惡みは樒のあたゝかな宿　と云はゞ私也。

雪丸　おたづねの我宿せまし破れ蚊屋　風流

はじめてかをる風の薫　翁

我宿はせまく、其の上蚊屋も破れて詮なければ、いつそ明放して、よい風の炷物を馳走せむといふ心に（移轉）したり○（[illegible]）主客各自句の違付と云へり。そは蕉門に此の法ある事をしらぬ故也。若しほ句を其の儘に、手狹の蚊屋のあつくるしきを涼しとほめなば、翁は世を捨てながら嘘つき廻る人になるぞ、あゝ舊弊を傳へて自損々他したり。

笈　茶穂ほす莚のはしや夕涼　曲翠

螢逃げゆくあぢさゐの花　翁

ほ句をせまき門先と見立、涼み〳〵庭木見廻り、莚端の明きたる所にちよつと腰休むるに、飛石などにゐる螢の、莚はしは狹ければ、こなたへと座を讓りて逃行く様に起情したり。實は涼風にたつ姿なるを、かく魂をいるゝ事をさるみのに幻術と稱したり○（評註）追行きとして附會の註を入れたり。

一　寢る迄の名殘なりけり秋の蚊屋　小春

あたら月夜の庇さしきる　翁

ほ句は、いざ相がやに喘し〳〵寢入らむ、蚊屋もねる迄の用なりと云ふ心なるを、名殘をしむ物柄を（換骨）して、よき月夜を見捨て、思ひ切りて鎖す様を付たり。

奥

和らゝに焚けよことしの手作麥　如舟

田植と倶に旅の朝起　翁

むぎめしと云ふを田植と見立。焚けよと云ふ令言を、老の朝起に申し付くる樣としたり。こは主の句なれども、客よりもかくいはるゝ故に（自他通言）もて旅と作りたり。こは句者の詞を脇者の詞に奪ふ格也。相對と紛ふる事なかれ。若し相對して、

「旅の舍りも椎のはの夏　と云はゞ私也。

淺香の沼尋ねられけるに。今はしる人なし。

花故

茨きやうを又習ひけりかつみ草　等躬

市の子供の着たる細布　ソラ

ならひけりと云ふを、習うて茨きし後の詞と見、其の場を市中と定めて、節句の體を付たり。細布は其の國の産也。此の句今習ふ樣と見ては、わきの姿取りがたき故に、句者の詞を（過去）にしたり。

雪丸

星今宵師に駒引いて止めたし　不雪

色芳ばしき初刈の稻　ソラ

駒引いて止むる用を（換骨）して、早稻參らせむと、馬に負はせて歸したるあるじぶりを付たり。

翁を茅屋に招ぎて。

後旅

もらぬ程けふは時雨ゝ草の家根　斜嶺

火をうつ聲に冬の鶯　如行

もらぬ程時雨よと言ひつゝ、用半ばにて家裡仰いでもりを見る樣と見立、朝茶焚付くる體をよせたり。チョッチョ〳〵とうつ火の火口につかぬは、雨故かと仰ぎ見て、獨りごつ程に、棟に止まりたる鶯鳴の、火打のおとを友鳥かと思うて、チョッチョ〳〵と鳴きたるは、時雨よと下知せし詞の、應へかと思はるゝ一座のをかしみを付たる（自答）の一體也。

越の十丈に草庵を訪はれて。

射
宿の秋歌よむ程は荒れにけり　支考
垣の木槿に朝がほの花　涼ト
荒れたる草庵の犬防の生垣に、葎のまとひたる様也。

「白砂清き庭の朝露
と荒宿を譽めなば、一夜の宿にも諂ふ行脚也と、口を開く時其の膽を見られむ。身柄を付くる事と心得たる人にては、第一他人の腦する事もわかるまじ。

人々さがの宿を訪はれけるに。
藤實
木の本に胡座取りまけ木ねり年　去来
夜一夜笑ふ名月のはれ　野童
木の本に居並ぶ一用を、月見と見立たり。
別店にとゞめて。
三物
萍や波に連れだつ花と花　眉泉
巣に通ふ日は衛只二羽　蓮二
池沼の萍と見立、水邊の景をよせ、花と花に二羽といふ(對句)もて意を列べたり。

「漂泊の身を頼むすゞ風
と云はゞ私也。

蓮二房をとゞめて。
三物
乙鳥やこちの軒にも借屋あり　丁牧
鼠色なる壁に藤波　蓮二
こちの軒と云ふを、別莊の鼠かべと見、ふじに軒ばの景をよせたり。鼠色とは乙鳥の巣の(潤色)也。

「海山こえて來たる如月
と云はゞ私也。

子規美濃は新茶の便りかな　斐士
同
晝寢にかをる宿の橘　薦元
時鳥なく頃、みの人の尾張に來るは、其の國の新茶のたよりと云ふを(移轉)して、みの人の晝寢をみのゝ茶に覺して、時鳥聞かする便りとする、宿の橘の時節を付たり。薫とは新茶の響き也。古今「けさ來なき未だ旅なる時鳥花橘に宿はからなむ

といふを指したり。如此、傍、見立、移轉等の格もて作りたるは、其の中の主たる體をもて□號けたり。

「無事を傳ふる袖の風の香　と云にて私也。

△餞別送別。

檜笠雪を命のやどり哉　桐葉
藁一つかね足包みゆく　翁

三

辛き雪中に、笠一かいの命とする行脚の觀想なれば、一束のわらに足包みて、寒苦を凌ぐ姿を合せたり。

○(評註)雪を命とする風狂人に打添へ。稿に足包む異樣のけしきを付たりと云ふは非なり。わらに足包むと云ふは、爪懸と云ふ雪中の具にて季寄にも出たり。誰れか雪をくらひ、わらもて足を卷立つる者あらむ。元より評註の惑はせのみなるを、一々論せむもうるさければ已下は閣きぬ。

句餞　時は秋よしのをこめし旅のつと　露沾
雁を友寢に風雲の月　翁

時は秋の哀れなる、處は大和路の床しきに、吉野をかへる旅なれば、羨ましき詠のつとあらむと、遙かなる西の空を望みたる姿に見立、渡りくる雁を合せたり。雁を友ねとは、生涯旅より旅に遊ぶ風雲の身を羨む心也。如此江戸より大和を察する句には、目前の姿を立てずては空論になる也。

同　江戸櫻心通はむ幾しぐれ　濁子
薩陲の霜に顧みる月　翁

假令旅たつとも、かく時雨する度毎には、住馴れし庵の枯木の櫻に心通ふらむと、行先を量る句也。此の句江戸に心通ふと云ふ姿を立てでは、空論となる故に、櫻の場を(移轉)して、さつた峠上る人の、村しぐれの度々に後向きて、空眺むるを見て、偖は古郷の江戸に心かよふらむといふ様の(逆付)也。脇はほ句の情の詞に、姿を立つる物と心得よ

かし。

句餞　時雨々々に鍬借り置かむ草の庵　擧白

火燵の柴に侘をつぐ人　翁

留主の庵をからば、時雨の度々行きて、さびを樂しまむといふ何なるを、草庵と云ふ姿を立て、炭もなき火燵なれば、柴を焚きて先人の侘を繼がむといふ心をよせたり。ほ句未來なれば、脇も未來の用なるを、侘をつぐ人と生得に作りて現在の體としたり。又柴と云ふ故に、枯木立の庵に時雨の寂深し。若しも炭とせば時雨の姿を失はむ。

同　白かねに蛤をめせ霜夜の鐘　松江

一羽わかるゝ衛一むれ　翁

めせとさしたる方なる蛤の場の景物を付たり。霜夜のかねに衛の聲を(潤色)して、浦の寂を顯はしたり。

幽　よき程に積りかはれよみのゝ雪　木因

冬の連とて風も後から。翁

冬の連とて風も後からふくからに、よき程につもりかはれよといふ心にて(合體)の逆付也。

笈　秋のくれゆく先々の苫家かな　木因

荻に寢やうか萩にねやうか　翁

行先々見渡して、荻ある苫家にや萩ある草家にやねむと彳みたる樣にて、同體の逆付也。

奥　忘るなよ虹に蟬なく山の雪　會覺

杉の茂りをかへり三か月　翁

梺迄送りて、忘るなよと山上をさす體と見て、其の山の杉間の三日月を顧みる樣をいへり。是忘るなよといふ人の姿也。江戸櫻の脇に似て付方違へり。こは白かねの脇と同體也。さるに古來此等の脇を見過りて、餞別の脇には、「白雲は引きゆく鶴の名殘かなと、其の俤見えぬ事をいひても、顧みるとだにいはゞよき事と心得違へたり。世俗の別れのごとく、双方より呼りあふ事にはあらず。

小文　新麥はわざとすゝめぬ首途哉　山店

又あひ蚊屋の空遙か也　翁

わざと進めぬと云ふを、つねに一つ釜の麥喰合ひし人に別るゝ樣と見て、さりながら又あふ事の遙かに隔たれば、けふは改めて米參らせむといふ心を、其の場の相蚊屋もていへる(遠付)也。かゝる飲食の脇は、如此容體もて付けざる時は、句品劣る也。

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　翁
サル　笠新しき春の曙　乙州

只まりこの體と見立、旅人の往來ふ朝けしきを付たり。笠新しとは、初春の姿にて、梅、若菜の移り也。七部婆心錄に細辯して、古註の惑ひを解きたり。かく行先を推し量りし情の句は、實景になる樣に脇する事定法也。

「恵みを笠に――

近頃師家より餞別を受くる時は、如此恩に預りて忝しと云ふ心に作るを、禮と心得違へたる人あり、かくて脇にならば、此の一句に夏、秋、冬の字を入れかへなば、何の句にも間に合うて、千歳不朽の寶とならむ。爰を以て身柄の謙めを思へ。

馬借りて乙鳥追ひゆく別れかな　北枝
ツバメ　花野みだるゝ山の曲目　ソラ

後を顧みずゆく〳〵逸さを、飛燕に比し、別れを惜しみて馬にて追懸くる樣を述べたれば、花野亂ると飛馬の姿を立て、曲目と作りて遙かに翁の後姿を見付けて、追ふ力得たる樣を付たり。

尾張にて翁に別るゝ。
時鳥こゝを西へかひがしへか　如行
拾　薄々はるゝさみだれの暮　叩端

只時鳥のとぶ空のけしきと(見立)あと打眺むる樣を付たり。

「入梅も定めぬ雲水の笠　と云はゞ身柄也。

ムツ　剛力に成りてゆかばや湯殿山　桃賀

布子袷のあとは帷子　桃　隣

強力の荷物拵へる様を付たり。若し分袖の謙辭もて、

「無一物なる麻のさ衣　と云はゞ私也。

白扇

行先も寐安き方ぞ萩と月　浪　化

袷きるべくむしもなく也　支　考

月夜の行先の萩ある中に、つゞれさせとむしのなくを聞いて、爰もねよげなる所かなと、打守りたる様也。前の「行先々の笘屋と、凡そ相似てこは順付也。

「行脚の時を得たる出來秋　と云はゞ私也。

八夕十の内

舞立つや扇に柄杓菊の花　文　釆

面をきれば岑に月かげ　蓮　二

○

殘念は重ね〳〵ぞひとへ菊　鹿　吹

あふは別れの本あらの萩　二

○

三に酒持せて菊の門出かな　和　什

くゝり頭巾に木兎の杖　二

○

見送れば其笠遠し月に菊　山　只

橋の柳もちりしまふ時　二

遠き笠見送る場の、木間透きて、目障りなき體なり。

三物

先陣に杖のさたなし五月川　倚　彥

髭も若やぐ百合の花笠　蓮　二

川邊の草花もて、先陣に老武者の勇を見せたり。髭とは百合のしべにて、實盛を模したる草體の曲也。

同

風蘭の香を吹分くる軒端かな　涓　竹

笠を木かげに涼む梹榔　二

ほ句は分袖の心なるを、只よしず茶屋の釣草と見

て、傍の木陰に檜根笠脱ぎたる旅人の、休む體を付たり。

藤　其花の咲きてや烏藤三百里　蓮二
　　空に霞の關守もなし　里紅

烏藤のさく頃三百里の旅にひく烏藤杖にも詞の花さかむと祝ふは、戸ざゝぬ御代を喜ぶ樣と見、花を仰ぎ見る姿を立て、打ちはれたる天色を付、三百里を(執中)したり。

○東揭　よい文を待つぞと雁の別れかな　馬相
雁四十五ノ内　戀にはあらで明くる春の夜　巴靜

藤 六の内　川々も靜けし藤の清見潟　李仙
　　白尾の鷹を見出す引明け　靜

柳 十三ノ内　ゆく笠をしたふ柳の風情かな　花リン
　　水あたゝかに鳥の渡し場　靜

かゝる物好あり。凡そ脇の稽古には、同題、同體の句數多並べて、一字一點に付分けて學ぶにしくものなし。

△留別

牡丹蘂を深く這出る蜂の別れ哉　翁
拾　朝月涼し露の玉鉾　桐葉

路傍の牡丹と見て、玉鉾をよせ、露に花の艶美を(潤色)したり。留別のわきに、別れの情を作るは身柄也。

洛の去來を尋ねて、其日の別れを惜む。

ゆりかへす風のはなるゝ薄かな　十丈
射　打響きたる礒ばたの月　去來

雜話喧すかりけむ。さわがせけりと謝する心を、薄を吹きなびかしゆく風に准へし暇乞の句なるを、舟もゆり返すばかりにふく風の、薄を放れて沖の方へ吹凪ぎゆく體と見て、礒をよせ、打響きというて荒波を見せたり。京の別れに荒礒の脇付くるをもて、句に隨順する理をしれかし。

三物　菊月や其有明となる日迄　蓮二
　　花よりも今垣の新そば　比誰

九月廿日頃まで滯留せしと云ふ心なれど、情の句なる故に姿を立て、其の有明となる日迄、月夜を欺くそばの花よりも、刈干したる垣のそばを待ちしと云ふ心の(含[illegible])脇を付たり。もし滯留の心を思はゞ、ほ句は脫殼とならむ。

病後蘇生の心を。

有りがたき娑婆の日和や歸り花　蓮　二

小春のたびの駕に光明　九　蚰

しやばに歸るに光明と對して、小春日和をいへる曲節也。

「雪まだふらず十月のたび

と病後を勞る凡情に迷はゞ、此の光明放ちがたからむ。

歌

二見とは又あふ秋の別れかな　風　草

笠きるかげの月の笠ぬぐ　柳　玉

二見と云ふに月の影と、容の(ヒヾキ)をよせ、笠に別れの姿を立てたり。もし再會を契る婦女の情を發し。

「人まつむしの宿な忘れぞ　と云はゞ私也。

△首　途。

旅人と我が名呼ばれむ初時雨　翁

又山茶花を宿々にして。　由　之

「誰ぞやとばしる笠の山茶花と云ふ冬の日のわきを含みて、時雨に風狂の姿をいふ(俤取)の一體にて、逆付也

我名よばれむの句を聞きて

旅人と我れ見はやさむ笠の雪　如　行

桐葉亭

盃寒しうたひ候らへ　翁

我れ見はやさむ謠ひ候らへと云ふ(拍子)もて、笠の雪を冷じき大盃と奪胎し、酒宴の場の趣きに付けなしたり。

越

菊の香に山路は嬉し病上り　東　花

酌とり直す松の朧月　風　乙

高さに登る重九の宴と見て、松に山路の姿を立てたり。

歌　野は花に千里の馬の首途かな　風草
　ことのは月の殘る有明　南江

千里の道も一歩より始むるといふ朝戸出の體也。

「餞別草に手をるもみぢば　と云はゞ私也。

△待受。

ウヤムヤ
埒せよ稿ほす庭の友雀　自准
　秋をこめたる垣のさし杉　翁

翁の歸りを止めたる何なるを。只埒むる雀と(見立)垣の杉に雀の場をすり上げたり。クネはクニと通ひ、物の限りをいふ詞にて。東國に垣をいへり。最も古言也。

衝　いく落葉夫程袖も綻びず　荷兮
　たびねの霜を見する脛　翁

度々落ばの時雨にも逢ひけれど、夫程袖も裾も綻びず、只綻びたるは足のみと笑ひつゝ見する様の(自他通)也。

射　風雅には痩せてかへりぬ顔の秋　北枝
　袂の霜をふるふ菊の香　十丈

菊の山路の霜にやせたる風雅の姿を付たる(自他通)也。

同　土産まつ子供や鼻を秋の風　河菱
　皮ご明くれば反故の露霜　丈

何を見てかく言ひしと吟膓を探るに　河菱に袖日記見せむと皮ご開くを、見は土産出すかと思うて手を重ねしを見て、作りし句と見立てゝかく付たり。露霜は秋風潤色也。如此情の句は皆ケ様に考へて、陽に景物をもて姿を立つる也。

「一物もなし月のざれ笠　と云ふはゞ空論也。

魯九法師西國戻りを一忍堂に入れて。

素鹿　先づとまれ在處は雪の一よばり　正勝

手作の酒にさらば水仙　魯　九

泊り給はゞさらば一瓶を生て、手酒參らせむと、水仙切りにたつ雪の日の姿を立てたり。水仙切りに出でずては、磬懸の隣村見えまじ。

待受の不掃除も雪に隱れて。

掃きよせに拾ふや雪の山一つ　貞　旭

冬梅

手水場迄は來て火撓鳥　蘆　元

掃きよせに狹き場を見出し、鶲に雪寒き體を顯はしたり。

△雜　部

熱田の社頭大いに破れ築地は倒れて叢にかへる、彼所に繩を張りて小社の跡を印し、此處に石を居ゑて其神と名のる、蓬、薺、心の儘に生ひたるぞ中々に止り侍る。

しのぶさへ枯れて餅かふ舍り哉　翁

三

しはびふしたる根深大根　桐　葉

往來を止むる茶店の釣草迄も枯れたる樣に(移轉)して、其の店庭の根深大根も客待顏にしはびたる寂を見せたり。若し社頭の前書を思はゞ、舍の字容しくならむ。

飛鳥井亞相の御詠草を和して。

京迄はまだ中空や雪の雲　翁

衛

千鳥しばらく此海の月　菐　言

京中空の道懸けながら、見捨てがたき此の海の景を吟ふ行脚の姿となしたり。若し懸物の事と前書に惑うて。

「千鳥の跡の殘る白砂

と云はば私也。

桑門可仲は、栗のかげに庵を結べり。

ダテ

隱家や目立たぬ花を軒の栗　翁

稀れに螢のとまるつゆ草　栗　齋

ち草の茂りに隱家の姿を立て、稀の字に目立ぬといふ(ヒゞキ)を付たり。爰に後世三昧の事を思はば才柄也。

菜根を喫して、終日丈夫に談話す。

ものゝふの大根辛き咄かな　翁

一通りゆく木がらしの音　玄虎

大根畑の邊にて大根の辛き咄しする句と見立。野面ふく風を付たり。例の譽められし事と引受くるはなめし。

幽

乙州が一樽を携へ來けるに。

草の戸や日暮れてくれし菊の酒　翁

笈

蜘手にのする水桶の月　乙州

くさの戸と云ふを緣先にて酒くむと見、そこの上水桶に投込みたる菊を取りて銚子にさし、居ながら桶の月かげを見る草庵の體を付たり。

白雪が二子に、桃先、桃後の名を與へて。

其の匂ひ桃より白し水仙花　翁

茶

土家わらやの並ぶ薄雪　白雪

只、桃、水仙の句と(見立)。其の場を見出でゝ白に薄雪とひゞかせたり。號を貰ひし由をいはゞ空談とならむ。

草庵に桃櫻あり。門人に其角嵐雪を持てり。

雨の手に桃と櫻や草の餅　翁

未來

翁に馴れし蝶鳥の兒　嵐雪

庭前の桃櫻を眺めつゝ、左右に花の二弟子を並べて、草餅祝ふ句なるを(移轉)して片手に桃櫻を持ち、片手に餅を握りて、高く指上げたる腕首に、兒どもの登りてとらむとするを、猶さし上げて戯ふるゝ老が寵愛の樣を付たり。翁とは即興也。我が俳力の事と思うて謙らば笑草ならむを。

古將監の古實を語りて。

月やその鉢の木の日の下面　翁

翁

旅人なれば折からの冬　沾圃

鉢木謠「なう／＼旅人お宿參らせうと云ふ(係取)の一曲節也。

城主の日光御代參に、小姓する岡田氏に

申す。

篠の露袴に懸けし茂かな　翁

ヒナ　牡丹の花を拜むひろ庭　千川

袴の露と云ふを蹲まる樣と見て、しの垣の邊りより・花庭拜見の體を付たる(自他通)也。小娃の心を運ばゞ自己ならむ。

本馬氏にて太夫が家名を稱す。

ひらくとあぐる扇や雲の峯　翁

俳　青葉ほちつく夕立のあと　安世

扇のごとく雲峯のひらくく上るは、夕立後再びたつ雲の樣と(見立)滴る山の體をよせて、青白の色を立て、ほちつくの詞に扇の涼しみを顯はしたり。

爰に舞臺音曲を思ふは前書の迷ひ也。

その女が操を稱して。

白菊の目に立てゝ見る塵もなし　翁

菊塵　もみぢに水を流す朝月　その

ちりなしと云ふを、淸き花庭と(見立)。掃除の體を付たり。もみぢは紅白の潤色にて、同園の植物也。もし譽めし詞と受けて謙だるべきものならば、貞女の裡はいかなる詞をか作るべき。

荷分亭にて翁にまみえ。

凩のさむさ重ねよいなば山　落梧

金蘭　よき家つゞく雪の見處　翁

かさねよと云ふは、いく日も止まる樣なれば、眺め倦きなき景をよせ、稻ば山のよき家續く雪見所にて、寒さ重ねよと云ふ心に付たり。尾張にての句なれども、脇は岐阜の現景を居ゑたり。

「年木積みたる宿にまつ春　と云はば私也。

我國へ誘はむと、洛の旅窓を尋ねて。

知邊して見せばやみのゝ田植歌　己百

笠改めむ不破のさみだれ　翁

笈　みのゝ田歌と云ふを護と聞きとり、早少女も新らしきみの笠に出立てば、いざ見る人も笠改めむと

云ふ心をよせ、聞違ゆる日は衣をあらたむと云ふ古語を含みて、美濃に不破と對して、さみだれに笠の一句を立てたる（表裡對）也。

　終日風雅の高情を盡す。

白扇　鶯の爪にもかけず梅の花　浪化
　春の日寒き苔の色相　萬子

其の庭のけしき也。爪にも懸けずと云ふを、鳥まだ飛狂はぬ春寒と見たり。

　自他物我の觀念。

　世を見るに柘榴の中の隔てかな　露川
庵記　六疊敷に月も日もさす　立枝

只庭に柘榴ある草庵の、明放して世上を見る樣と（見立）て、かく付たり。柘榴の紅に夕日をてらしたる所、脇の魂也。

　一日父の病快を喜ぶ。

花摘　秋といふ風は身にしむ藥かな　其角
　渫へてよくすむ内井戸の月　定良

身に入む風の快き姿を立て、淺井の水汲上ぐる體を付たり。

萩露　空や秋蚊屋を揚ぐれば七多羅樹　其角
　月にかゞやく五色の雲　東順

臨終正念をすゝむる吟也。成佛の樣、此の脇を見て思ひやらるゝ。

　看病の人に對して。

桃盜　賑かに菊は咲きけり初しぐれ　浪化
　鳬の來さうな水の流るゝ　從吾

賑かとは、多人の心なるを、只谷川の菊と（見立）たり。

　落柿舍に會す。

渡鳥　鳬に數よまれてや村千鳥　先放
　海も聞ゆる風の月　去來

都の風士に恥たる挨拶なるを、鳬なく磯馴松近く衞よる樣と（見立）浪おふ風の月夜を付たり。

　兩吟せむとて。

をし鳥の水もらさじと二つづゝ　竹遊

ブリ

筏にみのゝ寒き寢姿　涼三

只をしのつがひの浮みたる樣と(見立)其の川邊の景をよせたり。人寢たる邊りは鳥近づくべし。両吟の心をいふは私也。

廿日市湛淺生庵主をしたひ。

見すかされぬ松の暖みや冬木立　東雄

六行

雪掃き落す朝の戸帘　素梅

ほ句は俳諧の學びたらぬ心なるを、只こみたる松と(見立)。雪に一入見すかしがたき體を付け。ぬくみに雪ばれの朝潮をよせて、庭上の松と定めたり、

昨日は宮島に遊びて、けふは廣島の風友と語る。

同

連汐や鳧もたびねの枕がへ　ヤハ

一株竹のはぬる朝霜　仙呂

只浮鳧の句と(見立)。浪打際の藪竹の反上る音に、鳧の驚きて所かふる體を付たり。

天滿宮月次初會賀。

梅櫻松は御前に秋の月　蓮二

シ、

和漢に橋をかくる雁がね　骨及

北枝を石動に待ち得て。

三物

國の水借こそ古酒の香也けり　露遊

菊の花さく里の川上　北枝

△薙髮。

庵記

難かしと剃りて退されば又寒し　露川

自祝

おかでは置かぬ草のはの霜　獨ト

情の句也。何を見てかく言ひけむと、隠れたる姿を尋ね見るに、草あれば霜置き、髮あれば白らむと、草の霜を觀じていひし句也と見て、かく付たる(合體)わき也。たとへば「刈れば寒くからねばおくや草の霜。」と云ふ句に仕立直すがごとし。

三物

剃りたりな五慾六慾九月盡　涼三

袴着ぬ身も色かへぬ松　角呂

情の句也。何を見て九月盡と言ひけむと、作者の

腸を探り見るに、舍利の木葉ちり果てし姿と、人目には見ゆれども、朽きぬ今も色かへぬ松の、元氣なるに就けて「世を捨てゝ身はなき物と思へども、と云ふ聖のざんげ思ひ合はせたる樣と見て、この木をもて其の木を顯はしたる(自祝調)(合體)の草體わき也。

○

青瓢　花とれて夏を心の青ふくべ　玉之
自祝　ひるねを洗ひさますタ立　溫古

心の青瓢と云ふを、夕顏棚の下凉みの快き樣と見たり。

他ツキ　面白し黒きを後の衣更　巴靑
廿の内　櫻仕まへば山ほとゝぎす　八至

白き世間の櫻衣を脫ぎて、出世間の山林に遊ぶ心也。

水無月や不二の天窓も消える頃　半花
一夏の松に蟬の羽衣　隱五

不二に三保の松を對して、表裡を首尾したる曲節也。

あぢさゐや其の十德の染仕廻　乙春
風爐もりん／＼庭も帶目　春松

十德を茶會と見、路地の帶目に花の潤ひを見せたり。

自わき　十德に櫻の麻も夏たけぬ　竹夜
十の内　風の薰りも川東から　玉之

麻畑の邊を十德きてありく樣也。

ひるがほは過ぎつ夕顏の笑咲ふ　帆十
わびて凉しき宿の明捨　玉之

夕顏の宿の體也。己が天窓の事と受けたるは一つもなし。

△新宅賀並年賀。

よき家や雀喜ぶ春戸の粟　翁
衙　蒜に見ゆる野ぎく刈かや　知足

大厦成而燕雀相賀と云ふ古語頭の句なるを、たゞ

家の後の粟畑と(見立)そこに蕎畑もあり、秋草も
咲ける體を添へたり。

白扇　薄壁のあちらをさぐれ梅の花　浪化
　　憶にはれて匂えわたる月路　健

壁の外を察したる樣なる夜に、梅はや咲きたるに
逢ひなからむ。憶にはれて月も照渡ればと云ふ心
の(拍子)もて付たり。

同　懸物や水仙のぼる花の影　浪化
　　庭の梢も冬ながら月　呂風

冬枯　煤廿日家渡早し冬牡丹　蘆元
　　明るき窓に雪の掃寄せ　六枳

何れも只の句わきに同じ。二の巻句ひの花の部に
も例あり。

○

すべて年賀のほ句に。

「齢を重ねもちに橙
「長根草ともめづる生先
「老いせぬ流れくむきくの酒
「恵みを杖にこす年の坂

如此付くるは、ほ句見ぬ先より揃へたる身柄わき
也。

△文臺賀。

白扇　月雪に場取も弘し梅の花　浪化
　　まことに春はわが家の春　林紅

場頭と云ふを庭前の梅と見て、我が家と付たり。
餘情は世上正風に歸したる心也。如此只の句と見
て姿を立て、祝意俳意をこむるもこめざるも、句
柄によりてある也。

笠　二見には霞の不二を旭かな　童平
　　雁の戻りの空に七文字　連支

二見より不二を指したる體と見立。向ふより遙か
に歸り來る雁を付たり。七もじとは、俳諧元祖芭
蕉庵といふ碑の謎文の(係取)也。

三物　折殘す渡唐の梅の果書かな　童平

夏を隣りの松に鶯　有栞

渉唐の梅とは、十論に云ふ。夢中に傳法のこゝろを含みたる祝ひなるを、只聖廟の梅や額と見、折残すと云ふを行く春の禮と定めて。御愛樹の松を對し、鶯に梅を粧うたり。

「花も扇もひらく春の日
　道はすゞしき岩のしめなは
不易を仰ぐ松の月かげ
　流れはかれず友千どりよる

如此授與、謙退、自祝、祝德、後榮、報恩等の心もて、漸う四季を分けて拵へ置き脇する人あり。予れ古例を引きて其の惑ひをとくに、或ひは其の人思ひ煩うて曰く。今改めむは師に憚りありといへり。俗情もていはゞさもあらむ。あゝ風雅に遊びて祖翁を師とせず、過ちと知りて猶募る人には偕に語りがたし。

△初　會。

賣　蒟蒻にけふは賣りかつ若な哉　翁
　　吹上げらるゝ春の雪花　嵐雪

蒟蒻うり若な賣りの往來ふ大道の様也。

鶴　日の春をさすがに鶴の歩みかな　其角
　　砌に高き去年の桐の實　文リン

幽　年たつや家中の禮は星月夜　其角
　　筆紅梅をたゝむ國帋　介我

コノハ　あら玉の二見の息や始め滿つ　孟遠
　　はま弓張の二日三日月　去音

續新　蓬莱に一色多し麥畠　乙由
　　氷に遊ぶ鷺の古箸　杜菱

「硯の海に解初める凍
　筆試むる窓の曙

と初會の心を作るは待受の私脇也。

△納　會。

小文　すゝ掃やくれゆく宿の高鼾　翁
　　なぐれて雪のかゝる枯竹　山店

雪閑にして竹垣竹箒も寝鎮り、いびき四隣にひゞく様也。

二見　皆拜め二見の注連を年のくれ　翁

　しの竹諷ふすゝはきの風俗　水

焦　兒くらべ山や納めの庚申　其雫

　灶物壁に淺黄水仙　紫紅

コノハ　ゆく年や兒島の備も九里餘り　惣代

　蘋もうなぎも冬ごもる穴　朝毎

深　年忘れ盃に桃の花かゝむ　酒堂

　ひざに乘せたる琵琶の風　素堂

盃に桃書きて年忘に季春を忍ぶは、琴棋、書畫の狂客の宴と見立、びは彈かする様を付たり。

「師走を餘所に遊ぶ雪の日

　年の流れによる友千鳥

などゝ納會の心もて、ほ何に拘らず待受するは非也。凡そほ何に其の會の意の詞顯れて、もだしがたきは脇に其の詞を少し會釋する事も稀れにあり。

會の心は前書のみにて常體と見立てらるゝ句に、或前書の心を脇に作るは、輪廻の凡情也といふを、或人難じて曰く。「何面に會の趣き顯れぬ故に、脇にわざといふ也。しかせぬ時は前書略の物は、何會の卷ともしれず」と云へり。そは姿情後と云ふ正風第一の法をしらぬ自己の邪見也。

△餘興。多例略

　疣一つこゝに置きけりいはく露　楊水

次匀　無用の枝を立てし犬蘭　翁

此の句草木を言殘しけり。爰に置くと云ふ低き様、必らず草ならむに、疣と見らるべきは犬らんならむと定めて、疣の姿を(奪胎)したり。無用の枝を立てしとは、ほ何に餘力の活[illegible]。

　干鮭に花こそさかね冬の梅　浪化

草刈　紙衣の衿に唐おりの舖　北枝

　卯の花や雪の白地の雛が嶽　里紅

文月　田植のたての笠に夕紫　嵐枝

まつうちの眺めや雪の渡舟　里夕
初茄
鳥にあるゝ杜の冬枯　呉天
螢火は加茂にも許す團扇かな　義上
足鼎
葉から重なる闇は宵の闇　何聲

餘興とは儀式の卷終りて後、時刻もあり連衆も勞れず、興猶ある時する事也。探題、句合、畫讚などするも、又小卷をまくも餘興也。式の會には必らず餘興ありといふ事にはあらず。若し當日餘興卷あらば、ほ句は其の日の宜しきに任せ、強ひて指合をくらず。曲節自在にさら〳〵として俳諧に遊ぶべし。又後日あらば、一體の變化に骨をる事餘興の心得也。然るに、近世さる一派の徒、僅か一歌仙の歳旦にも、必らず餘興下略とて、三物を出し、其のほ句千度も夕げしきに限りたり。凡そ式の卷は、早天に始めて夕方に終れば一度は夕げしきも可ならむ。昨日本卷調べ、けさより餘興まくにも、夕景の句とは餘り頑也。又其の夕景句の脇に、各勞れたる情を述べて、

「すゞしき風をいるゝ緣先
　千鳥に飛んで廻る盃

或ひは若草に膝崩し、或ひは月かげにくつろぐなどゝいへり。いかに連衆勞れたりとて、夫を句に述べむは無下の放言ならずや。殊に勞れぬ故に調ぶる餘興なれば、趣意も違へり。又かゝる定規にてもすまば、席上の句按も無益ならずや。

△翁忌。

白扇 元祿十二
言出すもけふの佛の寒さかな　浪化
こたふる迄に霜の水仙　夕兆
同十五
一日は塚の伽するしぐれかな　浪化
畠並びに寒き茶の花　林紅
越
年々や御意得る度に初しぐれ　支考
雀四五羽に寒き柴垣　烏泊
八鳥
聲のみは枯野に殘る習ひかな　可徳
霜にてりそふ冬の菊の葉　虎丈

古例如レ此。只常の句脇に同じ。借或時さる國にて翁忌にあひ侍るに、其の地の連衆、皆仰ぐ、報恩、捻香、手向、連友等の詞もて脇せむとす。予れ曰く、間近き追善にて、句面に其の詞顯れたる脇に少しあしらふ事もあり。翁忌は年々數萬所にする事なれば、ほ句も餘り定規なるは古く、脇は殊に常體にて有りなむと、例もて示せども、舊染の垢深ければ、そは麁相也と思うて諾はず。依レ之、時雨の吟數多作り設けて曰く。ほ句に一歩の差あらば、脇に千里の違ひなからむや、各の得物もて句々の姿を付分けてよと云ひければ、衆人初めて、身柄脇の何れへも通じて却つて付かざる事を悟りぬ。

△墨　直。(正德享保の間に有るべき例未得ず)

ちればこそ櫻を雪にすみなほし　吾　仲

東山　年に光りをそふる春の日　白　狂

享保十五　一點の私はなし墨直　左　柳

心も花に清き山陰　怒　三

是亦翁忌に同じ、白狂初めて侍む。故に墨字に對して、光りをそふと、不易修行の意を結びたり。さるを末代其の粕をなめて、築く塚、仰ぐ碑、筆の運、餘光、道の禁など付けむは、其の催主の脇にはあらで、古人の吟を襲ふとやいはむ。ほ句に墨直とあらば、只景氣計り付けても其の情うつらむ。常體に見らるゝ句ならば、脇は景情勿論也。又ほ句も墨直と偏固に作らでも、其の趣きあらばよけむ。又折節は只花、鳥、風、月の朗詠も面白からむ。借中頃花供養、捧扇會始まりたり。理り同じければ例略す。

△追悼。懷舊。

百日迄を追悼といひ、一周忌よりを懷舊といへり。句の親疎其の趣きによるべし。凡そ哀傷の句脇は、表に強ひて悲哀の詞を作らむとする時は、却つて薄情に聞ゆる事もあらむ。そは尋常の事も詞過ぎたるは卑劣なるがごとし。只常の句の樣にて吟ず

る度毎に、俳情顯れて身にしむばかりにありたし。偖無常の句に無常、釋に釋の脇を付くるはよし。さるを釋、無常を取違がへて互にしたる物多し。甚だ非也。凡そ佛の道にかゝる物は釋也。衰老病死にかゝる物は無常也、其の中白牌は無常。戒名は釋、香爐は器物といふ樣なる事あれば、證句の傍に、釋、無常、の印をさす、懷古、歎辭、讃談は非無、非釋なれば、互に成りてもよし。又形容の物には印を入れず。

續虚 卯の花も母なき宿ぞ冷じき 翁
五七日 香消え殘るみじか夜の夢 其角

ほ句は一家内白衣を懸けたる樣を。卯の花に比して愛の字の響きをいへるを、窓の寢覺の姿に（移轉）して、香の火消えて短夜の夢を觀ずる樣を述べたり。脇一句の仕立無常也

貞享五の春、故蟬吟公の庭前にて。

一 樣々の事思ひ出すさくらかな 翁

春の日早く筆に暮れゆく 探丸

はなに樣々の事思ひ出すといふを、机上に詩歌を按ずる姿と見て、物書き續くる興に入りて、永日も忘れたる樣を付たり。

「落つる涙に庭の陽炎 といはゞ私也。

印 あなむざんやな甲の下の蛬 翁
力も枯れし霜の秋草 亨子

「あなむざんやな齋藤別當といふ謠のタチ入れなれば、脇にも「風にちゞめる枯木の力も落ちてと云ふ文句を摘みて、討死の意を受け、霜の秋草に蛬の哀れを盡したり。

○

シ、 門松にきけとや鐘も無常院 蓮二
讃秋之坊 かすみの果の西にいる月 野棠
さうびちりぬちればや花も葉も刺も 二
祭北枝 一 山ほとゝぎす谷にその花 ソ守

さうびの花葉ちるといふを受けて、山時鳥のなく時、山時鳥の花も開くといふ(拍子)もて、一谷の草花を對したり。

弔牧童　鷺の笠に出たつや悟故十方　蓮二
　梅の旭に極樂の道　東孜

哀文㓉　とその香や枕に恨むる藥香　蓮二
　衣桁に殘す袖のはる雨　芽囚

悼十丈　花の香もけふ脫更へよ麻衣　蓮二
　駒鳥の音もいるゝ木隱れ　野角

こは間近き悼みなれども、句脇ともにものの字を以て無常の歎きを餘情に見せ。何面は只平生に仕立たり。

悔濫吹　七種やけふ一色に佛の座　蓮二
　金衣の聲に花の雪ふる　曾呂

紫金蓮臺に金衣の妙服を懸け、正覺の天華ふる體を付けたれども、准物なれば釋にあらず。

歎從吾　蔀に名の殘るや花の白だらに　蓮二

机に聲の千里鶯　湖夕

告雨青　十三夜は忘れじ菊も其の餘波　蓮二
　木のはに霜の見ゆる長月　山リン

惜萬子　其實三つ其梅は畫に殘りけり　蓮二
　杖に團扇に詩あり歌あり　八紫

東山翁十三回　ばせをはゞ昔の下萠見る世かな　遊行上人
　呼子の聲に三千の弟子　蓮二
　鵙も十三年の氷かな　千那
　火桶の花も寒き冬枯　角上
　幻の一むかし也枯尾花　塵生
　ちらり／＼と雪げする空　宇中
　此道の伽藍はいづれかへり花　八十
　雪も現も氷るやどり木　一草

○

三千同廿三回　梅がゝに迷はぬ道の岐かな　丈草
　一字の恩に月も千金　蓮二

梅に好文の趣きより、街に千金を荷うて、一字の師

を尋ねし俤を假りて、春宵一刻の古語を文どりたる曲節也。

喚續の千鳥の恩や今の娑婆　百里
湖水にかげの殘る月雪　蓮二

○

笠　同正當

尊さや花ももみぢもかへり咲き　童平
山も眠りを覺ます音樂　蓮二

○

八鳥　同

鶯や古翁風雅のかしら鳥　杉風
冬木の異香如月の雲ヤハ
大津繪の鶯もなけ三十三とも　鬼城獨
しきみは春をかざる松本

白扇　翁靈祭

さゝ波や井波にかはる草參り　支考
野面の石もやゝ秋の風　浪化

○

文星　蓮二悼

梅がゝの数へ殘るや古今抄　丁牧
てには囀づる鳥の遠近　比證

俤や天に星地に梅の花　箕吹
御簾の枯葉の流る風　遊魚
梅の名や一月暮れて櫻佛　花フ
呼子とかいふ鳥も此時　百ア

机

文臺の別れや波に歸る雁　市虎
月と花とを惜む春のよ　伽凉

硯

ことのはも今は硯の汐干哉　乎哉
柳に招ぐ風の栞戸　市虎

筆

其筆の跡思へとや土筆　伽凉
ひろ野をきじの一筋になく　乎哉
鳥もけふなく此陰や百日紅　東怒
若ばの光り水に消えゆく　東宇
けふ迄は忘りのなき夏花哉　一宇
せんだんの香に明易き月　鷺洲

○

竹秋　佐角悼

月に其俤床しかゝみ山　和蕉
名のみ壺中に殘る蘭の香　十知

泣顔の百日たつや冬の月　冠那

咄は盡きて寒き手焙　獨

○

滑　鶯や日本は假名に經の聲　歸的

蓮二七回　暮を呼子の鐘つきにけり　買郁

○

冬紅葉　亡人のかげか四角に疊夜着　ヤハ

障子にくるゝさゞん花の雨　苔路

○

みかの　ヤハ悼　初花にめさでやけふのから衣　笑調

誰れ呼子鳥刀ぬり杖　梅從

五十日さくらはよそに耳の花　同

ちよつ〳〵と下す水の雀子　風之

昔かくをしむ日ありやちる櫻　梅楚

主なき清水濕む暍　白川

凡そ集に作る追善は、類句多ければ、親しき中のも此レ如何面輕く作るべし、何毎々々に愁詞過ぎたるは、却つて作り物の樣に覺える也。

△遺吟立句追善。

遺吟を立てゝ年忌擦供養などするも、四季句の脇に同じ。これを中頃より脇起しと云ふは、只今脇より事を起して始むと云ふ心の名なるを、頓て起の字に仔細を付けて、脇起しは遺吟を靈位と見て、夫に對して懷古手向の心を付くる事としたり。かくてもすまば、其の心の四季脇四句調べおかば、百代事欠かぬ重寶ならむ。是も古風の執着也。

千句塚　十の內　春もやゝけしき調ふ月と梅　翁

門のさゝれし道の古草　除風

古池や蛙飛込む水の音

窓のあかりは月の朧夜　露堂

時鳥聲橫たふや水の上

くもりに涼し麥の赤らみ　堂

猪もともに吹かるゝ野分哉

山の此方に獨り殘月　風

蛤の生きるかひあれ年のくれ
拂へどすゝに染まる世の中　合羅
鶯にほうと合する朝哉　嵐雪
机の手爐に冱えかへる指　ャハ
雉なくや藪の捨子の莚錢　仙化
茶摘の笠に往來の笠　ャハ
松島や鶴に身をかれ時鳥　ソラ
月忽然とさみだれの霜　ャハ
鶯やまだ蛤の二見聲　正秀
椿の花にこかす立臼　酒堂
三日月や鶯かへる寢繕ひ　イ然
網の手なりに持山の花　酉

○

八島 先人靈祭十の內

我れをよぶ聲や浮世の片時雨　ャハ
花靜かなるつはの細露地　素淺

みかのヤハ病中の吟に脇せし追善の卷也。ほ句を、茶人の獨り路地を逍遙して、時雨のさびを觀ずる體と（見立）たり。

六花 五十回六の內

初雪や水仙のはの撓む程　翁
市人にいで是賣らむ笠の雪
綠に寒さをふるふ柴賣　素水
都の町を紙衣大名　巴靜

○

笠 十七回

歌書よりも軍書に悲し吉の山　蓮二
ちる名は朽ちず花にもみぢに　盧元

大友の亂、義經の難、大塔宮の係など、思ふに古歌の哀れよりも悲しからむ。火花をちらしゝ戰ひも、今は花紅葉のちる名にのみ殘りけりと、其の山の觀想を付たり。

○新夏引糸

傘に押分け見たる柳かな　翁
待たせて遲き春の野渡　山幸

安永二蓼太捌きの卷也。題に脇起歌仙と書きたり其の頃よりの名にや、されども（谷小橋）のごとく、邪の事なくてめでたし。

△古人の句。（是も常體也。多例省）

月に柄をさしたらばよき團扇哉　宗鑑
あら　蚊のをるばかり夏の夜の疵　越人

△文通並留主。

文通句の脇、留主へ挨拶句の脇等も常體也。さるを近頃其の文を開き見る意を作りて、いかなる句にも付くる事はやれり。是ゝ脇は身柄の物と思ひ誤りたるより起るひがごと也。

翁此頃すが川に在すと聞きて申し遣す。

雨はれて栗の花さく跡見哉　桃雪
奥　何れの草に鳴落つる蟬　等躬

只栗ある場の雨はれの形容を付たり。

麥を忘れ花におぼれぬ雁ならし　素堂
あら　手をかざしみる岸の陽炎　野水

「此文人の事傳て届けられしを、三人聞き幾度も吟じて」と斷わり書きしたれども、只歸雁を見送る體を付けたるを見よ。

△述懐。（いか程前書ありても常體也）

けふばかり人も年よれ初しぐれ　翁
匂　野は仕付たる麥のあら土　許六

こてふともならで秋ふる菜蟲哉　翁
幽　種はさびしき茄子一本　如行

此道やゆく人なしに秋のくれ　翁
其使　岨の畑の木にかゝる蔦　泥足

△名所。

何所迄もむさしのゝ月陰すゞし　寸木
一　水相似たり三股の舟　翁

十六宵と名のかはりてよ戀の山　萬子
山こと　風の便りを雁に岩瀬野　巴兮

○

星崎の闇を見よとやなく衛　翁
衛　舟調ふるあまの埋火　安信

二上や雪の化粧の玉くしげ　蛙白
越　妹がりゆくか川千鳥なく　支考

如此脇に故郷の名所を結びたるも、又結ばざるもあり。

笈　春風や麥の中ゆく水の音　木導

牧田川越　陽炎いさむ花の糸口　翁

卯の花の初雪咲きぬ時鳥　支考

卯花山　ひるさへ空に氷る有明　溫古

如此ほ句に名所の隱れたるは、脇に其の名所を顯はす事決してなし。因みに云ふ。三物、表物類は、脇に何を付けてもよし。只脇限りにておく物、一順一卷とする物には、假令ほ句に神、釋、戀、無常、名所等の意を含みゐても、句面に顯はれたる詞なき時は脇に其の詞を付顯はす事きはめてなし。そは姿先情後の故也。近頃表物の脇を見過りて、ほ句に含み、あるは付顯はしてもよしと敎ふる人あり。過則勿レ憚レ改。

△題發句。（脇は題意に拘はる事なし）

仲秋雨懷ニ故人一

桃白　名月や笹ふく風のはれを待て　濁子

客に枕のたらぬむしの音　翁

ぬるには枕たらねば、起き居て雨はれをまてと云ふ（移轉）付也。

梅十論　八重にさく奈良より梅は一重哉　梅光

俳諧傳　栞も小便にかへぬ鶯　蓮二

俳諧道　近道もいそがば廻れ梅の花　七雨

紅ではくけぬ鶯の笠　二

俳諧德　垣根にも都うつすや梅の花　羽稲

人のひるねをおこす鶯　二

虛實論　誰が袖に若やぐ梅の老木かも　桃川

笹に素足の鶯のたで　二

姿情論　鍋殿も公家の流れの野梅かな　有琹

聲はならぬ鶯の日兮　二

黑ぼこに育ちて梅の白さ哉　里雪

俳諧地　鳥も其子に母のやぶ入　二

修行地　闇にうき月に見よとや梅の花　里人

夜鳴きすとても鶯の難　蓮二

花にさへつをひく梅の匂ひかな　呂竹

言行論　茶色のさびもさすが鶯　二

接分の衣裳くらべや梅の花　仲志

變化同　鶯の巣に交るよその子　二

梅の花さくやのしめに小さ刀　泊楓

法式同　ゑぼしほしいか篠に鶯　二

△四季。

古池や蛙飛込む水の音　翁

蘆の若葉にかゝる蜘の巣　其角

一　涼しさの凝砕くるか水車　清風

根本　青鷺草を見こす朝月　翁

あれ〳〵て末は海ゆく野分哉　猿雖

けふ　鶴の頭をあぐる稲の穗　翁

あるゝ場を稲村と定めて、字を（過去）と見、野分鎮まりて後、臥しをる鶴の首上げ見る風情を付けたり。

新百　凩の一日吹いてをりにけり　圓友

鳥も交る里の麥蒔　乙由

如此一物仕立の句には、能く其の場、其用を見出で、姿を立つる也。四季の脇は七部の註に委しくする故に、爰に擧げず。其の書に□■□■此の四印あるもの最も鍛錬とせよ。凡て景曲眺望の句は、よく其の趣きを見定めて、他にふれぬ樣に有りたし。又一段ほ句をすり上ぐるは手柄也。（サビ栞）

ほ句に場なくば場を定め、場あらば時節を付けよと云ふあらめなら敎へを信じて、「鶴に田、澤。「烏に杜、畑など付けても脇と心得たるは、甚だ麁相也。又近頃景氣の句に、

「杖にイずむ春の曙

「見はらし弘き月の門先

如此景色に向うて、只見ると云ふ心を付くる人あり。是も相對付の古濕也。今一つ物を添へて社二句の間に見る心はこもらめ、難問には、只見る、

只きくと云ふ付方は、脇にも付合にもなき事也。

△雛

笈　かちならば杖突坂を落馬哉　翁

名所　角のとがらぬ牛もあるもの　土芳

柴吹風　何となう柴ふく風も哀れ也　杉風

別　雨のはれ間を牛捨てにゆく　翁

ほ句は送別の心さびしき情なるを(換骨)して、柴ある場の用を見出し、哀れの字を深めたり。かゝらではほ句魂こもらで、平句に墜ちむ。是雛の脇の付方也。○(諸書)雨の夕べにと寫し過りたり。

△脇の容易ならぬ事。

(北枝考)脇は力一ぱいほ句の餘情を言叶へて、付の手柄なくては淺まし。手柄せむとする時は、一巻の中第一むづかしき所也(文約)

(平安廿歌仙)三吟　(此に筆、洛長松下にあり)

鶯に朝日さす也竹格子　浪化

雛の道具を取出す春　去來

又　雛のはこりを拂出す春

又　袷羽おりをとり出す春

又　いそがし事も先づ仕廻ふ春

又　めつた吹きするきさらぎの風

又　小いそがしさも埒明くる春

隨分按じ候へども出不申候あとよりもしよき句出で候はゞ又々申すべく候此の内雛の埃りの句に不仕やと存候とかく御了簡可被下候。

○これより翁の筆

小いそがしさも埒明くる春

此御句彼樣に仕候ては

ゆらりと春をかまへたる庭　己下器

蕪村曰く。其の頭去來はさうなき作者なれば、かゝる脇などせむはいとたやすかるべきを、自らの臆にことわりかねてや、翁のさたを乞ひ求めける、殊勝の事にこそ侍れ。翁もかくやなど捻り直されけるも、猶心ゆかずや侍りけむ。「禮者うすらぐ春

の静かさと、砺波山には聞えける（約文）

▲祖翁常に。脇は附句第一の物と示し給ふ事、北枝の詞と。去來是を京より江戸へ伺ひけるをもてしるし。備此の六脇を考ふるに、晋龍のつまづき也。吉弟にもか丶る事有りと思はゞ、今人何ぞゆるがせにすべき。

尾張の國熱田にまかりける頃、人々師走の海見むと舟さしけるに、

海くれて鳧の聲ほのかに白し　翁

串にくぢらをあぶる盃　桐葉

蓬

ほ句は海は暮れたれど鳧のなく所に目を止めてイみ見るに、鳧のなく度毎に、仰ぐ羽裡の白みの仄かに見ゆるは、未だ暮殘りてゐるかといふ心を、聲仄かに白しと作りたる曲節也。されば其の透見る鳧の場を定め。渚。岩。洲先、とろみなどの浪の風情もて、白の字の妻を顯はすべきを、古調もて前書に相對し、何れへも通ふ事付けけるは、未だ初入門にて、翁の改法をしらぬ故也。翁も亦即興の卷といひ、初對面なれば時宜に許されけむ。此の外にも座俳諧には此の類あり。されども撰集にはきつと精げ給ふ事は。同國にて同年同時撰の冬の日にか丶る身柄脇一つもなきを見よ。此の集は其の時の言捨てを、安永四年に闌更は蓬萊島と號け、曉臺は三歌仙として倶に梓せし物也。翁の時は古調の人も交りたれば、席によりては會釋も有りけむ。今蕉門一圓の世と成りて、吾家の規矩を明らかに立つべき時なれば、假令翁の許されける事にも、其の慮かりありし物は勘破すべし。されば其の時の二三子に、貞享式を授與し給ふは、後に是を糺せよとの遺命ならずや。諸君子察し給へかし。

十七　明星や櫻定めぬ山かづら　其角遺吟

師は母子より強き菓の軒　春樂

此等の脇は仔細もなく遠山の體、曙のけしきなど趣向する所なるを、いかなれば何れへもつく身柄

を付けけるぞ。獅子は貞享式を望みし人なれば、取分け其の教へ門下に届くべきに、如レ此なるは、翁の改法は間近き上に得たる人も少く、古調は久しく馴染たる上に、相對は俗情にて覺え易き故也。蕉門の諸子よく聞き給へ、言不レ聞レ與、君子所レ慚なれば、常に鑑むべきは貞享式也。

桃

　　餅くはぬ旅人もなし桃の花　蓮二
　　すり餅の恩に千里鶯　里紅

ほ句は首途に桃を手折りて餅を祝ふ體也。爰に脇せむには、此の句を桃林下の餅店と移轉して、立代り入代る旅人の粧ひを付くべけむを、摺餅の恩とは、前書相對にて、千里鶯も旅の字の註なれば、身柄は勿論、一字も前句の姿なし。後年、里紅、脇第三の鑑にとて、三物拾遺を著はしたる其の中には玉あり。其等の珪璋を輝やかす人は少れにして、此等の瑕玼を磨かざる徒の多かりけむ。其の曇り一門を覆へり。あゝ師たらむ者は、一言半句も疎そかにすべき事ならず。凡そ書への名家と雖も句毎に金玉は稀れなれば、本書の規則に叶うたる物を撰びて、百世の鑑とする事は弟子の任也。只師を尊むまゝに、跡に害あるの詳しきをも補はざるは、却つて其の師を辱かしむるに似たらむ。彼の曾子の、謹みて親の杖を受けしをだに、夫子は猶不孝と訶し給へる所以をも、思ひ合すべき事になむ。

因みに云ふ。「景清も花見「昔きけ秩父殿等の草體又「一句の立たぬ情ほ句等の脇に一手段あり。爰に盡しがたければ附錄に出ださむ。假令魂なき句にても、脇の付方にて活上る物なれば、容易からぬは脇の稽古也。凡そ脇一句の勞は、一歌仙にも比しがたきを、初心は平句よりも安しと心得違うたる故に、化なる事のみいへり。予れ常に是を敎ふるに、初め四季、脇、三百を一月とし、次に贈答類三百を又一月とし。其の次に草體三百を三月とし。終りに情の句百を三月に成就なさしむ。都て千

脇八ヶ月の稽古也。假令付句は一言下に徹底せむ人も、脇においては此の修行地を經ざらむ限りは、超佛越祖の境界には至りがたからむ。

□第三の事

(本書)第三の留に、文字の定めたる事は、一句の樣ほ句のやうなれども、下の留らぬ所にて、ほ句にあらず。次へ及ぼすべき爲め也。此の理をしる時はにの字にも限らずとしるべし。されども、此の句は第三の樣也と、百句の中におくとも撰び出す程に第三の樣をしらぬ時は、やはり定めたる留然るべし。

▲こはにの字ての字に限らぬ理を知りて、自在を得よとの敎へ也。我れは第三の作り樣を知らざれば、定めたる留にて濟ますとな思ひぞ、假令て留にても第三體ならぬ句は、必らず付くまじき事也。僣近世かく作らでは第三留まらずと、句を難ずる人あり。大いなるひが言也。留字と云ふは、句の終りにおく字と云ふ事ぞ。作意は必らず留まらぬ樣にかまへて作る事ぞかし。世に匂字留に傳授ありとて、或ひは初櫻、時鳥など、或ひは押字抱字のさたある事は、しらぬ人の推量也。

▲こは古式の評也。體言にて留むるを其の頃匂字留と言ひ習はせたり。古說に句、脇、假名留(てにはの事)の時は、第三匂字留にすと云ふ事あるを、そは古式もよくしらぬ人の推量也と、評せられし事にて、其の故は、

連歌衆載獨吟

月ならじ霞の匂ふよはの空

雲路に更くる春の雁が音

長閑なる波を枕の泊り舟

俳諧紅梅千句

さほ姫のそだつや花の窓の内

雛を愛する軒の鶯
春の末天下に名ある時鳥

昔しの連誹だにかゝれば、まして我家の俳諧には、辭留、體言留。何句續いても、其の誡めはなく、只其の座の趣きに任せて、何留もせよとの事也。さるに近頃其の昔しの浮説を引き出で、句、脇、辭留の時は、第三必らず體字留と定め、又其の字留せむには、上五字の終りにての字にの字を入れ轉倒し、て留に留となる心にせよと云へり、片腹いたし。終りを體言にて結びたる句の、轉倒する謂はれはあるまじ。

「蝉もまだ定らぬ啼所」。何れの時か我れも此の第三ありしを、一座を禁じて他聞を許さず、ほ句と平句との境は、此の第三の匂字にてもしるべし、されど、尋常の留にて事欠ぐまじき事也。

▲第三に限らず。て留。に留の句は、前後へ詞係りて付よき物也。されば尋常の留と心得、異なる留は其の座の趣きによりて用ふべき事にこそ。

（本書）　辛さきの松は花より朧にて

此のほ句の落着をしる時は、ほ句と第三と平句との差別をしる也。ほ句は一句の中に曲節といふ事あり。此のほ句に、花は曲にして松の朧とは節也。

▲からさきの松の朧を詠ぜむとて、比良の花をもて一句を化粧うたる所、最も曲中の曲也。

第三　辛崎の松は春の夜朧にて

是は第三の様也。此の句花の一字を抜きたれば、ほ句より輕く、松の朧に節有りて、平句より重き所をしるべし。

▲月夜の松かげの茂きを、朧と見たる所節也。

平句　からさきの松を春の夜見渡して

是は只春のけしきのみなれば、曲もなく節もなく、地の平句也。

▲平句とは平生體なる地の句と云ふ事にて、趣向の雅俗に拘はらず。只有りの儘なるをいへり。

譬へば佛の光明と云ふは、有りの儘なれば平句也。杓子の雫と云ふ事を、杓子の泪と作るは文也節也。一つ作意なれば、第三の位をもつ也。(東西)第三の姿をしる時は、いの字ろの字にても第三は留まる也。増して匂字留はいふにも及ぶまじ(上下略)。
(北枝考)第三は一作有りて長高く仕たつべし。付肌も随分よく付添ふるこそいみじけれ。て留、に留、らむ留など多くする事は、只終りの留らざるやうにして、おのづから四句目の付出る様にせむ爲め也。字留、もなし留にても、留浮きて四句目を呼出す意あらば、何留にても然るべし。(約文)
▲今第三を節に作る法を手近にいふ事、凡そ大わり二通。小割八通り也。かく名目を立つるは、得易からしめむ爲め也。
○見立の作△見立△天然自己△自己天然△たち入
○不用の作△上五言△上中五七△中七言△下五言

凡そ此等の法もて作る時は、一節付けて句品平句に異なる也。古き物に、何留は何辭をいづこに遣ふ、又すみの辭などいふ事あるは　古式を寫し傳へたる書也。蕉門には「節作と。「次へ及ぼすと、二條の外に教へなし。や、らむ、もなし、けり。活字何留にても、打合せある事は第三平句に限らず。詞に述ぶる物皆しかり。我家には辭の係結をもて第三とせず。留の文字に拘はらず。一作ある物を社第三とすなれ。其の中て留、に留は正格、其の餘の留は時に臨みて變格の曲節也。爰にいふ八名の中。△見立と云ふ名は、細かにいはゞ此の中に數體あれども、多名は煩はしからむと、見立として集めたれば、證句を考へて自知せよ。「は平句に作り直したる印也。

△見　立。

拾　様々の魚の心も年くれて　翁

「――浮世の中――

といふべきを、脇の浦の鹽燒に對して、魚に比したる所節也。

一　駕舁も新酒の里を過ぎかねて　翁

「――をみれば――

酒屋といふべきを名所の如く作りたる所作意也。

笈　七夕の八日は物のさびしくて　同

「――を片付けて

○

發明辨　數の子の水あたゝかに溫み來て　許六

五老曰く「――を漬けたる水の――などするは十人が十人也。漬の字を拔きて幽言に成りけれども、世間此の味をしらず。同じ事と思ひつる社口をしけれと云へり。

宇陀　下馱の齒に一筋黑く解け初めて　同

五老曰く。第三のふりを付くべき爲め、雪の字を拔きける也。此の第三の骨折は黑の字にて、是字眼也と云へり。

「――の跡から雪の――　と云はゞ地也。

○

古今　藪入の子に大名の萩さきて　支考

「――は――も見て

大名の萩庭を見る行儀して、故鄕の庭なつかしく臨みたる、衣服容體さながら土民の子とも覺えず。此の賤が屋も、猶大名の下屋敷にやと、怪みたる樣に位を付たり。

同　藪入の子に隣りから萩咲いて　同

「――もちの來て

隣のばゝの持來る重の內覗きて、彼の御所詞にて、萩の花を御念もじといひけむ、餅とする時は地也。節とは竹の節のごとく、作に一段付けて取締りたるをいへり。

西花　此秋を良暹法師こまられて　同

「…………………………歌よみて
いづこも同じと秋を淋しがりけるを、困りたりとは興ある見立也。

西花　夕顔の小家も今は盡に成りて　支考
「――をこゝに見渡して

同　笠きたと笠きぬ人の連立ちて　同
「たび人と所の――

同　やれ客と座敷の子供掃出して　同
「――追――

越　俳諧は連歌の戸口付けかへて　同
「――式にことなりて

市海　百姓をきらふ子供の朝ねして　やは
「我儘にさする――

小弓　夜松魚に小判切らする人ありて　無倫
「――つひやす――

白扇　山里はこんにやく黒く雪解けて　北枝
「――所まだらに――

桃盗　師走には目鼻もつかず物言うて　牧童
「――あと先もなく――

東山　行列はむかでの足の長閑にて　立和
「――の引きつゞく足――

同　薄知な顔にあぶなく辭儀をして　風口
「――手輕く――

七さみ　洟をかむ時はゑぼしに氣を付て　之仲
「――片へにふり向きて

汐　商人の袴を着ても尾の見えて　既白
「――似氣なくて

ツクモ　唐おりも今の紙衣と見破りて　六枳
「――脱ぎかへて

東花　假茨のみ籠に小袖のこぼれゐて　萬戸
「――のぞき――

同　化けたぞと息子の淨衣着歩行て　不關
「踊らむと――

シヽ　春の日の山は湯のしの艶見えて　知角

「――――うるはしき――――
シヽ　入月と出る日と山に辭儀をして　山りん
「――――向合うて
かも　旅籠屋も直ぎらぬ膳に銚置きて　正住
「――――念入れて
三匹　町並のこゝも一軒齒の抜けて　乙由
「――――明いてゐて
山こと　茸狩の腹は行燈蹴破りて　沓由
「――すつきりへり切りて
やわ　此方(こちら)からあちらへ橋の長閑にて　秋の坊
「――見渡す――
歌　徳利を腹の火燵にあたゝめて　左角
「――中にて――
長良　藪入の馳走に襷懸けさせて　里紅
「――只手――
桃　小笠原ちと覺ゆれば漬かみて　三草
「――――媚みせて

桃　村雨の空を鏡にとぎぬきて　歸的
「――――淸らかに打ちはれて
同　踊子の物くふ時も輪に成りて　龜町
「――――並びゐて
三物　團扇賣昔しの京を笠に着て　有栞
「――ならの京より出でゝ來て
同　金の生るみかむの梢冬待ちて　沓及
「黄ばみつく――――近し
同　小荷駄より鹿は重荷の戀をして　幾彈
「馬よりも――せつなき――
同　高木屋の御製に白い飯くひて　宇雀
「――――竈　賑はひて
同　染めがらも松に霞の上着きて　固秋
「みどりなる――――棚　引きて
滑　千金の春を將木の歩にかへて　立和
「――――にさし入れて
同　豆ふやの門を朧に出代りて　李里

「————内から宵————
○
小文　馬時の過ぎてさびしき牧の野に　翁
「——は皆とられし跡の——さびて
枯　行燈の外よりしらむ海山に　丈草
「　消ゆる後からよの明けて
新百　鈴懸けて出たれば馬の嬉しげに　支考
「————足早に
東六　春なりとてにはをかへて暖かに　湫喧
「——と名の移りかはれば——
○
足鼎也　千金も持たで一句の首途也　己蛙
「身がるさの旅は——
あららむ　藤袴誰が窕屈にめでつらむ　翁
○
「————行儀なる名を付けて
拾　ゆく翅いく度あみの借からむ　曾英

「————を恐る——
春と秋　掃寄せて消ゆる雪をや閉ふらむ　路通
「降布ける雪を片へに掃寄せて
鎌　半蔀は殿のよけいの花ならむ　千梅
「———外もの體なして
小弓　錢金と中を遠はゞ隙ならむ　東推
「——のなき身は常に——
○
冬用言　花蘇馬骨の霜に咲きかへり　卜國
「——肥————
白扇　船頭の酒に餘寒のさたもなし。　浪化
「————を忘れけり
其鑑　雲雀なく空には青い底もなし◦　始流
「————青々と打ちはれて
越　古へはあみ笠きたる人もなし◦　温古
「——の人は形ふりことなりて
同　此松に三日月さえる枝もなし。　竹堂

「――面白からぬ――――

(三部書)にもなし留は、ほ句は譬へば馬に角もなしと、眞に申すを、ほ句のもなし也。第三は牛に角もなしと轉じたる心にて、第三のもなし也。

(雁木傳)ほ句のもなしは虚に作る、譬へば牛に角もなしといふごとく、第三のもなしは實に作る、譬へば馬に角もなしと云ふごとし。

▲兩書共に翁の傳書とあれど古傳也。三部と雁木とには此の外にもうらうへの事あり。蕉門にはさる偏固の論なき事、證句に虚實の印を入れたるを見よ、又もなしを古來辭と心得たれど、此等のもなしは用言也。

ひさ　觜太のわやくに鳴きし春の空　珍碩
體言

「――聲高になく――

△天然に作るべきを、自己にして作意を付たる例。

拾　年の貧俵負ひゆく眺めして　翁

「――暮――――人ありて

貧究人の目には、門過ぐる米俵も月花の眺めに勝りたらむと、自己の意を持せたる所節也。

ひな　門ばんの寢顏にかすむ月を見て

「――ねむがる春の有明けて

焦　鶯を三間鎗に追出して　玉芙

「―の――――それ行きて

三笑　村雲に月のきげむを取りかねて　伯兎

「――光りをさへられて

東花　餅かく飛脚は飯に起されて　斜嶺

「飯かしぐ隙に飛脚の眠りゐて

東六　萎俄寒さを鳴きに來て　支考

「――に――出して

夏衣　ちる時は尾花に秋も誘はれて　同

ちりてゆく――も―に――

笠　雛の後出ぬ德利に門見せて　同

「――――をさげ出でゝ

越　輕薄の二字を親より賜はりて　支考
「――な詞遣の――に　似　て
同　橋守も此行く秋をとめかねて　岳亭
「――――――――――をしむらむ
星月　春のゆく跡いなさじと閑居ゐて　治天
「――空せき守の惜むらむ
八夕　細いにはあかずと月の空に消えて　宇中
「三日月の明る間もなく――
曰こと　秋風に野中の家をなぶられて　是通
「――の――――吹居ゐて
ふり　あの山の朧を見よと月出でゝ　村女
「――――ながらに――
渡鳥　よい宿をさがせば庭に萩咲いて　卯七
「――の内には――
秋風　彈捨てた栞りに給仕を廻らせて　杜菱
「――――を――の廻り來て
名筐　暮れかゝる日を夕月の待兼ねて　安紫

「――――――に――――さし出でゝ
梅別　雲あらば我れもと雀囀りて　范フ
「ひばりなく空に――の――
渭　やぶ入の迎へに馬も髮結うて　履端
「――――――――を引行きて
三物　乙鳥の巢を鶯に卑められて　杉夫
「――は――のすに超えて
○
同に　青壘ありく日あしも嬉しげに　巴靜
「――うつる――――麗かに
○
たそらむ　ひちりきの穴より秋は通ふらむ　收童
「――――身に入むばかり秋更けて
思。亭　鹿の角雛のほろゝに落ちぬらむ　烏橋
「――――なく時――――
○
翁けり　升落待たぬに月は出でにけり　翁

「――かゝらぬうちに月出でゝ

○

冬用言　樫檜山家の體を木のはふる　重五

「――ちるに山家の體みえて

卯衣　つゞりむし靜に見れば動出し　牧童

「――――見てゐる中に――

△自己(じこ)に作るべきを天然にして作意(さくい)を付けたる例。

蔦松　蔦のはは茶をのむ人を慰めて　翁

珍碩(ちんせき)はいかにきくと問ひけるに、花紅葉ならば酒をこそのむべけれと答へければ、己れも皮骨(ひこつ)を得たりと翁申されし。

「――――を――――の―みて

といはゞ地也。

壬　一番鶴(ひとつがひ)の來てねる松ふりて　同

「年をふる松に番の鶴のゐて

後旅　一とせの仕事は麥にをさまりて　同

「――――を――切上げて

花故　日面に笠を並ぶる涼みして　翁

「――――脱置き――ゐて

奥　夕食くふ賤が外面に月出でゝ　同

「夕月のかげに伏屋は飯くひて

衛　松をぬく力に君が子の日して　越人

「君が代は子の日の遊び松引きて

サル　股引の朝からぬるゝ川越えて　凡兆

「――をかゝげもあへず――――

雪丸　黒鳥の飛びゆく庵の窓明けて　不玉

「庵の窓明くると鳥ゝ飛行きて

タコ　羽箒の風やむ後に軸卷きて　梢風

「――に埃を拂ふ――――

ひさ　引捨てし車は枇杷の片方にて　や水

「乘る車びはの片へに引捨てゝ

冬園　御車の暫らくとまる雪かきて　安信

「――を雪掻の間は止められて

ヒナ　砂川にしたす羽釜のかたむきて　青山

「――を――けて

渡鳥　膝皿の冷ゆる机を押しやりて　支考

「――れば机――

古今　やぶ入の馳走に門の萩咲いて　同

「――みせて

東西　渡舟堤に見ゆる人待ちて　同

「―守――

雑　傘をかりて返さぬ雪はれて　溪石

「―かると間もなく――

東花　家根茨のみの脱捨つる雨はれて　蘆江

「――雨がはるゝとみの脱ぎて

同　素咄のはては欠伸に夜の更けて　瓢銀

「―に夜の更行けば欠伸して

夏衣　出迎へのぬり樽一荷袴着て　鶴古

「――持せ――

渭　花にゆく名主は髭の雪消えて　之仲

「――白き髭剃りて

三物　そばのこは信濃の雲をあてにして　若椎

「――を――方に待ちわびて

同　早速の狂歌に樽も轉び出でゝ　玄鼓

「――酒を持――

同　明けかゝる月も曲輪は夜中にて　仙枝

「有明もしらず――に浮れゐて

同　帷子の下に袷の秋は來て　嵐青

「――に袷重ぬる――の――

文星　曙は野山の春に譽められて　董平

「野も山も春の曙――

○

このはけり　ときの聲どつと山風吹きにけり　許六

「――嵐に紛れ――

○

こせむらむ　踊る音さびしき秋の數ならむ　北枝

「物さふる秋に踊の音聞いて

八鳥　菅笠の中よりも夜や白むらむ　文州
「―――明の空を見て
○
同み　浦長に野守に杖の道弘みや　は
「―――は小道の草を刈らせけり
○
句兄體言　荷の後に一人づゝ負ふ汐干潟　介我
「―――も人も負はせて送る―――
△古語裁入並文法もて作りたる例。
十七　ひら〳〵と蹄に蝶の雪ふりて　翁
踏レ花馬蹄香と云ふ詩を、雪ふりてと奪胎換骨したり。殊に蝶をもて花を隱見したる所妙也。
雑　富貴には浮べる雲の月を見て　素然
不義而富且貴。於レ我如二浮雲一。と云ふを自他したり。
白扇　自剃りする鏡に秋を憐れみて　支考
離知明鏡裡。形影自相憐と云ふを摸寫したり。

西花　鶉にも何にもならぬ戀をして　支考
古今。「野とならば鶉となりて年はへむかりにだにやは君は來ざらむ」と云ふを反轉したり。
焦　藪入は天の羽衣稀に着て　周東
君が代は天の羽衣稀に來てと云ふ歌を摘みたり
三物　天つ風雲も薄着の夏待ちて　羅草
天つ風雲の通路のひゞきを借りたり。
續新　誰れやらが霞とけさを旅立ちて　首小
都をば霞と共に出でしかどと云ふ歌を含みたり。
雑　銚子とる花も紅葉もなかりけり　一船
浦の苫家の秋の夕ぐれと云ふ歌を採りたり。
深　山雀の笠にぬふべき草もなし。　嵐蘭
鶯にはぬふてふ梅の花笠とよめるに、山雀には笠にぬふ草もなしと、設難したる所作意也。
西花　むら雨の笠きて渡る鳥もなし。　支考
笠きぬ物を笠きずと、無を無に作りて節を付たり。
同歌の摸寫變態なれども作異也。

本書　蟬もまだ定まらぬ鳴き處　同

詩經七月の隱見也。蟋蟀といふべきを、蟬ものもの字に隱して見はしたり「鈴むしもといはゞ平句ならむ。

柿　柿の木にしぶ〱宿を假枕　凉ト

柿崎にしぶ〱宿をといふ親鸞上人の歌を摘みたり。

東山　さぞ虱はる〲着ぬる旅衣　推之

から衣きつゝ馴れにしと云ふうたをとりたり。

○

(古今五)鳴くからに轡も鈴も松むしも　支考

是を錯綜轉倒の法といひ、論ずる時は第三のに留也。又蟋蟀の法ともいふべきや、轡も鈴も松蟲もと言うて結語に蟲の一字を顯はす。其の法は詩經にあり。爰にいはむ、文法も句格も强ひて新奇を好むにはあらで、其の何其の字の用無用なれば、尋ねて學ぶべきは法格の用にして、學んで恐るべきは句作の無用ならむ(文約)

▲文法句格もて作る句は皆第三體也。已上の中にも其の作例多かれども、文法といはゞ初心は難き事と思ふらむと、別目を立てず混じ置きたり。第三ならでも卷中節の句多きは手柄なれば、勤めて作の無用を省くべき事になむ。

△上五言に不用の用語を入れたる例。

不用の用と云ふは、前句に强ひて入用ならねども、一句の上に最も有用の言にて、此の詞ある時は一句高調に聞ゆる作をいふ也。前句にも一句の上にも無用の語にはあらず。

宇陀　陽炎に野飼の牛の杭ぬけて　翁

許六曰く。若草に陽炎もゆる頃は、牛の勢ひ强しと云へり。

かしま　月幾日海なき國に旅ねして　同

翁　鶯の宿は東に戶を明けて　同

つばめ　月よしと角力に袴脱捨てゝ　同

深　衣うつ斧は馬の寒がりて　翁
雑　たつ年の頭をそれば酒つけて　其角
一　朝顔に先だつ母衣を引ぱりて　卜國
東六　菊の香に十里流るゝ川越えて　亢川
小弓　京へゆく水苗代にせき止めて　東鷲
三物　松風の庭に疊を干立てゝ　一空
渭　白雲の近よる夏に薄着して　遊吟
三顔　習はねど假御所の笛聞馴れて　蘆元

○

東花　雁の聲江湖の僧のちり〴〵に　波音

○

西花　盃に老の泪をこぼすらむ　支考
あら　夕がすみ染物取りてかへるらむ　冬文

○

十七　春がすみたつ子いざる子うき物を　紹蓮
文
六行　はえ麥のこゝら求むる人もがな　やは

○

拾　萱茨の僅かなちりを掃きもせで　閑水
サル　雪雀なく小田に土もつ頃なれや　珍碩
八鳥　霞みゆく沖はたゞ帆の――　葵十

(テニハ抄)なれやはなればやのはを省きし詞なれば、ヂャニョッテ何々がといふ心也。又下に打合の詞を省きしは、ヂャヤラといふ心ともなる、留に用ひたるは大方ヂャヤラの心也といへり。

越　三盃に野中の松の面白や　支考

前のやは疑(うたがひ)此のやは歎(なげき)也。此の句見立。自己天然不用の三をかねたれば、何部へ入れてもよし。此の類證(るゐしよう)の中に多し。

東花　行水にいざよひの闇の間もなし　指さん
八鳥　三日月にゆづりの鍬の隙もなし　文十
同　朧月直にかすめば山もなし　晩翠
桃白　行く秋を庭に定むる石の色　千川
雑　北にふす枯野の松の旭かげ　彫棠

爪　日本にも高麗縁の簟　倚北
ふり　鐵砲につけて先祖の物語　卷耳
翁　晝時分赤うつゝじの花盛り　りほ

△上中五七言

杜　此君と名をいふ竹の露落ちて　翁
其俗　霧の外の鐘を隔つる松こみて　露沾
ひさ　たび人の虱かきゆく春くれて　曲翠
草刈　蕗のたう取りにゆく程雪ふりて　支考
西花　扣かせて置けば水鷄のいつも來て　同
ロタラ　紫の火燵ふとんに彌生來て　同
シヽ　狀ちんもいらぬ便宜の雁鳴きて　蓮二
東花　かへ取りのせごし鱠に月を見て　一伴
山中　みそならば一石ばかり土こねて　蘆本
やわ　暇乞なしに乙鳥の往きはてゝ　夕市
花摘　乙鳥のすをたつ日より稻刈りて　幽也
三物　唐畫見る樣に市日の牛連れて　蘆錐
竹秋　行燈の出ぬ間は月もいざよひて　左候

柿　殿樣の儘にもならぬ鹿鳴いて　萬り

○

同　土ばしの崩れて鴫やさわぐらむ　南利
東花　菱川が畫に我戀とかこつらむ　反朱

○

翁　一度にはねもせで蝶の眠りけり　乙州

○

東山　一度はひかろと雲に卅日月　木因

此等凡そ下五もじにて前へ付たり。上中に不用の用語を入るゝは、序歌に等し。あし引の山鳥の尾のと云ふ中に、長き夜を獨りねわびたる樣の見ゆるがごとし。必らずあしく心得違うて、たらぬ詞を埋むる樣なる作をなす事なかれ。

△中七言

雪丸　さらし水踊に急ぐ布搗いて　翁
深　宵の月よくねる客に宿かして　同
サガ　蝸牛頬もしげなき角ふりて　去來

西花　たび人も一歩が錢に草臥れて　支考
小文　狸座敷山を後に春くれて　山店
歌　かる時は植うる時より田にぬれて　乙由
渭　一つ家は夏を隣りに布おりて　兎川
三物　よの中は籾臼のうたの長閑にて　二川
藤　君がよは草もちの臼に和らぎて　六芝

○

櫻山　烏賊鱠春の物とて白妙に　り由

○

句兄　糸ざくら邪魔になる迄戰ぐらむ　山蜂
八鳥　簟好き玉に吸はするちりもなし　行雨

○

足昇　寢る時も旅の錦と麻衣　何聲

△下五言

一　清水出る溝の小草に秋立ちて　翁
俳　初月のかげ長檠にたゝかひて　尙白
百鳥　長刀にお供の笠の霞み來て　支考

西花　天窓はるまねに座頭のにつとして　支考
三物　蜻蛉の名は樣々に茜着て　左把
同　とろゝかと糊する音に月を見て　九候
東化　小僧迄馳走の上に寢轉びて　露川
同　井戸掘に酒のますれば笠脱ぎて　鼠彈
桃　献立も潮煮なれば月すみて　山りん

○

蓬　田螺わる賤が晝のあたゝかに　桐葉
花故　入足の天窓算ふる。春風に　去來
射　道連の日に〳〵かはる。朝露に　同
八鳥　目代の屋敷地高き。薄月に　吹我
さる　新疊敷きならしたる。月かげに　や水

(サビ栞)に留は、月かげに敷並べたる新疊。と云ふ心に倒句に作る也。
▲是甚だ非也。に留には轉倒も言流しもあり。此の五は皆言流しなるぞ。又下中上と反る事は常談にも亦文道にもきはめてなき事也。凡そ倒

句は、上五か中七かの終りに、絶止言を入るゝ物也。譬へば「新疊敷きならしたり。月かげにと云ふ時は、月かげに新疊敷きならしたりと反り。「敷きにけり。新らしき菰月かげにと云ふ時は、月かげに新らしき菰敷きにけりと反る也。此の五例にあるのるき等のごとく、體言に續く辭あるものは、決して轉倒することなし。

雪白　魁けて母衣武者一騎霞むらむ　吳天

○

三物　綿帽子に被に笠に百千鳥　吾仲
十七　鮒鱠土もつ隙の七兵衛　瓢水

□哉留ほ句の第三にて留不ㇾ苦

(宇陀)哉留のほ句に、第三にて留せぬ事と人々知り侍れど、折節は見えたり。流哉野澤哉是治定の哉也。にてに通ふ故にあしく、「たぐひ哉などゝいふ見立ほ句に、疑ふ心の哉多し。聞分けてにて留あるべし。

▲こは秘書要訣の意也。昔しより哉に色々の名目を分けたれども、哉と云ふは皆歎辭にて、用言より續くと、體言より續くと二條也。爰に云ふ治定と云ふも、疑と云ふも、皆體つゞきの哉にて差別はなし。又にては上の事を下へ言送る辭なれば、哉とは活樣雲泥にて、更に意の通ふ故なし。要訣は翁のさたならぬ事、左に擧ぐる彼の治定と言留はしたる哉の證句にて明か也。

　木の下は汁も鱠もさくら哉　翁
みの　明日來る人は悔しがる春　風麥
　蝶蜂を愛する程の情にて　良品

翁　其夢の枯野を廻る月日哉　沾圃
　心ほとゞに時雨聞きわく　素堂
　荷の間は人の顏なる高せにて　沾德

　月も咲く日もさく菊の山路哉　司鱸
三千　扇にくめば酒もしら露　蓮二

「才六は寶の市も手ぶりにて　夏嘯

□三物（みつもの）

(金言)丈草曰く。歳旦（さいたん）の祝詞（しゆくし）に、古へより三物と
いへる事あり。三才和合（さんさいわがふ）する心也。

▲三物（みつもの）の說、古來より多き中に此の說いと穩か
にてよし。

(ヘンツキ)尋常百句の、口三句引出でたる類にて
は、歳旦三物（さいたんみつもの）の手柄なし。たとへば、小車のきび
しく廻るがごとし。只三句に百句千句の活（くわつ）をこむ
る也(約文)

▲見立、趣向、句作等珍（めづら）しく力を入れよといふ
事也。世に言ひ古しゝ物を取合（とりあは）せては、只三句
にて場をとる詮（せん）なし、昔しより人皆の三物（みつもの）とて
調ぶれども、誠の三物に成りたるはいと稀れな
れば、密に學ぶべき事也。

「ぬけば露の玉ちる太刀の一葉切　長忠

一　放つ矢の根に強き秋風　定就
冷まじき石はさながら虎に似て　翁

こは延寶（えんはう）の吟也。翁曾（かつ）て三物の格（かく）を立て給ひたる
事を、しらしめむと爰に出す。

其不二や五月晦日二里の旅　素堂
翁　茄さゝげも己が色しる　露沾
鷹の子の雲雀に爪の堅まりて　翁

○

このは
元祿七
五組

春立つや齒朶に止まる神矢の根　許六
百囀りの中に鷊　木導
斜日に牛の田鞍のかげろひて　朱廸
大釜の水のむ童やきそ始め　り由
かみ米配る六尺の部屋　六
本賣が眞田に蝶や眠るらむ　黄逸
傳致の京の一字や筆始め　同
さゝ波ぬるむ辨才天鯉　廸
平城の苑に遠の花見えて　由

初空や大心なる不二の鷹　廸
車のふりを飾る門松　徐寅
完領おふ賤が蝶みのあたゝかに　六
大福の茶は越前の始め也　寅
紅花荷に頼む年頭の文　逸
三月に關の足輕置きかへて　導

翁曰く。彦根の五つ物勢ひにのつとり、世上の人を踏潰すべき勇體、あつぱれ風雅の武士の手わざ也（略文）

ヘンツキ
偖の字に聲なきもよし國の春　由

元祿十三の内
子からくり出す正月の時　廸
百合若の跟の道も雪消えて　六

○

新山
しばしとや早苗より見る寺の門　其角
しのぶ爭ふ鳶尾の下葵　文りん

大原三吟第三
宗長の名をはく峰の月晴れて　キ風
凉寢は木の間の星の光り哉　同
水札の羽香をぬらす山水　角
柴人に言とふ宗祇何やらむ　りん
菅菖蒲哀れにけさの螢かな　同
驛の蚊遣り杉菜うる聲　風
櫻井が枕を我れにたびねして　角

山こと餞別
僧都でもないに按山子の歸洛哉　見龍
錦也けり柿の葉衣　凉ト

俊寛
さても此あみ戸に月を高ぶりて　舍北
芋のはの親には告げよ越の月　ト
きれいな空に初雁はまだ　北

康頼
白露の玉の芙蓉を手に居ゑて　龍
旅寢にも蘭の袴や茶筌髮　北
今宵の月に扇酒もり　龍

成經
小槌から新米二俵打出して　ト

（ミノムシ）草畫松の圖あり。（文通上略）
あらかねの土俵や御代の初角力　梅裡
樂屋は花に鳥にあゆ桶　里紅

山の井の昔しの霞汲みながら
此の第三の判は、百人の中にて五三人もしる人可有之哉。貴樣御選者に候へば、御聞きの程重ねて可被仰下候。幾度も問對仕るべし。

十月二十一日　　　見龍

童平樣

▲脇を能樂屋の宴と見立、謠の文句をたち入れたり。をこがましき此の文通、童平いかゞ答へけむ。

□六句表

冬
フ　いかに見よと面難し牛をうつ霰　　雨笠
同　樽火にあぶる枯原の松　　ヵ兮
ア　木賊刈下着に髮を茶筌して　　重五
同　檜笠に宮をやつす朝露　　ト國
○　白かねに蛤かはむ月の海　　翁
　　左にはしをすかす岐阜山や　　水

此れ表に地名を出したる始め也。例は三千化滑江話に多し。

□本式十句表

（ウヤムヤ）表十句は十百句の大數にして、表に世にあらゆる事を嫌はず、但し神祇のほ句に神祇の脇、釋、述懷、戀等のほ句も右に同じ。常のほ句には第三に神祇、月に戀、花に釋等を時の宜きに見合はせつゞるべし。

フ　松杉にすくひ上げたる霙かな　　去來
同　かね面白う冱ゆるたそがれ　　許六
神コ　只管にねばる誓ひの丁子風爐　　翁
　　長い羽おりも四五年の内　　そら
○　吹きはれて後は跡の月丸く　　千那
ア　橋迄押してのぼる初汐　　來
同　いわし網ほす場を鳶の離れかね　　六
　　あみ笠奥にいるは何故　　翁

神△　神明の花に願ひを開かせて　ら
ハ　天高けれど地にもたんぽゝ　那

▲常の本式の表は、名所一つ出す習ひなるを、こは表物の仕立なる故に、卷中に景物を約めたるのみならず。附方に曲節を盡したり。

三千△　今日や思へば花も涙の日　木因
花鳥ハ　其鳥も其雲に追々　獨
同　大津繪の藤は又兵衞が笠にきて
ナ　起きてあたりの山ほとゝぎす
同　手拭に南天白く咲きこぼれ
　　によろりと長い脊でちやぼ好
○　一いびき覺めて紙燭に菊と月
隱名ア　菓子は平砂に聲落つる也
同尺同　極樂の秋句はせて蓮二房
同　四十雀より五十歌仙を

都て三物表物等は、曲節自在に、毎篇花やかなるべし。假令神、釋、戀、名所等を出すとも、付肌の曲節なくては、常の裡を見るごとくにて、表物とは號けがたからむ。又景物一句なくとも、其の活あらば慥かに表物ならむ。行者頂門上に一隻眼を開きて、必らず俳諧の紅粉に欺かれず。祖々の骨髓を透得すべき事になむ。

△八句表。

(西花)此の表に神祇あり、釋敎あり。戀無常を撰ばず。名所をいひ人名をいふ事は、一卷の始終を爰に約むといふ心なるべし。

▲上の、冬の日松杉の表等を據とせしは、八句表のはじめ也。是を表合と云ふは、百句の配りを表に合すといふ心也。元より表なれば、「月一つ出す定めなれども、「月と花と出したるもあり。勿論變格物なれば、花第三已下に出してもよし。但し月花ともに八句内にはせず。又「他季ほ句にて、異なる他季の月出す秋季なきもあり。「春か秋か一季五句續きたるも「三季にて八

句季詰なるも有りて、千變萬化也。多例、西花集・東花集に出たり。

西花ア　桐のはの後先におく扇かな　檻栞
〇　酒にねころぶ宵の間の月　洞翠
コア　若衆もはやらぬ城下秋くれて　支考
　ことしの稲も風に吹かるゝ　野風
　砂川に取弘げたる日の光り　路角
　藥師の奉加たび人につく　雲鈴
尺　△　まん頭も名所と成りて花の春　成也
ハ　雁鳴歸る殘雪の山水流

(タビネ)許六のいへる所も一理あり。(三物ノコト)去秋支考此の津にたびねして、卯七と表合あり。我れに語りて曰く。凡そ表合等の俳諧は、尋常の歌仙百句とかはるべし。表の内に一卷の姿をこめて、去嫌ひ强ちに用ふまじき事也といへり。一段面白かるべしと答へぬ。二子の(支許)先師に兼て聞き置ける事にや、又古來の法式にや、二子の發明譜に合うたるにやと退いて思ふに、古法師傳によらば論に及ばず。若し一己の見解にあらばいかゞ侍らむ只一時の風流にはさもあるべし。法式と立てむは煩はしかるべし。先師折々古法を破り新式を定め給ふ事は、制を省き事を弘めて、句に秀逸多からむ事を計り給ふ也。常に門人に語り給へば聞置きたる人もあらむ。然れども古實を踏まへず妄りに破り給ふ事なし。今二子のごとく、法を定めむは三物に一つ理窟添へて、却つて後人の害ならむか、深く先師の旨を察し知らるべき事也。

▲去來此の論を書きしは元祿十二の春にて、上木せしは八十一年後安永七也。其の間寫卷にてあるうち、此の一段はさかしら人の己が邪見もて去來の原文を書直しける物ならむ。芭蕉談(下十七)にもさる事あるを、七部婆心録七に論ひたり。誠の去來ならば、前に擧げたる延寶已來の三物、冬の日の表等を知らざる事もなく、殊に松杉の

表は自分立句なれば。「二子先師に兼て聞き置けるにやとも、「古法師傳によらばともいはれず。又ウャムャの關は、己が門人の撰なれば、其の文も去來の傳也。我れきく去來は篤實の士、殊に二子とは莫逆の中。何ぞ婦女子の妬心もて大道を僞らむ。抑も三物、表物の事は、許六、支考の發明ならず。翁の授記を弘めたるを、旅寐論にかゝる浮説を交へたる故に、蕉門の俳士皆此の法格を捨て過ぎにしは無念の事也。こは只見渡しを飾るといふのみならず。常に三物、表物の稽古する時は、見立、趣向、句作の三法に力を得る事、百勻歌仙よりも功多ければ、進んで名人の場に至らむと思はむ人は、專らに修すべき事になむ。

貞享式海印録一終

貞享式海印録二

曲齋述

□去嫌惣論

(本書)俳諧に指合の事は、凡そ嚏草の類に隨ふべし。少しづゝ新古の事あり。されども一座の了簡をもて、初心には隨分許すべし。

▲我家は禪俳の宗なれば、古法の去嫌を固とせずといふ心なれども、從容してかくいへり。此の故に古式に或ひは五去と云ふも、其の句其の句の出るに任せて五去にも二去にも、其の理ある物は越をも許されけり。「初心には隨分許せとあるをもて、古式に拘らざる故明か也。素より去嫌を必とせざれば、是と定まりたる掟なけれど、門人は其の席々の證を鑑とせし故に、人々各々の説きも同意の説きもあり。今則とせば、何去近

き物をとるべき事也。一句の好惡を先づ論じて、指合は後の僉義なるべし。指合とは餅の事也。去嫌とは象物の類也。指合、去嫌の用は、變化の爲め也と。先づ其の故をしるべし。

▲一句の好惡とは作の事ならず。前句を、見かへしか見かへざるかと骨髓の變を論ずる事也。よく前情を變ずる時は、猫の越に鼠と付けても意の運び雲泥にて輪廻しせざれば、生類の論は時に臨みて許し、又前句を其の儘に付くる時は、趣向は唐天竺に異なるとも、其の情通へば許すまじとぞ。指合とは字類の事、去嫌とは神、釋、戀、無常、名所、山川、衣食、生植等の摸樣を配る皮毛の變なり。此の故に「後の僉義と云へり。されば戀は二より五なれども、百句續きたるも、長句花短句鳥と並べたる變格もあり。如此は前句を見かふる骨髓の變ならで、摸樣の皮毛に何の變かあらむ。抑も宗匠の能といふは、翁の金言を述ぶるのみなるを、何ぞ出づる毎に、掟たる付肌の論には及ばず、己が涅覓の工夫よりなの花に行燈も、打越の浮名を立て、徒に句を返す宗匠もあるよし、祖師の冥見恥づべき事になむ。

▲連誹に去嫌を立てしは變化の爲めなれど、當門には前句を轉ずる妙法ある故に、強ひて古式に預らずと、其の理を勘破せよと也。つら〳〵惟みるに當門專用の式と云ふは、「春秋五去にて三より五に及び「夏冬二去にて一より三に至る。「花は折に一つ。「月は面に一つにて、五去と云ふ類の外は、凡て臨機應變のさた也。そは、いかなる物好の卷にも、此の法を破らざるをもてしるし。其の餘無神、無釋、無戀の卷もあり。生

植、名所類の多少ありて必とする事なきは、元
來俳諧は森羅萬象の變に任せて、法界の理を悟
らしむる道なれば、物に限りのなき理也。さら
ば月花のさたにも及ぶまじとの難あらめど、表
に風雅の標を立て、連俳の大概を習へば、其の表
式を破る故なし。其の意を破るは建門の意地な
れば、其の故を知りて加減すべき道理也。學者先
に此の意を得て、附心の風味を專らに修せよ。爰
に去嫌の部を分つ事は、直指門人の筆記と、其の
代の證句を考へ合せ、其の理一なる物を正格と
し、例稀れなる物を變格として末卷に出し。正
變ともに愚按を加へたり。取捨は諸君の手に信
せ、管見の過ちは博知の訂正を待ちはべる。

□表の事

(古今二)表に神、釋、戀、無常、名所、人名をも
嫌ふ事は、ほ句、脇、第三迄に一卷の精力を盡す
故に、已下の五句は勿論にて、初折は付處の安ら
かに、目立ち耳立たぬを法としるべし。

▲表に嫌ふといふは、物を忌み隔つる類ひには
あらず。只目立ち耳たつ物を表に惜しみて、裡
に派手を盡さむ爲め也。此の故に人名、軍事、
其の外古式に禁ずる物を許したる例多し。

(三冊子)表の内鬼女は成りがたし。龍、虎は苦し
からず。其の外殺、切、縛などの類は用捨すべし。
百句一所に過ぎずと師說也。

▲こは古式を翁に託して書きし物也。もし女の
字を嫌はゞ、娵、娘も亦男の字も嫌はむや、下
にひく證句を見よ、又地獄の鬼は尤けからめど
鬼は外、戀の鬼、鬼みそ、鬼がみ等の比物は平
生物也。眞龍をだに恐れざるに、何ぞ假鬼を防
ぐべけむ。

△表に惜しむ物。

神釋。無常。戀。遊里名。名所類。武將名。賤女

名。烈女名。仙人名。重病。重述懐。殺伐。軍。怪談。

△表に不レ惜物。

●官名、風流名、通名。輕軍事、城兵器。輕述懐、貧、聾、盲の類。輕病、醫藥。懐古、非ル二無常一夢、泪。非神、非釋、非戀の物藝類。旅、國かへ、京、舊都、田舍、大國名、無名の名所、舊跡、名物。雪隱、小便類。鬼、雷、龍、虎、狐、狸の怪物等也。

（句頭に三四五などあるは、何句目といふ印）

△官名、風流名、通名。

（三冊子）土芳曰く。古今の人名、表に出す事いかが侍らむ。師曰く今の人名は愼むべし。古人の名は物によりてくるしかるまじ。されども好みがたし。心嫌ふ也。

△「今の人名とは當時名高き人の噂也。但し古今に通ふ名はよし。「物によるとは、武將、烈女、仙名等の耳だつ物也。

桃　實ヲ時鳥まつ辨の粧ひ　兀峰
冬　三有明の主水に酒屋造らせて　荷兮
草刈　柴垣に掃部の介を呼入れて　萬子
桃　乗物に祖父の刑部も手を添へて　朗二
夕顔　西別當殿の古きふち米　翁
深　六築地長閑に典藥の駕　酒堂
新有　柴のあみ戸に大納言殿　盧庭
俳　初雷に將監がみの　木白
根　本九老いてだに侍從は老いを謙り　翁

○

八　夕ヲいづくも秋の橋に探幽　乃露
鶴　三雪村が柳見にゆく棹さして　キ風
句　西行の軍法咄しさよ更けて　住己

雪村西行い類は僧なれども、風流人の部に入れて釋とせず。

このは四　西鶴が畫の屁こき尻やく　良辰
ひ　さ五月かげに利休の家を鼻に懸け　正秀

東六雀なく竹の林の樂巨齋　浮水
冬六桃花を手をる貞德の富　正平
餅搗ヲ雪に馴れたる鶴の百助　乙孝
。庵野分三藤内に都の始末語らせて　桃圭
桃　柿の名に市兵衛殿はなぶられて　有己
八鳥四踊崩しに虎の介殿　酒堂
類　正宗ちやとてなめてをさむる　嵐雪
同五百臺に笠は嵐の仰衞門　虎琴
古拾六下男には與市其時　翁
　△非殺伐、軍城、兵器。(一句捨也)
たそ三此橋に砧きくべき城見えて　雨青
八夕軍配に冷りと風の秋立ちて　示弓
四幅夜軍に上戸は昔し手柄して　紀白
なむ軍兵はあなた次第と月を見て　過角
ひさ四はきも習はぬ太刀の引はだ　翁
春　よろひながしの火にあたる也り　風
句餞武者追詰めし早川の水　其角

誰　松風いさむ討の行列　才丸
一橋五年へたる軍治まる秋の月　同
其俳五いる月に薄化粧うたる武者一人　翁
冬　音もなき具足に月の薄々と　羽笠
　△輕述懷、並に老、親子、女、仙人。
沾圃亭四三弦提ぐる旅の乞食　翁
初茄　阿房な男置いてなぐさむ　蘆錐
小弓　牟眼々々と又ぬかしをる　カ兮
俳　ことしはわけて里のこり家　雪芝
東藤亭五侘びつゝも栗のいがたく細煙　桐葉
七さみ訪ふ人もあらばと侘びて月獨り　乙甫
梅十躍にはをしい事也よい男　泊楓
むつ六盲の腕にひゞく空打　仙化
山こと　馬士のあたまははられ損也　問次
夏衣　身代は只恙なく　慈竹
○
このは五女中旅間の後架に幕引いて　孟遠

八島　簾より女中の使披露して　風石
炭　祖父が手の火桶も落す斗り也　其角
一橋六　嫗すむ庵わくの糸くる　清風
ひさ　親子並んで月に物くふ　珍碩
門司硯　子は捨てゝおく秋の沙原　風壺
野坡読きの卷也。捨子表に出でたるは、外に見當らず。變格にや。
古拾　與作過つて仙境に入る　翁
獨廿歌仙五　仙人の明店あれて月ばかり　楊水

△輕病、醫藥。（七部及多例省）

ひな四　門違ひする醫者のそさうさ　昏良
射　藥ぎらひの一息にのむ　賀枝
同　胸のいたみのちつと薄らぐ　十丈
渡鳥　先の頭つうをすきと忘るゝ　卯七
みの　水の匂ひを煩ひにける　土芳
初茄　咳氣のあとの髭も其まゝ　り夕
卯辰　足の灸のいほひ返りし　魚素
歌　腹の病のてりふりをしる　和莚
俳五　食膓の腹を干しけり朝の月　コ風
雪光　一筋に心の深き寸の病　才木
山かた六　聟はよけれど病があるげな　野航

△懐古、非無常、夢、涙。

桃盜ヲ　河豚の異見に昔し覺える　柳士
蓬三　二百年我れ此山に斧取りて　東藤
初茄　豆ふやに都の名のみ殘されて　吳天
ふり四　こちの先祖は弓張の月　楓里
深五　古戰場月も靜かに澄渡り　嵐らん
誰六　古き代をしるぬりごめのふみ　嵐雪
やへ三　氣味のよき初夢結び窓明けて　重榮
印五　松風にひるねの夢のかい覺めぬ　觀生
次匂　夢に來ていびきを語る時鳥　其角
みの六　さるの涙か落つる椎の實　翁

△非神物。

文月ヲ　祭らぬ星も出て遊ぶ空　柳士

俳 三 暦よむ人なき里も安くゐて 半殘

かも 狩衣の折目もりんとしか張つて 東伯

さる 四 粢祝うて下されにけり 素男

ふり 十人ばかりゐぼし片よる 千歌

類 五 隼の祭見る間や岑の月 周東

山かた 嘘ついた罰にあたまの兀ぐる也 六之

天河 六 祈り過ぎたる雪の道中 コ秋

△非釋物並に鐘。

梅 十三 庵迄も寛の水の凍解けて 仲志

炭 雨上り數珠懸鳩の鳴出して コ屋

類 表具屋の數珠さら／＼に遣得て 朝叟

同 お腹とる尼に砧をとめられて 其角

續花 小坊主は傘の後に居眠りて 青俄

山こと 四 あたまはられに來たる小坊主 山之

花摘 官 檢按成の此頃の顏 角

深 公儀 坊主頭の先にたゝるゝ 笛水

藤 寛 若い世帯に伯母の說法 栗几

其 鑑 五 出ぬ杭もはづれぬ槌の奉加帳 東伯

十七 有付いて剃髮したる草の月 呑江

みかむ 八 床であたまをこそ／＼とそる 支考

俳 六 晝ねて遊ぶ盆の友達 翁

未來 四 山のあなたのかね聞ゆ也 同

白たら 五 晩鐘の暮れてもくれは月夜ぢやに 北枝

本朝 行燈も眠たう成りて後夜のかね 阿文

△非戀物並に藝。

みの 三 蝶蜂を愛する程の情にて 良品

茶 四 野良にわたす蓑かご 以之

山かた 野良上りの店の小間物 野航

あめこ 人走りよる辻の放下師 昌房

小文 五 木刀の音聞えたる居合拔 翁

俳 四五人で萬事を仕まふ能太夫 猿雖

同 六 扇の角を潰す舞まひ 風麥

△旅、國替、京、田舍、大國名、異國。

(星月日辯難)居士、日本、都、吾妻の類は皆惣名也。

俳　三旅の空園は茶をまく頃ならむ　房
越　四川一すぢにへだつ洛外　山之
歌　五京へ來て學文するはわたけ也　乙由
同　國かへに都詞の片山家　鷹仙
初茄　六田舍芝居の盆急ぐ也　燕雨

○

旭川　三獨活の香は越の白峰を後に見て　朝四
笈　五五畿内の旦那を廻る秋の月　蘆本
花摘　秤さへ關の東とかはる也　其角

○

星月　三朝鮮の詩に譽められし藤咲いて　千梅
三千　もろこしは時鳥迄春鳴いて　去來
類　四凡そ手にいる長安のちやぼ　沾洲
天河　炊も肌をぬがぬ唐船　洞也
四幅　六からの芙蓉は夏咲くとやら　佳木

△無名の名所、舊跡、名物。

歌　三聞及ぶ谷七郷に月はれて　林因
天河　八景もけふは野分の捲上げて　童平
衞　四秀句習ひに高せさしけり　重辰
同　かへさに袖をもれし名所記　叩端
山中　町のはづれに名所舊跡　自笑
だて　五いざよひも同じ名所に歸りけり　曾良
鎌　六藪の中迄のぞく舊跡　菊阿
桃　四備後表につくばうて見る　六之
笠　吉岡染にあひて言傳　連支
越　三なら茶とは淋しき人の編出して　其風
渡鳥　今ばんもなら茶と見えて蓋茶碗　先放
本朝　御詞の下よりちぎる初眞桑　比誰

大國名、軍、懷古等の例、第三の中にも出たり。

△不淨物。

三　顏三ゑぐ芋にかへた屎取叱られて　誣青
翁　四米のはへ場に馬の屎する　里圃
深　こえ草烟る道のきり雨　北こん
八夕　ふん桶通ふ村の假ばし　乃露

長良　今の返事はせどの雪隱　呂杯
歌　五 川舟に雪隱遠く眺め捨て　有栞
行脚小便の後にひかへて狹箱　午潮
冬　馬ふんかく扇に風の打ちかすみ　荷兮
賁　六 露霜くぼくたまる馬の血　嵐雪
かゝれども皆前句より然する所也。付肌のをかしみ一句の作なくて、徒なる物好にする事ならず。

△怪　物。

拾三　四 罠にまつ狸のふんを印しにて　翁
たそ萩に鹿狐を馬に乘せかねて　野航
草刈　神鳴の雲かと岑は雨はれて　林陰
虚栗　龍をよぶ夕立雲の後はれて　松濤
十七　七 登りたるあとに臭のある龍の月　瓢水
獨吟歌仙ロ　律儀な鬼は春を樂しむ　楊水
虚栗　糝をしばる鬼の形代　其角
同　四 三弦人の鬼を泣かしむ　同

□四句目

（本書）四句目は結前生後の句なれば、殊更に大切の場所也。輕くといふはほ句、脇、第三迄に骨を折りたる故としるべし。人は只やり句する樣に言做したれど、一卷の變化は此の句より始まる、故に萬物一合とは註したる也。都てほ句より四句目迄にも限らず。或ひは重く或は輕く、或は安く或はむづかしく、其の句に其の時の變化をしるべし（下略）

▲句脇三に力を竭たる卷は、四句目會釋にてもよからむ。若し第三會釋にて付けたらむ時は、四句目は必らず起情して、力を入れずては、一座按じ力落ちて其の卷成り立つまじ。此の故に大切の場と云へり。又「重くと云ふは起情。「輕くと云ふは會釋の按じ方。「安くむづかしくと云ふは趣向の事也。此の故にやり句を禁ぜられたり。

證句は前五六丁の中、四印ある句にてしるし。

(一葉傳)貞德より、四句目は輕くする事と世にも覺えけれど、只句作の輕き事にはまりて、趣向を輕く按ずる事を知らず。我門の俳諧は、句作の輕重は强ひてかまはず。其の趣向の輕き樣にと心を第三に配りて、句作は前後の爭ひによるべし。

▲爰に趣向といふは、前句の見立の事にて、第三の意を虛に輕く見かへよといふ事なり。前條の輕と云ふは。「婆心錄に●○此の印ある句の事、爰の輕といふは■□●○此の印ある句の事也。こは貞德の、四句目は輕くと云ふ詞を假りて、翁は見立を輕く按じよと敎へられたり。輕といふを、句作輕き遣句の事と心得違うたるは非也。又四句目風俗ともいふ詞を、振の句振の句と物を振替ふる事の樣に言習うたるも誤り也。又四句目は、文神に此すれば舟をいむと云ふ浮說あり。蕉門にはさる愚論なし。爰に擧ぐる長良天神奉納の四句目を見よ、

梅　十四　舟はあちらに見ゆる松かげ　七　雨

△五句目已下の事。

(稽一葉)八句の內、第三、四句、五句、六句、七句、八句迄似ぬやうにする事大秘事也。

▲古式には五句目より十句目迄の體を定めたり昔しは應安式により、趣きをもて一卷の變化をなせり。蕉門には意の變化を宗とする故に、趣きの方はしひて制せぬ樣になりゆく事、自から然らしむる理也。これ古式と制のかはる處と心得よかし。

□裡　移

裡移りに景物を出すを、待兼ねと云うて嫌ふは近世の弊也。表六句目の句を戀にて付起してもよし。例多かれども一つゞゝあぐ。

俳　コ打明けていはれぬ人を思ひかね　翁

ひな　神吹倒す杉も起さず此社　左柳

つはめ釋あられふる左りの山は菅の寺　北枝
勾ム葬禮に傘は隣へ事傳て　野坡
根本名戸隱の山下小家の靜にて　其角
△裡移後表の角々同趣不レ苦。
小文ウ盃過の頃から寺のふしんして　翁
時節ノ春の日に産やの伽のつゝくりと　山店
ウ日光へ丹から下す秋の頃　同
砥たびたび人に錢をかはるゝ田舍道　去來
玉みその信濃にかゝる秋の風　翁
參宮といへば盜みも許しけり　浪化
續寒ノさら〳〵と淀まぬ水に春の風　翁
送字ウはら〳〵と桐の葉送る手水鉢　同
長良川越はいらずと紅を見せたがり　仲志
川一つあちらこちらへ出代りて　舊楓
水谷水の岩にせかれて花筏り　雪
蓬ウ双六の恨みを文に書盡し　翁
文の戀歌よみて女にかひご贈りけり　同
鎌ふり物野原にて愛宕參りの戻り雨　千那
丹波から高峰のみ雪解け初めて　同
鳥どもの春中をぬらす初しぐれ　同
別十五日節が過ぎればひつそりと　太大
日並二三日夜着は出しても足持せ　杉風
三日ノさゞ波の三千坊も夕がすみ　凉ト
山、釋はあ是は山の和尚の九折　柳江
ひさウ盃は皆つゞれ〳〵と鳴くやらむ　正秀
鳴生雲雀なく里はまやこえ掻散らし　珍碩
此の類あぐるにいとまあらず。

□匂花、擧句。

(古今五)我家に擧句の掟といふは、月次のごとき座俳諧には論なし。或ひは祝言の會といひ。或ひは哀傷の席といふ時は、大旨宗匠のほ句なれば、名殘の花をも宗匠に望む事也。然れば擧句も常ならず。其の花を會釋ふべければ、或ひは一座の老人

か、或ひは親族の功者に望むべし。さるは一巻の始終を調ぶる意也。然るを今の俳席には、擧句を無下の場所と覺えて、身に入れて我れも按じず、人も其の座を立騒ぎて、果は筆句にも言捨つれど、さるは一座の俳諧にて、公式の論には及ばずといふべし。そもや儀式の俳諧といふは、執筆は一順の終りに在りて、名乘の肩に執筆と書くべし。無名に筆とも執筆とも書けるは、略義にして論に及ばず。然れば祝言、哀傷のほ句に、祝言、哀傷の名殘の花は、素より體用の心得なれば、擧句もほ句の脇にかはらず。其の花の用を調ふべき也。或ひは貴賓高客を請じて、晴れがましき一座の俳諧に、ほ句は其の日の挨拶ありて、名殘の花は尋常ならむも、擧句は一座の首尾なれば、さして前句の附意に泥まず、前に指合はぬ當季を按じ置きて、治國齊家の時宜によるべき也。

(三新書)匂の花といふ事は、千句と、夢想にいふ

事にて、常の會に申さゞる事、未練の次第にて候、意趣は千句滿座に香を炷き候故、匂の花と申して夢想同意也。

▲こは古式也。蕉門には例の其の詞を假りて、ほ句の意を匂はする名としたり。

△前の詞を再び用ひたる匂。

虚栗　詩商人年を貪ぼる酒價哉　其角
　冬湖日暮れて駕レ馬鯉　翁
句　詩商人花を貪ぼる酒てかな　其角
　春湖日くれて駕レ輿吟　翁

○

「花棚にこちらむく日を待つ身哉。「仰むくに及ばずちるを花の時。といひしシ、庵の遺吟を題し。

其日　花鳥に佛もこちへむく日かな　山只
匂　百味一味に和へる獨活の芽　百阿
　あちらむく日とて臺の花もちり　吾山

句　藤山吹に色々の雲　桂州

○

其日　ありやなしや名こそ人こそ朧月　阿

佛の字不宜　佛のかざも空にしら梅　范フ

初折　句　仰むくに及べば山の花が咲き　杜吾

同　——及ばず——ちり　州

同　ちればぞ爰に音樂の春　吾

○

初茄　鳥海も我れを送るや笠の雪　佐角

句　小春は歌によまぬ曙　嵐七

同　鳥海に見送られればや笠の花　角

彌生の空の曙は尙　筆

○

夢占百句　句　花によるこてふや夢の玉祭

——を花にけふの客

（古今五）二句一意に似たれども、是は其の花をかりて此の花をいはむ爲めなれば、こてふの花の無用なる、客の花の有用なる、春と秋との差別を見るべし。

△撰集卷頭、卷軸、句。

冬五歌仙　□　狂句凩の身は竹齋に似たる哉　翁

■　誰ぞやとばし〻笠のさゞん花　野水

同　句　水干を秀句の聖若やかに　同

さゞん花匂ふ笠の凩　ゥ笠

○

住吉四歌仙　□　升買うて分別かはる月見哉　翁

■　句　秋の嵐に魚荷連立つ　畦止

花なれや西に見はらす海の上　青竹

赤き衣裝に神の苗代　青流

花は住の江の景、舉は乳守の遊女御供田へ出づる樣也。

さみ三歌仙　□　海を鏡さみだれ山も雪の時　百阿

■　句　それて梢に光る鷹の目　玉蘭

五月雨山の杜の三月　露白

こは三歌仙の外、餘興卷の擧に匂はせたり。

文月往來三歌仙　文月や雁はいろはも未だしらず　嵐　枝
句　祭らぬ星も出て遊ぶ空　柳　コ
雁に乙鳥に春の往來　槐　二

○

藤十二卷　其花の咲いてや鳥藤三百里　蓮　二
匂　空にかすみのせき守もなし　里　紅
同　歸り來て人も古巣の花に鳥　丁　松
松の山路も藤の波路も　半　殘

△主客挨拶卷句。（七部及多例省）

秋　粟稗に乏しくもあらず草の庵　翁
主句　藪の中より見ゆる青柿　長　虹
籬はり出すはるの夕ぐれ　同

花摘　有がたや雪をかをらす風の音　翁
主句　住みけむ人の結ぶ夏草　呂　丸
盃の肴に流す花の浪　會　覺
同　幕打ちあぐる乙鳥の舞り　水

○

俳　晝顔の短夜ねむる晝間哉　翁
せめてすゞしき蔦の青壁　奇　香
同　ウ匂　機たゝむ妻戸に花の香を焚いて　翁
よき夢語るけふの初春　尙　古

○

雪丸　五月雨を集めて早し最上川　翁
岸に螢をつなぐ舟杭　一　榮
ウ匂　平堤明日は越すべき峯の花　翁
相句　山田の種を祝ふ村雨　曾　良

○

冬圍　珍らしや落ばの頃の翁草　如　風
衞士の薪とたをる冬梅　翁
句　雁の名殘りを招ぐ谷　業　言

○

ひな　風流の誠をなくや時鳥　凉　葉
旅のわらぢに卯の花の雪　翁

句　やよやまて宿迄送る花の暮　濁子

○

未來二吟　雨の手に桃と櫻や草のもち　主 翁

翁に馴れしてふ鳥の兒　嵐雪

句 同　榮えよと未來を植ゑし花の陰　其角

三人笑ふはるの日ぐらし　雪

○

やわ　兜巾とれやかき商人や山櫻　ウ 北枝

句 同　飴に起きしと雲雀さへづる　宇中

百句の連衆を花に申し入れ　吾仲

小松の中に鶯をきく　夏段

○

八夕　夕ぐれを飾るや霧に村もみぢ　ウ 蓮二

ウ句　いづくも秋の橋に探幽　乃露

柳さくらもちりて夕ぐれ　二

○

古今　七浦や一字の題を一字づゝ

句　霞のはけに渡る八景

○

庵記　丸屋こそよけれ四角な冬籠　主 露川

轉居　雪は倘更おの形の松　吟水

引上句 ノウ四　火を賑はひに假のわたまし　同

笠　鹿聞きに來てか但しは稻ば山　ウ 蓮二

そばの花さく世界あらばと　米花

引上句 ノウ一　名古やより遙々岐阜へ家越して　二

△立句は常體にて題の句。（七部及多例省）

深夜遊 句　青くてもあるべき物を唐辛　翁

米五升人がくれたる花見せむ　嵐らん

題の夜遊の心を句はせたり。

鶴 句　日の春をさすがに鶴の歩みかな　其角

連衆加はる春ぞ久しき　舉白

こは一日百句也。晝後不卜、岐水、似春來るに事よせ、初會の祝ひと道の後榮を壽きたり。

新百　凩の一日吹いてをりにけり　團友

句同　花は今星の光りに咲揃ひ　支考
新百句の柳　鶯筆

○

夏衣草體句　初鮭や張良沓を捧げつゝ　南木
花鳥や其角が夢の覺める時　支考

蕉門第一の作者、其角も此の曲節には目を覺さむといふ句也。

雜　月花や洛陽の寺社殘りなく　其角
引上句　ノウ三　時人の雜談集も花心　仙化

難　兩軍(眞、草、舌戰の文あり)

眞　句同　雲に鳥弓手に瀧や櫻がり　ソ守
馬士(うまかた)の喧嘩には似ず花に鳥　野角
大長刀も梅に鶯　筆

○

草　句同　茸狩に其跡床し金米唐　山りん
俳諧は今人扇の花咲いて　沂青
面白ほじろ目白囀づる　素龍

○

白たら〓〓四巻句　枯れたわと思うたにさて梅の花　從吾
雪の殘りの白だらに品(はん)　枝東

○

東六〓〓四巻句同　明日の夜の芋をはれとや八幡聟　涼卜
月見にもわらぢ花見も櫻烏仙　浮水
鶯乙鳥所々の連中　筆

○

鎌四〓〓歌仙句同　月に雁前は小海老の堅田哉　千那
花鳥の八重に霞みて八百里　左角
海道集の時津春風　千梅

歌六〓〓歌仙句同　覗くには及ばぬ垣の瓢哉　蓮二
國々の花を集めて歌枕　非而
杖と笠とに行きかへる雁　筆

こは六歌仙の外、歸郷長歌行に匂はせたり。
△ほ句と同他季の擧句。(七部及多例省)
一橋ナ雨の日や門提げてゆく杜若　信德

東雲や四月八日の鐘聞いて　清風
乙鳥の後まつ時鳥　仙庵

○

其俗ナ名によりて蚊遣になれよ伏見草　百花
△花の種けふや祇園のお目覺まし　兀峰
菖の鉾に螢火をきる　嵐雪

○

鳥切ア吹廻す按山子の隙や夜のかげ　三惟
△取分けてざつと濟みたる花角力　怒回
されども道は見ゆる初汐　天垂

○

竹の秋ア幻の中をそよぐや竹の秋　千梅
佐角悼
すべて悲しき空に蜩　冠那
句△身の後の花にますほの花薄　方吟
句 去年の今宵も雁をきく郷　砂林

○

冬籠ヲ枯庭に米くれられし雀ども　岱水

墨の付いたる古き小ふとん　り合
句△句 七年も浪花の夢に歸り花　杉風
今の時雨は元の草庵　依々

○

其俗ヲ炭頭けぶたき妹が涙かな　秀和
△神な月十三日を花盛り　嵐雪
空冷まじの冬のしぶ柿　舟竹

△雜の擧句。（七部及多例省）

花引上げし時、雜の擧する事あり。擧句は終りを止むる作り方なれども、雜の變格なれば、付流したるもあり。

あつみコ錦木を作りて古き戀を見む　翁
異なる色を好む宮連　曾良

○

市庵コ白粉をぬれども下地黒い顏　支考
役者もやうの衣の灶物　去來

○

雜

コ　犬箱はさびしき床の物なれや　岩翁
　　揚枝をさして持古す文　其角
砥　同　聞きしより宮司が娘てんば也　夕兆
　　遊のやうに前渡り來る　呂風
花摘　すり針や近江の海を見下して　溪石
　　着破る迄は木曾の麻衣　琹風
一橋　俳諧の修行者とむる朝の雨　立志
　　茶杓見立に分くる竹藪　清風
東六　切紙に床しがらるゝ庵なれば　夕市
　　夫よ心のはるゝ水海　蘆生
長良　三弦に殿のきげむを彈直し　伯楓
　　風も治まる御代の燭臺　里雪
本朝　干物に莚重ぬる雨上り　童平
　　鳥井も爰に所繁昌　凉三
そこ　何もなき葛籠の蓋の明けかねて　支考
　　よりあふ者も風雅千萬　筆
渡鳥　打續き治まる世こそめでたけれ　素民

　　ことしで丁ど丁百になる　先放
桃盜　夕飯が否とは寺へ御歸りか　吾吹
　　猫の禮とて是は慇懃　柳士
笈　顏付のさるに似たるは寂しさよ　支考
　　客にわせても誰れもかまはぬ　正秀
射也　よい所是は明けぬる窓明り　十丈
　　雨はさらりとはれ上る也　牧童
浪化也　出て見れば村の後の藪の道　北枝
　　風のとやみの日は靜か也　從吾
文操也　雨舍りのれんを見れば茨木や　乙由
　　むかしながらの御代豐か也　光純

○

藤實　明日も天氣の倚よかれかし　景桃
春　弟も兄も鳥とりにゆく　里風
あり　空面白き山口の家　荷兮

此二例は今一句、春の續けらるゝ所を雜にしたり。

△擧句に始めて、景物を不ㇾ出事。

傳に曰く。擧句に始めて神、釋、戀、無常、名處他季等の景物をいださずと云へり。さるは後の會釋なくて興なき上に、まだ此の巻には何が出でずと求めたるごとく見えて、却つて拙き故也。さるに、近世擧句に至りて前に漏らせし物を言ひしろひ、初めての景物を付くる人あり。例なき事也。

但し神祇は制の外にや、

冬　しら髪いさむ越のうど刈　荷兮
衝　御燈かゝぐる神垣の梅　筆
印　馳走の雜煮運ぶ神垣　こせむ
ふり　こゝに匂うて拜殿の梅　筆

此の外、釋、無常、名處、他季類の例は見當らず。

按ずるに、こは古今通式なれども、神祇はめでたき物なれば、翁の了簡もて許されけむ。尤も前三例は翁の誤き也。

□先巻を續きに匂を用ひたる例

きそ匂　生きながら一つに氷るなまこ哉　翁
アケ　結はひ殘しの句をしたふ春　杉風

これ翁、偕水両吟十二句あるを、後に偕水、杉風両吟して歌仙一巻とせし匂也。

初茄　匂　橘のゆかりや今の時鳥　東花
此半歌仙の終り
日も入相の峯の鶯　卜涼

とあるを、後蓮二房に後折を乞ひければ。

行く雁も思ひ出羽の國なれば　蓮二

と付たり。東花、蓮二、一體なれども、先人と立つる故に此の誤きあり。此の二例をもて又一物好あるべし。必ず粕をなむる事なかれ。

□奉納法樂　(歌仙は無印)

(雁木)奉納の大事、其の神の名を句面に作り顯はすは最上の法外也。名は句中に含みてこそ作るべけれと、季吟常に申されし也。傳に曰く。翁是を尋

ねて曰く。歌には其の神の名をよむに、いかなれば俳に憚るや、吟曰く。歌は本朝の器也。俳諧は連歌に次いで俗談にかゝれる故に、揖する上も揖するのみと言はれしとぞ（約文）

▲世俗にて名をさすはなめしき故に、挨拶句には雅名を作り入るゝ事は法度なれど、神佛は世俗と事かはり、頻りに御名を唱ふるを敬とすれば、俗情にくらべて神慮をはかるは、却つてなめしからむ。殊に歌に例ある事を、俗談の俳諧とて、何ぞ憚らむ吾翁の不審宜なる事也。

（ウヤムヤ）正親の句は詞續の縁をもて仕立る句法なり。

何の木の花ともしらず匂ひかな

▲こは顚倒の作の誡め也。天とあらば地、花とあらば咲き匂ふなどゝ、緣語を順に續けて作る事、神祇、祝ひ等の心得也。脇は神祇ありてもなくてもよし。匂ひは二句あるも、一句あるも、又なきもあり。卷中釋、無常は嫌ふ。されども著るしく汚らはしき事は愼むべし。偖此の句諸書に、「とはしらず」「ともしらず」とあり。熟ら考ふるに、ともしれぬならむ。其の故はずと切りて匂ひとは胴切にて續かず。又「しらぬは自己、しれぬは天然也。爰は神慮を床しむ所なれば、しれぬといふべく覺ゆ。又何と疑ふ時は、匂ひぞもと結ぶ格也。そは花を見ずして匂ひを怪しむ心なれば、何と云ふ疑ひ匂ひ迄及ぶ、故に歎もて哉とは結ばれざるを、其の頃歌學者といふ季吟だに疎き事あれば、哉の過りはありもせむ。首切、胴切はなき筈也。又響親の句は、五音十聲の通もてつゞる也。

松風の匂ふ外宮濱の宮
色あざやかに御手洗の蓮
むつかしき顏は家老に極まりて

正響合體の時は、上五字を通音につゞり、下を連

聲にもつゞり、又上を連聲にして、下を通音に仕立つる事もあり。是一句安からざる時の事とするべし。たとへば、

裸にはまだ如月の嵐かな

右三品は奉納法樂に限らず、祈禱・夢想、賀、元服、移徙、此の通音連聲なきを用ひず、尤も連聲は大古の格にしてつゞりがたし(約文)

▲是皆連俳のさた也。蕉門には只緣語續き(上に云ふ親正)の外に敎へなき事は、下の證句にてしるし。邂逅相通に叶ふ物ありとも、そはまぐれ當りにて求めたる作ならず。抑も匂とは、句の終りをひく事なれば、上の終りと下の始めと通ふべき理なし。さるを強ひて音を合せむとする時は、却つて首切胴切等の穏かならぬ作とならむ。是をもて翁は古法を捨てられけむ。其の後物好の人有りて、松風の如き卷拵へたるは證としがたし。又此の裸の句も、上にはと云うて下に哉と云ふはよからぬ作也。

(星月夜)奉納並祝言の句、他門に連聲を用ふる人あり。連聲は五行和合せず。我家には通聲と緣續きを用ふる也。

▲ウヤムヤに、連聲は大古の格と云ひ、爰に他門連聲を用ふると云ひ、其の連聲と云ふは匂の事なれども、五音も十匂も、倶に蕉門の用ならぬ事、證句にて明か也。

俳 いせ　何の木の花ともしれぬ匂ひかな　翁
　聲に朝日を含む鶯　益光
釋 ウニ　門細めなる田の中の寺　翁
同 ウハ　陳の假屋に僧のこもりて　光
匂　短冊殘す神垣の春　野人

○

雪花 あつた　磨直す鏡も淸し梅の花　翁
　石しく庭の寒き曙　桐葉
ム 折初　此塚の女は花の名にをられ

ム　誰が泣顔を咲けるつゝじぞ　翁

此の巻の折句ひなし。偖奉納に釋、無常の例如此

やへ上御靈　半日は神を友にや年忌　翁

雪に土民の供物納むる　示右

句　眞白に鳥居を見こむ花盛り　景桃

半日と云ふ隙なき様、上京近邊の民の、供物納めに來て、暫し年籠りする體としたり。偖此の三巻に五音十匀を用ひぬを見よ、下の例も同じ。

三日宮島　神もしれ三河遠山出雲白　支考

鳥居に舟を夏の明ぼの　林角

釋　ウノ　植置きてことしは寺の花盛り　そせん

ム　八十で死なれた人をなく事か　蟻巧

句　土佐が畫の歌仙に並ぶ袖の花　考

○神風館

ふり　かしこまる幣に蛙の歌よむか　蒲右

風雨隨時になびく苗代　涼ト

○人丸の御影を拜し。

ふり　是和歌の姿ならずや大和柿　涼ト

素直に松の上をてる月　喆巴

○

かも　鷺の笠も脱がずや神の杜　楚竹

水新しき春の御たらし　鷗笑

神風館已下三巻句ひなし。

蝙蝠も末社の數や冬籠　素後

同　夜は夜と共に嵐風　笑

句　數百軒神の恵みに家の花　同

雜　日待百句　賑かに雛の菊の旭かな　キ翁

ノウ三　ひろき出合に幾宵の月　且水

引上句　日待よりけふ其儘の神詣　岩翁

句　果報のつくを老の身の幸　未陌

（諸書）天神奉納、春は第三迄に梅を出し、他季ならば巻中に必らず梅一つあるべし。讒言、左迁、舟流す、筑紫等忌む。

○長良天神奉納十歌仙の内

梅十
第五　乗物を舟にかきこむ暮の月　梅光
同
第六　ながれ次第の舟に秋風　同

▲如此例あり、讒言、左迁は愼むべし。筑紫は匂ひにも入用ならむ。乗物を舟に入れ、又舟流すなどは平生の事也。菅公其の刻の旅粧舟のみならず。馬に召せば馬を忌み、茶を参らば茶を嫌はむや、流人ならねば流し字も憚るまじ。都て己が愚痴もて神慮を計るは恐るべき事ぞかし。

□夢想開

（諸書）懐帋一順讀み終る時、主より紙扇等引出する例也。夢の神佛慥かなるは其の意、只何となく見し時は、天神の御告として天神を祭りて興行する事古例也。ほ句神祇ならば、脇神祇にすべく、春夜これを夢見ても夢の季に隨ふ事勿論、都て無念無想より按じて、一巻清滑に舉句あるべし。巻中夢枕、僞、左迁等を忌む、第三迄霞、雪、霜、露、電等のもろき物、らむ留を忌む也。

▲霞已下の説非なる事證句にて明か也。

（花ノシヘ）御　眞也。脇亭主第三宗匠也。夢想短句ならば、前句の心に見て、其の句へ亭主ほ句付くべし。但し治定の切字を用ひ、疑ひの切字をいむべし（約文）

▲治定、疑ひの切字の事偏固の説也。

（三部書）ほ句ならば表六句可然、夢想の句、短句ならば表七句なるべし。百勻あしく候歌仙可然、賀の興行は座短き可宜候、表九句も同じ。

（雁木傳）長句は如ㇾ常、短句を見候時は引上げてほ句致し、夢想は脇に致し候事、無季のほ句にても脇には當季を結び候事、短句無季見候とも、ほ句は當季に仕立、脇は其の儘に置き、夢想の句は三物にして奉納いたし、外にほ句いたし一巻に取立て或ひは歌仙にいたし候事。

▲神より賜はる無想を脇とすと云ふは奇談也。今按ずるに、無季の物を脇とし、季のほ句して三物とせば、俳諧第一なる季の掟を破らむ。しかせむよりも、短句ならば夫に賀の句、賀の巻など添へて奉納して可ならむ。又雜の夢に季の脇と云ふも聞かぬ事也。又諸書に短句ならば前句と見てほ句付けよと云ふも。眼と目との論也。十七字なき物は只文句なれば其の儘に閣くべき理あり。若し十二三字十五六字廿餘字などの文句ならばいかゞすべき。季にても雜にても、十七言にてほ句體なる物なればこそ、文神の告げと仰せて祝ふ事なれ、古人面前不レ可レ説レ夢。勘破了也。

このは 雜　人並に皺も延ぶるやすはの湖　御
　　不二を相手にのぼる日の丸　何　狂

此卷四十四にて匂ひなし、脇に當季なきを見よ。

三物　萬歲の日は蓬萊の堆く　同
　　門は常盤の名に遊ぶ春　仙　行

○

夢。祝　水仙や暖かさうに咲いてをり　同
　　はく程はまだ雪の朝ばれ　片　雲

○

有儘。　秋の夜にかはる帋や秋の風　同
　　片田の餅の香に匂ふ頃　希　因

文通上下略　賑かな月見に鴫も立ちかねて　蓮　二
　　濱は夕日の出舟入舟　○

又第三四句目。

名月の馳走に鴫も暮待ちて
　　雲はき分くるむら雨の後

此の度の一順別して骨折申候、句作に用と不用の論あり、用をしらずして句作を好候へば、聞えぬ方に落ち申し候、此の度の脇、第三に餅の一字は句作也。此の用と申すは、ほ句には帋の一字のみ付所なれば、稻といはずして餅といへり。第

三は夜分を遁れむとて、鳴の句作は其の用也。四句目は兩樣ともに會釋の句なれば論なけれど、出舟入舟の賑はしき用と、雲掃分くる馳走の用と、此等も句作は同じ心得也(下略)

霜　月　日　　蓮　二

希因樣

寶暦八九月廿四日草圭翁の夢想あり、人々に告げ、歌仙一卷として小練忌に備へ侍る。

○柴の營　山かせや秋の趣向は樣々に

後の月夜の明けし稻塚　紗葉

匂有がたき明りを受くる窓の花　宇白

(三部書)夢想を開くは當前の祈禱、賀儀の心私シ、あるまじき也。開くに無別條、床に聖像を懸け、燒香不レ絶、執筆甲ばかり乙なし、夢想に亭主脇して宗匠第三もする也。一順濟みて一家の惣代と書きてするもあり。又第三に惣代として、順を付くるもあり。何れも不苦候、かゝる時は呼付附句といふを嫌ふ也。かな留の句に、敷島とはカナシキとつゞき、玉柳はタマヤナキとひゞく故也。

△同　賀。

一　捧げたり二月中旬初茄　翁

天下のおかげ我等迄春　杉風

雨霞む古藏弘くをさまりて　仙風

白き鼠に雪ぞ消えゆく　かめ

雲間より赤い烏のほのぐと　惣代

谷の戸口にかゝる看板　風

上々吉有明の空ふく嵐　而已

千里の羽も金箱の秋　筆

御製より今も取りあへぬ紅葉哉　山りん

三物六ノ内

水あれば月々あれば水　高茧

神酒なればすむも濁るも鏡哉　蓮二

廿三夜も杉の曉　鱗

□追　善　(歌仙は無印)

(コ東四)追善は幽言第一、長高き不易の句すべし。親、兄弟、師、友、知識、隱士、義士等によりて色々句あり。天下無双の我が翁の追善に、名もなき者の追善のごとく、袖がぬる、涙が氷る、香を繼ぐ、ばせをを枯る、笠殘る、松風長し、そとば朽つる、塚苔むすなどにて一天下果てたり、偕々はかなき志しにて哀れ也(約文)

▲五老の歎きは百世の誡め也。げに云ふ古への粕を手向むは、信なきわざかも、今國々の集を見るに、追悼、懷舊、貴賤、親疎のわいだめもなく、或ひは句、脇、擧の間に必らず年忌の詞を用ひたり。そは前書か題におく詞也。假令悲哀の詞を作るとも、一句俳諧にならでは詮なからむ。只寂細みを主とせよ、匂ひは一句にても二句にても引上げてもよし、一折物には元より匂ひなし。卷中「神、祈、釋、無常、病、藥、殺生、落、沈、歸、字餘送り字等古式には嫌物もあれど、蕉門には許したり。但し冥途、罪科、地獄、呵責、悪趣のさたは憚るべし。其の餘主人により席によりて、禁句も遠慮もある事は、追善のみに限らぬ事也。

拾　其容見ばや枯木の杖の長　翁

大通庵悼　衛來てなくよし垣の池　夕菊

ウ四　聲美しき念佛聞ゆる　苔翠

十　むりに望みをかけし師の坊　そら

ノ五　苔生えし佛の膝を枕して　同

九　露深き無言の僧の戸を明けて　翁

ノウ三　汲上ぐる御堂の朝時ほのか也　友五

四　蚊にせゝられて謡る篗ずり　翁

釋五所

ム　句　清き地に骨を埋むる花の陰　ら

非釋　同　春暮れてゆく香の一時　菊

衛奉納　笠寺やもらぬ窟も春の雨　翁

たびねを起す花の鐘撞　知是

句　花盛り尾張の國に札打ちて　芙言

〇

枯　百句 亡がらを笠に隱すや枯尾花　其角
翁七日　濕石さめて皆氷る聲　支考
藥　ウ四風の藥を惣々がのむ　泥足
法事　五焦すなと齋の豆ふをせわにする　乙州
觀想　十一よの花に集のほ句の惜しまるゝ　智月
神　二オ祭のるすに殘したる酒　萬里
狩　三ウ鳥さしの仕合わろきくれの空　去來
ム釋　同 經よむ中もしのぶ聖靈　杞玄
引上句 思はぬ狀のおくに戒名　考
座同 青天にちりゆく花の芳しゝ　來
此の卷神四所、迯字八所あり。已下此の類記さず
同　俤や浪花を霜の踏納め　桃りん
此マキ無並 淡くかげろふ冬の日のかげ　子さん
歸　ノオ行脚歸りに更くる秋風　千川
句 同 見開けばおのづからなる花微笑　濁子
香を結んで朝霞たつ　滄波

枯　亦誰ぞやあゝ此道の木葉掻　湖春
句 一羽さびしき霜の朝鳥　素龍
同　句 ウ雲水の身はいづ地をか死所　素堂
袖に今師の好かれたる花の枝　鱗
百句 なく中に寒菊獨りこたへたり　嵐雪
向上體を雪の明ぼの　鱗
落　二ウ衣桁の小袖落つる音する　風國
鬼　三ツ鬼が手に明けさせておく月の洞　心圭
句 外しらぬ琴をかなしむ花の前　鱗
同 草芳しき信の交り　横几

〇

行狀　風月の霜の釼を折らしけり　乙州
同初月キ 冬の野原にいなす飼鳥　木節
無觀　ウ杖笠頭陀は過ぎし世の夢　同
祈　ノツ祈らるゝ神の身にても迷惑さ　州
句 百年の半ばにちりぬ花の下　節
砥翁百日 問殘す歎きの數や梅の花　北枝

沈氷池　春も氷に沈みつく池　浪化
匂　されば社松は花より朧にて　萬子
匂　のりもてはやす百日の空　林紅

○

後旅　青柳にさらぬ古枝や百ケ日　千川
其の涸池の蘆は角組む　桃鱗
ノ才五引上匂　風雅にて人取立つる信かな　同

○

翁同一周　十二日時雨もふらず哀れ也　りほ
寒さを含む雲の鈍色　沾ほ
匂　ちる花をめつたに惜しむ花盛り　り

○

匂同三廻　月雪にさびしがられし紙衣かな　許六
小はるの壁の草青みたり　リ由
匂　其きさらぎの夢の境界　筆

○

冬蔦同七廻　枯庭に米くれられし雀ども　岱水

墨の付いたる古き小ぶとん　リ水
翁行脚の時おもひけり　そら
初折　吉野にて花を見せうぞ檜笠　依々
羽おりの袂ぬらす幾春　石菊

観　匂　七年も浪花の夢に歸り花　杉風
同　今のしぐれは元の草庵　依

同　成れ〳〵とふるか時雨に七回　此筋
けさは木のはの靜まりてちる　千川
匂　したはるゝ花に其の笠其の衣　文鳥

翁(おきな)の追善(ついぜん)に限りて如此、卷中に觀想(くわんさう)の付句あるは、門人(もんじん)只其の名殘りを忘れず、時に臨みて覺えず言出でけるならむ。

浪化追善百句　水仙の花奉つる佛かな　支考
日はきら〳〵と六七日(むなぬか)の霜　秋の坊
法事　三ウ何もかも川へ流すか玉祭　同
匂　たとへば雲に歸る雁がね　北枝
同　手を拍つて火燵を出づる便り哉　蘆生

冬の鳥の夕ぐれをなく　ウ　中
同　句　梅の發句の殘る短册　夕　市
凩の言傳悲し草の宿　元　春
冬の夜すがら行燈靜まる　イ　吹
句　行春の花と浮世にをしまれて　路　走
同　句　人も陽炎我れも陽炎　筆
鳥一羽林に寒く鳴きにけり　萬　子
ノウ二　窓をひらけば十月の空　八　紫
引上句　精進料理に花のちる宿　子
同　冬草や何れの陰を君が宿　水　音
野は霜折の寒き明方　播　東
前句　何を鳥のあの樣になく　昨なう
引上初折　此世にも花咲き殘る砥並山　琴　之
句を引上ぐるは如此、前句より催されて自ら出來る事也。
野は枯れて消ゆる物おく名殘哉　可　夕
月はしらりと氷る遠淺　キ　邑

引上　ノウ三　砥並山人もしぐれて通りけり　致　書
同　言出せば起きてつくぼふ火燵哉　厚　爲
其のきさらぎの柳しぐるゝ　闘　雪
引上　花は根に歸る越路の鳥部山　方　錐
同　なぜにうき世を鶯となく　長　水
魚　白魚の實に面白き料理組　何　由
同　雲丹は黄色に防風紅　筆
此集廿餘卷中の曲節舉也。かく數卷集まる時は句、脇等も如此、しつこからぬ樣に有りたし。
タン　いざよひや師の影去りて十萬里　白　狂
支考亡名　變化の時を空になく雁　右　範
句　范蠡をやめて花見の孫太夫　東　羽
こは草體の曲也。支考に十名あり。夫を沒して跡を黄山に隱すと云ふ心を、陶朱公に准らへたり。
同　鹿の音に言のははなし入月夜　從　吾
荻にもあらず荻にもあらず　鴎　皮

句こんにやくの白和となる花の跡　巴分
句　牡丹春遲し爰の獅子庵　牧童

○

梅の別　其の梅もちる日となりぬ一七日　吾仲
六川悼　障子に殘る春の曙　仲太
句我園の柳もくもる春の色　同
句　小田の蛙もなくはずの事　子靖
夕顏　朝顏の顏さへむかし〱哉　維明
尙白悼　此蘭の露泪かよへり　宰陀
句花鳥の讃に遊べと書かれけり　同
同　朝がほや身すりの柱なつかしき　氷花
名は有明の籾の埋火　芹生
句人とはゞ幻住庵の後の花　仙鶴
同　目に見えぬ秋目に見えて別れ哉　圓入
片便宜(かたびんぎ)なる文月の月　袁立
句何(なに)芹花(はさつ)は白きを後にする　我吹
句　七寶かざするりの囀り　筆

○

十七回　其の人の傳灯錄を花の峯　敬雨
其角忌　六千餘日に春渡る水　淡々
句花ぞ昔し今又京のますかゞみ　珍舍
句　程をかたるも虎杖の節　大圭

○

葉の雫　ちれど梅名は末代にかんばしく　蘭臺
無倫一周　夢と杉葉の取添へてぬれ　倫里
無觀　初折ちと後生油斷のならぬ老の花　百里
句なつかしく寺社に殘りて筆の花　琴風
句去年もことしも今日は雨　風葉

○

其鑑　精進はげに忘れじな梅の花　鷺洲
七里三回　旭のはれに藪の鶯　葉ホ
無　ヵ娘にあひて明日死なうとも　此柱
句くもらねば鑑に花のむく世界　同
句　ねはんの宵の雲も彩色　巴州

同　涅槃忌の野菜も五十二類哉　慈竹
朝茶の曲突に永き一時　ホ
無覩ノオ　聖靈も月よの婆娑に氣の晴て　一字
句　三年は昔しに花の十四日　ホ
鳥は雲井に春のゆく時　始流
○嵐七風子の亡がらを送りて。
名筐　ゆく雲の地も紫の花野哉　和蕙
蝶もしをるゝ露の入相　十知
句　ちる花の筐に鳥も法の聲　風草
句　春の名殘に藤もしだるゝ　只白
星月　亙返る空や北斗の星月夜　原松
其角卅三　蛙なく江は元さゝら浪　松阿
句　衰へし道を開きてけふの花　松欄
句　德をかぞへて杓杞の賞翫　千梅
○
みかの　俤や蓬萊三日無名庵　梅從
ヤハ悼　殘る居士衣も春の空蟬　簡月

句　藤のはびこる讓境內　簡月
七日　鶯やつら〳〵松も雨の足　杏雨
茶畑り止みし春の離れ家　如風
句　香をしたふ一木千里の夢の花　竹童
百日　庵たゝく我がかげぼしも昔の花　三維
ナウ三　時鳥より崩す鳶の輪　程々
引上　句　浪花江の花の力も失ひて　琪濔
△追善に匂なき例
行狀　四ノ　風を通して拾ふ塚のちり　路通
コノハ百　初雪や鵙の草潜埋むらむ　許六
小弓　栖にとる舟の別れやなく千鳥　東鷲
冬葛　香の氣で名のある菊を五六十　リ合
同　かたみとぞ思へば月見十二日　杉風
夕顏　白や黃に鹽なき露の泉かな　淡々
白扇　七ノ　其のかげや時雨て雲に一昔　北枝
續花○　みそ萩や心のくるゝ花ざかり　半輅
同　手をもすれ風の薏苡仁本誓寺　岷牛

續花　手向けよと蘭の匂ひの咲き乍ら　木十
秋風。　亡跡に何植ゑてきかむ秋の風　岸虎

こはたゞ一卷なれども、匂なし。凡そ匂を略するは、數卷興行の時、其中にてする事也。此外にも例多し。

□人倫と人倫の運びに別ある事

(古今四)昔しの俳諧も今の俳諧も、打越の論の明かならぬは、姿情の二つの分らざる故也。

▲去嫌の惣論也。蕉門には姿情體用の別をもて萬法一理の法式を定めたるに、翁の在世にも亦三億の衆生有りけむ。此歎きあり。ア、作家勞したり。

夫が中にも人倫の運びは、假令雨ふり風吹くといふとも、見るか聞くかの境より、「起居見聞の詞に就いて、人の樣は多き筈なれば」。百匂は百句ながら人倫ノハコヒならずといふ事なし。元より人倫を二句去と定めたるは。「　」父母と云ひ、男女と云ひ、目立ち耳立ちたる文字の外は、或ひは自他の境に分ち、或ひは姿情の違ひを考へて、打越の付心と別ならば、人倫の噂は似通ふとも、一卷の配りは變じ易からむ。

▲「起居の文」原文は父母の上「　」にあり。隔句文にて初心に解しがたければ、かく入れ代へて記す。本文に人倫の運び、人の樣、人倫の噂と云ふは、皆人事にて、二去の人倫ならず。今是を人倫、噂、姿、情、用、の五つに分ちて下に註す。此段の意は噂己下の人事は、假令似通うたる事にても、付肌の變あらば、打越を許せとの謂ひ也。

然れば古抄の掟たる、主、誰、身、獨、媒と云ふ類は、只人倫の噂にして、人倫とは定むべからず此等に法制の寛猛をしるべし。

▲此五類は元より字書人倫門の屬字なる故に、

古式は人倫と定めたるを、蕉門には總別輕重を論じて、假に噂と號けて、人倫越を許したり。如此法の寛なるは、前意を轉ずる別法あるが故也。

△人倫二去（證句略）

父母、男女、此の四品は人倫の凡例也。此類は二句づゝ去るべし。

▲此類とは親子、兄弟、娵聟、舅姑、祖父祖母孫彦、伯父伯母、甥姪、妻妾等の六親九族の文字也。是に僧名、俗名、現在に作る古人の名等を准ず。此准ずる物の中には、越を不嫌る物もあれば證例にて見よ、蕉門に人倫二去と云ふは、古式に效はず句面に人の働きの、有無に拘はらず、只類字を嫌ふのみぞ、さるは六親九族の字類は互ひに目立ち耳たつ故也。

△人倫の噂越を不レ嫌。

主、誰、身、獨、媒、此五品は人倫の噂也。指合をくるべからず。

▲こは古式の文句を假りて蕉門にては、此類は噂と號けて越を不嫌と云ふことを、手近に述べたる文也。此文簡古なる故に、古來只此五字のみ人倫とせぬ事と心得違ひ、此五字に數千の名類を含みたる事をしらで、七部の註者も、爰は人倫越などゝ註して、自らも昔しの付句を怪しめり。今是を解し、其部を分ちて證句をあつ、人々百年の迷雲を拂うて明かに察せよ。

○主とは物を主どる人の例に上りたる一字也。君關白、納言、頭、介等の官名、僧の官名、大名奉行、代官の類、神主、坊主、名主、何主の類又帝、仙洞、新院、春宮、宮方、公家方、殿、御簾中、御臺、局、奥樣、内室、後家、方丈、住持、西堂、納所、隱居、座頭、庄屋等の居所名の物、又熊谷、鹽冶等の姓名、並びに古人名等也。

◦誰とは男女を分たず、弘く他をさす例字也。翁老、若僧、尼人、相人、遊人、何人の類、客、友、仲間、連衆、達、同士、近付、道心、乘合、旦那、あなた、先生、貴公、慇々戀君、民、百姓、賤奴、丁稚、敵、味方、汝、其許、足下等の類也。

◦身とは自らをさす例字也。我、己、某、私、拙者、手前、自身共、此方等の類也。影法師も此中に入る。

◦獨りとは、人數をさす例字也。一人、二人、幾人、何騎軍、多勢、群集、屯與、衆生等の類也

◦媒とは、態藝もて號くる名の例字也。佛師、醫師、畫師、何師の類、酒好、餅好、何好の類、糸賣、綿賣類、鬮取、草取の類、鑓持、沓持の類、曲者、馬鹿者の類、大工、木挽、左官、石切、日用、諸職名、碁打、三絃彈、萬歳、大黑舞、諸藝者の類、六部、順禮、道心、遊行、何

參り、後生願の類、宮司、社務、禰宜の類、武士、侍、小姓、供奉、出代、新参、手代、番頭腰元の類、使、飛脚、懸乞、水汲、田打、駕舁六尺の類、上手、下手、上戸、下戸、無筆、乞食、穢多、猿引、馬士の類、大力、英雄、阿房の類、何番、何守の類、傾城、太鼓持、遣手の類、推して知れかし、此類證句多けれども、一例づゝ擧ぐ〇印は人倫。◉印は噂、句頭に書くも噂也。

(古今四)天童、天女、帝、仙洞、新院、鬼、佛、此類古式に色々の説あれども、人倫には二句づゝ去るべき也。

△こは上文とも自語相違なれば、支考詼□きの卷を示す。

【主】

キミ　長生は殊更君の恩深き　北枝

　　賤が袴はやるゝともなき　ソラ

印　初花は萬歳歸る時なれや　翁

桃 キミ 位

君が代は俤も持たず風の神　蛬平
御文に殘る事はおじやらぬ　里紅
鼻ひれば嫁も機嫌を取りに來て　梅因

拾 官

晴るゝ日は石の井撫づる天少女　清風
艶なる窓に法花よむ聲　翁
勅に來て六位泪に彳みし　ソ英

印 官

―守の館にて笙借りて吹く　享子
十重廿重花の陰なる晝の庭　コセム
―扱菜一荷を分くる里人　翁

みの

判官のゐぼし欲しとや思ふらん　土芳
木幡邊りの雪の夕暮　風麥
賣庵を見せむと人の導きて　翁

類 同

―誰が子の太刀をかへす石尊　格士
宵廻伏屋に生ゆる名のうさも　風葉
―兵部卿とはうたかたの粕　艶士

桃 同

―口では覺えにくい治部卿　紅
うは言も尾のある樣な瘧也　退々
―むしろ屏風に老の引臼　奚明
初午に女房の親子振廻つて　翁
又此はるもすまぬ浪人　やは

炭 僧官

法印の湯治を送る花盛り　翁
春雨の古みに落ちぬなら茶好　范フ
あのふり袖に咄しこそあれ　吾仲

白扇 大名

一宿で五百つかへばお大名　去來
きせるにも小指を反す塀の來て　六之
麥秋なればうたに諷はれ　野航

文月 奉行

此公事は捌く奉行もにこ〳〵と　東羽
西行の歌は村雨三日の月　八紫
木曾の酢莖に僧は新そば　牧童

浪 代官 神主

代官の秋をいかにと宣まへば　支考
神主の水くむ眞間の宮處　立志
上着しるべに死がい尋ぬる　清風

一橋

母親の利口あと先しどけなし　志
―東近江に聟をたづぬる　山りん

難　雨乞を神も咎めず笠踊　曾及
坊主　月よのかげは皆坊主也　素然　山かた
亭主　月の宿亭主盃持出でよ　翁　殿
ひな　朽ちたる舟の底作りけり　杏沓
唐人のしれぬ詞に點きて　千川　笠
ゐん　院も白髪を侘び玉ひけり　桃後　庄屋
茶　和かに鶴鳴更かす夜の月　雪丸
須磨の砧は下手で持つたぞ　翁　黄山
神より禰宜のさび渡るらむ　桃風　後家
しゝ口　あし引の山家なればとゝろゝ汁　半睡
同　花山の院も旅はわらんぢ　りん　桃
宮　布せはいたゞく大塔の宮　祇空　後住
續花　炭がまの烟りから日のくるゝ色　車葉　隠居
馬にも干物花聟の花　敬白　桃
公家　公家に宿かす竹の中道　翁
蓬　月くもる雪のよ桐の下駄すげて　叩たん
酒のむ姨のいかに久しき　桐葉　類

豆稙をよれる娘の叱られて　野航
寺參りではなうて田廻り　白狂
御替の殿は御慈悲なさゝのあり　六之
老僧の連にいつもの將木さし　童平
明けて見たればそば粉ではなし　里紅
庄屋迄節用集を借りにやり　米花
大工の長き春の短さ　蓮二
出代もあれの是のと泣きはぐれ　紅
鎰を提げたる後家の憎さよ　平
日は軒に若代の朝ね叱られて　琴舟
どこの使か顏も覺えず　里月
名月の芋に後住も居馴まれ　紅
隱居は隙な麥の秋中　潜之
物讀の鐘を晝かと聞違へ　藤闕
橋のふしんに黒む御奉行　管五
兒の長二寸伸びなばひたち帶　仙芝
褌をせぬ時代かしこき　秋色

座頭　針店に座頭のゐるはいつからぞ　濟通
ーつれなき聖野に笈を解く　キ風

鶴性　ー人あまた年取る物をかつぎ行く　楊水
ー酒もりいさむ金山が洞　朱絃
同　手分けして赤飯配る大井殿　集加
をかしくあたる百姓の弓　其角

枯古　日の色に心定むる鐘樓守　徹士
ー露寒げ也義經の像　業言

衛同　白絹に萩と薄をおり込んで　如風
ー院の曹子に灶物を乞ふ　知足
ー楊貴妃からが柳風ろとは　倚菊

雪白　白々と音せず雪の白々と　一庸
ー嫁入ねり出すはしの欄干　二川

（古今四）僧。古式に人倫ならずといへども、指合をくるべき也。

▲僧は佛者の惣名にて、人の字に類すれば、噂なる事は知りつゝ、古式を拒めむとして過つたり。下に支考の證をひく、さらば僧名も噂とすべきを、人倫に類せしは空海、慈覺と云ふ時は耳立ちて聞ゆる故也。

【誰】

たれ　姥捨のうたには誰も袖ぬれて　支考

西花翁　白髪ばかりの庵の酒もり　雲鈴
見違へる隣りのかめが嫁り前　一介
ー翁の庵のぴいと尻聲　イ吹

桃老　此中へ新そば二升ほしがりて　里紅
ー聟のいびきをのぞくお侍　岩芝
魚の骨しはぶる迄の老を見て　翁

さる　待人入りし小御門の鎰　去來
立ちかゝり屛風を倒す女子ども　凡兆
男なき妹が黛を守りかねて　路通

二見同　泪火桶に濟帚をほす　翁
老ぬれば針のみゝずハ背きける　友五
ー殿の玉はる女房にそふ　好春

やへ　嘘をつくたいこ持には嘘つきて　示右

長老 ─旦那揃ひのひろき長老 和及
住うくて住持こたへぬ破れ寺 子さん
別 とう/\となる濱風の音 杉風
若 若黨に羽おり脱がせて假枕 桃りん
隱してはおれども聟は角力取 里紅
つくも 隙な大工の來ては追從 岩芝
尼 尼寺の花に短尺付けたげな 山蜂
人 ─木履の後の人の靜さ 夏由
たそ 返事せぬ節句を門にめでたがり 山りん
─子供よせても一芝居なる 素然
うと 囚人を頓て休むる朝月夜 コ齋
萩さし出す長が連合 不卜
鶴 問じ時露と禿に名を付けて 似春
一藥鑵かへて和尙の長咄し 諷山
笠 書付けておくみその寢かげん 葉柳
と 田を植ゑる時は雇人さし合うて 箕由
て ─追人も連にさそふ參宮 そら

ひな ─丸ごしに捨てゝ中々くらしよき 殘香
─物の譯しる母の尊さ 木因
て 既にたつ詩人の使いかめしき そら
一橋 一夜の契り箋かづけたる 翁
松明に顏見むといふ君は誰ぞ 其角
同 不拍子な相人に砧さびしがり り紅
桃 都の秋をよそに尼達 和荊
菓子やりて膝になづくる子供衆 醉菊
同 遊人の小袿は夜を晝なれや 十知
初茄 枯野に灯捨てし殘月 呉天
西行は笠嫌ひやら手にさげて 風草
江戶鑑又誰れやらが取出して 柳士
浪 尋ぬる箱の見えぬふろ棚 そ桃
にん 町人の武士と出合ふは難かしく 逸正
─ことしは下女をいなす分別 ろか
翁 遲き日に出でゝ吃逆の止りかね 沾ホ
客 ─客のなければねてくらす也 嵐竹

雜　友

湯屋の休みをしらす友達　芭風
日待よりけふ其のまゝの神詣で　岩翁
果報のつくを老の身の幸　朱伯
柿にふら／＼客の木上り　佳峰
餅搗　天台の禁の秋は一乘寺　乙孝
各輩　各はなの太き輩　麗羊
母方に離れて月の物さびし　雪芝
みかむ　鼠のこもる巻稿の中　卓袋
朋輩　朋輩の髮を結ひあふつゆの雨　猿雖
仲間　仲間で猜む坊の殊勝さ　杏雨
水仙　六月もしたつく山の薄しめり　青猪
火串せぬ夜は妹と麥打つや　は
阿房はこしをかけて長ぐひ　達支
笠　物前のるすは內儀の氣諛ひ　里紅
連同士　湯治の連も中のよい同士　諷山
脫つ着つ母の公義の一つ物　胡洞
六行　節季は止めに緣の言懸け　以坙

衆　江戸立と加增の衆を聞合せ　諷涉
僧　秋をしる身と物よみし僧等　躬
更る程壁突破る鹿の角　そら
俗　島のお伽の泣きふする月　翁
とぎ　聟殿とよぶ新しい所帶持　銀桂
さみ　論語にもない版の上置　可哉
近付　精進も近付ぶりに思ひ出し　一宇
せはしい秋に孫の初產　董平
笠　頭から先へ新酒の醉うて來る　達支
旦那　けふの旦那はほめぬ駕舁　蓮二
何がし　夕顏や何某の院も裡借家　眠青
三顏　焦がしたる扇遣ふ蚊遣火　朝四
生立もかしこい甥に慰めて　り紅
れき／＼　醍醐あたりはひよつと歷々　蘆本
三匹　猫の子を貰ひに文の書きちらし　きらむ
小ぬかのかゝる嫁々の笄　杜草
親しらずとて旅に泣くめる　舟竹

其俗　人の垢夜々かはる一夜妻　嵐雪
こひきみ　目疣をさすれ君が髪梳　秀和
たみ　茶筌の雨も民の潤ひ　普及
しゝ　御手づから菓子下さるゝぢゞとばゞ　觀水
美しい子に赤き着る物　泝青
百姓　本家の早苗もらふ百姓　翁
印　朝の月圍車に赤子をゆすり捨て　亭子
かたき　討てぬ敵の畫圖はうき秋　こせむ
貸座敷へも合點する君　宗瑞
五色　さなくても瘧震(おこりふるひ)の戀衣　素丸
丁稚　蛇さへ見れば寺の小丁稚　蓮之
春若衆火燵の傍へ寄付かず　同
同　天下太平穀潰すふえ　咫尺
奴　吹矢筒たえて奴のなかりせば　長水

【身】

尻も結ばぬ伯母の言傳　水胡
文月　かまはずにおけば瘧も獨り落ち　槐二
己　猫と己れとがるすの飯次　江北

炭　同じ事老の咄しのあくどくて　桃りん
欺されて又薪部屋に待つ　やは
我　よい様に我手で算を置いて見る　り牛
手前　手前者の獨りも見えぬ浦の秋　やは
同　めつたに風のはやる盆過ぎ　り合
宵々の月をかこちて旅大工　依々
かげ　影ぼしも笠きてしれぬひち曲り　龜來
天河　夜更のかねの空に亂るゝ　唯人
唐人の供も何やら唱へ言　山朴

【獨】

人　赦免(しやめん)にもれて獨り見る月　翁
初茄　きぬ〴〵は夜なべも同じ寺の鐘　呂丸
宿の女の妬き物かげ　そら
いく人　幾人顔をはらす懸乞ふ　船
雑　闇の夜は路次(ろじ)の狹(せま)きに咳拂ひ　仙化
子は杖になる老の小便　其角

【媒】

媒　仲人に聞くにちりめんもぬふ　半睡
しゝ　十夜には戀と無常の寺參り　里兄

文月　一御町奉行の名さへ伊達殿　若推
何師　勘介に明日の軍を囁けば　杷音
十人前に餘る冷めし　歸的
金屏にお師の不便を紛らかし　里紅
拾　一身の賣代を子に殘しゆく　友五
同　泣顔を隱す畑の忘れ水　夕菊
同　一奈良にも恥ぢぬ脇師なるらむ　そら
紙帳から顏出す塗師の咄好　白狂
笠　茶碗を添へて盆に小藥鑵　東羽
同　猫の子に娘の袖をあぶながり　野航
同　在處から醫師の普請を取持ちて　臥高
片町出かす畑の新田　元道
枯　鳥さしの仕合わろき暮の空　去來
同　餅好の友をほしがる春の雨　丈草
何好　我が小力に〆める卷わらい　然
物中は誰れぞと窓に顏出して　來
俳　茸狩の袂かぎあふ姉妹　草

初茄　寺領にはちと過ぎた百姓　李夕
同　上方で目が肥えたやらふしん好　呉天
此事が叶うた上の娵にせむ　葉文
百歌仙　道具もなうて夜食振廻　天垂
同　踊好き丸う成つたり崩れたり　文
後呼の女房の角に母の角　百陀
歌　鱸節句の向うまで來る　以之
何賣　飴賣も太鼓のないは噓らしい　麥士
娘より供を馳走の親心　箕山
笠　雨にはあかで浄るりにあく　蓮二
同　糸賣に花の都も氣のつまり　廣山
何取　生きて世に取後れたる老角力　其角
錦　もと吉原の情かたらむ　嵐雪
同　花鳥に夫婦出でたつ花盛り　角
一分けにならるゝ娵の仕合り　牛
炭　はんなりと細工に染むる紅欝金　桃りん
何持　一鎗持ばかり戻る夕月や　は

笠

何者　長居しておじやる月見は迂散者。　荷丁
咄しにとれて砧とぎるゝ　蛩平
出代に小のゝ小町はない筈ぢや　蓮二

天河

九代目の名主に立つて秋の風　麥士
今度の嫁も葛城の神　以之

醫者

醫者殿の嘘も頭の兀げかゝり　巴靜
るすにさへなれば姑の謗り言　平

笠

雁はれぬ日も湯に來る　連支

大工

屋根を先づ塞げば大工へらす也。　二
二三反親の代から作取（つくりとり）　里人

梅十

呼ばるゝ日にもかたい精進　二

木挽

平生も木挽の膝のくせにこそ　羽稲

屋根師

屋根炭のけふは安から庭を見る　東吾

四幅

嘘つきばかり皆揃うたり　栞舟
禿迄一歩にきつと畏まり　紀白

日用

朝霧に日雇揃ふる貝吹いて　ョ屋

炭

月の隠るゝ四扉の門　其角

祖。父が手の火桶も落す斗り也　同

桃

角。力ひいきの神も立方　松波

手傳

溫めて藥罐くさがる濁り酒　雨汀
鑿潰さるゝ邪魔な手傳。　芳水

何堀

大内に井戸堀をめす秋のくれ　一桐

壬

地震に轉ぶ松の下露　乍木
有明に母の里より文をこし　百歲
川一つ隔てゝ武。士に入交り　吏全

白扇

何につけても例の懃懃　元士

碁打

雨ふりをさて幸ひと碁。打連　荻人
山雀の鳴のと言うて子。供達　芝船

三日

納。所の瘤を見てをかしがる　除風

將木指

詰めてゐる物を笑止な將。棋指　林角

萬歲

萬。歲の姿ばかりはいかめしく　木因

ひな

村はづれ迄犬に追はるゝ　斜嶺
咄しきく行。脚の道の面白や　此筋
金持つた甥。の異見は花咲いて　風曲

難　一節は近江で仕廻ふ献立　野棠

大黒　叱られて大黒舞の拍子ぬけ　ソ守

生るゝや聲も慥かに男の子　其角

枯　取りちらしたる朝夕の酒　風國

せき候　節季候の年程有りて拍子ぬけ　横几

六部　一六部の宿をかさぬ所也　リ雪

梅十　聖靈に干鍋かゞする渚の月　蓮二

一唐人うたの踊をかしき　泊楓

順禮　露草に影もねてゐる順禮等　沾荷

むつ　かち歩の役に當る月の夜　鬼谷

忍夫是に忍べと古皮籠　芳津

遊行　一遊行に負けぬ砂運べとも　圓入

夕顔　月は今殘りて谷の松檜　リ角

一いぬる伯父御に尻の穗薄　宰陀

道心　一葛輪の秋に葛葉道心　牛潮

行脚　瓢たんに任せて垣は荒れ次第　五桐

一唐畫の樣に子供連立つ　涼ト

何參　一藥師參りの傘に夕ばれ　里紅

桃　花けしの咲きこぼれたる畑道　千梓

犬も見知りてなかぬ呑振　鯉計

後生願　一後生願といへば否がる　羽毬

梅十　瓜畠の番の代りに朝の月　泊楓

一錢がよいとてのする駕舁　有琴

ねぎ　一社領で歌もよめる禰宜殿　七雨

同　文書いて絹の仕きせも勤めから　蓮二

一年忌にはよぶ祖母の友達　毬

養子　養子聟一日二日物思ひ　氷花

髮の結目のかゆき姿見　仙化

むつぶし　駕を緣迄上ぐる武士めかし　介我

どことても侍衆の神以　過角

侍　猿にをられてをしむ笋　石人

なむ　あのぢゝはとにも角にも婆婆塞　許舟

腰元　一腰元が尻たゝく飼猿　岩翁

枯　おもはゆきつき蠟燭の立兼ねて　轍士

「遊行の前に並ぶ十念　集加

奉公　「直に此季もお側奉公　里紅

歌　草にさへ何時迄草と聞くからに　冠那

「舞は言ひたい事もひかふる　左角

相客の障子一重に灯の明り　リ雪

梅十　「伽した後のうつかりとなる　羽稲

出代　出代も馴染の花の咲揃ひ　呂杯

藪入　「藪入に出る若輩な髭　介我

むつ　見懸より鐵炮雉は手輕くて　桃りん

「子供の鳴の聞ゆ平城　東潮

使　戻りにというた使の未だ見えず　達支

天河　節句をよそに麥のうら町　三伍

伯母ながら姑なれば氣の置かれ　有琴

飛脚　「飛脚にまめな顔見せてやる　山流

奈良懸けて浪花へ後の十三夜　虚白

桃　「翁の鹿のぴいと尻聲　イ吹

日盛りは孫に吸筒提げさせて　濁子

ひな　「和田秩父とも獨り若黨　涼葉

懸乞　懸乞の來ては詞をあらしける　翁

水汲　「水汲が來てしるゝ飯時　吳天

三日月　尤もな異見にさする膝頭　友松

「團三郎は丸ねしてゐる　李夕

化粧からけふは見かふる娘の花　六芝

雨法會　彼岸の笠の夕藥師迄　胡洒

田打　言傳は田打に屆く片便宜　乍才

「けふは女房が氣をかへた髮　木十

續花　物前の廓のすがゞきやりはなし　鳥道

六尺　「足の揃はぬ醫者の六尺　柴翁

行灯に緣から姬を見送らせ　東羽

山かた　くもりてゐても厄窓の中　栗ル

駕舁　駕舁もかへぬ合點の相詞　右範

上手　「いつ作つても詩は上手也　支考

女房に只笑はれぬ覺悟して　丹野

俳　「尻はれ武士の二ばん生えとも　土龍

下手　｜豆ふは昔し下手と聞ゆる　野航
たそ　湯の山の出る日はぢゝの機嫌也　東羽
｜うばがいびきの我身ながらも　六之
上戸　付合は皆上戸にて呑明かし　嵐蘭
深　さらり〳〵とあられふる也　岱水
鴛で和尚は禮にあるかるゝ　酒堂
下戸　｜下戸を憎める雪の夜の亭　か兮
秋日　早咲の梅を我身にたとへたり　翁
｜嫁りせぬ娘の眉かゝでゐるソ　彈
｜又さたなしに娘よろこぶや　は
炭・　どたくたと大晦日も四つのかねコ　屋
無筆　｜無筆の好む狀のあと先リ　牛
蝉に年へて妻の髮かはり　松濤
續の原　囚獄あく日は盆の黄昏　才丸
乞食　乞食ども世は物たらぬ月の陰　舉白
穢多　｜頭數なる鎌倉の穢多　立吟
其俗　仙臺の米續き來る恆の產　雪

｜近き雲。居は禪の魂　吟
馬士　馬士をまつ戀つらき井戸の端　堂
深　月夜の髮を洗ふもみ出し　許六
火灯して砧あてがふ子供達　翁
雜　｜神田祭りに出す兄弟　其角
何番　月にしる利屋鞘師の頭付　フ船
｜所帶もへたる裡門の番　仙化
同　｜どの御番衆か馬ふれてくる　達水
桃　木戸一重中に祭りの立別れ　里風
｜聟の心のとかく煉酒　踏角
｜尾端に取るゝ女子衆の中　斗旭
庵記　齒をみがく揚枝の先の時鳥　任節
同　｜咋日の花見けふのゐすばん　露川
何守　稻妻に舟こぎ習ふ渡守　村コ
壬　露にけさばや着物の紋　百歲
子供等が傳ふる家を爭うて　翁
△人倫の字異體に用ひては越不レ嫌。

姫松の住よし詣で十三夜　任行
脚行　舟からそよぐ岸の萩のは　ホ道
姥鳴の人を泣かせて我れも鳴き　涼ト

△人倫越に佛、鬼、仙、天人類不ㇾ嫌。

(古今四)昔しより舊式にも部類を定めかねし、佛と鬼の打越には、假令人倫ならずとも、人倫の樣は嫌ふべき也。

▲人倫越に人倫噂だに不嫌。況んや世界異なる鬼、天女、仙人の類を、爭でか嫌ふべけむ。佛弟子のごときは常の人なれども、古人と釋部に入る故に、人倫とせず。古今抄にはいかなる了簡もて書きけむ、支考の付句にても嫌はざる事しるし。

みつわくむ老の姿も志賀の介　翁
さいつ比　まだけ〳〵と戸をたゝく風ろ　立ホ
佛　布袋とは彌勒𦬇の化身也　翁
一妾が號けしひよこなく也　安信

冬園　木綿はた果てぬ涙にぬらしけり　如風
同　訪はむ佛の其日近づく　知足
李もつ子の背裸むし　越人
ひさ　珍らしやまゆにる也と立止まり　か兮
同　文珠のちゑも槃特がぐち　人
娘は裡の口でせんたく　蓮二
笠　懸乞も尻つぼらぬは隙さうな　里紅
祖母の事　鬼　鬼はるすかと棚さがしする　達支
惡人の事　今のうき世に鬼は御ざらぬ　涼ト
山中　送られて送り戻せば明けわたり　咋なう
あの男には若い母親　琴之
仙　細長き仙女が姿たをやかに　翁
つばめ　茜をしぼる水の白波　同
仲綱が宇治の網代と打眺め　北枝

△姿、情、用の三、何にも不ㇾ嫌。

姿とは支體門の字類也。五體中の名處、及び病名等も此部に入る、下に證句あり。

。情とは心に思ふ事の詞をいふ。言語門の字類也。
。證句は已下異述懐越不レ嫌る所にあり。
。用とは態藝をいふ。貴賤、男女、僧俗の行ひをいふ。詞に皆々用にて、言語門の字類也。
右三類は多用なれば、百句百句ながらに續きても去嫌の論なし。今初心の爲めに半歌仙に相印す。人(人倫。人名)ウ(人倫噂)ス(すがた)忄(情)用(態藝)一行に、二三筋あるは上より次第す。

ス人　凩の身は竹齋に似たる哉
ウ　誰ぞやとばしる笠のさゞん花
ウ用　有明の主水に酒屋造らせて
　頭の露をふるふ赤馬　生
　朝せんの細り薄の匂ひなき　植
用　日のちり〳〵に野に米をかる
ウ　我庵は鷺に宿かすあたりにて
ス用ス　髪生す闇を思ふ身の程
忄ス用　僞りのつらしと乳を絞り捨て
用　消ぬそとばにすご〳〵となく
ウ用　影法の曉寒く火を焚いて
ウ　あるじは貧にたへしから家
ウ古　田中なる小萬が柳落つる頃
用ウス　霧に舟ひく人はちんばか
用　黄昏を横に眺むる月細し
用　隣りさかしき町におりゐる
ウ用　二の尼に近衛の花の盛りきく
ス用　蝶は葎にとばかり洟かむ

右一折の中、人事なき句は只二句也。凡そ歌仙に人倫十より多きはなし。さて昔し獅子門下の五竹、人事二去の新制をはじむ。鳳尾園是を難じける其の隙に、「初心に三變を敎ふる方便に、假りに設けし由」の返書あり。其の弊既に定式となり、彼の一派には見るきくと云ふ用も、覺ゆ聞ゆと云ふ情も、皆人倫と思へり。そは倫の字の義の不明なる故也。又諸門にも、噂と人倫を打混じたり。是皆

翁(おきな)を師とせざる弊也。

△人に一人越不レ嫌。

類　鷄の鶵なくかも一人かも　堤亭
　鳰てる月の大般若かゆ　其角

文月　足の毛を人むしれども關はなし　潘川
　雇人のかゝも出代る心やら　臺太
　尻も結ばぬをばの言傳　水胡
　かまはずにおけば痛も一人落ち　槐二

△一人に二人、二去。

七さみ　花に一人只人(たゞびと)ならぬ御目元　里冬
　二人靜の傍にたつゥ　中

△人音訓かはり二去。

砥　村切に役の人足詰めさせて　呂風
　藪をはなれず人(ひと)近(ちか)な雉　林紅

夏衣　鵙は歌をよむ人を笑ふ　南木
　降人(かうじん)となる魂の九寸五分　同

△人同訓、三去。(歌に四五)(へ)

拾　馬の廻りは皆手人也　野明
　ほたゆる牛も人にからるゝ　翁

同　菰ばかり身にまく人を見知兼ね　丈草
　花さくを旅すく人もなかりけり　去來

浪　人の噂は空の身の上　丈紅
　人まつ程に退屈はなし　先之

源　挨揚げて水田も暮るゝ人の聲　野水
　米五升人がくれたら花見せむ　嵐らん

三日　金ほしがるも人は尤も　除風
　たとへば人を駒鳥の聲　支考

新百　夜寒になつて人も戀しき　水甫
　きく人ありとびはをさし置く　仄止

本朝　音　負はれて來ねばならぬ老人　左把
　どちへもつかず今に客人　百朶

白たら(へ)　此橋で月夜をほむる人通り　北枝
　二　一里出て寢りやけさは旅人　萬子

山かた　談義の僧は越前の人　馬岐

小袖着た人はしらみも恐入り　馬岐
人の垢よる〳〵かはる一夜妻　嵐雪
硯石くぼしと人に見られては　秀和
其俗
けふぞから人天穿のはれ　雪
この手かしはの人みしりして　和
ならはしのうたを人のよの中　舟竹

△父母言ひかへ、二去。

さし合ひな事言うて伯母様　夏橋
桃
桃色にくむ乳母が矜裡　一酉
息子より母親の氣の轡むし　一庸

△子。二去（古へは両去）

秋は子供に任せたる秋　不撤
奥
稚子の這來る道を片付けて　不玉
ぶりうるをの子靜か也けり　玉文
とめて灸を居うる坊主子　山りん
しゝ
三弦でもてなす雛の女子客　音吹
山中
這廻はる子供に道具あぶながり　野曰

女子童への中に禪門　方錐
六花
なぶればなぶりかへす女子衆　流枕
笛吹いて遊びにありく手習子　麥士

△非人倫の名と、人名越不レ嫌。

風の身は竹齋に似たる哉　翁
冬
誰ぞやとばしる笠のさゞん花　や水
官名
有明の主水に酒屋造らせて　か兮
山吹や無言禪師の捨衣　藤匂
虚栗
腕を薪の飢の早蕨　其角
古人
子路が廟夕方や秋とかすむらむ　同
佛
無縁寺の寢釋迦祭りは節何過　萬子
浪
花の咲いたを見たる空豆　八紫
西行の歌はむら雨三日の月　牧童

△異人名。二去。（かに四）

（古今五）古代の有樣を思ひ寄せて當句の人の俤に寫さば、是も句毎にあるべけれど、其の世其の人の名をさしては、例の一二句に過ぐべからず。

△此一二句と云ふは歌仙の事也。古人の名は人よくさかしら立に付くる故に、かく誡めたれど風音ある作ならば、三四は苦しかるまじき事、證句にてしるべし。

一　宗盛の心よくもない春　似春
見渡せ　世のきこえ定家西行時鳥　翁
　賣人もしらず頼政の筆　コ屋
炭　妓王寺をみなみに取つて二尊院　同
　麥からの笛や布袋の夕涼み　露川
東花　靜一人をあら武者の中　仙角
　銅鑼のなんだ辨慶　汀蘆
三四　一休の狀に瓢の歌がある　きらむ
　最上を春よ澤庵の夢　山夕
小弓　直義の初子持たる丶月の照り　岩翁
　教經と波に聞ゆる叱り聲　其角
三　登蓮が下駄の歯ばに雨はれて　紫紅
焦　孔明の刀懸也鹿の角　其雫
　頭巾とらする通圓が像　角

△同體古人名。而去

冬　しばし宗祇の名を付けし水　卜國
風雅　六　日東の李白が坊に月を見て　重五
春　同　秋の和名にかゝる順　旦藁
六　紹鷗が瓢はありて米はなく　や水
越　俳　此筋を翁と曾良と二人連　廣千
七　連俳も生物知の孫平次　如晴
いせ　美女　月花を墨に染めたる妓王妓女　茂秋
　菊の日の楊貴妃の名に悋氣して　溫故
鎌　同　繪も楊貴妃の浴みうるはし　夜谷
　白みそをいとふ迄こそいよが妻　千梅
奥　僧　など寂蓮は物うかるらむ　支考
　花の雲慈覺の寺の七ふしぎ　不玉
夕顏　佛　花の陰達摩の外に何もなし　圓入
　苔の下より出山の釋迦　卜治　同

△官名、武名、仙、俗名（各折去）（百に三）

八夕　武　頼朝公の七年の時　之川

信玄をはじめ何れも我を折りて　寸昭

須磨そ一　仙　日影を盗んで仙境に入る　似春

蝦蟆鐵拐や吐息つくらむ　同

新百　俗　長助どのは今の長庵　園友

主従が同じ程なる長太郎　水甫

餅搗　同　雪に馴れたる駕の百助　乙孝

孫六が吹革祭りは雪もふり　佳峯

見渡せ一　同　所立退く浪の瀬兵衛　似春

又爰に孔子字は忠治郎　同

[十七] 六藏が生駒の山の雲早み　同

伺公する例の與三郎大納言　同

百句に俗名(ぞくみやう)四は此外になし。

△老若。面去（古へは折去）

やへ　老松は常盤のみかは振りのよき　猶始

[十一] 魁を望むに老の辭退なく　和道

花摘　老らくの本卦返りを祝ふらむ　其角

音訓　[五] 老功を歎く程に軍して　其角

桃　同　連歌の口も古い老僧　序柳

忘れずに老木の花もひがんから　乎哉

○

桃盜　若い衆のそつと覗いて戻りけり　北枝

[九] 身代も若木の花の咲初めて　柳士

若い時思うた事は無分別　巴分

冬梅　家渡(わたまし)を見による花の若世帯　貞阿

[九] 小便を恥かしがるも若いから　五雪

藤　旅やせの髭も若やげ菊にけふ　三伍

[十七] 若い娵並んでひよんな事ばかり　左什

△達、衆。面去

櫻　ばゝ達の又より合うて茶の匂ひ　風絮

[十八] 兄弟子達のあとに連立　知子

草刈　上﨟衆の夫はきれいに菖草　北枝

[十七] 爰許はいせの檜垣の旦那衆　收螢

桃　そろ〳〵と十夜着飾る參り衆　夏橋

砥

一七 大工衆に傍輩の名を立てたがり　里紅
一八 よい衆の見たがられたる秋の暮　臥高
越前衆の遅う立たれし　正秀
折々見ゆる叟の家中衆　去來

渡

一七 松のあちらを通る公家衆　卯七
一十 寒うなる秋をよいとはよい衆也　素民

△誰、師、獨、使。而去

山かた

默つてをれば誰れもさびしい　右範
一八 雪隠にゐるとは誰れもしらなんだ　六之

草刈

山里に誰れまつ風の吹く嵐　浪化
誰が家の子ぞ少年の花の時　支考

○

拾

むりに望みを懸けし師の坊　そら
一十三 奈良にも恥ぢぬ脇師なるらむ　同

山かた(へ)

紙帳から顔出す塗師の咄し好き　白狂
一三 居風呂のぬるいはお師の馳走振　之

○

三匹

一八 娘ひとりを玉に育つる　汀蘆
我れ獨り忘れてをれば皆わすれ　杜草

○

八夕

一十 すぐられた此使にはちんば殿　文釆
なければ使の戻りかねたる　何笠

(古今四)使百句に四とあれど、如此而去の自證あり。

△己、我。五去

山かた

小いわしも己が門をば直ぐ通り　白狂
土器で祭るな己れにや茶碗酒　同

○

汐

一三 山を見る窓から我れを寒がらせ　柳江
眠ければ我身をつめる春の日に　柳詞

はの雫

一三 願て練る子と我舞へば月　青雨
我等も見たが苦しかるまじ　古井

春

一六 莚二枚も弘き我庵　越人
我春の若水汲みに晝起きて　同

△男女。音訓かはり五去。

(古今圖)男女音訓にかはり百句に四、異體數限りなし。

(星月夜)女。ヲウナ。メ。デヨ。ニヨとかはり、折に一つづゝ女鳥、女松、女波等の異體面去。

▲如此ふれども、支考にも其角にも音訓五去、同訓面去の證句あり。異體は三句の字去勿論也。

蓬　面白の遊女の秋の夜すがらや　翁
　　歌よみて女に鎰贈りけり　同

いせ　月花を墨に染めたる妓王妓女　茂秋
　　女房の伊達は捨てぬ蜷川　卜國

このは(へ)　谷羽きてはやる三國の女郎町　許六
　　粉川床しき女夫順禮　獨

○

やへ　御坪の内にその子召さるゝ　度征
　　くつわよりせく男尙したはれて　文石

△男女同訓、面去。

一此梅　吉祥天女も是程の月　翁
　　けさの雪貧女一文が粘をとく　同

冬梅　邂の花に女中の宵催ひ　竹夜
　　おとし言よそに狂女の高笑ひ　千鳥

古拾　出女の玉依姫は是とかや　似春
　　小町がはての女がたとも　同

○

雪光　水くむ男菊をたのしむ　楚雀
　　股立に公家の通りの男ぶり　百花

△武、賤、稚　面去。

鶴　理不盡に物くふ武士等六七騎　芳重
　　此國の武仙を名ある畫に書かせ　其角

○

みの　顔垢れたる賤の子供等　良品
　　賤が家も鎰仕まへば弘く成り　同

○

むつ　子供の三十稚名をよぶ　馬耳

稚きは田舎の水に色黒し　馬耳
△君、客　面去。

續虛
齡今をしれ君が若松　嵐雪
君流されしあとの關守　翁
手の下の君にぬかれて晝の月　冬市

むつ
此足は君かと問うて冷火燵　雪

○

祭りの客に殘る相口　廣三

笠
隱居の客の歸る相談　諷山
寢る客かけつ投つの亭主振り　文砌

浪
さく花にけふはお客といはればや　桐之
△妻、姬、親、祖母　面去。
弟(おとゝ)に許(ゆる)す妻の盃　口力

句餞
獨り簾をあみくらす妻　沾力
雇人に交りて姬も木棉取　菊旦

さみ
七夕のよめりに月も笠をきて　玉らん

○

笠
調市の親の來ては吹聽　米花
親のあみだも今は不馳走　同

○

同
年越に出入のばゝが禮に來て　里紅
寢つ起つぢゝとばゝとが花の春　同
△雇人、奉公、坊主、弟子　折去。

山かた
髭はあれども供は雇人　白狂
雇人はばゞもめつたに叱られず　東羽

○

奉公をさせても親の苦はやまず　同

同
奉公がらに似せぬ矜付　狂
奉公ぶり出代る前の際立ちて　り由

匂
姉妹ながら妾奉公　同

○

よう廻る坊主あたまを振廻し　凉ト

汐
江戸御ざれ坊樣御ざれせまきらひ　同

○

天河　素讀の弟子の茶を汲みに立つ　鷹仙
灸居ゐあふ弟子比丘尼達　達支

△同季百句二の物

匂　腹のふくれた踊聞ゆる　り由
雨乞の踊の代に屋根葺いて　同

笠　大工衆もけふはあちらへ出代て　里紅
出代の子に似ぬちゝの片律義（かたりちぎ）　葉柳

右歌仙の例也。季をかへては如此歌仙に許し、同季は百句ならでは許すまじきか。

△異支體越不レ嫌。（古へは三去）

（古今二）身に毛といふ類は、二句去に許すべし。

▲目の越に涙も嫌はねば、身に毛の類越（こし）を嫌ふに及ばず。支考詼ひ卷の例を見よ。

逢　ふる雨に老いたる母の涙顔　工山
一輪さきし芍藥の窓　東藤

目淚　碁の工夫二日閉ぢたる日を明けて　翁
籠作る傍にあぶなく目を塞ぎ　桃り

茶　松ばの埃のにゆる鍋ぶた　翁

目首　雉笛を首に懸けたる狩の供　同
目のうち重く見やりがちなる　野徑

ひさ　けふも亦河原咄しをよく覺え　り東

目顏　顏のをかしき生付也　泥士
ぢゞを覗けば目を明けてゐる　許六

笈　貰うたる赤の强飯のやんはりと　り由

目口　用にも立たぬ口たゝく也　汶村
眺むれば鼻から寒し月のかげ　宇中

東山墨　隣りながらも遠きうどんや　右範

鼻顏　寺參りせぬやらぢゞの顏も見ぬ　范フ

炭　よい樣に我手で算を置いて見る　り牛
正直是はあはぬ商　桃りん

手肩　帷子も肩に懸からぬ暑さにて　やは
さんない尻の餘る小たらひ　徐寅

匂　引飯のさん用立つる男部屋　六

尻肩　肩で風きる後の出代　由

焦
胸腹
脊頭
俳手
涙黛
桃白
笠
鎌
冬

田舍間に足を伸せば胸は不二　専吟
借りた鏡はどれも南天　秋航
暮の花二王の腹をたゝくらむ　其角
―背中は寒く頭うちける　木白
時雨たる旛の巾着便りなき　梅額
手をひかへたる猿澤の魚　配力
歌よめと皆々ゑぼし傾けて　白
―涙もろしや賤が黛　半殘

△髭に髪　二去。

衿に押込むおとがひの髭　海動
笠とれば前髪ゆるむ草鞋懸　翁
踊のかみに鏡さしあふ　ソ琉
胥も髭もそられず旅労れ　里紅
髪をきられてなつかしうなる　紫遊
るすの間は詠へておく作り髭　夜谷

△髪　面去。

月にたてる唐輪の髪の赤枯れて　か兮

やへ
奥

―六
白かみいさむ越のうど刈　か兮
番にあたらぬ馬の髪かる　林鴻
尺の髪白き翁の物語　示右
ゆふかとすれば只ぬくる髪　重行
九
黒かみ重く東風に吹かする　呂丸

(古今四)目、鼻、耳、口、手、足、此品は支體の體なれど、平語の用多ければ折をかへて四つばかりも有るべし。

▲かくいふは大凡の論也。支體には輕重有りて一例ならず。譬へばマナコウデとは目だてとも目、手とは耳立たぬごとし。

△手、口、目　三去。

さる
類

卯の刻の箕の手に並ぶ小西方　珍碩
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
せゝる手の乳房爭ふ蝸牛　其角
蛸引に手際さえぎる巴なり　百り
五日月　粟ひえも手を待つてうなづく　野泊

三十日拂の手にもたまらず　其友

東花 (へ) ぬきれ手を取出してかる晩稲哉　一吟
二 棒で手傳ふ川舟の舳　寸虎

砥 菰僧に大事の手ども所望して　林紅
手の際ばかり殘る松明　ろけん

○

巳 小僧のくせに口答へする　土芳
人に取付く浮名口をし　良品

○

頭陀行 囁いて居れば内儀の目がとまる　芳草
鷄のひよこを眉目に連れあるく　り斧

△頭、尻、腹　面去。

○

卯辰 秋の夕べを頭なぶらせ　り東
七 花見よと局頭に誘はれて　江介

○

其鑑 よその咄しの出れば尻馬　イ流
八 いさかいの舟は遥かに下り舟　慈竹

○

類 腹切のしかも笑うて山は花　其角
五 回船の腹へよせたる蛋小舟　潘川

本朝 青漬にゐのこの腹を持兼て　三遥
七 嬲られて將木に腹は立たぬやら　升角

卯辰 晝寢せぬ日のくせにむか腹　乙州
十 月の前いたむ腹をば押しさすり　小春

△顔、足　面去。

梅十 今に醉ふ寢起の顔に春日影　梅光
五 言傳を届けてたもる顔でなし　有琴

拾 顔のほくろを悔む乙の子　路通
八 泣顔をうつす畑の忘れ水　夕菊

山かた 紙帳から顔出す主の咄し好き　白狂
親父の顔もけふは朔日　六之

○

續原 魁魁紙帳の外に足もれて　琴風
五 消えぬ足跡のなきさがの雪　扇雪

○

市梅　松茸取の登る足元　紗柳
　　叶はぬ足にはむる水足袋　ウ鹿（五）

△肌、躶、皺、腰　面去。

○

其袋　新ふろを入れ和らげよ花の肌　嵐雪
　　桃の葉しぼる湯肌美し　笠凸

○

山かた　躶にならねば角力は詮なし　白狂
　　水ふろよりも瀧に躶身　栗几

○

匂　皺の手に琥珀の數珠の尊さよ　木導
　　前に皺よるかいわりの帶　同（八）

金龍　腰で風きる鑓狹箱　仲二
　　中乘の腰にさしたる一節切　其笘（十）

△身、心、三去。（歌に四）

さる　金錣と人にいはるゝ身の安さ　翁
　　花とちる身は西念が衣きて　同

續花　笠ぬひの菅に憂身はやつれけり　大漁
　　袖香爐人には見せぬ身のひねり　和專

同　相そりに若殿原の身だしなみ　コ十（四）
　　身にあぐみたる寺の浪人　文石

○

たて　酒の遺恨をいふ心なし　等躬
　　月のひづみを心より見る　そらん

百歌仙　見えぬ道具の心むつかし　一介
　　風の心の直る行水　一顯

同　轉んではならぬ心にはれ小袖　虱的
　　照降りのある心やらわせられぬ　梅先

むつ　操なる人の心にうけばりて　桃りん獨
　　けふの月旦那の心定まらず

△氣　三去。（歌に四）㋬

匂　元氣を得たる尾張商　許六
　　氣を付けて見る小の十五夜　同

其鑑　膳事も若い大工に氣は置かず　始流

聖靈も月夜の婆娑に氣の晴れて　一字
東六　是は氣味よう秬にふく風　蘆生
奉公に氣をかねてとやかくゥ　中
このはヶ　乞食六部の脚氣煩ふ　聽寫
色氣なき西八條の作功者　列孚
物前の留主は内儀の氣設ひ　蘆元
笠　糸とりに花の都も氣のつまり　廣山
空病は咳氣の神もしらぬふり　元
氣の取憎い寺のばゞ樣　山

△洟に洟紙　五去。

洟紙は貰ひ遺ひの木綿坊　太岱
類　奈良を勸めてやまぬ水洟　青峨
一歩二つを洟紙におく　支考
そこ　肘張つて洟かむ奴は彼の男　胡中

△涙、夢　五去。(古今同)

棺舁きおくる晝泪なき　立志
一橋　思ひにたらぬ涙もどかし　同

夕顔　此蘭の露涙かよへり　李陀
さよ姫の涙はぐちに落ちにけり　同

○

むつ　拔刀にておはれたる夢　桃りん
榮えうにならぬ元日の夢　冬市
次勾　何を覺めて蛤のねて夢見たる　才丸
晝夢の飯たく程に夕ぐるゝ　其角

△輕病　二去。(一方輕キ同、歌に三)

あら　空蟬のかげの煩みの恐しき　同
やけど直して見しつらき哉　同
已　腹の鳴りくる水のかはりめ　半殘
碓も病人あればかさぬ也　同
卯辰　月の前いたむ腹をば押しさすり　小春
許さぬ物か妹が疱瘡　牧童
根太潰して角力崩るゝ　木導
勾　息災で花見る人は羨まし　馬佛

△重病　面去。

旅　終宵尼の持病を押へけるや　は
　　只ゐるまゝに肱煩ふ　同

△尿屎、雪隠類かはり　面去。(百に二三)

(去來抄)凡兆曰く。尿屎の事も申すべきか、翁曰く。嫌ふべからず。されど百句といふとも二つには過ぐべからず。

(ハスノハ風)今も世上の有様を見るに、牛馬は市朝に屎を落し、人も鑓持せながら路傍に小便するは、常式の事にして、糞汲みの雪隠のといふは禁ずべからず。小兒の尿屎は格別の事也。其の餘人の前につくばひて、屎する人も放屁する人もあるまじ。

三笑　小便の目利に空の腹立てゝ　琴之
　　一六　雪隠かとて庵相千萬　蓮二
　　　糞取に來て手紙屆くる　里紅
笠　六　傘も小便すればさゝ惜い　諷山
　　　こえの土産に服部の新　童平

笠　十　見て置いた小便桶の在處　蓮二
文操　こえ舟といふを始めて嗅ぎ玉ふ　同
　　　急ぐ心は雪隠である　兎士
白たら　雪隠につひ落したる百の錢　從吾
　　　厩こえの匂ひも風になく雲雀　同
長ら　今の返事はせどの雪隠　呂杯
　　　階子の坂にこまる小便　紅
難　痲氣が噓をついた雪隠　觀水
　　　こえ舟の匂ひは大和河内迄　乎哉
　　　連を待せて長い小便　素然

近世尿屎の類を曲節と心得、一句の作意もなく、前句に寄もなきに、好んで用ふる人あり。甚だ誤り也。作に雅味なく付にをかしみなくば、決して用ふまじき事也。

△異述懐越不レ嫌。(古へは異も三去)

述懐とは情の事なれば、七情皆しかれども、文家の習ひに心ならぬ事のみをいへり。そは浮世の常

にて、物は滿たざるにこそ趣き多かれば、表も越(こし)
も嫌ふべからざることわり也。

印　佗しさに心もせばき蚊や釣りて　翁
　髮きる處を夫(つま)は押へる　觀生

わび うき涙　初茄　入山の茨に落ちしうき涙　そら
　數兎にもれて獨り見る月　翁

身の恨 戀の恨　きぬ〴〵は夜なべも同じ寺の鐘　呂丸
　宿の女の姤き物かげ　ら

壬　かたみに貧を殘す陸奥　式之
ひん こじき　懸香を小袖の振にぬひ含み　村コ
　三弦彈いて並ぶ乞食　翁

冬　あるじは貧に堪へし廬家　卜國
　田中なる小萬が柳落つる頃　ヵ兮

ひん かたわ　きりに舟ひく人はちんばか　や水
あら　我儘にいつか此世を背くべき　越人
　ねながらかくか文字の歪む戸　傘下
不遁世 不忍　花の賀に堪へかねたる涙おつ　同

夏衣　うば玉の夜着に恨みて只戻り　南木
　借工夫する金の出處　同

うらみ うきよ　戸隱の力及ばぬ世也けり　支考
其鑑　淺ちふの露に恨みの歌を述べ　池柳
　鯛のあたまは得手ぬ庖丁　千中

うらみ ひん　貧乏もかせぐ峠へおはへかね　ろ洲

△同懷述懷　三去。

賣　涙に顏を垢す目藥　翁
目なし　二杖でうつ座頭が砧上手也　嵐雪
さみ　四座頭は次に誤つた顏ぎれ
同　四年の目のしれて見えぬを不審がり　一字
難　瞽女(ごぜ)のゐる所には悪い路地の奥　東紋
かたわ　四通司のるすにくどい聲　由之
　金にはなるゝ腰のやゝ寒　吾仲
　二質におく十二一重の歌詠みて　范コ
ひん　肩衣(かたぎぬ)に花も咲かねば世を捨てゝ　支考
夏衣 世の恨　長生(ながいき)に世の嬉しさも悲しさも　慈竹

□異山類越不レ嫌。(古へは三去)

山類とは山、岑、尾上、嶽、岫、峽、峠、岡、坂九折、岨、谷、崎、巒等也。此類各かはりて越を許すは、異水邊、異場類の越の論なきに同じ。

衛　星崎の闇を見よとやなく衛　翁
　舟調ふる海士の埋火　安信
　築山のなだれに梅を植ゑかけて　自笑

舟竹亭　右も左りも蜑造る也　玄虎
　わき出づる雲より下の時鳥　舟竹
　尾上にかゝる鐘のつき初め　翁

金龍　戀種の白根吹出す山おろし　是汲
　苧纑の粘と世には名のたつ　東鷲
　閙連も舟も着いたる後れ市　曉梧

梅十　此樣な峪に碓氷が越されうか　七雨
　何やらしれぬ鳥の一聲　呂杯
　山門に大木の花咲亂れ　羽稽

俳　横根嵐に谷深き月　信德

山三嶺　山高く湯舟隔たる水遠し　翁
　淺間の烟り輕石がとぶ　信章

△山、三去。(歌に四五)

(古今図)古抄に山は三句去にて、岑は一座に二也といへど、山を三句さらば岑も麓も岨も谷も三句さるべし。然らば海も沖も川も澤も都て三句去ならむを、山と岑との去嫌は、卄餘の違ひ有りて、百世の惑ひは此故也(文約)

▲こは御傘を難じたる迄の詞にて、自らの誤も如此ならず。譬へば人の字は惣名にて多用なれば、三句去り、首足の類は小分の名にて、其用少く目だつ故に、句去も異なるごとく、山岑の論も同じ事也。

桐葉亭　いちごふむ山より村の雨はれて　如行
　樒籠に見よと摘みたる山の草　翁

笈　見えた通りはをば舁の山　風國

初茄　しぐれも露も北山の庵　去来

山そぎ作る宮の炎替へ　そら

つやにくもりし春の山彦　同

浪　山陰のかねも暮れぬと鳥の來て　桐井

落着は山田の秋の舫　二川

白たら　出代に山の女を置合せ　巴兮

湯の山に襖はづせば秋の色　野棠

四輻 名所　恨めしの此砧やとうつの山　東恕

山崎の花見てくらす彌三郎　凉卜

越　思ひやる山のあなたのたび衣　汝東

かすむ時鷄も鳴かず花の山　許舟

山まゆを着ては杉並よけたがる　九皐

金龍　一口の檜負ふ山に宵の月　貞佐

山獨活は人に五寸のくさび也　梧枝

山かた(へ)　又しても〳〵出る那山　白狂

あたゝか過ぎて山も笑はず　六之

蟬吹流がす藪の山風　巴兮

山こと 歌仙六

御祓の威光で越ゆる鈴か山　巴兮

月ながら宿かりかねてかゞみ山　秋之坊

花のさく時は無藝な山やある　汀廬

茸狩にみの着て月も三笠山　北枝

詞ぞ殘る山々の雪　筆

△峰、谷、島、而去。

かも　法印は詠めて御ざる峯の花　鷗笑

雪はまだ峯に殘りて岨の花　東守

○

東六　岩に響いて雉は谷より　大川

谷の松峯は月夜の晴上り　同

江戸　秋を深める谷の碓　只尺

花ぞ今谷中へぬくる人は人　同

○

このは　土用風島の屏風もかをるらむ　國音

島原のむほんに花をやり習ふ　壯奚

△山類付句

あめこ　山畑の木ねり色づく風の音　翁
　石地の坂をかへる宮坊　珍碩
つばめ　柴かりこかす峰のさゝ道　翁
　あられふる左りの山は菅の寺　北

□異水邊越不レ嫌。

古式は水邊三去なる故に、非水邊物の論ありて、翠簾の菖にも水邊のせんさくあり。蕉門には都て異水邊を嫌はざるは、世界の中水なき所なければ也。

春　立つてのる渡の舟の月かげに　冬文
　蘆のほをする傘の端　筆
磯舟　磯際にせがきの僧の集りて　旦藁
花摘　川舟の綱に螢を引立てゝ　そら
　鵜のとぶあとに見ゆる三日月　釣雪
川水　すむ水に天のうかべる秋のくれ　珠妙
あら　〆供奉のわらぢを谷へはき込む　や水

　段々や小しほ大原さがの花　野水
谷川　人負ひにゆく春の川ぎし　荷兮
あめこ　畚提げて舟の柿を捨ふらむ　珍碩
　はす年頭の髮もたばねず　之道
舟水　をり並ぶ增水時の夕まぐれ　昌房
蕉　つき流す氷の扉五六枚　東潮
　鴛にくらぶる兄娵の櫛　序令
氷水　身へかゝる橋の玉水心迄　其角
かも　すむ月の川へうき名も流されず　そ後
　盆は佛をせゝる時也　鷗笑
川海　冷まじき此北國の親しらず　正住
梅十　晝よりもぞんじの外の舟便り　梅光
　肴賣つたが今はかはるゝ　伯楓
舟瀧　花のまゝ至を付けてたきの下　七雨

△水邊、三句續。

句　蓮池の中にもの花交りけり　蘆文
蓮　水面白く見ゆるかるの子　荷兮

荷兮亭六句

さゞ浪やけふは火灯(ひとも)す暮待ちて　翁
舟あてゝ櫂もぎらるゝ磯際に　か兮
汐の早きを越ゆる洲走(すはしり)や　水
海鳴りて山よりくもる暮の月　翁

花摘
今宵又月には催ふ舟の数　遠水
水せきあぐる松の片濱　岩翁
かつをきる小磯にむれて秋の風　其角

續虚
君流されしあとの關守　翁
明暮れは干潟の松をかぞへつゝ　擧白
命を思へ舟にはふむし　其角
起出でゝ手水つかはむ海の端　嵐雪

△川、水　三去。(多例省)

深
汐さしかゝる星川の橋　翁
今は敗れし今川の家　嵐らん

あら
山川や鵜の喰物を探すらむ　落梧
川越の歩(ぢ)にさゝれゆく秋の雨　や水

ふり
せんたくの自由を川の流れ行く　巻耳

焦
白川ときくより白しむくげ垣　巻耳
鷲部屋のぐるりは西の川原にて　其雫
めつかいも花を尋ねてくり矢川　紫紅

○

續さる
俎板のすゝきに水を懸流し　りホ
草のはの窪みの水の澄みちぎり　馬莧

誰
水鳥の酒の接待立止り　其角
浮鳧(うきかも)の頭からげの水櫛ぞ　才丸

さる
㊇ 五六本生木つけたる水溜り　凡兆
でつちが荷ふ水こぼしたり　同

山かた
居ふろの新湯も水に成りかゝり　東羽
水もきれいにはしの山吹　同

焦
雫も水の濁る目薬　楓子
岩くゞる山椒魚も春の水　同

△舟、五去。(かに三)(古今同)

小文
百里其まゝ舟のきぬぐ　翁
障子重ぬる宿がへの舟　同

蓬　馬の乘つたる舟の狹ざよ　鷗歩
　　つなげる舟に有明の月　蘆文

浪　此日釉舟ばないかと聞きにやり　桐井
　　舟あしも靜に成つて薄月夜　一庸

續新　茨の上にあがる川舟　東棠
　　ね耳に水の出舟呼び〳〵　白毛

櫻山　舟着なれば何やらのかざ　方堅
　　岩せの川の舟も通らず　是通

△浪、面去。（五巳上）（古へは百句四）

古拾歌仙　只今のぼる浪の味鳧　春澄
　　鼠あれゆくよさの夕浪　翁
　　逆に這ひよる淺草の浪　同
　　あつ湯を流す末の白浪　同
　　風匂ふ小便壺に浪こえて　杉風

色付　島のけしき胡粉によする花の浪　同

一百句　又をかし磯うつ浪の子安貝　同
　　手拭の雫に浪や垢すらむ　同

　　冷も發らず大浪のあと　杉風
　　是かのきしの浪草の浪　同

藤　さゝ波の笄に年も押寄せて　三伍
　　松の山路も藤の波路も　半荵

次匂　踊浴衣の裾にたつ浪　才丸
　　蜆江の磯等岸等は白浪に　其角

星月　蛙なく江はもとさゞら浪　松阿
　　心にてまゝしき中も浪立たず　松弓

△流、瀧。面去。

拾　かも川の流れに胸の火をほさむ　コ齋
　　朝霞賢者を流す舟見えて　翁
　　流れに破る切子折懸り　下

衛　一郷の雲母流るゝ川上に　重辰
　　にし売の油流るゝ薄氷　如風

○

このは　瀧野の筋のひゞくはりま路　惟之
　　光つてくわつと早き瀧川　杜占

△橋、面去。

白たら　―九 此橋で月夜を譽むる人通り　北枝
　　　　板橋に夕べ泊つて直ぐ通り　長緒

頭陀行　―九 懸けかへてすゞしさも尚橋の反　左月
　　　　はし懸くる花見使の俄事　杜州

草刈　―十二 はし通る木履の音に目の覺めて　從吾
　　　　木曾路のはしの文もさい〱　桐之

續原　（へ）纖橋の腐れ落ちたる霧の跡　松濤
　　　　―二 夕霞矢矧の橋の短さよ　才丸

△海、浦、濱、面去。（古へは百に四）

七さみ　―八 是から見ればびはの海面　之仲
　　　　いせの海白子は不斷花咲いて　凉ト

桃白　―十 水眞白に海へ出る川　左栁
　　　　いづの海岬に舟をこぎ入れて　千川

雜　―十六 月雪に近江の海のなんどりと　ふ船
　　　　南風なる横雲の海　同

むつ　海よりも霞の登る岑の坊　桃祇
　　　　神軍とや海の眞中　衣吹

同　―一 氣遣ひな海を枕に住みこなし　桃りん
　　　　海面に根もない畑り持つてゐる　冬市

○

拾　―十二 けぶらで寒し浦の鹽やき　路通
　　　　西行の像を拜する浦の月　宗波

○

山かた　濱の肴に鳶の暮れゆく　右範
　　　　たび人も雨に遊んで濱のかざ　同

△池井、面去。（古へは百に四）

翁　‖ 鴻の池花見々々と貯置き　乙州
　　　　蛙をはなす新しき池　ホ角

○

一橋　―一 榊持田中の井戸に水飲んで　一品
　　　　汲まぬ野井戸は毛物埋みし　清風

□巽場越不〻嫌。

是も山類水邊の、越の論なきに同じ。

深　衣うつ砧は馬の寒がりて　翁
　こえ草烟る道のきり雨　北こん
砧場　古戰場月も靜に澄みわたり　嵐らん
衛　氏人の庄園多き花ざかり　業言
　駕幾むれの春とゞまらず　如風
園田　田を耕す邊りに山の名を問うて　安信
續さる　むしごつる四條の角の河原町　い然
　高せを上る表一箇　曲水
町橋　今の間に鑓を見隱す橋の上　臥高
同　持佛の顔に夕日さし込む　水
　平畦に桒を蒔立てし蔓跡　支考
家の場　秋風わたる門の居ふろ　然
天河　又其川へ戻す行水　洞也
　萩原へ阿保から出あふ連もあり　百川
山川　山も案山子を笑ふ苗代　そろ
蓬　日かげ山雉の雛を追はへ來て　叩端

　清水をすくふ馬柄杓の月　閑水
山野　面白き野べに鮓うる草の上　東藤
金蘭　凩の寒さ重ねよいなば山　落梧
　よき家つゞく雪の見處　翁
山里　鴫のゐる里の垣根に餌をさして　荷兮
やへ　砧の里のおてゝ戀しき　凡兆
　首とるかとらるべきかの烏鳴き　示右
野里　野中にまつる錢の有丈　好春
　野原にて愛宕參りの戻り雨　千那
鎌　横ほとゝぎすよこの尻聲　木導
野濱　田植舟濱の女の棹馴れて　許六

△野、三去。　㊀

鶴　あら野の牧の御召撰みに　其角
　つれなき聖野に笈をとく　キ風
　松茸植うる野屋敷の山　米繼
勾　よしのも枯れて冬は來にけり　毛紈
難　野送りの空にしられぬ袖の雨　杼柳

野分たつけしきに梨の張かひて　素然

續の原　御湯の笹刈野べのさゝ原　調和

[二]花人に苗賣つるゝ吉野山　勇招

△何里、里、面去。

このは　三坂三里に蚊母なく也　團晉

[四]丸い月押流されて何百里　壯奚

[十三]都は一里よの中の奥　白狂

東山墨　十里の山を白書院より　過角

[十]甘酒の箱根八里を馬の上　右範

○

一里の炭賣はいつ冬籠　一井

あら　[五]里深く踊敦へに二三日　長虹

暦よむ人なき里も安くゐて　半殘

俳　[八]敵の首を贈る古さと　園風

[九]烏丸といふがお里の事さうな　可致

其灯　一針づゝに近い里おり　蘆丸

立つてあぶなき里の一つ家　骨平

其灯　[九]蘭から稲の中へ里坊　麥林

蕪ひくなるしがの古さと　こせむ

印　[九]杉菜一荷を分くる里人　翁

△原、村、面去。

浪　吉原に馴れねば少し胸騒ぎ　谷水

[七]なぐれては小原の柴も晝下り　一點

桃盗　浮島が原とて殘る月の色　巴分

[九]しの原と申すもこゝら五里三里　柳士

○

文月　指合もかまはぬ村の名を付けて　栗几

山一重村は屏風を引廻し　嵐枝

△市、町、辻、面去。

市の便りに色々の用　仲志

梅十　[六]市のない日は店先の靜にて　有琴

すゝ掃の夜は居ふろに市が立ち　達支

笠　[七]染物を城下の市にあつらへて　蓬二

冬景や人寒がらぬ市の梅　濁子

拾　―十二
秋ちりかゝる市原の骨　翁

雑　―いとゞや師走の市烏なく　其角
―十六
市人の肩に棒おく懐手　同

○

續さる　―相宿と後先にたつ矢木の町　支考
―五
むしごつる四條の角の河原町　い然

梅十　―御通りのあと迄町はきれい也　呂杯
―十一
家作のわるい處が河原町　有琴

笠　―足輕町は杉の生垣　蓮二
―
町の調市の口にや勝たれぬ　達支

○

百羽掻　―三弦の木辻もうらはなく蛙　蓼太
―三
白雪に占ひく辻もなかりけり　同

△庭、場、面去。

(古今四)庭、折をかへて四」と云ふは古式のさた也。支考の巻にも面去の例あり。古式には庭と場も七去なれども、蕉門には其さたなし。

行状　―七
夜露にも打れて庭の月と花　乙州
大庭に六具をしめて並みゐたる　木節

雪白　―十五
のうれんをはづせば直に月の庭　松宇
川狩の褌を庭に解き捨て　蟠此

○

櫻山　―十一
雨のふり出にさわぐふしん場　小春
渡し場かはる唐きびの道　支考

山かた　―十四
渡し場もあちらからこす藪一重　栗几
左すまひの是はふしん場　六之

△田、畑、五去。(古今同)

あら　―四
秋の田をからせぬ公事の長引いて　越人
田にしをくひてなまくさき口　翁

寒菊　―
涼しさは堅田の出崎よく見えて　同
田の中にほらせぬ石の年ふりし　同

拾　―六
初秋や海も青田の一みどり　同
田面にむれし鷺の羽をのす　知足

○

つばめ㈠ 非藏人なる人の菊畑　翁
（三）小畑も近くいせの神風　同

梅十 瓜畑のばんのかはりに朝の月　泊楓
（六）雪まだ殘る嶇のはた打　里紅

△田に畑かはり二去。

山かた 新道に畑をこぬる大工小家　白狂
寺參りではなうて田廻り　同

△道　三去。

雪丸 日傘さす子供誘うて春の道　そら
落武者の明日の道問ふ草枕　翠桃

一橋 土堤に付いたる寺の裡道　こ春
主をあはれむ道の・べの數珠　同

續花 汐のくる道は通さぬはかりごと　乾什
ト養の死なれてさびし歌の道　こ十

（四）息杖のあちらへむけば若狹道　鶴嵜
桃 からつく道をげたの不拍子　同

△石、岩、砂、土、両去。（古へに折去）

一橋 春の雨石の覓の音すみて　清風
（六）石居ばかりおもと一本　同

同 （七）石買に木賊刈るなる道分けて　才丸
田の中に耕殘（すきのこ）したる石の塚　風

雜 （八）石切立てゝ門の雨露　彫棠
緣取を押へる石の初嵐　同

拾 （九）石ふみかへす飛こえの月　そら
石碑にねて象潟の月　風

○

春 蕨にる岩木のくさき宿かりて　越人
（四）岩の間より藏見ゆる里ゃ　水
岩茸取りの籠に下げられ　旦藁

○

續 （十）ひら砂にすぐつた樣な松のはえ　浪化
小砂ぐるみにうつす鯉鮒　荻人

○

土をつくねて鈂をやく　路通

衛　―四　陽炎の金原つゞき土肥えて　知足

□異居處越不レ嫌。(古へは三去)

(古今四)寺に居所は二句去、御門は居處に三句去
(同二一)體用の差別にて、家に垣の類は二句去と云へり。

▲蕉門には異居所に嫌なき事は自ら知りつゝ、爰は古式を從容して書きたれば用ひがたし、其證下にあぐ、倂居所とは、人の住所なれば「宮、堂、藏、湯殿、雪隠。門、垣、壁、築地、又棚、建具、簾等の類は勿論居所にあらず。其類は證句にも及ばず、異居所を嫌はざる故は、巣の越に穴殼の類を嫌はざるに同じ。

小文　―無住に成りし寺のいさかひ　翁
　持てなしの新剃刀も錆くさり　岱水
寺家　―土たく家のくさき着る物　史邦
花摘　―歌よみのあと慕ひゆく宿なくて　釣雪
　―豆打たぬ夜は何となく鬼　呂丸
寺宿　古御所を寺と成したる檜皮葺　翁
拾。　尼寺の春雨くらくしと〳〵と　昌碧
　釣瓶なければ水のとぎるゝ　聽處
寺軒　夕顔の軒に取りつく久しさよ　越人
桃□盗　せどの戸を誰が又明けて飛乙鳥　巴兮
　紙細工には雨の日ぞよき　そ由
寺戸口　夕飯が否とは寺へお歸りか　吾吹
其□鑑　上段は高麗縁にみすを捲き　竹洲
　雲兀げかゝる空に日のあし　千中
間寺　櫻さく寺に御講の仲間われ　渭流
庇　二重庇のはしに蜂の巣　宜由
やしき三續　繋がれて番の屋敷は日も永し　此柱
笠□　―女はよせぬはずか山寺　廣山
　あの見ゆる此方の橋に咄しあり　達支
寺二階　―二階の雪のはけばふり込むり　紅
し□ゝ　―矢にふしぎたつ湯やの看板　知角

門口
三續
笑きわたす菖も九萬八千軒　昏及
一分の金に店を追はるゝ　觀水

梅□十
明日の用意を床の活花　羽稲
出代の内は内儀も襷がけ　有栞

間の内
三こし
ねはんの齋に寺の追從　七雨
藤橋も風のある日は越えにくい　梅光
内は疊を敷いて呑ぶり　呂杯

さみ□
作事
造作寺の蟬に晩鐘　千梅
酒と名の付けば酸でも呑みたがる　玉らん
非番の隙に窓の切張　佐角

天河□
店軒
千種も店をかざる初月　北溟
みの笠に及ばぬ雁のたび馴れて　其芳
十軒たらず是も一村　支水

其鑑□
產家
えん
產所へはこちの碕はひゃかぬか　田龍
小鍋のかゆに猫の狠せき　山市
掃きのけて箒をたゝく緣のはし　右兮

巳光
有明の七つ起きなる藥院に　半殘
ひさごの札を付渡しけり　翁

いん
槇戸
秋風に槇の戸こづる膝入れて　良品

花故
二つ家はわりなき中と緣ぐみて　一泉
さゝめ開ゆる國の境目　翁

家間
草戸
糸かりてね間に我がぬふ戀衣　北枝
あしたふむべき遠山の雲　雲口
草の戸の花にもうつす所にて　浪生
△屋　三去。(歌に四五)(古へは七去)

あつみ
月出でば關屋をからむ酒持ちて　そら
鳥屋籠る鵜飼の宿に冬の來て　翁

俳
しゝが谷へも豆腐屋のゆく　支考
あたごの燈籠並ぶ番小屋　翁

冬
黑木ふすぶる谷かげの小屋　北こん
水の岩屋に佛造りて　嗒山

ひさ
見知れて岩屋に足も止められず　泥士
月花に庄屋をよつて高ぶらせ　珍碩

其日
ぐちより金の延びる豆腐屋　從吾

晩の月見をさぞ庄屋殿　吾由
つくも　―晝ねもろくにさせぬ小借屋　玄敲
店屋と見えて數に白壁　據遠
笠　―晝飯に一丁程ある大工小屋　蓮二
名古屋より遙々ぎふへ屋越して　同
△商號の屋　五去。（古へは折去）
浪　―けあげの茶屋の首尾も一段　支考
紺屋のせどを流れくる川　牧童
文月　―名月に酒屋のねるは不心得　き音
呉服屋は花にこてふのうり詞　栗儿
花摘　―青屋が涙爪におゐしむ　仙化
たび姿直ぐに揚屋の月を見て　其角
―包錢やる湯屋の三方　ふ船
雜　龜屋の夜着も人の代ざかり　其角
△家音訓かはり　二去。
翁　―勤めとて直に院家の廻らるゝ　りホ
縄でからげし家邪みけり　同

藤　―ぬり笠の花も昔しの片山家　吏研
假家の所帶運ぶ家渡　同
△家、宿、門、門　五去。
雪丸　―尋ぬるに火を焚付くる家もなし　そら
砧打たるゝ尼達の家　同
笈　―二三軒家の後の花ざかり　許六
月雪に飛彈の金森家ふりて　支考

○

傘　―各武士の冬ごもる宿　翁
住みかふる宿の柱の月を見よ　そら
笠　―順禮の札置いてゆく報謝宿　諷左
木賃の宿はかべも雨もり　箕白

○

梅十　―門跡のお成りに山の奥迄も　梅光
門前の闇に小僧のゐる狂ひ　り光
炭　―門で押さるゝ壬生の念佛　翁
門〆めてだまつてねたる面白さ　同

○

やわ　門田の稲のもはや色づく　乙甫
大津せつたの門にじやらつくき　邑

笈　門〆めてはひれば寒き松の月　卓袋 ―七
有明けて叙ほす門の秋日和　土芳

△戸、垣、五去。

白たら　緣に戸板のころぶ夕月　北枝
柴戸明けて欠伸して出る　同

むつ　戸板に張りし庚申の札　桃舟 四
冷水の錠を捻くる井戸のふた　同

山かた　春戸からも月門からも月の影　白狂 三
我口に戸は立てずして大工ども　右範

○

賣　ちる花に垣根をうがつ鼠宿　嵐雪
柴垣の古き都は荒れにけり　翁

藤　辛棘もゆる岨の猪垣　隆五
垣の詠めの胡瓜淺瓜り　紅

やわ　さし覗く双六寺の一重垣　白笑
馳走は垣に杓杞の和物　播東 八

△壁と塀かはり　五去。

山こと　さく花の壁にうつりて皆白し　嵐青
寺に似た家に塀から白つばき　荻人

深　太刀長刀の光る塀ごし　桃りん ―七
釋迦に讃する壁の懸物　杉風

△住、窓、柱、面去。

あら　こそぐり起す相住の借　落梧 七
山伏住みて人叱る也　や水

拾　雪毎に梁たわむ住ひかな　岱水 ―
誰れかすむらむ碑の銘の露　雨洞

○

柿　窓に火灯す十年の雨　呂物 ―十二
一寢入して其後は窓の月　丈草

續虚　框をひそ嵐の窓の月澄みて　其角 ―十四
たゝぬ戸立つる稲妻の窓　露荷

○

汐

小便に片手懸けたる椽柱　柴友
朋輩の中に立てたる此柱　柳詞

△店、棚、疊、面去。

六行

蒟蒻の仕にせの店も荒果てゝ　東雄
十五
姬娘茶店あがりの山戻り　壺天

○

さる廻

たつ春の茶初穂汲んで棚の上　種文
十二
埒の明いたる禪の盆棚　史邦

江戸

古寺の疊をふめば物こける　風葉
十七
姉共に留主と見えたる袖疊　同

難

秋已にむほんを工む四疊半　杼柳
七
月かげを入れて疊に蘭の匂ひ　丈志

△庵、隣、折去。

こせむ

桊より花に庵を結びかへ　そら
十四
庵より見ゆる町のしら壁　致畫

○

ふり

黒谷の隣りに白きけし畑　閑鹿
何事も花の隣りの懸に　素冠

三笑

隣りには内儀のるすの薄月夜　播東
よい所へ隣りの人の來かゝりて　昨なう

△風呂　折去。

梅十

新湯の僻義のはてぬ居ぶろ　泊風
浴衣一つにふろの夕ぐれ　り紅

山かた

山寺の湯ぶろは熱い名の立つて　栗ル
忘れた秋をおこす水ぶろ　野航

△普請　折去。

三日

見た所輕いふしんと人はいふ　麗線
普請して見せねばせぬも同じ事　宗知

△家敷、家根　折去。

雪光

折節は目に觸れてよき下屋敷　智貞
家しきの衆のけふは布引　松吹

同

中で取つたる家根の麥から　許六
雨乞の踊りの代に家根ふきて　り由

炭

||椋の實落つる家根くさる也　や　は
戸でからくみし居ぶろの家根　同

貞享式海印錄三

山　齋　述

□戀

(本書)戀句の事は古式を用ひず。其故は嫁、娘、治郎、傾城の文字名目にては、戀といはず。只當句の意に戀あらば、文字には拘はらず戀句をつくべし。此故に他門より戀を一句にてすつといへるよし。戀は風雅の花實なれば、二句より五句に至るといへども、先づは二句有りて陰陽の道理を定めたる也。殊更文字名目に拘はらず。情を専らとする故に、強ひて四句も五句も並ぶる時は、必らず打越の離れあしく、增して一卷の變化に拘はる故に、多くは二句にて仕廻ふ事也。

▲強ひての字一段の眼也。法に任せて續くる時は百句も妨げなし。此故に強ひてする事を禁じ

貞享式海印錄三終

たり。蕉門には二句に限るとな思ひそ、此下に戀を續くる法を説くを見よ。

(古今二)今の俳諧にも、戀は必らず五句ならむとて、古抄のいへる戀の詞を並べなば、連歌の戀の仄なるには似ず、俳諧は例の平話にて、女子童べの耳にも立つて、吟ずるもやゝ遠慮がちならむ。(上下略)

帶の先にそりやと手拭

思へばや思はぬ人のつれなくて

前句の作者に其戀はなけれども、後の作者の眼力より、偖はと戀の姿情を見付たれば、彼れと我れとの二句と成りて、戀は決して二句也といふべし

▲古風よりは一句捨と思ひけむ。蕉門にては是にて一結の戀調ふ也。其次は續くるも斷るも趣にあり、此段の詮ずる所は、戀は心に在りて詞にあらずと也。

(ハセヲ談)昔は(古式の事)五十句百句といへども、戀句なき時は一卷とはいはず、端物とす。かくばかり大切なる物故に、昔戀句に泥み、僅か二句一所に出づる時は、幸ひとして却つて卷中戀句稀れ也。又多く戀より句しぶり、吟重く、一卷不出來になれる故に、戀句出付けよからむ時は、二句か五句もあるべし。付けがたからむ時は、強ひて付けずとも一句にても捨てよといへり。かくいふも何卒卷面もよく、戀句も多く出でよかしと思ふ故也(約文)

▲爰に一句と云ふは、前句起しの事也。當句より起こる戀は、決して一句にては捨てず、又戀句より卷しぶりてと云ふは、初心のさた也。去來何故に慮り過して、卯七に戀續の法は傳へざるぞ。今も此文に恐れて、戀を續けぬ人多し。

●戀歌仙に一ヶ所より四ヶ所迄(虚栗)(アラノ)にも四ヶ所あり。

●百句には一ヶ所より七八迄也(鶴步)には八ヶ所出たり。百句に只一ヶ所の例は、櫻山伏、浪

代進尊のみ也。

●無戀の卷は、みかむ色五十句、江湖集長歌行梅十論、十歌仙皆也。其外歌仙に無戀の卷は夥しけれども、源氏已上には無戀の卷未だ見えず。熟ら無戀の卷を閲するに、甚だ故あり。彼の萬葉に相聞と云ふは、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の眞心を聞えかはしゝ歌をいへり。是後世の集の戀の部に等し。

されば妹脊のよしの川ならでも、もろ人の信通ふ中は、言流しゆかばみなかく戀ならむ。無戀の卷も此理あり。或は父子の情、或は君臣の契りを結ぶ句など續きたる所は、彼の語らひの述べがたく、其瀬をこしては戀のよるべなく、邂ま前句ある時はあだ人にまさなく付破られ、終にいはで止みにしと見ゆ、是を宗匠の心得は、未だ發句なき時より、其日の摸樣を腹に工みて席につくべし。さて句出で脇定まり、第三と變じ行きて、曾ての工み施し難く、夫に就けて又新に工をなす、神、釋、戀、無常、名所、旅、四季、月花の配り等、須臾も油斷せずといへども、連衆の心區々なれば、思ひ設けぬ變あり。或は懲し或は勸めて、其の興を失せず、遂に一卷滿尾す。是天理に隨ふ正風の設き也。如此くにて無戀多戀種々の趣き、席毎に變はる也。必らず古例を桝として、己が拙き儘に無戀の設きする事なかれ、さとて應ずる前句なきに戀せむは、いはで止みぬる方勝りなむ。諸の設きも皆しかり。

△戀　三去。（古今同）（七部及多省）

蓬

双六の恨みを文に書盡し　翁
琴爪をしむ袖の移り香　叩端
髮おろす侍從が娘衰へて　桐葉
面白の遊女の秋の夜すがらや　翁
灯火風を忍ぶ紅皿　端
川せゆく聲を角に結分けて　葉

續虚
―三 歌よみて女に蠶贈りけり　翁
　枕屏風の畫に涙ぐみ　叩端

深
初秋半ば戀はてぬ身を　露沾
侘びてはすがる僧のふり袖　嵐雪

句
懸乞に戀の心を持たせばや　翁
目の張に先づ千石はしてやりて　酒堂

同
惣嫁追出す肌のさむけさ　り牛
女子ばかりが物思ひゐる　許六

萩露
傾城の心中咄し一ぱいに　徐寅
物くひの先づ口元に惚れ初めて　汶村

三笑
十ながら古き卵はあだ思ひ　り牛
瘂の戀涙こぼして見せにけり　こ屋

三匹
死ぬ事を忘れて戀はせぬ物を　伯兎
前髪はなくても袖はひく合點　蓮二

むつ
戀をする天窓に顔の取合せ　涼ト
おらがのは悋氣もせいで拍子拔　杜草
世の哀れ哀れがらぬも無情（はしたな）き　桃りん獨

續花
傾城も僅かに佐渡の鉛坂
先づ城之介せい文に入る　老鼠
心中ひとり待ちかねてたつ　九十

△戀の字　面去。（古へは折去）

俳嘸な
―七 戀の土手雲な隔てぞ打またげ　信章
戀の淵水におぼるゝ人相あり　同

古拾
―八 神代も聞かず百文の戀　春澄
戀訴訟不審ながらも指上ぐる　同

一須磨
―九 ひよんな戀可笑がりてやなく蛙　翁
戀衣紺の袂にはし折りて　同

むつ
―十 戀種やいつの畑を責崩し　鋤立
擧句に戀を擧ぐる挨拶　同

同
―十 大粒な目を細うする戀。　りん
手をかへて骨はをれども成ぬ戀　同

句兄
―十 紛らはしきは爵と戀病　紫紅
米搗の故郷遠く戀もなし　秋色

新百
夜寒に成りて人も戀しき　水甫

―十一
闇の地藏も戀のたゞのり　反朱
戀すがら酒宴踊終日　藤白
武藏
―五
親父の詔て戀忘れまつ　同

戀猫にても句法同じ。偖近世戀の便りなき前句に投込と云うて「細うする戀と云ふごとく「イめる戀「尋ねゆく戀など〻付けて、戀慥かなれば一句にてよしと罵り合ひけり。そは戀の字出物に成りて拙し、假令古例ありとも、其の得失を撰びて學ぶべし。

△非ㇾ戀戀の字、戀句越不ㇾ嫌。

猫、鹿、雉の妻戀、或は親を戀ふ、友をこふる等の戀の字は、戀句の越を嫌はず。そは妹脊の戀だに三去なれば、異生異用の戀の字は嫌はぬ理也。

●戀をする鹿には角の取合はず　一イ
御公家の巣の小柴垣より　之仲
七さみこ
なら坂やその手はくはぬ化心　里冬
同
―さりとは涙胸にせき上げ　朴人

△戀を績くる心得。

小文
夜遊びの更けて床とる坊主ども　史邦

此夜遊びは、月草のうつろひ易き若法師の、旅に浮かれて一夜の露に袖をひぢけむと見て、

百里　其儘舟のきぬ〴〵　翁

旅と見て舟と趣向し、きぬ〴〵と作りたるは、當の戀に輪廻をたつ作者百錬の工夫也。偖陰陽二句の戀は濟みたれども、其儘と云ふ詞、未だ戀情有りと舟の字を咎むるに、こは船頭の湊懸りに、彼の龍宮の契りを結びしを、思ひ計らぬ順風より、心片帆に別れゆく樣と見て、

挽割りし土佐栈木の片思ひ　倚水

栈木積の舟長とはいはでしれ、土佐より百里は室か明石ならむ。爰に一變化の戀を結べば、卷の飾りは調うたれども、かく迄力を入れたる前句に、無下の遣句せむは、次の作者の拙からむと、其場の用を深く窺ひ見るに、土佐栈木といはゞ、御殿

ふしんに集まりたる男の、彼のお局を稲妻の光りなす見初つれど、雲に棧し戀渡るべきたつきもなく、假家の此方に彳みて思ひ煩ふ姿ありと見て

寄りも添はれぬ中は生壁　邦

と付けたり。凡そ其の始め「逢ふ戀ならば、次は「別るゝ戀と見かへ、三は「隔つる戀と變化し、四は「恨む戀とも、五は「祈る戀とも、六は「化戀、七は「嫌ふ戀、八は「隨ふ戀、九は「初戀、十は「契る戀といふ樣に、一句々々に戀情を轉じて、趣向に老少、男女、貴賤、强弱、文質、虚實を分けて續けゆく時は、百匀千句といへども、變化自在なるべし。

△戀を放るゝ心得

凡そ戀を續くるは、句面に戀語ある限り也。假令付合たる句意には、深き戀情有りても、一句放して常の事なる句出でなば、そを限りに戀を止めよ、續くるも斷つも自然任せ也。人皆さる法を知らざる故に、或は緣なき所を强ひて續けむとし、或は殘情ある句を無理に斷ちて、前句の本意を失ふ事あり。委しくは己下に擧げたる戀の終の付句を考へ見よ。

△花に結ぶ戀（△花○月）（七部省）

花に戀を仕懸るは法外と制するは古式也。蕉門にはさる事なし。花に仕懸るあり、花より起るあり花を起すあり、何れにても一座一句也。

雪丸　○あの月も戀故にこそ悲しけれ　翠挑
花仕懸　露とも消えむ胸のいたきに　翁
△錦繡に時めく花の憎かりし　そら

此等に戀ならでもすむ所なれど、側なき故に續けたり。

三匹　─おれが嫌ひは芋と若衆　支考
ひろ〴〵と内にて物を思へとや　反朱
みのきては戀笠きては戀　汀蘆
△花守が娘を花と折りかゝり　乙由

○｜身を平蜘に忍ぶ夜の月　ふ船

雑　△きるなとは花に詞の情也　千化

｜酔うて吹ゆるか梅の下ぶし　其角

卯辰　△○｜式部が夢は泣きつ笑ひつ　乙州

月花は男なぶりと詠むべき　北枝

歌　｜茶碗も無事に悋氣鎮まる　桃如

△傾城の二字が消ゆれば花ぐもり　茂秋

拾　｜情しらずの袖を引裂く　翁

△冊子の葉末にぬるゝ花筐　丈草

○

ひな花起り　△花盛り静が舞をかたみにて　翁

｜鶯諷ふ蝶の聲　杏杏

△きぬ／＼を馬上に眠る花盛り　重行

奥　｜黒髪重く東風に吹かする　呂丸

△花賣の後姿のおもはゆき　正春

翁　｜若紫は誰がゆかりぞや　同

百歌仙△○二つある恨みと戀を月と花　[illegible]瓜

｜幾人も來る出代の者　京水

むつ　△あつかましちりふの君も花の數　桃りん

｜腰と柳は同じかげぼし　東潮

瓜　△岨の花治郎は駕を下りたがり　茂秋

｜土筆にて文はかゝれず　吾仲

○

卯辰花起し　△花はちるものを眺めて涙ぐみ　乙州

｜人は思ひに角おとす鹿　小春

拾同擧　△難波なる花の新町來て見れば　い然

｜文に書かるゝ柳山吹　野明

衛　△鳥邊野に蔦とる女花分けて　桐葉

｜妬める筋を春をしまるゝ　芙言

句兄　△あの樣な女に成つて花の陰　沾德

｜山吹折つて三人の戀　其角

擧句(あげく)に始めて戀を出さぬは、後なくて不興(ふきよう)なる故也。こは前にある上に、起句(きつく)なれば擧(あげ)に苦しからず。

△待宵

只待宵と云ふは、君まつ宵の事にて月にあらず。此故に月に付ても打越しても仔細なし。又待宵の月と作りたる句も、趣によりては戀あり。

　いとをしき人の文さへ引裂きて　不知
　　般若の面を傍になく　翁
桃白 ○―待宵のかねをよそにや忍ぶらむ　如行
　　―藥尋ぬる月のさ莚　左柳
○姉妹窓の細目に月を見て　安信
衙　名を待宵と付けし白菊　知足
　思ひ草水なせの水に投入れむ　重辰
奥　―娘なぶれば衿を繕ふ　己百
　待宵に枕香爐のほのめきて　同
○―横川に月のはつる中空　不玉

△賣戀（多例省）

遊里の句は古雅に、長高く作るべく、必らず今めかしき詞を遣ふ事なかれと誡められたり。さるに近世の句を見るに、客は毎々「野夫なれど、「噓の涙に、「粹となり、「居續け、「惣揚い騒ぎより、「目を盗む女郎、「間夫と囁き、「金好の仲居「衿につけば「太鼓は耳を啄り「紋日、「身揚の談合、「姉が人ぢゑより、「根引身受の立引起り「伯父の異見も聞入れず果は「勘當の身の「缺落とや、如此は浮世のさがなれば、文人の語りゆく言のはならず、夫をしも俳諧と心得つるか、そは戀の本情には疎き人ならむ。

難　覗く拍子に簾はづるゝ　佳六

此場は遊女の化粧部やなるに、そを憚かりなく覗く人は、必らず馴染の客なれど、さすがに取亂したる容を恥ぢけむ。偖此客は理窟の底を打拔きし文人と思ひよせ、其場に其人の興ずる詞を作りて、

　廓へは未だ渡らず列女傳　沂青

と付たり。爰に一變の戀を考ふるに、廓の情動かざれば、列女傳の人數に惣揚の妓女を對し、彼の

唐土の頑女に、此遊びを見せばやと、洒落に情を覆して、

菩薩こゝには卅と和らぐ　杼柳

卅とはぼさつの冠を合せたる略字にて、徃の極樂の廿五卅さへ、大和の假名に和らぎて、歌舞あるをと、前句へ心を持たせたり。又一變を考ふるに、卅の字遊里を出でざれば、爰にはと云ふ押へ詞を、牽頭の口拍子と見立、卅と云ひさゝと云ふを、米酒の口合に取り、左に大杯を持ち、右に酢物を戴いて、一座をはやす詞を作り、

酢にも成り酒にも成りし米の恩　知角

かくは續けたり。四句廓を出でずして變化自在也かゝる句法を得る時は、方丈を探りて千句を卷き、法界を攝して三つ物に縮むべし。

冬

雪の狂呉の國の笠珍らしき　荷兮
衿に高雄が片袖をとく　翁
化人と樽を棺に飲みほさむ　重五

─遊女四五人田舍わたらひ　そら
落書に戀しき君が名も有りて　翁

つばめ
─髪はそらねど魚くはぬ也　北枝

江世、戀二ヶ所出す時は、一つは必らず實戀と定めし人あり。殊に野俗の實戀を付けむよりは、戀なき方尊からむ。假令一卷悉く遊里のさたとても、句每に變化あらば、何の忌嫌ふ事かあらむ。

根本七所の内

其一
笑顔よく生自慢の一器量　こ齋
─舟に夜な／＼命あきなふ　そ堂
─をし恩愛の澤を二羽たつ　其角

其二
棧造り曲輪の罪を指をらむ　才丸
きぬ〴〵の衣薄きにぞ泣く　齋
いかなれば筑紫の人の騷がしや　堂

其四
─狂女吟ふあとしたふなり　淸風
情しる身は黃金の朽ちてより　翁

其五
─しのぶの亂れ虎百たび　角
浮世とはうき河竹を辱かしめ　丸

かく三四五と續きたれど、句品及び變化いとよし。

△落つる戀。

今世の落人の付は、大方「子中、「爪はづれ、「さとなまり、「辛苦、「添遂咄、「勘當の侘、「伯父坊懸り、村のせわ業は、「餅屋か寺子やか、二三句の渡り判木に押したるごとし。

くるわを出ればあしのほの風　慈竹
夏衣　親里の栫も今こそ川向ひ　七里

是浪々のうきに堪へかねし身の、故郷近き伯母の在所などに暫し身を屈めて、赦免の便りもがなと。明暮女夫が親里の首尾まつ様也。かく含む時は風音あり。

坊主くさゝは落ちた上にも　一イ
七さみ　懸物を諸惡莫作とよみ下し　涼ト

坊くさきわざを見出して付たり。

鶴　筑紫迄人の娘を召連れて　り下
みろくの堂に思ひ打ふし　キ風

待宵のかねは落ちたる草の中　翁
友よぶひきの物うきの聲　仙化

△男色。

男色亦手柄もの也。句の表裡にさびしみをかしみをこめて、其情哀れ深く作るべし。

むかし咄に冶郎なかする　許六
深　きぬ〴〵は宵の踊の鉛を着て　翁
行灯に樂書したる借座敷　河菱
浪　冶郎の影に枕ひかふる　北人
帷子の秋のけしきの色めきて　市仲
若衆の念じまつこそ袖の露　釣壺
西花　踊の聲をよその思ひ寢　雲鈴
小屋敷ならぶ城のうら町　去來
砥　言分のちよつ〳〵と起る衆道事　同
莖の重石に賴む蓮生　呂杯
長良　金剛が留主は陰馬の綱解いて　羽毬

○

俳
あら何

寺登り思ひ初めたる衆道とて　信徳
十
治郎揃ひの紋のうつり香　信章

△乞食の戀。

古拾

園生の末葉ならす四つ竹　千春
馴れてやさし乞食の妹せ花に蝶　信徳
鶯鳴いて菰のきぬ〴〵　翁

桃白

小類の憎ききぬ〴〵の月　雪丸
樣々の戀はまて貝空せ貝　支考
乞食と成りて夫婦かたらふ　翁
さし向くるせ中の雪を打拂ひ　蘆雁

東。揭

巷いとゞこほろぎ囀むし　可柳
乞食の戀の晝冊子になる　馬紅
姿見の水も頭日濁川　普東

△盗人の戀。（七部省）

花摘

鳴子おどろく片藪の陰　釣雪
盗人に連添ふ妹が身を泣きて　翁
祈りも盡きぬ關々の神　そら

古寺の瓦ふきたる軒あれし　己百

蓮

夜な〱契る盗人の妻　梅餌
涙より雨にしめりて襲重く　露蛩
秋の夜なべの更けて洗足り　紅

笠

盗人も戀に着かへて袖の露　米花
半把のわらの亂れそめにし　蓮二

△老の戀。

老の戀は、信深く心やるせなき趣もありて、一ふしはづかしの杜の、立忍びたる方もあるべし。

菊蘆

野鳥の夫にも袖のぬらされて　翁
老のちからに娘ほしがる　渭川

衡

人しれずしらが天窓に神いぢり　知足
夢見たやうな情忘れぬ　同

文月

臍金に疝氣も有馬見たがりて　り紅
後の女房に年隠す也　嵐枝

桃

隠居にはちと若過ぎた伽　白史
未だ初夜もならぬに花の宵ね好　由之

△後家の戀。

拾

夏やせに美人の姿おとろへて　そら
─靈祭る日は誓ひはづかし　素英

誰

─顔見しばかりあはで明くる夜　皐白
秋風に暇の狀を書きちらし　湖水
─聖靈棚に背く世の中　青井

俳諧切

聖靈に言譯もない髪結うて　大睡
─男交りに參る三井寺　梅路

三匹

─後家ときくより思ひ初めてき　里臼
祈りつゝならずの宮に年くれて　蘭少

草苅

─後家の瘡の針に名のたつ　秋之坊
打敷の小袖にほれた物ならむ　支考
─木曾路のはしの文の再々　桐之

雜

古君のやり手となりて恐しき　其角
─戒名しらで祭つる戀人　沾蓬

○

雪白

露深草にしよぼ濡れてたつ　李夕

露に濡れてたつは轉んで起きし樣と見立、人に戀ひらるゝ時は、のりたる馬爪づくといふ古言を思ひよせ、落馬に遍昭の俤を取りて、露深草の姿を立て、

　名に愛てをれるといへる女郎花　和蕉

と付たり。さて一變を按ずるに、花を折るは墓詣りなれば、其亡人は盡未來と契りし中と見て、

　手向の水の淺からぬ中　南江

○

桃白　ひとり孀の冬のこしらへ　濁子

霜ふる男やもめに引替へて、冬拵への暖かなるは憐れむ人の澤ならむ。四十島田の宿あたりに、うき名も恥ぢぬ年の程と、其の化人の詞を作り。

　梟の身をも隱さぬ戀をして　岱水

と付たり。偖前句の虚をしづめて、准へたる梟の姿を立つるに、こは鳥井前の夜發にて、其たつきに親鳥夫鳥もはぐゝむらむと、夜半の嵐の哀れを催

ふして、

　深くらべむ橡落つる也　翁

と付たるは、其杜の観想にて、其女の實情ならむ。

　△僧の戀。

僧の戀、聊か心得あり、只何となく作り出でたらむは仔細なし、清僧を落す體の事は、心なきわざならむ。

山琴　　戀にやつれて里へ歸るか　柳　士

こは宮仕の中に身をやつしゝ女郎花の、都の空も秋更けて、故鄕をなつかしみて、今立歸る道行ぶりには、誰れも落ちなむ色あるは、彼の傘好のいふ罪深き女と見立、

　男鹿さへ思ひ戀がるゝぬり木履　音　吹

鹿とは山中の樣なれば、ぬり木履の人はお城の裡山に、御殿女中の野遊びと見立つるに、其傍に思ひ戀がるゝ男は、城北見門際なる、何院の法師ならむと其遊びの趣を述べて、

　若僧あまた是も茸狩　巴　兮

と法師の情を他より汲みたるは作も亦いとよし。

　○

本朝　　君に思ひの色の鱒とや　麥　士

此句の姿は、手爪に鱒ありて捧げつゝ口合する酌取ならむに、客は門徒の僧なれば、先づ輪げさを取りながら、其の女を往生さすべき、互に通人の出合と見て、

　折針に輪げさもかゝる戀をして　壷　平

次には、もの字を咎めて衣も肌着も脱ぎたるは、浴みする樣と見立、其座に浮氣の戯ふれをよせて、

　扇を隱す行水の留主　涼　之

としたり。此扇いかなる人の記念にや、

　初戀に文かくすべもたど〳〵し　こせむ

―――

印　　世に遣はれて僧の媚めく　翁

　提灯を湯女に預くるむつまじさ　享　子

深　――地をするばかり鴛のふり袖　そ　ら

行脚　五六人天台坊主色めきて　石菊
紫も見事淺黄も十八九　五桐
―酒を破らば邪婬妄語も　午潮
駒下駄の音を覗けば小娃衆　浪化
そこ　我等ごときのみそすりの戀　支考
一息に酒二三盃仕り　萬子
―藪のあちらに味な比丘尼　呂風
宇右衞門が惚られ顏にせき拂ひ　化
―あれほど下手な笛もあるまい　路健

△養心觀想の戀。

同　鳥羽玉の髮きる女夢に來て　叩端
―戀を見破る朝顏の月　翁

蓬　戀をたつ鎌倉山の奧深し　露沾
―しぼる袂を匂ふ風蘭　翁

句餞　美しく顏生つく物うさよ　越人
尼になるべき宵のきぬぎぬ　路通

ひな　月影に具足とやらを透し見て　翁

忙しう見するも戀の一思案　汝村
膳にほろりと涙つれなき　許六
尼になる宵はひそかに洗ひ髮　木導

△うはなり打。

俳　酒の月後妻打の御振廻　翁
嘸な　―隣りの内儀相客の露　信章
つらからむ鬼のめかけの袖枕　杉風
思ひのけぶり果は釜焦　翁

一色づく　菜刀の先に恨みは盡すまじ　風
―後妻打や相槌の露　翁

△下女の戀。

民間の語を詠ふは俳諧の表なれども、最も易からず、取分き下品の戀情は、心高く誠深く哀れに作るべし。昔物語の卷々、萬葉しふの種々にも、誠の戀は大かた賤の身にこそあめれ、さるを、野卑の詞を遣うて俗情をよせむは、作者の心あさまならむか。

入夕　際墨に名古屋の顏の殘りゐて　之川

こは年の程三そぢに餘り奉公に身を持ちはふらして故鄕に歸り乍ら但氣なる緣も定めず、あふ人見る人に馴々しき女と見立て、あだ人の噂を作り。

　松の葉に寢る戀もするかな　イ人

こは薪部やの樣也、下品の情を續くる事、誠にかたき故に、古人大方二句にて止めたり。さるを次の作者の器量より、取りも直さず其場に其情を一變して、

　壁土のほろりと物を思ひ初め　筆

と付たるは、なるもならずもと仕懸けし化枕に、惜き思ひのうらうへして、末の松山の誠起しけむ、壁土とは其始めの騷ぎに、松ばの枝はねて、袖にも顏にも落土の懸かりし樣也。手あらき賤の戀なれども、かく作る時は、いと興ありて、源氏さ衣の係を續くるよりも、なか〳〵をかし。

　幾月の小松がはらや隱すらむ　翁

一須磨　―とへど岩根の下女は答へず　似春
　礒淸水汝流れをたてぬかと　翁

次匂　竹の戶を人まつ下女が寢忘れて　才丸
　―打つぞ礫に恨みこたへよ　翁

桃白　隙くれし妹をあつかふ人も來ず　同
　―飯たく事をわびて泣きけり　昌碧

深　―よごれし胸にかゝる麥の粉　翁
　馬士をまつ戀つらき井戶のはた　洒堂
　―月夜に髮を洗ふもみ出し　許六

渡鳥　―見事な帶に襦半一枚　先放
　君はなつ我は淸十郎と冬の來て　去來

三匹　―其餠搗のあかつきの戀　支考

△幽靈といふ戀。

　白ければとて幽靈のさた　反朱

白ければと云ふを、裸身を見られし女の、噂する樣と見立、

　行水の時面目を失うて　汀蘆

如此噂に噂を重ねたる句は、次には其人に向うて咄す様と見る事定法也。されば化人の其女をなぶるさまならむには。此方はすれたるお乳の人と見て、

我等が癪は殿も御存じ　乙由

○

幽靈は木履をはいて杖ついて　支志

戀路の闇に迷ふ國つはし　素然

こは若き身の虚勞と成りながら、命の程も辨まへぬ夜毎々々の通ひ路を。哀れと人の眺めたる樣也

○

新茶古茶より君が一言　由山中

こは飛入客に。先づお茶と指出すを手にし、うくべき我れは茶よりも君が其の盃と、戯れたる其場は大盡の遊山にて。其客は出入の若者ならむ。此女元より一物なれば。いざや思ひの付さしと、片手づから酌とるを。傍より興ずる樣を作り。

瓢箪に繪押ふる戀をして　涼ト

前に茶よりと云ひ後に瓢箪と云ふ詞てらして、野遊びの樣、其座其人の心根迄明か也。さるを次には淺はかなる化戀の、きぬ〴〵に興さめし樣と見立。

別れの涙面目もなし　桃妖

と付たるは、恥かしき夜這也けり、さるを爰にはあひて別るゝ人の面目なき妾と見かふるに、こは清女のいへる師走の月の冷まじく化粧うたる後家の、入湯などの折から、相客の化言に迷って、あなたより二階おり來し契りも、夜明烏の聲に人目はぢて、己が臥所に立ちかへる寢卷浴衣の、白々しき樣を作りて、

幽靈が階子に消ゆる白小袖　里臼

○

夜更け人鎮まりて後物の音　呂仙山琴

唐おり着たる幽靈もあり　汶上

此怪しき物音に、寢入ばなの枕驚かされてあたりを見るに、戶口けはしく押明けて、次の間にすつと入りたる體、色青白く冷まじさに身の毛彌立ながら、息を呑みて襖越の樣子を伺ふに、其の女同宿の夢を起して物語る趣、さては幽靈ならで、かれがなじみの遊君よな、稀ながらあわて來たるは座敷の紛れに拔出しか、察する所あだ人の身受を思ひ煩うて、徒なる談合するらむと思ひやるは、色町近き諸生の寓居也。何上に一字の戀語を用ひず、深更の物音に幽靈と云ふ詞の姿を立、唐おりに走り出し體を見せ、二句の間に無盡の哀れを含みたり。假令千萬の情も、一字の姿を立てゝ作る時は、千歲を經とも明かに聞えなむ。

△前後同趣向の戀、意かはる時は不ㇾ苦。

錦

嫁娘見分くる戀のいち早き　嵐雪
小原黒木ぞ身をふすべける　其角
味噌さます草のさ莚敷忍び　雪

床敷　五

今こむと言ひし計りに床取りて　嵐雪
火燵ふみ出す思ひあまりか　其角

嫁娘見わくと云ふは、元より見分けがたき姿の女ならむには、同じ小紋に白帶〆めて、髮も等しき小原女に限らむを、身をふすぶとは、見分くる人の思ひこがるゝ樣也。次は黒木をふすぶる用を、みそ焚と見立、臼と杵との中よき臺所に相奉公の男の、莚敷きながらふすべられて口すさみする樣也。後の床は、全く待つ戀なるを、次には待ち侘びの恨みと見立、何故に遲く來て、冷たき足も憚らず、妾が夢を覺させるや、歸り給へと戲ふれに突きやれば、思ふに任せぬ言譯して、其の恨みは餘りと打宥むる樣を付たり。

拾戶

忍びいる戶を明兼て蚊に喰はれ　野水
妻戶たゝいて逃げてかへりぬ　翁

深かね

伏見の戀を入相にきく　曲翠
待宵の身を悶へたる四つのかね　洒堂

山中 人名

死なうとは契りながらも妾大事　凉卜
今更涙男ちく生　里臼
小町あれば山姥もあり井あり　乙由
赤い小袖に巴山の井　臼
月細う厩より戀に取りかゝり　由

同 同

誰が身の上も戀はくせ物　はん東
業平も旅をなさるゝから衣　水音
紫の上も四十の老の波　卜
ちつと悋氣をさせて見せたい　咋なう

○

渡鳥 思

きる物の形りにつけても物思ひ　先放
てんがうが後は思ひの種となり　同

やわ 同

孕ませて主のしれぬもうき思ひ　枝東
無事で來た顔はすれども物思ひ　厚爲

○

たて 文

ざれて逢れるけいせいの文　等雲
うつかりつゞく文を忘るゝ　等躬

奥 文

玉章の紟より覗く思ひ草　支考
傾城の文すかし見る朧月　清風

類 舟

五 杏土な戀は沖の石舟　其雫
つながぬ舟やりんき仕習へ　紫紅

△戀の卷。

續虛
眉掃の露うつけしの匂ひかな　巴風
半歌仙
螢消えよと帳の裾とく　仙化
幽
小傾城行きてなぶらむ年の暮　其角
表
頭巾ばかりに假の灶物　渓石

こは句、脇のみ戀にて、外は常體也。一巻ならば後の花に匂ひあり、巻中戀二三ヶ所出してもよし。

虛栗 歌仙

句 我れや來ぬ一夜吉原天の河　嵐雪
名とりの衣表見よ葛　其角
擧 花の宴御密夫の聞えあり　同
數入空の雨をものうく　同

○百羽搔 百句

句 初戀の花ものいはで別れけり　蓼太
もぬけの魂の君にそふ蝶　獨

—西東打別れたる花軍
擧 櫻を奪ふ貴妃が醉

此二例は戀のみ付續けたり。

類句 友寢して針立寒し戀の丸　秋色
歌仙 背黑貰ひに霜の袖笠　其角
鶯に心の駒の朝走り　色
擧 —上下の者のおぼろ〳〵と　專吟

こは前一折戀續き、後一折旅續き也。

△非レ戀句。

匂 •家々に烟りをたつる揚屋町　米らん
—松めづらかに羽子ひゞく也　湖布
浪 •傾城の果かや髮に念入れて　其風
—飯がないやら猫のせはしき　知足
讀五論 月花に昔小袖の袖せばく
•—常の情を出代になく

前句を戀ならずと見て、常の情と斷わりたり。

桃 —若い女中の供に墨髭り　紅
•—失物の八卦に戀を取りちがへ　七雨

若き女の髭奴連れ來たるは、失物の占ひならむを其易者の早合點に、待人かと尋ねしをかしみを付たり。こは此前句を、人々戀と思ひ入りしを、此作者は戀ならずと見、かく付けて一座を驚かせし由、面白き即興也。

梅十 •ちら〳〵と矢倉に白き村もみぢ　伯楓
•嫁入きらひて奉公の口　紅
•—八卦には年を問はるゝ恥かしさ　蓮二
—祭りの過ぎて里の賑ひ　り雪
同 —螢のくれば二階からよぶ　七雨
•書懸けた文をば風の吹きちらし　仲志
—持つてゆくとて母の着る物　有琴
同 —上げたばかりに訴狀さたなし　梅光
•花鳥に就けても後家の物思ひ　七雨
—また面えかへる洗たくの査　り雪

梅十論、十歌仙に戀なきはかゝる句也。此等皆今

一句戀をあしらふ時は、前もともに戀になるを、わざと常の事に見破りし故に、仄かに戀を含みたるも、後句に引かれて無戀と成りたり。

□旅情越不嫌三句續（古へは三去）

旅は名所に並ぶ景物也。其趣き寂を主とす。道の修行も旅にあれば、東海道の一筋も經ざらむ人は、風雅に覺束なき時もあらむと翁宣ひけり。抖藪心に任せぬ身は、野中の清水汲みて知れかし。俳人の旅情に疎きは、色好みの戀情に疎きよりもやさしからむ、偖去嫌は、水邊、異場等の例に等し。

ひさ　｜雁ゆく方や白子若松　翁
　　　千部よむ花の盛りの一身田　珍碩
打こし　｜順禮死ぬる道の陽炎　曲水
　　　｜此頃室に身をうられたる　路通
萩枕　文書いて賴む便りのかゞみ磨　翁
　　　｜たびから旅へ思ひ立ちぬる　白之

　　　｜道の地藏に枕からばや　觀生
印　入相に鴉の聲も鳴交りそら
　　　｜歌を進むる窄輿の舟　北枝
　　　｜何御用やら早駕がゆく　有琴
梅十　今の世は雨六はらの月と花　梅光
　　　｜旅行の内はしらぬ春かな　七雨

○

　　　旅人の虱かきゆく春くれて　水
ひさ　佩きも習らはぬ太刀の鞘　翁
三續　月またで假りの内裡の司召　硯
　　　あし引の越方迄もひねりみの　圓入
花摘　敵の門に二夜寢にけり　ら
　　　かき消える夢は野中の地藏にて　呂丸
　　　連なしに小身武士の假枕　木導
鎌　藪の中迄のぞく舊跡　許六
　　　野原にて愛宕參りの戻り雨　千那
　　　｜うき旅の空は時雨れて六部宿　同

鎌　京の近いは水がしらする　千梅
棒組に樣を付けたる駕の者　那

あら　夕鳥宿の長さに腹のたつ　其角
幾つの笠を荷ふ强力　越人
穴一にちり打ちはらひ草枕　同

△旅の字面去。(歌に三)(古へは三去)

冬　秋の頃旅の御連歌いとかりに　翁
九　たび衣笛に落花を打拂ひ　羽笠

春　春の旅節句なるらむ袴着て　か兮
九　旅衣あたまばかりを蚊やかりて　笠

しゝ　旅芝居引いて藥も隱し呑み　若椎
十　花山院もたびはわらんち　山りん

雜　旅をはなれて仕たる第三　其角
六　山の井の心をしれや旅の汁　同
團子も世並に太る旅馴れ　去音
八　五月雨に納めも遠き經の旅　何狂

このは　十一　うき旅にからき涙の鮫鰭　西長

□名所二去。(古へは三去)(多例省)　○

凡そ歌仙に、名所、國名、地名等合せて六七は例あり。一卷の內、同國、同鄕の名二去に出てもよし、抑も名所を景物とする故は、旅泊の寂細、懷古の幽情、雪月花の哀れを觀せむ爲め也。さるを漸う其名のみ出して、名所付たりと思ふ人のあめるは、兒女の披參りにも劣りなむ。作者乾坤を掌にして、森羅萬象の姿を見よ。

續虛　あるはしらゝ住吉須磨に遣はされ　其角
夜は飛田の狐なりけり　蚊足

勾　岑入の過怠に宇治の橋懸けて　程己
吉野も枯れて冬は來にけり　毛紈

夕顔　すまの關寺幾世丸ごし　圓入
退かばさがにとつゞも北の隅り　角

越　鍬杖に鳥羽田の水のちよろ〳〵と　十丈
尼達あまた今の鎌倉爲町

かも　御幸もあつた大原賤原　鵑笑
鱸つる松江の江も此潮も　東守
鎌　ならの月伏見の月に恨みられ　千那
御用で不二を見るがつれなき　千梅
むつ　更科へ通れば木曾に關一つ　千調
南都を出でゝ京を否がる　玉陽
江戸　木股にはさむかく山の竿　風葉
大和　ならへ出て句主と思ふ苦を出かし　同
其後は磨ぎも直さず鏡山　舎仙
七さみ　糺のすゞみ只もをられず　之仲
松風の垂井赤阪關が原　一イ
△名所、地名、國名、何と組みても二去。
ふり　ち　輕う住みたき岡崎の月　仙呂
め　是からの便りよしのゝ釣瓶鮓　午潮
東山墨　ち　有馬のるすに柚は皆になる　右範
く　穴村は東近江と聞及ぶ　范フ
炭　同　又頼して美濃便りきくやは
め　筋違に木綿袷の龍田川やは
浪　雲津の宿の殊に川霧　雨村
ち　如月や貴舟懸けたる春の色　外故
歌　車（くるま）烏丸（からすま）次は何やら　風草
京　清水の舞臺に月を打眺め　有琴
△國名　二去。（大國名同）
鶴　近江の田植美濃に恥づらむ　朱絃
つくし迄人の娘を召連れて　り下
いせ參り蚊屋一ぱいに取込んで　支考
奥　けふもかへらぬ佐渡の懸取　桃りん
江州の穂房定むる身投石　虎月
江戸　八幡堂にて見て逢うて逢ひ　同
いよの便りのひしと戀しき　百花
雪　夫々へ向はせ玉ふいせの神　才木
烏賊は夷の國の占かた　重五
冬　大國　日東の李白が坊に月を見て　同
△名所類に、京、外國、大國類、地名、

名物等越不ㇾ嫌。

舊都。花の香は古き都の町造り　そら

春を殘せる玄仍の箱　翁

つばめ　長閑さやしらゝ浪花の貝盡し　北枝

。黒塚の誠こもれり雪女　其角

雜　けあげ目にたつ白革のたび　沾蓬

京　暖に京は羽おりを長く着て　同

月花を糺の宮にかしこまり　支考

俳　あゝらけうとや猫さかり行く　丹野

。積塔を見るとてけさは疾出づる　空芽

綾小路清衆庵の行事なれども、地名ならぬ故に不ㇾ苦。

有類名。夕月の海はなけれど海岸寺　そ竹

かも　燈籠の尾の鮹かしらねど　東守

三絃もならの都の久しぶり　慈竹

同。松原を西へ涼しい戻り鉾　柳士

本朝　堪俗の・きるゝ雪隱　昇角

こそばゆい高野の坊の夜着布團　涼三

同　。花も昔下寺町はちり仕舞ひ　左把

夏大根の苗は遲蒔　流幸

同　馬買に木ばたの鐸も節句過ぎ　比誰

ふしんのけがの今に膏藥　杉夫

メ。いせ講の圖を中間へ貰はれて　百朶

有。寺町のそこらに數珠を詠へる　李門

百歌仙　飯くふ前でたばこふはく　萬草

朔日も節句も室でしけらるゝ　一橋

○

戀の巣はこつほり丁に在り乍ら　ろ九

雪白　寄合井戸の傍に辻立　白椎

噂。桐のはの昨日の陰はあすか川　有節

物ほしげにも殘る有明　一由

新そばに木曾の幸も膳の上　一庸

同。洗たくの色紙に小倉喝されて　麥林

其。灯　妹の穢を姉が介抱　含朶

占をきく間も長い浪花ばし　茂秋
同。―江戸詰なしの御普代家也　清風
奥　さく花に朝か晩かは茶漬にて　考
―小倉の岑をかへる雁がね　風
同。心よい兄貴を呵る江戸詭り　松棚
思亭　入院の駕の立ちし景色　可昌
公事の畫圖筆捨山をいかゞせむ　鷺松

○

露霜も置かぬ淺間の燒ごろた　冬松
同　口は達者に湯の山の秋　佃房
號　伊丹屋へ李白つれたし後の月　寸松
同。高木屋に登つて見れば生いわし　素九
五色　けふもちろりを提げて出る妻　蓮之
島原へ張かへ長柄一からげ　長水

○

―世を見る今の山城の京　り下
新山　かちが槌片肌脫ぎにゑぼしきて　蚊足

外國。―君假初に會稽の聟　其角
同。邯鄲の四十九年も猫の皺　春樂
十七　せばき亭ぢやが挨は五六荷　こ秋
百姓の鋤に花の香よしの山　有風
菅みのゝ雪は越路の物ながら　風草
雪白　勸進帳に噓の八百ろ　九
同。唐土の花のよしのとよめりけり　李夕

眞桑、杉原、小倉帶等の名物も越苦しかるまじ。

△京と都面去。(一座一づゝ)

―はな紙に都の連歌書付けて　翁
蓬　おほん歸京の時を占ふ　工山
―國かへに都詞の片山家　鷹仙
歌　娘ども連れて一度は京參り　同
―篠深き都檜皮に葺きかへて　不角
續原　―宵の水ふむ京のわらんぢ　溪石

△外國名　面去。

蓬　―蝦夷の聟聲なき蝶と身を侘びて　翁

一橋
｜高麗の縣に畠作りて　桐葉
｜九
膝琴に明日の風雅を忘れさり　其角
唐の文よめぬ處を打遣りて　そら

一梅の風
｜床は海朝鮮人の閨の月　翁
｜二
草もえ上がる秦のむしくそ　同

外に二去の例、探り得ざる故に、先づ而去となしおく。

△國の字　而去。（古へは折去）

江戸
｜六
舞ふ聟は何れの國かうかりける　喬谷
文左に國の下領こなされ　同

春と秋
｜咲きなく落ち殘りたる國の跡　嗒山
國を半ばに殘す順禮　翁

蓬
｜駕にも國の霜負はれゆく　同
破れたる具足を國へ贈りけり　東藤

○

一須磨音訓
｜三
うちまた弘き國の守へと　似春
夢想國師もいでや此世に　同

△國と國付句。

句餞
津の國のなには／＼と物うりて　翁
｜二夜泊りのつくし侍　嵐雪

拾
｜いせ思ひたつわらぢ菅笠　こ齊
みのなるや蛤舟の朝よばひ　仙化

白扇
みのへゆく人と別るゝ馬の上　去來
｜燒めしとやら土佐日記にあり　浪化

市庵國さん
｜豐後絞のはやる御家中　吳花
献立になうてはならぬ近江鮒　史庭

山琴
雲にさへ信濃太郎も罷出で　北枝
｜土用拭ひの備前三郎　從吾

△國名に同國、名所付句。

或書に國を先に付けて、地名を後に付けよと云ふは非也。何れを先にてもよし、又異なる國と名所(めいしよ)付たる例多かれども擧げず。

冬
｜三絃からむ不破の關人　重五
道終みので打ちける碁を忘れ　翁

冬
―雨越ゆる淺香の田にし掘植ゑて　卜國
―奥の如月を只泣きになく　や水

つばめ
―小畑も近くいせの神風　翁
疱瘡は桑名日永も流行過ぎ　北枝

深
―初花にいせの鮑のとれ初めて　翁
―釣棹若やぐ宮川の上　嵐らん

△同國名所付句。

冬
―盗人の記念の松は吹きをられ　翁
―しばし宗祇の名を付けし水　卜國

賣
―いざり不便や婕捨の月　翁
ちる花に垣根をうがつ鼠宿　嵐雪

さみ
―かも川の一せに月の冱えわたり　ざ芝
―菰かぶつても京の明けくれ　范ふ

深
―深草は女ばかりの下屋しき　洒堂
―伏見の戀を入相にきく　曲水

浪
―矢ばしの舟はよい晝ね時　素然
木曾塚はあれとや蔦の梢とも　獅吹

卯辰
―酔狂は坂本領の頭分　魚素
―松に來合すからさきの茶屋　北枝

後櫻
―つゝじのつゞく番場醒ヶ井　呼猿
草餅の柏原とやかしは餅　江水

宇陀
―底倉の湯を下に見下すり　由
此度は母の願ひの身延山　許六

底倉を見ながら過ぐるは立寄りがたき用と見て、此度はと付けたり。付方は前句によりて、萬化なれども皆しかり、さもなくてたゞ並べむは拙き限りならむ。

□神祇二去。（古へは三去）（へ）

神祇を景物とするは、御國の上つ代を慕はしめて、誠の道に誘ふ設けなるを、今の人のさかしらに、禰宜の次は押勸化と謗り、鳥居の後は鳩の糞に汚して、そを滑稽と心得けるは風雅には遠き人ならむ。そも俳諧は天地を拈擧して、諸の情を催ふさしむ

る物なれば、兼て知るべきは其物々の本情(ほんじやう)ぞかし。

深　那智の御山は春遲き空　嵐らん
　町中の鳥居は赤くきよんとして　翁

誰　む月晦日のいもひする家　才丸
　祈りする祭りの中を押され出で　同

梅十　さあ只今とふるゝ寒ごり　五雨
　大木は見えても宮の小さゝよ　仲志

　毎年の秋は配ばる御祓杉　風
別　四　こんもりと鳥居隠るゝ花の中　子さん
歌仙四所　拵へて明日の祭りをねつて見る　風
　三　片晉木の末社は横に轉け玉ふ　同

歌仙に神ばかり出て釋出ぬも、釋ばかり出て神出ぬもあり。神祇(しんぎ)は趣向少き故に多く出でたるはなし。

百囀　氏神の花も盛りに咲揃ひ　支考
付句　鳥井を越えて延びる青柳　同

神祇付句の例は多けれども略す。

△神の字　面去。(古へは折去)

其鑑　祭りの戀は神も見許し　鷺洲
　十　踊上戸のかつらぎの神　雲里

なむ　頭巾きてどれも呟氣の神心　汶東
　九　赤飯はどこからけふの神送り　里鳳

雜　俗名をあがむる神も所柄　楊水
　道祖の神の見ゆる陽炎　一船

庵記　子を連れて御禮參りに藪の神　楚山
　樋口あくる神の苗開　露川

たそ　浮名をば糺の神もどちへやら　北枝
　小豆にめでよ疱瘡の神　八紫

△宮面去。

花摘　宮川にすべる樣なる月のかげ　其角
　十二　神さびかすむ總一の宮　紫雫

やへ　我れに幸あれ辨天の宮　只丸
　むし取りにゆく苔の古宮　伊良

△祭折去。(古へは百句二)

梅　─米の出來れば祭禮のさた　羽稲
─御祭にはこちも小僧も初參り　蓮二
祭場の太皷の音の近うなり　同

八夕　─角もじのいわし鱠に牛頭祭　宇中
戲れも讃佛乘の壬生祭　尙流

山かた　─祭過ぎても里の大名　東羽
土器で祭るなおれにや茶碗酒　白狂

文月　─祭らぬ星も出て遊ぶ空　柳こ
祭りには不明の門もあくとやら　野航

△神に釋無常　付句。（多例省）

拾　─出水に下る宮の材木　翁
釋　世渡と關に道ある寺のせど　其角
手力雄大飯くひを守り玉ふ　沾洲

類　同　─此御出頭千手觀音　其雫

○

─死なずば人の何になるべき　土芳
已光　無　神風や吹起されてかい覺めぬ　翁

其俗　無　─骨の供して御國迄ゆく　百り
遷宮にあはぬ涙もかゝる哉　嵐雪

△非神物神祇越不ㇾ嫌。

ゑぼし、裝束、宮家、鈴、雛、七夕祭の類、曆、天文、占、初午、玄猪、時節に作る。

●─ゑぼしも脱がず除夜の轉たね　凉卜
山琴　あちらから嘘つく時は此方から　巴兮
─引きはかへさじ弓矢八まん　曾北

●隼の祭見る間や岑の月　秋東
類　無地には染めぬ千丈の蔦　貞佐
事とへば畑の主も神の秋　應三

△神、釋越不ㇾ嫌。（七部及多例省）

神釋打越を嫌ふは、古風の涅竟也。蕉門には故なき事に去嫌を立てず。禰宜、法印の中垣を見て、今も隔つる事と思ふは愚也といふに、傍の人難じて曰く。然らず、神道、佛道ともに道也。あに嫌はざるべきや、答へて曰く。道をとくをもて嫌ひと

いはゞ、國王聖賢の道も、千筋に文道も亦多岐也
客代りて曰く。神佛元一體ならずや、答へて曰く。
昔祖翁御傘の式を改めし物限りなし、其故を說き
し書なくとも、一理萬通すべし、若し打越に米あ
らむに、餅も、飯も、酢も、酒も元一體とてきら
はむや、さばかり遠慮なくとも、好物あらば、君
がまに／＼と、一座の人々をうなづかせける。

一見渡
　錢の數素盞雄よりもよみ初めて　翁
　正哉勝々双六にかつ　似春
名思へらく輕板は釋迦の道なりと　翁

春と秋
　講堂に僧立並ぶ春のくれ　嗒山
　流れに立つる惡水の札　そら
　形代にまな箸ならすめしの內　翁

天河
　一尊い事はお文樣にも　北溟
　外にない此味はひのとろゝ汁　其芳
　山は兀げても神は在します　支水
　横雲の裾ふく風になく烏　仙潮

なむ
　一和尚は愚ちにたばこ好き也　雲二
　光明を放して怨にお上人　汝東
　公事はころりと負けられたげな　睡夜
　さん用の二つ違ひしえびすかう　支考

天部
　大黑は棚に轉んで守るらむ　嵐雪

むつ
　むりづくめにて濟す年寄　素秋
　尼寺の夜食は二時の物にます　東潮
　緣日の天神ばしはいつも闇　琴風

長良
　商ひするもあれは慰み　り雪

神佛
　持佛へも朝寢はばゝのお斷り　霜烏

△神、無常越不レ嫌。

神一鳥居兀げたる松の入口　工山
尺笠敷いて衣の破れつゞりゐる　桐葉

蓬
無一秋の鳥の人くひにゆく　翁
　一節句の宵に祭重なる　丈草
　町端の埃掃きためて火に燃す　鼠彈

拾
　一死を忘れたるちゝの岩壘　翁

草刈　死ざまは錢六文に草枕　従吾
　　　鳥の日ぐれ鷺の明ぼの　牧童

海十　海士小舟濱の鳥井に波よせて　林陰
　　　神大木は見えても宮の小さゝよ　仲志
　　　尺六部の宿をかさぬ所也り　雪
　　　無聖靈にほしか嗅がする濱の月　蓮二

□異無常三去。（歌に三迄）（古今同）

秋　死んで間のなき玉祭る也　越人
　　白き袂の見ゆる輿昇　翁

拾　死を忘れたるぢやの五調（がんぢやう）　同
　　墓に物いふ秋は來にけり　鼠彈

ふり　世を朝顔の花に驚く　巻耳
　　　二掘つて來る藥も賴み少なくて　涼ト
　　　さゝげも芋もかゝる玉棚　松波

星月　二神垣を恐るゝ喪屋の火の汚れ　文翅
　　　野送りの空にしられぬ袖の雨　杼柳

難　四父聖靈もさぞやうり家　高莧

みかむ　四母方にはなれて月の物さびし　雪芝
　　　　先度の風に人死がある　支考
　　　　なく〳〵消ゆる幽靈のきぬ　清風

一橋歌仙五所（へ）　二子を殺す愁ひは夜の子規　才丸
　　　　七田の中に掘殘したる石の塚　風

此外なし　八誰か人魂の空にゆくらむ　丸
　　　　四懷の骨はかへらぬ世なりしを　同

△同體・無常　面去。

蓬　秋の鳥の人くひにゆく　翁

死人　早桶急ぐきえがたの露　同
　　　あなむざんやな甲の下の蛬　同

印　戰死　去年の軍の骨は白され　こせむ

拾　葬所　五春ともいはぬ火屋の白幕　桃り
　　　　　秋風すごし義朝の墓　桃先

草刈　老死　年寄の身のあすはしら露　牧童
　　　　　よい人であつたが爺は死れけり　鳥水

白雪　｜何の無心に幽靈は來る　嵐七
｜あら閻浮戀しといひて竹の杖　露丘

△無常　二句續。(多例省)

世に無常一句捨と云ふ掟あるは非なり。悼みの發句、脇は大方無常にて仕立つる物なれば、さる法はなき理也。

次匂　｜灯をくらく幽靈を世に返す也　其角
｜古きかうべに蠹引つかけ　翁

鶴　｜浮世の露を宴の見納め　筆
｜憎まれし宿の木槿のちる度に　文りん
｜何を見るにも露ばかり也　や水

さる　｜花とちる身は西念が衣着て　翁

△死　折去。

｜秋たつ蟬の鳴死にけり　翁

已光　｜死なずば人の何になるべき　土芳
｜死なれた人の狀の名をよむ　乙由

新白　｜死ぬる身も十夜のうちは果報也　唐庭

□釋敎二去。(古へは三去)

釋敎とは、三世因果を說いて六道輪廻を斷たしむる事をいへり。俳諧の本意も禪にこそあれ、此故に句每々の變化を敎へて、前句の執念を斷たするは、風月の遊戲より、悟道の本源に誘ふ翁の深意也。されば釋の句作らむにも、其本意をしるべく、知りて自在を詠ふは、素より禪俳の宗也けり。

拾　｜懸合に申して通る鉢叩　翁
｜盆の佛の名はあまた也　野童

俳 ヱ向　｜ざれたる窓に鉦の音きく　江山
｜道心の訪うて悲しき野べの墓　一龍

鶴 寺號　｜笑へや三井の若法師ども　こ齊
｜あし引の廬山に泊る淋しさよ　楊水

東花 寺中　｜胡瓜見てゐる山寺の僧　支考
｜お談儀も盆のそめきの高灯ろ　琴左

其俳　｜いづくの僧ぞ札配りゆく　嵐雪

僧　新發知春は秋葉の二三尺　立吟

新百　ちさいびく尼の鍵持につく　支考

同　狸ではないか山路をゆく坊主　圖友

難　けふの精進は鯖江さう也　山りん

縁日　九日に藥師參りはうさん者　高蕙

汐　觀音樣のけふは佛餉　柴友

飲食　旦那から戒められし飲酒戒　辰徉

○

五　齋くひてねてゐる牛も二三匹　乙甫

きく十歌仙　三　あの袖をふるとてけふは壬生參　伯兎

三　法印の後に誰れやら袴きて　塵生

歌仙五所出たるは例多し　三　法談の下手は噓かと思はるゝ　兎

四　催促もない佛へは猶無禮　生

名は何とやら山の坊樣　同

○

壬　東山中にも花は淸水寺　乍木

京寺　げに長閑なる知恩院(ちのんに)のかね　一桐

釋二句續の事は、皆よく知りたれば擧げず。

△非釋物釋越不ㇾ嫌。

庵、坊、院、寮、笈、撞木、杖、頭陀俗、鐘、十德、常の衣、行脚、坊主子、寺子、座頭、西行長明布袋の風流人、木像、先祖、伯父の說法、呑めば極樂、迷悟、閻魔、鬼、地獄、寺號の村名、僧正が谷、寺町、數珠屋町、數珠懸鳩、盆、彼岸、十夜、時節に作る芹樹、けまんの類。

(ばせを談)東武の會、盆を釋とせず。嵐雪是を難ず。翁曰く。盆を釋といはゞ、正月神祇(しんぎ)ならむとも也。

むつ　彼岸七日を天王寺山　桃りん

ちる花を風に吹きこむかます錢　介我

ゐん　施藥院より若草をつむ　其角

寺と院、越しても異居所なればよし。

あん　いなり參りに緣かりし庵　そら

朝月の杜にかゝる作の面　岱水

二見　―鐘とや僧のせがきよむ聲　宗波
侍が身をかへよとや秋の蟬　翁
笈　―笈の内にも夢は見えけり　路通
看經の眞晝中は名に立ちて　利立
夕顏　須磨のせき寺幾夜丸腰　宰陀
か子　風氷る一夜々々に寒うなり　白鳳
病中を乳母の尼に逢ひたがり　其角
句兄　琴の下樋に何を入れけむ　獨
はせのかれ　在所でも餘所に聞きなすはせの鐘
十德　十德に秋の埃りを遠ざかり　蓮二
梅十　緣に茶瓶の茶をあふぎ立て　桃川
內證は言うてやらねど齋のかね　仲志
衣　衣さへ着ねば牛とは見えぬ也　柳こ
文月　揚屋めかして雨ののうれん　嵐枝
精進とあれば鮑は片思ひ　市狂
舌根の念佛にやする居士衣　嵐雪
賣　小城は稻の中につゝ立ち　翁

座頭　杖でうつ座頭が砧上手也　嵐雪
西行　―凡そ久しき西行の跡　林紅
浪　茎物の葉毎に鳴きのこり　胡中
―瓦きらつく寺の月の夜　吏全
長明　長明と浮世咄さむ山の奥　雪
其俗　松風の音地震又ゆる　鋤立
聞きより心のそこる定の月　立志
山伏につひ成つて來て札配る　苔そ
壬　一里行つても宿をとる旅　玄虎
布袋　懸物の布袋の顏に月さして　雪芝
先ぞ　―先祖のたびへ頭を入れて見る　りふ
夕顏　つくと早留主の憔(やつ)れを恩にきせ　大圭
―文箱の中は古佛也けり　白鳳
一見渡　―狸のこつちやう如來寺の秋　似春
狼や香の衣にちる紅葉　翁
僧正谷　―尸導く僧正が谷　春
地ごく　―地獄破りや芝居破りや　翁

一物の名 天堂
　小柄ぬき鍬の枝の撓む迄　信章
　滅金の光り握る修羅王　信德

いせ
　一つ家の天目に醉ふ滿願寺　珍舍
　紅畑からばゞが出て來る　菊二

じゆず懸
　くもる日は數珠縣鳩の疾起きて　東里
　一通りひがんの花の咲きちりて　嵐雪

未來
　日永に廻るさがや太秦　其角
　暖に綿子とらせむ弱法師　雪

盆
　盆の心も荻に靜まる　右範

たそ
　米買の仰むく空に秋もはや　野航
　和尚の目には鏡より猶　馬岐

十夜
　昔しから十夜は月夜頓て雪　涼卜

山中
　あちらへ越して舟を見廻る　昨なう
　花鳥の鳥の中に鉢坊主　琴之

此外二の卷、表不レ嫌物の部にもあり。

△寺・坊　面去。（古へは折去）

三匹
　月澄みわたる寺々のかね　里臼
　七

草刈
　寺の小僧のたゝかるゝげな　きらむ
　山寺のこんな月夜は藥也　烏水
　八
　俳諧仕たき寺がある也　牧童

山琴
　寺にゐる心のごとくきれいさよ　巴兮
　九
　芳飯も昔しにかへるびく尼寺　柳士

○

さる廻
　春に赤子をゆする小坊主　史邦
　十一
　公事に負けたるならの坊方　翁

△寺、音訓かはり五去。

小文
　石町なれば無緣寺のかね　翁
　無住になりし寺のいさかひ　同

春
　一夜かる宿は馬かふ寺なれや　やまと水
　漣や三井の末寺の跡取に　旦藁

梅十
　山懸けて五石にたらぬ國分寺　蓮二
　六
　ねはんの齋に寺の追從　七雨

△佛、并類かはり三去。

誰
　花の彌生のはせの觀音　其角

夕顔　角力仲間に祈る自己佛　才丸
冷やかに觀音よりも我が力　圍入
何井花は白きを後にする　我笑

鶴　岩根ふみ重き地藏を荷ひ捨て　其角
千聲唱ふる觀音の御名　同

△佛の字面去。（古へは音訓折去）

四幅　毎日の鐘も聞えて佛在世　曾北
音　先づ大佛に肝がつぶるゝ　凉ト

藤　明り窓付けて佛間も四疊半　和菊
念佛は棚へ皆はなし講　東吾

俳訓　石佛いづれ欠げぬはなかりけり　路通
佛には筐の花を奉つる　い然

△僧、尼、講　面去。

星合　薄べり敷いて僧堂の月　正秀
草村に寢所替ふる行脚僧　丈草

雜　よしの山佛法僧のことし鳴く　楊水
則は栗りの僧正が谷　ふ船

二見　尊とや僧のせがきよむ聲　宗波
子ながら僧のはづかしきぞや　岱水

天河　尼寺の花さけばこそちりもすれ　其芳
鉢巻に尼入道も田刈時　楚由

鎌　湯講はじまる里坊の秋　木導
暮れぬ内から御命講押しあふ　千那

△釋、無常　越不レ嫌。

古今の變化、陰陽の消息は、人界の恆なるを、佛道には無常といふは、佛土は常住不變なる故也。其中にて、俳諧に無常といふ物は、死去、衰亡の變をいへり。そは人界の樣なれば、世出世異なる釋と、越を嫌ふべき理露もなけれど、釋氏專ら無常を說く故に同じ物と惑ひけむ。夫れ佛は、草木國土、悉皆の誓ひをもて洩さず化益すれば、佛の道にとくとて、釋の越に物を嫌はゞ、國土の中殘る物なからむ。そも俳諧は、花鳥風月に目を遊る為めにもあらず、奇言怪語に人を驚かす為めにも

あらず。かゝる法界の理を貫通する捷徑の學なるを、俳門に入り却つて物理に暗くなる人あるは、作家の教へ宜べならぬ故也。譬へば墓は亡跡なれば無常、卒兜婆は供養具なれば釋也。若し是を墓に立つる物とて嫌はゞ、水も、花も、米も、錢も土器も、燈籠も、皆々越を咎めむや。そとば立てぬ塚も世に許多あり。墓に立てぬそとばも亦あり、左の例を見ば疑念はれなむ。

つか　｜ぬし討たれては香を殘す松　そ　英
拾　晴るゝ日は石の井撫づる天乙女　清　風
經　｜艶なる窓に法花よむ聲　翁
塔　｜九輪は落ちて青石の塔　そ　ら
同　一かいの松動くほどふく嵐　岱　水
尸　｜むくろばかりを殘す夕月　嵐　竹
同　｜捨てし尸のよみかへりたる　沾　蓬
句師　行盡す五天の昔し法もなく　其　角
僧　｜髮ある僧に鐘つかせきく　露　荷

尸　｜小雨にもゆる埋草のほね　こ　春
一橋　布子きて布子にかへる北の果　清　風
佛　｜終にこたへず黄檗の釋迦　春
塔　｜五重の塔のほとり夕ぐれ　桂　楫
蓬　鶺鴒の尾を蜘のゐに懸けられて　卯　端
死　｜風に身をおくけふの討死　桐　葉

運び相似たるごとく見ゆる例を、少しあぐ。

□乾坤の論

蕉門の去嫌に「天象と云ふは日、月、星、辰に限り、「降り物と云ふは雨、露、雪、霜、霧、霰の類をいひ「氷は水に屬し、「風は一體異也。「聳え物とは、雲、霞、虹、霧、靄、曇の類をいふ。霧の兩部に渡るは、谷岸の山水に屬する如し。「稻妻電光は光り物と云ひ「天、空、和日、汗、天氣、照、晴闇、朧等は乾坤の雜部に入る、かく六つに分て各越を許すは付句の害なからしめむ爲め也。机前の

客難じて曰く。月、日、星に降、聳、風等を嫌はぬは、宇宙の物なればさもあらめど、天、空を嫌はぬは其理聞えず。陳じて曰く。夫れ天、空は上界也。三光其の中を廻る、又國土は下界也。人物其上に生ずれども、是を隔てず。天何ぞ日月を防がむや、又問ふ。照、晴、闇、朧の類は三光とは體用ならずや、然り人倫の越に噂、支體、情、態藝等を忌まざるに等し、猶問ふ。雲は風に起り、風に鎮まる、何ぞ越を厭はずやあらむ。諭して曰く。雲、霧、烟、雨の類、風と爭ふ時は必らず動く、動く物夫のみならず、草木なびき鳥沖り浪逆だつ迄、萬象風氣を受けざる物なし。客曰く。從來の論明かに知りぬ。今はた請益せよ、乾坤の物の句去を定められし事を、微笑して曰く。三光は人倫二去に比し。降、聳は生植衣食類の二去に類す。稻妻は同じ光り物と思ふらめど、三光に越を嫌はぬは鬼佛の人倫に異なるごとく、降、聳、風光、天晴等の各かはりて越を憚からぬも、山、水、場、居所の互にして論なき如し。天の覆ふ處、地の載する所、何ぞ二つの理あらむ。もし天地の制度に別有りといはゞ、そは人理の迷雲にて、爭でか明覺の曉に到らむといふに、其人大悟の横手を打ちぬ。

△雨言ひかへ　三去。（歌に三四）

（古今四）あめさめにかはりては、百句に六つも七つもあるべき也。

既望
城とり廻す夕立の影　猪睡
衾作りし日は時雨けり　蓬香

俳
雨に肥えたる岑の早わらび　菫香
出よときほふ舟のむら雨　官江

三日
川のない所は雨に田を植ゑて　雷石
殊更に時雨た月を秋の色　柳江

射
野中の杜に過す夕立　渭白
秋の雨とて定まらぬ空　自笑

一 須磨　血の道氣恨む幾日の春の雨　似春
（へ二）時雨の松の針立をよぶ　翁
△雨同訓五去。

壬　秋風の雨ほろ〱と川の上　土芳
（四）哀れにぬるゝ雨の白鷺　雪芝
△時雨折去。

見かへれば家に日のてる村時雨　濁子
桃白　初時雨六里の松を傳ひ來て　翁
白扇　其かげや時雨て雲に一昔し　北枝
露白く時雨て晴れて夕藥師　從吾
雜　村時雨十夜の内を案じけり　溪石
蓆する北の家陰の露時雨　同
けふの芝居の露ぞ時雨るゝ　木道
後櫻　宗旨自慢の御命講時雨るゝ　木因
西様としらで江口が秋しぐれ　支考
△降物かはり、二去。（七部及多者）（へ）
冬圓　霜覆ふ蘇鐵に冬の季をこめて　安信

霜露　色々おける夕暮の露　如風
力も枯れし霜の秋草　亨子
印 霜雪　酒肴片手に雪の傘さして　同
ぬり笠を着て霰宜しき　寒玉
類 雪霰　春の雪好な所へ降りにけり　仙芝
居ふろの中で見てゐるはたれ雪　致昼
浪 雪雨　入違ひとぶ雨の乙鳥　可夕
燈火遠き稻塚の雨　其角
續虛 雨霙　ちら〱と霙降りこむ衿寒し　露荷
あたゝか過ぎて雨の氣違ひ　長緒
草刈 雨霜　月殘る野は霜解の傳ひ道　牧童
露を見知つて影うつす月　こせむ
こせむ つゆ 雪雨　白雪や足駄ながらも未だ深き　蘆生
雨に渊先の岩を失ふ　致昼
薄霧の中に一むれ雁の聲　左白
やわ 雨霧　祭のせどに雨のほろつく　イ人
△降り物に聳、雷、空越不レ嫌。（一づゝあぐ）

さる　─鶯の音にたびら雪ふる　凡兆
　　乗出して肱に餘る春の駒　去來
くも　─麻耶が高ねに雲のかゝれる　や水
　　雪に出て土器賣を追ひちらし　翁
小文　只原中に月ぞ冱えける　山店
らい　神鳴のひつかりとしてさたもなき　翁
續さる　─生駒氣遣ふ綿取の雨　沾ホ
　　うき旅は鵙と連れだつ渡り鳥　りホ
そら　有明高う明けはつる空　馬莧

△降り物に降、聳、風付句。(同)

冬　初雪のことしも袴着て歸る　水
雪霜　─霜に又見る朝顔の飯　卜國
鶴　─橋は小雨のもゆる陽炎　仙化
雨雪　殘る雪殘る案山子の珍らしく　朱絃
奥　─足元ばかり見ゆる雲霧　不玉
雨霧　雨もらぬはしの下こそ靜かなれ　同
蓬　─雲は夜盗のあと埋む也　翁

雨雲　─村雨にそゝぎ捨てたる馬の沓　卯端
桃盗　─俄かな雨に緣の切干　巴兮
雨風　笹のはに交りてさわぐ風の蟬　北枝

凡そ降り物、聳え物、風、光の類、取合(とりあはせ)歌仙十四五は例あり。又降り物のみ出したる卷(まき)も聳え物のみ出したる歌仙も、又此類の一向出でぬもあり、但し百句にはさる事なし。

△霜　面去。

次勾　さてもかひて簀子折焚く初霜ぞ　翁
　─六
　　提灯きつて霜のかげろひ　楊水
　─十一
　　ましこひく霜よりけふの行方哉　昌貢
類　楢小なら嵐と霜に養はれ　同

△露　面去。(歌仙三、百に六迄)

　─四
　　稀れに螢のとまる露草　栗齋
たて　梓弓矢の羽の露を乾かして　そらむ
　─六
ひな　─仁といはれて渡る白露　翁

一はら〳〵と葉弘柏の露の音　千川
一しの〻露袴に懸けし茂り哉　翁
（九）
ひな　露深き曹洞宗の夕勤め　川
一畑に篦は浩然の露掃　尾
（八）
類　熊本は露もかゞやく冠木門　園非
一露の身か富澤丁のれん出る　長水
（八）
五色　いとゞ貧家に露の靈棚　蓮之
一山を絞りし榧の下露　杉風
（十五）
一灰吹捨つるあとの夕露　翁
（十三）
一草庵さびし杉の下露　杉風
（九）
一木賊にかゝる眞砂地の露　翁
（十二）
一色つく百句　一小徳利の露もありしと山や思ふ　同
（十八）
後妻打つや相槌の露　同

△雪　面去。（季かはりても）

（古今五）古式に雪百句四つといへり。今式も同じ

▲支考のなむ俳諧百句に五つあり。又匂塞、其俤、庵記等の歌仙に、三つ出でたる例もあり。同じ面去といへども、其間五去位の物は、凡そ歌仙に三つは許したり。

雑　一月雪の柳や花に時鳥　支考
（五）
柿　鳥の來る榎の雪に日のさして　子直
は一北の方若狹境に殘る雪　考
（六）
拾　灶物たきて雪になす空　同
一雪折竹にちよつとわら茨　盧本
（六）
三匹　は春の雪土藏の屋根に上げてある　考

○

同き（へ）一俤畫の具をときて雪の山　甫盛
（三）
類　雪消えて痴氣慥かに物申す　百り
てる月は雪の柏木笹の霜　嵐雪
其俤　一又乙雪とちぎる別れ路　立志
（四）
一餅雪の名に年の坂越　盧元
（七）
冬梅　冬至冬夜の雪も催ふし　白里
一雪ふれば苹の在所白うなる　許舟
薄雪の繪に似て萩に小柴垣　貫仙

なむ　初雪は伊吹の山にちつくりと　左明
　一四　雪はちれどもちるはずの雪　支考
　町中に洗たく川の雪消えて　明

△氷　面去。

市海　氷つたあみをたぐる漁船　古道
　引起す氷を皃の持歩行き　梨里

△雪に氷　越不レ嫌。

春　高低のみぞ雪の山々越　人
　見付たり廿九日の月寒き　荷兮
　君の勤めに氷ふみわけ　羽笠

△風言ひかへて　二去。

（歌に四五、多例省）

古式は言ひかへも風體も三去なれども、雨よりも多用なる故に二去に許せり。又蕉門には風體の論なし。

句　肩で風きる後の出代り　由
　一嵐老樹の花の崩れ立ち　許六

浪　亡跡ばかり寒き木嵐　雨村
　秋もはや袷重ねの風の色　外故

山中　角立てゝかぶる頭巾に山嵐　蘭少
　風のふくにも般若心經　涼ト

みかの　ふのりぼす髪ほろ／＼と東風吹いて　風文
　胡瓜のあらし赤走りけり　虹枝

藤實　あともなく雲は陽吹の押まくり　貝壽
　浴衣の粘の過ぎる秋風　鳩枝

△風同訓　三去。

既望　風止みて流るゝ儘の渡し舟　正秀
　秋風に網の岩やく石の竈　鬼茶

さる廻　胸むしに又起さるゝ秋の風　岱水
　春風に太鼓聞ゆる旅芝居　嵐らん

卯辰　身にしめる風より蚤は捕へられ　四睡
　風かはる夜は星影のきらめきて　江介

枯　風なき雪の揶地につくちり
　行脚かへりに更くる秋風　千川

東六　舟は出てゆくけさ方の風　湫嘯
月と風との垣に瓢たん　章重

長良　肌寒いとは風の輕薄　泊楓
風の拍子に蝶も一さし　仲志

水仙（二）　土藏のかべをからす秋風　杏雨
川風のきてはしばらく軒の音　同

梅十　さく花を惜まぬ風の吹いて行きり　雪
（二）灶物の香の風に外迄　志

笠　和らかな物きれば風ひく　童平
（二）言傳を呼ばれど風に聞違ひ　楚琢

（四）こたつふさげば風かはる也　牛殘
（十）秋風に槇の戸こづる膝入れて　良品
（十四）月くれて石屋根まくる風の音　同

巳光歌仙五　（二）風冷初むる牛の子の旅　翁
神風や吹起されてかい覺めぬ　同

△嵐、凬　折去。

（古今二）嵐、折を隔てゝは許すべし。

あら　初嵐初せの寮の坊主ども　野水
（十四）秋の嵐に昔淨るり　荷兮

萩枕　（三）嵐にたわむ篠のこま垣　殘夜
嵐に光る宵の明星　そら

東六　（三）嵐の口を雲のうつすら　朴人
嵐のつよい山の片びら　朝宇

○

山中　釣瓶凬の梗更けゆく　蘭少
（三）角立てゝかぶる頭巾に山凬　同

△春風、秋風　折去。

（ウ陀）新式今案に、春風一座に二句、俳諧に春の風と、今一つあるべし。秋風、松風、同前。

梅の風　（三）いかに漁翁心得たるか秋の風　翁
一　ぬるい若衆も夢の秋風　信章

○

みの　（一）春風の池に鏡を掘出す　麋塒
馬蹄に皷送る春風　翁

こは面去にて同じ春風とあり。春の風とかはらば
面去にても可ならむか。

△風に吹寒、越不レ嫌。

宵闇の廊下で紙燭吹消してやは
山のあちらの細き鹿の音　岱水

きそ

有る程の小袖着破る秋の風　は
みそすらぬ庵は夕かげ吹入れて　竹遊

十七

今もよそなき青表紙あけ　一橘
風になびく駿河商人花盛り　舟竹

○

一簾を捲ける風の一吹　一楓

みかの

輪番も頃日馴の明やしき　以水
一鴻にふみよる月のやゝ寒　志水
一小便に出て寒きくつさめ　氷麥

白扇

花もまだ十日過ぎねば木々の色　東園
一霞をさつと吹渡る風　詞端

△風に降、聳　越不レ嫌。

奥

風の香も南に近し最上川　翁
小家の軒を洗ふ夕立　柳風

きり

物もなく萃は霧に埋もれて　木端
漉水のとく／＼落つる春の風　翁

沾ホ亭

門の左りは見ざるいはざる　沾ホ

あめ

時の間に一村雨のふり通り　馬莧

ゆき

一土屋わらやの並ぶ薄雪　白雪

茶

朝から囀ならす鳥の來て　桃りん
一早う野分の吹いてとる也　蘆雁

霰

入逵ひ／＼ふる玉あられ　其繼

砥

蜜柑のかざのはんなりとする　浪化
金屏を疊みよせたる秋の風　呂風
榧をひる嵐の窓の月澄みて　其角

續虚

竿さしながら睡る筏士　露荷
ちら／＼と霙ふりこむ衿寒し　同

板本紙の端にて、過つて此筏士の句を脱し、次の
丁と長句を並べ書きたるを、古寫本より得て爰に

補ふ。

浪（てり ふり くも）　照降の雲を覺ゆる頭痛持　林陰
今來た人も圓座一枚　支考
面白い方より風のそよめきて　桐之
浪　春風の野は閙しき仕事時　外故
ひがんの花の有がたきかね　秋幽
かすみ　明暮と霞にみゆる砥並山　松宇

△聳え物　二去。（古今同）　㊇

蓬（きり かすみ）　白子の太夫我れきりの海　工山
笠持つて霞に立てるやせ男　翁
春（きり くもり）　山かすむ月一時に家立てゝ　雨桐
くもりに沖の岩黒く見え　筆
深（くも きり）　刈株や水田の上の秋の雲　洒堂
こえ草烟る道のきり雨り　北こん
其鑑（くもり くも）　雪のはれてか〳〵として掻曇り　鷺洲
鳥は雲井に春のゆく時　始流
別　わづかに虹の殘る夕月　杉風

（にじ くもり）　奥山の五器に茶をくむ梅ぐもり　滄波
山中（にじ きり）　薄きり渡る山のくまどり　北枝
ひいよろと虹を引出す鳶の聲　桃妖

△雲　三去。（古今同）

古拾　浮雲の消えてあとなき控帳　杉風
探幽が筐の雲に殘る月　翁
小文　雲きれの山の端薄く塞ぐらし　養浩
いら〳〵と星の莭つく横雲に　嵐竹
射　樗の花に雲のきれ〴〵　周以
（四）ほろ〳〵と雨のこぼれて月の雲　管呉
このは　先づ目にかゝるいかほねの雲　許六
（四）木やりする釆に挑ぐる花の雲　獨
百囀歌仙四　しつぼりとやる雨の雲立　夕市
（九）日のうら〳〵と昇る青雲　蘆生
（八）月に又あばらな雲が流れより　同
（三）黑かみの雲井高はし佛達　市

△霞、霧　折去。

蓮　僧の飯くふ鐘かすむ空　落梧
(へ)十　朝霞生捕られたる物思ひ　い然
皮　詠への日和に山や霞むらむ　ろ遊
木綿に瀧のかすむ山中　涼ト
ひな　門番の寢顔にかすむ月を見て　翁
石疊む鳥居の奥は春霞　此筋
衛　うめ十二舉　山も霞むと迄はつゞけし　知足
霞の外にかねをかぞふる　筆
梅の風　さや綸子霞の衣の袖はえて　翁
一　古帳に横點をひく朝霞　信章
四所　朝霞徐福が贋の賣藥　同
岩はしやりんと懸けたる一霞　同
きりは妹の聲を隔つる　示右
へ　きりそびやかすしのゝめの空　同
△煙、陽炎に降、聳、越不レ嫌。
煙りは火體、陽炎（かげろふ）は水氣なれば、降、聳に嫌ひなし。

東藤亭　侘びつゝも栗の毬たく細煙り　桐葉
獨うけたる有明の松　工山
薄雪は淀の天守を降りかねて　東藤
藤實　里坊の煙り横川に立ちはなれ　鳩枚
つきしとみたる栖の雌羽　貝壽
北風にうづまき出づる雪の雲　巴流
〇
一橋　只陽炎の墓にちりなき　清風
巣を懸くる筧の乙鳥顔出して　一昌
二粒三粒雨草をうつ　同
浪　梺の雲に山の重なり　祐子
行く春の花と浮世に惜しまれて　路走
人も陽炎我れも陽炎　筆
△聳え物付句、並に雷。
浪　雨の用意か雲のあたゝか　河菱
くもかすみ　梺より霞んで岑に殘る雪　十丈
其鑑　くもらねば鑑に花のむく世界　此柱

―ねはんの宵の雲も彩色　巴州

小文　―又とろ〳〵と神鳴がなる　嵐竹

―風雲の走る間を月のかげ　養浩

古式には同體物の付句に種々の禁あり。そは凡そ景色もて付くる故にさるべき道理也。蕉門には假令句面は景色を並べても、意の變化を宗とする故に咎めなし。

△空に天人、晴れに照り　越不レ嫌。

そら　―草臥れて降止む事か雪のそら　蒲道

行脚　―十津坂本につゞく松杉　吟堂

あま　―樂の音も聞えて花に天少女　午潮

はれ　―行々子鳴いて雷はれ渡り　聽寫

このは　―青山風の蒼き海原　牧合

てり　―裸にもなられぬ旅の照付けて　和琳

△空、影　五去。（古へは面去）

桃　―四たらずとはしらで大工の上の空　梅石

―空は鴉にあくる白かゆ　同

百歌仙　―降りもせぬ空は暗みて星のなき　如畫

―四一升舛もいらぬそら泣　五呑

射　―秋の雨とて定まらぬ空　自笑

―四遣取も師走の空の暮れかゝり　同

小弓　―空の寒じに鳥の地をとぶ　渭川

―四雀羽のぬれたる聲の雨の空　その

柿　―秋もはや梢々のしぐれ空　支考

―さる程に師走の空の暮れかゝり　子直

はの　―花に車空にしられぬ道造り　倫里

―一席に一つの命空に炷き　同

たそ　―三日のかげのあらたに杉の梢から　鶉皮

―鷄の影恥かしう掃きちぎり　從吾

○

櫻山　―四日かげの鳥の鷹に追はるゝ　一康

―月かげも吹きちる川の夕嵐　如空

△照、晴　五去。（古へは面去）

（古今四）照り曇り、此類面をかへ、百句に七つ八

つもあるべし。

やわ　四
土用から照り始めたる嬉しさに　宇中
松に並んで鶯に日のてる　蘆生

文星
★かし傘にはやるてりふり　楚弓
月にてる宿老殿のかき團扇　張芝

○

其鑑　三
聖靈も月夜の婆婆に氣のはれて　岡一
雪のはれてかく〳〵として掻曇り　鷺洲

星月　十
好んだやうに降りはるゝ雨　武郁
だゝくさな伏見竹田の霧晴れて　文蝶

△闇、曇、光、天　面去。

梅十
闇にかぎ月に見よとや梅の花　里人
門前の闇に小僧のわる狂ひ　り紅

○

鶴　十
あられ月よのくもる傘　文りん
雨さへぞ賤しかりけるひな曇り　こ齊

きく十　十一
定まらぬ早西の風の照曇り　伯兎
歌よまぬ目には雨かと花曇り　伯兎

○

七さみ
有明の光りたしかにけさは又　宇中
此度の光りを花といひちらし　同

○

梅十
洗上げたるやうな晴天　伯風
花ぐもりあすの天氣を受合うて　同

枯　十四　八
漣や我物にして秋の天　角上
三河なまりは天下一ばん　去來
青天にちりゆく花の芳ばしく　同

△天氣　折去。

やわ
荷を先へ送つてあとによい天氣　朴人
觀音の手にも及ばぬ天氣合　程己

□時分同字二去。（多例省）

朝、夕、暮、夜、晝、明等の同字、各歌仙に三四づゝは例あり、取合せては十餘りも出たり。

衡　あさ
静かなる鶴は朝日をいたゞきて　安信
瀧つせに行ふ法の朝嵐　如風
ふり
屋根にまた月在りながら朝烏　竹遊
朝飯の火をたくにさへ上手下手　同

○

けさ
夜雨の音もけさのかゞやき　支考
三日
夕べの雪をけさ起きて見る　井炊

○

あけ
夜明のかねに涼し過ぎたり　岑蛙
春鹿
二
有明の松をかすりて入りかゝり　松絃
主なき清水ぬるむ明ぼの　白川
みかの
四
有明に色持ちありく鶏頭花　岱下

○

ひる
普請場遠く呼ばる晝飯　卮朝
藤
五
馬士の晝ねに馬のはねあふ扇　得

○

夕
夕日を殘す木啄の松　里楊

浪
けしは皆ちる夕立のあれ　何由
紙衣もむ夕べながらに月澄みて　白之
萩枕　夕
肌脱いで人に見せたる夕まぐれ　菊石
夕べの咄し今思ひ出す　芝船
三日
春の鳥にこゝの夕ぐれ　柳江

○

くれ
名月は笄の橋の暮れかけて　長緒
草刈
暮六つをつくと安井の門さして　支考
鑰入はとなりでたゝく月の暮　收壷
白扇
庭の灯に普請の飯の暮れかゝり　十岐
水ふろの夢も現つも明けくれて　筆
梅別
夕暮を冊子にをしむ窓の月　子靖

○

よ
月夜にも闇にも鵜々なく　考
新百
夜明かと思へば雪の降つてゐる　反朱
都から月よを懸けて牛祭　宇中
七さみ
工んではねてもねられず小夜衣　涼ト

梅十　春のよの明れば鶯の灯を消して　梅光
月よとも闇ともしれぬ雨けしき　仲志
同七百訓　雁はよるひるなしに長旅　呂杯
二
鉦の聲四十八夜があるさうな　桃川

○

焦　よひ　ほろは山手の裡反す宵の雲　虎笒
宵の管絃は雛のかまぼこ　旦泉
ぐちに出て今宵は何と小豆かゆ　河菱
射　けふの日和は宵に見て置く　野角
月くもる雪の夜桐の下駄すげて　叩端
面白の遊女の秋の夜すがらや　翁
蓬　歌仙夜五　三股の舟深川の夜　同
五
雲は夜盗のあと埋む也　同
風くゞる大年の夜の七つきく　端

△異時分　越不嫌。

諸書に時分と夜分二去と云ふは、古式のさた也。次の例を見よ。

衛
時　式日の日もかたぶきて心せく　如風
淺草米の出づる川口　重辰
景　欄干に顔並ぶ夕すゞみ　翁

此等は同時分なれども、時分と景色の別にて越を許せり。此類四の卷、月の部に例多し。

其俗　山寺は晝も狐のさまかへて　沾荷
花とひ來やと酒造るらし　翁
晝夕　夕霞日々に重なるまりの音　露沾
殘る蚊に袷きてよる夜寒哉　雪芝
壬　御脊ながらに見する澁あゆ　翁
よ夕　夕月の光る椿は實に成りて　土芳
みそ川に晝飯喰の鋤つけて　り山
笈　茶賣の影を娘出て見る　汶村
晝日　よそよりは夜明の早き山の月　木導
天目も宵の瓢も轉けてある　凉卜
七さみ　よその砧がこちで合はする　貞吾
宵明　旅人を見送る月の明渡し　一イ

俳
朝から口ばしならす烏の來て　桃りん
早う野分の吹いてをる也　蘆雁

宵朝
せんたくの暇を貰ふ宵の月　支考
年の夜の隣りは鍵や大黒や　雨青

たそよ朝
衣をきても魚をくひても　夏由
鎌倉は後ろに明けて朝の月　山りん
鎌鍬とらぬ八朔の朝　滄波

別
秋の水ざるに鱠を引上げて　同

朝夕
わづかに虹の殘る夕月　杉風
湖に片破殘る朝の月　仲志
扇もいらぬ風の自由さ　り雪

梅十
浪人の常さへあるに秋の暮　羽稿

あさくれひる
碁ばんはあれどうつ相人なし　泊楓
看經の鉦に晝ねを驚かし　蓮二

△夜分　二去。(古へは三去)　(へ)

夜分(やぶん)とは暮れて、宵、更、夜、闇、朧、暗き、星明り等也。

續さる
火燵の火活けて勝手を靜まらせ　馬莧
仰(ぎやう)にかけむの逢ふ夜寒さ　同

浪
月の夜に借もお廣い下屋敷　可夕
今宵はきつと今庄の戀　蘆錐

匂
宵の豆麩の氷る狙板　朱紬
暮切つて灯とぼす迄の薄月夜　同

△夜體　越不レ嫌。

(本書)蟲砧(むしきぬた)の類は、夜の心ならでは面白からず、されども夜分(やぶん)に指合(さしあひ)なし、其外は此類にてしるべし。

▲其外とは月、稻妻、暮、夕、明、曉、露、霜、閨、枕、夜具、蚊屋、眠、起、夢、灯の類、夜の心に作りても嫌ひなし。

寢所に誰れもねてゐぬ宵の月　翁

炭
どたりと塀のころぶ秋風　こ屋

むし
蛬薪の下より鳴出して　り牛
小くらい月を不機嫌で見る　知足

衡　―新綿をふとんに入るゝ下り前　同
蟲　―砧をもつと遠う聞きたき　路通
―鈴懸しぼる夜終の法　圓入
花摘　月山の嵐の風の骨にしむ　そら
稲妻　―鍛冶が火殘す稲妻のかげり　水
月かげの夜終廟の草刈りし　清風
一橋　身ふるふ羊秋寒げなる　言水
明暮　明暮を山見ぬ舟に楫をれて　風
露霜　―割木の安き國の露霜　翁
炭　網の者近づく舟に聲懸けてり　牛
―星さへ見えず廿八日こ　屋
かや　―蚊屋の傍にて茶漬くふ也　支考
箕　商ひの工夫に落ちぬ盆の前　正秀
―月よはとかく十五十六　臥高
夜具　四つ折のふとんに君が丸く寝て　翁
寝　物かく内につらき足音　岱水
さる廻　月くれて雨のふりやむ星明り　史邦

―わせの俵にほめく刈豆　嵐らん
起　胸むしに又起さらるゝ秋の風　岱水
行燈も眠たう成りて後夜のかね　阿文
本朝　鼠は升の道かへて出る　支考
月　歌によむ程はあれねど月の影　武中
△夜分付句。(多省)
尼になる宵はひそかに洗ひ髪　木導
句　―星は氣疎く光る雪空　汶村

□時節

(古今四)今答ふ。新式は三十年四十年には、年の字を二句嫌ひ、物の數の七十八十にはきらふまじきはず也。と、細註は殊に分明也。(本文長ければ上下を省く)

▲此段は應安新式の假名遣論也。貞徳は年の字にはチの訓なし、そじのじは七十の字といふ心也と御傘にいへるを、支考難じて、字といふ謂

れなし、そじのじはとしの略のじ也といへり。是貞徳支考書誤りにて、新式のソヂとある方正し、こはとしの約をチといへば、そぢと年とは二句さるべき道理（だうり）也。

△年音訓かはり　二去。

ひな

亂より後はしらぬ年號　翁
此石の上をうき世に年取りて　同

△年　三去。（古へは面去）

深

花の春小田原陣の前の年　桃りん
新一駄なくても年はとられけり　酒堂

五日月

質置の音も鎮まる年の闇　鷺白
繰つて見て年忌驚く當り年　可推

笈

何方も今年の花は十日過ぎ　支考
めつさうに白子の濱の年仕廻　正秀

翁

只年寄の子は子也けり　沾ホ
四 月と花ことしの明（あき）を尋ねばや　同

△涼、同季　面去。

春鹿

夕月の笠乾いたれや涼しいわ　露情
夜明のかねに涼し過ぎたり　岑蛙

△寒、季かはり　三去。

小文

ふ 寒さうに藥の下を吹立てゝ　史邦
あ 肌寒き隣りの朝茶呑合うて　翁

櫻山

同 下戸は茶づけの肌寒き袖　里楊
ふ 野郎のうたも寒き朝妻　句空
は 鶯の寒き聲にて鳴出し　二嘯

ひさ

あ 六 まだ上京も見ゆるや寒　及肩
ふ 五 撰餘されて寒き曙　探志

△寒、同季　面去。

三日

あ 白い木槿の寒いやう也　林角
九 三日居たれば里の肌寒　林風

笈

うまい所を起す肌寒　正秀
九 濁酒鼻も醉はずに寒がりて　同

深

衣うつ砧は馬の寒がりて　翁
十一 懐にこぼす涙のやゝ寒き　游力

○

俳

ふせ中は寒く頭打ちける　木白
十　鷹の爪胝寒く鳴くならむ　半殘

山中

十四　茶の花に寒さぞ増る囦快寺　里臼
けさの寒さは事も愚かや　同

△時節の詞、同季他季共に越不レ嫌。

ひな

金拂ひ名月迄は延びられず　そら
上り日和の浦の初雁　涼葉

名月、秋

秋もはや升で斗りし唐がらし　翁
八朔の髯剃りに廻るらむ　嵐竹

小文

御門徒寺の角力つぶるゝ　史邦

入朔、秋

秋蟬のいりつく様になく時ぞ　山店
盆過のさむみも付かず照渡り　管呉
野にさく萩の牛に踏まるゝ　枝動

櫻山

名月に毛せん儲りて借りられて　虛舟
都にすめば分限者のまね　市仲

盆、名月、ひがん

彼岸には後生の花の咲きかゝり　十丈

東花

正月、春

臼も正月杵も正月　虎睡
花鳥に味のあるこそ凡夫なれ　黑太
朝寢夕ねに山里の春　自能

季異なりたる例は、推してしるければ擧げず。

△異月並に音訓とも　五去。

續さる

正月・物の衿もよごさず　臥高
わらひこはゞる卯月野の末　翁

新百

四　京衆は三月顔に出歩行きて　仄止
けしの盛りの四月中旬　水甫

文月

六　正月も御ざり懸つて此寒さ　り紅
庫裡の焙爐の四月一ぱい　柳こ

△異名の月並越不レ嫌。(古へは二去)

(花のしべ)月並の月は、衣更忘・彌生の類二句去也。

▲こは古式をいへる吻也。蕉門には異名の月並同士も嫌ひなし。只月並とかはりては、爭でかきらはむ。

師走　水車米つく音は師走にて　其角
鶴　梅は盛りの院々の閑　似春
如月　如月の蓬萊人もすさめずや　こ斎
△春夏秋冬の字、かはり越不レ嫌。
綿館並ぶ冬向の里　許六
深　斥鷃階子の鎰を傳ひ來て　翁
冬はる　春も其まゝ七くさもたつ　嵐らん
夏冬は取りおく橘を懸け初めて　やは
寒さく　夏冬　門に顔出す月のたそがれ　翁
あき　雲行も秋の日ぐせのざんざぶり　は
髮筋よりも細き秋風　風麥
風麥亭　鶴の夢薄の中にまどろみて　土芳
秋冬　冬のそほづの弓を失ふ　半殘
小田の秋しれ飯こぼす人　角
誰　蝶花に在りたきまゝも四つの恩　擧白
秋春　九十九なれや久かたの春　才丸
此夏の扇は盡きて骨ばかり　介我

むつ　尺朝がほの花の一時　素狄
夏秋　皿戻す心遣ひの秋がつを　己應
春の旅串柿くへと後手に　鼠彈
小弓はる　脇ざしどもを駄荷に預ける　夕道
夏秋　夏ならば月よの様な秋の風　左次

△春夏秋冬の字　各五去。

春夏秋冬の同字(どうじ)、各歌仙に三つづゝは例(れい)あり。そは歌仙に、月三つ、花二、素春一、出づる故也。夏冬の字も夫に準じて、三つは許せり。但し各取合せては歌仙に八九ばかり也。

は感じては鬼が詩をつぐ春の雨　其角
其俗　九老僧の若衆連れたる春の月　百り
五餅花もやゝとすゝけてけふの春　嵐雪
は春の拍子の山靜か也　慈竹
夏衣　四降埋む雪にも春を待つならひ　支考
な雛形の廿四ばんに夏待ちて　左把
本朝　七夏大根の種は遲蒔　流辛

炭
閏があれば夏の隙さよ　比誰

桃盗
熊谷の堤切れたる秋の水　岱水
手前者の一人もみえぬ浦の秋　やは

同六
村雨は秋の物とて山颪　柳士
下地窓より秋を覗いて　同
日のうつる障子に笹の秋更けて　牧童

枯
ふ
水くれいとて夏冬もなし　嵐雪
六
温かにふろ吹にゆる冬の月　東潮

七部集に春の字三つ出でたる巻八あり、其餘例多し。

そこ
百匂
秋六
ふら／＼と百日紅に秋の色　吏合
雀吹きたつる秋の朝風　浪化
濃茶に並ぶ人々の秋　同
さをしかの聲も高野の秋の坊　考
餘程媚びたる後家の秋風　半綾
秋なれや越の白根を國の花　化

△春夏秋冬の字を用ふる心得。

春秋の字を用ふる事手柄物也。近世季節に困りて春何秋何と用ひたる句あり、冬とも夏とも入れかへられむは拙き限り也。さる遣ひ方ならば、一も許さず。

續さる　春無盡先づ落札が作　太夫　馬莧

百姓の金の入用は春仕入也。是秋冬に動かず、又「賑ひ、「暖か、「物うからぬ、「心長閑、「日永、「めでたき、「心動くなどの所へ、春と用ひて其意を含ませたり。此故に賑と遣ふよりも、春と遣ふ方に賑の餘情を含みて却つて働きあり。此意もて用ふる故に、幾ケ所出ても意かはりて面白し。

句　黒い帯女のしたる夏の月　汝村

是白浴衣の餘情也。冬春に動かず。又「涼し、「暑し、「明易し、「うつくし、「山深しなどの所を夏の字にかへたり。

蓬　秋の鳥の人くひにゆく　翁

是哀れなる體也。又「殘暑、「冷氣、「夜長、「寂寞、

「豊凶、「閑静、「殺伐等の心に、秋と用ひたる例多し。

冬　冬の朝日の哀れ也けり

古今珍らしき見立也。此外「寒凍、「短日、「枯衰、「年末等の用ひ方推してしるべし。返す〴〵も力なき事に春秋の字を用ふる事なかれ。

△春秋同季　五去。（三より五迄續）　㊀

（或書）翁曰く。同季五去也。此間他季を入るゝなり。しからざれば廿句隔てゝもならず。

▲これ（三部書）の古式を述べし物也。歌仙表五目に月在りて、秋三つつゞき、う七目の定座に月を出す時は、いつにても秋五去になる也。其間に他季なきとて、うらの月を省かむや、抑も月花には數の定めあり。他季には定めなければ趣によりて、其間に夏冬兩季出だしたるも亦一向なきもあり、今兩例少しづゝあぐ。

春　ぁ菊ある家によい子見ておく　旦かう
（夏　冬）

萩ふみ踏す萬日の原や　水
砧　廿四五夜のほのくらき月　呂風（夏　冬）
みかむのかざのはんなりとする　浪化
どちこちなしに月の約束　怒回（四）
鳥劫　取分けてざつと濟みたる花角力　同
許しおく花野の駒の連れいとひ　友之（四）
みかの㊀　鳰にふみよる月の良寒　志水
す　細くなる雨にもしぼる蝶の羽　り合
深　西日いる花は庵の間半床　桐奚（秋）
くはずや否や江湖崩るゝ　乙由（夏　冬）
山中す　薄紅梅の借も咲いたり　涼ト
開帳はひがんを懸けて觀音寺　馬岐
山かたす　打明の火に雪隱も見霞めて　東羽
㊀　雉追にゑぼしの女三五十や　水（四）
冬　我月出でよ身は朧なる　ト國

春五去は一方素春也。㊀四去は此外になければ、好んでまぬる事にあらず。

△夏冬同季二去。（一より三迄續）

（古へは五去）

（古今三）昔しより同季は都て五句去りなるより、それとこれとの指合に、よき句の害となる時も多し、此故に今の俳諧の春秋は、例の五句さるとも、夏冬は只三句さるべし「又曰く。春秋は五句續く、故に五句去る。夏冬は三句つゞく、故に三句さるべき道理也。

▲許六の書にも同樣にいへり。さるに、「瓠、「深川、「句寒に翁二去の例あり。「東花、「櫻山伏は支考の卷なるに、是にも二去の例あるをもて考ふるに、祖翁一旦は三去と定め玉ひて、又二去に許し玉へる事、涼ト十丈等の卷に例あるにてもしるし。

深　な鳥の涙か枇杷の薄色　翁
　日盛りに鯰うる聲を夢心　酒堂
句　先づ工夫するかやの釣りやう　筆

粽つむ笹の葉色に明けわたり　許六
　笠きて膳にすわる撫子　支考
東花　雨ふりに木履もつ手は羽抜鳥　其由

○

　薄曇る日はどんみりと霜折れて　乙州
ひさ　撰りあまされて寒き曙　探志
　腹の寒さの飯時になる　桃妖
射　遣取りも師走の空の暮れかゝり　自笑
　火燵の酔をさます欄干　杉更
櫻山　雪一つはら〳〵雨と成りにけり　い吹
　寒佛になのはの軒の枯れつゞり　孤外
このは　ぞつと寒げの間日に影さす　何狂
　きら〳〵と雪吹の中の岩氷柱　同
金龍　述懷の霜はおけども日剃りして　東鷲
　嫉妬の色を破る年の尾　千石

△他季歌仙に五ケ所の例。

他季を中に用ふる事は、卷の趣によりて定めなし。

夏か冬か一方出でたるも、双方一向出でぬもあり。凡そ歌仙に夏冬合せて七八ケ所は例多し。近頃夏冬をかはる／＼出す物と、頑に覺えし人あり。同季の句去は何の爲めぞや。

ふ二　鼻の先あぶれと火鉢持つて來る　吟堂
一四　今夜戻つてあすは春也　支稿
六　面白うかゝせて雪はふりにけり　同
夜も頭巾をかぶる山ぶし　同
五　夜の明けかゝる菜畑の霜　ホ道

行脚　○此まき夏二あり

○

折々涼む裡の柿の木　翁
日盛りは孫に吸筒提げさせて　濁子
旅瘡や長き五月の舟泊り　同
時鳥すわやと蚊張釣りかけて　翁

ひな　冬二あり

「あら野」初雪の卷中に他季なし其外にもあり。

△春秋の季を引上ぐる心得。

う二　ふろのかげむの靜か也けり　野径

は鶯の寒き聲にて鳴出し　二嘯
ひさ　雪の樣なるかますこのちり　乙州
△初花に雛の卷樽居並べ　珍碩

靜也けりと云ふ餘句、若ふろに氣延の體と見立て初音の鶯を付たり。すべて春秋の季を引上げ、月花を引上げ、あるは他季しげく出す等の事皆かかる故ありて、其季ならでは叶はぬ樣の所に用ふる也。始めて出す季は皆かくのごとし、其次より續けてゆくは仔細なけれど、始めて出したる季節の前句に、不用なるはいと見苦しき限り也。

△素春歌仙に一、百句に二。　（ヘ）

句、脇、三の素春は常體にて、中に出すには或ひは秋、發句の引續きか、他季の花發句に出でたる時か、或は花表に出でたる時か、又何事なくても、季の入用ある時か、表にも裡にも後の表にも出す也。何れにても、春と素五さる時はよし、歌仙發句に素春ある時は中に出さず、百句には二ケ所よ

し、但し歌仙にて素秋出でたる時は、素春せず、百句には素秋、素春、一つづゝはよし。

續寒

句五人ぶち取つてしだるゝ柳哉　やは
日より／＼に雪解けの音　翁
猿引の月を力に山こえて　同
そこらをかける雉の勢　やは
暖に成つても明けぬ北の窓　同
七めのおうなゐ等がとさかを拾ふ礒遊び　其角
沖の子の日に海松をひく　百り

其俗

玉造浪花はかすむ古都　嵐雪
蟻の力も廻す輪藏　角
老僧の若衆連れたる春の月　り
句日の春をさすがに鶴の歩み哉　角
砌に高き去年の桐の實　文りん
雪村が柳見にゆく棹さして　キ風
梅のさかりの院々の閑　似春
二月の蓬萊誰もすさめずや　こ齋

鶴　百句二所

十七回にもあり　／＼姉まつ牛の遲き日の脚　千り

△季移り。

季移りは兩季穩かに移るを宗とす。只「月といひ「花といふ句は、何季にも移りよし「凉は夏秋に懸り「寒は秋冬春にあり、「足袋、扇は四季用ふる故に自在也。雁、彼岸、出代等の春秋に渡る物は句數をもていづれかしれたり。借二季移りは歌仙に幾所もあり。三季移りは歌仙に二ケ所也。四季移りは事滿つる故にや常にせず。何續きも二季にても三季にても、凡て九句續き已上は稀れ也。或は夏秋春とも、秋春夏とも、冬秋春とも、春秋冬とも、月花を續けたる前後に、夏か冬か一方あるは例夥し、又夏春冬とも、冬秋夏とも、月か花かを中にして、前後に他季を續くるもあり。又春夏秋とも、秋冬春とも、春秋の中に他季一句入るゝ時、前後の續きに挾まれて興を失せざる樣に、慥かなる季を用ふる也。中の他季二三

句續きたるは仔細なし。さて月も花もなき素秋か素春かに、夏冬を續けて三季移す事のなきは、月花は風雅の眼なる故也。

あつみ　表三季

な　あつみ山やふく浦懸けて夕涼み　翁
同　海松かるいそに疊む莚帆　不玉
○　月出では關屋をかゝむ酒持ちし　ら
あ　土もの竈のけぶる秋風　翁
同　印して掘に遣つたる色柏　玉
ふ　あられの玉をふるふみのゝ毛　ら
同　鳥屋籠る鵜飼の宿に冬の來て　翁

冬の日、深川にも、發句より三季續けあり。

枯
な　皆刈むや里の夏物か　兮
あ　秋の蚊のはら／＼出でし八下り　横几

春夏秋冬の字は、目立ちて移りがたし。こは六七月にとる雜穀を、常に夏物といふ故に付けたり。

歌
ふ　年もはや王手々々と暮れかゝり　東羽
は　隱居の鉦のいつも三月　白狂

いつもと云ふ詞にて移りたり。

△夏冬移り。

金
ふ　句　麥蒔いてよき隱れ家や畑村　翁
同　冬をさかりにさゞんさく也　越人
な　晝の空蚤かむ犬の寢返りて　野人

ふり
ふ　雪に諸鳥のどう暮すやら　楓里
な　是からの便りよしのゝ釣瓶ずし　牛潮

のみはいつもをり、鮓はいつもあり。

笈
ふ　年越の夜の殊にうたゝね　巴丈
な　借は下戸嶺の樣に成りにけり　ろ川

東花
な　麥のほつらの山は村雨　支考
ふ　布子うりけふ白河の關越えて　前川

いちごは比べ物、布子うりは戻り也。

このは
な　いはけなき紫のぞくかきつばた　孟遠
ふ　ぞつと寒げの間日に影さす　何狂

かきつは四季咲あり、殊にいはけなき紫と云ふは夏の莟と見むよりも、冬の縮吹とする方手柄也。

此意（このい）を得る時は、石に木をつぎ、水より火を出すとも可也。

△他季一句挾み。

句兄　○秋懸けて鰺の干物に鳥刧　其角獨　白扇
牛の挨りをたゝく夕月
淋しさや二所權現の藪の色
ふ　薤きせおく餅搗の臼
△佛だんは所化に任する花の頃
二本榎かすむ入相

○

八夕　△花さく彼岸のかねは七つ過ぎ　示弓
専らあかい椿四五本　昌柯　蓮
蠶飼する野上の長が揚疊　和竹
瓜實顏の禿蒔きおく　子直
な　初帶の强飯の豆を彈くとて　何竺
鶴屋の跡を濁す出代　宇中
人の口に戶は明けてある秋の風　寸昭

○廣い世界に月は片破　乃露
看經もなむ西行と鴫鳴いて　蓮二

○

○行燈の光りも薄き月の照り　路健
吸物さとる松だけのかざ　林紅
雁なければつるがの秋を思ふ也　夕兆
ふ　小便に出て寒きくつさめ　氷麥
△花もまだ十日過ぎねば木々の色　東園
霞をさつと吹きわたる風　詞端
ひばりなく源氏は陸に舟軍　嵐青

△四季移り變格。

ふ　雪の日は內迄鳥の餌をはみて　盧文
は　琴習ひゐる梅の靜かさ　蕉笠
同　朝霞生捕られたる物思ひ　い然
同　衣着かへねばわるき春雨　越人
な　時鳥初音まつよは化粧して　翁
○　間垣の月に車惡ばせ　炊玉

あ此里は糶する音のさら〳〵と　己百
同　孝子みかむを折持つて行く　用呂

虚栗に、な一、あ五、ふ二、は三、四季十一續きあり。

拾　十句 前後 夏

な　桑くふむしの雷におづ　清風
同　夏やせに美人の容衰へて　そら
あ　玉祭る日は誓び恥かし　素英
○　入る月や申酉の方奥もなく　風
あ　雁を放ちて破る草の戸　翁
　干し鮎の盡きては寒く花ちりて　英
　去年の畑に牛蒡めを出す　ら
　蛙ねてこてふに夢をかりぬらむ　翁
　火串しるべに國の名をきく　風
　扇には誌しき連歌一兩句　ら

△當季按ずる事。

(本書)月花の句にも限らず、四季の付句に其季を案ずる事、前の二三句輕き時は、當季を捨て、趣向より按ずべし。譬へば獅子舞と趣向を定めて、門の花とあしらひ、長刀と趣向を定めて、橋の月とあしらふ、前の二三句重き時は、尤も其當季より按じて、花鳥月露の類に、一句の風情を盡すべし。此二つの按じ方は、元より變化の爲めなる事をしるべし。

▲近頃季節の事を欠ぎし俳士あり。今宵は「友衛の來ればと、床には「筌の花生をかけ「あられ釜泌して、「寒入鉢に氷砂糖もりて、いかめしく構へたる宗匠の誑きをきくに、「森若丸には「朧饅頭とあしらひ、「麗かな妹には「ひねた手管をよせ、百匂四本の花だに、「花田、「花塗、「花がつをの類を手柄顔に遣ひ、「帷子の辻には、「螢火打を出し、「若竹屋には「葭簾を懸け、「素麵、梅干も季に連れて夏とし、「いが栗坊主、豆男も秋に論なしとや、「月毛の駒、月額、或は月の兀天窓などゝ、あらぬ詞を工み出し、「秋葉の宮「眞葛が

原「小菊は紙にも婢にもなり、「桔梗は紋にも染にもなし、一巻終りて「鹿の巻筆を納む。熟ら一座の俳諧を見るに、季の句更になし。又作意を好む徒ありて、「笑ふ山、染むる山、「殘る花、歸り花等の上下の字を二ヶ所に分け用ひて、是を制季節と罵りあへり。却つて其山の雜となり其花の春となる事を知らず。或は櫨と恥、嵐とあらじの言懸に、假名違ひを辨へざるは、いかなる心の邪みぞや、これいにしへをかゞ見ざる故ならむと、爰に古人の鑑をかゝぐ。

△春、他季を當季に設きたる例。

俳　見知りたる弟切草の蒔え出でゝ　沾蓬
ひさ　蝙蝠の長閑につらをさし出して　路通
炭　新畑のこえも落つゝ雪の上　こ屋
同　枯れし柳を今にをしみて　岱水
續さる　冬よりは少なう成りし池の梟　沾ホ
枯　年越えすます坂の櫛挽　か兮

東西　誠にあすは衣更也　支考
小弓　朝きりの雲雀を置いて流れけり　如行
百轉　紙衣に隙をくるゝ禪門　風竹
梅十　晝寢する裾に火燵の捨てられて　董平

△同　季を活かしたる例。

冬　其の望の日を我れも同じく　翁
其の如月の望月の頃と云ふ西行の歌をつめり。
同　かゞみ　櫛箱に餅居うる閨の灰かなる　か兮
雜　わか風呂　包錢やる湯屋の三方　ふ船
同　とり合　けあひに強き黒鷄の聲　横几
七さみ　鶯　還り本栖となくはつの事　一イ
ひな　こひ猫　我猫にのら猫どもが鳴侘びて　翁
句兄　同　隣りは男猫此方は妻　其角
俳　かすみ　どちらへむくも空はどんみり　土龍
鎌　春宵　精進も同じ價の宵なれや　千梅
う陀　雪解　下駄のはに一筋黒く解初めて　許六
東山　花　白絹の無疵にちりてよしの川　某邑

渡らば錦中や絕えなむと云ふを反轉したり。

山かた　笑山　綠に旭の山もにこ〳〵　六之
百歌仙　薯蕷ならいせの何やら取りに來い　天垂
十七　出代　假りに居し昔し男を又置いて　我兄
はの　れはん　手枕は釋迦に始まり舞臺借　倫里
類　初雷　鳴神も呑みたい空にうひ〳〵し　琴風

如此の作は、同季の中にはさまでは早く聞えぬもあり。又端に置いても能く聞ゆるもあり。覺束なく思はゞ、今一句付け添へよ、又かく作りて一句捨にする時は雜になる也。

△雜の物を季に詠きたる例。

山中　朧の淸水季を持せたり　乙由

柳原、鶯の瀧、五月雨山の類は不易の名なれば、季に連れても雜にて打越も憚らず、植物生類降り物の論もなし、例令風の柳屋と作りても雜也。さるを季を持せたりと作りたるは一段の活也。さりながら、此粕を絞りて「鶯の瀧季を持せたり、などゝ再びする事なれ、こは一句止の曲也。

難　一霞汲まうと騷ぐ親父達　山りん

汲霞は仙家の事なれば雜勿論也。貞享、元文の間の諸集の中、此外に見當らず。こは草の卷なる故に、曲節に用ひけむ。諸家の季寄に汲霞を出したるは、古式傳寫の誤り也。

△夏　他季を當季に詠きたる例。

ひな　蔓延りし廣はの茶園二度摘みて　濁子
別　乙鳥の三ぱんに迄產連れて　桃りん
笈　雜なくあとの豆のむらばえ　許六

△同　季を活したる例。

花摘　風の香　有がたや雪をかをらす風の音　翁
百鳥　夏夜　八つか七つにしろりしのゝめ　乙甫
さる　あを田　稻のはのびの力なき風　珍碩
名筐　いなり祭　神も御たびの卯の日うら〳〵　枝翠
鳥道　あゆとり　月殘る夜ぶりの火かげ打消して　い然
浪　時鳥　本尊懸けたとなくは山寺　夏段

別　新ちや　よき雨間に作る茶俵　子さん
同　新むぎ　くさみ付いたる片搗の麥　そ舟
鶴　柏もち　餅作る楢の廣はを打合せ　き風
三匹　水くわし　水は氷に錫のきれいさ　蘭少
翁　萍　花ながらかべにぬりこむ池の草　沾德
八鳥　西行清水　結べよむすべ風流の水　好秋

△秋　他季を當季に設きたる例。

桃白　燒めしに瓜の粕づけ口あけて　翁
別　ひばりの羽のはえ揃ふ聲　同
續さる　大根の育たぬ里にふしくれて　同
鶴　炭竈こねて冬の拵へ　杉風
きそ　夏過ぎてから鹽に事かぐ　同
拾　冷初むるゐろりふしんに取掛り　雪九
いさゝら　かやつるせわもやめて此頃　故江
草刈　霧の重ねの日も朧なる　從吾
白扇　口切をまつは茶の湯の命也　元士
其鑑　菜の二ばんに鎌を懸くる也　支考

山中　生るもならぬも皆接木也　里臼

△同　季を活したる例。

星合　をとり　許されて女中の中の音頭取　翁
續さる　いれ　奥の世並は近年の作　同
さる　貢　年に一斗の地子斗る也　去來
匂　同　先づつみかくる年の物成　嵐らん
同　新わら　菊を見てからかゝる家ぶしん　許六
冬　そばゝた　そばさへ青し信樂の坊　や水
句兄　砧　網になる衣はひかふる槌の音　彫棠
續花　同　すり木にて粘強うつも只ならず　こ萍
つるも　つゆ　何白玉の咎へしばらく　可及
あら　こま引　駒の宿昨日は信濃けふはかひ　や水
十七　同　野髪にて繋ぐはかひの引餘り　孤松
同　かや仕廻　もはやつらねば何ぼとめても　同
同　しか　うづくまる上毛の星も青丹よし　柳闆
ふり　はたおり　五三と引いてきりはたりてふ　竹司
類　雁　平沙に並ぶ鳥は足輕　大町

笈 秋冷 けさあかつきのねびえ覺える　園友
東山墨 同 笛の音の冷りと風も音信れて　大川
むつ 角力 又投げられて頰べらの砂こ　松
拾 捨扇 破れ扇のほねをつながむ　友五
はの 出代 御心にいる騎を抱へる　橋下
雑 玉祭 戒名しらで祭る戀人　沾蓬
同 若たばこ かも川にけさは流るゝ瓜茄　其角
十七 同 雨をもつ程に蕒のねせかげむ　非琴

△雑の物を季に詠きたる例。

白たら 折からと萩本坊の御音信れ　北枝

萩のさく折からと云ふ心を含みたり。かゝる曲節の詠きは一度限り也。必らずまぬる事ならず、さるに近頃「折からと牡丹餅、折からと柳腰など」妄りに用ふる人あり。始めて用ひしは手柄なれども、再び用ひなば恥ならむ。(古今抄)梅本坊と過つたり。

藤 菊屋のうらも今花の秋　桂碩

かく季を結びたるは仔細なし。

山琴 白露の玉の芙蓉を手に居ゑて　見龍

(古今五)玉の芙蓉は盃の名目なれども、發句に植物有りて芙蓉を當季に用ひがたき故に、白露に季を持せたれば、芙蓉は雜にして、植物の雜を遁れたり(文約)

(古今四)草木鳥獸の畫に其季を持せながら、古抄は生類植物に嫌はずとや、凡て雜となさば論なからむ。季をもたば二句さるべきにや、此等は繪の月喩への花の例也。

△冬 他季を當季に詠きたる例。㊀

ひさ 月氷る師走の空の天の河　正秀
深 忍返に殘る橙　酒堂

△同 季を活したる例。

後たび 同 一とせの仕事は麥にをさまりて　翁
匂 野は仕付たる麥のあら土　許六
夕顏 ゆき さあふりつむとうなゐ子がとぶり　角

本朝　　　　同　ふらぬかと思へば竹の折るゝ音　　重平
東山墨葉はなけれどもげに柳也　　子靖
。世燈　大こ引　穴におどろく尾張大根　　そ雀
はの　鐘聲　鉦は松むし聲でしてとる　　倫里

(古今亘の総)同季は三句去るべきやの事。

昔しより古法の俳諧にも、同季は五句去の定法なれど、五句つゞく物は五句去りて、三句つゞく物は三句さるべきか、今の俳諧の省法に、春秋は三句四句に限り、夏冬は一二句なればと、貞享の季節の跨に(古今抄三のまき)例の書捨て申されしを、百句の法は元より公式にして、連歌の掟をいろふべきにもあらず、増して季と季の五句去なるも、百句は前後の害なからむ。今いふ歌仙と短歌とは、月花の座のせはしきより、月秋の斷りもやかましければ、歌仙は今の二花二月も然らむと、宗祇の比の勅免を古例に引いて、古翁は例の門人に讓り申されき、況んや今の短歌行の二花二月は論に及ばず。

然らば春秋の季といへども、或は二句より三句に限り、夏冬の季も一句より二句に限りて、同季は何れも三句去と定むべきや、されど發句・脇、第三迄は其座に當季の用といひ、前後の配りに害なければ、春秋は決して三句すべく、夏冬は決して二句すべし。月花の座に至りて、春秋を三句續けては、前後の配りに害あれば、其季は二句にも省くべけむや。假令月秋を前に斷ち花前に春を呼出すとも、其春秋は二句に限らむか、然らば、此式の大たんなる、此等を衆評の大騒といふべし。そもや連誹の定法を動して、春秋を二句と定むる謂れは、名殘の裏の七句目にて、花は元より月もすべけれど、春秋ともに二句の古例あれば、今いふ式の省法にも、二句並ぶるは月花の會釋にして、賞翫の例によれりといふべし。然らば歌仙の式とても、今の短歌の省法ならむには、全く無法の私を入れず、古製の例なきにしもあらねば、今より

我門の學者達は、其座々々の衆評を伺うて用ふるは其人の自在にして、用ひざるは例の不自在といふべし。

抑も東花式は(中略)多くは故翁の意を察して、萬法一例の證文なれど、覺えず自己の道理あらむには、彼のいふ挍論の斧を惜しまず、例に一座の衆評より、一世の衆議に宜しく用捨すべし。百世の明鑑はいざ恐るべき事也。

▲此條は東花坊の新製なる故に、一卷の終りに置いて、後人の定めを伺へり。さて一段の約まる所は、

○百句、源氏、歌仙は連誹の式に效ひし物なれば、翁の省法に任せて、「春秋は五去にて、三より五迄續き、「夏冬は二去にて、一より三迄續くる事勿論。

○短歌行はしゝ庵の新製なれば、「春秋は第三迄續け、「夏冬は脇に限り、「月花の所にては季を引上げても二句と定め、何去は春夏秋冬ともに三去にせよと也。

二月の歌仙短歌行等の新製ある上に、何故かゝる新法を立てしかと考へ見るに、是春秋の續きを削らむ爲めのみならず、論ずる所は、春秋の句去を省かむ爲め也。此故に條目に、「同季は三句去るべきやの事と書きたり。いかなれば、翁も破らぬ春秋五去を三去に削るや、何故に前後の季に害ありやと、支考の心を察するに、短歌に春秋五去の法を用ゆる時は、素秋素春を用ふる所なき故に、續きを減じ句去を省きて、季を自在に用ひむ爲めとしられけり。しかする時は短歌行の月と月との間十二句隔たり、花と花との間十句ある故に、其間に素秋も素春も自在に出されむと、ふと思ひ付ける故に、かく述べたり、されど支考生涯一卷も此說きなきは、翁ち廿五條に二月歌仙式を書捨て、自らは說き玉は

ぬ例に效うて、支考も後人の衆評を待ちけむ事は結文に、「校論の斧をまつと云ふ詞にて著し。此故にしゝ庵の諸門人も、世評を伺うて是を用ひざりしと見ゆ、然るに三世五竹坊此段を見過りて、短歌の月花のことを二句限りに減じけれど、同季三去の法は用ひざるは、彼の得手に聞いて勝手に行ふと云ふ世諺に等し、蕉門扶育の志しあらむ者は悲歎せざらむや、今なほ朧雪、炊下の兩流をくむ人皆此毒に醉うたり。かゝる人の咄しをきくに、秋になれば夜も長く蚊も減りて俳席も樂なれども、又第三の季に煩ふなどといへるは、實に不便なる事也。其等の人とても、愚に生付きたるにはあらじ、只其師に迷ひ付たるのみならやむ、よや二流の人々二句續の省法は、己が季節不自在なる儘に用ひて、三去の略式は己が句作不鍛錬より用ひざる時は、徒に法を破る罪を其祖に歸すれば、努めて改革せよ。

△短歌行春四續。

長ら	谷水の岩にせかれて花筏	り	雪
	蕨かつけに遊ぶ兒達	り	紅
此まききな七	緣取にばゞの馳走の蓬餅	霜	鳥
	風の拍子に蝶も一さし	仲	志

翁の歌仙に、季廿八出でたるあれば、短歌に十七八あるべきはず也。増して稽古卷には、季も多く景物も頻りに出ださでは、生涯句作に自在を得る時なからむ。又季は常に諳記すべし。いざ月花といふ時に、先づと前句の見立にもかゝらで、各季寄くりたらむは、其句の付かぬ事先にしられて、いと見ぐるし。

□雜

(古今三)和歌の集に雜といふ題もあり。雜の體といふも有りて、連誹にも其名を傳へたり。今の俳

諸に是を評する時は、雜の發句は邂の用にして四季の部立の曲節といはむ。今按ずるに名所に雜の發句とは、一句に其所の名を出し、其風情を移し、然も又當季を結ばむとする時は、姿情は必らず穩かなるまじ(約文)

(タビ寢)先師ある時宣ふは、神、祇、釋、教、賀哀傷、無常、述懷、離別、戀、旅、名所等の句は無季の格有りたき物也。是を興行せむと思へども暫し思ふ所ありと云々。

(バセヲ談)其無季の句と いふに二つあり。一は前後表裡季と見るべき物なし。落馬の吟是也。又詞に季なしといへども、一句に季と見る所あり。猿の面の句是也。

▲去來は雜二體ありといふを、古今抄には今一體添へて、雜、雜の體、無季の格と、三段に名を分けたり。是本書の翁の說を述べしもの也。

△雜　表裡季なきをいふ。

名所　朝夜さを誰れ松島ぞ片心　翁
名所　橋立や文珠のちゑを恋ろくろ　支考
戀　戀をして思へば年の敵かな　去來
逢戀　菅笠の雫にぬれてあふ夜哉　去來
名所戀　褌にうき名のたつや戀の山　考
出女戀　淀にまつ牛よりもつらし糸車　同
傾城　文と夢鏡を戀の三つ道ぐ　秋之坊

(シバス留)かちならばの句は、「梶楷は杖突坂を落葉哉の心也。あさよさその句は、「廉よ年誰れまつ縞ぞ片心と云ふ言懸にて、季を隱したる物也(約文)

▲かくいへるは心苦しきこち付也。雜と云ふ句に季を隱すといふ事あるべきや、あゝ片腹いたし。

△雜の體　季ありて季の用なきをいふ。

名所　蝸牛角ふり分けよ須磨明石　翁

(本書)莊子に、蠻觸の兩國をたとへ、源氏に其の境這渡る程といへる詞より思ひ寄せたれば、必ら

すしも蝸牛の當季にも拘はらず、此等を雜の體といひて、名所の句の格ともなすべし。

庭前　松に蔦鶴となりても首だるし　支　考

(古今三)しゝ庵の三詠にて、其松に鶴をよせたるのみ、蔦は句作の形容ならむと、其世に衆議有りて雜の體となせり。

△無季の格　季の詞隱れたるをいふ。

歳旦　年々やさるにきせたる猿の面　翁

(本書口訣傳)無季の格は、句に當季の詞なくても、その季と聞ゆる句作をいへり。

(古今三)五文字に迎年の意はこめながら、掟たる歳旦の詞なれば、是をも雜の體とやいはむ、或は無季の格とやいはむ。然れば、雜といひ雜の體といひ無季の格とは今の新製にして、此等は今の俳諧の名目といふべき也。

▲(格外辨)廿五條古今抄等に、無季の格を擧げたれど、雜體に紛るゝ也と云ふは、本書を委しく見ざる故也。爰にとやいはむと未定に書きたるは、始めて本書の意を弘むる故也。結文に三段に分けたる所にて、無季の格と云ふ名を定めたり。――の文を除いて見る時は意明らか也。格外辨は俄著述の物と見えて、僅か十五丁の冊中に、卅四所寫し違ひ見違ひ等あり、あゝ著述はかたき物か、

歳旦　明くる夜の仄かにうれし嫁が君　其　角

同　君が代にあふや狩野家の福祿壽　許　六

(ヘンツギ)鼠を嫁が君と稱して、ほのかに嬉しといふは、元朝の曙ならではあるまじ、狩野家の布袋福祿壽も、常は見倦きたる風情もあれども、初春の旦にはいとめでたき翫びならむ。此界に入りて無季の味を察し知るべし。

古せん　綱立つて綱がうはさの雨夜かな　其　角

春雨ふる夜と題あり、是を(格外辨)雜の體に入れたるは過ち也。

花故　ゆく道やちりさへ跡の美しき　さよ
こは花のちりたるを惜しむ行春の吟也と評あり。
　いがに歸りて親しき人々の魂
　など祭りて、
笈　家は皆杖にしらがのはか參り　翁
同　世の中はさらに宗祇の舍りかな　同
是時雨の古歌取也。異本に「世にふるはとあり、しかいふ時は、只時雨の隱し詞となり、よの中と云ふ時は時雨は俤となりて、句意は浮世の觀想となる也。蓋し是再案か、此外前に擧げたる「季を活かしたる例と云ふも、無季の格と其名かはれるのみ作は一體也。

　　△四季の格。

　　七浦や一字の題を一字づゝ　見龍

(古今三)此等は雜とも決し難く、增して雜の體にもあらず。此句は其時に其季の脇を付けて、四季の格ともいふべきにや、されど、故翁の滅後に至りて、ひたぶるの新製なれば、太騷を定むるに日なからむ、先づ一座の衆評より、今日の模樣を定めむて、當の脇にて侍りし由、此體もやゝあるべき事也。

▲こは無季の格の一變體也。無季の格には、雜の脇を付、是には四季の脇を付けよとの謂ひ也。さりながら、此等の句は再びあるべき句ならねば、こは是限の曲節也。さるを思ひ過りて、只雜の句に季の脇する人あるは、目覺しき事也。

　　△一句離れて雜となる物は同季越不レ嫌。

(古今三)譬へば浪人の扇一本とも、老人を蒲團に釣歩行くともいはむに、古抄は姿情の用を分かたず、只名目を咎むる故に、季と季の害になる時多し、今いふ其句に其用をしらば、咎むるも咎めぬもあるはず也。假令咎むとも、必らず古法の五句去に泥まず、二句か三句にて用捨すべし。さはとて、此類は雜也とて、打越にも同季を出す族は、

今の論に及ばざらむ。
△古式は扇も五去也。蕉門には一句放して雜となる物は、越に同季を嫌はず、嫌はねばこそ雜とする所詮はあれ、そは支考も能く知りて毎々同季越を付けたるに、かく書きけるは、夢のわざにや、さらば自證を引いて驚かさむ。□

はある程に春をしらする鳥の聲　素らむ
たて　水ゆるされぬ黑かみぞうき　等躬
・ひな　まだ雛を勞はる年の美しく　須竿
雛ねらふ矢先の栖になく鳥　其角
句兄　鞍箱一つ見込み侘しき　專吟
・傀らい　近付は乳母ばかりなる傀儡師　沾德
一霞汲まうとさわぐ親父達　山りん
□雛・　錦の男たびの白さよ　普及
・十日えびす　祈れども十日蛭子のつらいやら　素然
○
は―かはり牡丹の名を弘めけり　土芳

俳　猷々に爛する事の上手なる　良品
・扇　―扇の角をつぶす舞まひ　風麥
―麻の茂りもくれかゝる也　天垂
百歌仙　舟たづる浦は靜かな浪の音　桃之
・夏入　―江湖の僧の連立つてゆく　素之
・も刈　―掻上げし藻のくさりたるかざ　そ舟
冬葛　道にねし僧起こさるゝ一ばん荷　岱水
―風に横ぎる蚊遣もゆかげ　杉風
・ひるれ　佛さへひるねの罰は當玉はず　連二
三笑□　乞食の種も別に蒔かねば　伯兎
夕立のつらさもはれて此月夜　重葉
箏の伸ぶるに何も憚らず　昨なう
三笑□　茶の湯はわざとあれた風情を　古賀
・鹽鳥　鹽鶴に先づは南部の物語り　重葉
・羅　羅に古い衣桁の奥床し　其樹
何もかまはず妻でよる年　貢橘
續花　鏡磨鏡の汗はうかぬ汗　こ十

山かた□
●行水
分限者になる事も厭土用干　六之
子供は何所に今の神鳴　栗儿
年よれば行水の湯を待ちかねて　野航

な
難□
●涼寒
寢よいかと仕立た蚊張釣つて見るそ　守
いらぬ二階の弘過ぎた家　野角
涼しさも涼し寒さも亦寒し　侶鵲
あいくとさへいはゞ孝行　禹洗

ふ
客のあるに目端(めはし)のきかぬ懸乞や　東孜

桃□
●節句
あ
秋風に狂ふ江湖の小僧達　柳こ
長湯憎んで水ふろをたく　き的
おはぐろに宵の節句も更けて行き　嵐枝
猫に忘れた飯かりにやる　り紅
同
晝ねにも倦いて見に出る花戻り　的

枯
●懸乞
―二季拂にて國々の懸　芝拍
内にゐる弟息子の賢げに　探芝
あ
―後山まで刈寄する萱　游力
―屋敷畑に多き栗柿　烏吹

東花□
●いわし
大風にきんか天窓を振りあるき　西跡
―いわしのかざのしたるめし時　舟閭
竹切によしのゝ嵐吹きあれて　支考

西花□
●かき
さびしき人の見え渡りけり　桂舟
膳組はひじきの煑物柿鱠　爾求
誰が思ひ葡萄を隅に一包　流和
禮もいはずに戻す文臺　朱角

むつ
●天河
闇は猶白き筋たつ天の河　助叟
●念佛踊
―踊勞れし他阿の同宿　不角
小弓
兒に化す例の狸ぞ御ざんなれ　同
霧沈む也ほつとする也　東鷺

●をどり
百歌仙
―けふはまうけて踊る内證　無心
旅人はどれからどれへ通らるゝ　定夕
あ
―烏の樣に明かす既望　東枝

冬蔦
●菜蒴
水汲みに出づれば月の川向ふ　そ舟
御寺の弟子はどちへ行かるゝ　岱水
居屋敷のあたりへ菜種蒔付けて　杉風

白壁の隣りに月を侘びかねて　風草
名筐　せんじ茶に迄例の物ずき　非而
•野遊　御尋に殿も野懸の袖の下　安榮
○
•大根　する〳〵と大根の市の四つ下り　り由
匂　姉が戻つてふゆるくひ口　許六
ふ白い物直を持上げて年のくれ　同
をしの來る池に木のはを散し懸け　八紫
白たら口　歸る日用に明日の約束　北枝
•弁口り　馬持に成つた顏にてゐろりばた　牧童
雪の板屋の暮れかゝる年　松阡
星月　腰折に大名戻りそゝなかし　松流
誓文拂土用八專　松笠
△春秋の憶かなる季を雜に用ひたる例。
賣　土のもちつく神事恐し　翁
直會祭なれども、名をさゝぬ故に雜としたり。
茶　雉笛を首に懸けたる狩の供　同

首懸(くびかけ)には年中結び付けたる故に雜としたり。ふく
體は春也。(格外辨)是を春と見損じたり。
冬　忍ぶ間のわざとて雛を作りゐるや　水
衙　小鮎ふめどたまらぬ袖ひぢて　知足
蓮　土産にと拾ふ汐干の空せ貝　落梧
ひさ　西風にますほの小貝拾はせて　泥士
渡鳥　籠に入れたる干たらこんにやく　一介
雜　かゞみの餅に殘るむしろ目　探泉
百囀　前がみの落ちたで戀の近返り　風竹
難　串柿ぬきに此月も百　乎哉
蓬　鶺鴒の尾を卿のゐに懸けられて　叩端
炭　てう〳〵しくも譽むる貝わり　嵐雪
三日　橙はひよんな時にも生つてゐる　除風
續花　雲に立つたるいわし名高き　惠風
難　いわしは笹の火でもやかるゝ　丈志
春　岩たけ取の籠に下げられ　且藁
草刈　荷うた人の見えぬ豆のは　支考

百鳥　我庵は剪子の骨のから木立　同
匂　鶺に土くれ鳩の鳴連れて　許六
雪白　苞は何ぢやと見るに山芋　露丘

此等も例多かれど、少しあげおく、古人の活用かくのごとく、千變萬化にして極りなし。人々己が拙きをはぢて、志しを勵まさば釋迦何人ぞ。

△雜の卷。

雜の卷は脇も雜也。表の內何季にても月一つあり。或書、雜の卷は第三に興行の當季を出すと云ふは非也。ひさごは三四月の撰なるに、雜の第三冬季出であるを見よ。又「一書に雜の第三は春季たるべし。春は季の始めなる故也と云ふも非也。必らず第三に季を出すと限る事はなし。いづこにても表の內一季あらばよからむ。

ひさ　龜の甲にらるゝ時は鳴きもせず　乙州
只牛ふんに風のふく音　珍碩
ふ百姓の木棉仕まへば冬の來て　り東

○獨りねて奥の間弘き旅の月　昌房

牛ふんの風を、畑中の凩と見て冬を付けたり。

柹　△○月雪の柳や花に子規　支考
面白き世に面白き人　吾仲
三　餅つく音のよそに聞ゆる　蒙野

發句に四季の景物を盡したる故に、三四のあたりには何季も興なからむとかまへて、雜を續け、表の終りに無季ならぬ串し譯のみに、詠物ならぬ冬季を出したり。心憎き設き也。

三匹　俳諧はまつから赤しさるの尻　凉ト
岑の嵐に谷の水音　支考
○有明は只有明と見て置いて　反朱

嵐は嵐、水音は水音、と明かに聞ゆるは、吹湘ぎし曉と見て、有明の觀想を付けたり。

文臺開新式歌仙

きく十　箱の底ぬけてしるべし二見形　萬子
墨畫とならば松に貝あり　伯兎

あ十歌仙十色に菊の花咲いて　蓮　二
同　秋をほめたも爰の事也　播　東
○仰向けば鼻の穴迄月のかげ　昨なう
こは菊十歌仙の祝ひにとて、菊阿の書ける文机を莚子の贈りたれば、其心を匂はせて第三したり、前十歌仙は常の三月、此一卷は二月歌仙也。是新式の始めと見ゆ。

長ら　嬉しさもうさも浮世の鵜の字哉　蓮　二
　蛛さへ網をはりて口過　梅　光
△○月花も買うた程にはうれかねて　童　平
は　釣荷の中に雜も國がへ　仲　志

(古今三)此題に雜の鵜飼とは難題にて、飼の字の意を運ぶ時は、とかく夏にして雜に成りがたし、さはとて四季の餘興ならば、雜の外に題名なからむ、爰に按ずるに、發句と脇とに起定の二格は此用ならむと、「蛛さへ網を張つて口過と申し侍れば飼の字はおのづから二句の間に籠りて、前は慥かに觀想の雜ならむと、一座の衆評は定まりぬ。

　歌書よりも軍書に悲し吉の山　遺　吟
し丶庵十七廻　ちる名は朽ちず花に紅葉に　盧　元
　は春は猶草も帶の手を待ちて　右　範

春は猶とは、花に紅葉にといふ別を立てたる作也。脇の花紅葉を、花庭・掃除と見て帶と付けたり、此等の例をもて第三に季の出づるも出でぬも、何季を用ふるも、皆前句より然らしむる故をしるべし。雜の第三に、前の長良川を引いて、季とも雜ともなる春季を付けよなど丶、臆說傳授する人もあるよし承はりぬ。抑も俳諧は變化自在を宗とすれば、月花の置所季の設き景物の配り等、毎篇新にしてこそ作者の所詮はあれ、いつも押判のごときさたする人は、皆ひが言を敎ふる責子也と、人人勘破し給へかし。

貞享式海印錄三終

貞享式海印録四

曲齋　述

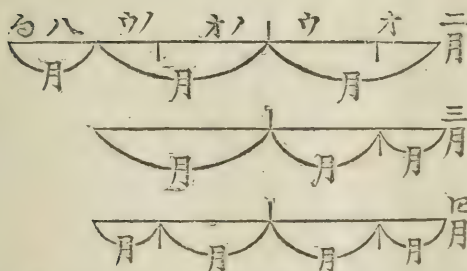
□月の事

(本書)月花は風雅の的也。月は月々にあり。花は四季に在りて、四花八月とは定まりたる也。(中略)(此間ノ文先へ出ス)初心の人はいかゞ、月は七句目、花は十三句目にある事は、ひたと他人へ讓る時宜也。いづこに在りても仔細はあるまじ。都て月花は風雅の道具なれば、なくて叶はぬ道理を知りて、さのみ月花の句に新奇を求むべからず。一座の首尾の宜きに隨うて、毎々倂のある句成りとも、其時の程よき樣に付けておくべし。

(兆枝考)月花の座といふ事は、初心稽古の爲めに書きたる物也。月花の座更になし。發句にある時は別して風雅なるべし。脇にあるも又いみじ、第三四句目にあるもよし。五句目にあるを月の座といふは、秋の發句の時、五句より外、季續かざる故也。他季の發句ならば、六句目に月ありても苦しからず。只表の內、月一つ裡の內月花とあるべき也。又引上て出す月花は、正花正月あるべし。夫を助字の月花に遣ふは不用也。(約文)

二月　オ　ウ　オノ　ウノ　八　名
月　月　月

三月
月　月　月

四月
月　月　月　月

▲月は端より端迄、いづこにても一句立ちて前句に能く應ずる所へ出す也。新式歌仙と短歌とは上段のごとく、常の歌仙は中段、古式歌仙は下段のごとし。又何の卷にても、月と月との間は同季、異季異名にかはりても五去也。さて八句ある表の

月のみは、七句目迄に出して、端の八句目に出したる例なきは、表長くて月の後るゝ隙なき故也。都て表に他季の月異名の月出で、或は月花の座入代へ(ノウ)に月出づる等の事、皆前句より然する事也。巻に摸様を付けむとてかまへてする事ならず。

△助字の月。(休め字と云ふこと也)

深　の四め　伏見あたりの古手屋の月 店　翁

春　の十め　我名をはしの名に呼ばる月 也　か兮

炭　う入め　鑓持ばかり戻る夕月 暮　やは

助字とは、傍なる店、也、くれ、などゝ作る所を月の字に替ふるをいふ。此句皆定座ならねど。助字を用ひたるは賞翫の意を失はざる故也。假令引上げてもこぼしても、座を動かす時は賞する心なくては叶はず。

△秋發句にて四五迄延びたる月(多例省)

(三冊子)春秋の季續、四句目にて花月の句をする事必らずあるまじとの師説也。

▲こは師説の聞違ひ也。花は表の内四句目已下に決してせず。月は六句目の端迄する事は、面毎に出づる物と、折に出づる物との違ひある故也。凡そ四五句目に月の延びるは、何脇に日景の障りあるか、さるべき前句を得ざるか也。六句目に出でしは元よりしかり。

衛　四　風ろ焚きにゆく月の曙　翁

秋　四　月なき岨を曲る山間　一井

小文　夜市に人のたかる夕月　史邦

菊露　らふそくの火を貰ふ夕月　正秀

さる廻　さしこむ月に藍がめのふた　半落

匂　秋もやう〱湯豆ふの月　許六

東山　灯はとぼさでも先づ月夜也　一盃

○

其俗　五　いる月に薄化粧うたる武者一人　翁　句目アリ

深　古戦場月も靜に澄みわたり　嵐らん　脇夜アリ

いが三吟　又起きて有明細き家の霜　猿雖

△折端迄延びたる月。（七部及多省）

端の月は百句にても一所なり、定座をこぼすは、歌仙に二所はよし、例は證句のうち、傍にぬう何としたり。

衒　六表は曇りをかくす朧夜の月　越人
渭　あ月も三笠の名にうかれつゝ　素天

○

桃白　お六めもう山のはに月の一ひろ　聽所
翁　よのあくる迄酒とらぬ月ヌウ九　ホ角
雑　鯉のごみはく月のうたかたヌウ八　彫棠
むつ　星の備を崩すありあけ　白桃
きそ　ふもはや今年も末の弓張ヌウ十一　杉風

○

俳　う十二めは道はかどらぬ月の朧さ　元代
句餞　禰宜おりかはる春のよの月　濁子
あつみ　朧の鳩の寝所の月そら
翁　光りかすまぬいせの有明ろか
其俗　あ月も聞ゆる水戸の下町　嵐雪
渡鳥　一むら雨の打ちあぐる月ヌノウ一　素民

○

星合　の十二め藪くゞられぬ忍路の月　史邦
沽ホ亭　月をとなりにでんかんをきくヌウ八　翁
梅のさかは海は朧にかゝる三日月ヌウ十一　天垂

○

句兄　あけあれを馳走に月の鶯ヌウ十一　柴雫
夕顔　鴻の春高し朧月てるり　ふ
其俗　土文ひろげいづみな月の月　鋤立

此二例は四月歌仙の畢也。

(三冊子)月の定座をこぼす事、師曰く五十句より内にはあるべからず。奥に至つては、少しの輿にもなる物也。歌仙は苦しかるまじ、略の物故也。

▲翁のしか申し玉ふ故なき事、次の例にて見よ

炭　一う十三月花にかき上城の跡ばかり　り　牛

△折口へ引上げたる月。

七さみ　うつかりと思うた空に三日の月　涼ト
笠　月くれて奉行を誘る日用ども　箕角
其俗　傾城の文すかし見る朧月　清風
俳綿とろ　去年裡の月の卅日の月くらし　曉雲

△異名月。　(へ)

近世前に月並の嫌ひなき時は、異名は用ひぬ物と覺えし人もあり。然らず異名を用ふるは前句に用ある故也。

肌寒み一度は骨をほどく世に　荷兮
春　傾城乳をかくす有明　昌圭

こは遊女の素肌を恥づる添臥の明の付也。されば下四言雜ならば、東雲とか曉とかすべきを、秋なれば朝月ともせむに、さては閨の姿なしと思惟して有明とは定めたり。異名の入用皆々かくのごとし。

萩露　な曉の影をのせたる白牡丹　介我
みかの　影なつかしき極陽の霜　風之
西椿　桂かげちる夏のよの霜　そ貢
冬　ぁ西南に桂の花の峯む時　羽笠
雞　久かたの兎も豆が好きさうな　晉及
夕顏　宵の照御簾の釣かぎ影もれて　我笑
百歌仙　てる夜の盤の身の少さゝよ　江柳
十七　さゝらえ男端山訪はるゝ　習之
山中　影高う桂男の顯はれて　北枝
ふり　九々によまれぬ十三夜也　喜丸
東六　明日の夜の芋をはれとや八幡習　涼ト
天河　立待も本尊は座しておはします　乙由
しゝ　廿三夜も杉の曉　山りん
別　ふかん／＼と有明寒き霜柱　八桑
金龍　弓張を素引く嵐や風や　願塵

作異なるを少しあぐ、因みに云ふ。蕉門には、嫦娥金剛、盃の影等の古式に用ひ來りたる物を用ひざる物あり。そは姿の有無にて自得せよ、桂かげ、

玉兎の類も、かゝる作をもて用ひたれど、夫も稀
れ也。

△異名歌仙に二。（多例省）

神
宵闇はあらふる神の宮遷　翁

句

有明は毘沙門堂の小方丈　許六

さゝらえ男現孕うだ　嵐雪

其俗

既望の光りに寺の米無盡　同

有明の舟に車をかきのせて　其角

類

ちるといる後の曙句ひけり　同

狩衣既望の闇を待懸けて　蓮二

文操

有明も花も心のみよしのに　桃如

有明は必らず鍛冶の影なれや　思尺

五色

桂男は壁一重なる寒鞁　長水

△同他季の月歌仙に二。（異他季の例略）

是は古今通式也。百句には同他季の月四迄はよし。

ひな

は
門番の寝顔にかすむ月を見て　翁

朝月に花の乗物せつぎ立て　千川

ふり

あの山の朧を見よと月出でゝ　村女

時めきてみすのあたりは月と花　同

續虚

山をやく有明寒くみす捲きて　角

月夜の雉のほろ〳〵となく　同

三日

ふ
推しやれおれが心と冬の月　支考

枯果てゝ柳はすんと月の色　そせん

松とるあとの月は汚れず　渭橋

誰
百

は
こぎつるゝ花に月よの女舟　氷花

月の宿あかすうらゝに麗とも　才丸

△歌仙三月短句の變格。

（ウヤムヤ）月短句にては揃へず。長句ばかりは苦しからず。

▲歌仙に短月二つは常也。三つは外に見ず。凡そ巻中曲節と云ふは常の曲節也。變格と云ふはかくはせぬ所なれど、前より催ふされて出來し例、又六つの巻の變格はすまじき例也。

名

七曜山を出でかゝる月　翁

賣同 ｜いざり不便や姨捨の月　同
起きる宵い月ぞひそめく　嵐雪

拾 ｜石踏みかへす飛越の月　そら
碑にねて象がたの月　清風
鳥放ちやる月の十五夜　素英

同 ｜乗りゆく馬の口とゞむ月　重辰
櫓きりほどき月も汲みけり　安信
魚つむ舟の岸による月　辰

炭 ｜月の隠るゝ四扉の門　其角
顔に物着てうたゝねの月　同
北より冷ゆる月の雲行　こ屋

續虛 ｜新らし舞臺月に舞はばや　仙化
釋 月にや泣かむはせの籠人　文りん
同 しらぬ御寺を頼む有明　觀水

△前後同趣向の月。（多例省）　㊁

同趣向は苦しかられども、同體は宜しからず。

續寒 ｜はね打ちかはす雁に月かげ　翁

かげ ｜月かげに小擧仲間の誘ひつれ　やは

續さる 同 ｜月かげの雪も近よる雲の色　支考
馬引いて賑はひ初むる月のかげ　臥高

拾 夕 ｜夕月丸し二の丸の跡　英
夕月夜宿取貝も吹きよわり　そら

同 同 ｜湯の時ふるゝ夕ぐれの月　考
夕月を今年見習ふ山のはに　去來

炭 くれ ｜暮の月干葉の茄汁わるぐさし　り牛
暮の月横に負ひ來る古柱　は

なむ 夜 ｜そよ〳〵と蚊屋に嵐の夕月夜　許舟
月夜をば譽めて置いたる長堤　過角

匂 同 ｜月夜に語る奥のよの中　汶村
そよ〳〵と簾に風たつ夕月夜　り由

同 見 ｜氣を付けて見る小の十五夜　許六
水ふろの中より見たる暮の月　同

初茄 同 ｜赦免にもれて獨り見る月　翁
明けはつる月を行脚の空に見て　ら

深
飲食　酒で乞食の成安き月　嵐らん
　　　皮網の物煮て喰ふ宵の月　翁

桃盗
方角　東殿より酉殿の月　松碌
　　　雁南に東の月　同

春
別　別れの月に涙顆はせ　か兮
　　棊打を送るきぬ〴〵の月　や水

萩枕
たび　月見歩行きしたびの装束　白之
　　　夕月夜笈を後に突張つて　そら

やへ
何人　なまらずに物いふ月の都人　景桃
　　　高麗人に名所を見する月と花　好春

印
舟人　渡守綱よる丘の月かげに　こせむ
　　　よせて舟かす月の川ばた　翁

拾
生　竹蜂の尖き月の夕嵐　叩端
　　蝙蝠のかけ廻りつる月の暮　桐葉

菊
墓
植　紅葉に水を流す朝月　その
　　はれ〴〵と月の出懸かる杉の枝　渭川

○

俳嘸な
戀　酒の月後妻打の御振廻　翁
　　末世の衆道菩提所の月　信徳

一見渡
同　忍ぶ夜は取手にかゝる閨の月　似春
　　顔は鍋ぶた胸焦がす月　翁

同色付
同　唐衣涙流せし袖の月　杉風
　　揚屋より月は雲井に歸らるゝ　翁

此三例は百句也。歌仙に戀の月二つは見當らず。

次勾
僧　禪小僧豆ふに月の詩を刻む　同
　　月に秋とふ東金の僧　同

花摘
名　宮川にすべるやうなる月のかげ　其角
　　かひしなのさやかに諷ふ春の月　同

神釋名所の例、前の「異名「短月の兩部にもあり。

△古式四月歌仙。

春　さゞ波や三井の末寺の跡取に　旦藁
　　高低くのみぞ雪の山々　越人

(北枝考)此所手前の趣向は打越よからず。向ふならば「飛鳥「松杉「天象なるべく、其中にて月こ

そ打添の姿宜しけれとて、夕べか暮れかと尋ね出すに、曉の月の細りたるこそ一入ならむと、

見付たり廿九日の月寒きか　兮

と付たり。今一句風情よき句あるべからず。此所は花は引上げ月は前に三つ出でたれば、冬を續くるか雜にて舉げてよき所也。さるを爰は月ならでは叶はざる故に、月を出したり。如此時は定めの外に月出ても、風興有力といふべし。故に其興を惜しみて、舉句迄三句續けたり(約文)

△月は面々に在りて、元歌仙に四つなるを、百句後裡の月の省例もて三つと定めけり。されば ノウの月は、常例ならず。前說のごとく、月花前に上りて、後裡無道具の時、前句によりてする事也。例は、「其俗、「翁草、「一橋、「夕顏、「白だらに、「花摘、「庵記、「小弓等に摸樣さま〴〵也、

月のかげ砧の拍子乘つて來る　士龍

月花を礼の宮に畏まり　支考

俳

長句　名月の餅に當てたる鬮東わせ　素文

な蚊の居ずばある物でない夏の月　翁

背にのれんせりあふ月の秋　露川

箕　おたびの宮の淺き宵月　同

秋ばかり　月夜にて物每仕よき盆の際　巴丈

有明に百度もかはる秋の空　左次

百句八月の例は、「一葉、「八夕暮、「櫻山伏、「東山墨直等にあり。「笠松、七十二候、六月の例もあり。

△新式二月歌仙。

(本書)歌仙の時は二花二月とも有りたき事也。表の五句目に月在りて、裡の七句目に月秋をする事、花前の秋季もむつかしく、秋季の植物も仕がたし。秋季の發句ならぬ時は、表か裡に月一つ有りても苦しかるまじき事にや、此後器量の人もあるべし。夫も亦一座の會釋あるべし。

△享貞式相傳は、其角、許六、去來也。されば

三子の中「此後器量の人と云ふ遺言を重んじて此式を立つべきを、本書にかくあるのみにて、一卷も翁の例なければ、世を慮かりて各擱きけむ。支考は、元祿八に去來より傳へて後、再撰貞享式の志し有りければ、是を空しくせじと、享保頃より此式を立てけり。「秋季の發句ならぬ時とは、秋發句の時は大方第三迄に月出で、花迄の間長ければ。常の三月歌仙にせよと云ふこと也。「表か裡にと座の定めなきは春季にて、第三迄に花出でたる時、只一つの月を表に出しては、裡の飾りなき故に、月は裡も遲く出し、又夏冬の發句にて、季も脇限りなどの時は、月を表にも出し、臨機應變にせよと云ふこと也。「夫も亦一座の會釋あるべしとは、新式不好の所にては行ふなと云ふこと也。此故に獅子門八の集にも、常の歌仙と新式交り出でたり。熟ら惟みるに、こは翁假初に思ひ付かれし事を、書捨て給ひしのみならむ。元來歌仙は四月なるを、一つは都ての省例なれども、又一つ省きては餘りに景少なく、月に連れて季三つ入れば、季の活を敎ふる稽古卷には好ましからず。先づは變格のさた也。さるをいつの頃よりか、季節不自在の人々。新式のみ用ひける故に、遂ひに其門には歌仙に月三四出づる事を、しる人も稀れに成りけり。殊に裡移を定座とするも頑也。

△新式歌仙表に出でたる月。

五め　月かげの横にさしこむ橋向ふ　桃風
し丶
黃山　同　月見には此一本の戸も明けた　米花

△源氏四月の論。

藤首途源氏行に始めて四月の省法あり。歌仙は元源氏の中二面を除きし物なれば、新歌仙の例をおす時はさもあらめど、歌仙にだに四月あるに、源氏に四とは少な過ぎけり。此等は其時假に思ひ付の變格ならむ。めでたからねば獅子門の人々捨て

給へかし。

いせ　△短歌こぼし月。(多例省)

盛物にあはぬ十夜の夕月夜　桃如

月を自在に設ふ事は何巻も同じ。

△月面を隔て五去。(古今同)　(へ)

印　昔しを戀ふる月の陵　北枝
目がねして見て澄み渡る月　觀生

三匹　有明の山に入江のおくひ形　支考
うつすりとあるは幾日の月の空　汀蘆

ひな　朝月に花の駕せつぎ立て　千川
夕月に植木釣出す塀の内　左柳

越　月代の見ゆれば濱に初嵐　外故
田を植ゑて其の田眺むる夕月夜　從意

同　流れては水にちりなき月の照り　花村
實ふる空にも月の薄々と　任之

異名他季と組みても句去同じ。

△月日星かはり二去。(古今同)　(へ)

百囀 星月　座敷には行灯付くるくれの月　翁
夜明の星の未だ一つある　支考

三匹 日月　春雨ながら雲に日のあし　同
桐のはのすべるばかりに朝の月　水甫

新百 日星　日はてりながら霞はらつく　反朱
花は今星の光りに咲揃ひ　考

△月に月次三去。(古今同、多例省)

(花ノシベ)月に月次は字去の例にて三句去也。

▲近世月次前にある時は、例句過ぎても異名する物と心得違うたる人もあり。月と月だに五去なるを思へ、又面を隔てゝは二去に許したる例もあり。

ひな　旅瘡や長きさ月の舟泊り　濁子
燒立てゝ庭に盥する暮の月　翁

秋　月なき岨を曲る山間　一井
このはちる榎の末も神な月　鼠彈

類　月の中の葛籠男は重る也　其角

句兄短

御三所ながら同じ産月　其角
四月(よつき)の腹といはぬつれなさ　同
髻干したる月代の雲　闇指

夕顔

暑氣によわるみな月の蚊屋　尚白

同濁

随分細き小の三日月　同

八烏

寒さ引づる卯月野の空　赤門
等木の後の月迄取殘し　同

續有

句牛流す村の騷ぎやさ月雨　之道

落柿舍七吟

月かげに苞のなまこの下る也　丈草
御齋は月に十五はいある　道

△ゲッとグワッ二去。

このは

名月に尺八をふく人間はむ　孟遠
うき戀せしとひとへ正月　旭亮

△訓の月並に人名越不レ嫌。

百歌仙

卯月まつ簾に風の當初めて　春草
用の多さに顔も洗はぬ　流水
弓張の只うそ〳〵と日にてられ　如柳

百歌仙

有明の及ばぬ戀に立紛れ　一通
さわく〳〵と粟の秋風　杜良
長月は何が長うて暮れぬらむ　天垂

△音の月並に異名正の月越不レ嫌。

衆庵

川一つ渡つて寒き有明に　翁
岩にのせたる田上の庵　丈草
正月も往ぐれば淋し廿日過　洒堂

冬葛

六月もはや昨日過ぎたり　そら
簀の上に土器ほせば秋の風　楚舟
屋根の間へ落つる有明　杉風

其俗

臘月の梅花はかゝす中々に　嵐雪
夜のの砂の履にいそがし　秀和
しら〳〵と嫦娥や醉を盗むらむ　舟竹

○

十七

言譯も二月も盡きて敎へかね　瓢水獨
知契の事はいつか濟むべき
袖の月舟拾はれし禮と成り

○

（古今五）六月や岑に雲おく嵐山

是は落柿舍にて名所三歌仙の發句也。此卷の五句目に至りて異名の月の評論あり（中略）さみだれとは假名にかく故に執筆の働きあれど、二月八月とは假名に書かれず、月といふ字の姿を恐れよとぞ（約文）

▲六ぐわつとは假名にかゝれぬ故に、三句去つても字形を恐れて異名を用ひしと云ふ評論甚だあやし。此等は第三に正の月を付てもよき所也。前丁の續有磯海落柿舍の七吟には支考も交りたり。それに月並と月と二去の許しあれば、其後の會にかゝる論はあるまじきはず也。

△月に彌生の類越不レ嫌。

（古今四）彌生といひ師走といふ類に、異名の月をばつくべし。越を嫌ふは古今の掟也。但し彌生に只月とも付くべきにや。

▲月に彌生の類、付も越も嫌はぬ事は、支考の詠ひ卷にてしるし。何故にかく自證相違の事を書けるや。

翁

彌生の霜はなんぼ程ふる　里圃
ふつつりと隣りの人を忘れたり　乙州
夜の明くる迄酒とらぬ月　ホ角

汐

彌生とは申せど年の若うして　凉ト
乘つた序に駕は京迄　八菊
九日や十日の月の照りたらず　紀之

白だら

紫の火燵ふとんに彌生來て　支考
はやるといへばどこも三絃　長緒
此橋で月夜を譽むる人通り　北枝

射

若い衆の拍子にあはぬ月と花　凉ト
柳ばかりを植ゑて眺むる　支考
如月の空もくれりと春めきて　蘆本

△日次に月越不レ嫌。（古へハ二去、七部及多省）

夏の日、日永、日和の類、影、照、晴などゝ作る時は天象也。

夏日　夏の日に見る物からのせむし哉　兀峰
桃實。　這入せばむる母が蚊遣火　嵐雪
　行水の跡もこぼさず月澄みて　同
皮　江戸にわく金を思へば月と花　凉ト
　春の物見に百色の顔　ろ遊
日和　詠への日和に山やかすむらむ　同
き日　肱笠に忌日の使者の袖濡れて　其角
同　鵙のきげむにいら〳〵と鳴く　凉ト
　待つ月やまりに尋ぬる帘　同
　鳥の音も遠く聞ゆる朝の月　路青
浪　ふろしき懸のたびはやゝ寒　玄指
幾日　幾日路で信濃へかゝるそばの花　胡桃
　今の世は雨六はらの月と花　梅光
梅十　旅行の内はしらぬ春哉　七雨
日永　乘懸の牛に永き日歩ませて　羽秳
　鬼松のかげやはらりと夏の月　呑水
東花　地藏の秋も近き素麵　支考

日用　日用やら何やらしれぬ大工して　隨岐
日記　鷄頭や雨の日記の付落し　可吟
同　蔦のはそよぐ浪人の家　支考
　行水にいざよひの闇の間もなし　指算

自註に曰く。日記の打越むつかしければ、月を隱したるいとよし。

△日記に月を嫌はぬ事は、支考該きの前三例にてしるし。こは此第三を譽過しゝ筆先の過りならむ。

△月に降、聳、風、照、朧、影、天等越不ㇾ嫌。

(古今五)さ月雨には月を嫌へども、さみだれには嫌はずといへる耳目の變をしるべき也(約文)

△正字は植水降也。五月雨と書きても、同字別吟月に嫌はず。

あめ　五月雨を集めて早し最上川　翁
雪九　岸に螢をつなぐ舟杭　一榮

瓜畑いざよふ空に月待ちて　そら
ゆき　雪をもつ樫や樾に露見えて　舉白
一橋　虹の始めは日も匂ひなき　其角
沈みては温泉をさます月すごし　翁
深　冱え初むる鐘ぞ十夜の場の月　杉風
忍返に殘る橙　酒堂
しも　馬取のはたせ乘りゆく霜踏みて　そら
神鳴の落ちて晴れたる月のかげ　季邑
やわ　どちら向いてもげに秋の山　貝紫
きり　薄きりの中に一むれ雁の聲　左白
一ぺきの匂ひや月の新しみ　千山
三千　風冷々とわせの穗揃ひ　冬月
にじ　とぶ雁に虹の浮はし筋違うて　鷗翁
くもり　合羽なき馬より歎く雨曇り　神叔
枯　小僧に成つて勇みつく顏　楊水
扇から湯錢さし出す月の暮　柴雫
くも　一つかへたる雲を嵐の吹きやりて　支考

梅のさか　松のあなたを通る公家衆　卯七
月かげも羨まれたり下屋敷　去來
風　あれ〳〵て末は海ゆく野分かな　猿雖
けふ　鶴の頭をあぐる粟の穗　翁
朝月夜鶺に漸う追付いて　配力
本妻に姿を直す月の色　光延
あめこ　戀によわきは角力取也　之道
てり　てる暮や目深に着たる肥前笠　同
同　先にから使の者はてられゐて　涼卜
汐　思ひもよらぬ唐人を見る　林角
卯の花にあしたの月の何とやら　柴友
儉しひに內儀の出するけふの月　倚白
枯　功者に標を見て貰ふ秋　回亮
明り　嘘寒き壇格子の靈明り　芝柏
久しうてのぼる古鄕宵の月　敬之
市廳　浪宴許に一夜きく秋　さりつ
かげ　短めする二八の影のやゝ寒く　き柳

朧　朧舟汐渡男ながめゐて　好秋

八鳥　小判拙き旅の夕ぐれ　同

物知の顔愚しく月に雲　蘭桂

かへ取のせごし鱠に月を見て　一律

東花　悍りながら神も萱茨　龜木

そら　松杉の匂ひに空の淺みどり　嘉竹

手ぎれいに晴切つてのく月の雲　林鹿

百歌仙　角力自慢に角力とらるゝ　汀龜

そら　四五日は病ひもとうて花の空　如風

天き　茨渡す菖も匂ふ天氣合　昌房

枯　車の供ははだしなりけり　探芝

すむ月の横に流れぬ横田川　胡故

あやつりは節句を懸けてよい天氣　唐庭

新白　そばも大方花のちら〳〵　水甫

月夜にも闇にも鶉々なく　支考

稻妻　笈に雨もる岑の稻妻　翁

桃白　能き程にねてから後の砧きく　聽所

一夜の明く也と肝潰す月　越人

嵐ふく雲間を分くる月二つ　松洞

俳　杖を枕に菅笠の露　江山

稻妻　稻妻に時々社拜まれて　翁

（古今四）稻妻、雷光を天象に嫌にずとや、不審の儘に用ふべきや、但しは今式の道理に任すべきや。

▲古式に稻妻、非天象と云ふを難じけるは支考の過ち也。

△月に同時分越不ㇾ嫌。

一方は時分、一方は景を主とせしは、同時分嫌はず。又時不定の物とくむ時は、双方時分を主に作りてもよし。譬へばいざよふとは、暮れにも明けにもいはるゝごとし。

◦瓜畑いざよふ空に月待ちて　そら

雪丸　里を向ふに桑のはた道　川水

◦牛の子に心慰む夕間ぐれ　一榮

◦秋もやゝけさから寒き袷がけ　い然

續有　ケ――雁より鳬の早う來てゐる　野明
・抱込んで松山廣き有明に　支考

櫻山　○里中は米つく音に暮れかゝり　正木
蚊遣ふすべて出たる裸身　爲花
ケ●夕顔のてりにあひぬる月の色　邦里

別　○入相を思へばの秋のばせを哉　子さん
臼の跡つく庭の露草　杉風
ケ●こち直す野分の空に月出でゝ　同

笠　○あの杜によそより早う幕掛かり　薬柳
待ちかねて見る關の相ばん　江橋
●簾まく程にはれたるけふの月　諷山

むつ　○―否といふ迄朝茶汲出す　助叟
今の間にきりのはれたる岑一つ　桃水
ケ―星の備へを崩す有明　白桃

△月待、月祭は正の月の事。㊁
立待、居待の類は待の字也。日祭月祭の類は祭の字也。まつりの約まちなれば神祇也。待、祭、雨方とも正の月勿論也。證句擧ぐるに及ばず。

△日に月附句。

桃盗　日のうつる障子に笹の秋更けて　牧黛
雁南に東の月　松硋

八夕　夕日に遊ぶ庭の蜻蛉　昌柯
山里の月にと車引捨てゝ　和什

東山　句、鷗や横に日のてる降上り　國久
岑にかねつく弓張の空　至吹

此付方は前に呑まれず、殺風景ならぬ様にする也

△月次、九月盡等に月を付くる曲節。

新百　帷子もひねに成りたる八九月　支考
月は十五夜十三夜月　仄止

○

文操　閏三月は四月と思やれ　乙由
有明も花も心のみよしのに　桃如

足拼　芋栗と味ひ分けて八九月　何磐
詩にも和歌にも今宵一輪　羅々

名筐　句菊の千代も七々四十九月盡　蘆錐
かねに紅葉をさそふ有明　宇兆

○

百歌仙　有明は花や柳に透通り　蘆畦
卯月八日をまつねはんにて　天垂
し丶　十三夜は忘れじ菊も其の名殘　蓮二
木のはに霜の見ゆる長月　山りん

△月に紅葉の付。

紅葉類に夜躰を對する時は色を失ふ故に、古式には誡めたれど、其心もて付くる時はよし。元より夕月、有明、只月と付くるは仔細なけれど、度々かく付けむも猶なからむ。只法縛せられぬ樣に在りたし。

一橋　楢紅葉狂歌譁しく詠添へて　コ齋
京の月夜は嘸踊るらむ　翁
山琴　村雲に今宵の月は拾ひ物　曾北
はさみ肴にもみぢ折りしく　秋の坊

東花　葬送る西は法輪さがの月　拔不
もみぢをふみに出たるさを鹿　紫友
四幅　學文に眼をさらす月の下涼　ト
紅葉の上をわたる通天　北
翁　夜のあくる迄酒とらぬ月　ホ角
きり深く赤き紅葉も眞黑に　桃りん

こは却つて法縛の設き也。

△月に螢、稻妻、花火の付。

(ウヤムヤ)月に螢を結び又螢を付くるには、兩樣ともに光りを稱美の物なる故に、螢を育て丶月に押されぬ樣にすべし。

岩陰は螢に波のもえ上り
孫のきげむのすゞしさを月
花摘　川舟の綱に螢を引上げて　そら
鵜のとぶあとに見ゆる三日月　釣雪

○

壬　明日の鐘鑄の月も晴れたり　式之

稻妻に舟こぎ習ふわたし守　村こ
砥　瘧にさはるたびの稻妻　岱水
西行の像を拜する浦の月　宗波
○
さいつ比　篝火焼して星祭る也　翁
句　傾城と襟の中から袖の月　立ホ
三千　瓢から駒も雲井に花火哉　七り
月の字に一はけの闇　蓮二
△月に闇、朧、雨雲、立秋、八朔、卅日の付。
闇、雨、朔、晦には月なき故に、常は月を延せど
も、強ひて付むには種々の法あり。「助字の月と云
ふは、只月の字を入るゝのみなれば手段古びず、
「觀想の月と云ふは、工夫の巧拙あり。「無「過去
「未來の月は古みに落ちて用ひがたければ、一變
の工夫あり「比喩「背付は二度とは賤し。凡て俳
諧には、温故知新をはなるゝ事なし。
やへ　闇の夜渡る面楫の音　去來

助　詠らずに物いふ月の都人　景桃
夕顔　空は闇居水に光る暮の虹　萬祖
末　月見むとての芋肥すらむ　白鳳
○
東花　月夜も花も闇の開張　近利
雨上り水は朧に岑の雲　敦水
○
炭　落ちかゝるうそ〳〵時の雨の音　やは
助　入舟つゞく月の六月　り牛
山こと　句　名月の浪にうくかと岑の松　蛙白
一體の活　秋のけしきを洗ふ一雨　方堅
○
雪九　霧立隠す虹の本末　そら
觀　そゞろなる月に二千り隔てたり　柳風
東山　川ぎり遠き馬の鈴音　芳船
未觀　名月によからむ山のかゝりにて　甘石
○

東山　雨氣の雲に雨はふれども　支梅
宵名月の祝義に懸かる林和靖　從吾
あら　あの雲は誰が涙包むぞ　翁
ゆく月の上の空にて消えさうに　越人

○

春　朔日を鷹もつかぢのいかめしく　か兮
無　月なき空の門早くあけ　筆
八鳥　日和に味の付いた朔日　此柱
未　約束もかたき月見のはしの上　池柳
あら　纖飾つていせの八朔　其角
未觀　滿月に不斷櫻を眺めばや　同

○

閏も同じ九日晦日　同
比喩　そばは今花の盛りを月夜程　同

△七夕に月の付。

（ウヤムヤ）星合に月を付くる大事（だいじ）あり。月は重く星は輕けれども、一夜（いちや）の祝詞（しゆくし）なれば、月は幽かに

在りたし（文約）

一須磨　雲引きかつぐ星の通ひ路　似春
句　ほと〳〵と天の戸ぼその暮の月　翁
天河　句　思ひ出づる星も文にぞ八日の夜　百阿
物の哀れを月は御存じ　范ふ

○

歌　七夕もふれば浮世と思召し　同
無の變　萩に隱るゝ月も片破れ　佐曲
柿　句　契るその星の便りかとぶ螢　南利
同　九つ前に入りがたの月　八きく
同　句　立琴に一葉のかゝる夜明哉　乙山
月はいらせて山の稻妻　蘆本
同　句　宵の雲仕廻うて星の出合哉　萬り
同　壁も簾に見ゆる月かげ　凉ト

△月蝕（げつしよく）を用ふる曲節。

翁　袂をぬらす宵の月蝕　沾ホ
このは　月蝕の兀げて更けゆく月の影　許六

雨をうらみ雲を憎むも、月見る人の本情なれば、などか蝕をも憐れまざらむ。翁の病雁、病蠶も、悲心の吟也。されども好んでするは奇怪ならむ。

△月に名所の付。(多例省)

(ウヤムヤ)月に更科、花によしのなど付行く事なかれ、宇治に茶、龍田に紅葉と付行く事宜きは、其場に在つての景物なる故也。

(古今四)古式は月に更科は付句を嫌うて、吉野に花は付句を嫌はず。されど此論は今の用にあらず。

▲蕉門には前を見かふる時は、更科に更科とも付け、又前句を居ゑ置きては吉野に花はさし置き、團子と付けても許さず。ウヤムヤの説は古式なれば論に及ばず(本書)に蔦に蔦の付を一ヶ條としたるは、凡て付句に數多ある古式の物柄論を勸破させむ爲め也。

一 句 見渡せば詠れば見れば須磨の秋　翁
　桂の帆柱十分の月　四友

一 句 須磨ぞ秋しがなら伏見でも是は　似春
　ほの〴〵の浦さし添へて月　友
　木賊にかゝる眞砂地の露　翁

同 その原やこゝに榮せて庭の月　杉風

△月の名所にて花の句。

(ウヤムヤ)更科や曇るといふは花の事

月の名所に至る人、春は花にて月の心を作る事あり。貞德の片帆傳にも委く其場を辨へ、花にて月を稱する體に作れといへり。一卷にする時は表の月桂男嫦娥の粧ひをもて作るべし(約文)

▲異名を用ふるは古式のさた也。只正の月にてよき事、前の月越に曇りの付にてしるし、又月にいはでも月の形容ある時は、別に月に及ばず。

△前句より月を言懸くる曲節。

(古今五)さて前句より月を言ひかくとは。

○掃除日の隙より所化の浮れ初め
　玉の簾の高臺寺前

定座　あらかねの芋はく〳〵と責歩行き
　今宵の月の名は隱れなし

されば前句より言懸くる月は、別に趣向を立つるに及ばず。都ては前句の噂にして、月は安らかにすべき也。

▲月を前より言ひかくと云ふことは、翁にも諸門人にも例なき新工夫也。定座越に日星ある所にて、此說きあらば面白からむ。此越は日次なれども○を印せるは此手柄に重みを付くる粧ひ也。全く日次に月を嫌うてこぼしたるにあらぬ事は、此句の前後に「前句より言ひ懸くる月とのみ書きたるにてしるし。さるに近世此說きを三通りに見過まりて「日次に月越を嫌ふ」「月をこぼす時は每々言懸く「こぼし月は只月とだにいはじ、見立も趣向もいらずと思ひ誤まりたるは笑止の事也。此等の新格を再び用ふる時は、先人の手柄を襲ふに似たり。已下宵闇の條に、去來の恥づるに堪へずと云ふ遺誡を見よ。古今抄八條の月大方しかり。

其二　踏分けて出たる男鹿の山のはに
　月は嬉しと思召すらむ

是又付方の一體也。彼のいふ前句の全體より、月を言懸くる句法にはあらず、鹿の男振は其前に用有りて已が當句の趣向なれども、山のはの古語を假りて、次の月には言懸けたり。爰に此句の付意は「嬉しとは見る人每に思ふらむ山のは出づる秋のよの月」とよめる歌の裁入にて、月よりこなたを嬉しとは飜轉の句法也。

▲こは古歌取の法なれば、强ひて月の論にあらず、此說きは千變萬化に幾度も用ひらるゝ也。都て古語取に、如此飜轉換骨等の句法を用ふる事、たち入第三の所にもいへり。本文を其儘に用ひては手柄少なし。

　△月より前句へもたるゝ曲節。

其三　ちら／＼と雪も晴れたる星の數

　　米のつもりも明日の雁人

　座　年よれば氣の短さよ我れながら

　　素性の歌に恥づる長月

彼のいふ穢し月に、月次、日次の指合は字を嫌ふのみなれど、此のいふ星の指合は、趣向に夜分を遁るゝと、句作に當用を詠ふと、二品の骨折有りて、假令言懸くるもたるゝも、是はむつかしき付合也。

▲此文も月次を正の月に詠きたる手柄を譽むと古式の夜分三去をもて書きたれど、蕉門の夜分二去は知れし事は、六の卷に「夜分越の變格あるは自證にて明か也。凡て支考の文はかゝるあやかし多し。備此四條の月の自證を擧げたるは、翁にもなき作例なれば、こぼし月の名に便りて月の自在を知らしめむ爲め也。されば此四をこぼし月の法とは見る事なかれ。又前句へもたる月と題したるは、前の言懸くる月と云ふに首尾せし撰集の摸様也。但し此詠きは翁の「文月の一變格なれば、本文を分けて下に再出せり。

其四　干物を忘れて露にぬらしけり

　　門は晝かと思ふ月の夜

此付方は姿情の兩用にして、干物と晝の繋りを見るべし、惣じて穢し月の付方は、言懸くるもたるるも二句の間の道理なれば、多くは情の運びならめど、此等は姿の證句といふべし。然れば今いふ四品をもて、前後二品の凡例としらば、其餘は例の千變萬化たるべし。

▲此結文に心をとめよ、四品をもて千變萬化せよとこそ書きたれ、必らず此詠きを此儘に摺寫す事なかれ。

△隱月の變格。　㈠

　座　宵闇はあらふる神の宮迁し　翁

句　北より荻の風そよぎたつ　許六

八月は旅面白き小服綿　酒堂

(本書)宵闇に月は付け難し。打越には殊に惡し、十句目は花前に延びて無念なれば、三句の心に月を持たせて、八月の月の字にて、見渡の月の字は會釋ひたる也。是を一座の訣きといふ、宵闇を月とは思ふまじ、三句取合せて月の字の働きとしるべし。

(う陀)師曰く。宵闇といふ句に月はなるまじ、此の宵闇を月にすべしと秋を付出し、八月といふ月次を出せり。全く八月賞翫にあらず。例の落穴也。月秋の場に(定座のこと)宵闇出でたればこそふしぎの働きも有りけれ、毎度宵闇曉闇の月に成りてはをかしからぬ事也。

(古今五)宵闇の萩に只今の月の俤を含ませて、月といふ字に古法を捨てざる、遠くは「歌仙に二花二月の先兆といひ、近くは當座の妙用といふべき也。然れども此等の訣きは故翁に例の變通ならむに、我門の學者にも、一人二人は(去來、天垂、野坡を云ふ)聞誤まりて、宵闇をいつも月也といへる、師道の興廢は只門人に在りて、百世の恐るべきは遺訓のさた也。

▲三書同意也。宵闇は月ならねども、定座にて此訣き有りし故に月に成りたり。偖上文に「歌仙二月の先兆と云ふは、新式を立てむと思ふ腹にて言曲げたる物也。是を二月の先兆といはゞ素秋と成りなむ。

(ばせを談)風國が會に宵闇の句出づ、去來曰く。先師既に此式を立てらるゝ上は、左法に習はむと是を月に用ひ侍る。此頃許六の書を見るに(湖東問答)宵闇を月とし給ふは、故有りての事也、然るを何の故もなく、月に用ふるは淺間しき事也とあり。此事を聞いて恥づるに堪へず、許六は深川の會徒也。いか樣仔細あるべし。

▲賢なる哉去來、我過ちを卯七に示して、百世の惑ひを解きたり。時に或人問うて曰く。今若

し定座に宵闇出でば如何。答へて曰く。そは雜にして擱き、折端迄に何季にても月をせよ。又問ふ。其宵闇を月にせむといはゞ如何。又答へ。翁の扱きを寫さば、去來に對して又恥ぢなむ。其句に應じて一變格あらむはよけむ。今是を豫めいはば夫も亦粕とならむ。都て一變の扱きは古法を破らずと云ふ大意を知りて後、時に臨みてする事ぞかし。因に云ふ。翁の血脈相承は、其、去、許、支の四子也と湖東問答にいへるは違はず。そが中去來許六はよく翁の言を信ず。此故に翁の慮り有りて宣ひし事も取捨せず。支考は翁の金言といへども、其理を分別せずては述べず。其器量に任せて折々自己の見を師に詑すと、論に長じて身を省みぬ失あり。其角はその中にて兩得兩失あり。又變格に自在なるは木因、其角、支考、涼菟の四子也。已下は此六人に敵せず。

秋たつや朔日汐の星しらみ　　卯七

西花　はらりとしたる松に稻の香　　素行

姨捨の歌には誰れも袖ぬれて　　支考

(古今五)朔日の脇に臨みて月は尤もむつかしく、增して第三は星白みに指合ふ。さとて六句の表に四句目迄月をこぼすべきにあらねば、爰に姥捨の名を假りて、月の俤を含める也。さりや吉野を花といひ更科を月といはむに、誰れかは月花にあらずといはむ。增して前句を田毎と見なしたる山田の形容を稱せざらむや、さりながら、いつとても吉のといひ、更科といひて、月花を隱すに論なけれど、前句のうつるとうつらぬとに作者の限力をしるべき也。

▲こは宵闇の隱し月を一變せし無季格の扱き也此段にて凡ての變格の扱きを誡めたり。若し前句に移らぬ時は鵜のまねならむ。借小文に「六句の表に四句目迄こぼすにあらずと云ふは、自

讃の言草也。月は五句目迄延びてもよし、又此表は六句ならで八句也。脇も(古今抄)には「はらく松の闇に稲の香とあり。是請記の失也。

な鵜さしと是を號けてさ月闇　其角
屁をふるはするゑぼし狩衣　同

蕉

隠　年をへて三笠の山をよみわかれ　楓子
ゐ　御恩の門へいざ生み給へ　角
同　團栗と思召れよ老の母　子

西花集は元祿十一、蕉尾琴は同十四の出板なれど、も是を編みしは同時也。國は江戸長崎と隔りて同體なる無季の格隠し月の談きあるは奇也。こは二子偕に花摘の月山に、月を持せし談きより思ひ付し一變格なれども、姨捨の歌と云ひ三笠の山を詠むと工みたるは、互に十知の才の冥合也。偕愛にて名所の月を隠す道は絶えたれば、此蔦を辿らずして、更に一路を見開くべし。

△月次に月を持せし變格。

(ヘ)

此段は前と異なり、句面の月の字に其影を隠したり。

雪丸　文月や六日も常の夜には似ず　翁
直江津　露をのせたる桐の一葉　左栗
朝きりに飯たく烟り立分けて　そら

此表に月なし。按ずるに常の夜には似ずと云ふ詞、全く大空の朗詠にて、月光は句中に隠れ、月の字は句上に顯はれたれば、一句其儘に月とせしならむ○(七部大鏡)古今俳諧歌を引きて註したるは非也。

花摘 ハグロ山　篠懸じぼる夜終の法　圓入
座月山の嵐の風ぞ骨にしむ　そら
鍛冶が火殘る稲妻の影　梨水

つらく二卷を考ふるに。稲妻の口に名所出で、七八も過ぎ又名所のほしき所に、思ひよらぬ十句目に鈴懸の句出でたり。定座と云ひ名所の好と云ひ前句と云ひ園精と云ひ其序と云ひ並々の月並々

の名處を付けむよりも、月山と付けて月をかぬる
にしかずと、爰に後折の曲を成しけむ。尤も月山
は月の山とて古歌多し。此句此席を去り此園を過
ぎては又ならぬ絶妙也。主人もいとゞ興に入りけ
む「盃の肴に流す花の浪と匂の花に挨拶したり。
蕉門にはかゝる應變の活ある故に、古式の異名物
を用ひざる也。

(金言錄)古き連歌に、年月と有りて、月の句なき
表あり。其時の變によるべしと昌琢の書にもあり

▲連誹はさもあらむ、翁の詠きは其尸に月の
魂を入れたれば、清光赫々たり。只年月を月
とはくらし。

再出　年よれば氣の短さよ我れながら
　素性の歌に恥づる長月

(古今五)昔し素性の長月の有明とよめる歌の噂な
れば、畢竟は長短の敵對にして、句情は恥の一字
に盡くせり。はた此句の稱する所は、行平、業平
の若き者にあらず、素性とは隱居の禪門にて、老
の短氣を恥合うたる月の働きは更にして、其名の
冥合は神助ともいはむ。(

▲こは文月の一變格にて、本歌の月に光りを包
みたる詠き也。前の月と此條とに一變格の事を
とくは、此等の例もて今の學者に自在を得さし
めむ婆心也けり。

抑も月花の詠きといふは、花に九條あり月に八條
あれど、一字も自己の道理をとめず。其座に臨み
其卷に隨うて、例の不得止といへる聖經の拉の變
通に效へば、百世に好事の人有りて、奇を好み新を
求めむとて、隨意に月花を翫ぶべからず。月花は
よし神國の禮用にして、例の和すべく例の節すべ
く、例に大和の名詮なるをしるべし。

▲こは月花の惣結語也。近世古今抄の學者爰を
考へずして、二の卷の「月花の句は、節句、正
月の恆禮に似たれば、さして珍しき詞を求め

すと云ふを、得手に間違へ、或は「言懸くる月は三通に過ぎて、只無作の徒言を正風體と思ひ、或ひは月花の場に臨む毎に、爰は安しと雜兵に渡して、月花一句と云ふ手柄場をしらず。抑も一卷の中にて、變化の數と成りて去嫌を爭ふ物は月花也。此故に古今抄八九條の月花に、八陣の變法を說きたり。弱兵の能くせぬ事は證句にてしるし、例の和すべく例の節すべくと云ふ駈引は、眞に大將の大任ならむ。

□非月物月に付句も越も不嫌。

日の有明、行燈の有明、戀の待宵、宵闇等也。

句　霧深し日を有明になく鶏　夫木

八鳥　三　着心も帷子涼し月すゞし　可蕩

日を有明と云ふは、月ならぬ故に第三迄素秋をつゞけ、定座に夏の月をしたり。日月二去なれば四句目にてもよし。

白扇　長行燈の寒き有明　浪化

行燈　すゝ掃の夜は月雪と白み合ひ　支考

臺所は鐵行燈の有明し　山紫

桃盜　鳥も起きて野分靜まる　只草

浮島が原とて殘る月の色　巴兮

渡　鶏がなく臺所には有明し　先放

二　芋名月もやはり饅頭　同

○

桃白　待宵の鐘をよそにや忍ぶらむ　如行

待宵　藥尋ぬる月のさむしろ　左柳

深　戀もがさつに城下の月　洒堂

四　待宵の身を悶へたる四つの鐘　同

三の卷戀の部にも例あり。

市庵　下駄引きずりて歸る宵闇　荘蘭

こは例多けれど前に論じたれば略す。

△月の字有りて非月物、正の月に三去。

月日、鶯の月日星、星月夜、卯の花月夜、月夜柹の類

翁　其夢の枯野を廻ぐる月日哉　沾ホ
月日　三槿子から猫の歸るは有明か　虚谷
其俗　四老僧の若衆連れたる春の月　百リ
吉のゝ暦月日わりなき　其角

○

十七　水くらくきく線の月こ秋
鶯　四籠造り凡そ月日星なれや　知堂
母に似よ鶯の子の月日星　蓮二

(古今五)此發句は賀の金城にて、其母の若きより俳諧の名にしられて、晩年に此子を産めるに、花鳥の寵も常ならず男なればかく祝ひける也。偖此卷の評論に、歌仙は今の二花二月ながら、此いふ月日星は聲の文なれば、打任せては月に用ひがたし、此等や星月夜の例に效うて、此裡の折返に異名の月をや用ふべけむとぞ、其後此句の評論を思ふに、こは古歌より母の一字を裁入れて、聲に三光の文をいへれば、春季といはむに論なけれど、細かに論せば、其子のいはけなく鳴習ふを、句意の詮用なれば、冬の方も然らむか、增して月日星の設きといひ、冬春の紛れといひ、猶はた一世の衆議あるべし。

▲上文のごとく、春にて仔細なし。强ひて論せむ時は、附子と見て初夏とせむは宜べ也。冬の徙鳴には月日星の聲なし、又月次と月三去なれば、折返迄五句も去りて異名をせむは無益也。異名ならば越にてもよし、又爰に三月歌仙と、新式の紛れを思はゞ、表五句目に正の月を付けて、明かに新式としらすべき所也。

(星月夜辯難)芭蕉式に星月夜秋也。月にあらず、發句に此詞出づる時は三句去りて、異名の月あるべし。御傘にも星月夜秋なり。月の字三句去とあり。卯の花月夜も亦同じ、月のなき夜卯の花の影白妙にして、月かげに紛へるをいへり。何れも月にはならぬ也(約文)

(古今五)次に星月夜の評論あり。是は秋にして月にあらず、發句・脇、第三迄に此名目ある時は、其三句は素秋にして、七句目の月の座に他の季にて異名をすべし。

▲星月夜發句にあらば、五句目、第三にあらば七句目、いづこにても三去にて他季の月出してよし。異名に及ばず。但し星月夜に他季を結ぶ時は他になる也。

座ハ　旅車明日は東の月と花　そら

たて　ア　行歸り迷子よばる星月夜　嵐らん

座ナ　狠の顏見て明くる夏の月　嵐竹

ハ　年たつや家中の禮は星月夜　キ角

一　座ア　有明に少き鯖の割こ物　翁

ハ　立返る空や北斗の星月夜　原松

星月　座ア　嫩取に桂の影の謠聲　桃之

三去の例少けれども、古今通式也。異名に及ばぬ事は、月次、月日の例にても明か也。又「月草は正字、鴇草「月毛駒は正字、鴇なれば月の越も嫌はぬ事、五の卷にいへり。

□素秋百句にても一。　㊄

(三冊子)師曰く。素秋の事せぬ方よし、するに習ひなし。時による也。

▲第三迄に日、星、月次、闇、雨、朔、晦等ある時・素秋にて擱き、定座迄に他季の月する事常也。又障りなくても月出しがたくて、素秋にする事も常也。譬へば六句表の第三に日星あらば、四句目か六句目かに他季の月を出し、脇に月次あらば、六句目にすべし。第三にある時は四句目に並ぶるの外なし。「歌仙にて素春出でたる時は、素秋決してせず。「百句には素春素秋一つゞゝはよし。

△第三にて留めたる素秋。(多例省)

藏の陰かたばみの花珍らしや　か兮

笈　一折りてや掃かむ庭の箒木落　梧

七夕の八日は物のさびしくて　翁

△素秋三物。　△さはりの印

白扇　キク七組ノ内　其一

間引菜の隣りに菊の匂ひかな　濃　化

ひよ鳥のぞく窓の釣柿　林　紅

自剃する鏡に秋を憐みて　支　考

其二

町並の奥や菊にて明屋敷　呂　風

鳩によばるゝ年寄の秋　荻　人

勝つた事ばかり角力の噺をして　嵐　青

其三

酒飲といはれて見たしけふの菊　路　健

小袖に軽き萩の一枝　化

雁の聲水に夕日のかげちりて　風

其四　草體

竹深く小鳥なく也きくの花　紅

碁は手が冷ゆるまりは老人　青

中汲を伊丹の釋がくれまして　人

其六

菊の日や三浦の親父何所へやら　同

同

一箕に禿と見ゆる茸がり　考

提重は秋野の鹿の時雨にて　紅

○

柿　九の内

一九日を秋の限やきくの花　東　推

其三

△薄着になれと晝の蛸蛉　そ　山

持寄りの新そば切に羽織脱いで　且　酒

△菊畑やけふの夜明の星下り　寄　木

其四

着かざすは誰れやらが秋　倚　綱

達のはの盆もいぬれば風立つて　此　通

かゝる世に律義過ぎたり菊の花　獨　ト

其五

新酒にもならの都のふり行きて　拾　石

初切米に冬をまつ顔　孤　千

餅つかで淋しう御ざるけふの菊　嘯　風

其八　草

一檢見の風のつらあてにふく　干　阜

暮れてゆく秋は落書のさたもなし　細　石

○

懸けてまついよ雁も輕し秋の暮　其　角

雜

△つばるを見るに夜月の瓜　彫　棠

衣うつ身を轉たねにぬくもりて　蕭山

○

三物

秋たつやそよりと萩の上すべり　杉束
垣の瓠の花も實を持つ　洞翠
部屋住の嫁も彼岸の留守をして　志礫

同

目にあかぬ花も紅葉も長良川　李仙
川音ながら遠き鹿の音　蓮二
秋といふ名には風さへ實の入りて　泊楓

△素秋の卷。（多例省）

三千六表

雁がねや雲に道ある帆懸舟　有巳
暮雪もいまだ八景の秋　蓮二
肌寒き借も若衆も欄干に　和荊
○ナ 筍を盗みにいざと夜半の月　芝朴
△蠅並ぶはや初秋の日南哉　去來
葛もうらふく帷子の皺　翁
小灯をさはらぬ萩に折懸けて　ろ通

俳

○フ 一通り霙にくもる朝月夜　い然

文月 新か仙

△文月や雁もいろはは未だしらず　嵐枝
繋らぬ星も出て遊ぶ客　柳こ
渡初すめば橋からきりはれて　歸的
ハ 遣羽子の音はヒイフウ三日の影　白狂

同

△風便に任する萩の葉月哉　吾仲
柳は無事に露も時雨も　山只
山雀の孫を相人に籠提げて　范フ
ナ 螢見にいざよひの闇の片明り　枝

近世、朧雪、炊下の人々、文月祭月等の發句を正の月に擬ふとて、脇に「露の影、跡のかげなど」、影の字を付くる事あり。イ々見るに日かげとも、燈のかげとも定めがたし、一句に影を結ぶはよし、脇に並べては二階の目藥也、其始め何人の仕出しけむさかしらにや、爰に文考の證を見て、二門の人々弊を止めよ。さて異名の月は前句に用ある故也。

△素秋中に出でたる曲節。

(古今二)一巻の法式に素春はあれど素秋のなきは月の八面にせはしければ、季と季の隔てもやかましき故也。

▲かくいへるは面々の月を、皆秋にする時の論也。

(花のしべ)何賜に他季の月出でたる時、表に素秋をする事もあり。

▲他季の月出で素秋あるも、又前後なるも兩例あり。

(雁本)素秋の事に古來も稀れなる甚秘也。夏の月にても夏に通ふ秋の道具を付くる也。尤も秋の句續くべし。

▲こは古式並蕉門に聞きたなき事證句にてしるし、其夏の月は夏秋へ通ふ季を結んで素秋を續けなば、秋に引かれて紛はしく、却て素秋の詮たつまじ。又素秋と他季の月と續くに限る事もなし。又他季の月出でゝ素秋なきは常の事也。

根本

○ナ(ワキ) 青鷺草を見こす朝月　翁

ア 松風の博多箱崎露けくて　嵐雪

酒店の秋を障子明るき　其角

社日來にけり尋常の煤はくや　才丸

ひな

○ハ 門ばんの寢顏にかすむ月を見て　翁

ア けさむき初る前栽の柿　宗波

秋風に莚をたるゝ裡座敷　此筋

むしも雨夜は目覺がちなる　濁子

肌寒く痞の方を下になし　千川

一幅

○ 夕暮の月迄傘を干して置く　應宇

馬に西瓜をつけてゆく也　葛森

秋寒く米一升に雁はれて　翁

五 よの中を鶺鴒の尾にたとへたり　森

ス 露にとばしる萩の下末　乙孝

稲妻の光つて來れば年投げて　一有

此卷裡の月出ぬ先に定座の所に素秋出でたり。

句 浮いてゆく雲の寒さや冬の月　その

住吉六句

二 鮭の出てけふは潮から酒になる　嵐竹
句 ―草にさらりと露をもてなす　青流
冬の月白し豆腐に梅の花　乙由
二 菊の節句は何の香もなし　水甫

東花八句

夕暮はなくと讀れしいなおほせ　仄止
―鳥に取つては鳶の秋風　季嵐

東山八句

朧月おほとなぶらに更行きて　木因
二 あるいて見れば面白き秋　木雨
稻雀茶の木畑や退處　翁遺吟
―偖露しぐれ時雨初めけむ　筆

△百句に素春二、素秋一出でたる變格。

句 スゞ 錦とる都に賣らむ百つゝじ　麋塒
一花さくら二ばん山吹　千春
風の愛三絃の記を和らげて　卜尺
同 ‖强盜春の雨をひそめく　昨雲
嵐更け破魔矢强まる音すごく　春
鎧の襟に餅荷ひける　塒

俳

スア 松葉の颪交萬上下に出立でゝ　塒
城主に雪の壹椙献ずる　嵐らん
歲卜に火あての松魚生きかへり　峽水

□日に降、聳、風、雨、照、天の類越

不レ嫌。

(屁非談)天象は月日星のみ也。聳物、降物を嫌はぬは、鳥獸の人間に交はれども、人倫に嫌はざるが如し。但し歌の題に天象と有りて、雲、霧、雨、雪、月、星等をよみ。又字書の乾坤門に、聳降風等を屬するは去嫌の沙汰にあらざれば、門部を省ける也。紛ふ事なかれ(約文)

―暮れかゝる日に代かふる雁　嵐竹
深 衣うつ砧は馬の塞がりて　翁
霧雨 ―こえ草畑る道のきり雨　北こん
雷雨 ―ひかりと一つ神鳴の雨　萬子
草刈 此宮の繪馬に鳩の住みあれて　支考
―杜の下ゆく水に日のさす　牧童

照降　｜鳶で工夫をしたる照降り　考
おれが事歌によまるゝ橋のばん　翁
持佛の顔へ夕日さしこむ　曲翠

續さる　半畦に菜を蒔立てし萱跡　考
｜秋風渡る門の居ふろい　然

風　｜松に並んで鷺に日のてる　蘆生
からほりの花はすんかり〱と　致畫

やわ　さえ　｜亙えかへれとや入相をつく　宇中
くも　ゆく雲の長門の園を秋立つて　酒堂
露に朽ちけむ一こしの錆　支梁

深　西日いる花の庵の半間床　也竹
｜夕日の水に遊ぶ鳥ども　烏舊

越　花折つて持たぬ人なし花戻り　不柳

曇晴　｜藤の曇りに山吹のはれ　管小
天　すむ水に天の浮べる秋のくれ　珠妙
北も南も結打ちけり　り水

花摘　居眠りし晝の日陰に笠脱いで　釣雪

△日に月次越不ㇾ嫌。（古へは二去）（七部及多省）

立ちあがる鷺の雫の春日かげ　如行
奥　撞木におろす酒樽の錠　支考
こき込の茶を干しちらす六月に　行
出づる日に咲いて入る日に花の雲　柯白
文月　ひがんの角を隠す綿帽子　杞晋
正月を毛の生える迄貯置き　白狂
｜何くはいでもねたい四月（しんぐわつ）　從吾
白たら　こし張の淨るり本を讀みながら　北枝
｜西日さしこむ竈の鍋ぶた　考
｜藪のあちらへ日はいるとかや　玉らん
さみ　鯛よりも豆ふに安き花心　亜秋
｜さみだれ山の杜の三月　露白

△日　三去。

其向も世々の隣りの日を受けて　楊水
枯　日に添へて宮木の屑は泥に朽ち　沾德
越　｜村雨に日は照りながら岑の月　考

乙鳥も日和を煩むるけさのはれ　小

冬梅
(へ)二
雲は皆ちぎれて西に日のうつり　り紅
柳に結ぶかげも永き日　應國

△日に日次　二去。　(へ)

新百
畠の瓜の日にてられゐる　反朱
菊の日の木賃返しに淺黄裡　團友

其鑑
雲兀げかゝる空に日のあし　千中
蘩がれて番の家敷は日も永し　此柱

△日に昔の日次越不レ嫌。（多省）

百歌仙
一姫取つてから四五日もたつ　天垂
商ひが先づよの中の大事にて　知風
一ふるかとしては日の照つてゐる　垂

月打越に月(げつ)グヮツをきらはぬも同じ。

△日次　二去。

冬
釣瓶に栗を洗ふ日のくれ　か兮
賓の日の旦をかぢのとく起きて　翁

行脚
日がくれたらば又明けう迄　由洛

笠
ひよ鳥の日雇に鶯の新兵衛　五桐
日雇にもなる大工也けり　蓮二
暖な日に開張へ誘はるゝ　り紅

冬梅
雲さへ拾ひ物の遊び日　阿當
晝からの永さも常の一日程　五雪

三日月
夏の日和の雲にかたまる　嵐七
杖突の重石もきかぬ日雇ども　野秋

△數字日次　二去。　(へ)

百歌仙
秋もはや六日立つたるくれの月　三惟
情の深い百日の宿　天垂

行脚
三日にあげず米は一俵　凉卜
姫松の住吉詣で十三夜　任行

江湖
三日月に手習のるす覗かれて　桃圭
此晦日も大と思うた　鷄里

△日次に地名の月日星越不レ嫌。

ほし
深閑と星崎寒し草枕　含羅

衛
何をふれゆく鈴鳧の聲　知足

絹をたつ日は殊更にめでたくて　安信
歸る日雁に明日の約束　北枝

白たら
寺持に成つた顏にてゐろり端　牧童

日
日野から貰ふ手おり一反　萬子
桑名からくはで日永の里なれば　柳こ

文月
鷹野のふれに驚もなく也　羽冠
降捨てた日和をけふの拾ひ物　歸的

こは異體字去の例にもあらず、塡字の類にもあらず。日次の文字は多用にて、殊に筆畫ゝ少き故に、ての字、にの字の例に效へり。多用にても筆畫日だつ字は嫌へり。蕉門に立つる一理萬通の法式爰にしるべし。

△日に、けふ侍句。(多省)

東花
海尊はまかれてけふの寺參り　木導
借結構な日和なりけり　徐寅

△日に昨日、けふ、あす、朔、晦越不レ嫌。

此類日の字を書いても日の心なし。昔經、今經、翌(未考)月立、月籠の心なれば、日の字に嫌はず。

粽笹にけふの節句はしれた事　香鵲
たばこをすへば時鳥なく　丈紅

山こと
結構な日和に舟のさし合うて　鶉亭
きのふは亭主けふは旅人　汀蘆

三匹
杉原に硯を添へて緣の花　盧本
入る日の色についと乙鳥　筆
日やけより公事に倒るゝ北近江　り紅
あじろの先へ走る伴僧　倚菊

桃
朔日は朝ねもならぬるす居番　南節

△昨日、けふ、明日　各而去。

茶
茶ばかり呑んでけふも旅だつ　支考
九
雪ふり込んでけふもなる瀧　桃りん
親父の顏もけふは朔日　六之

十
山かた
重箱に何やらけふは配り合ひ　白狂
飛彈縞に出立てけふの公義振り　審水

十一
浪
餅すきのけふの仕事に一俵　可汲

續花　けふは又松風見ゆる宿取つて　魚貫
七　はるゝ迄けふの祭の延びたさた　祇德

○

梅十　明日の用意の床の生花　羽翽
花ぐもり明日の天氣を受合うて　泊楓

△同作の日　折去。

砥　鶯に朝日さす也竹格子　浪化
朝日　につと朝日のむかふ横雲　翁

さみ　柴舟にとへば花さく日和哉　玉鳳
日和　日和に垢のつかぬ青空　銀桂

浪　藤の日暮に山吹のひる　知足
日暮　ふしんの音の日暮はたつく　山之

雜　北にふす枯野の松の朝日かげ　彫棠
日影　春日影いざりながらに蠅打ちて　同

△同季の日　折去。（古今同）

（諸書）春の日二、永き日、遲き日、面をかへて又ありと云へり。

市海　大坂の自慢海に春の日やは　筆
夔も結はずに遊ぶ春の日

□星、面去。（古へは七夕も折去）

其俗　星につむ錢を篩に篩ふとも　氷花
星霜てるか諸社の贈官　嵐雪

□花の事　（文中―は正花。「は非正花）

（古今二）月花は風雅の飾り也。此故に百句は四折に四季の花を配り（文也只四と云ふ事）八面に月々の月を准へて、四花八月は古今の名目なれど、名殘の裡は花にせはしと、宗祇の頃に勅許有りて、四花七月の定式とはなれり。然れば月花の句は一年の行事の中に、節供、正月の恆禮に似たれば、さして珍らしき詞を求めず、世法の時宜を調ふべき也。○今按ずるに、月と花は春の艶美をいひ、秋の淸冷をいへれば、月花は只名目にして、物に陰陽の相對といふべきにや、抑も古式の正花論には、花に色

色の品有りて、或ひは植物に二句去三句去、或ひは植物にあらずといひ、或ひは雜といふ花もあれど、十色は十品に覺えがたく、百世の爭ひは絶ゆべからず、假令繪に寫し物に喩ふとも、花は艶美の替名にして、其の木其の草の名をさゝぬは、春にあらずといふ花なく、植物にあらずといふ花なし（雖陳あり）然れば花靭花娵の類より、心の花も詞の花も、何故か花に喩ふべきや（已下證句の所に註す。）「花洛中華の名をさして、倚ニ句體ーとはいふに及ばざらむ（非正花と云ふ事也）なぞや花のみかく言うて、月は雜とも天象とも、夫等の異説をあげざるや、心の月も繪の月も、例せば雜といふべきや（六の卷互見。）月花は四季に在りながら、只花といひ只月といはゞ、論なう春と秋なるにもしるべし、或ひは「花やか花々しの詞は、新式にも掟なければ、古抄も胡亂のさたなれば、正花の論には及ばざらむ（非正花下に論す。）或ひは「茶の花香といふ詞も、茶の花の續きもむつかしく、連誹のいへる取成に似て、今の俳諧には紛らはし（非正花下に論す。）中略詮する所は月も花も昔しは詞のあやなれど、今は姿の論とするべし。但しいふ、曾式の一論に、繪の花も喩の花も春季にして、植物にあらずとや、一旦の道理は尤もなれど、今いふ我家の式目は、一理萬通の埒を分くれば、夫等の小をもて大を害せず、皆々春にして植物と決すべし。（古今二）（分別の下）連歌に花の浪は正花也。「波の花は正花にあらずとは、古今の通式にして論なからむ。然るに白馬の類説に「雪霜の花も波の花も、本より艶美の喩なれば、論なう正花たるべけれと古式に轉倒の格あれば、さるは古式に任すべきや。然らば花娵も「花かつをも、娵の花として花かつをの花とせば、先後の違ひもあるべけれど、草木の外は名をさすとも、皆々正花たるべしと、彼の類説には言捨て、今の正花論には其のさたなし（上文の事を云ふ。）思ふに白馬に此花の論は、故翁も半用半捨に

して、近く一座の衆評を許さず、暫らく一世の衆議を伺ひ、遠く百世の明鑑を待てるなるべし。返すがへすも正花の事は、古今を窺うて分別すべし。

(星月夜)(上文を難じて曰く)夫れ月は四季に在りて而も素秋の制あれば、雑といふ月はなき理也(六の巻五見。)花は四季にあらず。素春の制もなし。雑の花も植物にあらざる花も、なくては一座叶はざる事あり、其故いかんとなれば、花の三四句前迄に、素春連なりて、其次夏冬の植物など花前迄續き來る時、其折の花雑の花にあらではいかにする事ぞや、植物も同季も差合とて花なくてやむべきや、此故に雑の花も非植物もあり、繪の花も植物とせば、繪の魚鳥も生類になるや、又其草の名をさゝぬも、春にあらずといふ花なしとは、花野、草の花などしても殘らず春にする事か、甚だ文盲のさた也(文約)

▲原松の難、其文に當つては理あるに似たれども(古今三)花畑草の論、及び支考の證句を見ぬ故也。尤も支考の文は一癖有りて物に紛らはしき事多し。さて(星月夜)素秋の制ありと云へども、己が師其角の集に、素秋の卷數多あるはいかに、又雑の月なしと云へども、東武の人こそ雑の月はしたれ、又花前近く素春出で、夏冬の植物續きし時は、雑非植の花ならでは詮方なしと云へども、さる卷は仕立ず。裡四句目已下に春出づる時は、必らず花を引上ぐる也。是を呼出と云へり、又非植の花ありと云へども、そは翁滅後に、東武連の古式に效うて說きたるのみ、翁は元より諸弟子にも例なし。

(本書)茶の出花、染物の花やかなるも、其物々の正花なれば、花とは賞翫の二字に定まりぬ。(八)

(ウ陀)茶の出花、藍の出花、正花たるべしと先師申されき。

▲此二條及び貞享式相傳の四子、花の說きに各了簡ある事、六の卷變格の部に擧げて愚按を加

へたり。僧古今抄の今按、分別の両所を考ふるに、正花の事は翁も半用半捨にして、體と定め給はぬ事明か也。さりながらそは他の句を許し給ふのみにて、自句には不明なる物一句もなき事は、續寶瑱の草の巻も猶然り、茶の出花染物の花やかより、左に擧ぐる非正花の中、古式の論物あり、是を悉破する事を慮りて、翁其の獨りを慎み給ふ所を察せよ、此故に十哲各用ひける事ならねば、規則としがたからむ。前に擧げたる去來の宵闇の遺誡を思へ、抑も百匀只四本の花を、雜物非植の異體に代へむといふは、風雅の外の奇巧人ならむかも。

△非正花物。

花の兄、花櫻、赤き花、花の宰相(芍藥)花の君(かきつ)花の弟(きく)花野、花畑。花檀、草の花、秋の花(已上五草なり)月の花(光りなり)風花(ゆき)雪霜の花(雜)花田、花色、花染、花の帽子(已上千草)浪の花、湯の花、糀花、花かつを、茶の花香、花かいらぎ、花ぬり、灯の花、火花(花火とはこと也)花やか、花々し、花子、

俳錦　一花さくら二ばん山吹　千春

道々や道にひろげて花櫻

(ウヤムヤ)花櫻とは、櫻々といふ心にて、一山一縄手などの花を見渡す時よむよし、歌の傳也(約文)

雉啼いて岩根は赤き花咲きぬ

(古今五)此巻の花の座に至りて、衆評を窺ふに、岩根に赤き花といへば、決して木瓜つゝじと見ゆれど、例の名をさゝぬ花なれば、爰には櫻や然らむと、仔細なき櫻を用ひたり(約文)

▲櫻を正花に代ふる事は、強ひて論なけれど、正花とせぬ事常なれば、かく明かに木瓜つゝじと見ゆる花には、只正花を付けて赤き花、非正花と明かに知らする方よし、爰に櫻を付けては何れを正花と人々の惑ひあらむ。

このしら菊の花の弟と名を付けて　半残

つばめ　花野亂るゝ山の曲り目　そら

江湖□　踏分くる花野や露の白地より　り紅

住吉　家のある野は渦跡に花咲いて　い然

草刈□　白露に赤い花さく野の月夜　牧童

三笑　秋の野に待れてさくは何の花　播東

かも□　草花の呉羽綾羽に青野原　素後

山こと□　見臺に徒然草の花咲いて　胡中

冬蔦　下々田の花も萬ぺんにさく　太大

千句塚　目をこゝに開く佛や千々の花　除風

虚栗　文幣受けよ穗屋の花垣　才丸

三匹□　秋の花皆枯れ〴〵に小柴垣　水甫

句兄　秋の花みな切溜の桶　蕭山

東山墨□　花咲初むる燈籠の秋　東怒

○

十七　蝙蝠と遊ぶは月の花ざかり　五春

○

匂　汁のにえたつ秋の風花　俗水

舟竹亭　風花に油へる火のちらつきて　翁

四幅□　雪ちるや鳥も花にかへる山　東吾

(右歸花ならず雪の花也)

浪□　其花の文や其まゝ窓の雪　二川

(右其の字雪へかゝる)

十七　追うて出る列卒に花さく雪の笠　大圭

同　囀を六つの花見のあるじとも　五春

其鑑□　若菜つむ畑や霜の歸り花　此柱

○

皮　劔かたばみに花色の夜着　凉卜

八夕□　落ちかゝる月をしみあふ浪の花　之川

浪　湯の花あぐる杜の神風　金嶺

三匹□　花輪違を久しうてのむ　汀蘆

山かた□　松魚より心の花をさくら哉　野航

梅十□　煮じ茶の葵花を脇へ汲んで置き　有琴

百歌仙　どつかりと水を指込む茶の花香　芦角

誰　花子をかたるきぬ〴〵の袖　其角

金龍　伽羅とめて花子もかうは叱られず　九　皐

△正花に有名の花　三去。（七部及多省）

有名と有名も三去、こは字去の例也。

とやかうとする間に是は花の後　因　民

三日　卯の花を咲かせて里は藏だらけ　涼　ト

東六　うの花を咲かせて宿は戀すてふ　同

遠がけの花の盛りは雲なれや　う　中

花のさく時は無藝な山やある　汀　蘆

山こと　けしの花佛の日とて折りちらし　從　吾

月花に嘲しの有つた隱居也　嵐　青

そこ　けしの花借も見事に咲かせたり　荻　人

染分けて裾に牡丹の花が咲く　仙　呂

ふり　花でゐるそばを病後の思ひ付き　季　倹

折からと痲氣にそばの花咲いて　遠　二

四幅　鶴の羽のくもらぬ空に花ざかり　東　怒

野は花に成つて狐のよめり事　白　狂

文月　吳服やは花にこてふの賣詞　栗　几

沽ホ亭　ねり物の一ばん見ゆる花薄　沽　ホ

不公義に花さく山のあら三位　翁

茶　花薄若き坊主の物狂ひ　雪　丸

ちる花に薄き化粧の所兀　以　之

薇の原　中陰も程ふる花の忘れ草　調　和

いつの花いつの月夜に盟ひして　渓　石

星月　貢物と見えて媚めく萩の花　松　阿

花の枝に冠を懸けてまりけいこ　風　之

浪　晝見たと違うて花に月のかげ　從　吾

門外の冬あたゝかに梅の花　支　考

やわ　矢ばしからぜゞを一目に城の花　う　中

柴垣の上に始めて雪の花　夕　市

△非植の花の字越不嫌。

繪反故に秋も寂びたる松花堂　壺　峰

文操　左官も五百いたゞいてなく　遠　二

詞より人の心もかへり花　方　堅

△森正花。（多省）

花供、花陰、花會式。やすらい花、花生（此五は花に因みたる名）作り花、紙花、餅花（作花の例）花嫁、花聟（人間一世の花なり）花の顏、花莧肌（すがたの花。）心の花、褒美の花、此等皆曲節物（きよくせつもの）なれば、好んでは用ひず。

三千　やすらひ花の笠も小袖も　蓮二

雛　開張も浮世の餡の作り花　杼柳

三顏　紙花にならら津の宮を驚かし　逸筌

其俗　餅花もやゝとすゝけてけふの春　嵐雪

發願　膓詰を着たれば嫁の花ちりて　二

し〵　花聟を見るとて幕は打たねども　昇角

かも　前髮の花が再びさくものか　鷺洲

其俗　あらふろを入り和らげよ花の肌　雪

百囀　御供に常陸之介も花心　翁

花心は化（あだ）にうつろひ安き事也。心嬉しき事ならず。

△他季の正花　一卷一。

（夏）殘る花、若葉に結ぶ花、花御堂、花摘、氷室の花（已上五正しき物。）（秋）花火、花燈籠、池坊立花、花の頭（作花の例）花角力、花踊、（已上二人の花）花紅葉（雜にもある。）餅花造花、炭（作花の例）歸り咲き、歸り花、忘れ咲（花の字なくても）此類も曲節物（きよくせつもの）なれば、好んでは用ひず。

翁　同　ウ十メ　花時鳥押しも押されず　りほ

むつ　同　ノウ三　若葉を花に打ちこかす樽　桃りん

一橋　句　つむ程は莧生茂る花の跡　清風

長ら　鵜飼火や入相のかねに花ぞ咲く　七雨

ウ十メ　花火の例

さいつ比　同　花火燈して星祭る也　翁

あら　花とさしたる草の一瓶　其角

草なれど、花と押したる詞もて正花としたり。立（りつ）花（くわ）の例也。

百歌仙　座　迷惑な物は今年の花の頭　天垂

同　同　年頃は今を花なる角力にて　同

そこ　同　秋なれや越の白根を國の花　浪化

鶴　ニウ十二　稲妻の木の間を花の心ばせ　學白

八夕　句　木兎や枯木に花もさかぬ顔　之川

たそ　ウ　花も柳も秋は尤も秋の坊
炭　座　貫之の梅津桂の花もみぢ　こ屋

(諸書)花紅葉離に作る時は、春秋合體の句なれば、其意を得てどちらも主とならぬ様に仕立てよ、一方かつ時は勝ちたる方季をもつ也。

▲そは一通の心得也。季に連れては論あるまじ、譬へば春勝に作りたる花紅葉に、只月と付けむに、句意は春の心なれど、句面は秋に決するごとし。

句兄　句　打ちよりて花入探れ梅椿　翁
拾　ウ　花屋をとはむ梅の早咲　宗波
蓮　座　風に花ちる庭の笛太皷　か兮
三　同　風にかじけて花の二つ三つ　同
一橋　同　大晦日花は心の花にして　仙庵
難　同　餅花に春の屆かぬ棚釣りて　知角
雪白　句　ちればこそ花も紅葉も笠の雪　倚彦
歌　同　梨壺の昔しや今にかへり花　り紅

文月　ノ廿五　口切に茶の十德のかへり咲き　桃如

△花と音に用ひたる變格　(此外見ず)

冬　座　たび衣笛に落花を打拂ひ　羽笠
因幡　同　柴人も落花の道に踏迷ひ　東吾
深　ウ九　踏迷ふ落花の雪の朝月夜　岱水
砥　ウ十　梅咲初めて立花はやらす　浪化
星月　句　冬籠り花瓶の底の氷かな　泉石

△月花結びたる句　一卷一。(多例省)

(う陀)月花結び合うたる手際いる也。

(ウヤムヤ)月花を一句に仕立つる時は、五分々々に聞ゆる様にすべし。甲乙有りては、月花引題して宜しからず。

▲裡の月後れし時、花の座にて月を結ぶは常也。又月の座に花を引上げて結ぶも、其外も色々あり。月も花も前句に不用ならぬ様に付くるを第一にして、五分々々の論は第二の事也。

あら　花座　月と花比良の高根を北にして　翁

俳　陸奥は花より月の樣々に　翁
續さる　甲乙 有明に後るゝ花の立合ひて　同
根本　枝花を背くる月の有明けて　才丸
ひな　朝月に花の駕せつき立て　千川
別　月の秋とやかくすれば花の春　太大
一橋　花にいる月を舍りの瓢賣　立志
浪　晝見たと違うて花に月のかげ　從吾
やわ　一雨の花に月夜となく蛙　水音
東山墨　珍重は花の上なる月の色　右範
いせ　月花を墨に染めたる妓王妓女　茂秋
やへ　ウ十 高麗人に名所を見する月と花　好春
ひさ　花は赤いよ月は朧よ　路通
いせ　月座 高槻の月になじめば花もあり　ゐ齋
類　隠 ちるといる後の曙匂ひけり　其角
翁　ウ七 花火ともせば月花の空　沾ホ

△初折ちる花、後折初花不ㇾ苦。(多省)

(う陀)花に初中後の心得有り、芽組み、咲初め、盛り、散り、殘りの類也。

▲俳諧は變化のさたなれば時氣の順を追うて付くる物ならぬ事は、自らも知りながら、こはいかなる心にてか書きけむ、爰に許六の自證をひくを見よ。

雪丸　ちる花の今は衣をきせ玉へ　翁
　咲きかゝる花を左に袖敷きて　木端
印　ちりかゝる花に米つく里近き　靱生
　初花は萬歲歸る時なれや　翁
匂　一嵐老樹の花の崩れ立ち　許六
　此春は閨に花の遲なはり　汶村
同　葭茨に五門徒寺の花もちり　朱紬
　花盛り徒然草を引出し　六
奥　夜終笈に花ちる夢心　巳百
　初花に酒の通をかり持ちて　支考
茶　ちる花に薄き化粧の所兀　以之
　さく花に獅子の鬣を揩りならし　扇車

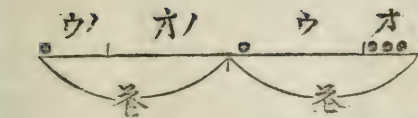
砥　ちる花にある程の戸を明け放し　浪化
　　されば こそ松は花より朧にて　萬子
　△他季の櫻と花　三去。
元祿　薄葉の文に櫻の實を染めて　翁
　　寺々や社々の花ざかり　古萱
冬　夏深き山橘に櫻見むか　兮
　　たび衣笛に落花を打拂ひ　羽笠
つり　とへがしな櫻の名ある麻畑　涼卜
　　時めきてみすのあたりは月と花　村女
　△同季の櫻と花　面去。
(古今四)爰に論せば、櫻も楓も花と紅葉には面を去りて、只一つあるべきにや、異體は例の數を定めず。
(金言錄)花と櫻、五句去にて同面にもあり。
▲同季にて五去の例は見當らず。他季にては多し。
俳　馬の鞍踏まへて手をる櫻花　梅穎

座　此花に瀧を登るも今始め　木白
五十句の表七目より素春出でゝ如此あり。同面に出でたる例は、此外に見ず、面去の例は多けれど畧す。
　△定座に助字の花を許す事。
(北枝考)花は表へ引上げたるも亦宜し。されども付くべき句出でざるを、むりに花をすべきにあらず。おのづから先へ延行きて、歌仙う十一句目に迫るを花の座とはする也。是迄に花出でざる時は秋、夏、冬、大風、夜分、唐、天竺にても花の句付くる也。但し正花にて前句へ付かざるを、むりに正花を付くるは不用也。かゝる時は助字の花をする也。
炭　茶の買置を下げて賣出す　孤屋
　　此春はどうやら花の靜か也　利牛
此花の字村里としてもよし、買置の茶を直下に賣拂ふは、世の不景氣なる樣なれば、ちる花、さく

花の正花は付かず、此故に通例の花にて付け、其中へ花の字を入れたるのみ也。正しき花付けてよき時は、脇、第三にても、一句も早く出だしぬるこそ本意なれ（約文）

△花の座の事。

（古今二）月花の座といふ事は、付合の辭義に譲り譲りて、七句目十三句目の高句をもて定座とす。

例に其故をしる時は、月花の座を必とせず、四花七月の式は調ふべし。されど古式の表八句に、四句已下に至りては、花を遠慮とは尤も也。（へ）

▲花をせぬ所表は四句目より端迄歌仙は三句、百句は五句、裡は折端の短句及び二う三うの折端と、擧句を末座としてせず、二三終りの表の端は苦しからず。其餘いづこに在りてもよし。

オ　ウ　オノ　ウノ
巻　巻

或ひは句、脇、第三迄に花出で、後折の花、定座上りたる例もあり。但し百句四本の花皆引上げたるはなし。

キソ　歌仙ノオ一句　隙なしの菊苦のぬけぬ花盛り　杉風
九句　縁あれば伏見の花も二年見て　岱水

俳　百句ニウ六　嘸な都浮るゝ小歌は爰の花　信章
花のさかりに町中をよふ　翁

△花　折去。

長ら短か　座箱ノ一七　入の嫁は大事の作り花　泊楓
七　月花も女房任せの浮世帶　有琴

いせ　同　同一七　千石の昔しは花も馬にくら　八至
同　高槻の月になじめば花もあり　ゐ斉

東六か仙　座ノ一九　胡忽も鮒も鱠も花ざかり　吾仲
九　るすに來て見れば小春の垣に花　支考

文月　同　慶長の後は伏見の花ちりて　童平
同　口切に茶の十德のかへり咲　桃如

初折定座に在りて、後折表へ上げたるも是より近きはなし、百句は表長ければ、速きも十去已上也。

△花を呼出す事。

(ばせを談)花を引上ぐるに二品あり。一は一座賞翫すべき人有りて、其人に花を望む時、其句前に至り前句より春季を出して、花を望む也。是を呼出しの花といふ。

▲もし呼出しを懸くる時、其人花を辭する心ある時は、又春を付けて次へ渡し、其次猶讓りて終に素春にて擱き、花定座に及ぶ事あり、そは定座と素春と五去の間ある時の事也。然からざる時は、呼出しに任せて花をすべし。

又一つは貴人功者などは、他に讓るべき人もあらねば、よく寄せくる時呼出しを待たず花を作す。

▲よく寄せくるとは、花付けてよき前句出でたるをいふ。

又兩吟の時は、互ひに二本づゝの句主なれば、辭退に及ばず何方にても引上げて作る也。偖故もなく引上ぐるは緩怠の作者也。此等の事は隔心の會の式也。常の稽古には兎も角もあるべし。

▲隔心とは、他所の出合ひ、又規式の會等也。

又ふり代ふる花あり。是は花一句と思ふ人の句、所あしき時我句を前へくりかへて、花を渡す事也。

▲こは花付け難き前句出でたる時、花主の次順の人順を代はりて、花付けよき句して渡す事也。

卷の模樣にて月花の座入代ふる事も常也。又歌仙ウ四目、百句ウ六目に春出づる時は花をせよ。是を素春にする時は他季ならでは花ならず、他季にても覺悟あらばともかくも。さらずばよき所にて花は仕てとるべき事也。

さる
ウ一 ――草村に蛙こはがる夕まぐれ　凡兆
　　蕗の芽取りに行燈ゆりけす　翁
ウ三 ――道心の發りは花の蕾む時　去來
　　鶯の寒き聲にて鳴出し　二嘯

ひさ
　　雪の樣なるかますこのちり　乙州
ウ四 ――初花に雛の卷檐居並べ　珍碩
　　一日和がようてほんの正月　桃洞

むつ　―裡辻の占を長閑に咄し出す　湖松
　―宮の左の百本の花　桃明
ニオ四　から風のけふは初午寒い事　支考
新百　去年の餅の今に殘念　仄止
ウ二　寸白も引いて入りたる花の空　反朱
　―藪の鵆のつれ〴〵の聲　楓里
渡　ウ三　立ちながら直にお寺の花を見て　素民
　―中々に幼事せむ春の雨　李下
錦　―花も霞もシテ柱より　ふ船

△呼出しを待たぬ花。（多省）

其俗　ウ二　花とひ來やと酒造るらし　翁
桃實　ウ五　此花よ御狩は丁ど廿年　兀峯

歌仙う七月の座に、花入れ代はりたる例多ければ略す。

△花の前後雨風不レ苦。（七部及多省）

花前に風雨を許さずと云ふは規式の心得なり。稽古は危きに臨みて自在を得る事を專らとす。偖近世風雨の句に未開の花を毎々出せり。それは呑まれし付にて甚だ拙し。

藤實　前雨　―疊懸けたる村雨のあし　柯山
　さく花に合掌上ぐる五間梁　貝寄
射　―再々ふりやる雨に飽きぬる　支考
　そは〳〵と見て通りたる旅の花　十丈
難　―雨はほろ〳〵とふる　高蓮
　梟も鶯もねにくる花の中　觀水
梅十　―思ひ懸けなき雨のふり出し　羽稀
　拜殿に精進はなし花の幕　り紅

○

深　後雨　花の陰射よごす蕪防ぐらむ　去來
　―鎧にはねの上がる春雨　翁
　花ざかりつれ〴〵草を引出し　許六
匂　―春から雨のふりつゞく年　朱紬
　本丸を打越して見る花の雲　其繼
砥　―青い合羽のつゞく雨ふり　浪化

山中
｜松杉の徳を備へて神の花　從吾
｜種をおろせばよい雨がふる　筆浪

○

拾前風
｜曇るかと思へば果は風になり　東藤
｜筆一本に花の一時　翁

浪
｜春風の野は閑しき仕事時　外故
｜ひがんの花の有りがたき鐘　秋幽

長ら
｜肌寒いとは風の輕薄　泊楓
｜谷水の岩にせかれて花筏り　雪

○

ひな後風
｜猪さるや無下に見殘す花の奥　千川
｜雪のふすまをまくる春風　路通

拾
｜ちる花を待たせて月も山際に　桂栩
｜窓から東風のけふも昨日も　叩端

夕顏
｜三石の中樂雁ふ花ざかり　尙白
｜八つ下りより春の吹降り　翁

△風にちる花越不ㇾ嫌。（多省）

浪
｜秋風に野を吹越える踊聲　路走
｜露ふり渡す岸の芝原　元春
花は皆ちりて流るゝ水の色　い吹

△花前後名所不ㇾ苦。
前三一三丁上段、月に名所の付と同じく、前後の嫌ひなし。されども前より敎へられし付ならば、吉野に麥米と付けても許さねど、見立てある時は吉のに吉のも付けらるゝ也。

う陀
｜杜は丸太花はみよしのり　由
｜よしの山櫻々とうる櫻　許六

花のしべ
｜關白のお成りの花の咲きかゝり　同
｜小倉嵐に通ふ乙鳥　同

○

東山句
｜白絹の無疵にちつてよしの川　某邑
句
｜仰せの通り花のけしきは　木因

三千
｜駒鳥や不二と吉のを二所帶　素然
｜雪を花とは見ぬ花の雪　蓬二

行脚
｜吉のから神も御ざつて嵐山　由洛

―雲にあへられ花にたゝへられ　吟　堂

江湖　―志賀は昔しの都自慢か　此　柱

月雪に櫻も二度の詠みかへし　蘆　元

△一巻一句の花。　◯

月花を結ぶ句、他季の花、短句の花、正花の櫻、花(くわ)の字、右五つの内一つ出づる時は、百句にても外はせず。

賡物の花、風雨付くる花、名所付くる花、花に櫻の付句、神、釋名、名所、戀、同景物の花、散る咲く苔等の花。

其外同體の運びを許さず、花は月より制重し。

―稲妻の木の間を花の心ばせ　舉　白

鶴　―三度ふむよしのゝ櫻よしの山　仙　化

如此は其外になし。

△同趣向の花變格。

―花の顔室の泊りに泣かせけり　路　通

春と秋 名所　―入過ぎてあまり吉のゝ花の奥　翁

やへ　―花に詠めむ不二の繪を書く　景　桃

―歌孕む昔しながらのしがの花　示　右

桃盗　―紀國の御使なれば笠の花　布　胡

さるを又見ぬとは餘り壬生の花　巴　兮

拾　釋　―貧僧が花より後は人も來ず　翁

花とちる身は遺愛寺の鐘撞いて　そ　ら

かも　岑　―法印は詠めて御ざる岑の花　鷗　笑

雪は未だ岑に殘りて岨の花　東　守

梅 山十　咲　―山門に大木の花咲きみだれ　う　稲

花さけば山の奥迄賑はひて　呂　杯

天河　咲　―さけば向さかぬ先にも花曇り　衣　朝

餅草にうつむく笠の花咲いて　舡　出

笠　見　―ゆるされて庭の花見の酒肴　見　龍

居ふろを花見戻りの待設け　り　紅

一句の風俗(ふり)、前の付肌(つけはだ)異ならずては、決してせぬ事也。夫れも此外には見當(みあたら)ねば先づはすまじき事也。

△雑の花變格。

根本
いかなれば筑紫の人の騒がしや　そ堂
　古梵のせがき花皿を花　清風
ア鯛の聲絶ゆる間に月見窓　翁

花皿は榊樒をもる器にて、花生類に等し、殊に花皿を花と押したれば、論なく春を續くべきを、百句六花の卷なる故に雑に詠きたり。

白たら
一度ある事二度もある也　北枝
春は花秋は紅葉とかはれども　支考
佗かぬものには豆麩也けり　從吾

七さみ
遊んでくらす鳥も色々　貞吾
いせの海白子は不斷花咲いて　涼ト
飯をたくには鍋傳授あり　貝紫

金龍
燒火に馴れて鷄驚かず　常久
花の春月の秋たる世を尋ね　仲二
願ひ込まれて數珠が光るわ　其筈
よし野から來てきかぬ山椒　蘆角

百か仙　嫁達も卅九迄の年を花　天垂
　大事の事は見ても見ぬふり　筆

是皆正しき花を作りもて雑にしたり、論ずる時は花心などより慥かなれども、雑と云ふこと變格なれば、好んではせず。但し花、花紅葉などいふ句の雑は常也。

むつ　作り花母のきげむを伺うて　山りん

作り花は雑の物なれども、大方春を續けたり。

本朝　我朝の花も唐とは違ひけり　涼三

こは論なく春なるを、何故に雑とせしやしらず。

　かいらぎの鮫は花より見事にて

（ウヤムヤ）雑の花は秋移りなどにあるべき事也。歌仙うら八句目より、月秋を付くる時は十一句目の花春に及びがたし、さるは冬季を跨げる故也。其卷には雑の花を出し、花より三句去つて素春をする事習ひ也。花嫁、花聟も稱美の詞にて、雑の正花也。春を付けゆく時は見立花といふ。

▲此論皆非也。凡秋に花の季移りは常也。證は三の巻季移りの部にあり。蕉門には何と何を組みても季跨ぎと云ふ事なし。又雜の花の後に必らず素春をすと云ふことも、雜の花と素春三去と云ふこともなし。又花嫁の類大方雜に詠かず。又此かいらぎも「花より見事にてと云ふは、そこに花なくては言はれぬ詞なれば、春とせむ方よからむ。只花かいらぎとばかりは雜にて、正花にあらず。

△花の座打越に植物の論。㊇

(ウヤムヤ)定座越に水仙、花野、野梅等の句を出す時は、座の花に障る故に多く花前とて許さゞる也。併し高貴の作にて返句成りがたき時は「みよし野は常の雲さへ春の色」など、花を隠して付けて春季續ける也(約文)

▲こは古式の論也。翁及び諸子にもさる鑄形の詠きはなし。古式とてもさる事を再びせば粕とて嫌ふべし。又一句に花隠して正花になる時は、隠しても植物なれば、越に木類は許さぬ理あり、若し定座越に木類出でなば、千度にても其次に花をせよ、草越は苦しからじ。

△櫻を正花とする變格。

二折　心なからむ世は蟬の殼　朱絃
鶴　三度ふむよしのゝ櫻よしの山　仙化

前を歌よむ心なき亂世の體と見立、武將たる身の三度迄吉の山を踏穢しながら、只一首の歌も殘さず、蟬の殼に等しき身也と、澆季の世を歎く付なる故に、櫻といはでは叶はぬ所也。

(ばせを談)去來花を櫻にかへむといふ。翁曰く。故いかに、來曰く。凡そ花は櫻に非ずといへる。一通りはする事にして(中畧)畢竟花は櫻をのがるまじ。翁曰く。さればよ、古人は四本の内一本は櫻也。汝がいふ所故なきにあらず、されど尋常の櫻にてはかへし詮なからむ(約文)

糸櫻腹一ぱいに咲きにけり　去來

と吟じければ、句我儘也と笑ひ給へり。

(ウヤムヤ)翁曰く。付合に一本櫻の事は細川法印より、花咲先生へ口訣し給ふ正傳ありと雖ども、其後更に用ふる者なし。去來猿みのゝ卷に、末の花を畧して、彼の傳を顯はしたり、惣じて櫻一本の時は、咲、開、或ひは莟といふ字をおくべき也。是正花にたつ事習ひ也(約文)

▲翁猿みのより五年前、鶴歩に用ひられしをかくいはれむ樣なし。又咲、開、莟の字だにあらば、櫻用ひてよけむと思ふも非也。鶴歩に櫻不賞翫の人を付けて、賞翫する人の歎を述べたる手柄を見よ、糸櫻の付は一句の取廻しのみにて、櫻ならでは叶はずといふ付句ならねど、撰集の摸樣にはと許されけむ。

(う四)猿みのを見誤まりて、正花に櫻する人もあり、櫻非正花初心の人する事なかれ、口傳あり。

(へんつき)花といふは賞翫の惣名、櫻は只一色の上也。初櫻、遲櫻、山櫻等の名字持ち、或ひは疎く、或ひは親し、此境に入らでは有といひて無と答ふるがごとし。

▲定座にて櫻ならでは付の手柄なき所にて、一句も珍らしく仕立てなば櫻にかへし詮あらむ、但し座を引上げてはせず、定座ならでは素春に紛るゝ故也。爰に許六の誡めつるは、下に擧ぐる四例のごとく、花と直してもよき句出來る故ならむ。

(しはす俳)百句は花四本なれば、か仙は百句三分一の句數にて、一本にては少なし、二本は多し、されども面の定めあれば、先づ二本と中古已來定まれり、然るに初折にちる花有りて、名裡にすべき花なし、元より句數には過ぎたる花なれば、邂逅の例を立てゝ、櫻にて濟まされたり。

▲己が猿ちゑに猿蓑を怪しみて、神代も聞かざ

るふしぎをいへり。初折ちる花、後折さく花の多例は見ざるや、又櫻にかへても「咲きにけり」といへるをしらざるや、又か仙は二折なれば百句の半例とこそ古人もいひたれ。三分一とはいはざるぞかし。

(雁木)櫻正花に用ひるは、本式句の花に限る、前三にはせず。

▲これは連歌北山千句第九「都人待つて待たるゝ山櫻と云ふ例もていへるならむ。蕉門に其さたなき事は、前後の例にてしるし。

後櫻　ノ　双六に只さつとちれ櫻花　木因
小文　同　藪岸に細き櫻に咲出でゝ　養浩
新百　初　櫻花さけば世間に眠たがり　水甫
其鑑　同　櫻さく寺にお講の仲間破れ　渭流

此四例は、前句へ對し花と付けてもよき所を、物好にて櫻にかへたり。強ひて稱する付にあらず。

句　もろこしの吉野は岩に牡丹哉
座　我國の遠山櫻咲きにけり

(古今五)唐土の吉野には櫻はなくて牡丹哉と、岩の一字に姿情を分けしは、全く花王の爭ひなるや、然らば花の座に至りて、我國の櫻を稱せざらむや、此等は風雅の意地にして、畢竟は牡丹といひ櫻といふ心詞の花を知るべき也。

▲用ふる所新にして絶妙也。されども是を再びせば粕ならむ。

句　曇るとは櫻に伊達の浮名哉
座　入相も聞かず尾上のかへり花

(古今五)是は外山の霞といふ和歌に效へる隱題にて、五もじの曇りに花を隱せり、然るに此卷の花の座に至りて衆評を窺ふに、櫻に花は論なけれど、爰に曇といふ詞は、花に在りて櫻にはなし。然らば發句に花を含みたれば、其櫻の歸り花をすべきにやと、其座の衆評は一決せり。但し尾上の二字は江師の歌の意を摘みたり。

△こは一座一曲の話しなれば再びする事勿れ。さて此處花付けむは仔細なし。但し疊に花を含みたりと見なば、そを其儘に正花として定座は他季か雜にても然るべけれど、さる例はなき故に歸り花を付けしと見ゆ。歸り花も春の花も同じ正花なれば、發句に詠きを付けし詮はなし。惣じて變格の詠きは古例をよく知りて後、己れ己れが氣付もて新しみを付くるもの也。

△花に櫻を付け、櫻に花を付くる曲節。

(本書)古へより花に櫻を付くる事、傳授ありとて初心には許さず、或ひは櫻鯛の類など、前句の花にあらざる櫻ならば明かにつくべき也。但し花は櫻にあらず、櫻にあらざるにあらずといふ事、我家の傳授也(約文)

ウ　辛崎の松は花より朧にて　翁
　　山は櫻をしぼる春雨　千那

傳に曰く、「さゞ波や眞野の入江に駒とめてひらの高根の花を見る哉と、遠く眺めたるよりも、辛崎の松は朧にて面白からむと、疑の詞をもて決せぬ所、此句の妙所也。脇は「さゞ波やしがの都はあれにしを昔しながらの山櫻哉と、よみし其邊りの風景を對し、辛崎の松を花よりといへるに、山には雨の櫻といへる、花と櫻の別樣をしれとぞ。

△發句の花は噂にて、姿なけれども、花よりと云ふは櫻を見ていふ詞と見立、朧と云ふは夜の雨の體と見て、雨の櫻に辛崎の景を定めたり。いづれ一方「助字「比喩「噂「稱美「別所、異體等をする也。證句に印しなきは現在也。

　　朝まだきまだ見ぬ花に起出でゝ
別　ちれば櫻の木隱の里

(祕書要決)花と櫻の有る所はかはらねど、未だ見ぬ花とあるにすがりて、昨日の花はちりけれど、けふ異木の櫻のさくを見むと、起出でたる樣に心をかへて付けたり。ちれば櫻とは、ちればさくと

かすりたる詞也(文糾)

蓬　助　かしこまる石の御座の花久し　叩端
　　　羽織に酒を替ふる櫻や　桐葉

前は鎮座久しき瀧の不動の御ましを拜む體にて、花は助字なるを、其の助字を起して花見と見立て、酒の爲めには羽織を脱捨つるも、此櫻よと云ふ心を付けたり。やは辭也○(三歌仙)櫻屋と寫し誤まつたり。

皮　助　花すくふ泥鰌盗みに胸合せ　立吟
　　　｜山の櫻は過ぎて虎の尾　團友
雁木比　山川を喚隠したる花の雪　翁
　　　｜墨染ざくら尼の衣手　丈草
根本同　花ふらば我れを匠と人やいはむ　こ齊
　　　｜さくら〳〵の奥深き園　筆
翁別　鹽物に咽かわかする花盛り　乙州
　　　｜奈良はやつぱり八重櫻哉　沾ホ
稱　百萬も狂ひ處よ花の春　傘下

あら　｜田樂きれて櫻さびしき　越人
夏衣同　肩衣に再び花のさけばこそ　支考
　　　｜柳山吹松櫻迄　慈竹
三顏い　紙花になゝつの宮を驚かし　逸筌
　う　｜櫻に馬はよしつなぐとも　朝四
行脚同　江戸も見る浪速の花は夢なれや　吟堂
　うい　｜櫻鯛とはさくらくさいか　蒲堂
三日い　花聟といふも道理な生れつき　麗線
　　　｜櫻にてらす折の大鯛　考
櫻山別　山伏の山といつぱや山櫻　許六
　　　｜首途もよし野は花の頃　支考
三千う　櫻さくや都は牛の匂ひさへ　酒堂
　　　｜やすらひ花の笠も小袖も　蓮二
雁木い　｜櫻をこぼす市の麻刈　竹翁
　　　大和路へいるとてけふも花曇り　嵐雪

□木草越不レ嫌。(古へは二去)

｜｜浪に蘆垣仕つたり　翁

一此梅　時は花入江の雁の中がへり　信章
　　やはら一流松に藤巻　同

古拾　菊やどの家に久しき雁鳴いて　翁
　　酒舟あれば汀浪こす　春澄
　　碓の音闇しの松の風　似春

虚栗　恥しらぬ僧を笑ふか草薄　翁
　　時雨山さき傘をまふ　其角
　　笹竹のどてらを藍に染めなして　翁

雪丸　鎌とぎ習ふ里の草刈　石雪
　　俳諧を尋ねて花の窓に入り　翁
　　み木を取まく梅のひこ生　そら

さる　草むらに蛙こはがる夕間暮　凡兆
　　蕗の芽取りに行燈ゆりけす　翁
　　道心の發りは花の荅む時　去來

草刈　文箱の中もよそにしら菊　林陰
　　供人の門にさゝやく夕月夜　野棠
　　紅葉狩かと笛の聞ゆる　和丈

水仙　竹に明りの届く明星や　は
　　繋ぎ合ふ手も美しき花見して　兎白
　　分取りになる鶯の山吹　杏雨

六行　肩衣は御禮申の花の春　藍水
　　寒解したる橋の水嵩　倚松
　　咲亂す城の外側の菜種畑　一楓

旭川　夕日さす花は西谷東谷　素川
　　知つた自慢の何呼子鳥　波調
　　山吹は枕詞の鮒鱠　杯舟

△木類二去。（古へは三去）　㋬

冬　月は遲かれ牡丹盜人　杜國
　　初花の世とやよめりの嚴しく　同

鶴　敵よせ來たるむら松の聲　ちり
　　憎まれし宿の樺のちる度に　文りん

一橋　軍語りの松の十抱　清風
　　梅ちりて花さく迄の眠たさよ　一品

鎌　松の嵐を中ごしに受け　冠那

木犀の匂ひはさめず村雨めて　佐角

續花

常盤木も小高き城の青嵐　湖十
柳木の松を柱の荷ひ茶屋　り鄉
起きてさびしき松の白雪　貫仙

越

御法事も過ぎて紅葉に露時雨　陸夜
鍋取も公家の流れの野梅哉　有琴

梅十

舟はあちらに見ゆる松陰　七雨

俳　嘶な

三十三年杉立てる庵　信章
いろは歌横たつ山もなかりけり　同

如此相似たる様に見ゆる例もあり。

△草類二去。(古へは三去)　◯

冬

齒朶の葉を初狩人の矢に覆うて　や水
茶の湯者をしむ野べのたんぽゝ　正平
露萩の角力ふちからを撰ばれず　翁

同

殊にてる年のさゝげの花もろし　水
をるゝ蓮の實立てる蓮の實　翁

蓬

一りん咲きし芍藥の窓　東藤

靈芝ほる河原遥かに葎懸かり　東藤

印

入山の荚に落ちしうき泪　そら
中は笹の中に隱して　翁
思はぬ方の歎冬をつむ　風麥

俳

引きかつぐ菖の階子重たげに　土芳
お夜詰に道ひまつはりし蔦蔓　似春

一　須磨ぞ

蘆のまろやにうつせ有りけり　翁

△非植物同體草木に越不レ嫌。(七部及多者)
草の屬にては「田畑の植物は、摘刈ては穀菜と成り「苗代青田の類は場に屬し「種蒔、稲刈等は態藝にて「草枕は旅體「草の戸は居處「綿類は衣の屬也。又木の屬にては「伐割し物は薪材とし「菓類は食物に入る「椋鳥樫鳥の類は生類なれば、字義にも拘はらず「梅の宮、梅の木村の類は地名、「門松、柴垣。「柴の庵は居所の部に入る「藪は彌生の約「林は使生なれば、偕に木草の生立をいふ名也「森は諸村群叢も同義にて、木の集生したる

名也。此三つ無名なるは只場としたり。但し竹藪梅林、松杜と云ふは勿論植物也。凡て「花葉賞翫の物は、切ても植物とするは稱美の花を植物に認ふ同例也。さて○(古式)に竹の子木の子は季をもつ故に、煮ても植物と云ふはあやしきさた也。

射　一手ある二上山や菊の花　北枝
いね　きりの晴間をそよぐ西風　野角
稻塚の階子しまへば月の出て　十丈
ひな　―咄しとぎれて休む草取　千川
苗代　此春はいつより早き花の陰　翁
―蛙のせいの見ゆる苗代　遊糸
匂　そよ〳〵と麻に風たつ夕まぐれ　由
腮に狹んで〆める褌　許六
草枕　豊島蓙一枚持つて草枕　徐寅
朝顏や石ふむ坂の日に凋み　全峰
續虛　小畑さびしき案山子作らむ　き風
草戸　草の戸の馬を酒手に押へられ　翁

次匂　草の奥下妻が原に暮れかゝり　才風
狄の里の足洗鍋　き角
わた　配所人蘆の小忌布を干しかねて　翁

○

薪　暮の月槻のこつば片寄せて　嵐らん
深　坊主頭の先に立たるゝ　傛水
松山のこしはつゝじの咲渡り　洒堂
櫻山　―こゝらの藤を夏に眺むる　何悦
坂越ゆる坊主は牛に極まりて　支考
菓　―いせ路の柿の五介迷惑　許六
樫鳥　出代りも宿樫鳥の音を鳴いて　逐二
文操　重はさびしき赤の脇方　堅
幕一重花の吉のゝ奥もあらず　乙文
梅宮　明暮に詣でゝ仰ぐ梅の宮　正珍
同　鮓のかげむの一子相傳　二
さく頃と告げやる友の花に來て　光純
―夕月にさて面白い土堤の松　竿水

西花
梅木　―萩咲きかゝる假の雪隱　萬水
門松　梅の木の藥を買ひに一走り　吐雲
むつ　門松を買納めても春めかず　朱角
　母を晝にかく山寺の兒　獨笑
月や空花の鏡の水呑みて　助叟
冬さけば冬面白し梅の花　音吹
桃盗　御簾に雪ちる御所の風俗　柳士
同　衣配り松の心の急がれて　秋の坊
干鮭に花こそさかね梅の花　浪化
　紙衣の衿に唐おりの銷　北枝
草刈
柴垣　柴垣に掃部の介を呼入れて　萬子
―夜盗松風の音を相圖に　楊水
雨の闇にすけて敵を討たせたる　き角
次匂
柴戸　―舞臺に柴の庵栞戸　才丸
―萩の簾を揚懸くる月　棟雪
爐烟りの夕べを秋のいぶせくて　更也
奥
やぶ　―馬乘脱けし高藪の下　そら

―藪のあちらへ日はいるとかや　玉らん
さみ　鯛よりも豆麩に安き花心　市秋
もり　―さみだれ山の杜の三月　露白
林　―林の中の家に火をたく　乙由
新百　花は今星の光りに咲揃ひ　支考
―新百匂の柳　鶯筆
△月の桂、月の花、非植物。
笙ふくは何ぞ三五の桂かげ　素淺獨
みかの　さなきだに秋獨りるすして
もろきとは合點ながらも垣槿
朝鮮の詩に譽められし藤咲いて　千梅
星月　藥の名代賣弘めたり　松人
嫁取に桂のかげの謠聲　松三
いざよひや花の桂の歯落の賦　竿松
十七　蝨の命をおとす蘂　呉舟
蔓いちご向ふへぬくる石の穴　梨花
―ふく物もなし國の色月の花　雷之

十七　一單の簾冷氣つくらふ　筆
川波を袈裟にくれても朝の萩　丈水
△木草の字各三去。

ひな　折々涼む裡の柿の木　翁
ふり　ギ榎木の末に殘るしめ繩　濁子
柿木の近江といふは弘い事　竹司
時を得て老木の花も算へられ　蒲右
瓜　疇のさし木も木屋の咲時　可之
待つた祭に眠る木の股　如本

○

次匂　微雨ゆく簾から山の木の間より　楊水
コ木嵐の乞食に軒の下をかす　才丸
四幅　青々と川の向ふの夏木立　月狂
秋は皆木葉となりてちりぢりに　梨月

○

俳（錦とろ草）　細桶に忘ぬ草の衰れをり　千春
行脚坊そとばを夢の草枕　翁

さる　二番草取りも果さず穗に出でゝ　去來
草村に蛙こはがる夕まぐれ　凡兆
鬧しく草起上がる雨づかひ　渭川
一（梅のさか）　二角力咄しで草臥るゝ也　三惟
疊のはしの暑き夏草　その
初茄　刀に帶のゆるむ草臥　廬錐
草芳しき奥の細道　筆

△松、竹　去。（古今同）

一（梅の風）　漸うこゆる末の松山　信章
何とて松はすねて見ゆらむ　同
東六　碓の音を隣りに踏次の松　夕市
松かげに座敷めかしてすのこ緣　同
俳（錦とるへ）　松髮の祖父蔦上下に出立ちて　麋塒
三世捨木や世捨の松に名を朽ちて　き角
桃　六八景も九景も松の間から　海人
松には聲の藤に夕風　未因

○

俳　初花の垣に古竹結廻しい　然
二三本竹切りたればかんかりと　支考
小文　─六 なぐれて雪のかゝるから竹　山店
ふしん場で拵へて來る火吹竹　嵐竹
壬　寒竹の杖の節よむ老のわざ　苔蘇
四 琵琶の謂れをかたる竹縁　風麥

松竹は五去歌にあり、無季の植物(うゑもの)此例(このれい)也。

△枝、葉　五去。

みかむ　枯れもせず太るともなき楠の枝　卓袋
雪隱の窓より覗く花の枝　猿雖

○

別　三 脇よりこゝは赤い蔦の葉　子祐
くぼい所へ木のは吹込む　子さん
類　四 同じ枯葉に杉の實の色　き角
蔦の葉の伯父貴の撫でし裏若み　昌美

△苗、根、葉　而去。

句餞　苗─九 根松苗杉蟬のなく聲　濁子
苗代もゆる雨こまか也　嵐雪

○

賣　根─七 ちる花に垣根をうがつ鼠宿　嵐雪
長門より西の咄しの根問ひして　翁
─十 根を分けて牡丹を移す石の間　桃りん
むつ　塀に根ざしの慥かなる桃　己應

○

─十六 梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　翁
さる　灰蒔きちらす芥子菜の跡　凡兆
懸菜春めく打豆の汁　翁
深　麥と菜種の野は錦也　り合

△穗、實、種　而去。

─十四 こしかけ酒に門の穗薄　野棠
草刈　葭あしの穗に出て戀の花はなし　秋青

○

鹽漬も始めて日見の櫻の實　老鼠
續花　人しれず秾の實のる後夜の月　こ十

一橋 ‖種まく人の歸る片原　清風
夕顏の種とる頃に成りにけり　同

△藪、柴　面去。

汐 |虎もすまずて藪の百丁　白庭
桃の光りをそへて藪陰　筆

○

續虛 ‖月には許せうき柴の數　破笠
柴の戸深く維摩きくらむ　き角

△楓に紅葉　面去。

(古今四)櫻も楓も花と紅葉(もみぢ)には面(おもて)を去りて、只一つあるべし。

▲證句(しようく)得ざれども、さるべき理也。

△一卷一句の植物。(百句にても)(へ)

柳(芽柳、青柳、葉柳 異名の内にて一)梅(早咲、寒梅、紅梅、匂ひ草、花の兄の内一)椿(冬椿、玉椿、異名の内一)櫻(ひがん櫻、いせ櫻、山櫻、やへ櫻、吉の草、化名草の内一)桃(ひ桃、白桃、やへ桃、みきこ草、みちよ草、等の内一)山吹(俤草にかへても)若菜(二字もの)燕子花(顏よ花、花の君、と異名にかへても)牡丹(冬牡丹、深見草、廿日草、のうち)かへで(青、若としても)紅葉(梅、柿、蔦等の名ある物にても)菊(夏菊、花の弟等の異名にかへても)芭蕉(二字)水仙

(古今四)右の類、異名にかへ他季にかへても同物(どうぶつ)なれば、一座に二つは決してせず。又二三字合うたる名は殊(こと)に重(おも)し。

△榮枯にて一卷二つの植物　折去(か仙は無印)

櫻(春一 歸一)柳(春夏の内一 秋冬の内一)菊(夏秋の内一 殘枯の内一)

(古今四)此類一字題(いちじだい)の物、榮枯盛衰(えいこせいすゐ)の觀(くわん)あれば、其名を其儘に一座に二つ許せり。

▲古式(こしき)は一卷(いつくわん)を二度に調ふる時は、一座一と云ふ嫌物(きらひもの)を二つ許せり。蕉門(せうもん)にて一座一と云ふは一卷の事にて、百句も歌仙も同じ、一卷を二度にすとて別(べつ)に許さゞるは、凡て古式より制寛(せいゆる)く

許すべき物は二座ならでも、かねて二つも四つも許したる故也。

○

根本百

フ　汝櫻よかへりさかずや　翁
ハ　櫻々の奥深き園　執筆

○

其鑑

ア　ちり果てゝ柳に月の取殘し　千中
ハ　千年の名に松も柳も　其由

○

旭川長歌

ア　一葉とて蔦も柳も桐のはも　里可
ハ　旭の川の水の青柳　波調

○

鶴百

ハ　梅は盛りの院々の閑　似春
ナ　梅まだ苦き匂ひなりけり　こ齋

浪

ハ　早咲の梅は机の相手にて　知足
ナ　夕べのあれに落ちた青梅　山之

○

十七

ゑ　明星や櫻定めぬ山かづら　き角
ア　筆も櫻の紅葉にて見る　春樂

○

古拾

ナ　青ばより紅葉ちりけり旅させる　似春
ア　あみ楊枝昨日は岑の薄紅葉　春澄

○

渡

　そばの花さく岡の白妙　先放
イ　一膳殘るそばのあぶなき　卯七

□異生類越不ㇾ嫌。

（古今四）俳諧は只日用の咄しにて、一座の人和を詠へば、折節は馬の打越にまざ〳〵しき牛ありとも、其日の時宜にやと見許すし。

續寒

猫かはゆがる人ぞ戀しきや　は
あの花の散ぬ工夫があるならば　翁
掃目の上に色々の蝶や　は

桃

犬を相手に遊ぶお小僧　桃里
吸物は後にうどんの膳上げて　野洞
伏見の雁を二階からきく　由之

白。鴉　是は又山鳥の尾の長短　琴工
悟りでゆかぬ寺の談合　左梅
古へも猫の踊つた例しあり　里楊
松に巣を守る蝙蝠の千代　藤堺
みの　俳諧の空死花の浮狂人　一晶
馬蹄に皷送る春風　翁
△同生類　二去。（古へは三去）
一橋　耳疎く妹が告げたる時鳥　同
我がうつ鷹を殿の御拳　き角
俳　鷹の爪胝寒くなくならむ　半殘
雉々逊るなこはい事なき　土芳
ひさ　獨りある子ゝちやぼにかへける　珍碩
雲雀なく里は厩こえかきちらし　正秀
山こと　精進に落ちかゝりたる雁の聲　秋之坊
出てゆくるすを頼む乙鳥　巴兮
○
市海ムシ　小酒やの蝶來て休む酒もなし　路圭
汐さす砂に飛びし蟷螂　路圭
○
花摘　妻ひ乞するか山犬の聲　翁
蹄の音を狩宿に矢を矧ぎて　釣雪
春と秋　振上げて杖あてられぬ犬の聲　路通
月も今宵と見む馬の市　翁
追込の網を鼠のならす音　素牛
市庵　手拭脱いでおろす牛の荷　支考
聲もなく朝の鹿の小草はむ　神叔
枯　走りながらに牛よべる聲　介我
海老賁の可笑き顔もけふは來ず　之道
あめ　桃の節句や二見蛤　獨
黒き事油より猶せ切鯉　虎月
江戸　たらひの田螺音をのみぞきく　同
△生類付句。（多省）
山雀の柿褌に尻からげ　信德
俳嘸なとり　青茶の目白羽おり着てゆく　翁

初茄むし ｢蝸牛のからを踏潰す音　呂丸
身は蟻のあなうと夢や覺めつらむ　翁

浪うを ｢白魚のげに面白き料理組　何由
雲丹は黄色に防風紅　筆

誰けもの ｢鄕中のよゐりふるゝは狢にて　嵐雪
思ひまさるとなく直宿猿き　角

△鳴子類に生類、網に魚鳥越不レ嫌。

(古今四)鳴子は、稲を守る故に、植物に二句去とや、いかなる意の運びにや、此等は生類に二句さるべし。網に魚鳥を二句さる例也。

▲こは古式を難ずとて筆過しけむ。蕉門にはさるせんさく論なき事は、支考談きの例にてしるし。

天河ロ ｢山も案山子を笑ふ苗代　曾路
花守も龢宜の時にはゑばしきて　蘭路
｢梅にさはらぬ鶯の笛　筆
｢蕎のうねりを殘す桐のは　涼ト

皮 ｢月の築けさはざんざと水落ちて　涼ト
｢里の後に鳴子ゆふ薪　ろ遊

△非生物同體生類に越不レ嫌。

非生類と云ふは「雷鬼の怪物「水を放れし魚類「狩の鳥獸「田むし類の病名「干支「繪、彫物の生類「喩物「枕詞「名所、器財の生類名「蚊屋「馬士の類也。

三

雷 ｢夕立の先に聞ゆる雷の聲　楚竹
馬もありかぬ山際の霧　東睡
さを鹿の蘒矢を袖に射付させ　翁

其俤 ｢裝束の百馬揃へる花の山　百り
榮える藤は門の客人　嵐雪

鬼 ｢感じては鬼が詩ゐつぐ春の雨　角
雷 凩にませて雷狩出し　何容
このは 神の射捨の矢の根尋ぬる　化明
鬼 鬼になる合點で丑の時參り　和琳
狩 鹽にしていざことづけむ都鳥　翁

古拾　―只今のぼる波の味鳧　春澄
川淀の杭木や龍の傳ふらむ　似春
拾　狩　どや〳〵と還御の後に鶴釣つて　か兮
誰れやら申出す念佛　越人
忍び入る戸を明乘て蚊にくはれや　水
やへ　支　―近付く中に馬の爪打　示右
年々の花を武運に開かせて　言水
―藤のめでたき丑寅の神　右
―秋の鳥の人喰ひにゆく　翁
逢　ゐ　一昨日の野分に濱は月澄みて　工山
―きりの雫に龍を書きつぐ　東藤
―馬屋の蠅の二階迄來る　有琴
天河　寢道具の崩れぬ樣にしゆろ箒　童平
たとへ　―髮ゆふうちも只あかき猿　鷹仙
―猫盜まれて後生一ぺん　山只
歌　栗飯のさがなつかしき夕月夜　胡仲
同　―狐仲間のそゝめく藪入　風草

。―鼠よりかつをに猫の二心　杯舟
旭川　殿の威光は砂に帚目　義文
名所　―星も尾を引行く月の狐川　里可
かく作意(さくい)を付けても生類(しやうるゐ)にならず。
かや　―木賃の蚊屋の外も同前　吟志
桃　三上から鏡へ月の明渡り　鐵左
―案山子の弓は雁も合點　夜航
馬士　馬士も泪こぼして立別れ　北枝
射　ねぶの暑さの現なき花　野角
木綿幣に祓過ぎたる鷺の群　十丈
異生打越の例は夥(おびたゞ)しけれど略す。
△鳥の字　三去。（古へは面去）
めき〳〵と川より寒き鳥の聲　野明
拾　花の香に鳴かぬ小鳥の幾群か　翁
庭鳥の白きは人にとらせけり　卓俗
俳　はら〳〵と雉に小鳥の威されて　同
誰　―大判の名も珍らしや金衣鳥　才丸

浪
水鳥の酒の攝待立止り　き角
人の噂に鳥の噂る　八紫
凪のない日は尾長鳥とぶ　一甫

夕顔
又飼鳥の寄りかゝる石　圓入
其夜はくわらり棟に庭鳥　宰陀

△鷄の字　三去。

梅十
色も五色にかざるむし干　梅光
亂るゝ鷄にむしも鳴きやむ　仲志

△馬に馬士　五去。

皮
月に見すかす馬の寢姿　轍士
五
馬ふんにすべる老の市立　杜若

匂
馬がはなれて菅笠をくふ　り由
四
後先にたんたと通る十駄物　米らん
馬乘の明いた羽おりは五器膾　野航

櫻山
四
荷を付けかふる宿の馬士　右範
嵩高な荷物に馬士の飲構へ　宗路

初茄
七
流鏑馬に祭の子供あぶながり　新古

△馬　面去。

三匹
ありかねば馬の上には居惡し（おりにくし）　汀蘆
十
馬がゆくかと橋を見てゐる　同

このは
煩ふ馬の間に火をたく　孟遠
十
風次第馬士なし馬のほく〳〵と　甫什

皮
菰を田鞍に望月の駒　き角
十二
足取も皮盜まれたあし毛馬　ろ遊

俳
馬のくらふまへて手をる櫻花　梅額
十五
葬禮にしをるゝ馬の哀れ也　良品

△馬異體　二去。

翁
繪馬を懸くる年越の宮　ろか
鐵棒を戸塚の宿の傳馬觸　同

類
まる馬出しに成りし踊手　止齋
初午にのれんの狐目だつ也　き角

桃白
籠ぶせの駒鳥おどす篠の陰　太舟
手綱ひかへて馬の順くる　此筋

△干支　面去。

やへ　｜雄付いたる丑寅の角　我黑
　六　寅鐘の夢もきれいな板疊　示右
同字なれども時刻(じこく)と方角(はうがく)の違ひあり。
　△犬、牛　折去。

苦摘　ウ｜絆はるゝ犬のかざしに花折りて　呂丸
　妻乞ひするか山犬の聲　翁

このは　｜牛どもを繋いでさがの花盛り　石介
　生れ牛子(べこ)のはひるせと口　越只

　△羽、尾、鷄　面去。
(諸書)羽の字面(おもて)をかへて三、鳥羽、音羽は此外なりと云ふ。

續花　｜照月や馴れたる犬は尾を振りて　老鼠
　｜五　雨の後しばし尾長の尾の雫　湖十

櫻山　｜さびしさを神もお好きの鷄の聲　之通
　｜向ひの鷄のこちにゐたがる　斗牛

　△蜂　同季折去。異季　面去。

拾　ナ｜牡丹しべを深く這出づる蜂の別れ哉　翁
　｜七　ア｜竹蜂の尖き月の夕嵐　叩端

　△蚊　折去。

夕顔　｜雨のくもりに晝蚊寢させぬ　翁
　｜十五　暑氣によわるみな月の蚊帳　倘白

難　｜一羽鳴いても蚊帳は仕まへぬ　乎哉
　｜十六　聟の耳に蚊のなく嫁の聲　山りん

櫻山　｜紙帳もいらず殘る蚊の聲　長緒
　蚊遣ふすべて出たる裸身　爲花

　△魚、鱠　折去。

櫻山　ウ｜魚とらぬ川のあたりの淋しさよ　桃妖
　｜十四　よんだばかりにかはぬ魚賣　鳥水

別　同｜秋の水春に鱠を引上げて　滄波
　｜十四　洲走とれて鱠丸やき　同

　△貝類　面去。

衡　｜月を干したる螺貝の酒　翁
　｜六　辛螺殼の油流るゝ薄氷　如風

已上(いじやう)の生類取合(とりあは)せては、か仙に十ばかり、又鳥類

ばかり出て、別生の出ぬ巻もあり。近世前に鳥あれば、爰は魚類よからむ、獸出でたれば蟲などゝ物柄のさしくりするは大いなるひがごと也。

△一巻一句の生類。

鶯(經よみ、歌よみ、匂ひ鳥、笹鳴、付子の内一)喚子鳥(かほ鳥、杲鳥、かほよ鳥、かんこ鳥、同物なれば其の内一)百千鳥、蝶、蝸牛(てゞむしとしても)時鳥(しでの田長、不如歸、橘鳥戀し鳥、等の異名にても)水鶏、鶺鴒(いなおほせ、庭たゝき、眞木柱、にはくなふり、一鳥なれば其のうち一)蛬(筆つむしちゝろむしとしても)松むし、又狐、狸、鬼、虎、龍、雷、天狗の類。

(古今四)右の類、異名にかへても一座一つ也。殊に二字三字會合の名は彌目だつ故に、決して二つはすまじ。

△盛衰にて一巻二つの生類　折去。

鶯(冬春の内一老亂の内一)螢(夏一殘一)雁燕(歸一來一)衛(冬春一夏巣一)

(古今四)此類盛衰にかはりて、其名を其儘に二つは許せり。

俳あら何嘸な　ハ名殘の雁も一くだりゆく　信章
　ア物の賂振廻にする天津雁　信德

俳　ア雁よちどりよ阿房友達　翁
　ハ唐土へ歸る羽箒の雁　執筆

物の名　ア水衣を笑ふ初雁の聲　信章
　ハ天津雁借金なして歸りけり　翁

已上は百匀の例、已下は歌仙の例。

砂川　雁より鳧の早う來てゐる　野明
　抱込んで松山廣き有明に　支考
　ちら〳〵鳥の渡り初めけり　明
　朝の月起々たばこ五六ぷく　諷竹

二句ともに月前の渡鳥なれど、作異なる故によし

鳥切　ナ川瀬を走る年魚の献立　芙雀
　ハしよろ〳〵と小鮎少走る小石川　同

同作なれども、献立に意の違ひありて許したり。

貞享式海印錄四終

貞享式海印錄五

山齋　述

□塡字同訓越不レ嫌。

(古今二)鈴鹿の打越に染物の鹿子のごときは、是を異體の差別といひて、執筆は假名眞名の配りをしるべし。

▲古式より假字を嫌ひ來る物あれど、今此例によりて考ふるに、假字にも、本義にも嫌はぬ物あり、左に其大概をあぐ、眞名假名の書分にも及ばぬ事也。

かほ鳥(かつほ〳〵と云ふ聲にて號けたり。顔、杲は假字)

やぶ入(やぶりともやど入の訛りとも、養父、薮は假字)

さをとめ(植少女也。早は假字、乙はかな違ひ)

たなばた(棚機也。昔衣おる女の通稱、七夕は義訓)

いなおほせ鳥(否諾也。二神廻り合ひ給ふときの由稻負は假)
なのりそ(莫告其也。神馬藻は義)
しのゝめ(篠芽等と明白むと云ふ事也。東雲は義)
しをり(しは助字、枝は假字也)
鴇毛駒、蹢躅草(月は假字なれば、月打越も不レ苦)
ついたち、つごもり(月立月籠也。朔晦日は義)
此外輕き異體物にも越不嫌物あり。左にあぐる例を推して萬通せよ。

山かた｜貧寺のくせに折々の客　栗儿
時折｜我書いた物を八百屋と讀兼ねて　東羽
活折｜後家のちゑには我を折つたやら　右範
福山の殿は追付御座り前　盧本
紺屋を雨の降殺す也　支考
皮座｜つきもない道ぐで狹き裡座敷　乙棹
晝前に起きて師恩の日も忘れ　北枝
射師｜隣りのばゞが手紙屆くる　十丈
よの中の師走も雪に暮れかゝり　牧童

朔日｜ほしき鏡に進む朔日　卯七
百歌仙｜言うて來る今度の客のよしに成り　素行
｜月を抱へる塞の持合　一介
同｜朔日を千代の始めや菊の花　昨なう
きく十｜中くむからに酒も三献　伯兎
月に雲其訟ひの風吹いて　蓮二
翁有｜イ有明の雲にしみつく寒さ哉　ろか
寢ていらくとかゆき霜先　沾ホ
どうとうつ男波は餘程間が有りて　乙州
梅十中｜馬と牛とは中がよいやら　羽秭
植懸くる五町五反の田植飯　梅光
｜中人の口半分はうそ　泊楓
星月目｜木隠れの月を尻目に面の内　泉石
藪のあちらの砧やかまし　松洞
禪堂の役目に並ぶうそ寒き　而後
金龍口｜口恥かしき方へ結納　山夕
鬮札とことしの戀はつくばねや　仙芝

一財布を捻る花の　青口流
｜手盛の櫃に强ひる飯時許　六（獨）

このは手
綿秋に仲買さわぐ風吹いて
｜ひつぱりたらぬ毛見の手代衆
｜晦日拂も手にはたまらず　其友

五日月手
徳利にも濕むる程はなささうな　里夕
｜勝手隱れを見こす小屛風　似翠

山て瀨
獨りしてはせ釣りかねし高瀨守　等躬
笠のはをする蘆のうら枯　栗齋
梅に出て初瀨やよしのは花の時　翁

□同字別吟越不ㇾ嫌。

(古今二)屛風は必らず眞名なれども、松かぜとは假名の目立たず。又云ふ。野分の打越に、壹分といふ類は是を音訓の差別といひて、執筆は眞草の字形を心得べし。

▲音訓は勿論淸濁、引　にかはりても、異體は越を嫌はぬ事證句に明か也。眞草を分くるに及ばぬ事は、大、小、木等の眞草分ちがたき字にてしるし。

桃白大
｜雁も大事に届けく文　涼葉
眉作る姿似よかし水鏡　濁子
｜大原の紺屋里に久しき　翁

類たいだい
秋なれば諸行無常の太鼓樓　艶士
後のあしたは綾のおすべり　幸輪
大毒の反魂香を花の雲　き角

雪白同
｜大工がよさに遊ぶ手傳　北誰
お傘が亭主さうなる仕廻た屋　以之
｜朝ねといふも大體の事　左把

續さる小
約束の小鳥一提げ賣りに來て　馬莧
十りばかりのよそへ出かゝり　りほ
笹のはに小路埋みて面白き　沾ホ

其傘
｜又寢朝寒御油の馬士　立吟
樣々のきぬ〴〵語れ軒の月　嵐雪

馬　｜露拾はする玄宗の馬鹿　立吟
有りとある木葉も風に散仕廻ひ　柳花
隠居の樂を今思ひしる　林子

櫻山　木
摺小木も佛と聞けば其通り　支考
椎の木に通ひ馴れたる角田川　牛寂

皮　きぎ
錦木もそよろといはず立ゑぼし　景帘
あはさぬ戀か母を誓文　沾洲
｜はらはら火打出す手のさえ　如行
觸れ事も田舍となれば緩かさ　叩端

拾　手
｜蜘手の橋の懸けつはづしつ　閑水
水打つた程村雨のよくしめり　泊楓
和尚の作を譽むる築山　呂杯

梅十　水
行水の時雪隠も見て置いて　り紅
年禮をお師の下人に詞して　馬莧
ゑぼし冠れば兀も隠るゝ　翁

桃白　御
持ちつけぬ御太刀を右に畏り　濁子
｜お城からこゝらを見れば秋の風　爲花

浪　ごお
｜人の噂は空の身の上　丈紅
けふは先づ遊んで御ざれ茶な入れむ　寸長
金屛にお師の不便を紛らかし　り

文月　同
風に紙燭の遠い雪隠　葵明
星は出て御ざれど雪のちらちらと　琴左

庵野分
七郷に名の響きたる眼の藥　文鉾

眼
ちんばながらも見せぬ居角力　此杜
信玄は天眼通の人遣ひ　岡一

□異體三去。

（古今圖）飯に飯鐘魚に木魚の如き異名は、三四に許すべく、蟲に脊むし、餅に煎餅の如き、異體は數を定めず（約文）

▲爰には皆異體と號く、又句去も或ひは面去などあれど、異體は悉く三句の字去也。但し三去の證句見當らぬ物は、已上の例を擧げおけども同じ理也。

拾　主討たれては香を殘す松　素英
松　●別れをせむる松明の數　そら
浪　此松の陰で涼まむ蟬の聲　路走
同　●松むしも鳴いて月夜の轡むし　祐子
桃盗　衣配り松の心も急がれて　秋の坊
同　●吸物は松もときとて柚の匂ひ　そ由
焦　松茸の齒朶に隱るゝ元栞　周東
同　●高砂の松葉を榾にかき入れて　銀杏

○

白たら　なせに柳はうごく川舟　八　從吾
柳　●けさくうた儘に調市が柳ごり　同
花摘　妻乞ひするか山犬の聲　五　翁
つま　●鍛冶が火殘す稻妻のかげ　り水
俳　●御明の消えて夜寒や轡むし　探志
くつわ　轡をすかす銅の鍔　六　同
同　●山傳ひいがの上野の年ふりて　正秀
上　小鳥飛びたつ袖垣の上　二　昌房

類　●月と見て漉紙傘捻帛紗　き角
はな　鼻落ちて顏の佳ひのさびしさよ　嵐雪
芭　●盤銅古き襦の捻口　宗瑞
口　●八幡の町も祭る水口　馬光
炭　春中へのぼる子をかはゆがる　桃りん
せ　●春戸へ廻らば山へゆく道　俗水
節文　●お傘も恥づる祇王が心入れ　り紅
傘　猫入れてやつた傘に西瓜やら　五　重平
一　●吉祥天女も是程の月　此梅　翁
天　●霞にもろき天竺のきぬ　信章
新百　●いつもの聲の皿や天目　支考
同　あやつりは節句を懸けてよい天氣　二　唐庭
むつ　晴嵐の花のこぼるゝ大津口　き風
大　はづんで聲を懸くる大文字　二　素秋

□越不レ嫌二留字一。

△り△る（なり、けり、たる、る、る、かはりても同じ）四段の活きくしひふむめの類（曾狀）

くしき、も、なりになる、れ、けりとけれ、むとらむ、むとう、らむとらめ。

△りる三並四越。（多例省）

階の九つ目より八つ目より　翁
　湯立の釜に置合せあり　信章

一此梅　り並
既に神にじり上らせ給ひけり　翁
　極樂でよき居所を頼みやり　諷竹
客うきたなう浮世へにけり　去來

砂　同
道もなき畑の岨の花ざかり　丈草
　白き親仁紅葉村に聟を送る　翁
漁の火影鯛を射る　其角

次句　る並
鰤は諫め鰻は胸を割かれける　才丸
　一何諷ふやら鼻聲でやる　淡水
別れ路の出張つた石に腰懸ける　桃先

茶　同
一藪いたちめが仰山に出る　桃後
　打明くる折敷に鯊の反りかへり　浪化
一這掛かる子にいかい目をむく　北枝

砥り四越
借屋から奉加の帳を付廻り　休紅
　袷洗うて貰ふたび笠　句空

三越はおびただし
そは〱として何もかも忘れたり　枝
　笑うてすます道なかの禮　牧童
物直ぎるうちより雨の晴上り　空
　恥しや湯女に泣かれて哀れなり　神叔
狂詩の體か捨人の月　嵐雪

句兄なりたりけり
露の音瓢たんの下からびたり　き角
　田に寢た鹿はぬれて美し　介我
心敬の夜話白々と明けにけり　叔

やへりる三三
一古き具足にかちん備ふる　林鴻
　月見るに傾城の色殘りけり　好春
四季を撰出に秋思ふなる　示右
　鶸籠の口押明けて押しだまり　一林
來る人なしと女蚤とる　春
　舟半分海士の隱居に仕切りけり　林
一手に〱膳を持つて立たるゝ　嵐竹

小文
る四越
三越は
多し
新百
く三
冬
き
菊露

ひつそりと夜半の月のさひ返り　史邦
堤の雁の先下りなる　山店
八朔の月代剃りに廻るらむ　竹
御門徒寺の角力潰るゝ　邦
秋蟬の煎つく樣になく時ぞ　店
すべつた馬を引起しける　下二段　竹
△きくしすひふちつむめ　四段活
ちさいびくにの鑓持につく　支考
立酒にあかぬ別れの泥鰌汁　反止
日は照りながら霰ばらつく　反朱
狸ではないか山路をゆく坊主　團友
林の中の家に火をたく　乙由
簔に鰶の魚をいたゞき　卜國
我が祈り明方の星孕むべく　か兮
けふは妹の眉書きにゆき　や水
幕の露岩屋の坊主打覗き　盤子
皆己が音を鳴きからすむし　乙州

き
し
行脚
同
百囀
の
虚栗
ふ
つくも
同

弓と矢をまたいたいげに躓き　珍碩
文は先づ三史文選寫出し　ろ通
座鋪押しやる晝の轉寢　游力
押へたる鼠を終に取りはづし　昌房
奴から挽茶に京をほのめかし　午潮
しらぬ顔して小手まりの花　吟堂
うまさうに臼の晒をこねかへし　蒲道
さら〱と茶漬の飯を喰仕まひ　支考
口上言うて返す若黨　同
氏神の花も盛りに咲揃ひ　同
時雨山崎傘をまふき　角
笹竹のどてらを藍に染めなして　翁
狩場の雲に若殿を戀ふ　角
節句の鐵漿に鏡かりあふ　闇指
嬲るとはしらで八百屋の立戻り　い吹
市の喧嘩の相人失ふ　山流
瘤がなければ女房取りもつ　翁

百囀

つ

むだ口に涼しい月の入りかゝり　考

あの榎から蚊柱がたつ　同

笈

む

かりもり時の瓜を漬けこむ　露川

三鉦の念佛にうつる秋の風　素覽

使をよせて門に彳む　考

射

下ニ女

朝々の曇りも果てず照りかため　蘭水

節句過ぎたる綠組のさた　河菱

彼の人が來れば屏風に身を縮め　東白

△狀言の、くしき、も

印

き並

鰤よぶ比も都しづけき　翁

長生は殊更君の恩深き　北枝

賤が袴は破るともなき　そら

拾

き

硯を探る月の小ぐらき　桐葉

氣はらしは何を思ひの窓の本　翁

まだ目の覺めぬ酒のらうたき　東藤

やへ

駕を留めて萩をる人床し　文石

まだ宿遠く入相をつく　同

し

時雨くる日は物まねの貰ひなし　示右

三日

も

二日でもねせさへすれば三日でも涼　ト

女房は只家の重寶　柳江

實ならば死なう〳〵といはずとも　林角

ふり

念佛上戸のねても覺めても　卷耳

白川ときくより白し槿垣　同

秋の行へをどう捜せども　ト

△なりとなる、けりとけれ、れ、むとらむ

俗

なり

なる

笊にかじかの聲いかすなり　翁

一葉して月に益なき川柳　等躬

日雇(ゆひ)に屋根ふく村ぞ秋なる　そら

ひさ

目の中重く見やり勝ちなる　野徑

けふも亦河原咄しをよく覺え　り東

顏のをかしき生付なり　泥士

桃白

けり

けれ

薄着して砧きくこそ苦しけれ　翁

網代の鮭を市の貪り　殘香

舟の形所によりてかはりけり　斜嶺

雪花
れ
射
其俗
らむ
む
やわむ
う
翁らむ
らめ

―勅衣をまとふ身こそ高けれ　桐葉
鍔添へて經つむ舟を送るかと　翁
―汐こす舟の隱れあらはれ　葉
爐塞の庭迄ひろく詠められ　乙双
昨日の物を又喰ひたがる　東白
馬士の涙こぼして立別れ　北枝
城下の田町やきりに望むらむ　月下
浴み歸りと見ゆる足輕　嵐雪
忽ちに首つながるゝ龜買はむ　桐雨
―瓜や茄の朝露を見む　致晝
緣取に醫者の遲いを待つてゐる　イ人
―茶ははんなりと美濃で御ざらう　秋の坊
梅嫌よくもいとこに似たるらむ・沾ホ
川澄切つて年魚もさびけり　りほ
鮹薬師何にもかにも祈るらめ　沾
△て留越不ㇾ嫌。（かに七迄）（古へは三去）
桃の木に蟬なく頃は外に寢て　翁

次句
春
けふ
風麥亭
百か仙
みかの

枕の清水香叢散くむ　楊水
夢い身を何と松魚に覺めかねて　き角
須磨寺に汗の帷子脱ぎかへて　重五
各涙笛をいたゞく　か兮
文王の林にけふも土釣りて　李風
燭臺のちひさき家に輝きて　翁
名主と地下と立分る判　猿雖
燒飯の割れても中の冷くて　望翠
鶴の夢薄の中にまどろみて　土芳
冬の案山子の弓を失ふ　半殘
庵のるす佛は石炭にふすぼりて　良品
月星も朧に日和かたまりて　柳船
理は有ながら主にかたれぬ　一葉
上手とは思へど醫者に氣がなうて　白柳
便乞の筏に春の袴着て　波文
貰うて懸けし革さやの鑓　虹棧
門先に嗜む松の有明けて　風文

て留は多用なる故に越を許されしと覺ゆ。歌仙に七所出でたるは、拾遺、三歌仙、春日、俳諧集、花つみ、俳表紙、別座敷、初蕉、其外例多し。

△に留　三去。（歌に五迄）（七部及多省）⊙

拾　長き夜を泣いたる眉の重たげに　越人
　　下心彌生千句の俳諧に　如行

長ら　ちり雲の中では月の足早に　琴風
　　山寺は晝も狸の折々に　七雨

續花　草の庵や今の若さに　才牛
　　居ふろを呼ばれし替女の莞尓に　同

桃盗　千鳥も立たず波も静かに　柳士
　　宮方の軍も尾花ちりぢりに　只草

△なり留。（歌に四迄）（七部及多省）⊙

けふ 此まき四　簳木は蒔かぬに生えて茂る也　翁
　　衣着て旅する心靜か也　同

翁 同　權のみある裡通也ろか
　　土器賣の利は僅か也沽ホ

山中 同　裸で居つてかしこまる也　昨なう
　　水のうねりの面白き也　凉卜

匂　酒の競ひに鹿をおふ也　許六
　　立廻つては座敷はく也　やは

三日　在所へゆけば遲いはず也　柳詞
　　鱸も店へ出たといふ也　流水

後櫻　晝障子にいつも花見の心也　猿之
　　念者そだちの子共達也　白鷗

そこ　陸奥殿のまねを身共はならぬ也　嵐青
　　お茶やの松に風さわぐ也　浪化

山かた　年よれば暮れての道は太義也　六之
　　京の咄しも久しぶり也　同

△けり留、ける留、たり留　三去。（歌に四迄）

やへ 此卷四　月見るに傾城の色殘りけり　示右
　　舟半分海士の隱居に仕切りけり　一林

同　右も左も茨さきけり　凡兆
　　皆白張の襖也けり　右

春にけり　笠白き太秦祭過ぎにけりや　水
鰭負うて大津の濱に入りにけり　旦かう

春と秋　手造の酒の辛みの付きにけり　そら
花の顔室の湊に泣かせけり　ろ通

あら　蒜くらふ香に遠放れけり　鼠彈
座敷ほどある蚊屋を釣りけり　一井

○

次匂ける㊀　武士の乃祭をあれにける　楊水
二　心の猫の月をそむける　き角

○

初辰たり　池のすぼんの甲の兀げたり　北枝
五　伏見の月の昔しめきたり　牧童

三去の例見當らねども、なり留、けり留の例を推見るに、たり、めり、れりも皆三去なる事明か也。

△らむ留　三去。（歌に四）

桃白　初月や先づ西窓をはづすらむ　翁
おのづから隣りの松を眺むらむ　斜嶺

一橋　東雲の石きる音を便るらむ　清風
ほの白き桔梗や美女の塚ならむ　言水

拾　ゆく翅幾度霜の惜からむ　素英
此島に乞食せよとや捨てつらむ　そら

古拾　四五りの程が露しぐるらむ　翁
竹戸棚あはの鳴戸や明けぬらむ　同

五　川淀の杭木や龍の傳ふらむ　似春
同　九　浦島や櫛箱明けて悔むらむ　同

歐仙六八此外なし　三　麥飯の卉や笑に霞むらむ　翁
三　股ぐらから金龍山や見えつらむ　春澄
五　賄を吹田の太郎作いかならむ　春
產出すを見苦し野とや思ふらむ　同

△るゝ留　三去。（歌に四）

ほたゆる牛も人にからるゝ　翁
拾　今の間に幾度しぐるゝ　い然
野越しの草の蛃にさゝるゝ　介我
むつ　牛田の灰の霜にこぼるゝ　き角

新百　薄べりとれば屛風倒るゝ　圃友
　道つた水の道に流るゝ　水甫
汐　養生深う杖で出らるゝ　一故
　春の別れをほろり泣かるゝ　柴友
冬梅　廻す小荷駄の馬に後るゝ　白里
（ヘ）二　月かげにあれし隣りの覗かるゝ　蘆元
長句の例多けれど省く。

△ず留、ぬ留　三去。（歌に三）　（ヘ）
三匹　さういうてめつたに岐阜も捨てられず　蘆本
　用心のわるい所に垣もせず　反朱
七さみ　かへる時節は雁も殘らず　凉ト
　紀の涼み貝もをられず　之仲
夏衣　今逢坂は駒も断はず　支考
　金ほしいとも常は思はず　同
三笑　窓にてる日の空も定めず　桃妖
　障子の光りねてもねられず　昨なう
あめこ　二　はすね天窓の髪もたばねず　之道
　懸けておく合羽の雫たりやまず　之道

○

住吉　戸棚の鎰はこしを放さぬ　竹端
さぬ　笠の上なる俤落さぬ　青流

△と、ぞ、や、か、さ、過去し、た留　三去。（ヘ）
砥　茶小紋に絹の十徳のすんかりと　去來
と　雨氣づく鉢の戻りのはら〳〵と　野童
白鳥　大磯か小磯に晩は泊らうと　夕市
同　板舟の動く拍子にくれ〳〵と　宇中

○

春　ひだるき事も旅の一つぞ　越人
ぞ　二　咲分けの菊にはをしき白露ぞ　同
百か仙　世の中の人の目がねは違はぬぞ　山鳳
同　四　いつか此口たゝき止まうぞ　道丸

○

夏衣　松原の東追手の面白や　慈竹
や　二　心もとなき醫者の若さや　同

逢 面白の遊女の秋の夜すがらや 翁
同 羽織に酒を替ふる櫻や 桐葉

○

百か ちよつとそこらの枕からうか 南枝
仙か 灸時分が過ぎて發るか 知元

○

菊 月影も寒く師走の夜の長さ 諷竹
蘗さ 餅ちぎる鍋のあたりの賑かさ 支考

○

一 菫が奥の簾を堀得し 清風
橋し 汲まぬ野井戸はけもの埋めし 同

○

八 子供のるすに物を忘れた 和竹
夕た 角はお寺に置いて來ました 何竺

△狀言のかし、なし、なき留 三去。

一 思ひにたらぬ涙もどかし 立志
橋 庵室紙帳つるもむつかし 風

春 春ゆく道の笠もむつかしや 水
連歌の元にあたるいそがし 冬文

○

浪 人まつ程に退屈はなし 先之
並ぶ中にも似た顔はなし 濫吹

壬 尾上を隔つ木魚はかなき 槐市
泣いてゐる子の顔のきたなき 梅額

△もなし、べし留 而去。(歟に三)

かも 火灶まくれば赤椀もなし 素後
槻の外は松杉もなし 正住

ふり 山科に車引やむ隙もなし 蒲右
拾うた文のやる方もなし 蕭巴

桃盜 行きあふ顔にいふ事もなし 是通
年寄といはるゝ上はせひもなし 晋吹
市に出ぬ日はこんにやくもなし 巴兮

越 吸物なんどする隙もなし 桃卮
番太には餅をかゝぬ烈父もなし 河菱

○

やへ　礫にをしのいもせさくべし　閭水
一八　如月や頓て遣出と呼ばるべし　景桃

△よ、を、な、頃留　而去。

虚栗　ばせをあるじの蝶たゝく見よき　角
八　鐵の弓取猛き世に出よ　同

鶴　我がのる駒に雨覆ひせより　下
九　命をかひの後とも見よき　風

梅十　鮭の料理に膳の遅さよ　梅光
唐様は人のよまぬが自慢かより　雪

三笑　を　堪忍をなされといはゞすむ事を　蓮二
九　死ぬ事を忘れて戀はせぬ物を　伯兎

鳥切　な　憂涙ともにそこらも立ちさうない　然
九　名殘ぞと思ふに雁は澤山な　芙雀

水仙　頃　のし上る譜代男の花の頃　兎白
十一　てる年の小鳥せはしき月の頃　同

△哉留　折去。（多例省）

續虚栗　長　川盡きてかじか流るゝ櫻かな　露沾
萬葉によまれし花の名所哉　虚谷

類　短　髮は昨日の中小姓かな　百り
亭主の胴をつくづくし哉　角

梅十　長短　飛びはせで杖つく梅の老木哉　二
旅行のうちはしらぬ春哉　七雨

一橋　長短　春ゆくに類思なる蛙かな　湖春
けふ迄銀にほださるゝかな　同

武藏　同　（へ）桂こく更科丸の最中哉　千春
四　釣にうかるゝ鳧千鳥哉　獨

十七　同　（へ）惡むより鶯に又芥子哉　露沾
六　茶の香をこぼす繩簾哉　筆

△つゝ、ながら、らし、こそ、なりけり留折去。

古拾　つゝ　磯馴衣おもく懸けつゝ　翁
尿ばゞにむつきも袖も絞りつゝ　信徳
たて　ウ　落ちたる髮を解揃へつゝ　そら

同　あら野の百合に泪懸けつゝ　嵐らん

○

なむ　面白う梢に月はてりながら　汶東

なから　酔覺の裸にたびをはきながら　陸夜

あら　爰を忘れ花におぼれぬ雁ならし　そ堂

らし　畏る諫めに涙こぼすらしや　水

三笑　踊より前の節季を越えてこそ　重葉

こそ　爰は袴も尤もにこそ　古賀

浪　千話もほされぬ口和也けり　昨なう

也けり　牛の背中のねよげ也けり　琴之

△短句のて留、に留か仙に二、百匂に三。

(古今四)古式には下の句の、に留て留も千句にも只一つとは何の故なるや、此外の辭にも留まる留まらぬせんさくあれど、公界に物をいふ人の留まらぬ事はいはぬはず也。

▲短句のに留て留は古式には一座一つなれども蕉門には一座の百匂に三つは許したり。都て一座ならば一つ、二座ならば二つと云ふ定めは、蕉門にはなき事也。蕉門には一座一つと云ふは、一巻の事なれば、何席かゝりて調べても一つ也又始めより二つ許さるゝ物は、折去とか百匂二とか許せり。又長句のて留は越を許すに、何故に短句とて制すべきや、左に擧ぐる例の中、信章、信徳、才丸、似春等は元古調より出で、翁に随喜せし人也。短句のて留二三もしてあしからば、先づ此人々諾ふまじ、諸風子よく／＼考へ給へ。

俳　嘸な　思のきづなゝころしして　信章

百匂　て　爰に道春是も是とて　同

連理の箸のかたしを持つて　信徳

武藏　梧桐の夕べ繻子を抱へて　似春

八聲の月に笠を揚げて　き角

同　遁世のよそに妻子覗いて　翁

次匂　ことし此秋京をねざめて　才丸

同　子丑のばんを寅に預けて　其角
見渡　前は畠に岑高うして　似春
一　股引脚半きそ始めして　翁
して三　たはけ狂ひの吉野軍に　同
に二　からくりの天下穏かにして　春
須磨　海の昔しはかくのごとくに　翁
一　寝巻の月はいとうくらきに　同
夢　想國師もいでや此世に　春
に　高麗迄も隣り歩行きに　同

此例によるに三句去と見ゆ。

鶴　あらのゝ牧の御召撰みに　角
同　あはびとる夜の仲も靜かに　仙化

（大鏡）（春日二座）（斷書の註）短句のて留に留は一座一つ也。此巻短句のに留二所ある故に、二座の斷わり書あり。鶴の歩みも二座なる故に、に留ありと云へり。

▲「春の日のは、その字の寫し誤り「鶴の歩は一座百句なる事、七部婆心錄に辯じたり。人皆古執を離れよ。

△體字留か仙に十六續き。

牡丹しべ　新屋根になじまぬ板の雨庇　桐葉
拾　二百違ひに馬の落札叩　端
たぶさひく後は小聲の男同士　翁
此か仙　涙に濁る池の人影　葉
辭留は　竹蜂の尖き月の夕嵐　端
六のみ　茶の實こぎゆく牛の嘗　翁
なり　年ふりて吾妻祭の關が原　葉
かちんのくゞり高き宿老　端
薄くらき簾にはさむ紙の屑　翁
硯のはらの合はぬひゝ筆　葉
くり〳〵と醒めたる酒の醉心　端
谷眞風をかつぐ眞下　翁
花ちりて近き見越の角櫓　葉
乙鳥の泥を落す肩衣　端
出代の腰に提げたる持草履　翁

晝の日あしに過ぐる風空　葉

△てには留か仙十五續き。

曉の影細々と引捨てゝ　北枝

薄紙一重あちらには誰ぞ　八紫

吸物はふたとる時にいざとこそ　秋の坊

冬のきげむの空にちら／＼　萬子

ウ

鐘樓から見れば目利の違ひけり　紫

早お歸りか信樂を資る　枝

鼻よりもしはい所が親に似て　子

三世相にもあはぬ戀する　坊

浮名をば紀の神もどちへやら　枝

鴉は霜に夜起きてなく　紫

貧乏の細工の工夫とやかくと　坊

子供が靡硯いてはゆく　子

松の木の二本あるとて町の名も　紫

死んだともいふ逃げたともいふ　枝

弓張の闇と月とを振分けに　子

十句已下續きたる例に夥し。此二例を見て句脇假名留の時は、第三字留にすと云ふ癖論を止めよ。

□折合辭。

昔しより折合辭と云うて嫌ふは「第三の留と四句目の中「五句目の留と六目の中「七目の留と八目の中、表の内ばかり長より短へは折合ふとて、同辭を嫌へり。脇の中より第三の留といふ樣に、短より長へは嫌はず、そは本式の懷紙は、二行書に認むる故に、同辭並びて見渡あしと、表だけを憚る事、古今通式也。裡已下には論なし。按ずるに常の一行書の時は、表も許せるが例あり。

「短さまして秋の日の影」
短より長へはよし「月よりも行野の末に馬冷えて」

「お腹とる尼に砧をとめられて」
長より短へはあし「正宗ぢやとてなめてをさむる」

△短より長へは不ㇾ嫌例。（多省）

花故　ワキ　短さまして秋の日の影　一泉

月よりも行野の末に馬冷えて　左化

△表に折合を許したる例。

類　第三　お腹（あんま）とる尼に砧をとめられて　き角

て　正宗ぢやとてなめて納むる　嵐雪

○

壬　同　陽炎の消様見たる夕かげに　百歳

に　指ざす方に月ひづむ也　村皷

越　同　木枕にそばだつ頬の冷かに　岳亭

長押の鑓に武士を忘れず　風乙

此等（これら）は本式（ほんしき）ならぬ故に苦しからずと覺ゆ。

△裡巳下折合不ㇾ嫌例。

寒きく　押詰る師走の口を喰ひかねて　翁

て　尾に尾を付けて咄す主筋や　は

印　ニオ　響き來る木魚に心角折れて　翁

同　目がねして見て澄渡る月　觀生

拾　ノオ　苔生ひし佛の膝を枕して　そら

同　夢と思うて覺めかぬる夢　夕菊

同　同　引切りし桐の枕も手児にて　丈草

同　灶物たきて雪になす空　支考

けふ　ウ　焼飯を割りても中の冷くて　望翠

同　思ひ屈して出でぬくらがり　土芳

○

あら　ノオ　日の出でやけふは何せむ暖かに　舟泉

に　心安げに土もらふ也　き洞

句兄　同　氣色迄曹洞宗の寒がりに　桃りん

同　焦す疊にいたく手をやく　彫棠

○

賁　柴垣に古き都は荒増り　翁

り　よみもよみたり椎の黑石　嵐雪

○

砥　同　茶小紋に絽の十德のすんかりと　去來

と　手舟さつさと秋は來にけり　草

秋日ノオ　懐に脇指さして又出づる　胡及
る　下戸を憎める雪の夜の亭か　兮
茶　同ノウ　あの家は早う新酒を絞らるゝ　以之
　同　馬繋いだる門の竹垣　蘆雁
雪丸　ウ　炷物の香を曉とかこちける　そら
同　爪紅うつる双六の石　川水

○

柱　同　未止まぬ雪の戸明けて恐れたる　苔翠
たる　さし殘したる曲舞の章　夕菊

□同字付句不ㇾ嫌。

蕉門(せうもん)には前句(ぜんく)の意(こゝろ)を見かへて付句する故に、いかなる字も付句を嫌はず。但し月花は數に限りあれば付けられず。其餘は同字をよく付くるを手柄(てがら)とする也。

汐　一代に又とあるまいこんな事　井炊
ある　御大名にも色々がある　柴友

汐　垣はかはれど爰も卯の花　里洞
かはり　些斗(ちとばかり)ふらせて見たい節かはり　白庭
みかの　三日月のかげ有りながら埋れ池　管月
ながら　むし捨てにたつ扇ながらも　春路
翁　爰らしげにも這廻る兒ろか
廻　勸めとて直に院家の廻らるゝ　りほ
雪丸　瓜畑いざよふ空に月を見て　そら
はた　里を向ふに桑の畑道　川水

六の卷疊語(たゝみことば)の部(ぶ)にも例あれば、爰に略(りやく)す。

□多用の辭續不ㇾ限。

恥かしの跡を閉づる草の戸　芳重
さく日より車かぞふる花の陰　り下
鶴　橋は小雨のもゆる陽炎　仙化
る八續き　殘る雪殘る案山子の珍らしく　朱絃
靜かに醉うて蝶をとる歌　擧白
殿守が眠たがりつる朝朗　ちり

兀げたる眉を隠すきぬぐ〵　翁
けし咲いて哀に見ゆる宿なれや　き　風

此外「てにをはのとも等の多用の辭は、續き限りなし。下に擧ぐる續き越不レ嫌例の中にもあり。

△三四越並不レ嫌辭。

△てにをはのとも る　(△三並の印)

——○——●——
——▲——
——○——●——　己上の字類如此、
——▲——　上中下並びに三四
——○——　五越歌仙に一所、
——△——　百句に字かはりて
——○——●——　二三所は例あり。

二つ並べ越しは長き巻には同字も數所あり。

(古今二)腰のて腰のにといふ事は、七々の低句に限りて高句の中間には其咎めなし。或ひは「見れば、きけばのごとき、はを濁る詞より、押へ字も(とはの類)抱へ字も(なにの類)凡て付句を去るべき也。されど打越に付くる時は五もじか七もじか、同拍子に

は用ひず。畢のぬは増して、不のぬとても、惣じて辭の指合は吟聲に語路あしき故也(約文)

▲爰にいふ「てにをはとばずぬの類、皆越並も付句も嫌はざる事、下にひく支考訣きの例にても明か也。古今抄には「婆々に婆々の付の自證をさへ引きたるに、辭のばの字を嫌ふとは、いかなる思惑にや。

二つして笠する烏夕ぐれて　桐葉
かへさに袖をもれし名所記　叩端
住馴れて月まつ程の浦傳ひ　渓言
夫とばかりの秋の風音　自笑
捨てかねて妻よぶ鹿に耳塞ざ　如風

衛　上て

淨るりよくて幕を通さず　介我
月雪に寸切はやす寮住ひ　嵐雪
圓栗枯れて遊山絶えけり　神叔
二三俵引抜そばの頼もしき　我
馬に聞かれて逊ぐる盗人　き角

句兒　中て
三越は多し

大音の川幅越える向ふ風　神叔
一木屋焚いて仕まふ杣方　嵐雪

○

椎の木に通ひ馴れたる角田川　叔
逢はさぬ戀か母を誓文　沾州
錦木にそよろといはず立ゑぼし　景帘
横の袖からたばこ盆ひく　桑露
朝顔に障子を立てし子の忌日　叔
紙魚を拂へと渡る初雁　其角
夕月に親しむ氣味で袴とる　心水
かるたも打たず君が寢ぬ色　州
鬢付に半分借りし大鏡　帘
何處で落して此笛のさや　園友
船頭に合點をさせて石清水　露
見事な石をいるゝ壺笠　水
辛い香にむせ返りたる荒布屋　州
一諏訪の落湯に洗ふ馬の脊　史邦

（頭注）皮　上に七こし　四五越は多し

辨當の菜を只おく石の上　半落
譯しき色に咲ける撫子　嵐蘭
四つ折のふとんに君が丸くねて　翁
物かぐ中につらき足音　岱水
月暮れて雨の降りやむ星明り　邦史
一早せの俵にほめく刈豆　翁
切麥をはや朝かげに打立てゝ　凉葉
幸手をゆけば栗橋の關　翁
松杉を挾み揃ふる寺の門　そら
一むりに望みを懸けし師の坊　同
岑の供花の岩屋もつらからめ　路通
上る小あゆをくまむ谷川　友五
若き身の隱居と成りて日は永し　苔翠
一顏のほくろを悔む乙の子　通

○

一保元はあれど平治は只二卷　伯兎

（頭注）さる廻　中に　桃白　上を　拾　中を

●印を入れたるは、同辭續(どうじ)きたる所也。

□東山墨 上は

行水のぞく壁と成りぬる　松宇
神鳴は光るばかりに篠の風　秋幽
此山伏をしらぬ物なし　左明
龍宮はいつも月夜の白妙に　過角
―菊いたゞきは松の小虱　山蜂
杜・巾私雨に月出でゝ　一雀
京の簾は揚弓になる　き角
誰れかある帯の椽に九寸五分　蜂
―四目中手は舟の乗合　大町

焦 中は

三尺の鯉に小あゆに料理の間　き角
はや傘好を惜む此年　才丸
幾処の戦夢と覺めやらず　こ齋
逝く水闇を捨てぬ物かは　そ堂
白鳥の祇部湯立の十五日　清風
夫酔醒の慰にくさめして　翁
鑓の進みかねたる黄昏に　嵐雪
―梅津桂の竹の子の雲　支考

根本百句 上の
此まき上の四越今一あり

□東花八表中の短句皆の也

六十の賀をあやかりに椽さげて　正秀
夫は是はの狂歌様々　野童
窓明けて月を落せば野の様に　風國
鶉の聲の江を隔てたる　野明
飢さを知らでや秋を好むらむ　泥足
―風に一葉の身こそ安けれ　爲有

○

□梅十中と

―よめる様にと狀の誂へ　蓮二
市のない日は店先の静かにて　有琴
さあ只今とふるゝ寒ごり　七雨
お飛脚といへば何所でも油断せず　羽稲
―舟をたゝくと鷺の立ちゆく　梅光

○

□三笑中も

―西に地獄も極樂もある　昨なう
寒聲に月も更けぬる浪花橋　琴之
隨分人も物は落さぬ　二
昔から親仁を譽むる子はなくて　古賀

文月上も　「いせへは誰れも參るはず也　播東
正月も御ざり懸つて此寒さ　り紅
孫になぐさむ老の懷　嵐枝
入相も隣りに花の旦那寺　柳こ
蓮に杵のどこもさし合　き的
出代も鼠とらずの笑好　枝
大工のいびきまたぐくらがり　紅
湯桶も置いた所はもりもせず　的

○

既望下る　胸むしに復起さるゝ秋の風　俗水
春に赤子をゆする小坊主　史邦
花守の家と見えたる土堤の下　牛落
細き井溝を上る鯖あゆ　翁
春風に太鼓聞ゆる旅芝居　嵐蘭
|闇の夜渡る西楪の聲　去來
やへ　訛らずに物いふ月の都人　景桃
秋に突折るむしくひの杖　乙州

中る　實入よき岡べのわせ田赤らみて　史邦
里近うなる馬の足跡　支哉
押割つて犬にくれけりあぶり餅　示右
|奉加に出づる僧の首途　翁

△打越並不レ嫌辭。（○ハ並ノ印）

○す、ふ、ず、ぬ、ば、過去のし、へ、たる、ても、にも（四段）

桃白中す　|竹の子あらす猪の道　翁
雪ならばそりにのるべき花の山　凉葉
|春風さらす谷の細布　濁子

たぞ下す　榎から序におろす樅の枝　雨青
日に何里程雲にとぶ雁　山りん
月よりも國土をてらす殿の恩　夏山
|豆腐仕廻ふ宵過ぎい東風　翁

未來中ふ　酒さます杖にかぼそき禿ども　嵐雪
|はげやと貰ふ老の紅裡　き角

○

さる　二番草取りも果さずほに出て　去來

下ず
｜灰打ちたゝくうるめ一枚　凡兆
｜此筋は銀も見知らず不自由さよ　翁

○

俳
中ぬお
｜刻みもはてぬ佛垢づく　荻子
｜初花の垣に古竹結渡し　い然
｜道はかどらぬ月の朧さ　元代

越□
同
｜狐はつらぬ物ときく也　仙雅
｜國々を我れ見歩行きて野も山も　管小
｜火燵はなれぬ俳諧の時　不柳

○

｜參つて見たれば寺にゐぬ也　白狂

山□かた
中ば
｜碓に日雁は雪踏脱揃へ　東羽
｜若代になれば質も氣遣　野航
｜重箱に何やらけふは配り合ひ　狂
｜旅に遊べば氣もまめになる　羽

白□たら
中ば
｜歸ろとすれば羽おりとらるゝ　牧童
｜よの中の理窟が否で花の奥　雨青

｜猿でなくんば呼子鳥也　支考

三□日
中れば
｜出て眺むれば稻の刈しほ　林角
｜鶯の羽も山より暮れて水の月　考
｜三日ゐたれば里の肌寒　芝船

風麥亭
上れは
｜着替ふれば染物くさき單物　翁
｜奥の座敷へ膳居うる也　半殘
｜花あればむさき家にも止められ　土芳

○

｜田面にむれし鷺の羽をのす　知足

拾
中し過
｜お乳添て若うに物や言ひぬらむ　如風
｜思ひ殘しゝ遠の國がへ　自笑
｜いつの日か障子に張りし八歩帳　牧童

卯辰
下し
｜額もぬかず角入れてより　乙州
｜唐の芋料(はかり)まとひし夕まぐれ　北枝

○

やわ□
中へ
｜かゝの在所へいては逗留　宇中
｜七日ある彼岸の花もけふばかり　考

｜餘程柳へ乙鳥の來る　致畫

○

鳥□下たる
哀さを溜めて書いたる文の來る　ろ通
あくたもくたのせまる物前　知足
何所となう取弘げたる中屋敷　同

新□百　同
門外に笠を脱いだる天龍寺　團友
死なれた人の狀の名をよむ　乙由
帷子もひねに成つたる八九月　支考

一□橋中たる
｜陸に朽ちたる帆柱の折　淸風
十二年先の丁(ひよみ)を指ふせて　仙庵
｜〆出されたる吉原の里　風

○

白□扇中ても
｜いつ覗いても明けてゐる寺　東園
乞食の心に盃も過行きて　詞端
｜人に問うてもさびしがる月　嵐青

○

軍にも連歌をせねばならぬげな　見龍

山□琴上にも
偖年號もかはるものかな　見龍
山家にも町といふのがあればこそ　巴分

其理(そのり)推してしるければ、何(いづ)れも多例を擧げず。
△越並あるは三越不ㇾ嫌辭。
のノが、疑ノか、異なる疑(なに、いか、いかゞ、なぞ、たれ、いつ、いづこ、いく)とかはり。や、異同とも、傍に、疑歎圈の印あり。

ふ□り
｜仕樣がようて餅も格別　蒲道
黑谷の隣りに白きけし畑　闇鹿

が(のノ)
誰が來たやら戶が明いてゐる　素冠
むりばかりいはれて君は後向き　道
｜其誓文がいる場ではなし　涼卜

い□せ　同
所化寮の下冷が先づ悟られず　李江
茶筌にひゃく宇治の川音　闘石
夢でゐる鶴の立場に夜が明けて　甫畝
大名おりの髻は重たい　加濃
衣張の手元に琴の曲が出る　珍舍

雪□白
｜お侍が亭主さうなる仕廻た屋　以之

上並がの

―朝寝といふも大體の事　左把

甃舟が着いてもふらぬ花の中　麥士

梅十異が

―耳も遠いが目も疎うなる　呂杯

粟物を舟に舁きこむ暮の月　梅光

―殿も踊が好きで京から　り紅

○

拾か

曇るかと思へば果は風になり　東藤

筆一本に花の一時　翁

誰れかしる桃源洞の芳しさ　工山

三笑同

―談義の鐘がどちら半尺　琴之

青鷺も見えず青田の葉の戰ぎ　桃妖

―雪隠かとて麁相千萬　蓮二

笠同

―飯はないかと捜す膳棚　广三

名月の池を盗みに網提げて　紅

―化かしはせぬかそばの白花　達支

焦同並

―泄痢（さはら）といふか松の下臥　虎等

樓門の莚とぐるゝ惣清め　き角

―目安作がしのぶ北山　辨外

○

拾いかいつで

基いかでうき身の情けなき　翁

藍たくましき筒の鷄頭　嵐雪

いつとても兩部の護摩の片燃に　角

春いかなにに

―曉いかに車ゆく筋　か兮

鱈負うて大津の濱に入りにけり　旦かう

―何やらきかむ我國の聲　越人

俗イや

風流の始めや奥の田植歌　翁

いちごを折りて我が設け草　等躬

水せきてひるねの夢や直すらむ　そら

夕顔同並

―庚まつにや申をまつにや　宰陀

出くすみの君は襖の内よりも　圓入

―賴む使や備中がるす　維明

類同や三續

―繋がぬ舟や悋氣仕給へ　紫紅

臺にたつ物の哀れや八代罌丸　き角

梟に袈裟や御隱居の顏　同

あら　同並
遠淺や浪にしめさす蜊取　き洞
　春の舟間に酒のなき里　か兮
長閑けしや早き泊に荷を解いて　昌碧

あめこ　同並
筑前や九十九兀の其一人　之道（獨）
　己がちんばをいはぬ針立
灯火や月も出かゝる舅入

金龍　同
―三とせの松のみきや細ると　曉梧
卯月より和漢の文の土用干　里川
同
「席餘りやら尻も居わらず　五夕
同
淋しくも人や見るらむ刀持　其角
　後るゝ徒士はかつぐ袖笠　彫棠

句兄
棧造所はしがの浦なれや　肅山
い・
　鐘も只なれ老の彌名　角
夜の人見ばや此野に隠れ住み　棠

東花　同
麥からの笛や布袋の夕涼み　露川
　臍を氣遣ふ六月の雲　支考
秋しのや外山を淀の舟に見て　捨石

秋風もたつや梢に雲の色
　簾を捲いて亭の月かげ
（直し）松むしや轡も鈴もなくからに
　なくからに鈴も轡も松むしも

（古今五）發句に疑ひのや有りて、第三に口合のやもじは遠慮すべし。爰をもて轉倒したり（約文）

▲此やは疑ひならず。指歎き也。同體のやも越嫌はぬ故に、東花集にも付たり。此の第三の先案平句なるを直さむと、打越に仔細をいひ、特倒して節を付たる、自讃をいへるのみ也。指合ならぬ故に遠慮と言うたれど、無用の詞に義を持たせて人惑はせなり。爰は「同體のやもじに打越の嫌ひはなけれど、しか言うては平句なる故に浮きたるやもじをぬき、顛倒して節を付たりと云ふ所なれど、支考の一癖着方なし。

△上下にかはり越不ㇾ嫌辭。

で、ど、よ、ぞ、む、らむ、しくしき、けり、

なり、るゝ、なら、やら、から、より、うち。

炭　で

雪升でなくばと自慢こきちらし　沾圃
隣りへ行つて火を取つて來る　子さん
又けさも佛の飯で埒を明け　り牛
亭主の連を顔であしらふ　麥士

歌　同

一昨日も笈の榎に鐘を聞き　風草
念佛でけす市の誓文　巴靜

山かた　同

近江でも替はれば涼し青疊　右範
三十年のたびに木枕　六之
土器で祭るなおれにや茶碗酒　白狂

○

同　ど

山家とはいへど十里を見晴して　栗几
具足飾らぬ迄の式臺　狂
くるゝ事知らねば金は溜れども　東羽

歌　同

若けれど倶にかゞみて木棉取　東棠
小鷹の殿は惚るゝ道理や　茂秋
八朔に遊び足らねど月はなし　乙由

○

三日　よ

あのけしき見よ雪の假橋　支考
五六本田中の松のあつちこち　井炊
おれは狐に化されたかよ　除風

○

汐　ぞ

時宜ではないぞ何も否々　林角
度々に網を下して磯せゝり　里洞
こゝらの家の幾つ有らうぞ　白庭

とて　そ

花もちるぞよ負けてさへ否　之白
雲雀とん雀ちう／＼蝶しろり　鬼貫
いか樣是は春ぞめでたや　筆

○

春と秋　む

斝の利發を町に弘めむ　嗒山
手造りの酒の辛みも付きにけり　そら
月も今宵と見む馬の市　翁

拾

誰れか便らむ碑の銘の露　雨桐
若生を朽木の花に植添へて　そら

らむ
春の遊びに母衣かゝるらむ　路通

あつみ　む　らむ
初霜はよしなき岩を化粧ふらむ　翁
　夷の衣をぬひ〳〵ぞなく　そら
明日しめむ雁を俵に生置きて　不玉

みの　同
判官のゑぼしほしとや思ふらむ　土芳
　木ばたあたりの雪の夕ぐれ　風麥
賣庵を見せむと人の導きて　翁

八夕　むと
兀殿を張返さむと梓弓　イ人
　駒も向ふの明神の前　乃露
夕暮に牛房ひくらむと眺れば　蓮二

○

奥　しく
東風渡る琉球表新しく　支考
　切違へたる小田の水音　呂丸
淺ましく馬の脊かぬる木津の舟　不撤

あら　しき
空蟬のかげの惱みの恐しき　其角
　後なかりける金二萬兩　越人
いと惜き子を他人とも号けたり　同

桃實　同
帷子に風も涼しき中小姓　洒堂
　明日御返事を黄昏の文　其角
美しき聲の匂ひを似せて見る　兀峰

雪光　同
さびしき時は内で小細工　智貞
有明の御出で遲しと一葉ちる　呂什
いよの便りのひしと戀しき　百花

○

たこ　也
る灯は月をくゞりしごとく也　梢風
　僧の髭そる盆の夕ぐれ　之還
女郎花媚く也と踏敷きて　翁

白たら　也
一度ある事二度もある也　支考
春は花秋は紅葉とかはれども　從吾
あかぬ物には豆腐也けり　北枝

○

深　るゝ
乘物で和尙は禮にあるかるゝ　洒堂
　立込めてある道の大日　翁
楾揚げて水田もくるゝ人の聲　岱水

東山墨　同

ーをばのゐらるゝ內ばかりこそ　梧雲
　前垂は似合うて髮の美しさ　大川
ー薹の匂ひの時雨待たるゝ　子靖

ふり　同

ー竹に生るゝ鳥の囀　涼ト
　取立つる江湖は春の半ばより　竹遊
ーかゝる時にも三日ねらるゝ　同

○

春の鹿　なら

ー炎へ若衆が一人來たなら　嘯風
　みそ擂て見せうと言うて小摺鉢　鷗少
ー否ならばおけ降りたくば雪　國推

○

鎌　やら

何にきく物やらしらず湯治好　千梅
　松の嵐を中腰に受け　千那
月のくれ鷄目とやらで哀れ也　同

百か仙　から

ー獨り遊びを三つからする　市中
　ずんぶりと月の出る迄花見衆　潮風
ー春になるから米の買置　軒滴

百か仙　から

夜へ殘す昨日けふから月の弓　萬友
　又新しき秋の帷子　李青
俗から盆の茄を打明けて　天垂

山かた　同

上る火の後から消えるたばこ盆　野航
　ふしんはもはや疊しく迄　六之
隣りから呼次にする蕣の花　蓮二

梅十　同

忘れたる窓から秋を覺え初め　り雪
　たらいでいはす童の髮　桃川
あちらから使と文と行違ひ　り紅

○

汐　より

入相にふらりと月の木の間より　白庭
　荻の扉を見れば見違　嵐海
蛬細う鳴くよりやめてをれ　兎好

○

冬　うち

旅衣笛に落花をうち拂ひ　雨笠
　のりもの許す木瓜の山間　や水
骨を見て坐ろに涙うちかへり　翁

汐
うち

うち霞む窓を明くれば清閑寺　一故
今の嵐に傘が飛ぶ　井炊
忽ちに鬼にならうとうち恨み　涼ト

□體言用言惣論

（古今四）（日用ノ條）凡そ態藝の字類より、虛押復用の輕き詞は、假令古式に一二といふとも、折を替へては、四つと定むべく、其の外の詞字は面をかへては、八つと定むべく、七句といひ五句といひ、三句の字去は論に及ばず。增して折をかへ面をさらば、三句も二句に許すべき也。

▲此段は一理萬通の例にて、折去より面去、五去、三去等の輕重を分別すべく、殊に三去の物も面を隔てゝは二去にも許せよとぞ。凡て體用の字類には、細かなる定めなければ、多例に據るべき也。

△三去用言活かはり越不嫌。

白たら
きこゆ
きゝ

縁に出てゐれや鐘が聞ゆる　支考
將木さす傍に銚子と盃と　従吾
使はまだか聞いて下され　北枝

別
かゝり
かけ

綿弓提げて春も旅懸　そ舟
十五日節が過ぐればひつそりと　太大
手に〳〵鍬の先懸にやる　李里

麥
同

戀の巣を連に隱せば呼懸けて　麥林
日もしたゝるう看板の伊達　巳覽
暮懸かる榷に馬をつなぎ捨て　岸虎

其俗
くる
き

百谷の雪崩れ來る筑摩川　り下
芽も立ちあへず大割の材　氷花
花に來て牛も涎を流す也　嵐雪

ひさ
で
た

馴加減復とは出來じひしほみそ　か兮
何ともせぬに落つる釣棚　越人
忍ぶ夜のをかしう成りて笑出す　兮

星月
同

薄着に出かけつらす乘物　山戸
月受のかはる新地のわら庇　記之

―蔦より顔を出す梟　東鄰

白たら
さし
さい

左すまゐに旭さしこむ　野棠
鍐くるゝ江戸の息子を待ち心　巴兮
目藥さいて茶呑友達　秋の坊

小弓
きり
きれ

―月匹切めて川がしぐるゝ　如行
鶯のゐる榎は丁ど花盛り　東鶯
―糸のきれたる凧吹かれゆく　鼠彈

笈
ひろき
ひろけ

―ゐろり塞げば弘きすまゐや　落梧
花にゆく顔知る人も尋ねより　蕉笠
―雛の調度を取弘げたり　一髮

桃
立
體用

―赤い頭巾は市の目にたつ　雪
吹矢筒提げて非番の茶道衆　達支
―雲は粟津へそるゝ夕立り　紅

冬
打
は

道終美濃で打ちける碁を忘る　翁
ねざめ〳〵のさても七十　卜國
奉加めす御堂に黄金打荷ひ　重五

□二去用言

見、居(ゐ)、―(なり)、取、付、爲(する)、有、がり、無、成、出、入、來、置、立(て)、―(ち)、打(ち)、當、合、知、善(よし)、懸(け)、―(く)、

住吉
見

印見分けて返す茶筵　翁
名號をよう見せたとて樽肴　洒堂

行脚　同

蕇蘘をふけば花見の唐めきて　蒲道
一度通つて見たきいが越　涼卜

ふり　同

見澄して佐渡へはたつた一日和　竹遊
とぶと見たれば夢は覺めけり　同

冬梅　同

芝居見に咄しも月の氣養生　貞旭
見知つた猫の緣に聞耳　蘭覓

○

梅十
ゐ

活きてゐる樣な肴に月のかげ　泊楓
舟のせん茶に水はゐながら　有琴

山かた　同

曇つてゐても厄空のうち　栗儿
雪隱にゐるとは誰もしらなんだ　六之

山カタ　臺所は折ふし猫もをらぬ也　東羽
をる　觸狀持つて待つてをるげな　栗ル
ふり　いやはやと申してろくになりはぐれ　凉ト
誰れが來たやら戶が明いてをる　素冠
同　かへにゃる茶漬は何をしてをるぞ　同

○

續さる　狀箱を駿河の飛脚受取つて　沾ほ
取　伊駒氣遣ふ棉取の雨　同
同　赤らむ蓼を先づ刈つてとる　りは
同　錢借りてまだ取付かぬ小商　同
けふ　焚きさして柴取りにゆく庭の花　士芳
同　日なたく\に虱取りあふ　苔蘇
桃　まだ若い馬の心を取りかねて　乃露
同　前髪取つた秋はすゞしい　乙甫

○

一幅　馬に西瓜を付けてゆく也　葛森
付　吹付けて雨はぬけたる未申　同

其日　陰間つけこむ山の所化寮　山只
付　頓てあく土用を蟬の煎付けて　杜吾
七さみ　洟をかむ時はゑぼしに氣を付て　之仲
同　芙蓉の花のさくにつけても　貝紫

○

銜　色艶もつけぬ浮世の樂をする　路通
する　きぬよき顏に薄化粧する　同
誰　む月晦日のいもひする家　才丸
同　祈りする祭りの中を押され出で　同
雪の布袋の薄化粧する　嵐雪
さる廻　からく\するに足駄をかしき　史邦
同　する程の商事にすれわたり　種文

○

續寒　書付けてある釜の稽古日　やは
有　あの花のちらぬ工夫があるならば　翁
類　二枚ある歯の年寒き松　楓子
同　腰をうつ子程の寶あるべきか　專吟

やわ　同　七日ある彼岸の花もけふばかり　支考
鐘ながらに寢てゐるもあり　き邑

○

桃　下坂は驚に眠りをあぶながり　嵐枝
がり　ひよんな御ふれに盃さびしがる　柳鼓
山かた　細工に書いた繪をさびしがる　東羽
同　隱居には芋ほしがりて月の朝　馬岐

○　㋬

小文　丹波から使もなくてなく烏　翁
無　神鳴のひつかりとしてさたもなき　而
消ゆる身の三途ひくも我に成て　き角
雜　成　子は杖になる老の小便　同
船頭に素人筆は害になる　五粒
むつ　同　へぎて並べるなまこ輪になる　同
一歩崩してならぬ物前　り雪
梅十　同　名月の盗みは科にならぬげな　泊楓

○　㋬

ひな　在所から牛道出れば花咲いて　り牛
出　汐干に出てもをしむ精進日　翁
小文　灘の吹出のかゆき南氣　山店
同　雪に出て土器賣を追ひちらし　翁
ふり　しる人は皆出代りてゆく　枝三
同　又一人妾の腹に出來るげな　加友

○　㋬

雜　鹿料乘りこむ堀の入汐　き角
入　何代の出入家敷をひいきする　尺草
麥　小僧は肥えて戻るやぶ入　蓮二
同　嫁入の花を見たがり折りたがり　巳覽

○　㋬

難　築地を嗅いで來たる一季居　佳六
來　折々に妾の親は消えに來て　知角

○

土芳亭　運ばする道具そこ／＼置直し　土芳
置　置いて廻りしいせの御祓　同

梅十　くはねど盛つて置きし祝ひ日　蓮二

同　行水の時雪隱も見て置いて　り紅

なむ　なら茶はおけと脊る六はら　汝東

同　月夜をば暮めて置いたる長堤　過角

○　㋬

句　門口に化粧ひ立てたる宿の者　り由

たて　三引飯のさん用立つる男部屋　許六

冬梅　長い噺しの出ぬ先にたつ　白里

たち　鷄よりは鐘に旅立誂へて　蘆元

百か仙　閑忠のそこを立たれず居られず　素三

同　江湖の僧の連立つてゆく　同

○

鵜　有明になし打るぼし着たりける　翁

打　後すむ女砧打ち〳〵　き角

其俗　棟ふるしぐれ竹笠をうつ　嵐雪

同　懸聲も不首々々の鼓打　立吟

むつ　先様の當名忘るゝ狀使　不誠

當こちから先へ突當てた舟　不碩

○

六行　御藏米野髮の馬のせり合うて　壺天

合ひ　貰へば戻す借屋付合　やは

寄合うて庫裡は淋しき夕彼岸　童平

笠　同　渡し込みあふあやつりの杲　そ琢

○　㋬

三笑　ばゞにならねば皆しらぬ也　桃妖

知　物知りは物見てくらす春の雨　琴之

百か仙　猫又になるかしらねど惡がりて　天垂

同　戀知りなれば今の仕合　宇桂

○

同　なら柿の名のよさに復皮をむく　垂

よし　念佛がようて寺に奉公　萬鶴

汐　よく廻る坊主天窓を振廻し　涼ト

同　丹波でもよし但馬でもよし　乙由

○

汐　―ふしぎの緣にお腰懸けられ　柳詞
かけ　小便に片手懸けたる緣柱　柴友
笠　―煙塞や壁に懸けたる唐團扇　箕由
射　同　―阿房はこしを懸けて長喰　達支
かゝり　―門外の柳は霜にちりかゝり　乙双
ちら〳〵と雪に夕日の照掛かり　周以
つくも　―小便の達谷越にさしかゝり　山流
同　―不拍子な風から舟の夜にかゝり　虛白
△五去、而去の用言、活かはり二去。
二去の例見當らぬ物は三去をあぐれど同じ事也。
巳　―ひさごの札を付渡しけり　翁
わたし―り　安々と矢洲の河原の步渡り　同
たて　―客呼んで汐干ながらのいか鱠　同
よび よばる　―行歸り迷ひ子呼はる星月夜　嵐らん
桃白　―ゑぼし冠れば兀もかくるゝ　翁
かくれ―す　道祖の祉月を見隱す　濁子
山中　鹿の音にうつら〳〵と打持れ　長緒

もたれ―せ　朧の清水季を持たせたり　乙由
浪　―裝束のまゝで寄りたる芝居過ぎ　左白
より よせ　―ともによせ來る御祓の宿　盧錐
冬　―野菊迄尋ぬる蝶の羽をれて　重五
をれ をり　―桃花を手をる貞德の富　正平
三日　―三日月の除りに迺て折れやせむ　支考
同　―茶ぐわしにちよつと柴の爪折　除風
越　―我旅は狐を馬にのせかねて　老
のせ のり　―乘物の簾に近き巷柳　雨
句兄　―日に立たぬつまり肴を引替へて　き角
かへ かはり　―出代過ぎて秋ぞせはしき　銀杏
句師　田中の道の通りくれゆく　依々
とほり―す　露の糸錦を通す梭の音　風泉
皮　―欠落猫に猫のまを出す　午寂
おち おとす　―眉を落して腫まぶた也　景帘
十六夜　―はしぐ〳〵は古き都のあれ殘り　柴栞
のこり―す　かたはなる子は哀れさに捨殘し　路通

砥　─すがゞきの同じ手かへす秋の暮　牧童
カヘス─ル　─互返る兵具の葛籠しめからげ　北枝

□二去體言

此、物、高、小、先(さき)、中(うち)、內、折、笑(音訓)古(同)

拾　此　─此あたり何をしるべに住ひせむ　叩端
此　─此髮そらむ事の安さよ　翁
う陀　同　─此度は母の願ひの身延山　許六
同　─此西行も少しやる也　同

○　◎

たて　─杣が家に獨活のあへ物誂へて　嗜山
物　─心を隱す物賣が秋　翁
(此歌仙物六あり)
砥　─此頃の化物咄ししづまりて　之道
同　─ぬつた箱より物の出入れ　翁
市海　─染物好む部屋の註文　不雄
同　─賣物に病者の伽の氣を付けて　同

○

夕顏　高　─高宮直ぎる盃も來にけり　尙白
高　─高取の城に登れば一り半　翁
節文　三　─物好みして出代の高なぐれ　吳井
同　─けあるくもしらず小僧の高鼾　蘆元

○　◎

菊薑　─改むる秤に小玉ためて見る　酒堂
小　─ふしんの內は小家で火をたく　翁
このは　同　─小春の天氣米だるゝ左右　列孚
同　─小額の花頭彩しく葭簾越　同

○

むつ　先　─先樣の當名忘るゝ狀使　不誠
先　─こちから先へ付當てた舟　不碩

○

天河　中　─名をとふうちに烏はあちらへ　藤袖
中　─水風呂も春の名殘を惜む中　き布
藤　─春もまだ寒い中から花のさた　童平
同　─おるすのうちも絕えぬ物申　り紅

さそ　振廻といへば内輪の多過ぎる　り合
内　持佛の内は埜すむ　杉風

○

山かた　折り／＼は伯父をつるとて油揚　白狂
折　論語のよめぬ折りは隙也　右範

○

類　腹切のしかも笑うて山は花　其角
笑（音訓）　是でも集か笑止千萬　堤亭

○

星月　古歌渺々と晴渡る湖　圓賀
古（音訓）　だて染のちくさよごるゝ古籠　可直

□三去用言（歌に五六）

連、過、込、廣、待、行、替へ、｜かはり｜、着き、聞き、｜え
思、言、啼、喰、吹、咲、散、降、狂、織、習、
指。
二去四去の例を擧げたるも同じ事也。

櫻山　虚性をなぶる小便の連　支考
つれ　兄弟子達のあとに連立　知子
文星　同　殘暑に連て金むしとぶ　波文
同　むゝろ腹立てゝも連の末見えず　柳睡

○

ふり　白霧に小僧のちゑの走過ぎ　涼卜
過　後宴の鮓の馴過ぎてゐる　任行
三匹　さあ朝起といふが晝過ぎ　考
同　邂に水ふろあれば夜半過ぎ　水甫

○

翁　湧出る水にかいげつつこむ　乙州
込　たつた一度に稻を刈りこむ　犀角
笠　雨に取りこむせんたくの竿　其白
同　風より先へ柳ちりこむ　泊太

○

ひさ　此村の廣きに醫者のなかりけり　か兮
廣　眺めやる秋の夕べぞたゞ廣き　同

其日　月も待で亭主は紗に釣られたか　百河
待　せと門にまつ女房は持たねども　吾由
青瓢　同　待受の路次や螢も先づ灯し　烏月
同　寝ませやら夜宮祭の寝待やら　右菊

○

さる廻　折角ゆけばお寺るす也　史邦
行　釣瓶隠して笑ひゆくらむ　種文
住吉　振商に棒さげてゆく　之道
同　岨のはづれを雉うつりゆく　い然
小弓　糸の切れたる凧吹かれゆく　鼠彈
同　傘さして目見えしにゆく　東鷲
百か仙　すとん〳〵と鱸はねゆく　鐵砂
同　祇園祭にてられにぞゆく　幽軒
きく十　取次の行へもしれず呉服賣　昨なう
同　行暮れはせねども花を主にて　伯兎

○

別　腹くせのきり〳〵いたむ節替り　そ舟

かはり　池田伊丹の秋に出替る　太大
巳　萱草の色もかはらぬ戀をして　半殘
同　腹の鳴來る水のかはりめ　同
汐　ちつと又ふらせて見たい節替り　白庭
同　年はえのよいこれの出代り　林角
同　奉公の心をかへて思ひしれ　柴友
かへ　水さはやかにかふる索麵　雷石
類　肩衣を着かへ置いたる松の枝　き風
同　月をも汲めば井戸かへの櫛　濟通
白たら　小さい笠をきる程な雨　山りん
き　かし夜着數多都ではある　支考
三日月　紙衣着て冬を凌ぐも武田流　非而
同　小袖着ぬばかりに猫の育てられ　宇兆
雪白　畊をきく花は夕がほ　巴既
きく　季中なれども奉公にあく　幡此
三日　餅搗いた音は聞えてくれもせず　考
きこえ　私は耳が聞えで口をしき　井炊

さる
思　大たむに思ひ崩れぬ戀をして　半殘
戀許は思ふ便りも須磨の浦　猿雖
東六
同　よそにのみ我れは鮑の片思ひ　山視
わらの秋進めて庵思ひ立ち　春元
梅別
ぢゞの事思へばぢゞはばゞの事　東伍
思はせて思はぬよそになく鶉　仲太
白たゝ
れは降らうと宵に思うた　北枝
同　吸物の思ひやらるゝ蜆川　同

○

むつ
言　秘していはぬを妙藥の妙　助叟
禮もいはずに戻す文臺　朱角
やわ
同　上つてはならずと言うて長咄し　夕市
此雨は降りもせまいと皆言うて　同
三顏
同　節句と言うてもはや日はない　湖毛
さういうてふるけしきでもなし　三眺

○

冬圍
妾がなづけしひよこなく也　安信

啼　はなてる鵆の啼きかへる見ゆ　翁
誰
同　思ひまさるとなくとのゐ猿　其角
ふは〱くへとくだかけのなく　嵐雪
白扇
同　雁なければ敦賀の秋を思ふ也　夕兆
雲雀なく源氏は陸に舟軍　嵐青
浪
同　松むしも啼いて月夜の轡むし　祐子
朝鳥啼いては雨のはれわたり　和木
越
同　日を見れば旅の朝寢をなく鳥　雨村
猫の子も鳴いてやかまし臺處　水坡

○

いせ
喰　喰はうか麺にせうか竹の子　日圖
飯くう先に高取の城　麥林
長ら
同　物喰うて遊ぶ奉公も隙過ぎて　有琴
初午もあれずに團子喰仕廻ひ　羽稲

○

草刈
吹　猫鳥は南風ふくかもめ也　北枝
山里に誰れまつ風の吹きあらし　浪化
きそ
染物の虎落吹きたつ晝の風　やは

吹　宵闇の廊下で紙燭吹消してやは
鳥切　同　雨雲をすつべり風の吹拂ひ　諷竹
同　秋風のふくにつけても忘れたり　芙雀
汐　さい槌をとる手に息を吹懸けて　紀之
同　小鳥の渡る風さつとふく　杜典
やへ　雨晴のくぼみを豚の吹廻り　林鴻
吹　月冱ゆるから火をも吹きけし　同

○

渡鳥　あのごとく萩は錦と咲亂れ　去來
咲　咲初むる花に名殘りの橋の霜　支考
櫻山　野にさく萩の牛にふまるゝ　枝動
同　彼岸には後生の花の咲きかゝり　十丈
草刈　白露に赤い花さく野の月夜　考
同　茶の湯心に咲いた水仙　牧童

○

五月　散る葉には難面い風を冬木から　扣角
散　花は雪とちり仕廻うたる庵の隙　之甫

○

類　雪は花赤人の手にふるばかり　其角
降　目の下に雨は降來ぬ捨舍　來示
別　たつたもの今ふる雪も元の上　子祐
同　六月に一日ふれば雨祝ひ　子さん
天河　開張の莘は花の雪がふる　魏芝
同　ふらいでも草履のはけぬ畦傳ひ　吾由

○

かしま　香のかに物の調子や狂ふらむ　依々
狂　狂ふこてふのあみ笠にいる　夕菊
句兄　柴垣うつも老の酔狂　神叔
同音　狂詩の體か捨人の月　嵐雪
冬葛　續きおり出す縞の中弘　皆水
おり　羽おりの袂ぬらす幾春　菊
藤　誘ひあふ狂ひ仲間の手習子　越水
習　母の手を放れて孺子も縫習ひ　梅窓
菊露　汐のさしくる月の廻廊　正秀

さし　白髪さし出す御簾の合せ目　翁

□三去、辭、體言（歌に五六）

とも、ども、とて、やか、さう、かね、ばかり、まで、さへ、こそ、未、何、其、是、中、大、今、儘、事、又、間、程、半、座、色、時、所、方、音、聲、御、お。

あら　荻の聲何所ともしれぬ所ぞや　筆

とも　幾つともなくてめつたに藏造る　き洞

○

三日　捨てゝのけたき浮世なれども　凉ト

ども　今時に古い男と叱れども　因民

枯　弟子にとて狩人の子を參らする　倘白

とて　花にとて手廻し早き旅道具　い然

山こと　火燒はなぜに寒いとてなく　そ由

同　高槻の城とて月も高々と　同

越　山陰の月をまつとて撞木杖　兎弓

同　殿の戀とて横柄な文　林鳥

みかむ　雨のふる日は節句ゆるやか　雪芝

やか　かりたふとんのおとの冷やか　猿雖

梅十　路次の戸は明いてゐ乍らるすさうな　呂杯

さうな　欲しさうな顏ぢやと花を折つてやり　蓮二

山かた　祭には又降りさうなけしき也　馬岐

同　彼岸にも數珠やの店の隙さうな　栗几

八夕　なけば使の戻りかねたる　何竺

かね　萬葉も霰の雲とよめかねて　同

節文　献立に濱の便りを待ちかねて　楚琢

同　藪入の姉も針手に戻りかね　蘆元

ふり　むりばかりいはれて君は後向き　ホ道

はかり　舞へ〳〵と内に計りは氣が詰る　凉ト

匂　女子ばかりが物思ひゐる　許六

同　旅人の貰ひばかりにだてをして　やは

三笑　峠ばかりか峠でもなし　昨なう

同　此雨は十粒ばかりに驚かし　二

○

さいつ比　附木賣迄ぬるゝ夕立　立ホ

迄　都鳥迄見る江戸の舟　同

はの雫　名月のさびしき迄に先祖ほめ　朝梢

同　瓦迄きぬ〳〵くせの掃拭ひ　晋如

百か仙　菜を見る迄は薬の冷汁　天垂

同　埒のあくならあく迄の戀　味泡

梅十　庵迄も筧の水の凍解けて　仲志

二

同　貸座敷迄物の自由さ　七雨

○

雛　簾の畫さへ碁は静か也　左林

さへ　あい〳〵とさへいはゞ孝行　禹洗

五

○

夏衣　親里の柿も今こそ川向ふ　七り

こそ　肩衣に再び花のさけばこそ　支考

やへ　此子こそ鳶が鷹うむ例しなれ　我黒

こそ　口ぐせにこそうたへ高砂　同

○

汐　ちつと未降らせて見たい節替り　白庭

未　段々に未さく花も花ながら　柳江

しゝ　雪もまだ餘寒の簾卷きかねて　只仙

同　露は未だ玉にもならず暮の月　柳士

續有　月も未だどうといはれぬ宵の内　い然

二

同　湊を出てもまだ海の面　同

○

白たら　何くはいでも寝たい四ン月　從吾

何　先度の狀に何と粟稗　北枝

桃盗　何やら長い箱を釣りゆく　同

同　言うたら何の腹が立たうぞ　士

ふり　立ち乍ら何を云はるゝ比丘尼達　閑鹿

同　上方の相場は何と田の戰ぎ　素冠

百か仙　垢れたるきる物脱いで何きるぞ　洞月

同　何やかの祝ひに小鯛二三匹　岸翠

○

(へ)

花摘　又其枝に冬の甘干　琴風
その　其血したふ一筋の芝　其角
鳥刧　晩のはそつと殘せ其茶い　然
同　紛らはしうてくらす其うち　芙雀

○

三日　是程にきれいな月も御ざらうか　因民
これ　使とは行違うてや是はさて　涼卜

○

春と秋　植後れたる田の中の小田　嗒山
中　打たれてかへる中の戸の御簾　そら
梅のさか　護摩の中にちよつと箒の折捨てゝ　三惟
同　盗みして脚なぐらるゝ藪の中　同
草刈　町中にいかい社の杉檜　秋の坊
同　咲揃ふ花の中より凧　八紫
むつ　中直り同じ竈の轉び合ひ　介我
人の中　我親に中よき僧も月の前　東潮

○

山かた　叱られて笑ふ大工の下手さうな　東羽
大い　大ニと覺えて一日の損　同
山こと　大殿は若殿よりも匹返り　巴兮
おほ　大ニきな雪のひらり／＼と　呂仙
名筐　橋の向ふの今にしぐるゝり　紅
今　あたまは今に捨てぬ隱遁　蓮二
東六　先の手紙を今合點して　涼卜
同　人の異見に今鼻をつく　宇中
類　今捨てゝふむに揺き蜊貢　百り
同　今ぞ情も質屋からしる　嵐雪
七さみ　今起きた顔をもてゆく手水鉢　伯兎
同　そちは今から何所へ出代る　貞吾

○

六花　へぎに其まゝ居うる赤飯　左把
まゝ　桶に其まゝ氷るかし米　以之
白たら　一度ある事二度もある也　北枝
事　竹の見事な太秦の奥　支考

○

百か仙　よい事に縁の薄いを可笑がる　無心
同　盜人の晝は何してゐる事ぞ　蘆畔
其使　仕事なき身は茶にかゝる朝の月　二　諷・竹
同　お側日永き醫者の見事さ　洒堂

○

梅人亭　又はら〳〵と蜱のなく　湖水
又　又一しきり瀧の鳴る音　野幽
ひな　譽められて復出す吸物　四　宗波
同　いせの連又變替をしておこすや　は

○

炭　今の間に雪の厚さをさして見る　こ屋
ま　名月の間に合はせたき芋畑　翁

○

雜　米俵力程ある片手わざ　彫棠
程　湖の端夫程の秋の風ろ　通
翁　彌生の霜は何ぼ程ふるり　ほ
同　一さらへ程猪口見付ける　嵐竹

○

三顏　半道の坂を湯ぶろに九折　不有
半　給銀も半季でたらぬ身の廻り　呧青

○

類　革ふとんには引舟の座す　二　沾洲
座　針店に座頭のゐるはいつからぞ　濟通

○

冬圍　色白き有髮の僧の衣着て　翁
色　貝の殼色どる月のかげ清く　重辰
翁　すんずりと苗代めぐむ花の色　沾ホ
同　色惡くやせたる顏も化粧して　ろか
續花　もり形は青物の色水の色　敬雨
色　はき物も色々の仕出ある中を　老鼠

○

雜　番匠の裝束取りし酒の時　彫棠
時　賓客に瓶は飾りし花の時　同
火打を借りた時の近付　二　不周

同　時雨時傘かへ〳〵とくもるらむ　石周
四幅　同　茶漬の時に鑵子かへほす　東恕
同　うき時は歌に慰む妓王妓女　蓮二

○

炭　寢所に誰れもねてゐぬ宵の月　翁
所　妹をよい所からもらはるゝ　こ屋
八夕　いつとても錦は木履はく處　示弓
同　臺所は樋から水を瀧の音　之川
梅十　脇道を尋ねて狀の行所　有琴
同　方角違ふ月の出所　桃川

○

江戸　鷲顔に出る諏訪の親方　晋如
方　指きる方を譽める氣違　同
あめこ　眞砂の數が歌のよみ方　光延
同　冬紙衣夏は大方裸にて　蚊夕

○

次勾　頭巾被下て夜の雪踏の忍ぶ音　才丸

音　雷の斧丁々として音更に　楊水
冬　音もなき具足に月の薄々と　羽笠
同　寂として椿の花の路つる音　卜國
三日　夜雨の音もけさのかゞやき　支考
同　餅搗いた音は聞えてくれもせず　同

○

梅のさか　萬日のいつ立初めて鉦の聲　同
聲　鷄と得てはいさかふ雉の聲　去來
冬　三日月の東はくらく鐘の聲　翁
同　聲よき念佛藪を隔つる　か兮
枯　聲もなく朝の鹿の小草はむ　神叔
同　走りながらに牛除くる聲　介我
印　晩鐘に鳥の聲も啼交り　そら
同　寄りかゝる木より啼出す蟬の聲　北枝
夜終むしには聲のかれめなき　ら
聲、音、啼とかはりては越不レ嫌。
歌　雛に御ざれと尼へことつて　儿

御濱の御殿もけふは箒目　白狂
七さみ　同　恨みは神も御存じのはず　涼ト
同　子供達花が咲いたら御ざりませ　曾北
かも　おはぐろに細る眉の糸薄　そ後
お　お寺には花をかづけに呼つたに　鷗笑
桃　同　白壁のお城をたゝく水鷄哉　馬泉
同　神々もお着なされて荒仕廻ひ　梅石
山こと　お歸りの網代を誰も見たがりて　北枝
同　お祓の威光で越えるすゞか山　巴兮
三匹　おはぐろが何はづかしい晝の月　蘭少
同　酒と豆腐と先へお使　支考
族　お頭へ菊貫はるゝめいわくさや　は
同　ひたと言出すお爺の事　翁

（俳諧録）野坡此時、同字いかゞあらむと尋ねければ、翁曰く。若しも難ずる人あらば、不吟味也といひてあらなむかし。

▲野坡の問ひは古式面去なる故なり。翁の答へは、古式もて難ずる人に、蕉門にては三去也と、去嫌の寛なる故を説かむも無益なれば、あしらひおけとの謂ひ也。

□五去用言（歌に四五）

渡、ー、上、ー、下、ー、分、明、引、寝、直、書、好、集、包、釣、捨、拂、摘、持、控、折、敷、冷、返、ー、歸、戻、落、覗、越、籠、殘、殘、憂、長。此中三去と覺ゆれど、例少なき故に爰に出す物あり。

市庵　薄雪の一遍庭に降りわたり　支考
わたり　川一つ渡つて寒き有明に　翁
笈　同　走穂渡る麥の春風　風國
同　やなの瀬下を渡る淺川　同
蓮　しらぬ川人の渡るを眺めゐて　拾景
同　走り上つて渡る反ばし　鷗歩
天河　柴舟の矢橋を渡る無分別　北溟

同　うきよかせぎに鳥も渡るか　鷺貫
市海　酒藏の際から外へ掃渡し　紗柳
わたし　七つには集めて渡す通札　宇鹿
天河　雪降埋む松の根上り　會呂
上り　袈裟も恐れぬ湯屋の上り場　百川
同　花のあるうちは降つたが照上り　達支
同　燭臺も膳が上れば引きかへて　鷹仙
同　湯上りに月と花との料理事　岩芝
同　轉寝を牡丹の蝶に起上り　い吹
むつ　面箱を物に當てたる上下し　其角
あて　駕を緣迄あぐる武士めかし　介我

○

冬籠　白雲をわけて故郷の山颪　自笑
分　秋や昔三つに分けたる客とかや　知足
ふり　追分の花饅頭の面長に　桃呂
同　染分けて裾に牡丹の花が咲き　同
別　濡れたる俵をこかす分取　八桑

同　取分けてことしは晴るゝ盆の月　子さん

○

住吉　嫁取は女ばかりで埒を明け　翁
あけ　暖に濱の藥師も明弘げ　い然
深　餅舂のあゆを明くる染付　洒堂
同　春先は田の荒仕事隙明けて　同

○

花摘　月見よと引起されて恥かしき　そら
引　足引のこし方迄も捻り蓑　園入
水仙　闇がりで引出す衣の香も馴れて　杏雨
同　硯墨引頰らひし弟子大工　同
續花　よめりとなしに引越してゆく　老鼠
同　氣を通してか内義引込む　車葉
小弓　貫さしを居合の格に引拔いて　顧丈
同　水鳥のあとに筋ひく川の上　巴丈

○

桃白　醉うて又ねる此はしの上　翁

寢　一・四 寢たければ晝を書差して寢入る也　越人
やわ　同　一・四 寢道具も脫いだ儘なる小者部屋　左白
同　つひ寢轉ぶと枕あてがふ　右幸
桃　同　一・四 嫁子のひざに猫もねたがる　文草
同　一・四 勤學の間は和尙も晝寢好　里明
山かた　同　一・三 商に晝寢のくせを直しかね　東羽
同　一・三 酒のない樽ならねせて置はせで　野航
さる　獨直りしけさの腹立　去來
直り　一・四 瘦骨のまだ起直る力なき　史邦

○

鎌　一・三 口書につれなやけさの茶漬迄　紫遊
書　一・三 大文字に嘘を書いたる古襖　遷仙
みの　一・四 夕月を扇に壽がく秋の風　三蘭
同　一・四 にじり書きさへならぬ老の身　良品
ふり　一・四 いらぬ事人の家迄きれい好　涼卜
すき　一・四 嫌ひな物も皆好きになる　任行
藤　一 ふしんは山を前に物好きり　紅
同　御詫宣にも只子供好きり　紅

○

六行　集　一・四 宵の月集めて捨つる草の屑　仙呂
集　集めて寒き朝の買物　同

○

あら　家なくて服紗に包むます鏡　越人
包　六 あの雲は誰が淚包むぞ　翁

○

草刈　一・三 壁土こねてたらひ釣りこむ　支考
釣　ねぶた覺ましに魚釣りにゆく　牧童
小弓　加賀からの汲湯釣りこむ木下道　如儂
同　洗場面やうなぎつるらむ　東鶯

○

次匂　哀れ餘る捨子拾ひに遣はして　翁
捨　扇折る女は夏に捨てられて　才丸
冬　捨られてくねるかをしの放れ鳥　羽笠
同　花の跡櫻のかびを捨てにける　翁

其帒　同　捨石にあぐらかく僧佛也　笠凸
　　　同　蠶着てうつぶし染の捨衣　百花
小弓　同　憎さげに引きずり捨てし幣の繩　辨三
　　　同　金捨てゝ乞食とならば花の色　東藤
一橋　同　空駕捨てゝ眠る陽炎　清風
　　　同　京のわらぢを捨つる松の井　調和
ひな　拂　金拂ひ名月迄は延びられず　凉葉
　　　拂　瓢の煤を拂ふ麻種　濁子
つくも　文見せて盃の拂ひを言延し　玄敲
　　　同　ちり吹拂ふ池の青柳　同

○

むつ　禿額は眉かけてつむ　介我
　　　摘　施藥院より若草をつむ　其角
けふ　一升は代を持て來ぬ酒の粕　翁
　　　持　神主は御供を持つて上らるゝ　望翠
枯　秋風や看坊持の儘ならぬ　巨海
　　　同　長旅に持ちあぐみたる釣べずし　暮四

○頭陀行　同　祭も持つて御ざる觀音　鶴翅
　　　同　まだ暑い空持ちながら薄月夜　此程

○

百か仙　叩　來たら叩けと戶を明けてゐる　天垂
　　　叩　いつか此口たゝき止まうぞ　道丸
小文　又叩くやら泣聲がする　嵐竹
　　　同　かまはねばしらけて通る鉦叩　史邦

○

次匂　折　のしを冠の纓に折りかけ　翁
　　　篠のし折を猿に斷わる　才丸
　　　血を踏んで風太刀を折る音ひどく　楊水

○

深　敷　新簀子先づ二疊しく彌生來て　洒堂
　　　深草は女ばかりの下屋敷　同
　　　晝は衣を包むふろしき　同
三顏　同　一町の花見ははれな借座敷　獅川
　　　物堅う表は見えて公家屋敷　橋星

藤實　高塀[六]にさゝん花氷る中屋敷　車要
敷　敷居打こす日は高き也　同

○

笠　紅葉をたくなと酒は冷にして　蓮二
冷　けさの餘りのたらぬ冷飯　葉柳

○

深　祝日の匜返りたる小豆かゆ　岱水
返り　寒[三]通す山雀籠の中返り　嵐らん
住吉　汁[四]の實を又呼びかへす朝の月　之道
返す　印見分けてかへす茶莚　翁

○

桃實　盗[四]人の誑うて歸る古手市　嵐雪
歸　鉢をも乞はで首座歸る也　兀峯
芭　送[四]人が己ぢやお米が歸るなら　至芳
同　ゆくも歸るも笠の陽炎　黄麥
桃　[㊀]狐もこけたあとを見歸る也　翠
同　白[二]い物ふらせて神はお歸りか　醉菊

麥　母親を見に戻る雁人　岸虎
戻　小僧は肥えて戻るやぶ入　蓮二
笠　市[四]の戻りのなせ遲いやら　麻三
同　講釋の戻りを風ろへ崩れて行き　荷丁
山かた　祭[四]から戻れば藪に月のかげ　六之
同　傘は後から戻る開張　東羽

○

庵記　障ったら落ちもしさうな百合の露　水也
落　しと〳〵と銀杏落ちる宮遷し　都柳
やへ　坊[二]主を落ちて此頃の春　示右
同　[㊀]松樅の傘奪ふ風落ちて　信德

○

冬梅　覗[四]かれぬ程には萩の裡ずまひ　蘭兎
覗　乙鳥が被覗いてはゆく　蘆元

○

きわ　初[三]花のさたなき春は寒越して　杉風
こし　塀越しに屋敷をのぞく麹町　岱水

○

俳表 ─色々の祈りを花に籠りゐて　等躬
籠り ─各武士の冬ごもる宿　翁

○

いせ ─雪見に殘る鶴の足跡　乙由
殘り ─時雨た後へ殘る川音　ゐ齊
奥 ─末枯の夕木に月の殘りけり　如行
同 灯火殘る宵の庚申　支考
衛 ─費殘したる庭の錦木　自笑
殘し ─恨みを笛に吹殘しける　安信

○

星合 ─瘤につられてうき世去りゆく　路通
うき ─うき事を辻井に語る隙もなし　正秀
續虚 ─月には許せうき柴の數　破笠
同 名はうき名鎧を飾り馬立てゝ　同

○

天河 ─長い痣のせん藥にあくり　紅

長 ─佛段も釣つてすまひも長四疊　童平

此中に言居體言も交りたれど、一所に入れたり。

□五去辭體言（歌に四五）

かな、つゝ、ながら、故、只、上、上、下、樣、樣、世、新、古、ー、跡、陰、度、奥、裡、名、群、片、功。

江戸 ─遠廻しなる戀もするかな　琴風
かな ─お江戸哉初鰹哉かけて行く　同

○

あら ─涙見せじと打笑ひつゝ　松芳
つゝ ─灯火に手を覆ひつゝ春の風　舟泉
ふり ─昔しながら畑がちなるしがの花　ホ道
乍ら ─立ち乍ら何をいはるゝびくに達　閑鹿
かも ─しらけて萩の露もさながら　そ竹
同 ─なぶられながら來て釣りかゝる　鷗笑
百か仙 ─宇治もたまてもよそながら見る　曾米

同　○一二　假ばしと名は付けながら其通り　曾米　
やへ　何故秋の雨しきる笠　示右
ゆゑ　氣違故にけふもたゝかれ　同

○

七さみ　只だゝくさに菊も薄も　里冬
只　獨活も蕨も只に澤山　筆
三匹　分限者も只かせ〳〵に困り果て　支考
同　三　上手でも下手でも琵琶は只ぼろん　盧本

○

誰　嵐も風も陰陽の上　才丸
上(うへ)　高野の上の小田原の花　嵐雪
炭　上置の干葉刻むも上の空　やは
同　新畑の糞も落ちつく雪の上　こ屋
三匹　馬で合點のゆかぬ上臈　涼ト
上(じやう)　四　草餅の扭びかげむも上手下手　杜草

○

星月　夕月にひよこ揃ふる塒下　東雲
下(した)　晝顏の後れて開く緣の下　専旨
桃盗　扇が谷の松の下道　牧童
同　三　下地窓から秋を覗いて　柳士

○

かも　ばゞに詞を御門跡様　笑
様(さま)　祈れども愛染様はきつとしてそ　後
雪白　四　落着いてゐてそこなかみ様　ろ九
同　六　宮様はひだるい腹に菜雜炊　同
浪　鳥居の額によめぬ唐様　宇中
様(やう)　吹矢のほしい鳥のをりやう　貝紫
衡　三　大様なお寺のせはも引受くる　ろ通
同　六　夢見たやうな情忘れぬ　知足

○

夏衣　世を捨てゝ今はケ様に黒衣　文詞
世　よの中よ佛の經に嘘はなし　槐五
肩衣に花もさかねば世を捨てゝ　支考
三　長生に世の嬉しさも悲しさも　慈竹

雪丸　衣も捨てゝ輕きよの中　桃里
世　乞食ともしらで浮世の物語り（六）　翅輪

○

長ら　門から先へ立つる新田　羽稻
新　黑ぼここぬる新町の市　有琴

○

類　紗の金さへも古されし衣　嵐雪
ふる　古き衾の柏から〱　百り

○

雪丸　ふる郷の友かと後を振返り　川水
同　亡き人を古き懷紙に算へられ（三）　一榮

○

炭　家の流れた跡を見にゆく　り牛
跡　雪の跡吹瓦がしたる朧月（四）　こ屋
續さる　殿のお立の跡はさびしき（四）　沾ホ
同　此盆は實の母の跡吊うて　馬莧

○

ふり　山陰のこゝにも家の又一つ　蒲右
陰　口あいて浮かりひよんと花の陰　卷耳

續虚　松並ぶ石の鳥居の陰くらし　沾德
同　鉢に飯たく篁の陰（四）　虛谷

○

江湖　月雪に櫻も二度の詠返し　盧元
度　百度參りの連に乙鳥　山桂

○

行脚　木は木屋町の奥に三絃　五桐
奥　板敷の是より奥に幾座敷（四）　同
續さる　奥の世並は近年の作　翁
同　大工遣ひの奥に聞ゆる　同

○

續の原　はやての間道の裡家　才丸
裡　靑ざしもさもしからざる裡山に（四）　同
天河　節句をよそに麥のうら町（四）　三伍
同　裡門を付けて家中の菜園畑　同

○

雪丸　種植ゑて小枝に花の名を記し　更也

名　うき事の百首に魚の名を詠みて　翁

かしま　御内にて念佛申と名をいはれ　依々

同　くらべ負けたる名所の貝　友五

○

鶴　里々の麥仄かなるむら綵　仙化

むら　一四　敵寄來たるむら松の聲　千り

むつ　梅首鷄の群れたる方は玉の河　露沾

同　土圭の鈴も濁るむら雨　沾國

舟竹亭　算盤を片手に米の印して　翁

片　片道はしるき足駄をぶらさげて　同

渡　蜂にさゝるゝ片頬の月　卯七

同　一六　片そぎの鳧鋼さびて忍ぶ草　之道

○

住吉　黑々と酒功の讃の二行り　青流

功　一四　功者めけども琵琶の似合はず　元梅

□面去用言（歌に三四）

（古今鈔）泣、笑、照、曇、植、刈、眠、覺、起、居。此十品は態字の凡例にして、面をかへて百句に七八つもあるべし。

△居の字は多用なれば、二去に入れたり。借面去と云ふは、凡て十去已上、其中多用の物は五去已上也。

遠、近、遣、追、廻、逢、逢、通、通、遊、掃、摘、投、捜、提、抜、押、搗、染、消、汲、澄、濁、清、洗、深、淋、泣、眠、覺、覺、薄、荒、恐、忘、急、惡、惜、惜、恨、忍、尋、嫌、飽、飲、案、定、寄、終、續、細、結、結、馴、初、被、商、召、向、笑、呼、嘲、突、舞、冠、登、弱、和、恥、作、借、侘、飛、語、誘、讀、謗、擧、賣、買、貫、貸、重、並、盛、盗、亂、亂、卷、別、刈、離、果、植、枯、堀、破、起、起、脱、隱、早、參、匂、動、干、疎、踏、出來、仕廻、流行、步行、嗅。

やへ　遠山も窓の鏡に移り來て　文石
―十四
遠　夜目には遠し岸の捨舟　言水
―九
　　まだ宿遠く入相をつく　石
むつ　厠に遠くよわるむしの音　沾國
―十三
同　地道ばかりを春の遠乘　鬼谷

○

笠　近　雛も内裡も近き山里　荷丁
―四
　　入相も近う聞ゆる曇り空　り紅
梅ノサカ　近い吉野や鷲尾の花　三惟
―十一
同　雨が近いと門の評判　天垂

○

笠　遣　遣ひ安さに阿房抱へる　蓮二
―九
　　錢遣うても旅は不自由　そ琢
―十一
　　高い雪踏は氣遣ひではく　箕白
三顔　調市は餘所へ來ても遣はれ　朝左
―七
同　湯も相合に遣ふふしん場　曲紫
庵野分　信玄は天眼通の人つかひ　岡一
―〇一三

遣　遣餘る貧錢に所化の浮心　翠波

○

匂　追　惣嫁追出す肌の寒けさ　り牛
―十一
　　醉のきほひは鹿をおふ也　許六

○

小文　廻　八朔の脊剃りに廻るらむ　嵐竹
―十五
　　本堂を右へ廻れば反歩にて　山店

○

皮　逢　しとみにあひてよわき羽二重　心水
―七
　　逢さぬ戀か母を誓文　沾洲
餅搗　同　あふ夜の心仲をとらるゝ　信品
―十二
　　久しうて逢うて何から申そやら　そ羊

○

笠　違　普請に向きの違ふ佛壇　達支
―八
　　誂へてやつた手紙の入違ひ　同
砥　行違ひ手振りで通る松の間　曲翠
―九
通り　しやら／＼と花見の通る眞盛り　正秀
―〇一三

續さる　通りのなさに店立つる秋　支考
通り　見て通る紀三井は花の咲盛り　翁
むつ　外通る人呼び懸くる藏の窓　該少 ㊀三
同　七つから大宮通り碓の音　宇月

○

一須磨で　天窓くだしに通ひ路の雨　似春 九
通路　雲引きかつぐ星の通ひ路　同

○

名筐　小夜着きて後の月見の舟遊　蓮二 八
遊　隱れ笠きて遊ぶ日雇等　同
山かた　旅人も雨に遊うで濱の嗅　右範 八
同　農休みとて里の遊び日　同
初茄　のせ乍ら牛も野遊びしたがりて　風草 九
同　遊人の小春は夜を晝なれや　十知
さみ　遊ぶ節句の髮をたしなむ　冠那 十
子心にちゑの付いたる雛遊び　千梅 十六
同　遊ぶ心の水に乙鳥　筆

○

匂　玉子のからの多き掃溜り　牛 十
すゝ掃の道具で戀の顯はるゝ　やは 十
掃　立廻りては座敷はく也　同

○

かも　蠟燭に迷ふ蝨を掃いて捨て　琢吹 十五
同　掃除けて春まつせどのたびら雪　そ竹

○

續さる　見事に揃ふ籾の生え口　沾ホ 八
揃　月待に朋輩衆の打揃ひ　馬莧
出駕の相人揃ふ起き〳〵　桃りん 十一
別　同　ひばりの羽の生え揃ふ聲　翁

○

炭　縁端へ腫れたる足を投出して　こ屋 二
投　投打ちも腹たつ儘にめつた也　同

○

焦　乳見せぬかと雛捜すらむ　野人 八
捜　くま笹のひよこを捜す母の聲　幾石

黄山　提
陣に印籠提げて夕涼み　米花
舟梁に提灯提げて立上り　童平（五）

○

卯辰　抜
尿の馬を行抜きにけり　四睡
はづみも抜けて物思ふ頭　漁川（七）

○

ひな　押
傘に押分見たる柳哉　翁
黒部の杉の押合うてたつ　同（六）

○

蓬　同
花曇る石の扉を押開き　桐葉
衣被ぐ小姓萩の戸をおす　東藤（十）

○

小弓　同
押しのぼす箱根の駕のまん丸に　如儂
押出しも念者育ちの立廻り　同（十一）

○

柿　搗
餅つく音のよそに聞ゆる　蒙山
菅笠の臼に晒を搗捨てゝ　呂物（四）

○

一おの名
緞子の染木紙魚のさす迄　信徳（三）
染
吹矢を折れて墨染の月　翁

○

一橋　消
薬の火消ゆる秋の朝風　清風
銚消えて死は土をかつぎたる　同（十二）

○

同　汲
神主の水くむ眞間の宮處　立志
蟾のゐて汲めぬ麗の清水哉　風（十一）

○

深　濁
玉子すふ顔もをかしき濁り酒　杉風
ひばり啼きたつ聲も濁らず　蒼波（[illegible]）

○

三日　きよ
水清く流るゝ岩に橋懸けて　因民
是なる水に雪の清瀧　そせん（六）

○

冬　洗
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　か兮
釣べに粟を洗ふ日のくれ　同（六）

次匂　深
無錢居士とて朝深き月　き角（九）

深く又深し龍頭の國才丸

○

奥　淋　淋しきは雫の滴るゝせがき棚　如行
ちる錢の音も淋しき花の奥　呂丸

藤　同　裡家さびしき雨の三絃り　紅
御るす屋敷の番さびしがる　和吹

山かた　同　細工に書いた畫をさびしがる　東羽
たばこ求めた時はさびしい　六之
草餅搗いて閨さびしき　右範

○

ひさ　泣　半氣違の坊主泣出す　珍碩
黄昏れは舟幽靈のなくやらむ　同

拾　同　長き夜を泣いたる眉の重たげに　越人
泣き〳〵て吃逆の留る果もなしや　水

○

ふり　馬上に眠る笠のゆらつく　蕪右
眠たさのくせに成つたる此闇　竹司

眠　一眠りして蝶のひら〳〵　曾北

○

ふり　覺　秋の暑さのさめかねてゐる　凉ト
飛ぶと見たれば夢は覺めけり　竹遊

次勾　ことし此秋京を寢覺めて　呂丸
ね覺　寢覺侘びて雪の爐に根深溫むる　同
夜の飯乏しく寢覺めける頃は　其角

○

藤　覺え　新地の市日覺え違ふる　東荊
香具屋の雪踏は犬も聞覺え　如柳

○

笠　同　先に覺えてゐたる精進日　蓮二
寺の名を飛脚の者もうろ覺え　同

○

冬　うす　音もなき具足に月の薄々と　羽笠
庭に木曾作る戀の薄衣　同

○

桃白　小袖の粘のこはき薄霧　そら

薄月夜麻の衣の影法師　史邦

○

匂　野は仕付けたる麥のあら土　許六
あら　宵闇はあらふる神の宮迁し　翁

○

四幅　醍醐の使者も恐入つたる　東恕
恐　夜歩行の昔し思ふも恐しく　同
恐れながらも天下太平　蓬二
誰　忘　牛にれかみて寒さ忘るゝ　安信
さく花に晝飯時を忘れけり　重辰
誰　同　忘れずに取傳へたる弓咄し　嵐雪
忘れむと思ふ灸の熱さよ　舉白
東六　同　月を忘れぬ晝の山のは　宇中
どんな事言うて遊ぶも忘れ草　同

○

雨法會　盆の急ぎにむしの機音　東羽
急　暮懸くる山の急ぎのむら烏　汝架

○

續有　直まへりにもわるうなる空　い然
惡　わるい事して遊びたる子供衆　同

○

あら　幾年を順禮もせず口をしき　松芳
惜　十日の菊のをしき事也　か兮

○

笠　行義より乳母がきげむの取憎き　蓬二
憎　傘も小便すればさし憎い　諷山
三匹　ありかでは馬の上にはをり憎し　汀廬
同　何をいうても憎い船頭　杜草

○

皮　恨みて肩へかぶる小ぶとん　口遊
恨　三日月を失ふ雲と打恨み　凉ト

○

次匂　頭巾被下て夜の雪踏の忍ぶ音　才丸
忍　釜冠る人は忍んで別る也　き角

○
續の原　尋
水雲の僧を尋ぬる僧いづく　其角
[七]文によりひともじ草を尋ねばや　扇雪

○
笠　嫌
月夜を嫌ふ人も有らうか　り紅
[五]自然と嫌ふ赤みその嗅　諷左

○
同　飽
夜咄しの春まだ飽きぬ火燵哉　麻三
裡陰にもちと夏を仕飽き　紅

○
深　飲
正氣散のむ風の輕さよ　岱水
[十四]付合は皆上戸にて飲明かし　嵐らん

○
笠　案
夫の持病の痂氣案ずる　そ琢
[十五]墨をすりつゝ狂歌案ずる　紅

さる　定
汐定まらぬ外の海面　乙州
花に未だ今年の連れも定まらず　や水

○
藤よせ
ばゝ達をよせて和尚の仕立物　風鶴
[十二]一門よせて聟の献立　り紅

○
百か仙　終
尾もひれも終殘さぬ肴喰　萬鎚
[六]早苗もついと植終はる空　同

○
笠　續
打續く日和に花を待合せ　そ琢
[二十]漕續く柴積舟の五六艘　達支

○
ひな　細
足場よき月の細道一筋に　濁子
[八]陽炎落つる岩の細瀧　そら

○
冬　同
朝せんの細り薄の匂ひなき　ト國
[五]黄昏を横に眺むる月細し　同

○
皮　ゆひ
里の後に鳴子ゆふ薪　口遊
[十]今結うた髮を損ふわやく者　凉ト

烏道　同
結懸けて細繩たらぬ花の垣　木節
[十一]髮結うて番に出る日の朝月夜　い然

○

雑　春風に衣張結ぶ杭ゆりで　岩翁
結ぶ　十三　橋詰に小家結びたる繪馬書　尺草

○

節分　萬能も只一心の馴の果　蓮二
馴　四　馴れぬ純子の夜着に寝はぐれ　童平

○

桃白　まだ生馴れの酒の試み　涼葉
同　九　飯の強きも喰馴るゝ秋　此筋

○

あめこ　假初の鷹の御供に召れつる　之道
そめ　十　契り初めしは壬生の念佛　蚊夕

○

深　新に橋を踏初むる也　也竹
同　十二　咲初めて忍び便りも猿すべり　翁

○

句兄　後るゝ徒士は被ぐ袖笠　彫棠
被ぎ　十四　事爛がふりたるゑぼし引被ぎ　同

○

山かた　商はすれど行義は武士のまね　六之
商　商は仕廻遊ぶを德にして　同

○

鶴　筑紫迄人の娘を召連れて　り下
召　六　あら野の牧の御召撰びに　き角

○

四幅　青々と川の向うの夏木立　月狂
向　十一　檢臺の向ふ遙かに霞ませて　梨月

○

水仙　月まつ庵のむかふ兀山　杏雨
同　七　手習むかふうばの傘　兎白

○

梅十　いざをばの笑見よとて雛の酒　七雨
笑　六　笑うて嫁の奥へ逃げゆく　り紅

夏衣　鶏は歌をよむ人を笑ふ　南木
笑　七　衿に笑うて逃ぐる上臈衆　東花

笠　辛みに泣いて笑ふ田樂　童平
同　七　笑ひ仲間の山も三吟　り紅

三笑　笑ひたい時も笑はぬ心から　伯兎
　同　—八 何とぞいへばはや笑ふ也　蓮二

○

拾　嗅　—十二 飯早稲くさき田舎也けり　翁
淺葱くらふ人の臭さよ　か兮

○

翁　呼　—十 鎌倉のお寮〱と名を呼びて　りほ
おれを旦那と妹がよぶかも　同

○

笠　咄　—五 夜咄しもそろ〱ゐろり賑うて　箕白
歸る事忘れて咄す古朋輩　そ琢
同　同　—九 あの見ゆる此方（こちら）の山に咄しあり　達支
一藥罐かへて和尚の長咄し　諷山
水仙　同　—六 振廻咄ししんとしてきく　杏雨
耳遠きくせに小者の咄し合ひ　やは

○

一　須磨で突　—四 忍び路の霧の妻戸を突倒し　翁
蝦蟇鐵拐や吐息つくらむ　似春

○

むつ　舞　—二 舞鷹に少さく成りし鴻の鳥　桃りん
舞　疊の上へ許すしゝ舞　同

○

ひな　冠　—六 年を問はれて衾冠りぬ　此筋
月寒く頭巾あぶりて冠る也　文鳥

○

渡鳥　登　—九 千石と登れば人も人らしき　卯七
棒だけに月は登れど暮の雲　閑鹿

○

星　弱く　—七 牛部屋に蚊の聲よわし秋の風　翁
休み日も瘧ふるひの顏よわく　ろ通

○

笠　和　—六 君が代は餅の花のと和らぎて　蓮二
和らかな物きれば風ひく　童平

○

拾　—十三 釣簾の一重も恥づる黑髮　安信

恥　昔し恥かし今の竹垣　牛歩

鵆　同　[十五]恥かしの跡をとづる草の戸　芳重

近江の國櫨みのめに耻づらむ　朱紘

はづるとはづかしとは活異なれども、同じ活の證句見當らぬ故に擧げたり。同意に心得よ。

蓬　[十八]ほつ〳〵と炮烙作るぢゞ一人　東藤

作　高麗の縣に畑作りて　桐葉

つばめ　[八]花の香は古き都の町作り　そら

同　哀れに作る三日月の脇　北枝

山こと　[九]詩に作る瀧はなけれど三日の月　呂仙

同　輕薄をちらして臺の作り松　音吹

○

梅十　[⊖三]息子の足を借りて茸狩　梅光

借　をばが上着を借りて詰袖　仲志

桃白　[八]笠からむ歌の返事に蓑もなし　史邦

同　かりし屛風をかへす夕ぐれ　杉風

冬園　[十一]米借に草の戸出づる朝霞　翁

同　句へとて鉢に植ゑたる菊借りて　重辰

○

壬　[十八]佗しらに牛の子遊ばす朝朗け　一桐

佗　脚氣をわびて膏藥をはる　槐市

○

風麥亭　[⊖四]莚を立に走り飛びする　翁

飛　鐘霞む喰裂紙を飛び付いて　土芳

拾　[十四]石踏返す飛越の月　そら

同　まつ程は足音なくて飛ぶ蛙　素英

○

次匂　[六]夢に來て舁を語る時鳥　き角

語　先祖を見しる霜の夜語り　楊水

○

三顔　[八]氣ばらしに辛崎迄は誘ふ神　曲紫

誘ひ　鹿笛吹いて誘ひ出さうか　不有

○

あめこ　[六]義は濟んで讀み辯わろき文の道　是計

讀　眞砂の數が歌のよみ方　光延

あら　同　十三　よまで冊子の畫を先に見る　舟泉
曉ふかく提婆品よむか　兮

○

なむ　八　たが謗るやらくさめ三つ四つ　里鳳
謗　金持を謗るは人のひがみから　貫仙

○

翁　八　簾より外が踊の譽人也　沾德
譽　自在を切つて細工譽められ　文桂
さみ　十二　鼓を譽むるばかりではない　一字
同　飼立をなじますうちの譽遣ひ　同

○

翁　五　うるにさへ精進物は哀れにて　乙州
賣　花賣の後姿のおもはゆき　正春
長ら　七　月花も買うた程には賣りかねて　童平
同　笠脫いでぬだれにはひる茶碗賣り　紅
さみ　十　賣りたさに喰れて仕廻ふ呉服店　一字
同　此あたりにはうる餅もなし　佐角

○

小弓　十　何買に出でゝ坊主のの〱と　渭川
買　月まつ舟の小買物する　東鷲
あら　十二　長持買うてかへるやゝ寒　舟泉
同　如月や酒を買ひに夜をこめて　冬文
其灯　十三　買うた茶入はあちの掘出　宜考
同　苗代の候語るふん買　そ雀

○

印　十五　玉子貰うて戻る山本　こせむ
貰　本家の早苗貰う百姓　翁

○

深　提げて重たき秋のあら鍬　酒堂
重し　皮たびに地雪踏重き秋の霜　同

○

山かた　八　立横に並んで下戸も花の陰　栗儿
並　小鯛の側に並ぶ青鯖　同

○

續さる　俵米もしめりて重き花盛り　沾ホ
盛　一五　汁の實に困る茄の出盛りて　同
深　日盛りに鰯うる聲を夢心　酒堂
同　一九　花盛り御室の道の人通り　桐奚
新百　花盛り寒食過ぎて幾日目ぞ　乙由
同　一九　あの人も只はゐるまい若盛り　支考

〇

印　文盗まれて我れ現なき翁
盗　一十二　道の名と盗人の名は殘る露　そら
皮　一十一　盗人のないもほいなし花の主　石周
同　足取も皮盗まれた蘆毛馬　口遊

〇

雪白　薄の花のみだれ姿や　燕雨
亂れ　十　花は今冬も幸も咲亂れ　只白
ふり　駈廻る裝を野分の吹亂し　桃呂
亂し　夜明から時雨て雲をかき亂し　楓里

〇

拾　紙卷添へて輕き笠の緒　野童
卷　一六　菰斗り身にまく人を見知りかね　丈草

〇

山中　別れの涙面白もなし　桃妖
別　六　乙鳥の左右へはらりと鳴別れ　北枝
笈　繭を刈上げて門に弘ぐる　そらむ
刈　一九　刈りもり時の瓜を漬込む　露川
一橋　六月の始め稻かる國有りて　言水
同　一十七　月かげの夜終廟の草刈りし　清風

〇

砥　村をはなれて小家一軒　夕兆
離　藪をはなれず人近な雉　林紅

〇

一橋　汲みはてぬ浮世を年魚の命にて　清風
果　〇三　布子着て布子に歸る北の果　同
藤　川向ひなれば使もはてぬはず　水胡
同　七　いせ講の果はいつでも後夜が鳴る　侃如

〇

○

三日　植　─川のない所は雨に田を植ゑて　雷石

─七　植置いてことしは寺の花盛り　そせん

やへ　─八　神の領植ゑるともなし千々の花　伊良

同　─かたみの菊を植育ておく　景桃

○

次　匂　─八　哀れとも茄は菊に末枯れて　翁

枯　枯れゆく宿に冬子うむ犬　き角

同　─松茸に道し紛へば枯茨　楊水

同　─十一　いわしなる御簾のうるめは枯殘り　才丸

やへ　─浮世の花と金の蔓ほる　猶始

堀　─十四　夢に見し勢至を掘りに來るびく尼　筐水

○

蓬　─笠敷いて衣の破れつゞりゐる　桐葉

破　破れたる具足を國に送りける　東藤

○

炭　─四　むく起きにして參る觀音　り牛

○

起　─きげむよい蠶は庭に起きかゝりやは

山中　同　─九　こけては起きて山を見ありく　凉卜

起きて見たればかはる分別　萬子

拾　─六　引起す霜の薄や朝の月　丈草

起す　今宵も舟にゆり起す夢　同

雪白　─九　具足の別れ起す敎經　ろ九

同　女房の金で起す身帶　曾北

たて　─十一　五月迄小袖の綿も脱ぎあへず　翁

脱　城北の初雪はるゝ蓑脱いで　濟山

○

錦とる　俳　隱　─十四　槐の隱るゝ迄に歸見しはや　似春

庭稻荷樅に隱れて尺かなる　ト尺

焦　早　─九　早繩よるは沖津白波　一雀

早い後段に猶羽拔鳥　大町

同　─十五　早歌よまぬ心きたなき　肅山

同　包み分けたるつばき早梅　き角

○

歌　娘ども連れて一度は京参り　鷹仙
参　参れとて山の談義の鐘が今　り紅 [十]
このは　銀をかす利勘の爲めの寺参り　石介 [十一]
同　太閤の御前へ参る唐西瓜　巨郭

○

水仙　みかむの匂ふ袖の重たさ　いち
匂　布せの銀さへ匂ふ哀れさ　魚文 [五]
草刈　暖簾の奥なつかしき茶の匂ひ　従吾 [十二]
同　春の匂ひも過ぐる長月　同

○

拾　一かいの松動く程ふく嵐　岱水 [十一]
動く　うばそくも花に心や動くらむ　友五

○

次匂　凩のからしの枝に藁ほせる　才丸 [十五]
干　さびしさをそばに露ほす豆俵　同 [九]
配所人薦の小忌布を干しかねて　翁
たて　轉寝の夢さへ踈き御所の樣　栗齋 [十九]

踈　戀すれば世に踈き人憎き人　そらん

○

一橋　いつかふむべき古郷の橋　清風 [九]
踏　湯殿の道の踏枯らす笹　才丸
鶴　三度ふむよしの〻櫻よしの山　仙化 [十三]
同　岩根ふみ重き地藏を荷ひ捨て　キ角
拾　蛤の殼踏分くる高砂子　安信
同　狗子の踏みあらしたる蘭の鉢　自笑 [五]
石ふみて片下りなる岨の道　如風

○

櫻山　先づ十人のそばは出來たり　一洞
出來　をのこ子出來て老の慰み　石柴

○

桃　南から仕廻うて北の花も今　朗式
仕廻　開張も花も首尾ようちり仕廻ひ　非亮 [十一]
山かた　入相も長閑に庭を掃仕廻ひ　東羽 [十二]
同　煤はく迄に秋を仕廻うた　栗几

○

翁　流行かす酒に息子のちゑ賣りて　沾ホ
―十
流行　腹疫病の流行り鎮まる翁

藤　―五　踊よりそれて寺子のかけ歩行き　筆花
歩行　雲雀なく空から誘ふ歩行神　蘆舟

皮　―十二　賣りありく九條あたりの芋の聲　支考
同　梅嗅ぎありく今の俳諧　蘆本

爰に例なき物は其類字を據とせよ、譬へば動の字面去にあれば、なびく、そよぐは例なくとも同去と知り。参の字例あれば、詣、詣も同じと心得よ。但し相似たる詞にても、戰ひは耳だつ故に、百句に一つか二つか。爭ひは常なれば、面去にも可ならむと分別せよ。

□面去辭體言（●印は十去已上）

かりけり、さり、さて、いつ、いく、いかに、はや、先、猶、必、皆、此方、爰、どこ、そち、よそ、あはれ、初、外、前、後、横、末、へり、西東、化、僻、儀、假、頃、德、役、番、隙、間、禮、献、香、質、數、昔、殿、留主、世中、浮世自由、義理、機嫌、景色。

あら　―七　三夜さの月見雲なかりけり　越人
かりけり　後なかりける金二萬兩　同

○

七さみ　―十六　さりとは涙胸にせきあげ　朴人
さり　さりとては短い日也暮の月　之仲

雪白　―十九　さる程に袷に綿の頃なれば　沂青
同　さりながら花には牛の足賴みろ　九

○

山中　―七　一かどの畑にさても草の花　乙由
さて　是はさてよい折節に蓬餅　白笑

白たら　―十三　枯れたわと思うたにさて梅の花　従吾
同　是はさて儀寒さの秋のくれ　支考

○

白扇　いつ覗いても明いてゐる寺　東園
いつ　降りのばゞはいつも十八　林紅（七）
住吉　地にあるものかいつも八石　竹端
同　珍らしい肴でいつももてなされ　青竹

○

拾　今の間に幾度しぐるゝ　い然
いく　花の香に啼かぬ鳥の幾群れか　翁（四）
句餞　江戸櫻心通はむ幾時雨　濁子（十五）
同　鶯の巣の幾つか花に見え透いて　翁

○

蓬　酒のむ姨のいかにさびしき　桐葉
いかに　いかになく鳴は吹矢を負ひ乍ら　翁

○

百か仙　七夕過ぎはもはや朝顔　京水（九）
はや　はや暮れかゝる祇園清水　歸帆（十）
外もはや明う成りたる月の前　支流
同　はや喰うてゐる二日目の鮓　天垂（十）

はや　五六丁往て來る内にはや留主か　二々
とやかくと最早日もなき年の暮　米緒（十三）
匂　同　よい花もはや端々は火を灯し　同

○

ふり　先づ老僧の御目にかゝらう　松友
まづ　春は先づ馬の祈禱にさる廻　同（六）
七さみ　先づはひしごのよきかげむぞや　曾北
同　花といはゞ先づ苔より樂しまれ　涼ト（十）
櫻山　乞食の家の先づは妻入　支考（十五）
同　先づは喧嘩も川向ひ也　同（九）
先つ十人のそばは出來たり　一洞

○

梅別　茶漬の恩の報じても猶　子靖
猶　時鳥ならば山路は猶以て　孟村（十）

○

三日　隨分の人に必らずくせがある　柳江
必　あんな雲から雨に必らず　林角（十二）

○

三笑　皆　─臍の時皆懸懃になられけり　蓮二
─八　ばゞにならねば皆しらぬ也　桃妖
ふり　同　─しる人は皆出代りてゆく　枝三
─十三　嫌ひな物も皆好きになる　任行
あら　同　─くふ柿も亦くふ柿も皆しぶし　傘下
─十　又献立の皆違ひけり　同
─九　皆同音に申す念佛　越人

○

櫻山　此方　─向いの鷄のこちにゐたがる　斗牛
─十二　重箱のこちへは來ずによその花　支考
─三　風ろ敷をあちらこちらと二人連　只草
三匹　─隣りのばゞもこちに出來合ひ　反朱
同　─六　こちの子も今拵へる挾箱　蘆本
四幅　─眞白に見ゆるがこちの郡山　拂周
同　─六　あの鈴音はこちの馬やら　梨月
山こと　─兀げてはをれどこちの山也　野棠
─六

こち　─あちらから嘘つく時は此方から　巴兮

○

三日　─町からもこゝへは遠い大師講　除風
こゝ　─七　小柴垣そこからこゝへ此流れ　井炊
小弓　─吉原へ聞ゆる時はどこの鐘　風國
どこ　─七　百官やどこぞの程で去年が出る　東鷲

○

そこ　─つくばひたればよその殿樣　日圖
よそ　─六　剃りたれば衣かせ山よそに見て　素水
笠　─六　あの杜はよそより早く幕掛かり　葉柳
同　─晝迄はまだよその遊び日　り紅
櫻山　─七　黄色になれどよその枇杷也　和友
同　─念佛を誘ふよその入相　香鵲

○

拾　─秋寒く哀れと拾ふむしの殼　夕菊
哀れ　─七　菅笠も哀れに見ゆる熊野道　路通
越　同　─九　六月にうどんくうこそ哀れなれ　支考

傾城の哀れは文に定まりて　仙　雅

○

炭　初　─十五 初櫃に乗懸下地敷いて見るや　は
初午に女房の親子振廻うて　翁

春鹿　同　─五 馳走を殊に初の聖靈　圓　牙
二八が二八いせを初旅　如　朴

冬　同　─十五 初雪のこととしも袴着て歸るや　水
初花の世とやよめりの嚴めしく　卜　國

○

其俗 そと　─七 風通ふ氷室の外は暖かに　鋤　立
外に寢て咎める犬を跨ぎ越え　嵐　雪

○

笠　前　─六 物前の日和かたまる月の照り　達　支
質に節句もさせぬ晝前　紅

渡鳥　─六 打ちかぶせたる雪前の空　卯　七
同　前方の手代小者も打揃ひ　同

皮　─九 昔しから上戸の額盃の前　乙　棹

前　福山の鷹は追付け御ざり前　蘆　本

三顔　同　─十 手杵も内にをらぬ物前　蘆　元
百日の江湖も既に名殘前　砥　青

○

雜　後　─九 一時雨傘のうしろの遙か也　信　德
乘物の後の窓の少さくて　彫　棠

一梅の風　横　─十 其四隅多門は手本を横たへて　信　章
後陣はいまだ横町の露　翁

○

一色つく　末　─七 あつ湯を流す末の白浪　同
羽ねのあがりしきぬぐの末　同

つくも　─九 月の秋是から末が哀れ也　如　風
同　花の春末一段に成りにけり　素　雪

○

十七　へり　─七 へりをぐるりと染むる丸藥　巴　人
はらへや拂へ臼に薄べり　雁　山

○

節分　｜西受の二階の暑さこらへかね　水湖
西　十　西谷東谷も入相　梅因

○

桃盗　｜東殿より西殿の事　松碌
東　｜雁南に東の月　同

○

萩露　｜此段毎にあだしのゝ露　き角
あだ　八　十ながら古き卵は化(あだ)思ひ　り牛

○

葉の雫　｜兎迄後朝くせの雫拭ひ　晉如
くせ　十六　神へ向いても南無は口ぐせ　安士

○

庵野分　｜ふろ敷に質種包む俄事　左月
俄　十二　俄隱者の佗びも手作り　文先

○

ひさ　｜月待ちて假の内裡の司召　珍碩
假　｜假の持佛にむかふ念佛　同

印　｜柴の戸は納戸叩く頃靜か也　翁
頃　六　[illegible]匂ひの髮洗ふ頃　亭子

三日　朔日頃の粽配るらむ　除風
同　十　[illegible]頭に花も咲けりと言うて來る　同

百囀　｜けふ此頃の空も冬枯れ　風竹
同　十　獻立に着る工夫も花の頃　杏里

水仙　｜外仕事喜ぶ頃の若楓　やは
同　八　のし上がる譜代男の花の頃　兎白

梅十　熊野の[illegible]のいつもつく頃　梅光
同　四　此頃は貍の化くる咄し也　り雪

○

山かた　｜朝寢をすれば九損一德　六之
德　十六　商ひは仕廻遊ぶを德にして　同

○

拾　｜陽炎に田舍役者の着の通り　野明
役　八　師走の役にたゝぬ兩替　去來

其鑑　一九　繋がれて番の屋敷は日も永し　此柱

ばん　菜の二はんに鎌をかくる也　葉ホ
むつ　同　〔十四〕勝筈の碁を二ばん迄仕付けられ　桃りん
居ながら禮をしたる番神　獨
百ばんの外五六百土用干
このは　〔九〕非番と見えてふらぬさみだれ　甫什
同　小筒に番のゆるむ宇治殿　同

○

山かた　〔十一〕晝からの節句も一寸隙になり　右範
ひま　彼岸にも數珠やの店の隙さうな　栗儿

○

拾　〔十一〕今の間に何度しぐるゝい　然
間　豆麩しかゝる窓間の月　同

○

鳥道　〔五〕八朔の禮はそこ〳〵仕廻ひけり　木節
禮　年禮に小さき奴等供させて　翁

○

鳥刧　〔十〕川瀬を走るあゆの献立　芙雀

こん手柄次第に酒は三献　芬風

○

そこ　〔十〕買はぬ香具の手にも移り香　巴青
か　花の香に及ばぬ山を打眺め　兎士

○

小文　籾一舛を稲のこぎ賃　翁
賃　夕ぐれにせんたく賃を投込んで　俗水

○

深　鷄の卵の數を產揃へ　桐奚
數　盆にかぞふる丸藥の數　支梁

○

俳　月はむかしの親父友達　翁
何(あら)昔　昔し棹今の帝の御時に　信章
越　昔し咄せば入相がなる　候才
同　昔しの蛙古池になく　濫之
やわ　髭のほしいも其の昔しにて　富蘭
同　重箱に昔しの殘る帆懸舟　子直
こは折去(なりさり)の例(れい)なれども、世の中、浮世(うきよ)の面去に照

らし見よ。

江戸　鵜殿見しヿは小刀是は葭　睡　足
殿　何もかも笑うてすます親父殿　同

○

續新　方丈のるすは師兄に廻されて　茂　秋
留主　けふ翌と旦那のるすを淋しがり　乙　鳥
桃　臺所も隱居のるすに氣を延し　蘆　洲
同　晝ねに庵のるすを預かる　巵　然
夏衣　二百十日も無事なよの中　文　詞
世中　よの中よ佛の經に噓はなし　槐　五

○

山中　なぶられて浮世を渡る兀天窓　播　東
浮世　今の浮世に鬼は御ざらぬ　涼　ト

○

梅十　井戸の自由を人のうらやむ　り　紅
自由　流れを受けて物の自由さ　呂　杯

○

三顏　誘はるゝ浮世の義理の寺參り　岸　翠
ぎり　まゝしい義理を母の氣配り　東　蝶

○

梅十　代官の友もなければふきげむな　蓮　二
機嫌　母親のきげむを菓子で伺うて　仲　志

○

櫻山　風落ちてけしき若やぐ朝の月　松　宇
景色　柴舟に歌よむ程の朝げしき　山　殘

此卷の定めは、字類指合の大概也。未だ得ぬ書有りて、例に乏しき事あり。後者し輕き古例を得ば此定めを減ずる字類もあらむ。學者其意を得て足らざるを補ひ給へかし。

貞享式海印錄五終

貞享式海印錄六

山　齋　述

數字異同越不レ嫌。（多例省）

（古今二）凡そ數字も迯り字も、耳目の變を先にして、文字の上にて咎むべからず、譬へば、一盃に山一つの如き、語路の拍子の耳に懸らぬは、二句已下に許すべし。

▲かくいへども、支考説きにも同訓越多し。元より數字は筆畫も少なく、義も持たざれば、活字には類せず。辭に類して越を許しけるは蕉門の寛制也。

勾つ

「早い七つの鐘のせんさく　り牛
　葬禮に傘は降りへことつてゝ　やは
「女房の酌で一つのむ也　許六
「尾張もいせも十分の秋　き角

句兄　い

「山柿の門に遊ばむけふの月　秋色
　霧に際つく一對の無垢　塞玉
　折花をかわく莨に包み添へ　桂花
「四條で買うたこの春の狀　同

桃盜　い

「百日紅も未だ初秋　山紫
　吸物は松もどきとて柚の匂ひ　そ由
　これの男は一騎當千　巴兮
　誰やらに惚れてとられし煙草入　柳士
　濡の浮世に十夜しぐるゝ　晉吹
　腹たてば損のたつとよ商人衆　是通
「何と一盃よい燭にして　秋之坊

市庵　音訓

　幻住の二字は殘りし額の板　委均
　人の情を美濃で別るゝ　莊蘭
　ひすらこく浪は二見に打寄せて　筆
　鎌倉の春をもしらず四十迄　涼ト

山こと　同

　堪へかねては章門をやく　坊
　鐘きけば三つ四つ五つ七つ過ぎ　晉北

□波 同一

一はな欠けて貝が踊る氣　ト

　御ぎつたら只は置かぬぞ思ひ草　同

□柿 同

　芋むし一つ蜘の振廻ひき　角

一寢入して其の後は窓の月　丈草

　むしもなくくらん妹もなくらむ　呂物

質におく十二重の歌よみて　危ふ

□さいつ比

息災な親父は一人釜の前　一字

　十夜は鐘に耳の極樂こ　秋

かも川も一せに月の酉渡りぎ　し

□山かた 同

火の端に秘蔵の猫も一人前　東羽

　京の噺しも久しぶり也　六之

名人のまりに一入暮の月　酉跡

□四幅 同いち

鶺鴒の其の尾に付いて又一羽　東怒たて

　たらひの雫立掛けてほす　ト

如在なき降りは遠い一家より　北

□夏衣 同五

　女郎花五器にはもらぬ詩の心　南木翁

痰氣に鼻は隱居してゐる　同

調合は藺[illegible]五分ちゑ五分　支考

□桃 同

五節句の外に月見もそわつきて　一酉

　橋の掃除に川がよごるゝ　夏橋

入聟の源五兵衛そしる鵑鵠　白椎

△數字三續（力働一百句二晉）（老會）

　けふも一日蟬のなく椎　翁

宿ありと五り程出づる案内子　立木

　老はみなく十念をまつ　翁

このーと谷は粟の御年貢　やは

七十になるを喜ぶ助扶持　翁

　三尺通り裡のさし懸　は

行僧に三社の詫びを戴いて　そら

　乘合までば明六つのかね　そらん

四五日鳥鶍の音になれて　箏朗

　百石も位牌知行の有りがたき　沾ほ

竹四五本で藪小路也　如流

一粒もきれいにふらぬ入梅の中　りほ

枯

句

十月を夢かとばかり櫻花　嵐雪
時雨の中に一筋の香　氷花
鎌の手の二間は五疊々々にて　百り
埜の春に六々の八午　潮

行脚

こんにやくの風雅も殘る二三月　五桐
一度通つて見たきいが越　涼ト
一筋に佛の鼻とくさめして　丈松

類

思ひもよしや吐血三代　き角
熊坂と在五中將いへはえに　檀泉

四幅

八景を隣りにもちて落雁屋　蓮一
二人の自慢橋で行きあふ　東怒
一手先見えぬ師走の將棊さし　佳木

百か仙

かしもかす借りも借りたる錢五百　百丈
ゐろりも出來る十月の寒　松浦
すご／＼と二人連にて丹波越　五呑
百歩を笑ひ課したる戀　酉枝

十七

むつくりと起す植木の一嵐　秋高

兒手かしはの三八日寮　雲魚
一匹を繋がす程の御意に入り　丈志

文星

島のもやうも四十八色　市虎
熱い茶をのむ間に通る三日の月　觀水

はの雫　二二三

行きかぬる一分を汚す蠅のふん　雨橋
蚊屋とのぼりに二日路はなき　古井
武士のさゝら三人すり拂ひ　安士

麥　二三四

旅やつれかゞ羽二重の夫婦連　茂秋
日和はつゞく土用三郎　古山
花ざかり机に明くる四季の段　麥林

送り字越不嫌。（か仙十所迄）（多省）

（古今二）送り字は目だつ物なれば、三四句もさるべきにや。

▲略字を嫌ふは古式也。蕉門には上下並べ越も嫌はざる也。元送り字とは、同の字にて、木木を木同、草草を草々、一日一日を一日々々、一

月一月を一月〳〵と略するのみ。仝の草書〻其の草〻、〻〻の草〳〵なれば、眞名假名ともに上一字には〻と書き上二字には〳〵と書き、三字には〻〳〵とかく也。されども二字已上は皆〳〵にて濟ますも埓明くならむ。さるに上一字の時も、〳〵とかくは甚だ誤り也。或説に二字已上の時一月〳〵と書いては、一月月月に紛ふとて、一々月々とかけども、そは又一一月月に紛れなん。何づれも難ずる時は疑あれども、推してよむに煩ひはなし。されども俳諧は假名書なれば、一々月々とは書きにくければ一月〳〵の方に定むべし。是眞名と假名との差別也。されば「むら〳〵とと、はち〳〵ととは書方似ても訓異なれば、指合なき事は支考も知りて誤きながら、三四句もされとは何事ぞ。住に獅子門下の人この語に惑ふ事多し、勘せよ開卷の日。

「さま〴〵の貝ひろうたる布袋　翁

萩枕々の

「地獄畫をかく樣の哀れさ　口遁
きぬ〴〵の尻目に鐘を恨むらん　木因

續寒々と

はら〳〵と桐の葉は落つる手水鉢　翁
書付けてある釜の稽古日や　は
やう〳〵とかき起されて髮梳り　翁

壬々と

ふら〳〵と煙管に付くる貝の殼　猿雖
いくつくさめのつゞく朝風　い然
さわ〳〵と花の浪よる大手先　望翠

笈　同

むら〳〵と李ばかりに市立てゝ　一髮
寢起の儘の天窓付也　杏雨
はち〳〵と竹さしくべてあたりゐる　杏震

雪白　同

きら〳〵と金燈籠にとぼりたり　一山
誰れかはしらず駒下駄の音　倚菊
安々と詞にのこる旅の北　一庸

射　短

「はら〳〵松に遊ぶ鶯の子　十丈
障子さす床の懸物風荒れて　牧童
「おの〳〵ひとつ枕受けとる　北枝

このは　同
｜ちん／＼となる秋の下水　許六
焼止んで庫裡も静まる座禪鐘　獨
｜かたり／＼とさむき沓音
冬の日のてか／＼としてかき曇り　越人

あら／＼と　上下
玄猪にゆくと羽おり打着て　や水
ふら／＼と昨日の市の鹽いなだ　か高
狐着とや人の見るらん　人
柏木の脚氣の比のつく／＼＼と　水

山々と　下
城下は三日法度のをり／＼に　有中
連歌の座敷物しづかなり　其右
水海に闇の螢のちら／＼と　陶五

ひさ　三續
｜度々芋を貰はるゝなり　珍碩
むしは皆つゞれ／＼と鳴くやらむ　正秀
｜片足／＼の木履尋ぬる　碩
そこ／＼にならぬ行燈の火が細い　南枝

百か仙　上並　下並
ほろ／＼あめのかゝる行水　柳泉
一畝の粟も嵐にゆら／＼と　不柔

｜八朔客の今にべん／＼　雨支
△飲食かはり越を不嫌。（古へは二去）
｜小鍋のかゆに猫の狽せき　山市

其鑑
掃除して箒をはたく椽の端　右分
｜息子の運ぶ茶を專めてのむ　可及

かも
飲喰の口にこそ世はあぢきなき　そ竹
流れ次第の舟のはら／＼　鷗魚
門にまつ息子をたらす傾の飾　素後

雪白　酒肴
｜口あいてゐる鉢の赤貝　ろ九
道成寺過ぐる間の南風　白椎
｜托盞の酒をこぼす芝原　有節
△飲物二去。（古へは三去）

白たら
目藥さいて茶のみ友達　秋之坊
酒のよい所は嗜し月と花　野棠

さみ
咄してゐれど茶もわかぬ也　玉らん
酒と名のつけば酸でも飲みたがる　同

浪
湯はぬるけれど薄茶一ぷく　厚羽

―ほえ釣りの酒はさめたる水の月　桃　妖

△食物二去。同（多省）

―けさ食うた儘に調市が柳ごり　支　考

飽かぬ物には豆麩なりけり　北　枝

東山

消のこりたる冷飯の様　夏　段

―有がたい殿の詞を膳の上　右　範

蒲鉾をやくは花見か芝居見か　そ　吹

はた

―飯の御恩の天下太平　友　五

夕飯に何はせねども夕月夜　百　阿

さみ

―香物くひて犬にかゞるゝ　一　字

晝飯に朝寝の手水さし合はせ　り　紅

長ら

―村はにぎはふ毛見の辨當　霜　烏

赤も黄な粉も餅嫌ひやら　水　胡

歌

―晝飯か夕飯かとて笑はるゝ　谷　太

月見の席に飯はくひ勝ち　玆　少

むつ

―手の垢に飴はきたなき蝶や鳥　茄　毛

山中

―さしこゝろ得て酸物を出す　蘭　少

―夕飯の約束もして花も見て　凉　ト

―つみ麦に藻魚かさこやかな頭　自　櫻

―生姜酢ばかり何やらの鉢　同

焦

節は近江で仕廻ふ献立　そ　守

―お寺にはくはれてあはぬ百の齋　野　角

難

△非飲食物同價越不レ嫌。

菜穀類、野菜、藥、狩漁の鳥魚進近、豆ふ屋、菓子屋、酒屋、茶湯師、食傷、留飲類。

―冬まつ納豆たゝくなるべし　や　水

花の跡櫻のかびを捨てにけり　翁

冬

・―僧物いはず歎冬をのむ　羽　笠

―飯くひに行て果てぬ船頭　風　草

馬市の叶ふ新地の御取立　昇　角

歌

・―むかしは米が百に八升　冠　那

―強ふるにこまる幸い入對　覽　陳

蜆岸に瓢遣ひかゝる宵の月　孟　遠

このは

・―茄子をくひに鹿のこす也　壯　奚

難　|喰さぬ意趣を組の讒言　杼柳
折々に妾の親は消えに來て　知角
・|けふの精進は鯖江さう也　山りん
きしん　秋かつを本膳の部をはづされて　杏荚
茶めかせたまふ上口かな　咫尺
・朝腹の尋ね慥に蓮もどり　安士
う陀　・客人に食傷したる玄關番　許六
荒剃刀かゝるこんにやく　毛
春も又さゆる朝の赤豆かゆ　程己

△飲食付句。(多省)

一次摩　冷飯を鬼一口に喰ひてけり　似春
是生滅法生姜うめ漬　翁
根　嬉しがる階子の下の濁り酒　臥高
砂鉢の蛸を双六の賭そ　紫
草刈　飲捨てし鉢の肴に猫の聲　牧童
よそは味噌する夕飯の空　浪化

(古今四)飯、餅、茶、酒、此の類其の名を其の儘に百句に二つ也。

(星月よ)酒、酒、酒、酒、あわもり、諸白、みきなどゝかはり、折に一つづゝ、上戶、下戶、醉、醒、樽、盃等の噂、面をかへ都合百句に六つばかり(已上約文)

▲かくいへども角、支考認ひ卷の、然らざるを見て二書を勸破せよ、何故に二十等身を省みざるぞ。

△酒同訓面去。

蓬　松風の鬖に酒をのみ盡し　閑水
十四　戲れて君と酒買ひに行く　翁
同　酒のむ姨のいかにさびしき　桐紫
十一　羽おりに酒をかぶる櫻や
しゝ　嘘ならば今のむ酒も毒となれ　昝及
濁り酒にてだます權現　山りん

△酒音訓、飲、醉、樽、盃にかはり五去。

|まだ目のさめぬ酒のちうたき　東藤

拾　酔うて又寝るこのはしのうへ　翁
茶に酒にまづ水のあたゝか　そ紫

花摘　瓜十分にしたす盃　き角
名月よし酒迎人と　と宅
酔顔を紛らかしたる作り髭　紫雫
酒價すむ旦暮月もはや入りて　彫茶

句兄　打身に酒を是薬也と　角
酔うて廬山の雪の曙
あこぎ〳〵と春の酒もり　棠

類　解けて流れて三階の酒　成示
踊迄筑波に勝ちしお酌取　其蔚

やへ　思交に祈るおゑみ酒　釣寂
新酒否なら否にしておけ　示右

△飯、面去。

雪光　重箱に晝飯通ふ後道　保州
飯は焚ずに上の空焚　蘆舟

長ら　晝飯過ぎの鑿磨いでゐる　り雪

難　念佛講の飯はもち寄り　蓮二

△飯、茶、其の器とかはり五去。

飯次に火燵の猫も附いて出で　左林
飯留に合うても鈍な物覺え　禹洗

白たら　日薬さして茶のみ友達　秋之坊
近い世帯の先茶わんでも　雨青

三笑　譏れとても茶碗を見れば新酒にて　古賀
榎木が茶屋で鶺の隙やら　播東

△茶、面去。

桃　迎へには茶漬喰する氣も付かず　雨揚
茶になぐさむる年寄のるす　徐來

つるも　立茶所望でばゝのわせたる　旦井
茶湯の好な人のやゝ寒　半袖

櫻山　咄すあがりに茶を入れてにる　萩人
ばゝ達の又寄合うて茶の匂ひ　風絮
娘がくれた重で茶をにる　梅滴

三日　彼岸の内の茶は手ものなり　支考

茶菓子もちよつと柴の爪折　除風

△餅、面去。

梅十（十二）
此餅を喰うてはあはぬけふの鶯　桃川
賣ぬけを知つて餅の焼米　泊楓

類
たべつけぬなんひん餅を忍ぶらん　朝叟
餅の丸みを握り出すつや　嵐雪

△米。面去。

このは（六）
焼米をそつと一匕茶に佗びて　壯奚
小春天氣に米だるゝ左右　列孚

同
餅米たくはふ慾り來にけり　許六
たんたと米はいづる川口　獨

△菓子。鹽、油、肴、折去。

櫻山少（くわし）
しめやかな雨に茶菓子の取合せ　萱曙
面々盆の菓子つゝむなり　和笑

百か仙（しほ）
是ばから酢も懸けられぬ鹽肴　李邦
盃に鹽をつまみて淀の花　晩柳

古拾
油何々雲に流るゝ　春澄

油
帳面のメを油に揚られて　翁

梅十（三う）
聲のかれたるさかな賣り也　呂杯

肴
たしなみておく肴振廻ふ　七雨

△藥、面去。

星月（十）
藥の名代賣ひろめたり　松人
灸かぶれ無二膏はればひつ付いて　松和

類
藥箱一つに持たせて恥しき　介我
匕がふるへて藥味こぼさす　同

△湯。飲、溶、泉かはり面去。

湯汁、此の類言ひかへ。折を去りて面あるべし。

▲音訓言ひかへては、二去の自讓（じよう）あり。同訓用かはりては、五去か面去にて可ならん。

白たら
褌忘るゝ湯上りの袖　支考

音訓
茶湯するけふの佛も草の蔭　同

笑（わらひ）（せう）古（ふる）（こ）二去の例に同じ。

きく十（三）
湯衣の色のそろふ踊子　乙由
湯氣もさめぬに豆ふ急用　昨なう

浪□ 湯の花あくる杜の神風　金嶺
六
湯上りに出て見る店の人通り　桃睡
笠□ 雁はれぬ日も湯に入りに來る　連支
九
奢のくせになりし湯の山　童平
たふ□ 湯の山の出る日はおゞの機嫌也　東羽
九
洗足の湯はちり〳〵と一藥鑵　馬岐

(古今圓)豆麩をおかべと言ひかへても一座一つ也

▲豆麩は何故に制重(せいおも)きや、言ひかへずとも折去(をりさり)にて可ならん事は、菓子(くわし)の例にてしるし。

□衣類二一去。　(古は三去)(七部例省)◇

句餞 鷰下りて野服かいどる秋の露　沾荷
大口着たる庭の雪掃　翁
けふ 干帷子のしめる三日月　猿雖
衣着て旅するこゝろ静かなり　翁
雪丸 垢れて寒き禰宜の白張　風流
咲きかゝる花を左りに袖敷いて　木端

壬 露にけさばや着る物の紋　百歳
狩衣に下知のゑぼしを傾けし　梅額
深 中形の半着物も旅なれて　杉風
地をするばかり駕籠の振袖　そら
しゝ 羽おりを質に取つて戻さぬ　半睡
粽ゆふ笹のつゆにも袖ぬれて　知角
其鑑 一季居も築地に綺羅を引出され　巴洲
袷になりて見ても肌寒む　一字

△非衣類物越不レ嫌。

夜具、冠物、襷、帶、紐、足具、鐙、織物。

一色付 ○朝霧たゝむ夜着の蘆鶴(たづ)　杉風
揚屋よ。月は雲井に歸らるゝ　翁
○乙女の姿白繻子の帯　風
つばめ ○手枕に襷の埃り打ちはらひ　翁
美しかれとのぞく覆面　北枝
つき小袖薫賣の古風也　翁
挟んではあるかと腰の汗拭　桐葉

拾
一非人も都そだちなりけり　翁
脱ぎかぬる一つ羽織のひとつ紋　閑水

あら
・けさよりも油揚する玉襷　越人
行燈はりて歸る浪人　嵐雪
きるものを砧にうてと一つ脱ぎ　同

夕顔
・一鰻かくとて帶やたくれり　宰陀
田樂もやせて枯野の一つ家　我笑
一莚うつ身の綾におどろくり　角

かも
・ひがんには江戸紫の雲の帶　素後
ばゞに詞を御門跡樣　鷗笑
首綿に目病の涙おし拭ひ　正住

其灯
・買ふ人が來れば細工の肌入れて　麥林
下におかれぬ物をあづかる　舍朶
花ざかり石の鳥居も小袖摺　茂秋
△衣(ころも)に衣(ころも)　三去。

壬
一腕押つよき露のころも手　槐市
紙衣羽おりをすこし匂はせ　式之

匀
一月雪にさびしがられし紙衣かな　許六
懷のふくれてつるゝ夏衣　汶村
△衣(ころも)に衣(きぬ)　五去。(古今詞)

焦
一藪入の天の羽衣稀れに着て　周東
紙衣折々着ねば疊皺　舍曲
頭巾有りて初旅衣杖はなし　舍翠

十七
但馬糸のより所げに戀衣　自圭
○

衛
⊗後朝のまだ振袖にゑぼしきて　自笑
三
白きぬに萩と葱をおり込みて　如風
△袖、懷　五去。

一色付
一手水桶雲の廣袖月もりて　杉風
茶巾さばき袖より傳ふ風過ぎて　同

同
⊗つらからん鬼のめかけの袖枕　同
三
唐衣涙あらひし袖の月　同

藤實
⊗借りよする祭の小袖二三百　野徑
三
饗應に髮を代なすそでの露　里東

やへ　[四]もれて襷に小あゆくむ袖　松卜

類　廣袖や蜻蛉つゐにうつ女　信德
[六]片しく袖にあとは艫の町　艶士

同　新疊これも苧なる袖の雨　虎吟
一撫に天の羽衣を五合桝　專吟
[六]臺にたつ桒を袖にすらるゝき　角

○

芭　講釋聞の僧の懷　黑露
[三]懷手してにくいしゝ舞　宗瑞

△帒、布、面去。

此梅　大黑の帒は花にほころびて　信章
[十一]よしやよし小糠帒の濁る世に　翁

匀　死こしらへの布をたしなむ　許六
[十四]ほか／＼と豆ふの布の湯氣立て　同

拾　五六丁布綱ほせる家見えて　如行
布帒やぶれ次第の秋の風

□異器財越不嫌。（多省）

異なる器財に打越を難ずるは古式也。蕉門にはさる小事をもて變化をはからず。

武士の刄祭りを荒れにける　楊水

次匀　女はなくに早きとていむ　才丸
あさましく鏡のひづみたる恨み　翁

刀、鏡は男女の魂とする器なれども許したり。

雪の狂呉の國の笠珍らしく　か兮

冬　衿に高雄が片袖をとく　翁

笠　たる　かね　化人と檜を棺に飲みほさん　重五
けしの一重に名をこぼす禪　と國
三日月の東はくらく鐘の聲　翁

くらがりに藥鑵の下を燃し付け　昌房

ひさ　やくわん　やりはこ　傳馬をよばる我が廻り口　正秀
いきりたる鑓一筋に挾箱　及肩
水汲みかふる鯉店の秋　野徑

きりこ「さわ／＼と切子の紙手に風吹いて二　嘯

△同體器財、二去。

酒器、飯器、臺所具、立具、鳴物、樂器、武器、表具、大工具、商具、雨具、臥具、女巧具、書畫具、旅具。

し＼　「若い鉦鼓に軒の燈籠　巴兮
鳴物　「晩鐘のあちらこちらに隱れ里　問次

このは　「燒止めて庫裡も靜まる座禪鐘　許六
同　三「辻駕のしをれてはひるたゝき鉦　獨

やへ　「虧栗を月の雫に吹取つて　圃水
樂き　三「小鼓に兄が謠をあしらひて　示右

ひさ　「狐の恐るゆみ借りにやる　珍碩
武き　「いらずとて大脇差も打ちくれて　正秀

白たら　「よしある家と見ゆる矢屛風　北枝
同　「川こさば近いに橋は弓と絃　支考

深　「鎧かなぐる空坊の緣　洒堂
同　「露に朽ちけむ一腰の錆　支梁

○　㋬

ふり雨具　「思ひやる笠に千里の風寒し　午潮
三「懸け廻るみのを野分の吹亂し　桃呂

○　㋬

ひさ臥具　「粘強き夜着に小さき蓙敷きて　泥士
「妾くせに枕のあとを寢直して　乙州

△笠、枕　五去。（古今同）

山こと　「いかさまあれは只ならぬ笠　八菊
「谷の戸いづるうぐひすの笠　馬岐

後旅　「切つて牡丹に日を覆ふ笠　介我
「笠置は物のすごき水音　嵐雪

句兄　「後るゝ徒士はかろく袖笠　彫棠
六「すゝ掃に笠も薪も片付けて　肅山

○

つばめ　「手枕にしとねの埃り打拂ひ　翁
「初發心草の枕の修行して　同

焦　「波ならなくに馬の脊枕　檀泉
六

一あの枕こゝろを見んと流足　同

次匂　一枕の清水香薷散くむ　楊水
七
荒布のしとね辛螺を枕と　同

△枕、箱、薹、箸、面去。

三日月つゑ　一枕の撞木は釋教の外　一飛
杖突の重石もきかぬ日雇共　野秋

花つみはこ　一くまぐ〵さがす尼の針箱　彫棠
六
金箱につゝまれながら霜寒し　き角

焦　同　一小坊主をはさみ箱から傀儡師　序令
十二
脇息に押へて花さへ枕箱　東潮

○

同だい　一身を一つ花にふらるゝ瀧見臺　合曲
五
燭臺を配りぞこなふこゝは闇　銀杏

次匂　同　一飛雨臺の跡は霞に空しきぞ　翁
十五
戀崎の松か娘の花の臺　同

○

一梅風はし　一願ひによつて雪の竹箸　同
十一

尖矢二筋組箸の先　翁

△荷、紙、簾、面去。

鳥追荷　一升荷の舗の時分はづるゝ　翁
十
したく〵と京へ枇杷を荷ひ込む　木節

低　同　一かち荷持手振の人と咄して　翁
十
露しとれども輕荷ふらつく　野明

炭　同　一夜々に西國武士の荷の湊　こ屋
十三
濱までは宿の男の荷をかゝへ　やは

○

桃盗かみ　一松に雪月うす〵とよしの紙　普吹
紙細工には雨の日ぞよき　を山

百か仙　同　一四五束の番を持つても紙屋にて　天[illegible]
時分でもない番子せんさく　[illegible]

壬　簾　一若殿の簾の中の大笑ひ　梅額
み簾の屏風に書く唐獅子　同
月清く夕立あらふみ簾の煤　沾蓬

句　同　一獨り簾をあみくらす妻　沾荷

庵野分　同　山吏に笑ふ様なる簾先　梅窓
簾にしのぶ影が見えすく　咄哉

△刀、弓類、面去。

○

皮　（一八）既に厠へおちぬ脇ざし　嵐雪
大小の長いでおどす角力取　口遊

○

深　（七）巻わらに肩休まするはづし弓　北こん
花の陰射よごす鏑防ぐらん　去來

△鐘、鉦、太鼓、面去。（古へは百句三）

壬かね　（十六）挑灯をとぼせといひし鐘の聲　夢牛
明日の鐘鑄の月も晴れたり　式之

一橋　同　（十八）今なるは初せの寺の鐘かとよ　國瑞
槇の木立に鐘ひゞくなり　魯隠

○

やへ　同　（一八）七つの鉦はきかで明鐘　示右
世の外と閑しからぬたゝき鉦　只丸
山かた㊀日も入舟の太鼓近よる　野航

たいこ　風に太鼓の音は何所やら　野航

△車、面去。

藤　（十六）下簾車を横に月さして　東李
車に息をくるゝ日の岡　半蔭

車百句に二と云へり。其門人にかゝる例あり。

△金、銀、錢、音訓、面去、同訓折去。

草かり錢　（十一）死にざまは錢六文に草枕　從吾
借せんの節季を何と駿河殿　同

かも金　（十四）今吹の小判を橋に廓より　鷗笑
千金とあるわれ〳〵が春　執筆

○

鶴　（十六）永祿は黄金乏しく松の風　仙化
酒もりいさむ金山が洞　朱弦

三日　同　先度の狀に金が屆いた　除風
かねほしがるも人は尤も　同

△金、銀、錢とかはり　五去。

はの雫　家中に金の見ゆる柿時　柯木

美男に錢がなくて嘻しき　蓮之

梅のさか　懷へ金くれさうに手を入れて　天垂

八　錢なら百が苦を懸くる也　三惟

このは　小判にて錢も買はれず湯治旅　杜六

銀をかす利勘の爲めの寺參り　石介

△草鞋、繩、俵、網、折去。

桃白 わらじ　若皇子に始めて草鞋奉り　濁子

老の草鞋のいつ脱けたやら　翁

○

ひさ なは　小歌そろふる碓の繩　探志

なはをあつむる寺の上茨　及肩

類　ほつたては蜘手搔繩待ちほうけ　格枝

九

同　うつかりを多勢が中へ飾り繩　同

○

別 たはら　よき雨間につくる茶俵　子さん

濡れたる俵をこかす分取　八桑

ひな　薄月夜干か俵のなまぐさき　子さん

たはら　俵のちりをたゝくきる物　翁

○

梅十 あみ　網の魚雫ながらにお前まで　蓮二

あみの儘西瓜を井戸へ冷し置き　呂杯

△樽、蓋、板、折去。

山かた たる　酒とは見えぬ麥まきの樽　自狂

酒のない樽なられせて置きはせで　野航

雪白 ふた　挽のふた階子の坂にかたかりて　知角

一日の隙は地獄の釜のふた　小春

匂 いた　宵の豆ふの氷る爼板　朱紬

瓜茄子戸板の上の魂祭　同

□書體二去。

天帝に目安を書いて聞え上げき　角

次匂　秋に對して所帶堂の記　才丸

源氏をうつす手は下りつゝ　半殘

みの　夕月を扇に書く秋の風　三蓮

△非言體物越不ㇾ嫌。

雪丸
—物かく度に削る松の木　一槃
星祭る髪はしらがに枯るゝ迄　そら
集に遊女の名をとむる月　翁

△集、冊子、詠、吟、句とかはり三去。

次匂
這句荘子を以て見るべし　其角
灯心賣と詠じけん月　翁

同
詠みおく月に株萩を買ふ　楊水
蘇鐵の亭に題を設くる　才丸

住吉
忘れ草間へばや秋の家の集　元梅
黒々と酒功の讃の二た行り　青流

東山墨
蛸木にのぼる藤の先吟　子靖
歌仙にも寢轉びかねて戀の歌　宇中

△詩。歌、連、俳、文とかはり五去。

冬（歌連）
秋の頃旅の御連歌いとかりに　翁
六 麻刈といふ歌の集あむ　同

枯
下七 心彌生千句の俳諧に　如行

（歌俳）
—ひよつとして歌の五もじを忘れけり　聽所

深（歌文）
釋迦に讃する壁のかけ物　杉風
七 山の内裡の歌もしまさる　石きく

蓬（詩歌）
歌よみて女に蠶贈りけり　翁
三 庵住や獨り杜律を味はひて　叩瑞

山こと（詩連）
詩に作る瀧はなけれど三日の月　呂吟
四 連歌の中にひよんな指合　音吹

このは（同歌）
法師にあひて撰集のさた　許白
八 僧正に百首の歌を擧められて　甫什

△文(ふみ)、玉章、狀とかはり五去。

山こと
狀の返事の日は暮れてゐる　野航
三 玉手々々ときぬぐ\の文　八菊

奥
玉章の衿よりのぞく思ひ草　支考
六 傾城の文すかし見る朧月　清風

低
いせの狀日の間しき春　去來
七 點かけてやる相役の文　浪化

ひな
—小ふれの文を贈る村々　濁子

返事せぬ手紙は掃いて捨てぬらん　嵐雪

△狀、文、札、面去。

文百句四と云へり。支考說面去あり。

梅十 狀 ｜隣道を尋ねて狀の行所　有琴
十六 返事の内のながい狀箱　蓮二
山かた 同 ｜講書には似ぬ狀は懸乞　白狂
十五 觸狀持つて待つてゐるげな　栗几
金龍 文 ｜文が來て氣が氣ぢやなしの橋立や　青峨
十三 萬籠よりうつゝを越して捻り文　又魚
このは ｜下げ札に petition の極まる宵の月　湖遊
禁制札をぬくる乙鳥　孟遠

△歌、繪、墨、折去。

續原うた ｜月花の境を分くる歌の公事　琴風
九 御旅の早歌神しいさむる　不卜
雜ゐ ‖繪にかく鍔に障子霞めるき　角
治郎の繪馬その紋にしる　同
一見 ‖身を墨に何をうらみてなく鳥　似雲
すみ ｜茶小紋の羽織は墨に染めねども　翁

□異火體二去。（古へは異同共三去）㋬

蕉門には焚く、灯すの別をもて二去に許したり。

けふ ｜茶けぶりのたつ暖簾の鐶　望翠
燭臺の小さき家にかゞやきて　翁
拾 ｜地雷火に逆だつ浪の赤走り　叩端
忘れて焦す飯の焚尻　同
しゝ ｜灯籠はみな判じもの也　山りん
小座敷へ師走を逃ぐる置火燵　觀水
かも ｜灯明の火も人にけさせぬ　素後
焚付けて茶立つる竈の晝茶時　そ竹
一橋 ｜七々日□を見ぬ晝の灯火　清風
木の間もる伽藍の烟り渦卷きて　一品
三か仙 ｜どや〳〵と寬をあぶる藁焚きて　越人
障子明くればきゆる灯火　そ竹

△同火體、三去。

あつみた
土物竈のけぶる秋風　翁
火をたく影に白髪垂れつゝ　不玉

初茄　同
燒栗に後の月見もゐろり端　嵐七
筥あげて食たく舟の夕烟り　呉天

一色付　同
二　開闢の天地既に火砂鉢　杉風
思ひのけぶり果は釜焦げ　翁

○

拾と
月はれて燈火あかき海の上　同
提燈に大蠟燭の高けぶり　去來

天河　同
燈籠に伊達をのこす若後家　山流
まだ明いのに早い提灯　岩芝

△非火體物越不ㇾ嫌。

燒魚、燒香、民の竈、灯籠、提灯とかはり。
灯の影珍らしき甲待　翁

匂
山ほとゝぎす山を出る聲　許六
兒達はあゆの白燒許されて　酒堂
此風に火の用心も西は唐　栗ル

歌
若い男にをしい聲　六芝
燒香の皆晴れがましたびの裡　蓮二

△火、烟、燒、焚、而去。

衞　火
火をけす顏の憎き居　重辰
四　大年の夜の灯火影うすく　知足

菊露　同
五　蠟燭の火もろふ夕月　正秀
金掘りにいる洞の灯火　里東

續原　同
霧うすき夜はちかき船の火　勇松
五　かいつめらるゝ火渡りの負　溪石

拾　同
ちら〳〵ひかる糠の埋火　去來
九　菰に火のもる舟ごしの小屋　鼠彈

同
十　町端の埃はきためて火に燃す　同

三顏　同
六　焦がしたる扇つかふ蚊やり火　朝四
秋さむき杣の假小屋火を焚きて　不有
十一　灯臺の火に張出の内は晝　同

○

衞
明日の命の飯けむり立つ　安信

烟 ｜ふすぶりし榾の烟りの白けたる　重辰

○

俳諧なやき㊀ 鰯で假の契り燒かるゝ　翁 二

實にや花白樂天が燒筆に　同

燒焦がしたる小つまもみけす　同 七

勻　同 燒山越の雲の赤兀　嵐らん 八

兒達は年魚の白燒免されて　酒堂

○

後櫻たき 柴焚立てゝけむる雨の日　二竹

｜七 そなたが食をたくも良寒　支考

拾　同 野火たき捨てゝ道かはるなり　嵐竹 九

生木を焚きてあたる冬の日　岱水

初茄 苫揭げて飯たく舟の夕烟り　呉天 十二

同 小屋でぱつぱと鉋屑たく　東羽

□異色字越不嫌。

｜青い疊に月の澄みきる　許六

勻 燈籠の果も近づく地藏盆　木導

｜白川石の色の露けさ　汶村

竹の子を甲斐の黑胡麻白い胡麻　播東

山中 寶づくしの經がはじまる　水音

紫の上も四十の老の浪　涼と

白露に小僧のちゑの走り過ぎ　同

ふり 愛も名所の雪隱の蔦　加友

あとからも黑木に花を戴きて　丹之

｜へちまの花も白き夕暮　湖十

續花 舟大工おのが拍子に狂ふらん　步閑

｜宿の料理をあつる黑鯛　超波

△青、黄、赤、白、黑、各三去。

春と秋白 衰ふる父の白髮を氣に懸けて　路通 二

何が何やら春の白雲　嗒山

やは 小萩がもとの白酒にゑふ　許六

同 北山の白みて寒き雁の聲　去來

雜 顏のしろきに覆面の跡　ふ船 二

白　波の月波戸の泊りも白みゆくき　角

山こと　さく花の壁に移りて皆白し　嵐雪

同　海面は氣の盡きた時面白し　林紅

浪　白雲の梢にかゝる瀧の糸　松宇

同　面白い恨みに今宵只歸り　求聴

○

炭　黒谷の口は岡崎聖護院　り牛

くろ　人のさはらぬ松くろむ也　同

○

同　ちゝめきの中に撰出(よりだ)するりほ赤　こ屋

五

あか　日のあたる方は赤らむ竹の色　同

○

さる　堤より田の青やぎて潔き　凡兆

あを　晝ねむる青鷺の身の尊さよ　翁

△色立一卷一。

赤坂の名も折からに紅葉して

知行寺やらいかい白壁

(うやむや)是を色立(いろだて)といふは、紅葉(もみぢ)に白壁と色を取合せたる故也。併しこの付合(つけあひ)の妻は、尤(けやけ)き故に强ひてする事にあらず。百匂一兩所と心得べし。

袖　秋風に吹かれて赤し鷺の足　洒堂

伏して白けし稻のほのなみ　諷竹

句兄　心敬の夜話白々と明けにけり　嵐雪

赤葉の芹にさむさ覺ゆる　神叔

枯　顏赤うするみりん酒の醉　之道

白鳥の鑓を葛屋に持せ懸け　探芝

浪　白魚の實に面白き料理組　何由

雲丹は黄色に防風紅筆

げに面白(おもしろ)き料理組(れうりぐみ)と云ふ餘勾、外に組合うたる色ありと見立て、黄色紅と付けたり。前句に色立すべき句作りの掛りなき所にて、只色の字ばかりを並べたらんは拙き限りならむ。

□疊字疊語。

一字を疊字と云ふ。數字を疊語と云へり。前句の末より後句の頭へ疊むは常也。又置所互に變りたるあれど、句拍子第一也。勿論疊みたる詞のみ似て、その意大いに變りたる事を思ひよるべく、若し同意の事を付けなば甚だつたなきものとならむ。

○深川より大垣へ文通。

當地或人の付句あり、此の句江戸中聞く人無御座候、予に聽評望み來り候へども、予も此の付方甚味難レ辨、依レ之御內意賴進候。貴丈御聞定之旨趣、密かに御知らせ可被下候。東武に弘めて愚之手柄に仕度候。

　　韮の柵木に鶯と眺めて

其附句　鶯のゐる花の賤屋とよめりけり

二月上弦　　ばせを

木因様

○其返書

花牒拜見、或人之付句貴丈御聞定無之、依之愚評之儀被仰越、予猶考へに落不申、乍レ殘念レ及レ返進レ候。隨而下官去比上京之節、古筆一枚相求め候此切京中定むる人無御座候、依レ之貴丈へ御內意賴み進じ候。何之御字の御撰集筆者等御見定めの旨趣、密かに御知らせ可被下候。花洛に弘めて愚の手柄に仕度候。

其古筆切　菜園集卷七春俳諧歌

　　韮の柵木に鶯のゐるを眺め侍りて

　鶯のゐる花の賤屋の朝もよひ

　木を割る斧の音ぞ聞ゆる

二月下弦　　木因

ばせを様

▲こは翁の鶯の付を眞に感ずる人もあり、同物の付を珍らしといふ人もあり、又言勝に道を翫ぶとそしる人もある故に、木因の心を引見んと文通ありけるに、かく翁の腹を探りて答へけるは、實に鄙匠の境界也。

婆々なれどばゝといふをば腹立ちて
　　婆々といへども御所の御道具

（古今五）或は低句より高句へ疊みたるあり、付合は前後に付くるものなれども、高句より低句へ疊むべし。語路の拍子のちがひあれば也。

▲低句より高句へ疊みたる支考跋きの例多し。何れにても語路の拍子は勿論也。さてこの付意は、前ははらたてたるばゞの自句なるを、次の作者はばゞに腹たてさせし人を押へる詞と見たて、ばゞといへども、あのばゞはお役にたつ人なれば、必らずあなどるなといふ意を付けたり。此先案名は色々に御所の御道具と云ふ句なるを、しか言うては付味聞えざる故に、ばゞといへどもと直したりとぞ、凡そ詞を疊むには、かくいはではかなはざる時にする事也。

八□夕　琵琶に拍子を付けてさゞ波　友五
　　さゞ波や雪の花ちる星月夜　何竺

前はびはの音の作意なるに、後句は湖邊にてびはをひく樣と見立、白龍雲に現はれたる俤を付けたり。

雪□白　さびしかりけり籾うすの歌　ろ九
　　淋しさは柿赤々と秋の風　岸虎

前の臼杼歌を風の便りにきく片里の草庵と見立て、落柿舍を思ひよせたり。淋しさはと押へたるは、前の淋しみを一倍する一體の付方也。

卯□花笠。　都にはぢぬ志賀の山水　盧元
　　山水に物好付けて四疊半　玄蔵

前は志賀の現景を稱する句なるを、次には今の京に、しがの移りたる居宅の築山と轉じたり。

宇陀　杜は丸太花はみよし野　り由
　　よしの山櫻々とうる櫻　許六

前のよし野は作の取合せなるを、次にて眞の吉野としたり。

文星　野の色の野の錦のと罷り出て　八川

野にねるときは名さへ野槃子　琵舟

名月に晝の錦や野も山も　濫吹

山こと

野に千秋の山に萬歳　蓮二

晝の錦といふをよき衣裳と見たてゝ、謠のことばもてたゝみたり。

山雀の晝くゞるなりみわの山　兎士

三千

山の錦も夜はあやなし　二

晝夜の對をもて山の字をかさねたり。

□一字一點。

常々は出家の事をうらやみて

菓子盆ばかりのこる寢所

(東西)此等の付句にて俳諧の迷ひ所をしるべし。常々はといふときは出家になりて後也。常々にといはゞ出家にならぬ今なり。にとはとの境に一、過去現在の二つあり。さて其の人の出家の望ある事を知りたるは、親にあらず子にあらず。又妻にもあるまじ、常々はと云ふは友達のしりたると見るべし。菓子盆とは前夜まで友達の寄りて遊びし部屋なり。これを「三弦ばかり殘るとせば、その樣菓子盆よりは似合しけれども、前句に出家の望みをしりたる相人をこしらへんとて、菓子盆とは置きたる也。すべて付句は一字一言も前句にいらぬ事はいふまじ。しかるに世の人の付句はそのあたりとこゝろ得て、わが作意にまかせて句を作れば、一卷は皆はなれ〴〵也。此の邊は蕉門の筋骨也。

▲翁門人の遺教多かれども、付句は凡そ二句の懸合せと一句の手柄のみてふを説きて、付肌の微中解し人稀れなる中に、百世の後の惑ひあらん事を慮りて、微中の論に生涯の膓を破りしは獅子庵のみ也。偖この付は、出家せし後へ友の訪うて、常の望みを咄す體也。若し前句常々にとあらば、又いかなる付かあらん。

行燈の火口を風にふりむけて

馬に戻せときる物をかす

(ゐ辨五)馬は門口に乘懸をこしらへ、旅だつ人は野袴に、見渡す家根の霜も寒ければ、此の着物は馬にもどせと、衿折りて後ろに立懸りたるは、伯母とも姉とも見ゆる也。

行燈の火口を脇へふりむけて

童に聲をかくる小便　蓮二

脇へとする時は家居の樣忽ち變り、あばれたる臺所に夜更けて淋しき姿にて、せどの細目に風をいとひて、爺親の只獨りたばこ吸ひゐる樣ならん。

▲こは先句の風にを脇へと取違へて、句評を乞ひし時の判詞也。本書は書續きなるを、爰には分けて出したり。

奉公に出る子は親の氣も知らず

市の便宜の七日七度

(ゐ辨五)出る子は年も十八九にて、鍬鎌の業にも身をいれず、在所より二三里へだてたる七日市場の町奉公ならん。その給金は天窓の伊達にもたらず、その市の便宜びんぎに親をせがむ樣を見よ。

奉公にやる子は親の氣もしらず

旦那廻りのお師にことづて

やる子は年も十二三にて、國より四五十里もへだちたらん。社家方の年季奉公にや、鰹のあらの煎物よりは、在所の麥飯を戀しがりて、母に言傳のあどなき樣あり。

風呂敷を片寄せておく窓の下

旅寢はさむき老僧の咳　蓮二

かく付けし後にて、片の字指合あれば拵へてに直さむといふ、然らば付句の心大いに違ふべしとて。

風呂敷を拵へておく窓の下

異見をすれば小便にたつ

前の片寄せては、二三日も旅にある人にて、用心ふかき老也。後の拵へては明日旅だつ今宵に手まはしよき若人也。さるを親心のくど〳〵しく、矢

橋はのるな。巾着切にあふなと、遊所遣ひ必ずとたら〳〵の異見し掛りたるに、子は親よりも賢しと聞きなぐりて、小便にたつふりして、友だちのかたへいとまごひにゆきしと見て、この句のさかひ明らか也（約文）

お寺から目下に城も見ゆる也

笠敷きながらたばこ吸ひゐる

（續五論）かく付けては宮も寺も山類水邊も同じ事也。假令豆麩こんにやくと思ひよすとも「寺からはといふ五もじに成りて、おの字の風情は付け落し侍らん。

夜着の馳走にあひし久六

かくいふ時は、寺の富貴を久六が譽めたるおの字の意明らか也。

▲こは和尚の親里の使にて、寺は城北の祈願所也。都て付句の論「東西夜話「爲辨「續五論に多し。

あら　入込んで足輕町の藪深し

思ひ逢うたりどれも高田派　釣雪

前句觀想の體也。委しくは七部婆心錄に註す。

し〻　くゞれとて足輕町の正木垣　沂青

雨のふる日に教訓をよむ　丈志

前句垣の穴に覗きたる體ある故に、其内の聞物を付たり。其庭訓よむ子日和には垣潜りて遊ぶらん。

笠　足輕町は杉の生け垣　蓮二

上手とは拍子でしるし機の音　そ琢

前句こもりたる垣の樣、還通の人見渡したる體と見て、はの字の餘情を取り、所帶持よき樣を付けたり。

長ら　紙燭して二階へ上る不用心　り雪

問屋の挨はくは貧乏　琴風

前句物に氣を付くる樣と見て、制する用を付たり。

し〻　二階へは手燭灯して上らせず　り兄

恪氣の中にたつて奉公　若推

前句上らせぬを、恨むる樣と見てかく付けたり。

　供は三里を戻る冷食　り紅

梅十　仕送りの埒も大方明けかゝり　梅光

冷食（ひやめし）とは諸生（しよせい）の假宅（かりたく）に。不自由（ふじゆう）なる樣と見たり。

長ら　駕に三里の飯强ひるなり　有琴

　傾城の身には奇特な二歩の布施　紅

强ひると云ふ饗應（きやうおう）の樣より、駕乘（かごのり）の人を考へて、遊女（いうぢよ）が親里（おやざと）の寺へ揭法事（あけはふじ）に來たる樣を付たり。

拾　物一つ言うても念佛となへられ　翁

　旅の馳走に尿瓶さし出す　野明

　旅の馳走に有明しおく　同

さる　冷じき女のちゐのはかなくて　去來

　四つ折のふとんに君が丸く寢て　翁

さる廻　物かく中につらき足音　岱水

　ふとん丸げて物思ひゐる　翁

炭　不屆な隣りと中のわるうなり　水

□古句再び用ひても、付肌の變勝る時は不レ苦。

貞五夏 蓮池　土產にと拾ふ汐干の空せ貝　落梧

　風ひき給ふ聲の美し　越人

　何國から別るゝ人の衣かけて　翁

　後朝や餘りかぼそくあてやかに　同

同秋 あら　風引給ふ聲の美し　越人

　手も付かず晝の御膳もすべりきぬ　翁

元土春 渡鳥　昔しは〳〵さんちやよし原　素行

　水風ろに二人づゝ入る組合せ　去來

　くわらりと明くる車戸の音　風叩

同秋 梅のさか　長吉殿はいかい成人　來

　二人づゝ水風呂にいる組合せ　行

　鐘が鳴りても暮るゝ間はある　雲鈴

二例皆後の方付勝也。假令（たとひ）翁の吟を其儘に用ふるとも、付勝る時は手柄（てがら）なれば勉めよや人々。

輕業はならぬ大工のぬか俵　支　考

此句を七度付たりと云ふ自讃あり。其付は見ずといへども、變化したる事は自讃にて明らか也。

桃花千句　雀のうらふく風の涼しさ　木　因

こは百句ヮ四目執筆の句、第一卷より第十卷迄皆此句を用ひて前後を變化したり。然るに近時「寛の水のちよろり〳〵といふ迯句作り置きて、每々山林、居所、寺社等の前句を待つて、いつもしたりがほする人のあるよし、恥入るべき事ならん。

□准付。（七部省）

准付とは人情の句へ山川、生植、降、聳等の景物をもて、其人情をなぞらへて付くる事也。この句の次は其准へ物を實景の山川、生植、降、聳と見たてゝ、夫に對する景物か場かを付くる事定法也。若し准への意を再考するときは、その情は喜怒とかはり、その用は靜動とかはりても、中の准へ物姿を失うて理窟に落ちる也。一句の中五七字の准へ物あるも同樣也。只前へ運びたる情にはかゝはらず、その准へ物の現景になる樣にと考ふる時は獨り變化すと心得よ。「一の卷の脇の辨にいかなる准へ言の挨拶も、只その景物を常のほ句と見て脇せよと云ふも「三の卷戀を續くる法の船の付、材木及び己下の辨もこれに同じ。さるに百年以來の人人その意を運ぶ時は越と同情に成り、其意を捨つる時ははなれ〳〵になる、ゆゑに爰に窮するもの多し。七部婆心錄にも委しく辨じたれば、互見して點頭せよ。

蝦夷の聟聲なき蝶と身を詫びて　翁

なまこほすにも袖は濡れけり　東　藤

木の間より西に御堂の壁白く　工　山

前は戀になづみたる情をよせて、なまことはえぞの用也。次にはそのなまこを、只漁人の樣と見、

世渡りに繋がれたる身は、そこの御堂の七晝夜へ
も得參らぬ樣に轉じたれど、前句に涙の樣ある故
に、只場のみを付けたり。

初月に外里の娵の新通り　知足
薄はまねく桂袖ひく　翁

衙

朝霧につゝきは鴻の嘴ならず　重辰

前は戀情もて招く袖ひくと、行通ふ道の樣を付た
るを、次には其情を捨てゝ薄桂のそよぐ場の景を
付けたり。

萱草の色もかはらぬ戀をして　半殘
秋たつ蟬の鳴死ににけり　翁

己

月くれて石屋根まくる風の音　良品

切に死にし情を捨てゝ、只蟬の鳴きやむべき樣を
付けたり。

情の花も出代りにちる　牧童

たそ

中空に霞のかゝる戀をして　從吾
愛宕の噓の返えかへりけり　鴫皮

前の御所勤の中に、やごとなき人と契りしを霞に
比したり。次には其霞を高山にての戀に轉じて、
准へ物を起したり。噓の返るとは、噓の實にな
りたる事也。

碁の諍ひは山にむら雲
木庵に問へばあさ日に鳥飛んで　巴兮

山を黄蘗山と見、村雲を旭の鳥と起したり。餘情
は木庵の卓犖よりその諍ひを笑ひし也。
因みに云ふ近世起情の句とて、前句にある花鳥風
月の景物を人と見て、後句にその人事を付くる事
あり。元より起情にもあらず、昔更になき付也。
前句人事なる句は、花、鳥、風、月もて人情をな
ぞらへて付くるは、其前句の人情より意を通ずる

故に、聞ゆれども、只花、鳥、風、月の句へ入事を付くる時は、その場へ無用の付句となりて、思ひ入りし事は少しも聞えず。若しかくても聞ゆるものならば、准付の後に、また准への誡めはなし姿先情後といふ蕉門第一の法を知るときは、此事を自得すべし。

萩がまねけば荻もうなづく

其弊ノ句　姫君にわざと勝たする歌かるた

こは萩荻を腰元のうなづきあふ樣と見て、其用を付けしとぞ。作者の心はさもあらめど、姿先情後といふ正風の眼もて見る時は、只萩荻のそよぐ庭にて、かるた取るやうに聞ゆる也。此句も前後する時は准へ聞えなん。

とまりはぐれの鳥なくなり

閨よくな氣ら冥加日に嗜みて

こは鳥を夜遊びの男と見て、その妻の悋氣せぬ付とぞ。まことに謎々也。前を泊りはぐれの旅人と見て、冥加日の善根に泊める體をいひても猶聞えず。只句面をもてとく時は、鳥うつ人のけふは冥加日とて打たざるやうの付と聞ゆれど、夫も鳥には聞えかぬる也。

野ら猫のくせにどこへものら付いて

悋氣しらずの娵かはゆがる

これも夜遊びの夜に悋氣せぬ嫁を、姑の愛する付とぞ。句面もて見るに左は聞えず、只その家へ來たるのら猫を、娵がかはゆがるともたれて作りたる樣に聞えて、付肌たしかならず、すべてかゝる付かたの根ざしは、談林の虚誕より起り、其の次は尾の露川が老のもの狂ひにいひしを、一露の終りと云ふ文作りて說破せしは支考なるに、その孫弟子に、又かゝる虚誕を弄ぶ人の出來しは、いかなる因緣にやと、悲泣せよ、その徒の人々。

□場の句案じ方。

山川草木等の場の句出たる時、いつも平々たるあしらひものゝ飛鳥、降、聳、旅體など付けんは拙き限り也。かゝる所は其前句の模樣を磨針、不破、くりから、箱根、須磨、明石、しらゝ、吹上の景にはあらずやと、その場をよく〳〵見たてゝ、夫に應ずるその人その用を付くる時は、一字一點の違ひより、千度にても新しき付句出る也。この故に祖翁は「東海道の一筋もふまざらん人は、風雅にもおぼつかなき事あらんと宣へり。すべて場の付句は一卷中にいく所も出るものなれば、先づこの意を覺悟せずては、かなふまじき事なり。

　夕日の橋を横に雁がね　り紅
桃
　初鮏に城下は月の市立ちて　巴周

前を瀨田の夕照と見て、雁列を亂す群集の樣を考へ、膳所の夕市のにぎはひを付けたり。七部婆心錄に例多かればこゝに略す。

□軍事地戻　七部者

近世軍事係等一句出づる時は、その次ははや地戻粉成などゝ云うて、前の句振にはかゝはらず、妄りに「酒債、見臺、咄、芝居、夢などゝ、束もなき事付くるを變化と心得違うたり。その人々の心得には、前句重くいぶせければ後句はかろく虛なるものを付くるとの慮かりなれども、前句を恐怖せし腸もて、何ぞ後句にかろき事出でん、假令句面はかろくとも、言ひもて行く時は、みな前句にのまれたる事、その句を作らぬ先より知れたる事也。付句はしかあとなきものかは、その句柄によりて強き事を三四句續くる事もあり。又一句にてもやむ事もありて、その座の臨機應變也。軍事とて忌むべき事にはあらず。元より俳諧は世にあらゆる事を擧げ續けて、そが中に無情の道理をあつかふもの也。この一大事を知る時は、一卷こと〴〵

く軍事にても、戀にても、その本意に背く事なく喜怒哀樂の内に人を諷諫して、人倫の道を敎ふるに、更に不足ある事なし。そも〳〵地戻とは、軍書物語の俤にかぎらず、何にても曲節を盡したる句を、平生體の地の句に見かへる事也。たとへば軍にても治世の腹より見る時は、忌はしく思へども、其軍する身に取りて考がふる時は、常人の行住座臥に異りたる事なし。かくのごとく前句を見たてるを、地戻の案じ方といへり。かくて趣向を平生の物に求めて、その情をつくる事也。さて曲節の興盡くる時は、地に戻し興盡きざる時は曲を續けよ。その興盡きざる句を見やぶりて、地に戻すは前句の作者不興のふるまひならん。この一條は都て變化の大旨句毎々々の心得也。

半　（前句の意を破らず地の趣向を付けたる印。）

チ　（前句の意を破りて地の趣向を付けたる印。）

　我があとからも鉦皷打ち來る　嵐らん

深　山伏を切つて懸けたる關の前　翁

チ曲　鐙もたねばならぬ世の中　洒　堂

古往今來この付味を思ひわづらひて、或ひは深川を七部の中へいれざるは、山伏の句を翁生涯悔み給ひし疵ある故、などゝ浮說をなしたり。七部にあつめしは後人の物好きなるよしは、湊心錄にいへり。さて山伏の句は阿宅の關の文句に「昨日も山伏を切つてかけて候と云ふ俤取りなるを、次には大口叩きの人を恐れず嘲すと見かへて、其嘲しの座に居合せたる滑稽の詞を付たり。その趣は嘲し友達のあつまりゐるをなぶらんと、戸口あわただしくあけて入り、只今關の前にて山伏をかく殺せり。あゝこはき事哉と身をふるはして語りければ、居合す臆病ものゝ皆々色を變ずる中に、一人の話人ありて云く、我れはこれよりその關所通りて何所へ參らんと思ふ、かゝる騷がしき世の中ならば、鐙鐙にても持たずては通られまじきやと

其咄しの合槌を打ちけるに、かの大口叩きも堪へかね、くつ／＼笑ひいだしければ、一座はじめて戯れなる事を知りける樣也。爰に虚實の大事といふは、「刀さゝねばならぬ世の中とする時は、前句をその儘に、其關守としのぎを削る實地に落ちて俳諧體をうしなはん。鐵鑓の廣大過ぎて、急場の間に合はざるは、城を入るゝ漆室諷諫よりもをかし。是火を以て火を消すといふ妙術也。或人難じて曰く。若し鐵の字指合あらば如何。答へて曰く「馬にのらねばならぬよの中とせん。再び難じて曰く、世の中も指合あらば如何。「三里の灸六韜の傳と言下に答へければ、難者始めて自在を會し得ぬ。

　夕日をともす金屏の照り　支考
夏衣　降人となる魂の九寸五分　甯木
　半　とある木陰に一樽の友　考
チ曲　かく計り鬼も經がたく月澄みて　木

此降人は敵將の前に平伏して油斷を窺ふ強勇也。この句降人となる魂といひたる迄にて、憤怒の情殘りたり。爰に空しきやり句せば、その降人は犬死ならんを、この作者の力にて刺客を送る友達の情と見かへ、一樽に別れを惜ませたるは、有力のわざ也。次にはその酒を月見と見立、雲なき清光の空を、鬼もへがたく作りたるは、又一層有力の曲節也。

蓬　風に身をおくけふの打死　桐葉
　半　筆とりて朴の廣葉を引撓め　叩端

是書置の見立にて、趣向は常の物柄也。

桃盗　宮方の軍も尾花ちり／＼に　只草
　半　今宵八月十五夜の月　山紫

時世に在さば詩歌管弦の中に、今宵の月を詠め給はん物をと、盛衰の觀なれど、句面かろく言取りて、却つて哀れ深し。いつも負軍には飯椀ころぶ立具仆ると、おのが狼狽心より、名將をおしはかるは恥づべき事なり。

越年　心得ぬ長田がけふの亭主振　支考

萬端おいて小便にたつ過　角

大工が二人臺所に居る　左　明

心得ぬ亭主ぶりと云ふを咎めて、板返しの謀顯れし樣と見て大工と付けたり。句面は只平生也。

水濃々と松の出離れ　林　紅

そこチ　武者一騎見返る城の暇乞ひ　路　健

耳に覺ゆる淨土寺の鐘　考

是打死と覺悟したるその場に、無常觀想の付也。

八夕チ　信玄を始め何れも我を折りて　寸　照

道譜の所尾張大根　乃　露

前の軍意を常のあきるゝ事に見かへ、小田原家の進物と趣向を定め。信玄に尾張大根を寄せたり。若しこれがねらま守江ならば我を折るまじ。

鮮むしばかりになりて月高く　北　枝

草刈チ　鳥帯を染つて出づる母衣武者　萬　子

誰が家の子ぞ少年の花の時　考

母衣武者を美男と見たてたり。前にいふごとく軍する人の心にて、前句を見るときは只常の用出づるもの也。都て付句は己れを捨てゝ見ざる時は惑ひ多し。

△軍事面去。

「句面輕き含の軍事、「敵討「賊等にかはりては五去三去なるもあれど、取合せて百句四ばかりに過ぎず。忌々しき句ならば二つも無用也。

焦　敎經と波に聞ゆる叱り聲　き　角

二　補手が破る鴻門の楯　同

さる　卯の刻の箕の手に並ぶ小西方　珍　碩

五　鎗の柄にたちすがりたる花の幕　去　來

一橋かせん　已にたつ討人の使いかめしく　そ　ら

三　影形しれぬ敵を世に歎き　同

五　いきく／＼と軍に氣ある朝薄　嵐　雪

鴈百　敵寄せ來る村松の聲　り

理不盡に物くふ武士等六七騎　芳　重

衝

次句

例　錦とる

一　須磨ぞ

小弓か仙

六
そ酒もりいさむ金山が洞　朱弦
―父の軍を起ふしの夢　翁
十一
陣の假屋に碁をつくる程　安信
武士の乃祭りをあれにける　楊水
十
―血招の寝卷夜やしのぶらむ　其角
秦の代は隣りの町と戰ひし　同
六
強盗春の雨をひそめく　昨雲
嵐更け破魔矢つよまる音淒く　千春
―鎧の櫃に餅荷ひける　塵塒
八
火付の野守捕へられけり　翁
そ
吉の山みだれて武士の世也けり　似春

△殺伐の句仕損じの誡め。

日本ばし雪よりけ出す玉の映　東鷲
財布ぐるめに米屋眞二つ　不角
―戀衣密事寝言にほころびぬ　同
根に深き流石といへるてには種　鷲
―介錯後れたりとにらまれ　角
―痞の日を忘れてひよつと震ひ出で　角

財布介錯等の付は百句にても一句に過ぎず。さるを一人にて二句付けたるうへに、その後句も同作者にて誠にあさましき死句を付けたり。不角は翁面授の人なるに、いかなる惑心あるぞ、又東鷲は集の撰者なれば、かゝる付は再び受けまじきを、蕉門の大害なる一大事も慮らず、おの〳〵甚だしき事ども也。此句若し返句なり難き主ならば、一度は受けて後句に活を施す法あり。その活とは財布の句は田舍より雜穀の出買して、荷ひかへるを見て、凶年の米止役人、強ひて米かとうたがひたるに、此米屋腹たてゝ、財布の縫目眞二つに引明け見する體と見たて「咎めたる目附の鼻をはじき豆と付けて、をかしみに膓をよらせ、介錯の句は命を塵芥よりも輕んずる勇士と見たて、「鐵石に義をかためたる胸のなどゝ付けて、敵にもなみだをこぼさせむ。かゝる所には付け方幾筋もあるもの

なり。

□死活。

都て前句の語を逐うて付くるを前句の噂とも、答ふるとも死句とも理窟とも誡めたり。是皆人理の私もて考ふる句也。爰に其活の例を擧げて死の誡めは文中にいへり。

顔のしがみて黒き小忰　白雪
茶
さく花に獅子のさゝらを摺鳴し　扇車

(爲辨九)此所に人々挨じ入りたる、我れ其句評にいつぞや守山を過ぎし時、かゝる童の疱頬が、大神樂のさゝらを摺りたるといへば、翁は例の笑ひながら、夫をなぞいはざるやと其詞をその儘にかくは作り給ひぬ。我れ其時に此附をうたがひて、俳諧はかく前句の人を捕へて、その事を直にいふものにやと、其夜は惑ひて寝られず、あらのさるみのより、あらゆる翁の付合を見るに、十が五つは其樣也。つとめての日其事を申すに、翁のいへる、我れと俳諧にあそべる事二とせか三とせならむ。明暮の付合を聞きながら、夫等の集を見るに及ばねど、夫を隨類得解と言ひて、機縁の時ならでは決して知れがたし(文約)

▲かく己れが惑ひを述べて、付意の得難き事を深重にかけるは、皆後世の爲め也。付くとつかざるとの境、翁の在世すらかくのごとし。學者實に肺肝を碎けよ。按ずるに此句を人々の付惑ひけるは、其小忰の魂を嫌ふ心の理窟を捨てざる故に、何句付けてもつかざりけむ。支考は只無念無想にて其句に似たる噺しせしを、翁はその醜き男を出過者と見たて、其出過ぎの用をさゝら摺りと趣向し、顔の獅嚙に獅子と句作せしをかしみの餘情迄、百練の工夫調うたる噺しなれば、花の字をいれて其儘に作られたり。凡そ付句は現時より思ひよする時は、變化自在に備

ふるもの也。按じ方の法ともいふ。これ皆現にあるべき事に見たてる事也。醜きを嫌ふは前句を耳に聞いて、己が理より理を工む死句也。いかほど醜くとも、目もて其人の行ひを見る時は稱する事もあらむ。是を付合の活と云へり。さるを白雪、桃隣、雪丸、淡水をはじめ、後に聞えし許六まで、此付は翁も仕方なきに座咄を附けられたれど、皆徒言と思ひゐる故に、此付味の聞えずば、隨類得解の時を待つと廣太に云はれしは、ほんの逃口などゝ、生涯しか思うて過ぎけるは殘念也。支考是を悟りしも、二年ぶりと見ゆ。さて爲辨に「角前髪の惜い疱顔と前句を書損じたり。

　　小姓泣きゆく葬禮の中　嵐雪
拾
　　丁寧も事によるべき杖笧　翁

爰に泣く人の樣を付けなば死句とならんを、只引延したる行列と見て、笧杖を叱りしは、貧乏侍の親類ならむ。

寒ざく
　　押詰まる師走の口を喰ひかねて　翁
　　尾に尾を付けて咄す主筋や　は

爰に貧の樣を考ふるは、前の噂也。さるを主を笠に着、高楊枝遣ふ男と見たてし所活也。

蓮池
　　朝霞生捕られたる物思ひ　い然
　　衣着かへねばわるき春雨　越人

爰に不運の意を考ふるは死也。物思と云ふを其戰ひに肌着の汗朽ちて、うるさきをいとふ事に取りなしたる所活也。

ひな
　　木賃泊りは不馳走にする　如誰
　　入る影も細き高野の朝の月　そら

爰に不足のこゝろ、うき旅の情を付けるは死也。木賃の不馳走は世間並と見捨て、其泊りたる場を考へて、風景の活を付たり。按じ方は深く探り、趣向は弘く求むる物

たて
　　何故に人の從者と身を下げて　嵐雪

膳に居われば鯛の濱燒　嗒山

爰に述懐の案は死也。この從者何事の用かと考へて、婚禮の供と見立、其振廻ひを趣向し、美を盡したる膳に昔を忍びて、落涙の樣を見せたるはいと哀れ也。

今は敗れし今川の家　嵐らん

深

移りゆく後撰の風を詠輿し　許六

爰に浪人盛衰の情を思はゞ何を付けても前の噂也。敗家の子孫如何なるこゝろざしありやと考へ、古了俊入道にも勝れたる和歌の達人を得たるは、作者の信力也。

掘りて來る藥も賴み少なうて　凉卜

ふり

哲といはるゝ弟子は十人　蒲右

爰に無常を考ふるは死也。藥を掘りてまで介抱するは何人と考へて、名高き聖と見たて、掘りて來るとは多人數の樣あれば、看病に集まりたる門人を趣向して、只平生に作りたり。あゝ翁の十哲死して蘇せず、今此活を誰れか得む。

□一句立の論。　（七部省）

こゝに擧ぐるは竿頭進步の附なれば、大方の人皆或ひは一句立たず、あるひは絶りたりと思ひ惑ふ句也。此例多く草の卷の曲節にあり。凡そ前句に其さす物なき所にて、後句に趣向の物柄をふくみて付けたり。もし後句に含みたる物柄を、前句ふくみゐるときは、一句たゝぬ句となれば、よく慮かるべき付句也。

住持に化けた狸煮てくふ　許六

笈

雇人の半分聞いて早合點　り由

前句常の鍋煮するかたはらにて、夜前何所にて取りし狸を煮て喰うたらよからむと咄す體と見立、其咄し半へのぞきて聞違へせし人を付けたり。此雇人狸好きなる故に、其鍋を見違へて羨みゐる所へ、ちよつと來よ用ありと云ひし詞を、狸くはぬ

かと申されし事と聞取り、夫は御馳走と罷り出でたるは、一笑すべき間違ひ也。此句もし雇人の半分聞いてしるは、大工、左官、料理人にても、己が馴業の常と云ふことにて、一句たつ上に、爰に半分と云ふは、前句に添へたる、たらよからんと云ふ詞の姿を立つる釘語也。

櫻山　慮外する奴ももろとも夢に見て　丹岫
一首の歌にかくぞ詠みぬる　文考

前句もし「慮外する奴を虫けらなどゝ見てとあらば、かくぞと云ふ詞もたれむ。前句にかくぞと云ふ詞の懸りなき故に、後句の内の含み物となりてもたれず。かくのごとく含みて作るは餘情を深むるためなり。この附は天龍川の渡しにて、西行の僕の叩かれし俤を模寫したり。

三匹　晝寢もさめず貰盃見る　水甫
我一人忘れてゐれば皆わすれ　杜草

前句晝ね前に、寢ておきたら何せんと各約したるを、起きはおきたれども、きよろ／＼としてゐる様と見立て、かく付けたり。此忘れ物前句の中になき故にすがらず。

三日　天窓に付いてかはる分別　井炊
内義のが道理といひて世間から　呂通

前句こゝろ定まらぬ夫へ、女房の異見せし體と見たてゝ、かく付けたり。道理の物柄前になし。

たそ　山も笠着て春日野の秋　巴兮
茸狩に是がなうてはならぬ也　鵐皮

前句三笠山の名に對して、その山遊びには、かならず笠きると云ふ詞と見立て、其遊びを茸狩と趣向したり。「茸狩りに笠がなうてもならぬと作るべきを、茸の字に笠をふくませて、是と作りたるはそのたけ狩りにゆく人を、あつからぬ朝陰に、なせ笠着たと咎めし答へに、着たる笠をなでゝ、松茸の姿になり、是はなうてはと言ひながら笑はする様を見せん爲めなり。笠と云ふ時は只文上の付

と成る、是と云ふ時はかゝる滑稽となる、上手と
名人との境かくのごとし。但し餘の狩ならば是の
字一句立たず。

　一口にいへばこそあれ八百目　從　吾
　　どちらへしても是は殘念　鳴　皮
たぞ

前句を後悔の詞と見て、殘念と付けたり。殘念と
云ふ詞、八百目へかゝる樣なれども然らず、もし
前を、八百目の富取と見る時は、「どちらへしても
これは歡びと付けなん。そは其人は十貫目の乙取
る當なれど、八百目の節でも喜ぶといふ心になる
也。この殘念も事によりては十貫目の損もすべき
を、八百目にて濟みければ損は輕けれど、一口に
いへば八百目なれど、八百目といふも少ならずと
云ふ事に聞ゆる也。元より「どちらへしてもと云
ふ詞二道へかゝる用なれば、前へもたれずして一
句たつ也。

本朝　雛の日の便りに兒の狀書いて　童　平
　　雇人なれば知らぬ也等　涼等　三

前句先方より來たる使の便りに、わき方へ贈る狀
頼む樣と見たて、その使雇人にて、其行先を知ら
ぬ故に、知らずば内まで持歸れ、内方には知りた
ればと、持ちかへらす樣の付なれば、しらぬ等と
云ふことと前へかゝらず。

歌　十夜とは先づ釋教に戀無常　風　草
　　只一句にて伯父も閉口　蓮　二

前句講釋ぶる樣、伯父の異見を打返す詞と見たて
ゝかく付けたり。只一句と云ふは、丸で前のこと
なれども、付肌變化ある故にもたれず。元より一
句詰と云ふ事は、前句なくても聞ゆる詞なれば也。
此類の付婆心錄に［　］係付と號けて辨じたり。
又空撓付の中にこの八例に同じき作あり。凡そ前
句の意を返して、趣向を取りたるは、情の詞にて
作りても、その中にすがたたしか也。いかほど姿
の句付けても、前句の情をその儘にうつしたる句

は付句の法に叶はず、まして情の詞を述べたるをや、但しこれ等の作を能くせし人は、昔しといへども其角、木因、支考、涼菟の四子に過ぎず。

○此因みに先哲の論を評す。

そこ　掃除きれいに寺の墓所　濫吹

此付よし　雉が出てなければあれなと思ひぬる　支考

此付あしゝ　これの山葵を見るに付けても　浪化

（掃除雉の二句を擧）是東花坊一生の誤り也と、涼菟は所々にて評せし由、まことに損じたるに近し、涼菟のいへるは、寺の墓所にて雉を害せんといふ不律の難にや、在家の人は思ふに不レ及、殺しもすべかれど、あれをとのみ思うて殺さゞるは、掃除人の身にても出家の殊勝也。俳諧師は人の胸中に駒をのり入れて、僧俗貴賤を蹴たてたらむ、吾門の活計也（文約）

（雉わさびの二句を擧）こは前句の埒を明かさずして、付合もて斷わると云ふ付け方なり。さるは一巻の曲なれば強ひてはこのむまじき手筋也。

▲山葵の付は全く前句の噂也　強ひて好むまじと自ら斷わる如く、決してすまじき付也。雉の陳言は誠に然り。蓋し涼菟は何れを評せしや、若しも山葵の評ならば、一生の仕損じと鼻はじきしもいとよし。

　高觀音に辛崎を見る　洒堂

深　今はやる單羽織を着連立ち　嵐らん

　奉行の鑓に誰れも隱るゝ　翁

（二東問答）許六曰く。巻出來終りて師曰く。此誰の字は全く前句の事也。これ仕損じ也といへり。

▲此語若し翁の詞ならば、許子を試み玉ふ鈞語なり。座俳諧と異なりこは撰集なれば、一言の仕損じにても若しあらば、直さるゝ事勿論なり。まことに許子は翁の詞を重んずる人にて、「秘書要訣のごとき、あるひは「貞享式の茶の出ばなのごとき、自己の分別すべき所にても、翁の詞

なる故に、その儀に述べらるゝ程の信なれば、
　事により頑なゝる論もあり。

(爲辨九)五老主人の口評に、誰の一字は上手をもて、世間總ての遁辭ならん。翁も一生のこまりにやといへり。我れこゝにさゝらの疑ひを(前四七五丁に擧げたる事。)語りて、噂と用との差別をいはんと思ふに、主人は例の俳諧にまよはず、即啄の綠叶ふまじきを知りて、つひにその事いはずなりぬ。單羽おりに町奉行は趣向にして、かくるゝは句作なり。誰れといふをうはさの逃げとはおもふ事なかれ(約文)

▲獅子いさゝらの付は人皆まどひたるを、支考やうやく發明せし故に、許六はいかにやと占問見るに、猶前句の噂と言ひしその折から、深川の評ありしを、許六は迷はぬゆゑに悟らずといへり。さて此付は前を大勢の千日詣りと見て、單羽おりに付け、次は今略式流行の看板羽織を着連れたるは、輕き行列と見て、其人を町奉行と趣向したり。常人ならば「お町奉行の鑓挾箱と、直に單羽おりの姿を作くるを、翁は一段すりあがりて、「誰れもかくるゝと勢ひを添へられたり。さるを許子は羽おり着た若者、奉行に隱るゝといふ付と思ひし故に、前へすがるを誰の字にて一句を斷わりたるは、拙しと思ひけん。しか解しては扉に成りて、案じ方に背くなり。此句もし鑓はさみ箱とあらば、誰れも聞けども一段活かしたる故に、もし聞きまどふ人もやあらんと、翁わざと仕損じとのたまひしを、仕損じならば直し給へと面前にて詞も返さず、深川の徒みな〳〵釣針呑みて退きしを、翁はほいなくおぼされ、是獅子よく翁にかはつて齒がみをなしたり。

□兩體兩用の辨。

此條は兩用に似て似ざる古例の辨也。凡そ前句に

その用其情を表に立てたる句あるときは、後句に見かへし趣向を體に作りて付けるなり。前句の見かへかろき所にて、その用か情をそのまゝに作る時は、扉となるなり。婆心錄□□結付けの辨に互見せよ。

　鳫より梟の早う來てゐる　野明
續有　抱込んで松山廣き有明に　支考
　あふ人毎の魚くさき也　翁

雁より梟のはやう來るは、あたゝかなる所と見て山懐の體を付け、次にはその松山を往來のほとりと見立、ありあけにどいふことばの引取りに、朝出の用を趣向して、浦ちかき所に轉じたり。

　月をゆりなす浪の浮海松　令道
雪丸　黒梟のとび行く庵の窓明けて　不玉
　梺は雨にならむ雲きれ　定連

浮きみるに窓と付けたるは只その場の體なり。さるを梟の羽音に窓明け見るは、日和狂ふを氣遣ふ樣と見て、その場を轉じてかく付けたり。窓よりどちらも見るやうなれども、意の違ひあり。

　絕え〴〵ならす萬日の鉦　そら
　故鄕の友かと後をふり返り　川水
　詞論ずる舟の乘合ひ　一榮

前の鉦たゝきは他國にて庵住の僧と見たて、その邊りをそれともしらず通りすぎる故鄕の友を、僧のよびかへす聲にふりかへりたる付けなり。次はふりかへりたる人を、旅に久しくすむ人の、故鄕の人に旅にて逢ひたるさまと見たて、乘合の人の國訛り喧嘩を付けたり。ふりかへるさまは似ても、意趣かはりたり。但し詞論の句は逆付也。

　皆はら〳〵とひらく傘　杉風
深　あの男やらじと道を立塞ぎ　洒堂
　駿河の田植ゆりわ頂く　そら

傘ひらくを、人を止むるさまと見て、立ふさぐと付け、次にはあの男といふを見知らぬ旅人と見て

集ぐの用を田うゑのざれ事としたり。前のたちふさぐといふ詞、後句へ「――」かゝるゆゑに、只その國風俗の姿を――結びたり。もし乙早女達のなせる惡性「田植時にはならぬ往來、などゝ其情其用をつくらば屁とならむ。

濱の小供の水に日黒み　曲　紫
三顔　習はねど假御所のふえ聞馴れて　蘆　元
雨に淋しい簾捲かする　岷　青

前は濱の子供の笛ならはねど、おのづから假御所の笛を聞馴れたりと云ふ付なるを、次には假御所に侍りし人の、習はねど君の笛を聞きなれて、吹き覺えたりと云ふこゝろに見立て、時過ぎ所をへだてゝ假御所の昔しを思ひいだし、雨の簾まきあげてかたみの笛をしらぶるさま也。笛を中にして左右より聞くやうに見ゆれど、しからず。これ等の類も寥心錄におほく辯じたればこゝに略す。

□輪廻の論。

(古今二)俳諧はその座にその句の姿情を分けて、前句の言外を付くるゆゑに、一字一點のてにはより、言々句々に變り行けば、多くは附合の輪廻なし。

世の人の打越を苦しむは、付け方の變化を知らざるゆゑなり。昔しの俳諧はさもあらん、今の俳諧は、打越嘗つてくるしからずといふは、人の付けたる後を又付けんとする故也(文約)

▲近世一瓣論あり。あるひは越に窓、眺、イ、休等の句ありたる時、景氣の付は越より見るとて許さず、かゝる所へは響き物を付けて、見聞の變といへり。或ひは場二句並べたる次へ、歩行く體を付くるときは、越をありくなどゝ恐れたり。その前句を見かへずして、其尾より其尾に取り付いて付ける故に、越より見るとも聞くと

も難あらん。蕉門の付けかたは、人の付けたる後を付けず、句毎々々に前作者の情を轉じて行けば、假令同體の趣向を百並ぶるとも、句々の心雲泥の違ひありて、越すべき理は露もなし。抑も輪廻とは、意の運びにて、物柄ならず、たとへば山海の魚鳥を割きて、五彩を分つとも、風味ひとしきときは一椀にあき、終日豆麩一色をもてなすとも、百珍の鹽梅異なるときは、淸風明月時々にあらたなり。それを一色にて變なしとおもふ人は、黄金の淨土、るりの極樂の章を、見わけむ事はおもひもよらず。

しわ〳〵と棒はへの字に油賣　支考

三匹

戻りによろというて嘘つき　反朱

こちからはよう見えてゐる簾越　汀蘆

今の人は簾越より油賣が見ゆと恐れなん。此油賣は昨日も呼びしに、賴み物邪魔がりてよらざりしを、けふも呼ぶに復戻りによろと言うて、嘘をつくらんといふ付なるを、次には歸る人を見かけてかくいふ詞と見立、祭り客を付けたり。その初め門口にて出あひ、先づ此方へと引き止めしを、伯父の所へ拔足してはあしければ、ちよつと參つて來ん、必ずと約しながら、先方にて醉はされたればよられもせず、見付けられまじと、向ふ側を顏ふりて歸るを、簾の內より見て、戻りによろと言うたが、もう醉うたやら千鳥足、脊中向けて通つても紋が知れてある。ええ儘にして止むるなと笑ふ樣也。簾の一字にて醉のさま、祭りの樣明らか也。油賣は戻りに通らぬ樣、是はもどり通る樣とかはり、情も雲泥のちがひあり。

一つ家の四方見はらす窓明り　海人

浪

畑の人を呼ばる食時　胡桃

はら〳〵の雨もさらりとよい天氣　路青

一つ家の明放ちたるは農事時と見て、畑人を呼

ふと付けたるは、其體を他より見る樣也。さるを次には、畑に行きてよぶ人の自句と見かへ、其日の天氣を畑八と嘲す樣を付けたり。いかにせんさくしても、窓より雨を見る氣遣ひなし。

つゝじに木瓜にてり渡る影　左次
笈　春の野のやたらに廣き向ふ河岸　巴丈
三俵つけて馬の鈴おと　露川

照り渡るといふを、廣野と見立て、向ふ河岸に其場を定め、次には其河岸を街道と見て、市へいづるを付けたり。前は廣野の眺め後は往來の用也。この馬木瓜の下を通る樣なし。此類も七部中に多き故に爰に略す。

□内外の論

近世内體外體の作三句とつゞく事を忌みたり。俳諧は好內に寄せ、かさねりて論ずるものと覺えたるか、をり〳〵痴人の說を聞くに、翁の時よりは去嫌ひも、微細に開けたりなどゝいふ者あり。去嫌ひもて變化とするは愚人の事なり。若し人ありて內體ばかりか外體ばかりかにて、百句調べよといはゞいかにすべき、變化はかならず何面にはあらで、付肌にある事ぞかし。

破れ戸に釘打付くる春の末　越人
店はさびしき麥のひき割　翁
あら　家なくて服紗に包む請狀　人
內體　物思ひゐる神子の物言ひ　翁
七つゞき　人去つていまだ御座の匂ひける　人
初せにこもる堂の片隅　翁
時鳥風のあるゝ最中に　人

○

蒟蒻にけふは賣勝つ若菜かな　翁
吹上げらるゝ春の雪花　嵐雪
歸る鳧歸らぬ鳧もさわ立ちて　同
七えう山を出でかゝる月　翁

貫　町作り栗の焦げたる砂畑　翁
外體十つゞき　露霜くぼくたまる馬の血　嵐雪
坊主とも老ともいはず追立てゝ　翁
土の餅つく神事恐し　同
生籬に燃えつく烟り雨となり　雪
日暮れて殘る杣が切懸け　翁

□自他の論。

近世自句三句續かずと云ふことを、諸書にもいだし、常にも言へり。これ等の事はみな變化不自在の人の言ひいだせしひが言なり。およそ自他にかよふ句どちらへも付けども、自句ときはまりたる句に、他句は決して付かず。自他の別なきものなり。これは言の葉を詠ふ常にて、俳諧のみにかぎらぬ事ぞかし。それを變化とて自他ちがひ句を付けるときは、付句は離れ〲になりて、さらに聞えぬ句となり、又他句に他句をかさぬる時は、二句のあひだに觀する情なくなりて、付合は並べ物となるなり、これも七部中におほく論じたり。

自他向合　兄さんと知らで恥かし勤めの身
弊風ノ付　さて〱粹ぞ忠義あつぱれ

こは七段目のおかる平右衛門の向合のせりふを付けたりとぞ。かく付ける時は、勤めの身と言ふ女が、さて〱粹ぞと兄へまをす詞になり、一向聞えぬ句となるなり、自他向合せて作りたる例は、いにしへさらに無き事なり。付句はすべて前句の詞の次の詞を作るものなり。但し姿の作には向合ひたるやうに聞ゆる句もあれど、そは皆作者の地より作りたるものにて、向合詞とは大いに異なりたり。

難　百姓の息子が稻の名も知らで　幾因
見ると和尚は喰はせ好き也　山之

といふは息子と和尚と向合うたれど、詞の仕口は向合はず、前後ともに他より見る人の詞もて作り

たり、是を作者の地の詞と云へり、爰をもて其紛れをしれかし。

□案じ方禁物の辨。

前句を書、見せ物、狂言、質物、賣物、夢、咄、歌、書物など〻見たつる事決してあるまじく、そは何にてもかく見られぬ句はなき故なり。俳諧は一字一點にわたりて、微細に餘韻までも考がへわけて、變化さするものなれば、さるあらめなる按じ方あらん理なし。又「景氣、書畫の類に只見る意の付「草木、鳥獸を人倫におこすと云ふ謎々付「名所に旅人と只もて行く付方「只その場その場の延と云ふ付「只その人前句を定むと云ふ付「態藝、人情にたゞ光陰時刻等の付「山川の場に鳥獸の類をならべて、會釋付と云ふ心得ちがひ、軍事の次に飲食、軍談の付に「詞作りの向合付等なり。この條々は貞德頃の下手の工夫よりいでし付けなるを、翁打破し給ひて中絶えけるに、百年以來世なべて拙くなりて、再發したる弊なり。この外に二句一意「與奪「三句の變「古事俗等のこゝろ得違ひ「前句の惑ひ後句のまどひ「摸象「並べ物「一斑「眞顏等の數ヶ條の心得違ひ、中頃より發りて世さらにその是非を知るものもなき事、七部婆心錄にその惑ひを解きたり。倩左に擧ぐる數例は、禁物の案を、手柄につかひ得たる功者の付なり。一變格と言ふ事を能くせざる輩の、眞似て見るべき事にあらず。

△前句を書と見立て叶うたる例。

染色の不二は淺黃に秋のくれ　越人
花とさしたる草の一瓶　き角
あら

染色の淺黃と云ふを、不二の懸物と見て、床の活花と付けたり、此染色と云ひ淺黃と云ふ詞無き時は、畫とは見られず。但しかゝる付は前句異なりても、再びせば賤しくならん。たゞ一時一興とこ

こゝろ得よ。さる譯も知らで、前句の變化に因り、何にても像ある物を繪に見立てむは拙き限り也。

△前句を見せ物と見立て叶ひたる例。

瓢たんの大きさ五石ばかりなり　越人
風に吹かれてかへる市人　翁

大きさ五石と云ふを張拔の作り物と見て、市人の呆れし樣を付たり。凡そ瓢は一斗入より大いなるはなし。さるを五石と云ふより、見せ物と見立たれば、是又一座一興の曲節也。

△前句を歌と見立て叶ひたる例。

本書　韮の柵木に薦をながめて
薦のゐる花の賤屋とよめりけり　翁

前句菜園集の端書に似たる故にかく付けたり。若し菊の柵とあらば、さは見たてられまじ、されば花鳥、風月の艶なる句を、妄りに歌と見ん事甚だおぼつかなし。

拾　松島の月〳〵　人
ひよつとして歌の五文字を忘れたり　聽所

前句松島の月〳〵とくり返し〳〵、歌を案ずる樣と見立、松島の月といふ七もじに對して五もじと付たり。

東六　秋水をちと和らげて秋の水　吾仲
親父の歌に誰れもなびかぬ　宇中

しうすゐを秋の水と和らげた迄にて、詩の樣な歌と云ふ詞と見て、人もてはやさぬ樣を付けたり。三句皆三別也。今の一體の新しみあらば、例の一興にはよけむ。

△前句を夢と見立て叶ひたる例。

敵の門に二夜寢にけり　そら
かき消ゆる夢は野中の地藏にて　呂丸

寢にけりと云ふを寢たわいと云ふ心に聞取り、敵の門に二夜寢たわいと云ふは敵を窺ふ人の、思ひ寢の仇夢と見て、其夢さめし野宿の體を付けたり。敵の門に二夜寢たわいと云ふは、夢ならで現には

あらじと見たる所、一時一興なり。此句もし「寢るなりとあらば夢とは見られまじ、この後はいかほど前句にかなひたる事ありとも、夢と言ふ事は糟粕ならむ。かゝる事は一句にて止まるものと云ふこと、四の卷月の部にも論じたり。

△前句の鳥獸を人に見替て叶ひたる例。

狸が來たら皷うたせむ　北枝

草刈　友達の異名の中に鶴太夫　萬子

皷を能役者と見て、狸を異名に取りなしたり。すべてかゝる見立は［　］係付に作るものなり。そも／＼案じかたに、不易流行あり、これ等は流行中の流行なれば、一句止勿論なり。

△軍事に飲食の付叶ひたる例。

靜一人を荒武者の中　仙角

東花　湯をのむに汁出す膳の取次なる　千聲

龜井、片岡、伊勢、駿河は大食する中に、靜の小食なるを見ておどろく樣なり。これ又一時一興のをかしみなり。すべてかゝる禁物の數體を見あやまりて、みだりに古人の興を犯さん事、其作者の心きたなく覺えらるゝ也。

○諸變格

此卷に擧げたる變格は、前々の卷の證句の上に、㊇と加へ、或ひは△題下に曲節變格としたるとは違ひて、格外中の格外なれば、證としてかならず眞似まじき變例なり。さらば爰に擧げずともよかるべけれど、後世また古例をさぐる人ありて、夫等を予が見落しと思ひ、拾遺して混雜せば、なかなか初心の惑ひならんと慮りてかくは物したり。學者正格と變格と、又變格の變格なるものと、三段の別を知りて、百世の人をあざむかざる器量あらば、また更に變格をなすとも、何の恐れかあらん。是眞の大宗師なるべし。

□一座に花二本付けまじき事。

夏衣　茶の湯といふも是迄の事　七里
か仙　初肩衣に花も咲かねば世を捨てゝ　支考
　　玄關ひろく火鉢ながむる　里
　後肩衣に再び花のさけばこそ　考

こは鑑亭の三吟なり。後折の花にいたりて、句順をかはらんといふを、同人二本の作意あらん事、主人强ひてのぞみける故に、かくのごとく二句にて、一意なる心ばへもて、前の花を表裡して、同人にて二本すまじき斷わりを立てたりと言へり。その命ずる人王侯ならば、一座一曲の手柄ならめど、門人にのぞまれて後鑑にせんは、鬼眼をもてあそぶに近し。殊に二句同意をもて運ぶ時は、歌仙の花を一本に縮め、三十六變化を三十五變化にするといふ難なきにしもあらず。さて兩吟三吟の卷にて、花を定座にするときは、いつも同人二本になる故に、かならず花前にて句順を代へること、席の禮なり。もし代らざる時は、引き上げてゆづる事、稽古卷とても、かならず違はざる古例なり。句順を代へたる例は「續寒菊兩吟「夕顔歌兩吟「雪の花兩吟「百囀兩吟「虛栗兩吟「小文庫兩吟「同集三吟「あつみ山三吟「生來記三吟「笈日記三吟其外おびたゞし。

△花を折端へこぼさぬ事。

黃山　座よしや世の鳥も囀づるよしの山　蓮二
　擧　花のあけぼのさては夕暮　馬岐

古しへより月は折端にもすれども、花は定座を下げざるは、もつとも賞すべき卷中の眼なる故に、一座おの〳〵よき前句を得て、花を植ゑんと心がけ、あるひは花をゆづるをもて禮とするも、大事の物なればなり。偖この卷は例の三吟なれば、定座にする時は、同人二本となり、前の鑑亭の詠きは糟粕なりと、更に歌をもとめて吉野の山に花の

おもかげをふくみてかく付けたるは、こぼしてこぼさずといふ斷わりなれども、其分別を花前にいだしては、何故花を引上げざるか、兩吟三吟の定座、同人に當たる事は、いくたびにても知れたれば、その座にいたりて分別するもおろかなるに似たり。假令代らずしてかゝる奇を工むとも、今兩三の手段はあるまじ、手段盡くるものは、みな奇事なれば也。さる或書に、此句を引いて花をこぼす傳としたり。金佛爐を渡るを見て、泥佛水を渡るこそ片腹いたけれ。

十七　座　いつ咲いて櫻に一重鯛の衣　大圭
　　はし　花月の外ぞ寢ながらに茶を　淡々

これ等はうるさくて評もならず。

△表の花第三已下にせぬ事。

虛栗　五メ　花あゆの鮓の盛りを惜むかな　句子
新山　　月や經る花なき瓶に松さして　文りん
十七　七メ　花の雪引出しにありて衣更　淡

花を表にする時は、第三までにいだし、四句目より八句目迄を下座としていださぬ事、古今通式なり。但し虛栗は翁後見の集なれども、例の見ゆるしにや、根本式表八目に花あれども、是は六花二櫻の卷なれば例にならず。其外には翁出席の卷は勿論、諸門人も例なければ、角門の弊を見すてゝ眞似る事なかれ。

△正花に用ふまじき物の事。

酒中花、灯の花、月星の花、花鰹、花かひらぎ、波の花、茶の出花、花やか、花々し此類決して非二正花一。

虛栗　うきを盛りの酒中花の時　長吁
花摘　冬の偈の灯の花しら〳〵と　琴風
雪光　灯の花の棚に御祓

酒中花、灯の花、正花に用ひたる例外になし、其角は之を作り花。花火の例と心得違ひけん、作り花、花火は花の姿をなす故に、古今通じて正花に

用ひたり、酒中花ともし火の花は、さる物にあらず。

　松風の音地震またゆる　鋤立

其俗　闇きより心の底凝る定の月　立志

　目星の花のいづこ三吉野　嵐雪

是も古式には、用ひけれど、蕉門には譏れ〳〵もせぬ事なり。こは越の植物を憚かりし非植の正花也などいふらめど、さる事は蕉門になき事也。

あめこは叱られてかくにはあらき花鰹　光延

五色　は浪人の打ちかたむきて花がつを　素丸

續花　雜花かひらぎのころも明曆　伴幹

此等も角門の弊也。決して正花にあらず。

匂　竈の火も仄かに見ゆる茶の出花　り由

このは　目の下に梢の波の花咲いて　許六

こは(本書)茶の出花、染物の花やかなるも、正花といふをもて(う陀)(花のしべ)もかく述べて、五老門には正花に用ひたり。本書相傳は其角、許六、去來、支考なれども、三子これを正花とせざるは、祖翁も未定にて、正花に用ひられざるゆゑなり。されば(古今二)分別の條に、翁も半用半捨のよしを述べたり。そも〳〵櫻は花の體にて花に代ふるものなれども、そを花櫻と作るだに正花とせざるをや、そを百匂わづかに四本の賞翫の花を、怪物に代へんと云ふは不賞翫といふのみならず、奇を好む曲者といはん。元より茶の出花も、そめ色の花やかなるも、花がつを、花かひらぎも花の姿のなきものなれば、姿先情後の法をたてたる翁の腹もては、是等の事には思慮のつひへもなく、早く看破したまひけれども、古式に正花に用ひ來りし故に、こと〴〵く打破せんもと外聞を慮かりて、しばらく從容の詞ありつれど、自ら一句も作りたまはぬをもて、其本意はあきらか也。さるに翁二見吟の「疑ふなうしほの花も浦の春と云ふを引いて、波の花正花の證なりといふ人もあるよし、其

何は四方(よも)の山々(やま〳〵)の花を、もの字に含みて、いちじるき神徳(しんとく)をかしこみたる吟なるを、夫をしも正花の例とせん人は、彼の桃隣が「あげ何に戀を舉ぐる挨拶と云ふ付句を付て、舉句にはじめて戀をいだしもやせむと、うしろめだくおぼゆるなり。

俳　見せ馬の荷鞍の茜花やかに　洒　堂

此一例は元祿七、浪花(なには)にて翁出席(しゆつせき)の卷也。十哲この蹟をまなばざるは、例の半用半捨(はんようはんしや)の誤きにて、正花ならぬ故なり。支考此時隨杖して、翁の本意をよく知りければ、若しも後世(こうせい)この座俳諧を據(よりどころ)として、惑ふ人もあらんかと(古今二)に花やか花々しの詞は、古抄(こせう)も門風(もんぷう)の沙汰なれば、正花の論(ろん)には及ばざらんと書殘し給ひたるは(本書に染物(そめもの)の花やかも、正花と云ふ詞あるも、古式の從容にて、翁の本意(ほんい)ならぬ事までもしらしめむ老婆心切也。さるを元祿十六、浪花の天垂(てんすゐ)諸國を廻りて百歌仙を撰べり。都合六十四卷その中に、

一ノ卷第七　雜　獨身のめつたがきなる花がつを　天　垂
第十　同　出る人は皆花やかに育そろひて　同
第十一　同　人の氣を灑ぎ上げたる茶の花香　一　葉

第六卷には、茶の花香、非正花に用ひたり。

十六　同　花やかに育て上げたる衣裳つき　江　天
二ノ卷第五　同　ほんのりと是でなうては茶の花香　其　外
第九　同　花聟の藏には何が入れてある　柳　江
三ノ卷第四　同　五つまで月に殘りて茶の花香　一　砂
第九　同　美しい子達並べて花やかに　梅　友
第十　同　花聟も後はお竈の火を燃す　垂
四ノ卷第三　同　暖簾や簾懸けたも花やかに　同
十二　同　花聟もどこやらたらぬ姿にて　一　貞
十六　同　荷は花嫁の氣もつかずして　曾　本
二ノ十一　は苗代にひがんの客も花々し　井　水
四ノ十七　あ蜩に日和日傘の花やかさ　任　風

かく十四所奇なる誤きをなしたり。もつとも花聟(はなむこ)は、翁も諸子も用ひたれど雜とはせず、そは花嫁

花聟の類を雑にもちふる時は、正花にならざる故也。此等は賞美の花というて、春季を續けて正花とする物なれば也。元より生得の花にはあらず、吁翁かくれ給ひて十年經ざるにかゝる人ありて、直弟子と呼ばり遠境の人々を惑はしけるは、苦々しき事ども也。既に翁の跡を追ひて門をかまふる弟子、凡そ二十家に過ぎたり。稱して蕉門二世となのるといへども、純正なるもの只一家もなし。希くば、門々の宗家、偕にその過不及を和して、おの／＼祖翁を仰がば、始めて二世の名の餘光を挑げむ。

△非植物正花は、當門になき事。

（星月よ）（古今抄をなんじて）植物にあらざる花もなくては、一座叶はざる事あり。その故いかんとなれば、花の三四句前までに、素春連ねてその次、夏冬の植物など花前まで續き來る時、其折の花雜花にあらでいかにする事ぞや、植物も同季も、差合とて花なくて止むべきや。

植　なよ竹の世の上風は凌ぎかね　車葉
　　嫁入となしに引越してゆく　老鼠
續花　△下戸めかす花の顔色袖の裡　惠風
は　　待つてほらせた野老一籠　敬由
植　日の居り初子も知らぬ小松原　鼠

こは上文に便り、又（眞常）の月星の花の例などもて設きたりと見ゆ、非植物正花と云ふことは、古式にはあれども、花として非植と云ふ事は、平生俳諧の理に違へば、翁は曾つてもちひ玉はず。然らば「花娵、花聟、花の顔、花心などの賞美の花には、いかなる根葉ありて植物なるぞと難ずらめど、そは文外に正花を立て、花のごとき娵、花に似たる顔といふ心なれば、花の姿は顯然たり。されば社かならず春を續けて、雜に設かずといふ謂れ明らかなれ、かゝる翁の深意も汲まずして、東武門人の正花論に醉ひけるぞいたはし。そも／＼

花は折に一つにて、定座なしと敎へ給ふは、よき前句を見てよき花を付けさせん爲めの婆心なるに、さる心懸けはなくて、祖翁にそむき、定座近く素春を付けて、又植物を續け、態と花の植ゑられぬ樣に工みて、非植の雜花を付けて手柄顏に誇らむとは、先づ其付句を聞かぬ先より、其作者の腸のゆがみすぢりて、心の花の露もなく散りはてし事知られて、いとあさましく覺ゆる也。猩々庵はかく醉ひけれども、今の風子其嘔なゝめぞ。

△花を隱すまじき事。

類　ちるといふ後の曙匂ひけり　き角

江戶　荷をとけば今に吉野の匂ひあり　一漁

月といはぬ月はあれども、花といはぬ花はなしとは、古今通式なるは、高弟たる其角、殊には、本書第一に授與の身として、何故正花に妄りなるぞ、是醉聖の過ちならむか。

△花を疊むまじき事。

梅山　花にとへば花ものいはずされば花　汶村

花で百匂鳥で百匂り　由

かも　數百軒神の惠みに家の花　鷗笑

花の心も人のこゝろも　筆

雪白　甕舟が著いてもふらぬ花曇り　麥士

花曇とは曇花坊なり　筆

支考一代の中かく三あり、翁及び諸子には此誤さなし。但し櫻山伏は五老井の會なれば、許六も所存はかくすまじきを、いかなる其座の衆議にや、都て疊付には何もすれども、只月花のみは疊まざるは、月花には數の定めある故也。かくする時は百匂花五本とならむ、若し又前の花と二句同意といはゞ、百匂九十九變化の難あらん、支考は都て正花をよく心得たれど、誤きに三つの過ちあり。さるに、二世里紅跡をとめざるは、其心をしれるかも、三世後の人は又見龍の蹤をまねて、雲より落ちけり。

□月を妄りにすまじき事。

都から千鳥もかよへみそぎ川
紅帷子の笠に夕ばえ
見渡せば花も紅葉もあるからに
こゝは一つと片器にさか月

雑

(古今五)こは三國の御社の左右に懸けたる御祓川の六句表なり。此二表は何れも夏のほ句にて、五句目は同じく月の座なるに、左右に分けし働きなしと、此表には花を出して、月と花との兩詠となさむとす。去乍ら表に月なきは古法に背けども、五句より六句と秋季ならむは、第三の花紅葉に爭うて表の配り穩ならじと、爰に萬葉の例を藉りて、さか月の名を出せり、そは古式に盃の影と結んで異名にもちひたる例なり。然れども此さか月は影を結ばねば、秋を付くるにおよばざるより、月の一字を顯はすのみ。天象のさたをも遁るべき

也(文約)

▲萬葉の書法にても、古式の例にても、さか月にては月にならねば、法に背きたる月なき巻なり。又第三の雑の紅葉に、五句目の月の爭ふと云ふ事も聞えず、雑の越に同季を許すは、蕉門の掟ならずや、爰に月花を左右に分くる物好ならば、有明いざよひの異名を出してよからむ、さか月にても月の字句面に見えては、中々物好のかひあるまじく覺ゆ。

明日をまつ軒の葱や星の影　乙由
琴に字をかく風の冷か　春波
天河
盃の光りに名酒見えすきて　杜菱

盃の影を月に用ふるは古式にて蕉門に例なし、こは越の天象を恐れての詠きならめど、さらば四句目に付くべけむ。もし盃の光りと作りて、月の光りにならば、星の影には却つてあしからむ。又月の光りにならずば、月も季も拔けなむ、

蕉門にもちひざる譯愛にて尊し。

△三日月有明二つはあるまじき事。

三匹　杉のはづれにさても三日月　きらん
　　見た所夏よい城に三日の月　凉ト

(古今四)古式には百句二つといへど、三日月は三字會意の名目なれば決して二つはせずと云へり。

▲此外に例なし。古今抄に制するも、三匹猿に破るも同じ支考なれど、予は古今抄の方を正しとする也。

六行　有明も春はちよこ〳〵雪ふりて　丈羽
　　有明に一端通る椋鳥のむれ　友之

是も野坡說き、一つの外他に例なし。

△月を雜に用ひまじき事。

(星月よ)月は四季にありて、しかも素秋の制あれば、雜といふ月はなき理也。

▲素秋の制はなくとも、獨り雜の月はなき理也。さるに原松が師、其角是を犯したり。

誰　新子供廟日頃の月の顏　き角

夕顏　明方は天一神ののぼる月　我笑

六行　道つもり月の名所は打ちはづしや　は

是東武一派の弊也。三句皆秩にして仔細なき物を、妄りに法を破りたり。翁及び諸子にさる事なし。但し月雪花などして雜に設くは此例ならず。

△月まちは正の月なる事。

拾　月まちの謂れ尊き莖の鹽　丈草
　　傘取りにやる程もなき月の雲　去來

翁の說きに、月待多けれども皆正の月也。按ずるに、こは拾遺の寫誤ならむと覺ゆる也。

△月五去守るべき事。

笈　道者別るゝ關川の月　支考
　　月雪に飛彈の金森家ふりて　同

翁　拜殿は皆諸也後の月　桃りん
　　朧月夜や行尊の席　乙州

五去定めの物に、四去の變格は何れにもある事

なれども、翁の訝きに例(れい)なきうへに、月なれば
殊におごそかにすべき事なり。

△宵闇は月にならざる事。

きそ　宵闇の廊下で帋燭吹消して　や　は

○

百歌仙
二の三　宵闇の空はしばしのあひだ也　素　秋
二の四　西阿知の巻、後折月も秋なき巻あり。
三の八　宵闇は秋の螢の名殘りにて　知　元
四の四　宵の間を闇なく闇にして行かむ　天　垂
西の十　闇の間はちつとばかりに夜の旅　曉　柳
四の十　宵闇も果てゝぎくりと樅の枝　そ　戒
四の十二　宵闇を取違へたる小提灯　白　川

是宵翁、宵闇(よひやみ)を見誤まりて、徒らにまねたり、されども、一集に一二ならば鵜のまねも目立つまじきを、月も花も奇をこのみて、數多もちひたるは人を珍らしがらせむと、思ふきたなき心よりなしけるわざ也。

△星月夜長月仕損じ。

ウ六日　旅望から雁鹿による　東　鷺
小弓　賴朝の顏見むまでは星月夜　き　角
田は枇杷色に片そぎの道　沾　洲

き角は星月夜に非ざる事はよく知りたれど、この裡(うら)月なき故に仕損じと覺ゆ、彼の二月歌仙はき角歿後(ぼつご)に支考始めたれば、其例にはあらず。

一橋　表五月ほのか笑ふかなくか時鳥　湖　春
ウ二メ　別れにふみし八朔の雪　清　風
曉の夜着に螢の秋かれぬ　春
よその踊りに佛となふる　風
此うら月なし　氷の尾や樺をしをる垣深し　春
鳴子崩れし長月の暮　風
ノオ　夜さりの鏡月に顏見る　春
ノウ　月花の廿九日につまりたる　風

此卷初ウ月なくて素秋五あり、三月歌仙に初ウを省く例はなけれど、四月歌仙にて長月(ながつき)を月に

用ひ過ちけん。蓋し「長月の月。長月の光。などの書損じか、全體鳴子崩れし行く秋の月とありたき句也。

□季節變格。

蓬　ふ白銀の鉢に白魚およがせて　桐　葉

桑名にて（雪薄し）　曙や白魚しろき事一寸　翁

借に貞享元冬の吟也。白魚は春なれども、桑名にては冬より出づれば實景なる故に此吟あり。もつとも當季と成りがたき故に、始めは雪薄しと置かれしを、再按に曙と直されたり。こは一時一興なれば例としがたし、殊に付句の中にて、一句捨にしたるは甚だ怪し、冬出で春終るものにて、雑にせられぬものなればなり、この餘古集に生得夏の物を秋にいたし、秋のものを春に入れたる類多けれど、そは式の定め過りにて變格ならず。

ひさ　ふ糊つよき夜着に小さき蘆敷きて　泥　土

○ふ　夕べの月に菜飯かき出す　怒　誰

菜飯は冬春の用なれども古來□也。季につれても用ひたる例なし、此月後に季なければ、前に連れて冬となれど、ふたゝびする事にあらず。

△素春百句三所變格。

誰

二
雪を見て笑ふも今年二つ子よ　ふ　船
物貰ふにもにほふはつ梅　白　燕
飾りしてほのぐ〱狭き間の町　氷　花
十八
雜炭してうる上下の關　船
腥に侍連れは小殿原　燕

三
うらはの柳鮮の紋所　花
廿四
櫻の渦をすくふ落合　才　丸
線香の結び初めたよ春の庵　嵐　雪
嫌なくかたに樵りやる弟子　舉　白
人日首くゝる身に有佗びて　湖　水
松とる跡の月は汚れず　青　井

百句に二は例あれども、三は外になし。

△歌仙素春素秋兩方あるまじき事。

一橋

雜　あゝ何れ花月に雪子規　仙庵

三　手を懸けて空の桂を枝る哉　淸風

萩ふむ童池水あやうき　庵

素秋四　せがき寺女に髮を生やさせて　風

九　別れを恥づる鵙の曙　庵

ならの糸櫻七重にさかざりし　風

素春三　水を朧の礎にたつ　庵

鋤の刄に蛙はもろき命にて

雜の發句に月花を約めたる時、素春素秋の一方出すはよし、又一向なくてもよし、さるを、かく兩方とも用ひては、雜の月花の爲めに作者設かれし心地していと拙し。此故に蕉門には雜の月花出でざる時も、素春素秋を一卷にせざるは、物好過ぎて却つて賤き故也。さて爰に空の桂といふは、桂木の事にて、月の桂にはあらねど、月花あがりたる潤色に、桂櫻を付たるは彌ほ何にかまれし設きなり。假令月花上りたればとて、月花に紛らしきものを、素春素秋の中に出すといふ理なき設きはなし、雜にて慥かに月花は月花也。さるを潤色せば、その月花はかへつてたしかならぬ道理にあたる也。

△秋の字近き異例。

梅十

二　麥秋の節句にかゝるはしかさよひ雨

破れ簾をあふつ秋風　仲志

季かはりても五去の物也。

△秋季春季六續異例。

續花

何　秋經てし墓にさかれば老心　木尓

其文月の廿七日　湖十

頓てゆく乙鳥も北やさしぬらむ　文十

鑚の音の露寒き窓　老鼠

何として桂は光る何に似て　園二

赤蜻蛉のひたる汐先　茶井

ノウよの中の左り細工も長閑也　東鷲
戀の宗旨を替へる出代　冬央
乙鳥のかたい契りはかゝぬ文　如儂
小弓　今樣とさへいへば正月　鷲
其力花には笆のなかりけり　儂
しらぬ顏して陽炎の中　央

定座の花まで春五は濟みたれど、花の後に季なきもあしく、擧一句雜にするも無念と思うて續けけん、花の後に季なくても、雜一句のこりても、限りすむときは續くる事さら／＼なし、凡て季の掟は重き物也。

△一卷一つの物を二三用ひたる變格。

なむ百句　薄雪の畫に似て萩の小柴垣　貫仙
百句　白露に洗うて淸き萩の月　り鳳
萩　萩芒の摸樣も盡きて黄八丈　許舟
一百句　句　色づく／＼や互ふに落ちて薄紅葉　翁
紅葉　花紅葉閉かしくらして物として　杉風

櫻山鳥百句　藤で安井の鐘くもるらむ　臨川
藤　こゝらの藤を夏に眺むる　何悅

季かはりても、榮枯の別なければ同じ事也。

同花百句　冬枯の木葉はらつくはたご寺　支考
落葉　落葉に道のすべる石段　從古
はら／＼と落葉に雨の降過ぎて　逸正

古式に落葉季をかへて四と云へり、こは皆同季也。

續原句　雨の音色々にきく柳かな　蚊山
柳　續の原の青柳の庵　筆

擧句の匂なれども同じき也。

やわ百句　鶯の鳴いて見る日は暖かに　宇中
鶯　小松の中に鶯を聞く　夏段
とて　飛んだりや偖社雲雀落ちたりな　金毛
ひはり　雲雀とん雀ちう／＼蝶しろり　鬼貫
松島　潮干の跡を知りて行く蝶　翁
蝶　蝶まへとてか取殘す芝　獨
きく十　蝶を忘れて猫も戀する　播東

孫を相人に庭のてふ〳〵　朴人

□表に惜む物を用ひたる變格。

虚栗　こひ六　傾婦を蘭の肆にうるき　角

百か仙三　戀ふるなる人を度々言出して　天垂

○

貢名所四　七　えう山を出でかゝる月　翁

白鵐　江戸見てくれば先づ男也　二笠

さる廻五　雲切のしてもあぶなき不二南　史邦

皮　五　賣りあるく九條あたりの芋の聲　支考

旭川　越後から佐渡は向ふの磯なれば　曲紫

古拾　六　天下一竹田稲色になる　翁

笈　六　紙漉きかゝる上京の秋　考

山かた　流行歌きく淀の賑はひ　白狂

印　七　日を經たる湯本の岑の幽かなる　北枝

（しはす帶）近來け出しの名所と號けて。百句初表に名所するは。俳道の誑惑人也。連歌建治の式には初面を十句として名所を作れり。夫によりて當流にもくるしからじと心得たるは、あやまり也。連歌には新古の二式あり、俳諧は應安の新式より定めたるものなれば、本式とも新式ともいふべき物なし。連歌には例あるにもせよ、貞徳。立圃、宗因等のせられぬ事を巧みいだし、これぞ俳諧の本式也とてなすは、破法の罪甚だしき物也（約文）

▲已れ蕉門に在りながら、古式をもて蕉門の人を誡むるは、已れこそ誑惑破法の罪人なれ、都て貞徳・宗因等のせざる事を巧みて、天理の俳諧を立てたるこそ、我門の意地なれ、さて爰に擧ぐる貢若菜、古拾遺、印の號の三つは、翁の詠き也。俳諧本式十句表に、名所一つ出す事は勿論なれども、爰の例は歌仙なる故に、しばらく變格に出したり、されど翁の例もあれば、強ひて制する變格にはあらず。

△脇に神釋を出したる仕損じ。

かも　場かも山や茶の茶摘み時鳥　慈竹
　神　御田の歌にみきを捧ぐる　鴎笑
同　飲みき迄を言ひのべて置い穂懸哉　鷺洲
　神　木々の錦のそこに拝殿　笑

こは何の、かも山、みき、穂懸を神祇と思ひ過まりて脇に神祇をいだしけむ、かも山、高野、住吉の類は地名、みきもみはまと同じく稱言、きは酒の古名、穂懸も神前に限らねば神祇にあらず、御田、拜殿は神祇なり。

其日　むありやなしや名こそ人こそ朧月　百阿
　釋　佛の嗅も室にしら梅　范孚
みかの　む卯の花や若をかへてきく無常鳥　蘆路
　釋　陀羅尼静けき南風受の窓　睡礫

無常の句に無常の題・釋の句に釋の脇はよし、此等は發句を釋と思ひ違まりし物ならむ。

□稻面去變格。

寒ぎく　あ稻盗人の縄を解きやる　翁
　一四　な田を植うる門ふ近江の稻い出來　同

古式は言ひかへて三なれば。折去位の物ならむ、けだし「苗の出來と云ふを稻の出來と寫誤せしにあらずや。

△木類、草類越三句。

一須磨　山風小柴の陰にさつと吹く　似春
　木こし　しら雲かゝる手本手ぬぐひ　同
　紺淺ぎ鹿子交りに櫻さく　翁
みの　木三　へほら草垣穂に木爪もなき家哉　臨琪
　笠面白や卯の寶村さめ　一品
　ちる銀杏に櫻を拂ふらむ　翁
俳　草三　月も名殘りの良寒き蘆　配力
　妹が里や溝に穂蓼の生茂り　園風
　文かきちらす庭のばせをは　風麥
句餞　根松苗杉蟬のなく聲　濁子
　池の橋渡し始めぬ垣ゆひて　き角

根こし―湊入る帆の見ゆる家根越　嵐雪

□人倫越。

桃白
―よりつきのなき女房の顔重き　岱水
夜すがらぬらす山伏の髪　翁
若皇子に始めて草鞋奉まつり　子

焦
―登蓮が下駄の前歯に雨はれて　紫紅
泥鰌の汁に四疊半とは　其雫
夕されば親仁へとふく神樂笛　其角
あたらふるびの山を足輕　紅
孔明の刀懸なり鹿の角　雫

江戸
―猶も伯父ぢやと人買の梅　匪足
浮世からうきよへなびく凧　獨
―方丈を出ていゝわしよぶ聲

△氣越。

蓉十
―二本指より朱鞘は氣遣ひな　蓮二
―馬士も一ぱい過ぎた顔付り　雪

―花くもり明日の天氣を受合うて　泊楓
―若代になれば質も氣遣ひ　野航

山かた
―重箱に何やらけふは配り合ひ　白狂
―旅に遊べば氣もまめになる　東羽

△人、者越。

金龍
―鴟夷も强ひての慾をせぬ人　格枝
庵室のきれいは二段無一段　菊陽
―拳程なる西瓜人並　尺樹

○

笠
寺の名を飛脚の者もうろ覺えり　紅
藥鑵をかりて藥せんずる　米花
長居しておちやる月見は胡散者　荷丁

□天象越。

市庵日月
―有明殘る濱の朝やけ　さ笠
此頃の荒れに鱸もつれぬやら　史庭
―着いて日だかく見ゆる小田原　き柳

桃　同

日は軒へ若代の朝寝叱られて　琶舟
どこの使か顔も覺えず　梨月
名月の芋に參住も居なじまれ　紫紅
ー只きら〳〵と星二つ三つ　夏段

梅別　日星

白壁の松も聳えて城の花　丁阿
ー駒鳥鳴いて日はなゝめなり　仲太

△日並夜分越。

山かた　日に日並

ー夕には高い日雇や　右範
尼達は矢箭の春飯喰習ひ　馬岐
ー蓮おる子のよこに日のてる　野航

○

百か仙　數日並

弓も今更懐一頭の三日の月　若芝
近う亙の有りて仕合　紫道
西東花よ〳〵と五七日　里仙

新百　夜分

ー何を思ひの燈籠更行く　支考
有明の拍子もぬけて曇りけり　反朱
ー舟にふしみの一夜秋風　唐庭

△降物越。

松島　雪霜

ー吹雪の袖をふるふ兄弟　簣[illegible]
松行の莫加を買はむ十市
屑巻きたる樋の霜

新百　露雨

露濡へて机の先の萩すゝき　反朱
夜寒になりて人も戀しき　水甫
げにもさう村雨はれて峯の月　支考

△聲明越。

幽　霞雲

雨霞む古藏弘くをさまりて　仙風
白き鼠に雪ぞ解け行く　かめ
雲間より赤い鳥のほの〴〵と　想代

さみ　曇雲

曇るけは鳩の天窓の病めるやら　こ秋
尊い事を知らすつき鐘　きし
さればこそ西は法輪花の雲　范孚

其日　同

ー窓のくもりに起きて復寐る　同
あちらむく日とて葉の花も咲き　吾山
ー藤山吹に色々の雲　桂州

□神祇越。

俳錦とる

庭稲荷櫃に隱れて仄かなる　卜尺
　至らぬ役者藝冥加あれ　千春
莢されぎ院に日祭を催ふされ　翁
　新曾の札のあつちこちより　鳥舊

越

江戸迄の便宜は月に六日づゝ　不柳
　祭りの首尾の一段とよき　管小

△釋教越。

たこ

　よき石見れば佛切りたき　半殘
ゐり拂は月をくゝりしごとく也　梢風
　僧の髭そる盆の夕ぐれ　之園

山かた

　後生願ひの隱居息災　六之
此寺は鎌倉の世に植ゑたやら　馬岐
　地頭から立つ開帳の札　白狂

△名所越。

王子酒聊時に須磨を打潰し　翁

一色付

　冷も養らぬ大浪のあと　杉口
癩氣特藥に住の江の香を絶えて　翁
　あら野の牧の御召撰みに　き角

鶴

鴨の一聲夕日を月に改めて　文りん
　札の銘やく寒き也　り下

續虚

戀聲に度會讀る宋の風　き角
　名乘嘻しき幣圖をとる　破笠
さ月まつ加茂の祭りの馬からむ　同

△野、山、天越。

雪花　野

　物よぶ聲や野馬とるらむ　翁
松明に飯荷ひゆく秋の風　桐葉
　宮もよし野の哀れしる月　翁

古拾　山

　西をはるかに鎌倉の山　二葉
隈とりの峯より月の落ちかゝり　紀之
　秋を座敷の床のやまかせ　卜尺

同　天

　天下一竹田稲色になる　翁
淀鳥羽の鏡の影に見えたりや　似春

ーやよ時鳥天帝のさた　春澄

△同[illegible]越。

次句 まくら ねまき

ー衛士提灯を枕して眠る　才丸
はしたなりける女房の聲更けて　翁
ー血摺の寢まき夜や忍ぶらむ　丸

しゝ 木り かさ

幽靈は木履をはいて杖ついて　丈志
戀路の闇に迷ふ四つはし　素然
御せんきは傘の名に知れかゝり　山りん

△衣類、火鉢越。

焦 衣

藪入の天の羽衣まれに着て　周東
のばす指子にとまる畫蓮　銀杏
手本米袂からもるくれの月　其角
ー袂ふるへば數珠と煎りまめ　孤柳
借着して下女のうかるゝ土用干　呉雪
褄はづれよりはづかしい筆　千怒

思亭 同三續

○

垣間見に行水時のゆふ煩り　圓入

夕顔 火

ー宿は鏡のかげの舍りに　袁立
灯のむしも半ばは秋にして　宰陀

前（五〇三下）植物打越已下是迄の中、正格二去の部の物は強ひて制する變化にもあらず。已下に擧ぐる字越の中にも、正格にて二三去の物あり。

□活字越變格。

六つ する

ー負けた角力が勝つた振りする　桃りん
金掘と色の青さにしられけり　同
ー鳥居の施主に潜り初めする　鋤立

あら 成

木鋏に明るうなりし庭の松　長虹
秤にかゝる人々の興　間及
此年になりて灸の痕もなき　一井

山かた 同

ー若代になれば質も氣遣ひ　野航
重箱に何やらけふは配りあひ　白狂
ー旅に遊べば氣もまめになる　東羽

○

奥取
物取落す音のをかしき　ろ通
から尻を乗りあぐみたる花の山　同
はらへも蚤の足に取りつく　不玉

○

このは出
踊にいづる宿の出女　許六
月蝕の兀げて更けゆくあとの影　獨
香の烟りのをるゝ出格子

○

壬入
持鑓の一間床には入りかね　貞翠
安房つかへば皆道はるゝ　出房
宵の口入りみだれたる道具市　九節
さく花をかねて手に入る作の鞍　止水

類同
梅の雫は御[illegible]の相伴　堤亭
鶯に聟の中入[illegible]のめかし　大町

○

拾知
菰斗り身にまく人を見知りかね　丈草
湯の時ふるゝ夕ぐれの月　支考

汐同
藥笛を知りて合はする秋の風　翁
芍藥の名を知るほどは取集め　そせん
假初ながらひらい下市　ぎ巧
奉公の心をかへて思ひしれ　紫友

梅のさか有
ちつと廻れば家のある道　去來
萬日のいつ立初めて鉦の聲　支考
言付けてあるたご桶の數　杜年
頓てありとはしれた御鷹野　吾仲

歌同
隙過ぎて女をたらす役者ども　佐曲
降るにもあらでぬらす張物　范孚

○

鳥切無
譯もない事いふな埒なき　母風
佛法も世法も知りてしらぬ顔　令羅
いろはで萬すまぬ事なし　芙雀

同同
何なくと夫々そこへ酒一つ　諷竹
草臥れたりな長い四疊半　い然
あれこれと撰れど手にあふ筆ぞなき　芙雀

○

浪懸

小鼓の拍子に霰ふりかゝり　元春
相伴なうて膳のさびしき　い吹
暮れ懸る障子な矢張明けて置き　和木

○

梅十居

何ちややら睡いて居て暇ごひ　泊楓
姫入のあとの門火焚きつゝ　り紅
清洲越覺えて居るはばゞ一人　有琴

○

文星立

むくろ腹立てゝも連の未だ見えず　柳匯
拂ふあとから酢徳利の蠅　杏鳥
明立の眞凉しう風もたせ　眉泉

已上は正格二去の物也。越の例少なき故に、暫く爰に入れたれど、強ひての變格にもあらず。

鶴寄

｜江潮々々に年よりにける　仙化
卯の花のふな精にも見ゆるかな　芳重
｜竹うごかせば雀かたよる　楊水

續虛鳴

山寺の鼎をならす朝催ひ　露荷
松に笠ぬぐ暮露の起臥き　角
新らしき鳴子をならす瓜作り　荷

已上は正格三去なるものゝ變格也。

類殘

昨今に殘る言の葉なかりけり　檀泉
杵も響きもしぶ〳〵とこそ　丈松
否かゝぬ心わるさよ殘る月　其幄

桃直

姉聟も上へ直せぬ男ぶり　鳥南
笑ひの鼻をはぢく摺鉢　指山
花の時紛れた笠を替直し　曙窓

已上二例は正格五去の物、已下五例は正格一句去の物なれば、決して變格をまぬる事なかれ。

ひさ・蔚

｜やしほの紅葉木の芽萠えたつ　正秀
ちる花に雪踏引きずる音ありて　珍碩
｜北野の馬場にもゆる陽炎　秀

歌參

娘ども連れて一度は京參り　鷹仙
大工にこちの持佛拜ます　琴左

先づさめぬうちに參れと雪見舞　風草
洗濯のいとまを貰ふ宵の月　支考
茶　貰
野良に渡す巷籠　以之
寢所は貰ひ集めた畫を張りて　扇車
新米に腹のかげんのちがひけり　泊楓
梅十　違
古鐵買ひの棉實も買ふ　梅光
言傳は藪から棒の人違ひ　蓮二
張道を傘提げて一日忌　風麥
風麥亭　張
飯の強きを好まれにける　良品
月かげに燈籠張りて泣きくらし　翁
△辭、體字越縫格。
誰　物
つらしと知らば來まい物とて　才丸
わりなくも乳探らるゝ闇の婆々　嵐雪
寢られぬ現妖ものゝ影　き角
小襖に左右の銘は煤びたり　考
梅　小
都をちつてくに〳〵の旅　い然
改むる秤に小玉ためて見る　酒堂

問はず語りに小僧夜更し　蚊夕
あめこ　小
御もち鐺精蝙蝠が打落す　忠清
花の嵐のひづむ假小屋　光延
右正格二去物の變例也。
入相がなるとてとゝを待兼ねて　栗几
山かたとて
一荷にたらぬ盆の買ひもの　二
照ればよし降ればよしとて月と笠　六之
黒津へやつた人はまだかも　り紅
笠　未
脇詰を着たれば娵も世帯めき　荷丁
まだ杉の葉も青き酒店　諷山
雨ほどぬるゝ槙のしら露　夕兆
白扇　白
此頃の旅も山より冬近し　氷麥
年の白髪を眉に見らるゝ　東園
新宅も中年に花の咲きかゝり　有琴
梅十　中
青酢は寄り皿に若あゆ　呂林
雨にせく中に照る日は長からず　延
右正格三去物の變例也。

頭陀行　陰

夕顔の葉陰に月も忍び宿　百齢
藪入(やぶり)風流(みやび)に質の置替へ　希吹
陰震なれば疵も苦にならず　咄哉

右正格五去物、左三例は正格(しやうかく)両去物の變(へん)也。

とて　借

借も大きな鳥があれ〳〵　勝重
他人ほど親類が何のぎりしらう　加中
此月がさて晝に負けうぞ　琶佳

俳諧とる　玉

今その螺金色の玉　峡水
袖に雨龍夢をちぎりけん　翁
涙の玉あり明暮に乾く　麋塒

續さる　つり

受狀濟みて奉公ぶりする　沾ほ
よ過ぎたる茶前の天氣氣遣はし　りほ
あるふりしたる國方の客　馬莧

△留字越變格。

やへ　に

身にしみし幸さはうつの山程に　重榮
世の様問ふやなくかんこ鳥　示右
軒近う馴れて雀に住みけるに　用雪

與　ず

喰仕廻ふみその器も捨てられず　支考
先づ見事なる鷹のおり出し　重行
門前の隣りもいまだ定まらず　呂丸

藤　ぬ

芋煮る鍋の曲突に懸らぬ　り紅
出代りもまだ寄人の衣裳付　呂杯
御大工衆の口にや勝たれぬ　り雪

山かた　也

祭りには又隙さうなけしき也　馬岐
濱の肴に鳶の暮行く　右範
三日月の二日に出るは馳走也　東羽

とら　と

そんならさうよ雪は降るかと　勝重
酒をたち饅頭呑んで詩を吐いで　月尋
そなたを見ても人違ひかと　蘆角

右正格三去物の變例(へんれい)也。

△のの字留仕損じ。

古拾　いつも初音のいつも初音の　似春
同　鼓の下手くそ寺はかつらの　同
一色付　普請の積りよい手廻しの　杉風

一見返　ぬれ緣や世に出づれば手皿の　似春

一須磨　浪こす岩を切つてのはつての　翁

一物の名　朝比奈の三ぶ樣四郎樣五郎樣の　信德

○

三ノナ　曲れどをれぬ雪の柳の　蓮二

浪　あら湯の俳義は毒の葉の　文礀

越　昨日菊に檜のさかなの　盤泉

つるも　其匂ひ籠の目もるゝ松茸の　蘆角

文操　早稻の香の君が代なれや秋の田の　桃始

前六は天和禪翁[?]の詠き、後五は支考詠き、みな／＼作意よろしからず。○の字留におく時は、轉倒の作にする物也。抑もの字は物の居所を定むる辭なれば、夫が留にある時は、上にかならず其落付所なくては叶はず。（古今十五）吹きまよふ野風を寒み秋萩の移りもゆくか人の心の　と云ふは、萩の風にちる如く、人の心の移りもゆくかと云ふ心也。上の脇も、曲れどをれぬ雪の柳のと、切字を入る所なるを、ぬと下へ續く辭を用ひたる故に、あしく成つたり。此心をよく／＼得ざる人は、妄りに用ふる事なかれ。

貞享式海印録六終

俳諧寂栞序

東山の土卯の、俳諧寂栞とうはがきせしさうしを携へきたれり。ひとわたりよみて、拙堂は三たび臂を折きしくすしなりとつぶやけば、土卯のきゝとがめて、かれが家わざはくすしなれど、こは厥道のしをりにあらず、さるになにをもてかくはたゝへ給ふぞととふ。まろ答へて此さうしの初めに、はいかいはすべし、俳諧師にはなるべからずといさめしは、こをのみ好みて家業をもわするべき病ひを治むるをしへならずや、又そが末の條々にも、正しき風にそむきて、邪なる路にまよひなやむべきを、豫めすくひたすけ、心の花をうるはしく類ひたつる方を授けぬれば、かへすがへすもみたび臂を折きし醫師なりけりと、あげつらへば、げにのたまふ如く、此みちのためにもいとよきくすしなりと、左りにかたぬぐを

みて、論ひしまゝを求めのまにま、かいつけて還しあたふ。

文化九年七月

富小路從二位刑部卿貞直卿

如泥齋主人

俳諧寂栞序

からうた國歌、ともにあがれる代は人のこゝろ眞すぐにして、おのづから思ひ邪なしとかや、今ばせをの翁、その古へをしたひ、俳諧もかつますぐぶりになせり、しかも規模たゞしく、たま〳〵のりをこゆるといへども、ふかきわきまへある事にて、おのが述べて作れるにはあらず、さるを當世の人ら、おのが恣まゝに句をなし、のりさへ新しみをまうけて、流行調などいへる徒多く侍れば、こゝに拙堂うしこれをなげき、こたび白坊がえらびおける寂栞てふ一集をあらためものして著作し侍りぬ。いかにも此ふみを見これを守らば、元祿のむかしの俳諧にもとづかん事うたがひなし、我れも其心ざしおなじければ、此はしにみじかき筆をとりて、平安東山俳仙堂の窓下に、いさゝか微意をかい添ふる事しかり。

文化九年中のあき　定雅

俳諧寂栞序

可解不可解之一語、不啻我詩之論可以論誹諧歌也、夫誹諧之爲歌、僅々十七字爲一首、言簡意深、宜哉其妙處在可解不可解之間焉。白雄居士此撰、解其可解不可解之妙處、而得拙堂主人之增補其書初備矣。今茲壬申之夏刻成、以予之與白雄氏有舊、請題數言。時新闢小園移花種竹日、就園丁之事筆硯廢者數旬。聊書之以記姓名而已。江戸詩人詩佛老人大窪行序。

凡例

一此書安永選本寛政選本二品あり。安永本にありて、寛政本になき文あり。寛政本にありて、安永本になき文あり。今寛政本によりて參考なして、安永本にある文を增補せしものもあり。

一章中に(補)とあるの以下は、皆增補せし文なり。又三四行の文には、文の上に(補)とあり。一章增補せしには章名の上に(補)とあり。發句も亦一二句の增補には、句上に(補)とあり。四三句の增補には又章中に(補)とあり。かく童蒙の爲めに補ひはなせども、只黃狗の皮ならんことを恥づるのみ。

一從來寫本にて傳へ來る書なれば、魚魯烏焉馬の誤りすくなからず、されども、引書あるは引書の元本によりて悉く改む、たとはゞ「ありとだに人にしられぬ身のほどや晦日にちかき有明の月」鴨の長明とあり。今これを兼好法師に改む。餘はおしてしるべし。

一ばせをと書くべきを、祖翁と書するは、稱するの意なり。發句には翁とのみ書けるの意また同じ。

一すべて異體の發句は作者の名をはぶく、或人集にと書するも題名をはぶけばなり。

一各章の初めに、祖翁の發句を置いて正風の規矩となす、其餘は弟子詞友の雅吟にして、證句となるべきをのみ載す。又烏醉の發句兩三句を載するなり。撰者白雄が句をのせず、今增補

なして白雄及び弟子俳友の發句をのす。予亦白雄に傚ひて一句ものせず。

一此書は門弟子の爲めに書きてあたへしもの也。故に篇尾に、

此一書は祖翁の遺語をもとゝし、去來叟の筆のあとを渉獵し、はた烏醉居士の夜話をあげて三卷となし。道にこゝろざしある詞友のためにす。他見をはゞかるといふは、よしなき爭ひをのがるべきが故也。もし同門の外沙汰するにおいては、禽獸たるべきものなり。

かくのごとき語あれども、俳友のために是を公にせんと思ふが故に、罪を予に託して、且つ增補を加へ、これを上梓す。若し此書によつて、正風の俳諧に荷擔の人あるにおいては、予が罪も亦滅却せん。

一少年の人、產業のひまある時は、俳諧をなすべし。俳諧をなせば、多く鳥獸草木の名を覺ゆ、且つ年中の行事、古歌古事の意をも傳へ知る也。すべてものゝあはれなることをもさとり、月花に對しておもしろきといふ心も出づるなり。又老若隔てなく談話の助けとなる故に俳諧はすべし、俳諧師にはなるべからず。是產を破るをにくめばなり。

拙堂老人識

俳諧寂栞目録

上の巻

贈答
餞別
留別
哀傷
述懷
懷舊
畫讃
　發句の體をわかつ
　けしきことなる句
　はなやかなる句
　ふとくたくましき句
　ほそくからびたる句
　艶にやさしき句
　幽玄なる句
　をかしき句
　色だての句
　感情なる句
觀想
　生類に對する觀想
　手をはなれたる句
　一作ある句
回文
物の名

中の卷

脇の事
第三の事
聯句他季うつりの事
二句一意の事
おもかげの事
名所に名所を附くる事
したしき附の事
大勢の中の人をさだむる句法
こぼれ月の事

下の巻

員外

(三)

目録終

俳諧寂栞卷之上

白雄坊選著　拙堂增補

俳諧の龜鑑

古池や蛙飛込む水の音　翁

道の邊の木槿は馬に喰はれけり　同

この二句は蕉門の奥儀也。つとめてしるべし。

おとろひや齒に喰ひあてし海苔の砂　翁

やがて死ぬけしきも見えず蟬の聲　同

（けしきはとして聞ゆ。校訂者誌す。）

夏來てもたゞひとつ葉の一葉哉

（曠野集には一つ哉とあり。校訂者誌す。）

あの雲は稻づまをまつたよりかな　翁

此秋は何に年よる雲に鳥　同

ともかくもならでや雪の枯尾花　同

四時の觀想つねに齒牙に味はひて、正風の旨をしるべし。

【補】

玄旨法印曰く。古歌を見るに、先づ抄を見るはあしく、我が義理をとりて、さて義理にあふかあはぬかを見て分別すべしと也。是長短得失にあてる敎へなるべし。俳諧も亦しかり。句每に再三吟じて、我が義理にあてゝ見るべし。古今人心一致なれば、總ひにはあきらかに正風の旨を得べし、只十七文字のうへにて

のみ解するを、うはすべりといふ。深く味ははざれば妙處しりがたし。こゝにあらはす句句かならず難をかまへ、ゆめ〳〵捨つべからず。解しがたきことあらば、いかなる故かあらんと、日を重ねとしをつみて味はふべし。我が俳諧の上達するにしたがひ、其得力ほどには聞ゆるものなり。中道にてすつべからず。

春もやゝけしきとゝのふ月と梅　翁

時鳥啼〳〵飛ぶぞいそがはし　同

白露もこぼさぬ萩のうねり哉　同

（白露をとして聞ゆ。校訂者誌す。）

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　同

正風にいたらんと思ふものは、道に入るより

常に吟じて、旦暮に龜鑑とすべし。

去來正風の大意を問ふ。

祖翁曰く。俳諧はよく萬物に應ずることを旨とすべし。祖翁の答へはすなはち萬物に應ずるなるべし。

又曰く。俳諧はものを憐れむことを要領とす。自他の觀想はさら也、ものをあはれむとは草木の霜にあひ、鳥獸の寒暑にくるしむや、されば道に臥したる乞兒にむかひきたなしとおもふ念起らば、一句にむすぶ事あたはず。不便と思ふ心は則ち風雅の一句也。さりやとて句毎に觀想をのみせよといふにはあらず。哀樂ともに春秋につれてせちに嘆ずべし。たゞにわするまじきは、風姿風情也。俗にくだらず、雅俗にあそぶべし。

【補】

正風の俳諧は萬古不易の句體にして、千歳に不朽をなす、しかはあれど、祖翁にも延寶天和の頃は異體も亦多し。異體とは流行也。流行とは一時々々の變風なれば、數年を經ざれども廢するもの也。仙化曰く。其角發して後漸く三年なるに其風をいふものなしと嗟嘆なせり。去來曰く。流行の句は、おのれに一つの物數寄ありてはやる也。形容衣裳器物等に至るまで、時々はやりあるが如しといへば、正風より變風するも、亦流行なるべし。さればにや、正風と流行とは水と氷とのごとし、氷の水にならざるなし、二にして一、一にして二也。此もとをしらずして、變風せば作にすゝみ、或ひは理窟に落ち、或ひは流れて終ひに名もつかぬものとならん。或人曰く。家隆は寂蓮の婿也、寂蓮相具して大夫入道の和歌の門弟になりき。禪門申されて曰く。この仁未來の歌仙たるべし。見參の度、難儀などいふことをば問はれず。いつも歌詠ずべきまさしき心はいかにやと問はるゝとて、感じ申されしと也。俳諧の正しき心は正風にあり。正風はたくみなく、自然の實情に得るものなれば、萬物によく應ずるを旨とする、其萬物に應ずるものは、則ち眞實をいふ也。一以貫レ之と聖人のたまひしも、眞實の事ならずや、孝ともなり忠ともなり、仁ともなり義ともなり、よく萬物に應ずるなるべし。されば祖翁より已前は、興をとるものを俳諧と唱へ來りしを、祖翁これを看破して、眞實無妄をもつて俳諧と唱へ、正風をしめし申されし也。誠に俳諧中興の翁也。躬恒、貫之、再びこゝに來るとも、意において何ぞ喙をいれん。天地の造化もとより常なし。俳風もまた一風にとゞまらず、變化なすもことわりながら、祖翁

のもとめたまひし道を捨てゝは、其餘は邪路とおもふべし。

蓬萊にきかばや伊勢の初便り　翁

日の春をさすがに鶴のあゆみ哉　其角

かくのごとく、めでたき事は目出度き心をさらに嘆ずべし。詩に咨嗟詠嘆あり。歌に餘情あり。俳諧わづかに十七言、まして嘆ずる事を先とすべし。句々たくみにおちいるあり。作にすゝむあり。二作三作にあそべるあり。題の文字にすがるあり。見立句を好めるあり。俗中の俗にあそべるあり。理窟を常とするあり。これらの人は門外にあそぶべし。よしなき爭ひをもとむる事わづらはし。

古哲曰く。あらぬたくみなるものは、足下をはしる珠をひろはずして、珠をひろひたる人に行きあたりたるがごとし。

又曰く。よき句をせんと思ふも病ひなり。めづらしき句をいはんと思ふも病ひ也。人に上手とよばれんとおもふも病ひ也。たゞものものに對して自己のたのしみたることをしらば、おのづから人に上手とも呼ばるべし。珍らしき趣向も出づべし。能き句はもとより常にたのしむなるべし。

祖翁曰く。人の旦暮おなじからず、まして春秋をや、秋にはなどか老をいはざるとありしもたふとし。此道にあそぶものは、主一無適たるべし。道傍作家三年不成の語をおもふべし。

姿情の事

いにしへより論多し。姿をさきに情をのちにすといへるも初段のことなり。情をさきに姿

をのちにすといふは、尤もいはれなき事也。姿情は天地の如し。前後の論にまどはず、物の姿と、己が心と相合する時を一句にむすびて、例の自己のたのしみとすべし。

【補】ものゝ姿と、己がこゝろと相合する時を、一句にむすぶべしとは、俳諧の出づる雅境をしめされしならん。心得べし。

あの雲はいなづまを待つ便り哉　　翁

鹿の音に人の顔見る夕べかな　　一髪

かくのごとく、姿情の前後にかゝはらざるをしるへし。

【補】詩法要標云。詩之義意不レ一。要ニ其歸一不レ過ニ情與景一而已。情兼レ景者上也。偏到者次レ之。偏到とは情のみによるを情到といふ、是俳諧の風情のみいふに同じ。又姿のみによるを景到といふ。是俳諧にいふ風姿のみなり。又情中寓レ景、景中寓レ情あり。又云。惟情可三以全二篇言一。然苟無レ法注レ之易レ入ニ流俗一。故曰。融ニ情於景物之中一、託ニ思於風雲之表一者難レ之。姿を眼前に見るがごとくいひなすものを風姿といふ。

谷川や茶袋そゝぐ秋の暮　　益青

今植ゑし竹に客ありゆふ涼み　　柳居

これらにて風姿をしるべし。風情の句は次の

章にゆづる。

三の情の事

餘情は深きにしくはなし。一句のよしあしもたゞに餘情の淺深によれるなり。通情は最も句々にこもるをよしとす。親子、朋友の情はさらなり、春の花のはなやかに、夕べの露のもろきなんど、いづれも通情にあらずといふ事なし、情はあしゝといふは、己れのみの情にして、聞く人なきをいふ情をきらふ。證句卷中の末に出づる。

【補】

情とは言外にあふるゝの意をいふ。さびしきといはずして、さびしき事かぎりなく、涼しきといはずして、すゞしきおもむきをいふ。

枯枝にからすのとまりけり秋の暮　翁

寂しき情かぎりなし。

「秋は來ぬ紅葉は庭にちりしきぬ
　道ふみわけてとふ人もなし

寂しき餘情最もふかし。

渡りかけて藻の花のぞく流れかな　凡兆

すゞしき情かぎりなし。

「道の邊の清水流るゝ柳かげ
　しばしとてこそ立ちとまりつれ

涼しき餘情最もふかし。

野ざらしを心に風のしむ身哉　翁

捨身掛命の行脚をおもひ立ちたまひし時の句

なり。これら皆通情にしてきく人腸を斷つなるべし。

秋いまだ七日の夜の明けやすき　猿雖

たらちめの湯婆やさめん鐘の聲　鼠彈

中々に子をこそおもへ秋の暮　蕭山

朝顏の種とる人のこゝろかな　和及

これらの句々にて通情をしるべし。姿をあしゝといふはあらず、姿なくとも通情はよし情は嫌ふ、姿情の論此旨をしりてまどふべからず。

【補】すべて句を案ずるには、趣向より入るはよしとす、詞道具より入るをあながちきらはず。又好むべきにもあらず、いかんとなれば、情薄ければ也。

【補】俗情の事

俗情といふは、こゝろのきたなきをいふ。外面は、釋迦孔子をも奴僕のごとくに思ふ形容にて、口にまかせて人をのゝしり、内心は色に耽り妻妾のほだしに苦しみ、金銀をむさぼるを專一となす、虎皮羊質のもの是也。これらの人、口才を以つて言ひつらむとも、終ひには俗情を吐出すものなり。

うらやましおもひきる時猫の戀　越人

去來抄に云ふ。蕉翁伊賀より此句を書贈りて

曰く。こゝろに俗情あるもの、一たび口に不出といふ事なし。かれが風雅、こゝに至りて本情をあらはせりとなり。

たとへ通情なりとも俗情をきらふ。

「春の田を人にまかせてわれはたゞ
　はなに心をうつしぬるかな

此歌も俗情より出でしなるべし

朝顔は紺に染めてもつよからず

これらの句も同じかるべし

詩歌連俳ともに、思ひを述ぶるものなれば、つゝむいとまなく、十七字の上にて、わが俗膓を見透かさるゝは、はづかしき事にあらずや。竹窓三筆に云ふ。榮名厚利は世の同じくあらそふ所也。これを求めて得べからず。これを退くるも亦得べからず。求めて得べからざる事は、人よくこれをしる、退くるとも亦得べからざる事をしる人ぞまれなり。若しこれをしる人は俗情をまぬかれん。

【補】詞情新古の事

古有レ言。云情以レ新爲レ先、詞以レ舊可レ用。云々定家卿曰く。詞は三代集に出づべからず。俳諧も亦意を新らしくするを專用となす。詞はあらたに作り出せるを嫌ふ。或人曰く、俳諧には、俗談平話をつかふとも何ぞくるしかるべき。答へて曰く、俗談平話とは、歌連歌につかはれざる詞をもつかふをいふ也。且つ一句づくりにもよるものから、

さむしろとも、疊とも、薦ござともいふ。是を俗談平話とはいふ。歌連歌につかはれざる疊寢ござをもつかふといふこと也。俗中の俗言鄙

言の事にはあらず。又新詞のことにもあらず。

去來抄に云ふ、

賽錢も用意顏なり花の森　去來

祖翁曰く。花の森とは聞きなれず名所なるや、古人も森の花とこそ申し侍れ。詞を細工してかゝる拙き事いふべからず。

詩に詩語あり、文に熟字あり。歌はもとより、俳諧に俳語あり、祖翁和歌の道を季吟に學び、儒を素堂にきく、俳諧を宗因に發明ありて、新詞はよからぬものとおぼすが故に。森の花を花の森と顚倒せるを、かゝる細工して拙きと制したまふ。去來すらかくのごとし。いはんや文盲短才にて新詞をいふべからず。

許六曰く。上手には仕損じあるべし。下手には仕損じなし。俳諧の底のぬけたる時は。新古にかゝはらず、底のぬけざるものは新古にかゝはりて、俳諧自由にならず。ゆゑに無解に新詞を得んとする。これ必らず俳魔と思ふべし。意は新らしく詞は古きにまさるはあらじ。

「聞きわたる天の河原かさく花の　千蔭
　雲の中ゆく水のひとすぢ

これは小金井の櫻にての風吟也。予れ亦そこにありてうけたまはる。澆世の今花を雲とよみ出づるは古きのかぎりなれども、意あらたなれば、人々賞し侍る。

有用にして無用の話の事

あら海や佐渡に横たふ天の川　翁

十二文字にてすみたる何也。いさゝかも有用の五文字置きたらんには、くはし過ぎる也。其

ほど〳〵を思ふべし。尤も無用なる詞は論に不レ及。

草の葉や足の折れたるきり〴〵す　荷兮

はかなさやなど五文字置きたらんには、くはし過ぎるなるべし。

「千とせなる松も小松となりにけり
　大原山の雪のあけぼの

此歌雪の深さよとあらば、くはし過ぎると何がし殿のおほせられしよし。

【補】

すべてくはし過ぐれば餘情をうしなふ。故にすみ〴〵まで言ひつめる事を嫌ふ。又行きとゞかぬもあしゝ、たとはゞ、前にいへるがごとく、雪の深さよといひつめるを、雪の明ぼのといへば、雪の深くつもれるさまは、おのづからこもるべし。

換骨の事【補】反轉

【補】

換骨とは、詞同じくして、句意のかはりてあるをいふなり。

ものいへば唇寒し秋の風　翁

唇や蓼喰ひしあとの秋の風　許六

次第おしならべて、唇の秋の風のみにて換骨をしるべし。

又

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店　翁

聲かれて猿の齒白し峯の月　　其角

其角曰く。此句反轉して猫の齒白しとも海人の齒白しともあれ、發句の一體を備へたらんには。等類の難ゆめ〳〵あるべからず。一句の骨を得て、甘き味はひになづむべからず。

【補】

徐陵鴛鴦賦曰

山雞映水那相得　孤鸞照鏡不成雙
天下眞成長會合　無勝比翼兩鴛鴦

黃魯直題畫睡鴨曰

山雞照影空自愛　孤鸞舞鏡不成雙
天下眞成長會合　兩鳧相倚睡秋江

又

鬢爲愁先白　顏因酒暫紅　樂天
短髮愁催白　衰顏酒借紅　後山

これらば換骨の詩なり。

「ほとゝぎす啼きつるかたをながむれば　後德大寺左大臣
　たゞあり明の月ぞのこれる

「有明の月だにあれやほとゝぎす　宇治前大政大臣
　たゞひと聲の行きがたも見む

これらは換骨なしたる歌なり。

又

人の親のからす追ひけり雀の子　鬼貫

雀子を巢へもどしけり人の親　丈馬

これらもまた換骨なしたる體也。

人の親燒野の雉子打ちにけり　曉臺

是は前の鬼貫が句に、反轉なしたる體にて、換骨ともかはれり。

【補】同巣の事

葛の葉のおもて見せけりけさの霜　翁

牽牛花の裏を見せけり風の秋　許六

去來曰く。同巣の句なるべし。

桶の輪やきれて啼きやむ蟋蟀　昌房

石くえて鰍啼きやむ月夜哉　居行

これらの句は、ものにうちおどろきて啼きやみたる趣に同意也。たゞ形容をいひかへたるまでにて、手柄なし。これを同巣とも、又同竈ともいふ。兄よりうまれまさらむ事かたかるべし。

じだらくに寝れば涼しき夕べかな　宗次

此句は自の句也。じだらくなる姿にて、のけさまにいねて四體をあらはに出したるさま也。これを他より見て、別に魂を入れて一句となすときは、

人酔うて蚊にくらへとの寝ざま哉　柴居

かくいへば形容は同じ事ながら、自他のわかちにて句意天地懸隔なれば、同巣反轉の類をまぬかるゝなり。

【補】一字の置きやうにて句意淺深の事

翁曰く。一句わづかに十七文字なり、一字もおろそかに置くべからず。俳諧もさすがに、和歌の一躰なり。句にしをりの有るやうに作るべしと也。或集に

けふばかり人も年よる初時雨　　翁

これ一句の意を解せざる故、かく入集せしものならむ。人も年よれといはざる時は、風雅の栞りを失ふ。

汐焼の孤村に歸る秋の暮　　保吉

或人曰く。此句孤村に歸れといはざるときは、きれ字なしといふ。是亦一句を解せざる人也。歸れと下知をなすときは、秋の暮の寂々寥々たる意を損ずるなり。一句をも會せずして、てにはの穿鑿かたはらいたし。前の句は年よれといふにて、胸中瀟落たること光風霽月の如し。後の句に歸るといふにて、眼前の幽境古松清音あり。是一字もむざと置くべからず。句意の淺深にかゝはるのみならず。置きやうにて一句をなさず、てにはといふも義理を通じ意を深くせんがため也。義理よく通じ句意深くなるやうにいふときは、てにはおのづから其内にそなはりてあり。何ぞ別に外に求めんや。

文字あまりの事

ばせを暴風して盥に雨をきく夜哉　　翁

蒲公英や春とはぬ宿のわすれ草　　山店

「有磯海の波間かきわけてかつぐ海人のいきもつきあへずものをこそおもへ

吟ずるにくるしき字あまりは、風雅(ふうが)のうへの病ひ也。はた切字にくるしみて、文字(もんじ)あまりしたるなどいふにやおよぶ。

朧月や　あやめ苅るや

これらの文字あまりをきらふ。

月朧に　苅るやあやめ

かくいふときは言葉(ことば)しづまる故に、吟ずるに口にたまらず。ものすべて此心得あるべし。

連歌に三三の字あまりをよしとし、二四の字あまりを嫌ふといへども、二四の字あまりにても、例(れい)の口にとまらざるはよし。

【補】

二四の文字あまりとは

雲をり〱人を休むる月見哉　翁

星はら〱霞まぬさきの四方の色　呑霞

三三の文字あまりとは

咲きつちりつひまなきけしの圃哉　傘下

ちるは〱酔のさめたる夕櫻　自槐

古人のきらふ二四は、雲はれてはといふ二四なるべし。語路(ごろ)あしければ、古人(こじん)もいはず、われもせぬなりと祖翁(そをう)のたまひし也。

文字をあまして句の優しみをつくる事

あら何ともなきのふは過ぎて河豚汁　翁

上の五文字をおもふべし。

よし野山は花の木の間の花見かな　　鳥　酔

みよし野はとありてもしかるべきを、一句の優しみなりとありて、生前の夜話なつかし。

「しのぶれど色に出にけりわが戀は
　ものやおもふと人のとふまで

これらの文字あまりにてしるべし。

【補】文　略

命ありて春ありて花のよし野山　　白　雄

生前の夜話なつかしといひし人も亦なつかし。命ありて春ありてのふたつのての文字にて、句の優しみになりしのみか。意も亦深くなりし也。

文字をあまして句の意をます／＼深くする事

きぬたうつて我に聞かせよや坊が妻　　翁

よし野山にての吟なり。

「みよしのゝ山の秋風小夜更けて
　古郷寒く衣うつなり

此歌を深く感じたまひ、我れにきかせよや。よよと、せちに申されし也。やはよにかよふなり。

きり／＼す鼠の穴にて鳴終りぬ　　嵐　雪

鳴きやみぬとありては、夜のさまにして感情し、夜る／＼鳴きつる蟋蟀の、今や鳴終りぬと、晩秋の吟なるにてしるべし。

「くるしくも降り來る雪か三輪が崎
　さのゝわたりに家もあらなくに

これらの吟にてしるべし。

一句の栞り幸ひなる事

朝よさをたれ松島のかたごゝろ　翁

松島行脚を思ひたち給ひしより。風雅の情膺中をそゝのかせしと也。

たれまつしまのつゞき、一句の幸ひなるべし。

我れもらし新酒は人の醒めやすき　嵐雪

越人へ挨拶の句なり。はじめより女郎志の女といふ字になづみ、鷄頭の鷄といふ字によりて案じ入るは詮なきなり。おのづから酒の醒やすきと人のまじはりさめやすきと言葉にこもりたる一句の幸ひなるべし。

歌題俳諧題の事

【補】

歌題とは、歌にも俳諧にも詠ずる題をいふなり。俳諧題とは俳諧にかぎりたる題なり。

神垣やおもひもかけず涅槃像　翁

綿ぬきや松風聞きに行く頃か　野水

角觝とりならぶや秋の唐錦　嵐雪

曉の筑波にたつや寒念佛　其角

これらは俳諧題なり。俳諧題はいかにも詞やすらかに幽玄につくるべし。ひら句に落入りやすし。分別すべし。

かぞへ來ぬ屋敷々々の梅柳　翁

黄鳥や餅に糞する縁の先　　同

ほとゝぎす脊中見てやる梺かな　　曲翠

五月雨や硯箱なる蕃椒　　雪

がつくりとぬけそめし齒や秋の風　　杉風

蘆の家の燈しゆりこむ擣衣哉　　立志

應々といふにたゝくや雪の門　　去來

（いへどたゝくやとして知らる。校訂者誌す）

いくたりか時雨かけぬく瀬田の橋　　丈草

是等みな歌題なり、俳力つよきもしかるべし。

かついふ。言葉をもて俳諧とせず、意をもて俳諧とする故、歌題俳諧題と別にせしにはあらねど、俳諧題に俳力をつよくいふときは、ひら句にをちいりやすし。こゝろえあるべし。

俤の事

蝸牛角ふりわけよ須磨明石　　翁

【補】

此あたりはひわたるといへるもこゝのことにやと前書あり。蝸牛の角の上に蠻といふ國、觸といふ國ありて、互に爭ひをなす事、莊子に見えたり。此偶言によりしものならむ。

いかのぼりきれて野守の鏡哉　　工廸

【補】

雄略天皇の御鷹のそりて見えざるを、たづねさせ給ふに、野守が水にうつりしと、さだかに申せし謂なるべし。

卯の花やいづれの御所の加茂詣　其角

【補】うの花のさかりなる頃ほひ、やどなき人のゆきかふを見て、清女のほとゝぎす聞きに、加茂詣でのかへるさなる卯の花車を思ひ合せしなるべし。

軍書もの語すべて古代の事を思ひあはするなり。かついふ、人の名など句中にむすぶとも、正に對するやうにはせぬ事なり。

義仲の寢覺の山か秋悲し　翁

これひうち山にての吟なり。

【補】祖翁に景清も花見の座には七兵衛といふ句あり。是は延寶天和の頃の流行にて、正風に用ひず、正風は貞享より元祿に至る、貞享、元祿の吟にはかつて流行めきたる句はなし。却つて延寶天和の吟には、正風の句も亦まゝ多くあり。

【補】火をも水にいひなす事

清輔が奥儀抄に、俳諧は火をも水にいひなすといへるによりて、火を水とばかり心えちがひのものもあらん。源氏物語に、松の雪のみあたゝかげに、降りつめる山ざとのこゝちして、ものあはれなり云々。此雪のあたゝかげにと言ふこれらなるべし。

蛇喰ふときけばおそろし雉子の聲　翁

かなしがる秋をめでたう菊の花　　支考

是等は、火を水にいひなしたるおもむきなるべし。

「咲きかへてさかり久しき朝がほを
　あだなる花とたれがいひけん

これらも同じ趣の歌なり。

白雄曰く。火を水にいひなすとは發句は一情をのべ、聯句に能く萬句をわが物にして。妙なる處へいたるをいふ。

漢語をつかふ事

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙り　　翁

小夜の中山の吟なり。

杜鵑啼くや湖水のさゝ濁り　　丈草

好みてせよといふにはあらねど、殘夢湖水の類ひ皆漢語也。ゆゑに正風には落花、蝸牛、深夜などゝもつかふなり。

元日、灌佛、名月、蠟八、寒食、これらの題いづれも漢語なり。

【補】蝶　菊

これらは古へより和訓あれども、和歌者流もてふきくと。漢語にて用ふる也。俳諧もとよりもちふべきなり。

名月や湖水にうかぶ七小町　　翁

順禮にうち交り行く歸雁哉　　嵐雪

一句のうちに、ふたつさへよと咎むる人あらば答ふべし。

和歌の言葉をつかふ事

紙ぎぬのぬるともをらん雨の花　　翁

袖につまに露わけ衣月いくつ　　素　堂

先にいふごとく、言葉をもて俳諧とせず、意をもて俳諧とす。ゆゑに露わけ衣とも、綿入とも、狭莚とも、あら菰とも其意にまかせてつかふべし。かついふ、

ものな思ひそ　人こそうけれ　などて

かく和歌のてには、俳諧のてにはともふたつはなし、これ日の本のてにおはなり。よく分別してかの俗にくだるべからず。

【補】

もとよりもほの〴〵とあかし柿紅葉　　貞　徳

これらは和歌の言葉をつかひても、古への流行にて正風の意にかなはず。

胝や世をあし曳の山かせぎ　　春　鴻

かくいふときは、正風の趣きなり。

古事、古語、古歌、古詩につかはれざる句法

知足軒新居の賀

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　　翁

淮南子説林に云く。

大厦成而燕雀相賀

さびしさや花のあたりの翌ならう　　同

撰集抄に云く。中務元輔扇の歌二首たまふと
いふところに、
このふたつの扇の歌、勝に定まりたれば、其
外のゆかしかりし扇の歌どもは、花のあたり
の深山木のこゝちして、心とゞむる人もなか
りけり云々。

あか／＼と日はつれなくも秋の風　　翁

明詩選
「秋風吹將レ暮　古道行人稀
發レ此微陽色　射ニ我霜中衣一

石ぶしや裏門あけて夕すゞみ　　牡年

源氏常夏の巻に、
「ちかき川のいしぶしやうのものを、おまへに
てうじまゐらす云々。
いしぶしは鮴の魚なり。

春たつや今朝の雀の額つき　　一髮

清女枕草紙に。
「鳥蟲の額つきいとうつくしくて、飛びありく
いとよし。

青海や羽白黑鴨赤がしら　　忠知

土佐日記
「くろさきの松原をへて。ゆくところの名は黑
く、松のいろは青く、いその波は雪のごとく
に、貝のいろはすはうに似て、五色にいまひ
といろぞたらぬ云々。

しら雲に鳥の遠さよ数は鴈　其角

古今集「しら雲にはねうちかはし飛ぶ雁の
かずさへ見ゆる秋の夜の月

ありあけや晦日にちかき餅の音　翁

兼好法師の歌に

「ありとだに人にしられぬ身の程や
晦日にちかき有明の月

かくのごとく、いさゝかも其古詩古歌古語古事等につかはるゝ事あるべからず。その古詩古歌等をつかふ事としるべし。是俳諧のちからなるべし。

名所をつかふ句法の事

さみだれにかくれぬものや瀬田の橋　翁

下京や雪つむうへの夜の雨　凡兆

木母寺に歌の會ありけふの月　其角

かくのごとく、名所にいさゝかもつかはるゝことなかれ。名所をつかふ事としるべし。たとへば、花の句を案ずるに、吉野、初瀬をかり用ひ、月の句を案ずるに、姨捨、石山をかり用ふるは詮なき案じかた也。五月雨にかくれぬ橋を瀬田にさだめ、雪のうへに夜の雨を下京にさだめ、江戸の、歌よむべき所を木母寺にさだめたる、是例の俳諧の力なるべし。

名所をおもひあはする事

口きりに堺の庭ぞなつかしき　翁

喰つみや木曾の匂ひの檜もの　岱水

つもる雪越の友人朝寢せむ　素牛

これらは思ひあはせたる句なり。其所に至らずして、名所の句案ずるには必ず思ひあはすべし、祖翁及び古哲の句々を考ふるに、武江にありて、花洛の句をいひ出せるといふ事なし。古人曰く。東海道のひとすぢもしらざる人、宇治川の螢、住吉の汐干まさにいひ出したらんは興さめぬべし。よく〳〵分別すべし。

行く春を近江の人とをしみける　翁

【補】猿蓑集に云く。望湖水惜春と端書あり。或集に送別と端書あり。一時の誤りのみにあらず、後世の人を惑はす盲衆盲を引くの罪輕からず。たゞしらざるをしらざるとせば、かくはわれにもいはれまじ。

五月雨に鳰の浮巣を見に行かむ　翁

三井寺の門たゝかばやけふの月　同

草庵を人々にとはれて。

あられせば網代の氷魚を煑て出さん　同

四時の句々、幻住庵のむかしをおもふべし。

名所に望みての句の事

菊の香や奈良には古き佛達　翁

朝ざくらよし野深しや夕ざくら　去來

むさし野やいく處にも見る時雨　舟泉

似合しき罌子のひとへや須磨の里　丈草

まさに其姿を得べし、吉野にも泊瀬にもまぎるゝ案じかたは、詮なきことなり。

【補】祖翁曰く。名所にのぞみて句をいひ出さんには、其日其夜のそのこゝろにまかすべし。

又

高野山にて。

父母のしきりに戀し雉子の聲　翁

角田川にて。

いざのぼれ嵯峨の鮎喰ひに都鳥　貞室

鎌倉山にて。

眼に青葉山ほとゝぎす初松魚　素堂

當麻寺の曼陀羅ををがみて。

更衣みづから織らぬ罪深し　園女

八島にて。

海人が家に聖よびこむ彌生哉　千閣

伏見の夜船。

ぼんのくぼに雁落ちかゝる霜夜哉　路通

黒塚にて。

つかの間や鬼こもるともひと涼み　雉舟

瀬田にて。

我駒の沓あらためん橋の雪　湖春

是等は皆其所に至りて、其名をあらはさで案じたる也。其姿情はもとより、景物を一句にむすびて案ずるも一法なり。蓋し他の名所にまぎれざるやうに心得べし。

名所にのぞみて古歌、或ひは古きを思ひあはする事

躶にはまだきさらぎの嵐かな　翁

増賀聖の大悟をおもひあはされし句なり。はし書きにも「西行の泪をしたひ、増賀の信を感ずとあり。

猶見たし花に明行く神の顔　翁

「岩はしの夜のちぎりもたえぬべし
あくるわびしきかつらぎの神

かつらぎの神は夜のみ出で、晝はかくれ給ふよし。

白川の關越ゆるとて。

卯の花をかざしに關の晴着哉　曾良

古人冠を正すとあるを思ひあはせしなるべし。

五條の橋のうへにて。

橋すゞみ千人切の噺しせむ　桂士

和歌の浦にて。

たつ鶴を相圖に戻す汐干狩　　烏醉

「和歌の浦に汐みちくればかたをなみ蘆邊をさして田鶴啼きわたる

名所にのぞみて雜の句の事

かちならば杖突坂を落馬哉　　翁

「くたびれてかちより通る旅人はみな杖突の里とこそ見れ　光廣卿紀行

是名所の雜の歌なり。

歌書よりも軍書に悲しよし野山　　支考

ひそかにいふ。名所の雜の句いひ出さんには

春は句中に春をこむべし。秋は句中にさびしみ自然と秋なるやうにすべし。尤もこのみてする事にはあらず。古人もいとまれなり。

【補】

はし書ありて句の意を深くする事

さくらをばなど寢所にせぬぞ、花に寢ぬ春の鳥のこゝろよ。

花に寢ぬ是もたぐひか鼠の巣　　翁

富貴なる酒屋に遊びて、文君が爪音も醉のまぎれに思ひ出でらるゝに。

酒部屋に琴の音せよ窓の花　　惟然

僧にわかるゝとて。

ちるときの心安さよけしの花　　八

去來曰く。罌粟の一體の句としていひおほせたり。餞別となして猶見所あり。按ずるに、はし書ありてたしかなる比の體なるべし。比は物をとりて、それによれる詞によせていふと、長頭丸も申されし也。

其罪をにくんで、其人を惡まず。

蚊に酒をすはさん夜半か幮の月　　白雄

これらはわづかなるはし書にて、意をますの趣きをしるべし。

兩國の橋にて郭公をきゝ侍りて。

兩國の橋にて聞くやほとゝぎす

かくはし書も其句も同じ事を述ぶるせんなき事也。さりやとて、無用の文もまた書くべからず。證句の趣きを味はひしるべし。

【補】

名所にのぞみて詞書の事

崑崙は遠く聞きて、蓬萊方丈は仙の地也。まのあたり士峰地を拔きて、蒼天をさゝへ、日月のために雲門をひらくかと、むかふ處皆表にして、美景千變す。詩人も句をつくさず、方士文人も言をたち、畵工も筆を捨てゝ走る、若し藐姑射の山の神人有りて、其繪をよくせんか。

雲霧の暫時十景を盡しけり　　翁

右山中の温泉にての吟なり。

白雲峰に重なり、煙雨谷を埋みて、山

賤の家處々にちひさく、西に木を伐る音東にひゞき、院々の鐘の聲こゝろの底にこたふ。寒雲繡石といふ句に思ひよせて。

高取の城の寒さよよし野山　　其角

右よし野山の吟なり。

救世大士ををがみをはりて、勾欄に脊なかをかしつゝ、寛かなる東西をのぞむに、山おろしの風は午時の梵聲にひびき、樹色雨をふくみて、僧房の書帙ををかす。錫のたちし處、鶴のとゞまりしところも遠きにあらず、かゝる不染の地なることを。

新樹深く大觀音の嵐かな　　白雄

右初瀬の吟なり。

祖翁の奥の細道、許六が風俗文選等を熟覧すべし。しかしてのち實に居て虚にあそぶ趣きを書くべし。文飾するがよきとて、虚より虚に走るべからず。又俗中の俗言、鄙言の交はりたらんは、龍頭蛇尾とて見苦しきもの也。今の文を見るに、多くは剿襲にして、たゞよく綴合せたるまで也。證に出せし文章をよく味はふべし。

神祇

たふとさの皆おしあひぬ御遷宮　　翁

（尊さにとして聞ゆ。校訂者誌す）

梅がゝや湯だての跡の炭のきれ　　丈草

青海苔も和光の塵のひとつ哉　　許六

他流にいへる五音連聲等の事、正風に仔細なし。たゞつゞきがらを思ふべし。たとはゞ、

露清しぬれて

梅が香や今朝は

などの類ひ、神祇奉納のみならず、歳旦暮祝の吟、皆此こゝろ得なり。奉納にあらざる神祇は其用なし。

釋教

觀音の甍見やりつ花の雲　　翁

夜あらしも花のうへ來る御山哉　　槃貞

法然上人五百年忌。

いく代春なほ一枚の法のふみ　　露沾

奉納になすときは、神祇と同じくつゞきがらを思ふべし。常々の釋教の句に其用なし。

戀

紅梅や見ぬ戀つくる玉簾　　翁

秋ひとり琴柱はづれて寢ぬ夜哉　　荷兮

蟲ぼしの目にたつ枕ふたつ哉　　文洞

身のほど／＼を案ずべし。歌には題詠ありて、僧として戀の自の歌もよめど、俳諧に用なし。但したれにかはりて、などゝはし書あらばしかるべし。

旅

ひとつ脱いでうしろに負ひぬ更衣　　翁

草まくら犇うつ人時間はむ　山川

草鞋に椎はさまりておくれけり　丈草

旅中の句は、おのづからさびしきをよしとす。古郷を思ふなど旅の本情也。

祝

先づ祝へ梅を心の冬ごもり　翁

駒を拝領せし人へ。

時もよし肥えたる馬に萩すゝき　洒堂

其角が新宅にて。

此家をたてし大工よけふの月　涼菟

祝ひの句、わきて自他親疎をわきまふべし。

贈答

醫師何がしがもとにて。

薬欄にいづれの花を草まくら　翁

嵯峨落柿舍にて二句。

やれ垣やわざと鹿の子の通ひ道　曾良

豆植うる畑も木部屋も名所哉　凡兆

旅のもてなしにあひて。

此うへは子規啼け風呂あがり　助叟

同人を訪ふ。

鳩眠る冬木ながらやはね釣瓶　　言水

茅舎に翁をやどして。

おもしろう松かさもえよ薄月夜　　土芳

もらぬほどけふは時雨よ草の庵　　斜嶺

霜寒き旅寝や蚊屋を着せ申す　　如行

（旅寐にとして聞ゆ。校訂者誌す）

或人に問はれて。

此外に見するものなし炭ふくべ　　木因

冬の日客をもてなす。

君見よや我手いるゝぞ莖の桶　　嵐雪

贈答の句、尤も自他親疎をわきまふべし。

餞別

獺の祭り見て來よ瀬田の奥　　翁

翁の首途をおくる。

箱根山しぐれなき日を願ひけり　　由之

友なる孤屋を送る。

雲霞どこまで行くもおなじ事　　野坡

餞別の句、自他親疎をわきまふべし。

留別

川崎にて人々にわかるゝ。

麥の穗をちからにつかむ別れ哉　　翁

京をくだる日。

思ひきつて都の秋をくだる日ぞ　　素堂

途中にて翁に別れ奉るとて。

行き〳〵てたふれふすとも萩の原　　曾良

留別の句、尤も自他親疎をわきまふべし。

哀傷

門人嵐蘭が身まかりしに

秋風の折れてかなしき桑の杖　　翁

（秋風にとして聞ゆ。校訂者誌す）

其角が母をうしなひしに。

卯の花にはゝなき宿ぞすさまじき　　翁

翁のわかれに。

何事もなみだになりぬ冬の庵　　槐市

ちからなや膝をかゝへて冬ごもり　　野坡

翁の送葬に。

なきがらを笠にかくすや枯尾花　　其角

翁の身まかりたまひしと告げ來しまゝに。

聞忌にこもる霜夜の恨みかな　　北枝

母をうしなひて。

身にとりて衣がへうき卯月哉　　其角

妻にわかれて。

水無月の桐のひと葉と思ふべし　　野水

子におくれし頃。

似た顔のあらば出て見んひと踊　　落梧

母におくれし子をあはれむ。

をさな子やひとり飯くふ秋の暮　　尙白

猶子の送葬に。

かゝる夜の月も見にけり野邊送り　　去來

妻をうしなひし人へ。

寢られずよかたへひえ行く北おろし　　去來

友なる呂丸が送葬に。

野おくりや膝がくつきて朧月　　史邦

友なる來山が母をうしなひしに。

思ひやるたゞの秋さへくらされね　　鬼貫

追悼。

うたてやな櫻を見れば咲きにけり　　同

翁の一周忌に自ら像を畫きて。

鬢の霜無言の時のすがたかな　　許六

母の年回に。

花水にうつしかへたる茂りかな　　其角

友なる工齋が三回忌にみたり墓へ参りて。

三人の聲にこたへよあきの風　　同

翁の過ぎたまひしに、生前相見せざるを恨みつも墓へ参りて。

しらぬ人のしらでいますか雪の下　　元翠

哀傷の句、尤も自他親疎をわきまふべし。祝、贈答、餞別、留別、哀傷すべて人に對しいふ句に、なぞらへ句いひつかはすに仔細あり。たとはゞ、

猶いく代長濱あゆめ春の鶴

かくいふときは正に其人を鶴にせし也。

鶴とゝもに長濱あゆめ春の風

かくいふときは、鶴に比して其人と鶴と別なり。これ蕉門の敎へなり。一理萬通すべし。

述懷

死にもせぬ旅寢の果や秋の風　　翁

（果よとして聞ゆ。校訂者誌す）

あそぶ事三十までぞ夜半の秋　　八橋

葉がくれて見ても朝顔の浮世哉　　野坡

懷舊

高館の古戰場にて。

夏草や兵どもがゆめの跡　　翁

翁の住給ひし庵のあとにて。

すみれ草小鍋洗ひし跡やこれ　曲翠

母を夢に見て。

蓮の實をふくみしは夢の乳房哉　風洗

畫讃

髑骨の畫に。

稲づまや顔のところが薄の穂　翁

源氏の畫に。

傘持の月におくるゝ姿かな　其角

遊女の繪に。

どのかたを思うてゐるぞ閨の月　鬼貫

布袋の畵に。

大虚涼し禪師の指のさし所　其角

人麿の繪に。

月花の鏡なりけり御としばへ　才麿

讃は他の句につくるべし。

我がものと思へば輕し笠の雪

（我が雪と思へば輕し笠の上として聞ゆ。校訂者誌す）

其角が何也。何がし集に、東坡の讃と出せり。自らの句にしていかで讃なるべき、笠重呉天雪といへる語を反轉（はんてん）の句なり。其角のこゝろかつて讃にあらず。

又かゝしの讃に、

あのやうに裝の裾ひくかゞし哉

正に筆をとるものから、あのやうにといふべきやうなし。此やうにとあらば讃なるべしと、是蕉門のをしへなり。詩は有聲の畫、畫は無聲の詩なりとは、古人の言葉なり。故に讃は其畫の餘情をいふことなり。

青海や太皷ゆるまる春の聲　素堂

ちる花や鳥もおどろく琴の塵　翁

けしからぬ桐のひと葉や簫の聲　其角

琴、太皷、簫の三幅對の讃なり。是等におもひよるべし。

【補】

或人枯木に烏のとまりし畫に、秋の暮の發句を乞ひければ、即興

鳶ならば飛ばせもせんに秋の暮　白雄

發句の體をわかつ

けしきことなる句。

花の雲鐘は上野か淺草か　翁

うごくとも見えで畫うつ箏哉　去來

しら〳〵と霞はなるゝ出城かな　沾蓬

はなやかなる句。

汐越や鶴脛ぬれて海涼し　翁

名月や疊のうへに松のかげ　其角

春雨の晴れて鴉のひかり哉　桃賀

ふとくたくましき句。

杜宇大竹はらをもる月夜　翁

（大竹藪として聞ゆ。校訂者誌す）

湖の水まさりけり五月雨　去來

花ざかり大ふく中になりけらし　杉風

ほそくからびたる句。

さればこそあれたきまゝの霜の庵　翁

ひと時雨又くづをるゝ日影かな　露沾

つれのある處へ掃くぞきりぎりす　丈草

艶にやさしき句。

ぬれて行く人もをかしや雨の萩　翁

蜀魄おほよそ鳥と夜つれよ　菊齡

ひとつ葉やひと葉〳〵にけさの霜　支考

何の木の花ともしらず匂ひかな　翁

幽玄なる句。

とかくして卯の花つぼむ彌生哉　山川

名月や所は寺の茶の木原　昌

をかしき句。

初眞桑たてにやわらん輪にやせん　翁

なに事ぞ花見る人の長刀　去來

黄鶴や二升五合の藪年貢　曲翠

色だての句。

卯の花やくらき柳のおよびごし　翁

身ぶるひに雪間の雉子の綠かな　轍士

しら浪やゆらつく橋の下もみぢ　塵生

感情なる句。

酒のめばいとゞ寢られね夜の雪　翁

ひと葉づゝ柿の葉みなになりにけり　一髮

つく〴〵と繪を見る秋の扇哉　小春

觀想。

葛の葉の表見せけり今朝の霜　翁

花さくもむつかしげなる老樹哉　木節

何となく地に這ふ蔦の哀れ也　越人

生類に對する觀想。

面白うてやがて悲しき鵜舟哉　翁

矢の下に母の乳をのむ鹿の子哉　立志

爐をめぐる命つれなし椙の蟻　似考

手をはなれたる句。

春の夜は櫻に明けてしまひけり　翁

蚊ばしらに夢の浮橋かゝる也　其角

松とりて常の朝日となりに皃　不角

又

灌佛の日に産れあふ鹿の子哉　翁

蟲ぼしや猫の爪とぐ因果經　西吟

盗人の錢おく雪のやどり哉　來山

又

たけのこやをさなき時の繪のすさび　翁

はゝきゞや女草紙の杉の色　鷺水

かさゝぎの橋や繪入の百人一首　許六

又

艫の聲浪をうつて腸氷る夜や泪　翁

たち葉浮葉此蓮風情過ぎたらん　素堂

（浮葉卷葉として聞ゆ。校訂者誌す）

廬山の夜上野は花の晝ならむ　楊水

一作ある句。

床に寢て軒にいるやきりぐ〳〵す　翁

（床に來てとして聞ゆ。校訂者誌す）

馬しかる聲も枯野のあらし哉　曲翠

もえきれて紙燭をなぐる芒哉　荷兮

これらの句々、其體悉くわかつといへども、皆もとめざる案じかたなり。古人曰く。一體に案ずるはせまし。もの〳〵にのぞみて、心の發する所に姿情を思ふべし。すべて卷中の句々こゝろをとめて、かの萬物によく應ずることをしるべし。

回文

まつの木の雪やはやきゆ軒のつま　卜宅

なかしつゝ波白しみなつゝしかな　冰花

物の名

鵜　鶴　鸞　鷄　鶸　鴛鴦　鳶　鳴　鴈

うつるらん時日はをしとひしきかり　菊峰

加茂　鳥羽　糺　八瀨　水野　淀

鴫とばでたゞ巣に瘦せし水のよど　立吟

回文物の名、好みてするにはあらねど、かくのごとく句案あれば、せざる事にはあらず、すべて祖翁古哲のせしことを用ふるが、わが俳諧なり。古きをあらたむる事なかれ。

俳諧寂栞卷之上終

俳諧寂栞卷之中

白雄坊選著　拙堂增補

脇の事

脇は字眼をさだめて、のち趣向をたつべし。字眼を礎におく、古式なれど、句意とゝなふときは、上下の論なし。

續さるみの

八九間空に雨降るやなぎかな　翁

（空でとして聞ゆ。校訂者誌す。）

春の鳥のはたけほる聲　沾圃

是其場の字眼をさだめたる也。

深川集

刈株や水田のうへの秋の雲　洒堂

暮れかゝる日に代かゆる鴈　嵐竹

是發句に場の出たるゆゑに、時分を字眼にさだめたるなり。

炭だはら

梅が香にのつと日の出る山路哉　翁

ところ〴〵に雉子の啼立つ　野坡

是發句に、場も時分も出たるゆゑに、たゞ時節をあはせたる脇也。

さるみの

市中はものゝ匂ひや夏の月　凡兆

あつし〳〵と門々の聲　翁

大石田歌仙

五月雨をあつめて早し最上川　翁

岸にほたるをつなぐ舟杭　一榮

是打添の脇なり。打添の脇とは、家といふ句に、軒、垣、窓、柱などつくるをいふ。たとへば海といふ句に舟、岸などを付くるはよし、舟といふ句に海川とは前句のうはさ也。證句の趣きをしるべし。古式に云ふ。吉野山に花姨捨山に月と附くるはよし。花によし野、月に姨捨山とはあしゝ、尤も此趣き脇のみにかぎらず、ひら句にてもおなじこゝろえ也。

いつをむかし

ひとつ松此ところより浦の雪　加生

鴨こそ峯を入りがたの月　其角

是てり合せの脇也。てり合せとは、浦に峰、海に山などおし並べていふ也。よくてり合はざれば、離れ〴〵になる脇也。分別すべし。

あら野集

ほとゝぎすまたぬ心の折りもあり　荷兮

雨のわか葉にたてる戸の口　野水

是こゝろの附也。またぬ心の折りもありとは、つね〴〵待つといふ句也。ゆゑに雨の戸ぐちにたてると附けしなり。句意にまかせてしるべし。

春の日

蛙のみ聞いてゆゝしき寝ざめ哉　野水

額にあたる春雨のもり　旦藁

是人情の脇也。人情の脇はひら句におちいりやすし。その心得あるべき事なり。すべて脇は趣向のたち過ぐるを惡しとす。惡しゝといふは、ひら句にまぎれ易きゆゑ也。

雲に鳥

馬士の手に火をつかみけり秋の霜　野水

梢の柿の落ち盡す頃　旦藁

是頃留の脇也。頃留はかくのごとく、頃といふ字を礎に置く古式なり。しかあれど、發句の頃をさだむるなれば、上下の論なし。三春三秋の趣きをよくわきまへて附くべし。

ひさご

いろ〳〵の名もまぎらはし春の草　珍碩

うたれて蝶の夢はさめぬる　翁

これ手爾葉留の脇也。脇は礎を文字になして留むる也。さるをかくのごとく手爾葉にて留むるは、脇體そなはりたるうへのこと也。自得の人ならでは好むべからず。

冬の日

霜月や鸛のつく〴〵とならび居て　荷兮

（鸛のつく〴〵として聞ゆ。校訂者誌す）

冬の朝日の哀れなりけり　翁

是も手爾葉留也。おなじ手爾葉ながら、これは又格をはづしたる也。發句の手爾葉留にまかせられしなるべし。自得の人ならではこのむべからず。

深川ばせを庵をたづねて。

あら野

雁がねも靜かに聞けばからびすや　越人

酒しひならふこの頃の月　翁

是贈答の脇也。贈答の脇は違ひ附をゆるす格也。たとへば、客の自の句に亭主の自の句を

附くるゆゑに違ひ附也。客發句、亭主脇、餞別をうくる脇、祝ひ等の脇、みな此格なり。

ばせを小文庫

新麥はわざとすゝめぬ首途哉　山店
また相蚊屋の雲はるか也　翁

是餞別の句をうけられし也。

新庄の歌仙

御尋ねに我宿せまし破れ蚊屋　風流
はじめて薫る風のたきもの　翁

是亭主發句、客脇のさた也。いづれも違ひ附也。これを時宜の法ともいふ也。

笈日記

しるしして見せばや美濃の田植歌　如行
笠あらためん不破のさみだれ　翁

是亭主發句、客脇也。美濃といふに、其國の名所を附けたる例也。打添の心にして、不破といふに美濃と附くるはあしゝとしるべし。

冬の日

炭賣の己が妻こそ黑からめ　重五
人の粧ひを鏡磨ぐ寒　荷兮

いつをむかし

鴫啼くや弓矢を捨てゝ十四年　去來
刄ほそらぬ霜の小刀　嵐雪

深川集

年わすれ卮に桃の花かゝむ　洒堂

膝に置きたる琵琶のこがらし　素堂

これ此體、格をはづしたる也。自得の人ならではこのむべからず。

【補】

雪ちるの卷

生船やさゝら雪ちる魚氷室　藤匂

金涌の郡豊浦の春　千春

これあげ句に似てあげ句にあらず。文字留の脇也。異體なればこゝにあらはす、自得の人ならではこのむべからず。

第三の事

宇陀法師

陽炎に野飼の牛の杭ぬけて　翁

冬の日

野菊までたづぬる蝶の羽折れて　同

同

歯朶の葉を初狩人の矢に負うて　野水

となみ山

來る春の用意するらん木具提げて　嵐雪

ひさご

西風に十寸穂の小貝拾はせて　泥士

これて留なり。

あらの

ひきすてし車は琵琶のかたきにて　野水

（曲齋はかたへと云へり。校訂者誌す）

是にて留也。發句哉留のときは、第三にて留を嫌ふ。哉はにてに徹するひゞきある故也。

さるみの

新疊しきならべたる月かげに　　野水

小文庫

馬時の過ぎてさびしき牧の野に　　翁

これに留なり。に留の第三は、下よりよみかへさるゝやうにつくるべし。たとへば、

月かげに敷きならべたる新疊
牧の野に馬時の過ぎてさびしき

かくつくるべし。

萬歳の長きはかまを春毎に

などゝいふ句は、とにもかくにもよみかへされぬ也。句々分別すべし。

あら野

藤ばかまたが窮屈にめでつらん　　翁

すか川歌仙

水せきて晝寢の石や直すらむ　　曾良

是らん留也。らん留は上にうたがひのことばを置くべし。さなくては留らず。疑ひの詞は

や、いつ、いづれ、いかに、いく、たれ、たぞ、かは、なぞ、何。

これらの詞を上に置くべし。

あら野

夕霞染物とりて歸るらん　　冬文

此句上にうたがひの詞なし。染物とりてやとやの文字を句中にこめたる也。

「久かたのひかりのどけき春の日に
しづこゝろなく花のちるらん

しづ心なく、いかで花のちるらんと、いかで
の詞をこめたる歌なりと、歌の傳にも見えた
り。しかあれど、上にうたがひの詞をつかふ
に仔細なし。

さるみの

雲雀啼く小田に土もつ頃なれや　　翁

　これや留なり。

深川集

山がらの笠に縫ふべき草もなし　　嵐蘭

是もなし留也。なれや留、もなし留、別に仔
細なし。たゞ句のたけ、句のをさまりを見る
べし。發句十分の位、脇五分のくらゐ、第三
七分の位也と、其心得にていづれの留にもせ
よ、たけたかく第三體につくるべし。

冬の日

花蕀馬骨の霜に咲きかへり　　杜國

是五字假名の第三也。五字假名の第三は、い
づれ上下の五文字に、てにはなきものを居う
る也。

　假御殿、門柱。

これらのたぐひは、假の御殿、門の柱と手爾
葉入る也。てにはの入るはあしゝ。

　時鳥、机、簟。

などのたぐひ、手爾葉入らざる文字を置くべ
し。

ひさご

觜太のわやくに啼きし春の暮　　珍碩

　はじめよりかくてにはの入るはよし。いづれ
　も句たけ一句のをさまりを思ふべし。

聯句他季うつりの事

さるみの

かきなぐる墨繪をかしく秋くれて　史邦

はき心よきめりやすの足袋　凡兆

同

道心のおこりは花のつぼむとき　去來

能登の七尾の冬は住みうき　凡兆

又

深川集

洗足に客と名のつく寒さかな　酒堂

綿舘ならぶ冬むきの里　許六

鳥鷄階子の鎰をつたひ來て　翁

春は其のまゝ七種もたつ　嵐蘭

月の色氷ものこる小鮒賣　六

築地のどかに典藥の駕　堂

相國寺ぼたんの花のさかりにて

椀の蓋とる蕗に竹の子　蘭

かく八句の内、雜の句なきにてしるべし。尤も好むことにはあらず。一卷のもやうにして百員に三四、歌仙にひと處ふたところしかるべし。　翁

さるみの

何を見るにも露ばかり也　野水

花とちる身は西念がころも着て　　翁

　　又

ひさご

　雁ゆく方や白子若松　　翁

千部よむ花のさかりの一身田　　珍碩

かくのごとく、花の定座の前句、秋季かゝりたる時は、前句も其心得にして、直に春季の花の附けらるゝやうに、當季をむすぶべし。たとへば扇は夏季なれど、四時に持つなるゆゑに、其句體をうけていづれの季にも附けらるゝなり。蝶は春季なれども、夏秋は勿論、冬季にも附けらるゝなり。これらの心を得てしるべし。

　藪入、彼岸、峰入。

などのたぐひ、春秋二季にわたるもの、猶もとよりのことなり。

【補】

　　又

あつた三歌仙

夕立のさきに聞ゆる雷の聲　　楚竹

　馬もありかぬ山際の霧　　東睡

小男鹿のそれ矢を袖に射つけさせ　　翁

　飛びあがる程あはれなる月　　越人

こがらしにかちけて花のふたつみつ　　荷兮

　　又

新庄歌仙

雪降らぬ松はおのれと肥りけり　　如柳
萩踏みしける猪のつま　　翁

他季うつりは、冬に秋、夏に春とも附けらるるなり。其二句の間おだやかなればくるしからじ。

二句一意の事

冬の日
秋蟬のからに聲きくしづかさは　　野水
藤の實つたふ雫ぽつちり　　重五

春の日　　又
むさぼりの帛着てありく世の中に　　冬文
むしろ一枚も廣き我庵　　越人

いつを昔　　又
顏直し賑ふかたのめでたさに　　去來
たけをくらべてむすぶ水引　　嵐雪

須加川歌仙　　又
さびしさや湯守も寒くなるまゝに　　翁
殺生石の下はしる水　　等窮

二句一意は、前句にいひのこしてあるものから、趣向を遠く句作をちかく附くべし。さなくては附かぬものなり。

【補】

又

ひとつ星

牛牽いてぼつ〳〵岨を越えてしに　調和

山鳩われをよぶや四五町　同

又

ひとつ星

それ聞かむ毛衣人のうつべくも　幽山

孝心しかも富める秋の戸　執筆

これらの句も、すべて一巻のもやうとしるべし。

俳諧の聯句は、一巻のやすらかになるやうにすべし。一句にて功を得んとする時は、一巻みにくきもの也。欲をさりつとめて一巻をよくすべし。

おもかげの事

あら野

うらみたる泪まぶたにとゞまりて　越人

靜御前に舞をすゝむる　其角

又

冬の日

翌は敵へ首おくりせむ　重五

小三太に盃とらせひとつ諷ひ　翁

又

さるみの

發心のはじめに越ゆる鈴鹿山　翁

内藏頭かとよぶ聲はたれ　乙州

又

冬の日

豆腐つくりて母の喪に入る　野水

元政が草の袂もやれぬべし　翁

又

春の日

咲分けの菊にはをしき白露ぞ　越人

秋の和名にかゝる順　旦藁

おもかげの句、月日さだまりたるあり、前句の附句ともに其心得あるべし。例へば、秋季に曾我の夜討、冬季に長篠の陣など附けてはつかぬ也。尤も雜の句に附くるは仔細なし。附句も生田の合戰に、秋季など附けては附かざる也。

【補】

又

深川集

頰あてをはづして月をうちながめ　曲翠

悪七兵衞景淸が秋　洒堂

名所に名所を附くる事

深川集

深草は女ばかりの下屋しき　洒堂

伏見の戀を入相にきく　曲翠

これ深草に伏見と、おし並べて附けたる也。

宇陀法師

此たびは母の願ひの身延山　許六

底倉の温泉を下に見おろす　李由

これは旅中のさまにして附けたる也。行くべきかたの道すがらの名所、地名何にても附けらるゝなり。

深川集

初花に伊勢のあはびのとれ初めて　翁

くぬぎ若やぐ宮川の上　嵐蘭

是伊勢といふに其國の名所を附けたる也。

【補】

寶わか菜

いざり不便や姨捨の月　翁

散る花に垣根を穿つ鼠宿　嵐雪

これは同國の名所に同國の地名を附けたるなり。此外にも思ひやりたる句はもろこしのこともいはるゝ也。すべて名所に名所を附くる事、此旨を味はひて附くべし。

したしき附の事

句解百員

敵よせ來たるむら松の聲　千里

晨明に梨子うち烏帽子着たりけり　翁

又

深川集

山伏を切つてかけたる關の前　翁

鎧もたねばならぬ世の中　洒堂

又

春の日

須磨寺に汗の帷子脱ぎかへむ　重五

おの〳〵泪笛をいたゞく　荷兮

又

さるみの

せはしげに櫛でかしらを掻きちらし　凡兆

おもひ切つたる死狂ひ見よ　史邦

又

あら野

何事も長安はこれ名利の地　翁

醫の多きこそ目ぐるをしけれ　越人

これも一巻のもやうなりとしるべし。

大勢の中の人をさだむる句法

ひさご

入込みに諏訪の涌湯の夕間暮　曲翠

中にもせいの高き山伏　翁

又

句兄弟

きほひ來る御輿あらひの人に人　其角

露ふく風や公家の編笠　同

これらのおもむきにてしるべし。

こぼれ月の事

はるの日

松風にたふれぬほどの酒の醉　羽笠

賣り殘したる蟲はなつ月　執筆

又

炭たはら

黍の穗は殘らず風に吹きたふれ　野坡

馬場の喧嘩の跡にすむ月　嵐雪

是こぼれ月の古式也。こぼれ月は、折端に月をする事也。月といふ字をかくのごとく礎におく也。雲はるゝ月、小夜ふくる月などゝ、詞の月に緣のつゞきたるはあしゝ。蟲はなつ月、橋をゆく月、などゝ詞に月の字の緣をたちて、こゝろに緣をつゞけて、月といふ字を礎におくことなり。

又

さるみの

此夏も要をくゝる破れあふぎ　園風

醬油ねさせてしばし月見る　猿雖

古集にかくのごとくのこぼれ月もあれど、古式を守るにしくはなし。

【補】

他の季の花、短句の花、櫻の事

句解百員

稻づまを木の間の花のこゝろばせ　桑白

秋季にて花を附くるに、月に花を結び、附くるか、又は一卷の趣きによりて、他の季の花を附くる也。他の季の花とは、夏秋冬の内にて、正花なるべきを附くる證句のごとし。又雜の花といふもあるとはきけど、元祿の正

風に見あたらず。ゆゑにこゝにもらす。古哲のなさゞることを好みてなすべからず。

浪花の枝折

花火たつるも水の仇ごと　　一禮

是は短句の秋の花也。心得べし。

熱田三歌

こがらしにかぢけて花のふたつみつ　　荷兮

是は冬の花也。心得べし。前にいふごとくみだりに附くべからず。

纎尾集

花に符をきる坊の酒藏　　翁

是は短句の花也。花の座よりは前へ行きて附くる也。花にはこぼれ花といふはなき事也。

ひさご

花は赤いよ月は朧夜　　路通

（赤いよに對する朧よとして聞ゆ。校訂者誌す。）

是は短句にて月花をむすびたる也。

炭たはら

此島の餓鬼も手をする月と花　　翁

これは長句にて月花を結びたる也。

深川集

踏みまよふ落花の雪の朝月夜　　岱水

冬の日

旅衣笛に落花をうち拂ひ　　羽笠

是は花といはず、落花と漢語を用ひしなり。

是等も心得べきことなり。

さるみの

糸櫻腹一ばいにさきにけり　　去來

句解百員

三度ふむよし野の櫻吉野山　　仙化

此二句は、花といふべき場をさくらと附けたる也。尤も花はさくら、櫻は花といふなれども、先づはなき格なりとしるべし。自得の人はかくべつ、花と附くるかたしかるべし。他の季の花、短句の花さへ古人も多くせざる也。心得べき事なり。

【補】

あげ句の事

あら野

花の頃談議参りもうら山し　　越人

田にしを喰うて腥き口　　翁

又

熱田三歌仙

常盤山常盤之助が花咲いて　　桐葉

霞にのこる連歌師の松　　叩端

是文字留の揚句なり。あげ句はすべて一巻のをはりなれば、容易に附くる事なかれ、發句の意と脇の意と齟齬せざるやうにすべし。さりやとて同じことを附くべからず。祝賀の巻ならば、祝賀の意のこもるやうにつくるべし。追悼の俳諧ならば、追善の意を述ぶべし。揚句にも揚句の體あり。よく／＼考へ見るべし。當時の俳諧、句揚を疎畧につくるは誤り也。巻軸なればおろそかにつくるべからず。

春の日

見つけたり廿九日の月寒き　荷兮

君のつとめに氷ふみわけ　羽笠

これは手爾葉留のあげ句なり。

山中の巻

鐘撞いてあそばむ花もちりかゝり　翁

醉狂人と彌生くれ行く　執筆

これは北枝、曾良、祖翁と山中の溫泉(をんせん)に遊びしときの吟のあげ句也。心得べし。

浪花の枝折

舌うちもまだ霞也ほとゝぎす　野童

鬼貫亭を馬樂堂といふ　瓢界

これは鬼貫新亭(おにつらしんてい)の賀(が)のあげ句也。

ひとつ星

廟まつる幣に胡蝶のやどりして　調和

調幽が母の齡ひ遲き日　調和

これは調幽が母の年賀(ねんが)の巻のあげ句なり。

翁草集

鹽ものに咽かわかする花ざかり　乙州

奈良はやつぱり八重櫻かな　沾圃

これは發句(ほつく)哉留にてなき時は、かくあげ句に哉留をも附けらるゝ也。

連歌には櫻に花をも附くる、俳諧にては花にさくらを附くるはよし、さくらに花を附くるはあしゝとてゆるさず、花に櫻を附くるも心

得なくては附けがたし。貞徳曰く、前句の正花めかざるには、花にさくらを附くる也とあり。いはんや櫻に花附くまじきこと也。

戀句の事

冬の日
床ふけてかたればいとこなる男　　荷兮
縁さまだけの恨み殘りし　　翁

又

さるみの
大膽におもひくづれぬ戀をして　　半殘
身は濡紙のとり處なき　　土芳

又

炭たはら
うは置の干菜きざむもうはの空　　野坡
馬に出ぬ日は内で戀する　　翁

又

あら野
後朝（きぬぎぬ）やあまりか細（ほそ）くあてやかに　　翁
風ひきたまふ聲のうつくし　　越人

又

はるの日
顔ふところに梓聞き居る　　雨桐
黒髪をたばぬる程に切殘し　　荷兮

これらの趣きにてしるべし。
一句（いっく）の情二句（にゃう）の間の情をもて戀とする、詞のみ戀なりとも、其意こもらざるは一句にて捨

つる也。ゆゑに女、娘など出ても句體により
て戀句とせず。是戀の句のさばきなり。

【補】

句がらの事

何者のひりちらしたる道の屎

是は花つみ集の句也。古人の集といへども、一覽のときよく〳〵分別して見るべし。かならず誰れなりとも古人の名に恐るべからず、かゝる拙き句は誰にてもあしゝと思ふべし。

早乙女の雇はれあるく菅襷
口すはれたる人の眞中

是は東都にて蕉流と唱ふる者の集中にあり。戀の句いひ出でんとて、くちすはれたるとはあまりなる事なり。親子、兄弟、君臣の間にてはなされぬ言葉なり。且つ風流といふこと露ほどもなし。

深川集

掛乞に戀のこゝろをもたせばや　翁

かくいはんには戀の情も風流もあり、また句のがらもおのづからよく、差合もくるべからず。水清く玉潤ふといふべし。戀の句は憐れにも深切にもいふべし。尤も戀の句にも限らず、一句のうへの風流、二句の間の風情をもつぱらとすべし。

行水の時面目をうしなひて
我等が瘤は殿も御存知

これらの句、四十年前美濃、尾張にて流行せし句也といふ。あまりなる二句の間なり。當時美濃尾張に此句の體をいふものひとりもな

きは、曉臺、士朗など出て・元祿のむかしに復せしゆゑ也。實に蕉翁の忠臣なりといふべし。

百姓寺へ伯母の藪入

などいふ句作けやけく聞ゆ、百姓寺、作寺などゝつかふまじきといふにはあらねど、元祿の俳風ならば、

ひと夜かゝる宿は馬かふ寺なれや

此句にてしるべし。

さま〴〵に品かはりたる戀をして
百夜のうちに雪の少將

と其角の附けられしに、人も稱し其身も附得たりなどおもはれけるよし。そのゝち伊賀の上野にて同じ前句、

さま〴〵に品かはりたる戀をして
うき世の果はみな小町也

と附けられたるよし、誠に名人の句作、安らかにいひくだして餘情深しと、其角前非を悔いられたると、白雄夜話にかたりぬ。

聯句二句の間理窟の事

ふもとの町はさてもあれ果
ひと聲も呼ばずに通る松魚賣

是耳をもて情よりつぐ、ゆゑに理窟にして一句たゝず、目をもて町のあれたる姿を見る時はいろ〳〵在るべし。

雨の音篠をつくとは此夜也
亭主にかくす緣の小便

こゝろざしいとあさまし。聯句は前句を請くるものゆゑ、其人に應ぜざる自の句もいふ事

なれど、心あるべき也。

古人曰く。聯句は淺川をわたるがごとしと、故にやすらかにいひくだして、一句々々風情を附くべし。

坊主の連は御油で風ひく

これ一句の理窟なり。

さるみの

堤より田の靑やぎていさぎよき　凡兆
加茂のやしろはよき社なり　翁

同集

火ともしのくるればのぼる峯の寺　去來
ほとゝぎす皆啼仕舞ひけり　翁

（仕舞うたりとして聞ゆ。校訂者誌す。）

これらはわけて龜鑑也。わするべからず。

聯句語路のあつかひ

花つみ

敵の門にふた夜寢にけり　曾良
かき消ゆる夢は野中の地藏堂　露丸
妻戀するか山犬の聲　翁

續みなし栗

釜かりに松の扉をたゝかれて　其角
反古をそろふるひまの僞に　同
顔あまた都の友のなつかしく　蚊足

韻塞

いかやうな戀もしつべき薄みぞれ　岱水

琵琶をかゝへて出づる乗物　翁

晨明に毘沙門堂の小方丈　許六

萩の露

ひとりたゞ身を遊ばせて鳴子引　彫棠

蚊やりぐさほす秋になりけり　横几

あり明もすくなき鯖のきざみもの　翁

其袋

霧の外鐘をへだつる松こみて　露沾

履にはさまる石原の露　沾荷

入る月に薄粧ひたる武者一人　翁

春の日

やゝ寒み一度は骨をほどく世に　荷兮

傾城乳をかくすあり明　呂桂

霧拂ふ鏡に人の影うつり　雨桐

深川集

都をば去年の行脚に思はれて　利合

兒にまたるゝ釋迦堂の暮　洒堂

咲きそめて忍ぶ便りもさるすべり　翁

となみ山

聟と舅の直るあいさつ　支考

御局の里をりしてはなみだぐみ　丈草

塗つた箱よりものゝ出し入れ　翁

句兄弟

此景をようは見たてゝ深山寺　其角

乳人用意の骨をとり出す　我峯

しとやかに其手さはりも綸子にて　嵐雪

いつをむかし

梁かくす關札の數　其角

娘むすめ見わくる戀のいちはやき　嵐雪

(娘娘として聞ゆ。校訂者誌す。)

小原黑木の身をふすべけり　其角

小文庫

佛の木地を包む絲だて　翁

ごろ〱と臼挽出せばほとゝぎす　山店

そゞろに草の生える竹縁　翁

翁草集

鳥啼くなる浦のほしもの　北枝

箍入は隣りではたく月のくれ　牧童

木槿をほめて皆通るなり　北枝

みなし栗

花に泣く美女盞を江に投げて　其角

なびくかとくか柳もどかし　松濤

世は蝶と遁世おもひさだめける　擧白

笈日記

しをく／＼と鬭おさふる眉のきは　杏雨

結縁經のよみ終るまで　杏農

あはれさは無言の頃の時鳥　落梧

ちとせ草

半蔀をどつと吹きたる花に風　助叟

莖瓶の火のぬるき如月　園女

春雨の草履つたひに飛越えて　山人

冬の日

秋の頃旅の御連歌いとかりに　翁

やうやく晴れて富士見ゆる寺　荷兮

寂として椿の花の落つる音　杜國

炭たはら

顏にもの着てうたゝ寢の月　其角

鈴繩に鮭のさはればひゞくなり　孤屋

鴈のをりたる筏ながるゝ　其角

あら野

垣穗のさゝげ露はこぼれて　翁

あやにくに煩ふ妹が夕ながめ　越人

あの雲はたが涙つゝむぞ　翁

句解百員

彌勒の堂に思ひうちふし　枳風

待宵の鐘は落ちたる草の中　　翁

友よぶ蟾のものうきの聲　　仙化

續尾集

御輿は眞葛が奥にかつぎいれ　　曾良

小袖はかまを送る戒の師　　不玉

わが顔の母に似たるもをかしくて　　翁

續さるみの

禪寺に一日あそぶ砂のうへ　　里圃

槻の角のはてぬ貫穴　　馬莧

直江歌仙

濱出しの牛に俵をはこぶ也　　翁

人いそがしきとしの暮かな　　曾良

松柏寒く嵐のおとすなり　　石雪

子を射させたる猪の床　　翁

羽黑山歌仙

閏彌生もするの三日月　　露丸

わが顔にちりかゝりたる梨子の花　　重行

銘を小蝶とつけし盞　　翁

ひさご

紫蘇の實をかますに入るゝ夕間暮　　珍碩

親子ならびて月にものくふ　　同

秋の頃宮ものぞかせたまひけり　路通

大津の巻
擣衣をやめて琴の糸よる　松洞

うかれたる女に馴れて日をつもり　奇香

矢員に腕のよわる戀種　翁

みかんの色
惠比須講縞の袴を手にさげて　猿雖

喧嘩の中を無理に引分く　雪芝

しあはせと矢橋の船に乘らざりし　翁

宇陀法師
おぼろ〳〵と朧月かな　李由

左遷の扶持方おそき舟便り　許六

朝と晩との木魚さびしき　汶村

はるの日
里人に薦をほどこす秋の雨　越人

月なき波に重石おく橋　羽立

ころびたる木の根に花の鮎とらん　野水

韻塞
うち起す畠も花の木かげにて　岱水

つらものどかに鶴の卵わる　翁

春深く隱者の富貴なつかしく　許六

其袋

絹はりを欄の柱に筋かひて　　翁

みだれし髮を直すかんざし　　露沾

しらべなき記念の鞁音も出ず　　沾荷

春の日

謠ひ盡せる春の溫泉の山　　翁

のどけしや筑紫の袂伊勢の帶　　越人

內侍の撰む代々の眉の圖　　荷兮

あら野

本堂はまだあら壁のはしら建　　正秀

羅綾の袖をしぼり給ひぬ　　珍碩

齒をいたむ人の姿を繪にかきて　　正秀

花つみ

鳴子おどろく片藪の窓　　釣雪

盜人につれそふ妹が身を泣きて　　翁

祈りもつきぬ關々の神　　曾良

あら野

木鋏に明るうなりし松の枝　　長虹

秤にかゝる人々の興　　故及

此年になりて灸の跡もなき　　一井

句解百員

後住む女きぬたうち〳〵　　其角

山ふかみ乳を呑む猿の聲悲し　工齋

命を甲斐の桴とも見よ　枳風

花つみ

せきむしろをうつすのし餅　其角

すりはりや近江の海を見おろして　溪石

着やぶるまでは木曾の麻衣　琴風

韻塞

馬がはなれて菅笠をくふ　李由

いひはやす堺の食屋見て行かむ　木導

早麥あからむ並松の風　朱迪

さるみの

蚤をふるひに起きしはつ秋　翁

其まゝにころび落ちたる升おとし　去來

ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　凡兆

冬の日

血がたなかくす月のくらきに　荷兮

霧下りて本郷の鐘七つきく　杜國

冬まつ納豆たゝくなるべし　野水

さるみの

摩耶が高根に雲のかゝれる　野水

夕めしにかますご喰へば風薫る　凡兆

蛭の口處をかきて氣味よき　翁

はなつみ

的場のすゑに咲ける山吹　釣雪

春を經し七つの年の力石　翁

汲みていたゞく醒が井の水　露丸

續みなしぐり

月冴えて碪の槌のつめたしや　嵐雪

人は風ひく寢覺ならまし　虚谷

傾城のさびしがる顔あはれ也　其角

さるみの

瘦骨のまだ起直るちからなき　史邦

隣りをかりて車引込む　凡兆

うき人を枳殼垣よりくゞらせん　翁

冬の日

命婦の君の米なんどこす　重五

籭まで津浪の水にくづれゆく　荷兮

（くづれゆきとして聞ゆ。校訂者誌す。）

佛くうたる魚ほどきけり　翁

【補】

あつた三歌仙

華表兀げたる松の入口　工山

笠敷いて衣の破れ綴りゐる　桐葉

秋の鳥の人喰ひにゆく　翁

己が光

安々と矢洲の河原を打渡り　翁

多賀の抄子もいつのことぶき　半殘

手枕に男ももたでみつわ組み　土芳

伊賀の卷

鳥の巣もりと住みあらす庵　翁

二月や落行く甲おもたくて　菊夕

あらしに光る宵の明星　曾良

那須の卷

名處のをかしや小野の炭俵　翅輪

擣衣うたるゝ尼達の家　曾良

あの月も戀ゆゑにこそかなしけれ　翠桃

未來記

高田の喧嘩はやむかし也　其角

夏寒き關の孫六ぬきはなし　嵐雪

たしなき風の石菖へ來る　翁

鄙懷紙

客待つ暮に薪わる秋　杉風

末廣を釘にかけたる禰宜の家　濁子

塵うちはらふ片器の喰摘　凉葉

四日の月もまだ細き影　桃隣

山中の卷
あられ降る左りの山は菅の寺　北枝
遊女四五人田舍わたらひ　曾良
落書に戀しき君が名もありて　翁

あつた三歌仙
鶺鴒の尾を蜘蛛の圍に掛けられて　叩端
凪に身を置くけふぞ討死　桐葉
筆とりて朴の廣葉を打ちたわめ　叩端

別座敷
山のかぶさる下市の里　子珊
草臥のついては旅の氣むつかし　杉風

浪花の枝折
何のくすりになる蠅の糞　瓢界
おそろしやいつゝの年の物覺え　立志
死うはしとて又しやくりあげ　野童

春と秋集
植ゑおくれたる田の中の小田　嗒山
ほとゝぎす痩せて空にや啼きつらん　路通
わがもの思ひ浮世なる人　翁

熱田三歌仙
烏羽玉の髮切る女夢に來て　叩端

戀を見破る葬の月　翁

秋は猶たゞ味きもの喰ひけり　桐葉

寒菊隨筆

泣いて酒呑む乘ものゝまへ　翁

とう〳〵と榎の風のあたる音　野坡

稻盗人の繩といてやる　翁

俳諧集

蒟蒻の色の黑きも珍らしく　沾蓬

祭りのするは殿の數鑓　曾良

見る程の子供に今年疱瘡の痕　翁

鹿島紀行

左義鳥の火におとづるゝ在鄉馬　越人

瓦庇におぼろなる月　杉風

盃を片手に人を引きずりて　苔翠

菊の塵集

縞の仕出しの流行る帶機　洒堂

月影も寒く師走の夜の長き　諷竹

杖一本を道の脇ざし　何中

みなの山家

ともにとしよる逢坂の杉　翁

晨明にしばし隔てゝ馬と駕　卓袋

露しぐれより頭痛やみけり　木節

ひとつ星集

檜原のおくに戒律の尼　調和

翌しらぬ年木の柴に蟬の殼　立志

風あらそひし日をあられ降る　直方

砂川集

あふほどの人魚臭き也　翁

雨乞のしぶりながらに降出して　丈草

紡苧をみだす櫛笥の蓋　惟然

累秋の卷

御簾の外面に並ぶさぶらひ　丈草

郭公聲々啼きて通りけり　路通

煙りの中へおろす早桶　翁

これらを證として、俗にくだらず例の雅俗にあそぶべし。

聯句自他の事

硯にむかひすだれ捲きつゝ　自

梨の花咲きそろひたる夕小雨　時節

雉子におどろく女ひと群　他

此外附かたなし。

むかひ火に尼が涙やかゝるらむ　他

松風落ちて水の行する　其場

さつばりと醉のさめたる明屋敷　自

此外附方なし。

並木の露のはら〱と落つ　時節

巡禮の子を抱へたる朝の月　他

餘所目もさらに鍛冶がいきほひ　他の向附

いかにくるしき赤がれの髪　他の巡禮のあしらひ

ものゝ哀れも盆の名殘よ　自にて他の句へむかひし也

此みつの外附かたなし。

落瓦あらしは松にしづまりて　其場

皆わすれたる明けがたの夢　自

看病の粥ふきさます小くらがり　他自よりよび出したる也

着るものゝ手ざはりもはや秋ちかみ　自自の句に自の句な附くるは其人の自の句より外なし

此のふたつの外附かたなし。

ひとつづゝ手本もらひて粽ゆひ　他

しかる局に笑ふつぼねに　他の向ひ附

後や先裾にむしろの下向みち　他の局のあしらひ

染衣を思ひのまゝに賣りつけし　自他の局へ向ひたる也

此ふたつの外附かたなし。

藥になづむ彌生つれなき　自

人事もいはで日中の御垣守　他（自よりよび出したる也）

こぼれ松葉を手まさぐりゐる　他（御垣守のあしらひ）

ほろ〳〵おちる屋根葺の塵　他（の向ひ附）

此ふたつの外附かたなし。

鯨突一二の鏑をあらそひて　他

無分別なる顔に雪ふる　他（鯨つきのあしらひ）

願はしや我れも浮世をあのごとく　自（他のあしらひへむかひし也）

此外附かたなし。

あたらしき草鞋に旅のあらたまり　自

いのちなりけり洛外の春　自

見よがしに櫻がもとの女房達　他（自よりよび出したる也）

此外附かたなし。

巻わらに弟もむかふ手束弓　他

うき世の中もたのもしき哉　自（他へむかひたる也）

西國をうてば都も旅なれや　自

聯句は自他のわかち肝要なり。はた三句の轉じを思ふべし。此外に附かたなしといふは、自他のわかちにして、人情にて附かたなしといふ事也。人情うちつゞきたる時は、其場、其場のあしらひ、時節、時分、天相、此五つをいづれなりとも附くべし。

人情なき句三句つゞくはあしゝ。

人情の句を、人情なき句にてはさむはあしゝといふも、三句の轉ぜざるゆゑなり。人情ある句、二句つゞきたらんには、のばし句いくたび出してもくるしからず。

すべていふときはのばし句ながら、のばし句と唱ふるはあしゝ、其場、其場のあしらひ、時節、時分、天相と唱ふべし。

其場

【補】時鳥聲々啼きて通りけり
天相
雲はこぶ空は間近く風落ちて
【補】青天に有明月の朝ぼらけ
いづれも人情なき句なり。
其場とは、野山、海川等をいふ。
其場のあしらひとは、硯、机、戸、障子すべて其場にあるべきものをいふなり。
時節とは四時の季をもつものをいふ。
時分とは、晝、夜、旦、暮のことをいふ。
天相とは、日、月、風、雨、陰、晴の事をいふ。
又人事にて自とも他ともわかたざる句あり。
附句にて自とも他とも定むるなり。たとへば、
朝まだき狩弓狩矢持ちそへて
うしろ姿もはたちうち外

杭四五本を門の馬つなぎ
【補】かげろふもえてかはる川筋
其場のあしらひ
赤くすゝけし行燈のさや
【補】爪べにうつる双六の石
時分
日はうすくと入相の鐘
【補】温泉の香に曇る朝日さびしき
時節
雨の路門田の稲葉穂に出でゝ

かく附くる時は前句も他の句になるなり。

つめたかりけるかち渡り川

かく附くるときは、前句も自の句になる也。是附句をもて前句の自他を定むる法也。

祖翁曰く。聯句の事、前念へもどるべからずと、則ち三句の轉じ也。

古人曰く。聯句の事、前句をうごかすべしと、是また三句の轉じ也。

鳥醉曰く。聯句は有用にして無用、無用にして有用の附方をおもふべしと、是最も三句の轉じ也。

白雄曰く。卷中の句々、よく味はひて、蕉門聯句の意味をしるべし。

俳諧寂栞卷之中終

俳諧寂栞巻之下

白雄坊選著　拙堂増補

わづらひある句の事

其一　情の事

ほし合や何につけても人心

あすの事思ひ出す迄涼みけり

上の巻にいふごとく、是おのれのみ聞ゆる情にして、かの通情餘情のたぐひにあらず、通情はよし私情は嫌ふといへるは是なり。

こと魂のおもはるゝ哉ほとゝぎす

是蜀帝魂といふよりの案じ方なるべけれど、これも一人の私情なり。

杜鵑啼く音や古き硯ばこ　翁

是古きすゞり箱と姿を出して、友なつかしみおもはれし也。一句の通情餘情、是にて一理萬通すべし。

【補】

蕉門にこゝろざしあるもの、句々をくらべて、ます〳〵深きに入るべし。且つ時々こゝに出せる證句を規矩となして、長短をはかり、意味を心得べし。

第二　理窟の事

ふかぬ日は歸帆のおそき柳哉

柴ならば腰を掛けように柊賣

かくなせと詞のかゝる句は、皆理窟におちいるなり。

【補】

生きんとて殺すはいかに藥喰　　支考

男ならひと夜寢て見む春の山　　とよ

理窟をいふやうなる句なれども、理窟におちず風韻あり、前にたくらべて其是非をはかるべし。

第三　たゞごとの事

餅花におくるゝ背戸の柳哉

夕風に木の葉吹きこむ入江哉

骨をりたる趣向なければ、發句にならず、たとへば、

猿啼きて木の葉吹き込む入江哉

かく案ずるときは、夕風は餘情にして、斷腸のさびしみ、誠に感多し、かついふ、自然の句とたゞごとの句と似かよひてことのほかなり。

秋の空尾上の杉にはなれけり　　其角

（五元集にも、杉をはなれたりとあり。校訂者誌す。）

智恩院のひとへ櫻は咲きにけり　　信德

これら、いはゆる自然の句なり。其餘情をおもふべし。

【補】

六義に云ふ。雅はたゞごと歌といへり、古今抄に云ふ。これは事とゝのふり、正しきをいふなり。定家卿曰く。雅は思ふ事をすこしもかたよることなく、たゞにはじめより終りまでいひくだすなり。

枯蘆の日に〳〵をれて流れけり　闌更

あさがほの花ちひさくぞなりにける　百明

前に出せし秋の空、智恩院の二句の餘情の場へいたるは容易ならず、後に出せし枯蘆蕣の句も自然の趣なり。されども、此趣は人も我れも聞きわくれども、其角、信徳が句は手をはなれたる句なれば、初心のいたられぬさかひ也。これらを見て其次第ある事をおもふべし。

其四　ものにまぎるゝ句の事

蝶ひとつ吹かれてくるゝ野中哉

これ蜻蛉にもなるべし。

此道は木樵も踏まず閑古鳥

是苔の花にもなるべし。其すがたをえざるの故なり。すべて、何を案ずるに、春秋につれて其すがたを得ることなり。

いろ〳〵の事思ひ出す櫻かな　翁

ある人曰く。此句ものにまぎれぬべし。烏酔答へて曰く。源氏須磨の巻に「日永くつれ〳〵なるに、植ゑし若木のさくらほのかに咲きそめて、空の氣色うらゝかなるに、よろづの事おぼし出でられて、うちなき給ふことおほかり」と云々。祖翁の句、伊賀の上野、故主の前にての吟なり。ゆゑにわか木老木の反轉、ものにまぎれまぎれざるなど論におよぶべからず。

四時の雨

春雨の木下をつたふ雫哉　翁
此頃は小粒になりぬ五月雨　尙白
夕立や檜の匂ひひとしきり　及肩
ぬしは誰れ木綿なだるゝ秋の雨　尙白
あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲　其角

四時の月

清水の上から出たり春の月　許六
淀舟の登るか引くか朧月　古根
馬かへておくれたりけり夏の月　懷雪
盆の月寢たかと門をたゝきけり　野坡
見る人を出て待つ月のやうす哉　半殘
名月や池をめぐりてよもすがら　翁
十六夜はとりわけ闇のはじめ哉　同
鶏のけうとき月のなごり哉　一伴
（わづかにとして聞ゆ。校訂者誌す。）
あら猫のかけ出す軒や冬の月　丈草

四時の風

はる風や麥の中行く水の音　木導
靑嵐さだまる時や苗の色　嵐雪

小原女や野分にむかふかゝへ帯　　園女

あだし野や蛇の衣ふく秋の風　　野青

こがらしに二日の月の吹きちるか　　荷兮

かくまぎれ易きものながら、風姿風情をもととして案ずる時は、春秋につれてものにまぎるゝことなし。

【補】

初心の人、題を得て先づ題のおもむきをつまびらかにたづね、且つ古哲の證句をも問ふべし。たとへ、心得たる題にても問ふときは、又深き心をも開き得るもの也。こゝろえざる題は勿論尋ぬべし、君子は下問を恥ぢずと、己れより先達の人にはもとより、若輩の人又は下賤の者にも、しらざる事はいく重にも問ふべし。こゝにおいて少しも恥づべからず、恥ぢて問はざるは生涯の損とするべし。さてとりえたる題を、深く觀念して趣向をもとむべき也。かく丁寧をつくして案ずるときは、ものにまぎるゝ事あるべからず、題の趣きをよくこゝろえざる故、餘の題に紛るゝことをもいふならむ。

無名抄に云ふ。俊惠は此頃も只初心の頃のごとく案じ侍るなりとあり。有がたき事ならずや、是則ち丁寧反復するの意を尊びて、かく書にあらはせり。

許六曰く。發句は題の曲輪を飛出で作るべし、曲輪の内にはなきものなり。自然くるわの内にあるは天然にして希れ也と、内々案ずる時は等類なる事多く、勞して功なし。外を案ずるときは、何をおほく得れども、題にふれ易きものなれば、初心の至りがたきところ也

よくおもふべき事なり。

俳諧は易きところより入るべし。易き處手に入るときは、むつかしき處は自然になるものなり。

其五　當季かけ合はせ未練の事

陽炎や野は若草の雨あがり

青柳やつれてぬるめる水の色

ものにまぎるゝをくるしみて、かく當季をかけ合はせたるは未練也。おのづから當季の合ひたるはよし。

ほとゝぎす啼くや五尺のあやめ草　翁

涼しさは竹の子鮓の香ひ哉　湖風

【補】

稻妻や座して靜かに秋の人　伯先

これら未練のさたにあらず。

【補】

蝙蝠も出でよ浮世の花に鳥　翁

雁啼くやすみれ咲く野の枯尾花　鳥明

これらは他の季を合はせたるなり。

其六　古事古歌等につかはるゝ事

梅が香やこれも遠くて近きもの

清女枕草紙に、遠くて近きもの極樂と舟の路とあり。是もとあれば、またくその古語につかはれしなり。古事につかはれぬ句法、前に出でたればこゝに略す。

闇の夜や巣をまどはして啼く鵆　翁

「夕されば さほの河原の川風に
友まどはして鵆なくなり

闇の夜の五文字感ずべき事なり。

【補】

茸狩や鹿は人見て踏みわけず

妻戀や鹿は紅葉の山も見ず

前の句は、奥山に紅葉踏分け啼く鹿のといへる歌より出でたるならん。後の句は鹿追ふ獵師は山を見ずといふ語より反轉したる意なれども、鹿はと反轉してはむつかしく且つ句體あしゝ。

螢三つふたつはものゝなつかしき　曉臺

冬の蠅はつべき時ははてよかし　古雄

いなづまや思ひ入るべき山もなし　可都里

これらにてしるべし。

其七題の文字にすがる未練の事

手折られて關を越えたり女郎花

鷄頭やまことの鷄は根に遊ぶ

かく案ずるときは、何をもてほねをりとすべき、自然の栞は一句の中の幸ひ也。はじめに證句出したればもらす。

ひよろ〳〵と猶露けしや女部志　翁

枯れのぼる葉はものうしや鷄頭花　萬乎

これらを證とすべし。

【補】

題によらず文字にすがる事

角樽や傾け呑まう牛の年

これ角といふ字より牛の字へかゝる也。

華に水あげて咲かせよ天龍寺

花に水あげよ、天龍とかゝりたる也。

夕雲雀まだ落さぬや鞠子山

落つるといふより、鞠とかゝりたる也。是等かつて正風に用ふる事なし。

分入れば川上寒し花に鳥　重厚

人戀し火ともし頃を櫻ちる　白雄

ほとゝぎす晝の初音ぞ恨みなる　樗良

夕暮は門さす秋となりにけり　嘯山

柿寺や藪の中にも啼く千鳥　士朗

文字にかゝはるときは風韵なし。これらの句句味はふべし。

其八　作にすゝむ事

青柳や水よりうへの浮沈み

たち聞きの耳をとり出す頭巾哉

これらは其作にのみつかはれて、何を餘情にすべきや。古人曰く。作にすゝむべからず。一作は則ち一句のちからたるべしと。一作の句、前に出したればもらす。

其九二作になる事

ぬきはなつ聲の劒や夜の雉子

こゝに又酒すふ珠や月今宵

ぬきはなつ、聲の劒、月を珠とし、又酒すふとはこれらの詞にのみかゝりて、何をもつて餘情とせんや。

其十見立句の事

曲水や岩も三組いつゝぐみ

鴛鴦や岩を屏風に立てながら

見たて句殊更にきらふ。俗におちいるべし。かついふ。かく案ずるときは、何をもつて餘情とすべき。

【補】

月に柄をさしたらばよき團扇哉　宗鑑

藻の花はかつぎの海人の鬘かな　胡及

これらの句々、趣向は見立なれども、さしたらばよき、海人のかつら哉。といへるにて、見立にて見立にあらず。姿情風韵そなはれり。六義にいへる、興の體なるべし。八雲御抄に、興はたとへ歌なり。或人曰く。たとはゞ風の體はかくし、興の體はあらはるゝ也。

何ごとの見立にも似ず三日の月　翁

月に柄をさしてうちはと見たてし宗鑑が意によりて、かくは申されし也。

其十一ことわりなき句の事

さみだれや中にして降る十五日

此句幾日(いくにち)にいひ出せしにや、日わからぬなり。よく手爾葉を考ふべし。中にして降るかとあらば、十五日にいひ出したる句なり。中にして降りしとあらば、晦日にいひ出したる句なるべし。

けはひよき二日の月やはつ櫻

二月二日ならば、いまだなるべし、三月二日ならばはつざくらにはあるまじ。

【補】

或人曰く。閏彌生のある年には、三月二日に初ざくらなることもありぬべし。されども、これはまれなるゆゑ、はし書などなくてはあしかるべし。

駒牽の木曾や出づるらん三日の月　去來

十五日たゞやむつきの古手買　之道

これらをよく味はひ證して、日をさしていふ句分別(ふんべつ)あるべし。

其十二句がらの事

小がたなのそれから見えぬ接穂哉

子をほめて芋燒く傍に旅寢哉

こゝろざしいやし、ひら句のさま也。

「我里にしばしとゞまれ時鳥
　人は初音をおそく聞くとも

此うたこゝろざしいやしとなり。風雅(ふうが)はこゝろざしをもとゝす。

山ざくら世はむづかしき接穂哉　猿雖

旅の秋いづれもきくや鐘の聲　横几

古人曰く。發句いひ出でんごとに、すなごまきたる短冊にしたゝめんことを思ふべしと、分別すべし。祖翁曰く。句がら人がらこゝろつくべしと、つゝしみ思ふべし。

【補】

眠る蝶聲なき故のつれ〴〵か　佛仙

久かたのたゆめる日あり雲の峰　蓼太

さみだれのかくてくれ行く月日哉　蕪村

春の日やあてなしに出ても面白し　見風

鶴おりて人に見らるゝ秋の暮　白雄

これらの句がらを心得べし。

隣りへは落ちぬやうにと接穂哉

あさましき句作なり。

はつ雪や犬になるとも君が門

是何がしが貴人の前にて申し出せし句なり。いとあさまし。

露沾侯にて。

西行の菴もあらむ華の庭　翁

大いなる庭を吉野山に比して、とく〳〵の清水を似せし西行の庵もあらんと申されし也。貴人の前とて、猶こゝろざしをたつるがよし、卑下の句こゝろざしをうしなふにちかし。

其十三　うき句の事

控木やうらがれの秋を立盡し
冬川や蕪ながれて暮れかゝり

吟じてしるべし、立ちつくす、暮れかゝるとあらば仔細なし、發句のをさまり肝要也。きれ字といふも一句ををさめんがためなり。

其十四　てにをはの事

これほどのものに音なしけさの雪

夜もすがら降りたる雪を、朝見たる句なるべし。音なしとしては一句の意をなさず、これほどのものに音なかりしとあらば仔細なし。過現未の三を句ごとに思ふべし。

【補】

音なしは現在なり。音なかりしは過去なり。

油斷して蝶のしかるゝ椿かな

ゆだんせしやせまじや、蝶にならざれば蝶のこゝろはしれまじ。蝶のさまをよく見て察しおもひやりたるはよし。

蝶の舞落つる椿にうたるゝな　闇指

【補】

はなちやる鷹も哀れかぬくめ鳥　藤匂

かくのごとくいはゞくるしかるまじ。

其十五　一句の自他の事

夜もすがら川風つらし網代守
鶴を見て命婦の迯ぐる若菜摘

夜もすがら川風つらしは自なり。網代守は他也。命ぶと若菜つみと別なり。

川風何と、命婦の逃ぐる若菜畑。

とあらばよし。

あら海に海人の飛込む寒さ哉

海人の飛びこむは他なり。寒さ哉は自なり。一句の自他あはず。

あら海に海人を見る日の寒哉

かくなくてはつゞかず。一句の内自他あり。最も句々分別すべし。

右落ちてひだりはかゆし鹿の角

してひとり鐘の中なる暑さかな

他流にはかゝる句をも句とす、風雅のうへには人を感ぜしむるといふも、みな是手爾於葉自他のわかち也。よく分別すべし。

【補】

きりぐ〵す腕しびるゝ添乳かな

ある正風の俳諧集に此句を出せり。しかも宗匠なりをもせし人の句なり。もとより女の自の句ならば、論なし。男の句ならば、添乳いかゞ、これを他より見たる句といはゞ、腕しびるゝ自也。いづれ自他さへわきまへざる身にて、人の師たるはおぼつかなきなり。祖翁曰く。一字の師たりともわするゝことなかれ、一句の理をも解せず、人の師となる事なかれ。人に教ふるは己れをなしてなる上の事なり。或人曰く。初心の門人の發句を見て、おもふまゝに善惡をとく時は赤面する、同士の雅吟を難ずれば終に呉越の媒となる、是をはゞかれば門弟子詞友に面從するの外更に術あるべからず、かくのごとき時は師弟ともに道をうしなふ、故に師ははゞかるべからず、弟子は

臆すまじ。若し師友の判を嫌ふときは、獨學固陋なり。よく心得べし。

其十六其人に應ぜざる句の事

綿線のわが手にさゆる夜寒哉

かゝる句は賤の女の自の句なり。

綿線の音きく旅の夜寒哉

かくあらば誰れがいひ出しても仔細なし。

のぞまれてうてば重たき碪かな

風情をいはんとても、かゝる句はせぬ事也。賤の女のいひ出したらんは尤もならんか。

それと聞くそら耳もがな時鳥　望一

盲人の常をおもふべし。

はな紙の間にしをるゝ菫かな　園女

女の常を思ふべし。

篝火に見ればしりたる鵜匠哉　落梧

長良川の吟にして、長良川の邊に住むなることをしるべし。旅人かゝる句をいひ出して、いかで人歎ずべきや。しりたる鵜匠の罪つくるよと、かこちたるぞさらにあはれむべし。

元日や家に讓りの太刀佩かん　去來

鎧着てつかれためさん土用干　同

秋風や白木の弓に弦はらむ　同

老武者と指やさゝれん玉霰　同

是去來叟に四時かゝる句のあるにて、よしあるものゝふのさまなるべし。

簑虫の音を聞きに來よ草の庵　翁

雪毎に梁たわむ住居かな　同

冬籠りまたよりそはん此柱　同

隱者の常をおもふべし。

ちる花を南無阿彌陀佛と夕べ哉　守武

集に末期の句と出せり。

其角曰く。唯一の神職にして、いかに此境をにらみ給ふべき、只嘆美して嗚呼とうちおどろきたる落花なるべし。

守武辭世

「こしかたも亦ゆく末も神路山
峯のまつかぜ〳〵

尊むべきことにぞ。

【補】

宗祇法師二十五禁のはじめにも。

難句の事、禁句の事
其人に應ぜざる句の事

とあり。みな自他のわかち也。かりそめに句をいひ出す事最もはゞかるべし。且ついふ。自他の事、人倫のみならじ、草木鳥獸に對しても、わがこゝろを入るゝときは、

わすれよ、わすれな、咲け、ちれ、撓め、みのれ、たもて、ゆけ、

などあるは、皆さつしあるの下知の言葉、是無心なるものに、魂を入るゝの案じかた也。

這ひ出でよかひやが下の蟾の聲　翁

はやくさけ九日もちかし菊の花　同

これらにてしるべし、

【補】

禁句の事

炭の火の人なき壁にうつりけり

此句意到不到句、人なき家の燈火なく、炭の火影、壁にあかくうつりたるものなるべけれども、さは聞えず、炭の火の壁にうつるとのみきこゆる、是禁句なり。

炭の火影人なき壁にうつりけり

かくあらば禁句の難をのがれん。

すべて公務にかゝはる事皆禁句也。其餘はおしてしるべし。

【補】

不易流行の事

不易

何となく冬夜隣りを問はれけり　其角

流行

風なりに青い雨降る柳かな　同

不易

杉の葉の雪朧なり夜の鶴　支考

流行

年々や御意得るたびに初時雨　同

不易

御簾より内は古風の袷かな　乙由

流行

結構な日を鳴きくらす蛙かな　乙由

不易

くだけずに奥山椿ながれけり　柳居

流行

梅さくや片枝は伽羅に朽ちながら　同

不易

卯の華に尺八さえて暮れにけり　鳥酔

流行

大井川鮎も七瀬の七ころび　同

これらにて不易と流行とを考へ見るべし。此人々は流行の内にも、不易をわすれざるがゆゑに俳諧の旨全し。

これは〳〵とばかり花のよしの山　貞室

朝夕の人もめづらし今朝の春　宗因

月しろやむかしにちかき須磨の浦　貞徳

此人々は祖翁より先の英傑たり。流行をなすといへども、各かゝる不易の句を述べられたり。

秋たつとしらで門掃く男かな　存義

身を捨てにのぼる虫あり高燈籠　平砂

これらの人々は我門より他流と唱ふれども、かく不易の吟もあり奥ゆかしからずや。

鳥も子にあはでの森や春の雨　長翠
世にすめば師走の梅もあまた見る　葛三
細道やはゞかりもなく椿さく　其堂
芹生にて芹田持ちたし春の雨　巣兆
爪とりのよき日にあたる更衣　兀雨
辭宜合ひに門まで出たり夕櫻　雨塘
花を折る心いくたびかはりけり　成美
露ちるや朝のこゝろのまぎれ行く　乙二
よしきりの癖を見に來る繪かき哉　恒丸

雨に鳴く鳥もおほかる五月哉　完來
無事は是人の花なり春の風　岳輅
春の雁立さわぎては日をおくる　青蘿
二日月涙のあとにはなかりけり　羅城
朝貌のひや〳〵とさく垣根哉　士朗
鴛鴦よひと夜わかれて戀をしれ　大江丸
夕立の近江は旅寢處なり　友國
朝鳥や田蓑の空に鳴きうつる　瑞馬
秋寒の戸におとづるゝ木の葉哉　井眉

居ならぶや正月したる小田の雁　升六

青柳やよくも薪に折らざりし　月居

秋をうらむ雲の深さよ淺間山　猿左

月こよひ流るゝ刀根の水百里　梅年

藻の花の杭にまとふや梅雨あがり　土卯

身ひとつにこは秋の風あきの月　定雅

鳶の巣の卵割るらんけさの雨　蒼虬

よきことに逢坂越ゆる月夜哉　其成

春の心花ちる夜よりからびたり　丈左

猫の戀逢はぬ夜もなく哀れなり　樗堂

はつ草や忘れし書を見る心地　道彦

不易に偏なるものは流行を嫌ふ。流行に偏なるものは不易に嫌ひあり。是いはゆる去帆の順風歸帆の逆風なり。これらは不易流行を兼ねて心得たる近世の作者なり。何々不易あり、流行あり。見る人こゝろ得べし。

○

あの風にありか尋ねん華のあと　誠拙禪師

角田川にての吟なり。恵然禪寺にて相見のとき、此句と案山子の讃をしめさる、せめてもの卷尾にこれをおく。

俳諧寂栞卷之下終

俳諧寂栞員外

十五の哉の事

題の哉

からかさにおしわけ見たる柳哉

　題の哉に仔細なし。ほたる哉、砧哉のたぐひなり。

治定の哉

朧とは松の黒さに月夜哉

　野中哉、山路哉のたぐひいひさだめたる也。

稱美の哉

蓮瓶のせまき中にも浮葉哉

　いかにも稱美すべし、あした哉、かざし哉のたぐひなり。

嘆息の哉

牛呵る聲に鳴たつゆふべ哉

　いかにも嘆ずべし。おもひかな、恨み哉のたぐひなり。

願ひの哉

黄菊白ぎくその外の名はなくも哉

それときくそら耳もがな時鳥

　なきことをあらむとねがふ也。ゆゑにもがなとつゞく。

我れをしる友かな竹に雨後の月

　かなといふももがなにひとし、最も句作こゝろえあるべし。又いふ連もがもなどいふは、猶願ひの哉にひとし。

わり哉

此頃のおもわるゝかな稲の秋

腰につかふかな、よく作るやうにすべし。

しづむ哉

冬枯に風のやすみもなき野哉

吟じてしるべし。

うき哉

月淸し今宵は汐も滿つるかな

うき哉たる故、上に切字をつかひしなり。尤もうき哉ながら、句作によりて切るゝもおほし。

こがらしの身は竹齋に似たる哉

うれしさは葉がくれ梅のひとつ哉

そのをさまりを吟じてしるべし。

たゝく哉、ひびく哉、かはる哉、落つる哉をしむ哉、ゆがむ哉、わかつ哉、さらす哉

すべて、ウクスツヌフムユルウよりつゞく哉は、皆うき哉也。中にも思ふ哉は、これ歌にも過當の哉といふにや、先づせざることながら、

若葉せしくれも故鄕をおもふ哉

などあり、されども自得の人ならではゝゞかるべし。

拙堂曰く。うき哉にても、一句のをさまりよきはきるゝ也。こゝろ得べし。

わびしさは夜着を掛けたる巨燵哉

門の木に小鳥鳴く日を小春哉

これらの句、もし上にてきるゝときは、かならず首きれになる、心得べし。

言葉を切りて意のつゞく哉

武士のきゝなぐさまんあられ哉

春霞ひとさし舞はん人もがな

聞きなぐさむべき意也。舞ふべき人もがなの
意なり。
んにてきれたるにはあらじ。

句中に詞を切る哉

初春の遠里牛のなき日哉

傘張の眠り胡蝶のやどり哉

遠里牛、眠り胡蝶とつゞかずながら一句のをさ
まりを吟じてしるべし。

口合のやを捨つる哉

飛ぶ蝶をあはやと見たる淵瀨哉

くさむらの露ふむ鳶や烏かな

吟じてしるべし。

たゝみの哉

梅柳嘸わか衆哉女かな

嘸といふ字にて、おもひやりたる趣きをかさねしなり。

拙堂曰く。饒舌録に、古寫本にありと僞はりて、梅柳さも若衆哉女哉と出せり。梅柳を若衆と女にたとへたる意にて、さもと作りて人をたぶらかせり。此句は延寶天和の吟なり。紫の一本に、延寶天和の頃の風俗をよく述べたり。すべて其時代の人は、派手にして物見遊山に出づるには、物見衣裳こしらへ、伊達なる形容をなして出でたるなり。途中にて雨などに逢ひたるときも、傘もさゝず、伊達衣裳を着たるまゝ、雨に濡れながら歸るをはれとせしこと也。花見などには木々の枝に、ほそき綱またはしごき帶など引きわたし、是に伊達なる衣裳をかけならべ、幕にかへたるといへり。とりわけ衆道大いに流行、女も亦派手をこのみて、物見遊山にわれさきにと出でしと也。しかるが故に、梅咲き柳みどりせし

を見てさぞ若衆や女などの立派にて、物見に出づるならんと、その世のさま也。今の世のさまにてはきゝわけがたし、春臺先生の獨語にも、世の中の風俗のかはれるをつぶさに著はしおかれたり。名聞利慾を欲する心は、古今かはらねども、風俗は十年も同じ姿にはあらず、徂徠先生論語徴の例に倣ひて、延寳天和の風俗にて、句意あきらかなり。句意がしれざればとて、發句の文字作りかへて見ば、千百年の後、十七字皆かはりておらん、一字かへずその儘にてもかく明了たり。又曰く。嘸とありても、一句の治まりよき故哉とまるなり。かれらが爲にまよはさるべからず。僥舌鋒といへる書は、詞の玉緒といへる歌の手爾葉をあらはせし書を、そのまゝ俳諧の手爾葉に無理にあはせし書なり。詞の玉緒を不用和歌者流もあり。剏んやこゝをもつて、俳諧をきはむべけんや。

察する哉

朝貌の種とる人のこゝろ哉

聲かれて瀨にたつ鹿の思ひ哉

人のうへはさら也。草木鳥獸ともにそのさまを身にうけて、さて察したる哉なり。自他のわかちまぎれ易し。よく分別すべし。

三段の哉

裏ちりつ表をちりつ紅葉哉

吟じてしるべし。すべてかゝる句は一句の治まり也。

名所の哉並びにや哉

葛城やたかまの山は月夜哉

道灌や花は其夜をあらし哉

名所にのぞみて、や哉をつかふ事くるしからずとは、人々いふ事ながら、こゝろえなくしてつかふべきやうなし。證句のごとく、ものふたつをとりわけて、はの字にちからを入るゝ事なり。尤も初心の好むべからず。

夕顔や秋はいろ／＼の瓢哉

名所のや哉自得の人は此句もすなはち解する也。瓢は惣名にして、百生、千生、長ふくべさま／＼あれど、花は眞白にたゞひといろの壺盧花なるは、いかにやとうたがひて、秋はのはの字に例のちからを入れられし也。尤も祖翁の外にかゝる句いひ出せる人なしとしるべし。

十五の哉、證句の趣きにてしるべし。

首きれ哉

離れ山鴉鳴きたつしぐれ哉

桔槔むかしながらの柳かな

はなれ山鴉、はねつるべむかしとつゞかずして、哉留むる、是首きれ也。

「五月雨にしらぬ杣木のながれ來て
　おのれとわたす谷のかけはし

さみだれにしらぬとつゞかざるよし、和歌の首きれの證歌に出たれど、五月雨にしらぬなどいふ手爾葉よりつゞく首切は、俳諧に仔細なしとしるべし。何にても手にはは下へつゞくところ得べし。

時鳥鳴く音にくもる茨かな

小傘さす手にひゞくあられ哉

時鳥啼く、小傘さすとつゞく、故にかくのごとく、上の五文字に手爾葉なくとも、下へつづきて哉と留まる也。

はれものに柳のさはるしなへ哉

はれものにさはる柳のしなへ哉

これらのつゞきを分別すべし。いづれが是か、いづれが非か。

冬籠り夜晝竹のあらし哉

高燈籠晝はものうき柱かな

是等の句、冬籠夜、高燈籠晝とつゞきしにはあらず。なれど、中七文字の治まり首切のたぐひにはあらず吟じてしるべし。かついふ、題の哉、治定の哉、分けて首切になり易し。嘆息の哉、稱美の哉、これはしづまる故に首切にまぬかるゝ事多し。

腰折哉

ひまなくも松風落ちて枯野哉

屋根葺のわら〱と時雨哉

しづかさに庭をのぞけば柳哉

腰のて、腰のと、腰のは、此三切字にもあらねど、いひはなつ詞、おさふる詞、かゝゆる詞ゆゑ下へつゞかず、吟じてしるべし。

南天に箒さはりて鳴く蚊哉

麥喰ひし雁と思へどわかれ哉

花ひと木ふた木おもへば春日哉

かくの如く、さはりて啼く、思へど別れ、おもへば春日と、ことばのつゞくをよしとす。尤もよのつねの哉、見たる柳哉、窓のやなぎ哉とつゞく腰のトテハ、此三よりつゞく哉句句分別すべし。

何に居て暴風の跡の蜻蛉哉

誰がために紫深きすみれ哉

かくのごとく上に、何、誰、たぞ、いく、いづれ、いかに、いかでなどうたがひ捨て、哉とは留まらず。吟じてしるべし。

何鳥の卵か落ちし野松かな

何といふ字を歟といふ字にうけて、さて哉と留めたる也。

何の木の花ともしらず匂ひ哉

何といひて花ともしらずと疑ひかへして、哉と留めたる也。蜻蛉すみれの哉と別なる事、吟じてしるべし。

十五のやの事

題のや

うぐひすや柳のうしろ藪の前

題のやは別に仔細なし。陽炎や、蜻蛉やのたぐひ也。

治定のや

國中や青田のうへの雲の陰

原中や、道の邊やのたぐひいひさだめたるたり。

稱美のや

ぬれいろや大かはらけの初日影

いかにも稱すべし。

嘆息のや

おとろひや齒に喰當てし海苔の砂

いかにも嘆ずべし。

笠提げて墓をめぐるや初時雨

拙堂曰く。北枝が句なり。祖翁の墓に參りて生前ならば笠提げて門に入るべきに、笠さげて墓をめぐるやと嘆息したるやの文字也。た

だの腰のやと見るべからず。すべて古人の發句にても、當時の人の吟にても、嘆息、稱美、治定など種々にわたりて見るべし。

願のや

蓬萊に聞かばや伊勢の初便り

吟じてしるべし。

捨や

年の暮女の眼鏡すさまじや

かくのごとく、上に手爾葉なき五文字を据うべし。上にきるこゝろなり。

ひと里は皆花守の子孫かや

これうたがひ捨つるやなり。上に手爾葉あれど皆といふ字あるにてしるべし。

こもり居て木の實草の實ひらはばや

これねがひ捨つるやなり。上に手爾葉あれど中七文字にて手爾葉なきにてしるべし。

下知のや

水うてや蟬も雀もぬるゝほど

吟じてしるべし。

たゝみのや

遠里の麥や菜種や朝がすみ

おなじものをおしならべていふなり。

夜や秋や海人が捨子や鳴く鷗

是たゝみのやに似て、たゝみのやにもあらず。なれど一句の治まり吟じてしるべし。尤も初心としておもふべからず。

はづむや

いかめしき音やあられの檜笠

ふるや時雨、たつや煙りのたぐひなり。定家卿や文字やすからぬよしおほせられしも、こ

れらのやなりとしるべし。

口合のや

これや世の煤にそまらぬ古盒子

吟じてしるべし。口合のや、切字にもなるにかぎらねど、此句は一體の治まりある故に切るゝ也。先にも出せしごとく、口合のやは、句によりて哉とも留まるなり。見合せてしるべし。うたがひのや、口合のやよく似てことの外也。句々吟じてしるべし。

疑ひのや

人や來し柳みだるゝ宵の窓

吟じてしるべし。夜や明くる雨や降るのたぐひなり、かついふ。うたがひの二やうあり。是のおもむきはうたがひ也。春やたつらん。宿やからまし、君や來し、などのたぐひはもろ疑ひなり。こゝろ得べし。

おしはかるや

春なれや名もなき山のうす霞

吟じてしるべし。

はさみのや

旅をして見しやうき世の煤拂

吟じてしるべし。はづむやとよく似てことのほかなり。

とや

星さきの闇を見よとや鳴く千鳥

是問ひかけ手爾葉といふ、吟じてしるべし。

腰のや

黄鸝にとはるゝ朝や茶せん髪

腰のや、よく治まるやうにすべし、やの字大體よの字にかよふ。其中に腰のやはいよ／＼よにかよはねばあしゝ、朝や朝よと吟じてし

るべし。遊びやとて嫌ふや文字あり。多く腰のやにある也。十五のや證句を味はひて意味をしるべし。

やというて捨也けり

行く年や親に白髪をかくしけり

年の瀬や鵜川に見しは昔しなり

のともとともいはるゝ句を、やと置きて、けり、なりといふはあしゝ。故に證句あればとて心得なくて言ひ出す事あるべからず。是等のやは一體の句に對して、歎息のやにあらずして、歎息のやにひとし。

○とゝなはざるやの事

ちら／＼や、はら／＼や、

これら古集にも一句見え侍れど、かたことなり。ゆめ／＼つかふこと有るべからず。

ゆたかさやといへるを、ゆたかやといへるたぐひ、みなかたことなりと心得べし。

○とゝなはざる哉の事

あはれ哉、奇麗哉、

あはれなる哉きれいなる哉といふべきを、かくする古集にも一句見え侍れども、ゆめ／＼つかふべからず、かたこと也。餘は推してしるべし。

白さかな、廣さ哉、是等の類ひ、廣き哉、白き哉とあるべし。十五のやは皆入用のや也。あそぶやは無用のやなり。一理萬通すべし。

拙堂曰く。廣き哉のたぐひも、句意によりて廣さかなともいふまじきにもあらず。

ぬつくりと雪車に乗りたる憎さ哉

これらの句は、にくきかなといはんより、にくさかなのかたまさる、吟じてしるべし。

こそれの事

元日に田毎の日こそ戀しけれ

華に來て人のなきこそ夕べなれ

蟲の音に深き闇こそ思ひあれ

あらしこそふけ、花こそさかね、それこそゆるせなど、こそと上にいふとき、下にヱケセテネヘメエレと下にうけつゞくるなり。こそけり、こそけるなどいふときは、例のかたことなりとしるべし。

雨の鶴巣をこそものを思ふらめ

炭賣のおのが妻こそ黑からめ

これらの證句にてしるべし。

さればこそあれたきまゝの霜の庵

さればこそあれたきまゝのと、荒の文字をこめられしなり。

「久かたのひかりのどけきはるの日に
しづこゝろなく花のちるらむ

いかではなのちるらんと、いかでのことばをこめられしと、古今の傳に見えたり。

五合帆に蚊もあらばこそ沖の月

是等はいひはなつ詞にして、こそを切字にせしなり。こそれの差別にあらず。

ぞけるの事

石女の雛かしづくぞあはれなる

菖蒲賣り日和に蓑ぞ着たりける

かくつゞくなり。ぞけり、ぞけれなどいふときは、例のかたことなり。

行く春を近江の人とをしみける

近江の人とぞと、その字を句中にこめられし也。その字こもらざる句に、けると留むるはあしゝ。

なその事

盃に泥な落しそむら乙鳥

泥な落しそとは、泥な落すなといふ手爾葉なり。ものな思ひそ、ふみなかへしそのたぐひなり。又手折そ、わすれそなど、上になの字なくても、句つゞきによりて手折るな、わするなと聞ゆるあり。句々分別すべし。

此外三のしの字、畢ぬ、不のぬ、總ての切字もろ〳〵の俳書に多し。故にもらす、かついふ。切字をおもふも初段のことなり、自得の人はたゞ一句の治まりにて、發句たることをしるべし。故に切字を一句にいくつつかひても、亦切字なくともといふは蕉門の習ひ也。

世を旅に代かく小田の行戻り

人に家を買はせてわれは年忘れ

ぬけ殼にならびて死ぬる秋の蟬

曉をむづかしさうに鳴く蛙

これらは句中のきれなり。

拙堂曰く。或書に、古今抄の挨拶の切と書せり。是案ずるに、一句のをさまり也。許六曰く。四十八字ともに皆切字になる也と、よくよくこころ得べし。

初眞桑たてにやわらむ輪にやせん

君火たけよきもの見せん雪丸け

夜神樂や鼻息白し面の内

鴫たちぬはごに鵆やかゝるらん

これ等のたぐひあげてかぞへがたし、道を深切に得てしるべし。

手爾葉はもとより、自他のわかち、過現未のみつをつねにして、句案におよぶべし。

拙堂曰く。員外に、手爾葉の事のみ書すると

いへども、おほくは初心の輩、古人の句意を解する階梯なるべし。おろそかに見るべからず。

俳諧寂栞員外大尾

格外辨序

法は法によつて法に泥まず、格は格を守りて格を忘るゝは、機に臨み變に應ずるの活法といふべし。連俳に新古の式ありて、法を立て格を正す、其の書世にとぼしからず、此書は機に臨み變に應じて一座の變法をあつめ、一卷の變格をあらはす、蓋し法外の法、格外の格、是を俳諧の權道とやいはむ、此變法を法とし、此變格を格とせば、大匠に代りて斷柱に膠するのそしりあらん。又法格をしつて此機變をしらずんば、法に溺れ格に縊れて、此道に不測の活法ある事をしらざらん、深く志し、篤く學んで、正變の活法を得ば、多々益辨の才を長じて、はいかい壇上に虎符をわかたむ。蜃君車子此册子を草創し、半化叟これを潤色す。此書を好して深く正權の活法を得ん事を欲す。自ら欲する而已ならず、廣く同好士に告げて、ともに斯の俳諧の自在を得ん事、又樂しからずや。

寛政二年冬霜月　　平安　謹序

格中格外の事は翁も論じ給ひし也。翁の曰く。不レ出レ格則狹、不レ入レ格則走ニ邪路ニ。入レ格出レ格而始可レ得ニ自在ニ者也。

道ばたの木槿は馬に喰はれけり

古池や蛙とびこむ水の音

格中格外の事は分ちがたし、其の大概をいはゞ、格中とは、其句ものにたくらべて解する所、十八が十八乍ら思ひよる所也。此前章も槿花一日榮といへるよりおもひ取りて、猶し道ばたなどにある木槿は、はかなからむと句に當つる所如此、又格外とは彼れを是に當つべきものなし。古池の句にて禪悟有りしなどいへれど、ひが〳〵しきこと也。此句に限らず、句の神さへ定まらば一以貫レ之べし。禪のみにかぎらんや、此句の大いなる所格外たるべし。

○切字なき事

煤ぼりて埃燒く家になく燕

粽結ふ片手にはさむ額髮

朝がほの花に啼行く蚊の弱り

から鮭も空也の痩も寒の入

翁の作此類多し。門人の切字の敎への答へにも、一句の成る所とも、自他の別つ所とも、一句の節とも、其外さま〴〵の敎へ有りし也。切字の意味かゝる句にてもしるべし。

○切字二つ有る句

いで「や我れよき布着「たり蟬衣

秋すゞ「し手毎にむけ「や瓜茄子

い「ざ子供走りありか「む玉あられ

○同三つ四つ有る句

子供ら「よ晝顏さき「ぬ瓜むか「む

初眞桑四つに「や割「ん輪にやせ「ん

子供等よといへる句の切字は、過去、現在、未來の三品なり。しかれども、自他の隔つ所は、上の子供等よといふなるべし。晝顏の咲いて瓜むかう

とは、我れよりの思ひ也。また初眞桑の句も、四つにや割ん輪にやせんとは、いまだ不決定の所にて不切、只一字のてにをはなくとも、初眞桑とさしいふ所切れなるべし。餘はなべて知るべし。

○下の五文字に一隔てたる句

海くれて鴨の聲ほのかに白し

忘れずば小夜の中山にて涼め

○腰のてにて哉と留まる句

病雁の夜寒に下りて旅寢哉

立歩行く人にまぎれて涼み哉　去來

帶ほどに川も流れて汐干哉　沾德

梅の花名に呼びよくて匂ひ哉　來山

○腰にんとはねて哉と留まる句

子の日しに都へ行かん友も哉

夏山に足駄ををがむ首途哉

前章に、んとはねたれども、もがな故に哉輕し、後章はむと有れどもんに通ふべし。

○無季の句格の事

海に降る雨や戀しき浮身宿

世に降るもさらに宗祇のやどり哉

二十五ケ條古今抄等に無季の句格を擧げたれども雜の體に紛るゝ也。雜の體は季の詞ありとも、句意其の季によらざるもの成るべし。古今集雜の卷頭に、

わがうへに露ぞおくなるあまの川　業平
とわたるふねのかいのしづくか

さあらば、一字一點季の詞なきを無季の格とし、季の詞有つても、季に寄らざるを雜體といふべし。

○雜體の事

綱立つてつなが噂の雨夜哉

都出て神も旅寢の日數かな

前章は物語の文に、春雨降りつゞく夜とありて、春の部に出でたり、後章は霜月朔日武の舊草に入つてと有り、故に冬に入る。

○脇にてには留の事

冬の日

霜月や鸛の彳々並び居て　荷兮

冬の朝日のあはれ也けり

續みなし栗

旅人と我名よばれん初時雨

また山茶花を宿々にして　由之

千鳥掛

新麥はわざとすゝめぬ首途哉　山店

また相蚊帳の空はるか也　芭蕉

ひさご

色々の名も紛らはし春の草　珍碩

うたれて蝶のゆめはさめぬる　ばせを

雪丸け

旅衣早苗につゝむ食乞人（ほがいもの）　曾良

安積の堤あやめ折らすな　芭蕉

此外擧げてかぞへかたし。

○第三字留り並にけり留

冬の日

人の粧ひを鏡磨ぐ寒　荷兮

花蕀馬骨の霜に咲返り　杜國

拾遺

客に枕のたらぬむしの音　芭蕉

行く秋を庭に定むる石の色　千川

はいかい集

おのれ〳〵と蟲の啼止む　沾圃

舛落し待たぬに月は出でにけり　ばせを

此外まゝ有るなり。

○四句目輕からざる句

拾遺

野分より居村の替地定まりて　史邦

さし込む月に藍瓶の蓋　牛落

雪丸け

瓜畠いざよふ空に月待ちて　川水

里をむかふに桑の細みち

二句ともに脇よりは少し輕く、平句よりは重かるべし。此類猶あり。

○五句目に月不ㇾ出、六句目に盈たる事。

續みなし栗

かけ歩行く芝生の露の朝みどり　文鱗

あたらし舞臺月に舞はゞや　仙花

ひさご

紫蘇の實をかますに入るゝ夕間暮　珍碩

親子並びて月に物喰ふ　同

同集

憎まれていらぬ踊の肝を煎り　同

月夜々々に明けわたる月　曲水

俳諧集

鶯の巣にいくつも花の見え透きて　芭蕉

禰宜下りかはる春の夕月　濁子

此外盈月になりたる卷いくつも有り。

○表に人の名出でたる事

冬の日

麿が月袖にかつこを鳴すらん　重五

桃花を手折る貞徳の富　正平

ひさご

構へをかしき門口の文字　正秀

月影に利休が家を鼻に掛け　同

此外猶有之べし。

○表に所名出づる事

はいかい集

江戸ざくら心通はんいく時雨　濁子

薩唾の霜にかへりみる月　芭蕉

また俳諧集雨吟四句に、

歸る鴫かへらぬ鴫も澤立ちて　嵐雪

七耀山を出でかゝる月　ばせを

此類まだ多かるべし。

○表に季うつりの事

拾遺

野は雪に河豚の非を知る若菜哉　凉川
まだ鶯の啼ききらぬ聲　千川
門番の寢顔に霞む月をみて　芭蕉
今朝むき初むる前栽の柿　宗波
秋風に莚を垂るゝうら座敷　此筋
むしも雨夜に目覺勝ちなる　濁子

雪丸げ

温海山や吹浦かけて夕すゞみ　芭蕉
海松刈るいそにたゝむ帆莚　不玉
月出でば關屋をからん酒持ちて　曾良
土もの竈の煙る秋風　芭蕉
印して城に贈りし色柏　玉
あられの玉をふるふ蓑の毛　良
鳥屋籠る鵜飼が宿に冬の來て　蕉

はいかい集

○素秋に成る事

蠅ならぶ早初秋の日數哉　去來
葛の裏ふく帷子の皺　芭蕉
小灯のさはらぬ萩に掛捨てゝ　路通
釣してきたる魚の腸　丈草
一通りみぞれに曇る朝月に　惟然

同集

蜻蛉の壁をかゝゆる西日哉　沾荷
潮落ちかゝる蘆の穗の上　芭蕉
霧の外の鐘を隔つる松込みて　露沾
沓にはさまる石原の露　露荷
月影に薄化粧うたる武者一人　蕉
柴の箕に筐をあやどる　沾

○歌仙に月四つ

冬の日

。

賣殘したる蟲はなつ月　筆

。

月なき波に重石おく橋　羽笠
。
こは魂まつる如月の月　荷兮
。
見付たり二十九日の月寒き　同

○月の字ちかき事

千鳥掛

月なき岨をまがる山嶮　一井
ひたるしと人が申せばひだるさよ　越人
茅もちよりて屋根の葺替　胡及
木の葉降る榎の末も神無月　鼠彈

砂川集

月影に苞の生海鼠の下る也　丈草
堤を下りて田の中の道　支考
家々はなよ竹原の間にして　去來
御齋は月に十五はいある　諷竹

雪丸け

さみだれを集めて早し最上川　芭蕉
螢を繋ぐ岸の舟杭　一榮
瓜畠いざよふ空に月待ちて　川水

○星月夜の月を持つ事

俳諧集

衣裝して梅あらたむる匂ひ哉　曾良

此卷初裏は尋常、名殘の表に、

柊に日をさすほどの星月夜

是にて月持つたり。

雪丸けに、同じ表の五句去に

行返り迷子よばはるほし月夜　嵐蘭
狼の番して明くる夏の月　嵐竹

○裏移りより戀出づる事

冬の日

らうたげに物よむ娘かしづきて　重五

雪丸け

物いへばあふぎに顔を隱されて　芭蕉

○又神祇釋敎の出でたる事

拾遺
吹倒す杉もほこらず此社　左柳

俳諧集
箕梠もまだ新しく掛けられて　正秀

○時分々々打越

雪丸け
瓜畠いざよふ空に月待ちて　曾良
牛の子に心なぐさむ夕間暮　一榮

千鳥掛
式日の日もかたぶきて心せく　如鳳
欄に頤ならぶ夕すゞみ　芭蕉

はいかい集
殘る蚊に袷着てよる夜寒哉　可定
夕月の光る椿は實に成つて　土芳

右の分いづれも打越也。

○春秋の字折に出づる事

春の日
額に當る春雨の漏　旦藁
春行く道の笠もむつかし　野水
簑子草生る五月雨の中　越人
（右原本春雨のもりとあれど誤りなり。校訂者誌す。）
我春の若水汲みに晝起きて　同

右一卷に四つ出でたり。

桃の白み
秋風に架こしらへる鷹の宿　千川
俵に豆の葉をしごく秋　洒堂

右見渡し五句去に出でたり。

○數字の事

市の庵
薄雪の一遍庭に降渡し　支考
川一つ渡りて寒き有明に　芭蕉

右五句去に出でたり。

はいかい集
ひと位景色立つたる月の影　惟然

眞丸に花の木蔭のひとかまへ　土芳
持鑓の一間所へはひりかね　望翠
右の分五句去づゝに出でたり。

深川集
六月は綿の二葉に麥刈つて　素牛
二軒ならんで家の新らし　車庸
右は四句去に出でたり。

桃の白み
十三夜曉闇のはじめ哉　濁子
荏胡麻殼に四十雀つく　史邦
右二句去に在り。

○數字續く事。

細道拾遺
行僧に三社の詫を戴きて　曾良
乘合ふ迄は明六つのかね　嵐蘭
四五日は島鵆の音に馴れて　等躬

拾遺
此一谷は栗の御年貢　野坡
七十になるを悦ぶ助扶持　芭蕉
三尺通りうらのさし掛　坡

○けり、けれ、留り打越に出づる事。

桃の白み
薄着して碪きくこそくるしけれ　ばせを
ふねの形所によりて替りけり　斜嶺

○けり、なり、打越に出づる事。

炭俵
五百の掛を二度に取りけり　野坡
人のさはらぬ松黑むなり　利牛

はいかい集
帚木は蒔かぬに生えて茂る也　ばせを
衣着て旅するこゝろ靜也

拾遺
數多く繋げば牛も富貴也　凉葉
朝づまを水鷄の起す寢覺也　濁子

右は三句去なり。

員外

　蒜喰ふ香の遠ざかりけり　鼠彈

俳諧集

　座敷ほどある蚊帳を釣りけり　一井

　右も左も蕣さきけり　景桃

　みな白張の襖なりけり　乙州

是も三句去なり。

　○らん留、三句去に三句ある事。

俳諧集

　初月にまづ西窓をはがすらん　芭蕉

　おのづから隣りの松を詠むらん　斜嶺

　待宵の鐘を餘所にや忍ぶらん　如行

　○風俗といふ句、二句去に出でたる事。

ぞくさるみの

　請狀すんで奉公ぶりする　沾圃

　有りふり仕たる國方の客　馬莧

　○打の字二句去に出でたる事。

　白壁のうちより碪打初めて　ばせを

　賴まれて銀杏い落葉打落し　やは

　○釋敎打越に出でし事。

俳諧集

　能き石みれば佛きりたく　半殘

　瑠璃燈は月を潜りし如く也　枳風

　僧の髮剃る盆のゆふ暮　之園

　○神釋打こし。

同集

　代繼をいのる九世の觀音　桃後

　佗人にあげてはとらす小袖捲　ばせを

　あられはらめく宮の笹原　支考

續みなし栗

　幟かざして氏の天王　其角

　御牧野に笛籟敎ふ童聲　全峰

　僧くるはしく腰に杖さす　枳風

○馬の字二つ出でし事。

衣うつふもとは馬の寒がりて　芭蕉
しかれに馬を下る冬月　之道

○稻の字四句去に出でし事。

稻盗人の繩解いてやる　ばせを
田を植うる向ひ近江の稻の出來　同

○同じ句調二所ある事。

熱田三歌仙

野の宮のあらし祇王寺の鐘　同
三つ股のふね深川の夜　同

○同じ句作の事。

同集

花曇り石の扉を押しひらき　桐葉
衣かつぐ小姓萩の戸を押す　東藤

冬の日

たぞやとばしる笠の山茶花　芭蕉
巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮

鶴の歩み

桐のとうたつ其陰の家　嗒山
黒木ふすべる谷陰の家　北鯤

○風の字打越しに出でたる事。

霜夜鐘

松風に剪れたる鵙を見のがして　溪石
鐘ひとつ三郷に通ふ秋の風　其角

○露の字二つある事。

あつた三歌仙

鶴なき國の露負はれ行く　ばせを
棺をいそぐ消えがたの露　同

此卷國の字も近し。

破れたる具足を國に送りけり　東藤

○他の月一句にて捨つる事。

續猿みの

古き革籠にほうぐおしこむ　惟然
月影に雪も近よる雲の色　支考

仕廻うて錢を分くる駕籠舁　芭蕉

○季の句他に入つて他の季に移る事。

ひさご

花は赤いよ月は朧夜　路通
汐のさす緣の下迄日和也　珍碩
生鯛上ぐる浦の春哉　同

はいかい集

雉子笛を首に掛けたる狩の供　芭蕉
雪降込んでけふも鳴瀧　桃隣
にこ〱と生死涅槃の夢覺めて　支考

○鐘の字二字出でし事。

同集

提燈をともせと言ひし鐘の聲　夢牛
翌の鐘鑄の月も澄みけり　式之

深川

伏見の戀を晩鐘(いりあひ)にきく　曲翠
待宵の身を悶えたる四つの鐘　洒堂

○人倫ちかき事。

山中集

細長き仙女がすがたをやかに　ばせを
茴をしぼる水のしら波　同
仲綱が宇治の網代と打詠め　北枝

○同つゞく句。

炭俵

初午に女房の親子振廻うて　芭蕉
又此春もすまぬ牢人　野坡
法印の湯治を送る花ざかり　蕉

○ふのぬ打越に成る事。

はいかい集

彫みも果てぬ佛あか付く　惟然
道はかどらぬ月の朧夜　文代

○宿の字ちかき事。

雪丸け

おの〱武士の冬籠る宿　芭蕉

住みかへる宿の桂の月をみよ　曾良

○夜分打越に出でし事。

はいかい集

味噌賣の宵闇々々に音信れて　文代

木綿を藍につき込みにやる　卓袋

有明に本屋の籾を搗仕舞ひ　惟然

○天象打越の事。

桃の白み

笈に雨みる峯のいなづま　芭蕉

能きほどに寢てから後の砧聞く　聽處

夜明るやと膽さらす月　越人

○聳物打越に成る事。

さるみの

布子着習ふ風の〆暮　史邦

踏韛の雲のまだ赤き空　去來

○名所うちこしに成る事。

鶴の歩み

あら野の牧の御召撰みにき　角

鵙の聲夕日を月に見のがして　文鱗

糺の飴や秋寒げなり　李下

山中の卷

花の香はふるき都の町作り　曾良

春を殘せる玄仍の筥　ばせを

長閑さやしるし難波の貝盡し　北枝

○同字付句になる事。

あらの集（同字なし。校訂者誌す）

酔覺の水の飲みたき頃なれや　傘下

唯靜なる雨の降出し　越人

はいかい集

別れ路の出ばつた石に腰掛けて　桃先

藪鼬めが仰山に出る　桃後

猿蓑

堤より田の青やぎていさぎ能き　凡兆

加茂の社は能きやしろ也　芭蕉

右の分疊字の格といふにはあらず。

○て文字折合の事。

深川

枝作る松に階子をさし掛けて　車庸

二軒ならんで家の新らし

はいかい集

疊帋しのび〱に鼻かみて　半殘

袴もとらではやわかれけり　士芳

○に文字折合の事。

員外

日の出でやけふは何せんあたゝかに　舟泉

心やすげに土もらふなり　龜洞

はいかい集

春に逢ふ蒔繪の鞘を提帶に　ばせを

はつ雷に將監がみの木　白

○て留りの句近き事。

三歌仙

月ほそく時計の響き八つ鳴りて　工山

高麗の縣にはたけ作りて　桐葉

右は二句去に出でたり。

雪丸け

行僧に三社の詫を戴きて　曾良

四五日は島鶺の音に馴れて　等躬

右は打こしに出でたり。

はいかい集

伊豆の海御崎のふねをかき入れて　千川

一夜の法に宗旨さだめて　芭蕉

○戀の句三句より四句續く事。

同

いはぬ思ひのしれる溜息　泉川

元ゆひのほつれてかゝる衣かつぎ　路通

人の情のほたに柴かく　芭蕉

語りつゝ萩咲く秋の戀しさを　龜仙

○又

拾遺
ちからに似せぬ礫かひなき　正秀
ゆるされて女中の中の音頭取　芭蕉
藪くゞらせぬしのび路の月　路通
匂ひ水したるく成りし初嵐　史邦
○又三所戀の出でしもの有り。
はいかい集
むつかしや襟にさし込む姫の貌　彫棠
硯法度と戀やせかるゝ　其角
みぬふりの主人に戀をしられけり　同
すがた半分かくすからかさ　芭蕉
付さしを中ではるゝ桃の宮　黄山
胡蝶のかげの跨ぐ三絃　桃隣
○戀のなき卷の分。
はいかい集
ひら〳〵と揚がる扇や雲の峯　芭蕉
あらの
雀の字や揃うて渡る鳥の聲　馬莧
あらの
夏の夜や崩れて明けし冷し物　ばせを
右の卷いづれも戀の句なし。
○夷の字二つ有る事
みなし栗
矛鈍き夷に關をゆるすらん　芭蕉
陸奥の夷しらぬ石臼　其角
○魂といふ字二つ出でし事。
同
藤は退之が肝魂を奪ふ　同
笑ひさんやに歸るたましひ　一品
○泪の字ふたつ有る事。
春の日
おの〳〵泪笛をいたゞく　荷兮
世に合はぬ局なみだに年取って　雨桐
○書の字近き事。

あふぎ四五本書きなぐりけり　丈草
分別の外を書かるゝ筆の晴れ　芭蕉

○酒の字二つ出でし事。

桃の白み
酒しぼる雫ながらに月暮れて　史邦
硝子にへり際みゆる藥酒　路通

○犬の字二つ有る事。

雪丸け
まつはるゝ犬のかざしに花折りて　露丸
妻乞ひするか山犬の聲　芭蕉

○笠の字二句去に出でし事。

拾遺
國を問はれて笠をみせけり　凉葉
隨心の笠に矢置を繕ひて　左柳

○草鞋といふ句二つ出でし事。

桃の白み
若皇子に初めて草鞋奉り　濁子
老が草鞋のいつ脫けたやら　凉葉

○忘るゝといふ字打越。

はいかい集
年を忘れて衾かぶりぬ　此筋
けづり鰹に精進忘るゝ　殘雪

○俵の字二つ出でし事。

はいかい集
薄月に干鰯俵の生臭き　濁子
俵の土手をたゝく着物　芭蕉

○生類打こし或は二句去。

同
猫可愛がる人ぞ戀しき　野坡
掃目の上に色々の蝶

員外（馬上にあらず高みなり。校訂者誌す）
火鼠の皮の衣を尋ね來て　舟泉
馬上より踏みはづしてぞ落ちにけり　冬文

○又二句去に出でたる句。

市の店
追こみの繩を鼠のならす音　素牛
手拭脱いでおろす牛の荷　支考

はいかい集
鷹の爪臍寒く啼き明すらん　半殘
雉子々々追うてそこら淋しき　土芳
○表に病體の事。

はいかい集
食腸に腹を干しけり朝の月　湖風

さるみの
片隅に蟲齒かゝへて暮の月　乙州
○轡の字ちかき事。

はいかい集
御明しは消えて夜寒や轡蟲　探志
轡をすかす赤銅の鍔　同
○時雨の句二つ出でし事。

桃の白み
見歸れば家根に日の照る村時雨　濁子
初しぐれ六里の松を傳ひ來て　芭蕉
○年の字二去に出でし事。

はいかい集
亂より後はしらぬ年號　芭蕉
此石の上を浮世に年とりて
○漢名の句二つ出でし事。

俳諧集
膝琴に朋の風雅を忘れざる　清風
唐の文よめぬ所は打ちやりて　曾良

續みなし栗
鱸停止で逆る漢舟　[illegible]
堺の錦蜀を洗へる　嵐雪
○茶の字二つ出でし事。

別座敷
よき雨間につくる茶俵　八桑
屆徒衆の御茶屋の花にさゞめきて　桃隣

○神の字二つ出でし事。

はいかい集

神役に雁のありく注連のうち　益光

短尺のこすがきの春　越人

○赤の字四句去。

同集

塀の覆に赤き梅散る　嚋止

はら〳〵と山田の早苗赤らみて　車庸

○書體打越に出でし事。

雪丸け

物書くたびに削る松の木　一榮

集に遊女の名を留むる月　芭蕉

○かぶるといふ句三つ出でし事。

俳諧集

年を忘れて衾かぶりぬ　此筋

月寒く頭巾あぶりてかぶる也　文鳥

烏帽子かぶらぬ髪も薄くて　如行

○旅の字ちかく出でし事。

俳諧集

月見歩行きし旅の約束　百之

旅から旅へ思ひ立ちぬる　同

○蚊の字二つ出でし事。

同集

雨の曇りに晝蚊寝させぬ　芭蕉

あつさに弱る水無月の蚊や　尚白

○顔の字二つ出でし事。

同集

月見する座に美しき顔もなし　芭蕉

ものよくしやべるいばらしの顔　尚白

○衣と云ふ句三つ出でし事。

同集

腕押強き露の衣手　槐市

手習の衣を砧に打たせけり　ばせを

狩衣下知の烏帽子を傾けて　梅額

○過去のし附句に成る事。

同集

奈良の小禰宜も宿に下りし　ばせを

挑燈をともせと云ひし鐘の聲　同

○現在のし打越に出づる事。

山中集

蓮の糸取るも中々罪深し　曾良

有明の祭りの上座頑し　北枝

○女の字二つ出でし事。

同集

遊女四五人田舍渡らひ　曾良

細長き仙女が姿たをやかに　芭蕉

○寺の字二つ出でし事。

同集

あられふる左りの山は菅の寺　北枝

寺に使を立つる口上　同

○眼病の句二句去に在る事。

はいかい集

泪で顔をよごす目ぐすり　ばせを

杖で打つ座頭が砧上手也　嵐雪

○成の字打こしに出でし事。

員外

木鋏にあかるく成りし松の枝　胡及

此としに成つて灸の跡もなし　一井

○刀の句二句出でし事。

深川集

露に朽ちけん一腰の錆　支梁

太刀持ばかり二心なき　洒堂

○町の字五句去に出でし事。

續さるみの

相宿とあと先に立つ矢木の町　支考

蟲籠釣る四條の角の河原町　惟然

○縄の字二つ出でし事。

ひさご

小唄そろふる碓の繩　探志
繩を集むる寺の上茨　及肩

○寒と云ふ詞三ケ所出でし事。

ひさご

鶯の寒い聲にて鳴出し　二嘯
まだ上京もみゆる良寒　及肩
撰りあまされて寒きあけぼの　探志

○發聲の句打越。

同集

小六うたひし市の歸るさ　珍碩
念佛申してをがむみづがき　路通

○居所打こし。

猿蓑集

待人いれし小御門の鍵　去來
湯殿は竹の簀子わびしき　芭蕉

○植物打こし。

續みなし栗

明暮に干潟の松をかぞへつゝ　擧白
葬や石踏坂の日にしをれ　至峰

○濁り文字付句に成る事。

はいかい集

手一つでひとむらなかの恩も着ず　路通
ちつとの事で枝ぶしが付く　安世

○たる打こしに成る事。

深川集

笠縫の里とみえたる竹の皮　曲水
待宵の身をもだえたる四つの鐘　洒堂

格外辨終

葛の松原

野盤子支考述

潜淵庵不玉撰

○冬の雪の寒からむ事をしれる人も、あらかじめ水無月の衣を重ねむとにはあらねど、網にかゝる鳥のたかく飛ばざるをうらみ、鈎をふくむ魚の、うゑをしのびざる事をかなしむ。そのまゞひふかくおもはざるの源ちかし、世の風雅に志しをよする人も、萬分が一もなかるべからす、是故に支考が隨聞をしるして、東の人の記念にはつたへ侍る。

○芭蕉庵の叟、一日嗒焉としてうれふ。曰く、風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風に臨めるがごとし、一回は皂狗となり一回は白衣となつて、共にとゞまれる處をしらず、かならず中間の一理あるべしとて、春を武江の北に閉ぢ給へば、又靜かにして鳩の聲ふかく、風やはらかにして花の落つる事おそし。彌生も名殘りをしき頃にやありけむ、蛙の水に落つる音しば〳〵ならねば、言外の風情この筋にうかびて、蛙飛込む水の音といへる七五は得給へりけり。晋子が傍に侍りて、山吹といふ五文字を冠むらしめむかとおよづけ侍るに、唯古池とはさだまりぬ。しばらく論レ之、山吹といふ五文字は、風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は、質素にして實也。實は古今の貫道なればならし。されど、華實のふたつはその時にのぞめる物ならし。柿本人丸の、ひとりかもねむと讀める歌は、かばかりにてやみなむも拙なし。定家の卿も、この筋にあそび給ふとは聞き侍りし也。しかるを、山吹のうれしき五文字を捨てゝ、唯古池となし給へる心こそあきからね。頓阿法師は、風月の情に過ぎたりとて、兼好、淨辨の諫め

給へるとかや、誠に殊勝の友なり。
○そも／＼風雅は、なにの爲めにするといふ事ぞや、孔子の三百篇は草木鳥獸のいぶかしき物をしらしめ、倭には三十一字をつらねて、上下の情にいたらしむ。その詩歌にもらしぬる草木鳥獸の名をさして、高下を形容せむものは、いまの風雅これなるべし。しかるに、俳諧といふ文字は、史には不根の持論といへりければ、諧の言は吾れしらず、この頃その名をあらためむ事を阿叟に申し待れば、古今集に已に俳諧の名を立てたり。いまの着これをせむ事よからず、是故に韓子が晝寢も魯論はけづらず、華嚴の犬瑠璃も、その奥にしるしたり。俳諧は世の變相にして、風雅は志しの行きどころなりと、吾がともがら是なからむや。
○いにしへの俳諧は如來禪のごとく、その理一貫して線のごとし。いまの風雅は祖師禪の如く、捺着すれば即ち轉ず。かならずしも理智にかゝはらねば、寸心かけずといへるたぐひなるべし。
○俳諧に古人なしといふ事を、ばせを庵の叟つねになげき申されしが。
○世の風雅にあそぶ者も、月花とさへいへばやさしとは思ふらめど、なにがしの卿の「我が中はこもつちこしの一もじりもじりやすらむ逢ふかひもなし。と連ね給へるは、もじりやすらむといふ七文字にて、歌にはなり侍りしと覺えしが、老杜は呼ㇾ兒向ニ羹魚一ともいへり。古人の語意を用ふる事、一字半言もたやすからず、いかに面しろきとて、辭いやしく姿もくだ／＼敷くいひ出でたらむは、貴人公子に寵せらるゝ、辨利のものゝたぐひなるべし。
○晋子も鐵炮といふ名のいひ難しとて、千々にこころはくだきける也。同じ集に品かはるといふ戀の論は、微細のところ、かくぞ心をとゞめけむ。殊勝の心ざし、いとうらやまし。晋子が語路おほ

むね酒盃に渡れりといふ人あるに、宋の泊宅編には、白氏が三千八百言、飲酒の詩九百首なりと答へ侍るといへど、晋子が性、人にまぎれねば、樂天が飲酒はなほかぎり有りけりとて、用の事かたづけ侍りぬ。

○風雅の片はしを心得たるもの、たま〳〵名家の一まきを見て、始終の變作をかへりみず、此句はをかしからず、その句は味なしなどいふめれど、一まきをつらぬる事、あながちに一句の上を不レ論。一たびは雨となし一たびは雲となして、中品の眼をとゞめむ事をおそる、轉換變化刹の如し。誰れか情實の中にあそばむ。

○この頃一般の才人、おそろしき詞をこのみ、針灸秘訣の諺を、珍らしといひ出でたるに、しらぬものはしらず、しるものはいかにあさましとはおもふらめ、たとへば、田舍人の卒都婆を橋に渡せるがごとし、なき人の罪障懺悔なれば、その理はあしからねど、ふむ人うれしとやはおもふ。唐の李之藩は、「夜深枕二髑髏一」といふ句をさへ、後には削り侍りしとかや。

○いさゝかなる事にも心をとゞめねば、あやしきにや、人夜半にふして火をも消し、隣りもしづまりけれど、なほ寢いらで居るとき、おのれが眼をひらきぬるや、閉ぢぬるやといふをしらず、これらはむつかしき事ならねど、心づきなき故なり。春草秋鳥の名字をも、旅したる人にきゝつたへ、訓蒙圖彙にて見しりたらむ、いかばかりおぼつかなし。小なぎさいたつまといふ物を、うれしく聞き侍ると、ある人は仰せられしぞかし。

○いづれの年の夏ならむ「みな月はふくびやうやみの暑さ哉といふ句を、人の得しらざりけむは、源氏のまき〳〵に心を留めねば、さも有るべし、山路に菫とつゞけ申されしを、ある人おぼつかなしと難じけるは、有房卿の「はこねやま薄むらさ

きのつぼすみれといへる歌を、不幸にして見ざりけむ人の心こそ、おぼつかなけれ、たま〳〵の旅にも、あらぬまでに酒のみ、馬上にはねぶり行くらむいとあさまし。

○一とせの秋「蔦の葉は茶をのむ人をなぐさめてといへる第三を、湖南の珍碩はいかにきくらんと文して問ひ侍るに、花紅葉ならば酒をこそ飲むべけれと答へたれば、偖はおのれも皮骨は得ぬるをと、阿叟もにくみ申されし也。支考が東行の頃、風雅はいかにし侍らんととふ人あれば、先づこの第三を明かにし給へといふに、よき人はよく、あしき人はかの叟の口僻にて、また寂寞をやられけるよと、平呑に逢ひたるはいと口をし。

鎌倉を生きて出でけむ初鰹

五月雨にかくれぬ物やせたのはし

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

詩歌に名所を用ふる事たやすからじ、かまくらの

初鰹は、支考が東より歸りけるとき、かゝる事ありとて見せ申されしを、生きて出づるといふに鎌倉の五文字、又其外あるべくとも承はらずと申したれば。うれ敷くきゝ侍るとて阿叟もにくみ申されしが、みづからも微幸にいひ明しぬらむ、つらつら思へば、生死のさかひを以て出入せむに、かまくら六波羅の外殊に有るべからず。しばらく風雅にあそぶ人も、いきて鎌くらを出でし鰹の、いまは武江の薄しほとなりけるよと、世の觀想にのみ眼をとゞむる事、此句ばかりにも限るまじ。五月雨の增すぞまさぬぞといへる處、もろこしには五湖あり、倭には一二にも過ぐべからず、しからば勢多といへるものは、古今の模楷ともなるべし。むかしより文章には、結前生後の詞といへる事は、今の若菜のはたらける物ならむか、天心をこゝになやまさんとにはあらねど、句をつくるの法、おほむね角のごとし、さるを未練の人は初め

より深からしめんとして、果は一應の理もきこえずなりぬ。一生をこゝにあやまらざれや。

　角文字やいせの野がひの花薄　其角

阿叟ははじめて結前生後の詞を用ひ、晋子ははじめていの字の風流を盡す。古今俳諧のまくらならむと、よき人も申され侍りじよし。

　蚊柱に夢の浮はしかゝる也　同

定家の卿の、夢のうき橋はとだえてひさしくなりぬればと、晋子も自讃申しつるが、かゝる事人のいふべき口質にもあらず、天縱の風骨、念想の外に志しを得たり。しかるを左右の趣きをとらへ、世人の口意にきさだてる事は、芭蕉庵の叟なるべしと、よき人も仰せられしが、つねのこゝろ誠にかたし。

　秬の葉や檐にかげろふ玉祭　珍碩

　降る雪に淡路は夢の心地也　支考

夢ともなくうつゝともなき無心所着の觀想、かばしらの如き物あらば、千載の莊子をまつといへるならむ。

○趣向は古き事がらを、附けどころあたらしく、句つくりめづらしうしたらむぞ、不變の正道とは承はりしを、珍らしき事のあしゝといふにはあらねど、人のこゝろはつねに變を好むなれば、いかなる道にかたゞよひ侍らむと、よき人はかなしみ給へり。

○每レ句めづらしき名目をこのむは、中分以下の作なるべし。何となくいひ出づる句にも、いさゝかなるところにたのしみはある物を、風情のあらきものはいかにし侍らむ、釣髭はいやしきさまなれば、句にはなり難きを、しらがの交るといへば公達の後見などの、物々敷きやうにきこゆと承まはりしが、伽羅といふ名のいかにあさましきぞや、なにがしのおのこの「葵の花のひらく石臺とせしを、苔むとなほし侍るが、いさゝかの樂しみなら

むか。
○月花にかぎらず、春秋の季を結ばむに、その季をさきに工夫せば、あたらしき趣向なかるべし、唯平生の心にて當季に後にくはへたるがよしと承まはりし也。曲水、歳旦の第三には「お葛籠に花の端綱のすゑ振りてといふは、葛籠より趣向は起りて、花は末後の一決ならし、鳥獣草木の用をいひつゞけたる、おほくはあさまし。

三味線や芳野の山を五月雨　曲水

此句は人のしるまじき風情なり。なにがしのおのこならむ、いとなまめかしきながら、猶戀にはおぼつかなくて、ひとり寝がちなる閨の中に、東坡が九相の圖など掛けたらむぞ、五月雨の動かざる夕部なるべし。
○發句はなるべきとなるまじきを見る事、第一の工夫なるべし。

辛崎の松は花よりおぼろにて

此句錦をきてよる行く人のごとし。好悪はその人ぞしり給ふらめ、たま〳〵起定轉合の四格をしれる人も、第三のとまりは、なに故に文字のさだまるといふ事をしらねば、一生を反魂の烟りの中にかげろふ。かなしむべき風雅の罪人ならむ。此の句花の字なからましかばしらず。
○洛の和及法師は、牢人やといへる五文字にて一生をあやまたれけれど、幾年湖南の叟をしたひ、前の秋ならむ、心ざしをとげられしぞたふとき、かの法師のつねには申し侍りしとかや、世の風雅もあさましくなり行けば、流水飛禽の情にもいたらず。湖南の叟をつみせむ事、行脚の冥恩もいとおそろしと、むべなり西行上人の「さかひに立てる玉の小柳とよめるは、みづからこそ能くはしり給ふらめ。

鳳來寺

夜着ひとつ祈り出して旅寝かな

草臥れて宿かる頃やふぢの花

かゝる有さまの人こそ、むかしもありしとはおもひしらめ。

ほとゝぎす啼くや五尺の菖草

鶯や餅に糞する縁のさき

かの僧の和及は、かゝる事きかずなりぬるぞ、今は戀しき人の數なり。

○杜國は心ざしのをのこなるよし、阿叟も忌じおぼえ申されし。

○今はあさましき世なりけらし。詩歌にはおのれが文字を用ひ、風雅には人の詞をぬすむ。前後のたがひ是非なし。

○集などはよのつねの文字を用ふべし。いくつも文字をおしまげたるなど、ちりばむる者もいかにくるしからむ。なにがしの文集には、古人の學びざる文字の形容、あまた侍るやうに覺えしが、莊子の帶などの尾につける心地せり。

○詞をつくらひやさしくせむとする人は、精進をいもいといひ、客人をまろうどゝいふ。その風流なきにしもあらねど、果は合類節用を見る心地ぞせめ。

○林下何曾見二一人一といふ詩は、何曾の二字なほ有るべしと評せり。然るに老杜が秋興の詩には、野航恰受兩三人といへり、何曾の疎そかなる、恰受の不可思議なる。詩をも心得たき風雅なり。張籍が賈島に逢へる詩は、一二三の風情までは、和歌にもつらねけめど、馬蹄今去入二誰家一といふ處までを、いかで盡し侍らむ。されば文はとぼしからぬもの也。

○おの字はいやしき詞なるを「どし織の帶うつくしく腸とめて「古き小判のいづるお屋敷といへる類ひ、「お僧の鉢を所望して見るとも申し侍りき、ての字をにごりて用ふる事は、歌にはあまた侍れど。外の言葉艶なれば、さのみ見ぐるしからず。

○この頃人々のおもひけむやうに、世にいはれぬといふ言葉はなけれど、麥門冬は中心をさらざれば人をなやまし、かい餅も飯とつゞけぬれば又なつかし。

○晋子が「宿札にかなつけしたるとはれ顔といへるは、下の五文字にてよくしづめたりと、阿叟もつねに申され侍りしが。

出がはりといふ詞は、養父入にはおとりていやしかりしを、

出がはりや幼ごゝろに物あはれ　嵐雪

嵐雪が幼の一字にて、人に數行の涙をゆづりける也。たとへば、馬上の敦盛を繪がきぬるに、甲の見入りはたちばかりならむに、頰の程より纔にまへ髮のさきを見せぬれば、やがて二八の美少年とは見ゆる物を、こゝろへたきあひしらひ也。

○世に切字の發句といふ事あるべし。

酒のめばいとゞねられね夜の雪

○一句の姿たしかならぬは、趣向のなき事を口先にてまぎらかしたる故なりと、晋子が導き侍る。大切の事なり、おもへば、

「簾中に袴を蹴こむといふ句は、聲にとなへたるがおもしろし、一とせ堅田の會席に「みぼそき太刀のそる方を見よ「長緣に銀かはらけを打ちくだきといへるは、銀の一字殊に奇特なるべし。

蜻蜓のゆきゝ隙なき薄かな　大坂 車庸

雉子啼く宇治の茶の木の覆哉　昌房

「あか〳〵と日はつれなくも秋の風と、無念想の間よりいづるは、三生の薰修なるべければ、朝暮のあらゝかならぬ形容、おの〳〵其地をさらず。

沙原に吹きあげられし海鼠かな　如行

如行はよづかぬをのこなれば、かの魚のたゞよへるも、世の外ならずと見侍りけむ。

煤はらひいらざる物は打ちくだけ　枳風

煤はきやなにをひとつも捨てられず　支考

おなじ年の暮ならむ。武洛の雲水をへだてゝ、かりそめの取捨はありけめど、志しのかなふところ異ならず、黄連は苦しといへるを、あまからずとあらそはむも、この道におかば辨利なるべし。

帷子を洗はずにやる名殘りかな　正　秀

正秀が性は荒し、かゝる微細の風情にあまりて、曾良が大和路の歸路をとゞめかね、角はおくり申されしとかや「猪に吹きかへされしともしかなといひ得て、肌たはまざるは、その人のいける風情なるを「薪ともならで朽ちぬる案山子かなといへるは、風雅の用處あさからずと、阿叟もうなづき申されしよし。

ばせを葉はなにになれとや秋の風　路　通

一生の風雅をこの中にぞとゞめ申されけむ。一とせ「初雪に根太のいたむといふ事を結びたるに、卯の花の頃こそさも覺えぬべけれと、珍碩が申したれば、阿叟もをかしがり申されしよし、物と我れと此情有るべし。

水無月や鯛はあれども鹽くぢら

みな月のしほ鯨といふものは、清少納言もえしらざりけむ、いとめづらし。風情の動かざる所は、みづからしり、みづから悟るの道ならむかし。

鐵炮の遠音に曇る卯月かな　野　徑

かゝるときは、はり物の簇に目あぶなく、鋸の目立つるに心おかれて、洒落堂が卯の花の根太もをかしとおぼえ侍れば、發句はおの／＼そのところあるべし。

○住吉の神送

松ばらや神も名殘のきり／＼す　大坂 之道
塀こぼつ路の寒さや冬椿　游　刀
姥どものあそび處や桐の花　ミノ 荊　口
板ぶきや秋の小鳥のありく音　亡人 落　梧
箒におひぬかれたる槙木かな　探　志
草刈の子は一握り野菊かな　羽州 不　玉

蘿草を呼込む頃やむら時雨　露川
かむこ鳥啼くや蛙の目かり時　珍碩
出女やすこし時雨てぬり木履　同
桃の花や雛に似たる人も來ず　乙州

阿叟北國日和さだめなしといへる次の年ならむ。

八重葎一しめ寒しけふの月　羽黒 呂丸
高灯籠晝はものうき柱かな　千那
夕立や川おひあぐる裸むま　正秀
團栗やうさきも共に霜崩　同
行く秋の四五日よわる薄かな　丈草

木曾塚に旅寢せし頃。

木曾殿と背あはする夜寒哉　いせ 又玄
散る花や跡はあみだの爪はじき　楚江
夏菊や藥とならむ床のうへ　智月
振りほどく藁の明りや野邊の霜　ミノ 闇如
煤はきや座右の銘はめぐらずと　同 夕可

娘追善

草茂る石をいつまで蟬の聲　ミノ 均水
馬の耳すぼめて寒し梨の花　支考

風陽が小弟、風雅に心ざしあるをよみし、進擧の觧作りて。

油斷してくゐなに扉たゝかるな　同
青柴や食の吹きたつ冬籠り　昌房
稻妻や蜆から燒く野の匂ひ　臥高
柴船にこがれてとまる螢かな　其角
蟬啼くや木のぼりしたる團扇賣　同
初秋や篠葉吹散るさばき髮　木枝
さびはてゝ鮎くたびれつ水の淀　如行
唐秬の葉をたぐり行く月見哉　堅田 成秀
菜の花や小屋よりいづる渡し守　史邦
ついて來て犬もつくばふ涼みかな　竹戸
蠅ならぶはや初秋の朝日かな　野童
山吹や水にひたせるゑまし麥　素牛

一まはり待人おそきをどりかな　尙白

骨をりや闇のさつきを行く螢　里東

五文字の大へい又あるべしとも覺えず、作者も行の一字にて、螢火一點の無明をのこされけむ。いといぶかし。

青草や爼板におく夏茗荷　臥高

かゝる風情はしる人もあまた侍らねど、少年よりこの道にあそびて、口をしく喰ひならひたる唐がらしと、まぐれ出でたるひら句は、さかりの人のえもすまじき發句ならむか、

松笠にしがみつきたる日雀かな　鴃鴿

なにがし寺の小僧なりしが、念誦禮讃にもいとまをしき身の、風雅にもこゝろあわたゞしく、かゝる目前の境界をいひ出でたる胸中、そこばくの知解もあるまじ。

○附句は附くと附かざるとを論ずといへども「松葉のごみに煮ゆる鍋ぶたといひ「如意輪の像の頰杖もうきといふ句は、なまじいなる前句をきかむより、此句ばかりがおもしろきぞかし。句ごとに季のなき發句をするとおもへと申されしかど、未練のともがらのあさはかにおもひ侍らむか。

○世に景氣附、こゝろ附といふ事は侍れど、

○走　敵よせ來たるむら松の音
　有明の梨打ゑぼし着たりけり

○響　夜明の雉子は山か麓か
　五む十し何ならはしの春の風

○馨　稻の葉のびの力なき風
　發心の初めに越ゆる鈴鹿やま

無所住心のところより附けきたらば、百年の後、無心の道人あつて、誠によしといはむ、いとうれしからずや、

○一句のしたて結ぶはわるしと承まはれど、未熟のまどふべき事也「月くらき麓は馬の口とりてといふ第三を支考が申し侍りたるに、くらきといふ

はむすびにて、一句のさまけだかならずとて、有明とはあらたまり侍りき。

○こゝらのたのしみは句ごとに有るべき事也。

　麥からの家してやらむ雨蛙　智月

　態とさへ見に行く旅を富士の雪　同

大津の禪尼、その子乙州が東武の行を送れるとかや、人の親のまどへるみなかみは深かりけめど、初めは少をあはれむの恩愛にして、次は子をいましむるの義方なり。世の人おのれが子をそだつる時は、恩愛の道深ければ、むつかしとも覺えじ、その人他家にあるとき、いとけなき子の起居に心配りせしを見ては、おのれがおやもかゝりけむ物をと、母の敎いとたふとまれぬべし。

　世はこれぞ薺はあすをたくはへず　己百

かゝる深長の處は、ひさしくとゞまるべき地にあらねば、いまはその人も「薄々と底のまるみや三日の月といへる處にぞあそぶらむ。

　乳麪の下たきたつる夜寒哉

是は曲水亭にて、夜寒といへる題の發句也。さるを大和の國、みわの麓に旅寢の頃、此句申されしよし、都の方より吾妻路に聞ゆとて、人々のもてはやしける也。さばかりのたがひは、此句ばかりにもかぎるまじければ、阿叟の名望をいやがり申されしは、金の源三が撰集はづれたるたぐひにはあらじを。

　白桃や雫もおちず水の色　桃隣

緋桃は火のごとくならねど、白桃はながるゝにちかゝるべし、ひさしく薪水の勞をたすけて、此句の入處あさからずと、阿叟もおきあがり申されし也。

　此わすれながるゝ年の淀ならむ

　名月や池をめぐりて夜もすがら

必とする事なきは、素堂亭の年わすれにして、固とせざるは芭蕉庵の月見なるべし。

○風雅は一句のしたつる所風流なるべし。たとへ意は害すべくとも、詞は破るべからず「いまやひくらむ望月の駒と讀めるは、まさしくそのたぐひなるにや、今の人この間をさとらず、他まで姿のくだけぬるをさへ、一句の意味淺からずといふ。あさまし。

　かゝり寢せん味方が原の女郎花　史邦

○馬上に鞭を横たへて吟ずる人は、今の世にはあまた侍らじを、味方が原のかゝり寢せんといへる、此郎の風流ならずや、阿叟もあしからずとゆるされ、左右十八につがひ申されしを、深く武具の櫃にをさめける也。かの處に名をとゞめけむ、草のゆかりにも幾秋の手向とはならまし。

　木枯の地まで落さぬ時雨哉　去來

尾の荷兮が「木がらしに二日の月のふきちるかと申し侍るは、今の時雨にはつのりけむ物をと、みづから恥ぢ申されしを、阿叟はさもおぼえず、他は二日の月に心をとゞめたれば、時雨は古今に變ぜざる姿ならむ、されど迄といへる文字は未練の叮嚀なれば、唯地にも落さぬと有るべきよし、いつやら申され侍りしとかや。

　をとゝひはあの山越えつ花ざかり　去來

此句三四年もはやかるべしと、阿叟も申され侍りしよし、今は四とせばかりにもなりぬらむ。なつかしき君子もあれや吁。

○風雅は世になきにしもあらねど、萬分が中も唯師なし。聖人の桴にのらむと仰せられしも、天地の外にもあるまじければ、但歎息の餘音なるべしと申したれば、阿叟はいましめ申されき。

○よき人の風雅の沙汰仰せられむに、さかしきもの、己れがいとなみの理にもかなひぬるといふはよからず、況んや句作りなどなほし給はむに、聊かこゝろゆかぬ所ありとて、又あらため給ふ時、句のあるじさしのぞきて、おのれも心得侍らざり

しが、このたびはめでたくさぶらふといふは、はじめはいかにしのぶらんと、よろづに心づかひせられ。

○さりぬべき人々の會にも、句の所を爭そひ、月花の座をねつらふ事、いかにあさましきや、人その位にあらましかば、などおのれが心にも叶はざるべきや、物はかならずおくれよと、古風の老子も申され侍りしを、かゝる事風雅の上のみにもかぎらじ。

○今の人は所謂風月の情に過ぎたれば、明暮のはなしにも、素言は聞きもいれねば、あらぬ人の名によそへ、いさゝかのくまをあらせむと思ふは、つねの心おだやかならじ、さる人の交はりあはからねば、終に美食の病ひいえずなりぬ。

○居常の消息にも、妓童舞女の隠語をまじへたれば、己れよく讀みあげたるいとあさまし、さる文もやるべき所あるにぞありけれ。

○風雅は道の階梯なれば、内は肝膽の理にわたらず、外は人物の情に達すべけれど、おのれ風雅を墻にして、世の利要におよがむとするものは、箇の中の論にあづからじ、かゝる多口の是非など、阿叟はつねにいみ申されしかど、若しあるまじくば、吾れひとりつみせられて、阿鼻の口業にしづみなむと、於㆓圖司之澗柏堂㆒而絶㆑筆。

元祿壬申五月十五日

東行餞別。

此こゝろ推せよ花に五器一具　芭蕉

吾聞く。以㆑財おくるものは、君子の人のしのびざる所なるを、今やわかれむとするとき、わすれず炙せよなどいへる人をさへ、うれしく覺ゆるものなり。しらずこの別れこゝろいかむぞや、たとへ推し得て十成なるも、奈古曾の關の名こそつらからめやは。

支考

「もゝすぢりゆがみてふさむ花の陰

白河の關に見かへれいかのぼり　其角

片方はわが眼なり春霞　桃隣

釋支考奥羽の間を經て、岩城にも行脚すべきよし聞えければ。

年經ても味をわするな岩城海苔　露沾

葛の松原終

月雪の水にうつるや、花鳥の壁に畫けるや、山河萬里を摸しては、人をしてよろこばしめずといふことなし。こゝに我師蓼太老人、敢て辯を好むにはあらねども、我が問ふまゝに答へて便々と言泉流れて懸河に及ぶ、我れこの流れに隨うて、一管を執りて發句の風姿をうつし、見るべき鏡をなん探り出せり。此みちに遊ぶ輩や、是に向うて襟を正し己れを磨くものならば、畫中より龍をも生じつべく、若しうつす事もなく、正すこともなくば、鹿をも犬をも人とやはみむ。かしこくも我黨の人々は、この鏡を開きてちりを拂ひ、光りを清めば、彼の膽を照して、其の病を見るが如くなるべしやとしかいふ。

天明七年未季春　　雪　太　郎　三　駱

俳諧發句小鑑

目　錄

俳諧發句小鑑

雪中庵蓼太述
門人　三駱著

發句案じ方の事

一翁云く。發句案ずるには、先づ題に結ばむと思ふものを、胸中に畫きて見るべし。繪は鏡にものの移るがごとく、或ひは梅に社頭、あるひは櫻に寺院とも、姿あきらか也。是を鏡花水月の案じ方といふなり。蓼太曾て南總の浦づたひせしことあり。頃しも暮秋にして、山の姿、浦の景色すさまじかりければ、

秋風や碇もなびくもの〻數

といへる句を得たり。みちのほど一里ばかり行くに、此句言盡したりと、

あきかぜや碇もなびく花薄

斯く再案したればさせる句にはあらねども、捨碇に一むら薄の墨繪となりて、浦山の風情言外に見えたり。只句は言盡すまじきものなり。

又雁を畫くには、飛、鳴、宿、食の四格ありとて、たま〳〵心得たる畫師の、飛ぶ所、鳴くところ、宿りたる所、あさる處ひとつ〳〵書盡したる、何を見所とせむや。

先づあさる蘆邊の友にさそはれて
空ゆく雁も亦くだるなり

かく四つの物を二つ殘したらむには、茂りたる蘆の蔭に求食るも宿るもあるべし、上手の畫は、畫外に畫在り、上手の詩歌は、言外に風情を備ふ。是を思ふべし。

趣向をとる事

一或やごとなき方の仰せられしは、先づ戀の題を

得て歌詠まむとおもふには、我が戀する人をひとりむかふに立てゝ、其人に深く思ひ入りて、逢ふ戀、あはざる戀、或は忍ぶ戀にもせよ實によむべし。題とおもふべからずと教へ給ひぬ。誠にありがたきことなり。

忍ぶ戀

夏痩と人にこたへるなみだ哉

斯く題中に向うて、趣をとるを趣向とは申す也。

句に理窟をぬく事

一發句は理窟より案ずべからず。理窟は勿論也。古人句に繪をもてをしへ給ふは、理窟を拔きて、自然の風姿にうつさんがため也。むかしある初學の人、

刈残すあやめは水の深み哉

其角に見せて、是にても先生の添削にて發句に成り候はんやと、角頓て筆を取りて、

刈のこす菖蒲は鷺の深み哉

されば、鷺の一字を以つて、忽ち沼の眞菰の水越して、此鳥の求食りかねたる風情あり。工拙はおいていはず、發句にはなりたるべし、是を死活の句法といふ也。又理窟の句とは、

蠅を追ふ馬にあぶなき眠り哉

茸狩や少しは蛇に心おく

晝寢して手の動きやむ團扇哉

此たぐひ、みな尤にして發句とはいふべからず。

初の字の冠りの事

一先師云く。近來の初雪、初櫻、初雁のたぐひの句を見るに、皆初の字の理窟にして、少なき事を專らにいひ、題意より出でたる風姿まれ〴〵也。

此江戸に只二本とや初鰹

はつ雪や木賊の節に少しづゝ

はつ雪や山へ配れば野にたらず

是等の句、一作備へたれど例の少なき事をいひて、初の字の理窟を離れず。

鎌くらは生きて出でけむ初松魚
はつ雪や内に居さうな人は誰れ
初雁やおのづから目の覺め時分

是古人の佳境也。何れも自然に初の字を得たり。深く味はうてこゝに至るべし。先づ初の字は、其題の賞語なりと知る時は、理窟をはなるべし。

色字の事

一袋草帋に。紀齊名と江以言名を等しうす。嘗て同省賦を奉るに、秋未レ出二詩境一といふ事を賦す。齊名が詩に

霜花後發詞林曉　風葉前駈筆驛程

以言が詩に

文峰案轡駒過影　詞海艤舟葉落聲

具平親王ひそかに其の草稿を見て、駒過影を以て白駒影となし、葉落聲を改めて紅葉聲となして、兩韵並び出づるに及びて、人皆以言が詩を以て勝りたりとす、斯の如く、色字に句の秀でたることをしるべし。

五色

竹青し木青しひとり閑呼鳥
ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音
紅梅や見ぬ戀作る玉すだれ
白雪の中に火とぼす野寺哉
黑きものまた常盤也はつ鳥

丁寧の事

凩の地にも落さぬ時雨哉
晝顔や砂に鰯の反返り

初めの句は地まで落さぬとありしを、翁の添削にてにもと直りて句勢格別也。後の吟は、初め干鰯と句作せしを、嵐雪呵りてなど鰯とせざると筆を

入れられて、一句のぬしとなれり。誠に丁寧は君が徳を指す。

手爾葉違ひの事。

繋げとて心の駒に炬燵哉

風の柳の讃。

吹けばとて柳を虎の姿哉

はじめの句は予が句也。若かりし時吟ず、師手爾葉違ひの由を示し玉ふといへども、さも覺えず、ほど經て漸う合點まゐりたり。繋げとて心の駒に炬燵をやとか、又置ごたつとせば佳ならむ、後の句、柳を虎の姿とはとせば居わるべし。

虚空の何につかへて柳かな

何人の尸埋めて花野かな

初めの句雲につかへて柳哉、或ひは何につかへてたれ柳ともせば、一句落着して居わる也。其次の句は、尸埋めて花野原とせば佳也。又沓の景物を定めて、をみなへし萩の花ともせば居わるべし。

或人の云ふ。ばせをの句に、

何の木の花とはしらず匂ひ哉

此句も何と置きて哉と留めたり、何のかはりめありて留まるや、答へ、此句は何の木の花とはしらねども、扨もうづ高き匂ひかなといふ心なれば、別して哉居わる也。伊勢神法樂の趣味見るべし。

何ごとのおはしますかはしらねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

西行上人參宮のとき詠める秀歌也。この歌の心をとりたる發句也。

一字褒貶の事。

おもしろうて頓て悲しき鵜舟哉

冬牡丹鵆よ雪のほとゝぎす

初めの句を翁初案に、果は悲しきとし給ひしを、後に頓てと置きかへ給ふとぞ　蓼太曾て長良の鵜

飼一見せしに、七艘のうぶね、遙かの山陰より遣ひ出でたるありさま、篝火稲葉山に映じ、げに罪もむくいも忘れはて丶、おもしろしとみるほどこそあれ、鵜飼どもの、勞れたる鳥を引きあげ〱咽を絞る風情、叫喚の責めを見る心地せられて、頓て悲しきの七文字玄妙也。果はといふは手ぬるからん、唯眼前に地獄をみるが如し。冬牡丹の句は千鳥よといふ所、やとも動くやうに心えたりしが、つく〲句意を探れば、よの一字ならではかなふべからず。此鳥を雪中の時鳥と譽めたる句なれば、衛よ汝は雪の蜀魂と、一字入れて聞く時は句意あきらかにして玄妙也。仍つて一字の褒貶とはいふ也。

放題の事。

一放題とは、譬へば梅の句の櫻にうごき、さくらの句の海棠にもなるをいふなり。發句は其のものものに他に動かざるをよしとす。彼の雷電の謠に菅丞相本尊の御前に手向たる、柘榴をおつとつて噛碎き、妻戸にはつとはきかけ給へば、柘榴たちまち火焔と成りて、扉にぱつとぞ燃えあがるとあり。諷ひものながら、手向もの丶風姿をよく定めたり。此時の菓、柿、葡萄、りんごにもせよ、中中火焔とはならず、柘榴の外あるべからず、是を思ふべし。

乞食帒の事。

一此一條は俳諧をせん人、强ひて學問にも寄らず、飛花、落葉、人の善惡、天地の盛衰、旅の哀れ、萬事を拾ひ入れて置く事也。

出羽の國尾花澤にて。

涼しさを我宿にしてねまる也

巣白集、はじめて吾妻へ行きける道の記に、しどけなきことゞも語りて、今しばしねまりまうす

べいを、某が旦那のえらまからむとて立ちぬとあり。すべて關東の田舍にて、ゆる／＼と居わるといふことを、ねまると云ふ也。

初霜に何とおよるぞ舟のうち

能狂言靭猿の歌行に、舟の中には何とおよるぞ苫を敷寢の楫まくら、あたなを見よやれ船のせがいに、つゝ立ちあがりてと有り。

五位六位色こきませよ靑簾

源氏若むらさきの中に、見もしらぬ四位五位のこき交せに出入りつゝと有り。

荒海のいかれる時か亂れをこ

はゝきゞ雨夜の品さだめに、あら海のいかれる魚の姿、唐國のはげしき獸とあり、皆これらの乞食俗也。

古瀨の新水の事。

一此一條は行く水の流れは絕えずして、しかももとの水にあらず、句は唯此心して、言葉古く心新しく案ずべしとなり。譬へば、子規の音の珍らしとは、千載の人情なるを、

聞くたびに珍らしければ郭公
いつもはつ音のこゝちこそすれ

言葉は古き事をあつめたれど、いつも初音といふ所にあたらしみをして、感動なさしむ。されば、初音の僧正と今の世までも言傳へるは、三井寺永緣僧正の事にぞ侍る。又この歌の甘味をなめて、

ほとゝぎすくり返しては初音哉

十日には十の初音や時鳥

などいへる句の折り／＼聞え侍れど、みな此僧正の糟粕をなめてとる所なし。かゝる境の捨てがたきを、大津の尙白、

是は又あまり雲井の蜀魂

とは俳諧の一體にして、詩歌のねばりををどり出でたりといふべし。

撓めの事。

旅にて人に別るゝ時

二羽連れて鳴くときさへも閑呼鳥ぞ

此あたり日にみゆるものは皆涼し

初めの句は、只閑呼鳥といひても同じ作ながら、ぞと一字撓めたれば感情深し。後の句も眼にみゆるものと斗りは、句意かろ〴〵し、はと一字撓めて、其あたりの風情殘らず涼しきやう也。是を撓めの句法といふ。

等類の事。

一中院通茂公御夜話に、此程世にめづらしきことやあると御尋ねに、或人只今笠附と申すことのはやり候、此ごろの題にあの人と云ふ笠あり何ものの附にや、

あの人は壬生の猿ぢやが茄子賣

點者是を勝句に出し候、又其の次の會にまた出たと云ふ笠を出し候ひしに、

又出たは壬生のさるぢやが茄子賣

と附け候を復高點にいたし候、等類の句にて何のちからもなげに聞え候、何所をおもしろく承はり候やと申上ければ、仰せに、先の句はぢやがと云ふ所に作をこめたり。當分にみていうたものにあらず、年々見知りての心也。次の句は、ぢやがといふ所輕し。其の故は、前の句をかりての事也。茄子賣と云ふ所、先の句より又重し、かゝる所を聞きわけぬ人は、歌の批判別して等類の沙汰おぼつかなし、よく〳〵心えよと仰せられしとぞ。しかれば、今時我等ごときの言葉の似たるをもて、等類の沙汰するは、また〳〵覺束なきことゝもなり。此あたり深く味はふべき事にや。

古池や蛙飛込む水の音　芭蕉

梅一りん一輪ほどの暖さ　嵐雪

鶯の身をさかさまに初音哉　其角
出づる日やぬれ色霞む伊勢の海　凉莵
捨舟の主こそ出づれ松かざり　雷堂
長松が親の名で來る御慶かな　野坡
元日やされば野川の水の音　來山
讀初めや金拾へりと橋の札　百萬
うぐひすや雜煮過ぎたる里續き　尙白
鶯の鳴いてみたればなかれた歟　作者しらず
痩果てゝ香に咲く梅の思ひ哉　去來
青柳や二すぢ三筋老木より　柳居
木兎のねぶり落ちたる柳哉　琴風
青柳のゆりくたびれて動かぬ歟　千翁
雁の聲朧々と何百里　支考
麥喰ひし雁とおもへどわかれ哉　野水
大原や蝶の出て舞ふ朧月　丈草
淸水の上から出たり春の月　許六
板橋の音しづかなりおぼろ月　吏登

久かたの光りこぼれて小蝶哉　六窓
駒鳥の聲ころびけり岩の上　園女
瀧壺に命打込む小鮎かな　蜷川田夫 僧有
春かぜや麥の中ゆく水の音　木導
春の海終日のたり〳〵哉　蕪村
出代やこなたの雨もけふ斗り　りん
薄曇けだかく花の林哉　信德
鐘樓あり扨は櫻もちる合點　珪琳
いつはりのなき世也けり松に藤　人左
けふ限りの春の行方や帆かけ舟　許六
眼には青葉山ほとゝぎす初鰹　素堂
亭主の夜少し殘りてほとゝぎす　百里
鳴くにさへわらはゞいかに郭公　赤右衛門妻
春雨の今に降る也かきつばた　故班象
蜀魂なくやひばりの十文字　去來
似合はしき芥子の一重や須磨の浦　杜國
けしの花咲きにけり又散りにけり　乙兒

飛込んだまゝか都のほとゝぎす　丈草
松島や鶴に身をかれ郭公　曾良
閑呼鳥我れも淋しいか飛んで行く　麥林
海山に五月雨そふや一くらみ　乙州
湖の水増りけり皐月雨　去來
尋ねあはでや歸るらむほとゝぎす　吏登
鵜遣ひは夢にも鵜をや遣ふらむ　氷花
荒れにけり奈良の都の澁團扇　松閣
晝顔や旅は憂きものと思ふとき　作者しらず
日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀
譽めて居る雨から出たり夏の月　山幸
突かせばや百會あたりへ心太　百人
かつくりとぬけ初むる齒や秋の風　杉風
落つる日のいそぎや桐の二葉迄　超波
行水（ぎやうずゐ）の捨て所なき虫の聲　鬼貫
秋もまだ二日月夜や峰の松　支考
海を衝く沖中川や秋の水　魚文

秋かぜの枯らし初めや鹿の角　蟻考
百生や蔓一筋の心より　千代
名月や桔梗刈かや女郎花　吏登
明月や夜半に水うつ魚の店　蒼狐
命二つあらば身投げむ月の湖　吏由
岩端やこゝにもひとり月の客　去來
明月や心ひとつの置きどころ　月巣
鶴の巣もやぶれて秋の風高し　吏登
欄干に昇るや菊の影ぼふし　許六
ゆれ合うて水には滿てり後の月　夜兎
蘆の穗や招く哀れよりもちる哀れ　路通
片扉人まつ闇や秋のくれ　信夫
秋の暮灯やとぼさんと問ひに來る　越人
追上げて尾上に聞かむ鹿のこゑ　北枝
よせあへば笛と笛也闇の鹿　周竹
遙かなる唐茶に秋の寢覺哉　宗因
居風呂にもの入れてあり蟋蟀　希因

曉や灰の中よりきり〴〵す　淡々
木がらしに二日の月の吹散る歟　荷兮
一夜來て三井寺謠へ初時雨　尙白
けふは扨春のやうなる枯野哉　栢莚
鵙の居る野中の杭よ神無月　嵐蘭
天地の噺しとだえるしぐれかな　湖春
炭竈やけふものこりて峯の松　吐月
ちりひぢの又深山木やくだけ炭　連丈
冬の野や噺ひとつの雲の上　吏登
熊坂が長刀あぶる霜夜哉　老鼠
有明にふり向けがたき寒さ哉　去來
己が身をまくらに鴨の浮寢哉　柴立
むかしいつ武者六七騎門の雪　沾德
白妙やうごけば見ゆる雪の人　一品
松杉の上野を出れば師走哉　馬光
世の中は富士の裾野やけふの雪　不知作者

俳諧發句小鑑終

俳諧附合小鏡

友を鏡とし、銅をかゞみとす、其の賢愚得失の境にもあらず、爰に又鏡あり、四時の變化造次をうつさずといふ事なし。百錬の始めは八雲八重垣の落穂を拾ひ、筑波根の田井の雫を汲むといへども、あながちに艶なる詞をからず、只俗語平話におもひを述べ、よつて童子の何といふ手引の書見侍らむといふに、あたふるの鏡なし。雪中老師是をつぶやき、予筆をとりて小冊子なれり。此頃書肆西邑頻りに乞ふにまかせて、附合小かゞみと題してうちくれぬ。

安永四乙未孟春　　雪星觀牛家

俳諧附合小かゞみ

目　録

以　上

俳諧附合小かゞみ

雪中庵蓼太編
門人　牛家著

三物の解。

發句より第三迄を三ッ物といふ。脇に五體第三に二體あり。師によりて學ぶべし。

一發句、脇、第三。起、定、轉、合の習ひ也。各詩の格式也。起とは四時の景物に對して、一物なき所に情を起し、十七字に結ぶ是發句也。定とは譬へば發句は梅にもせよ、鶯にもせよ、其の物に打添へて或ひは場を定め時節を合はせ、發句に言殘したる所を補ふ也。よつて請定まるの心也。轉とは發句脇を一連の前句となし、天地より人の生じて、萬物始まりたる如く、又是より一起すれば、附を微細にせず、二句の懐ゆるやかに遠きをよしとす。四句目は合の場ながら、百員歌仙の續きものなれば、詩の格と違うて、爰に習ひあり、詩の起定轉とは、

薄暮層巒雲遶腰　傾盆一雨定明朝
老翁八十眉如雪　立抜渓邊獨木橋

此句の心は、夕暮がた立ち並びたる山々の腰を、雲のめぐる風情なり。よつて盆をかたぶける程の雨が明朝降らうとなり。是發句と脇の一情也。第三は此山の日和ぐせを見覺えたる八十の翁なり。かくの如く發句脇の情を轉じて、景情二句づゝかたみに替り、人情二句來らば風景、時節、時分等に一轉する也。猶古人の三物に工夫すべし。

○春

發句若葉。脇春の雪。第三歸鳥。

蒟蒻にけふは賣勝つ若菜哉
吹上げらるゝ春の雪ばな

歸る鴨かへらぬ鴨もさわだちて
發句 梅。脇 雉子。第三 家普請。
梅が香にのつと日の出る山路哉
所々に雉子の鳴きたつ
家普請を春の手透にとりつきて
發句 鶯。脇 禮者。第三 藪入。
鶯に朝日さすなり竹格子
禮者うすらぐ春の靜さ
藪入の土産似合ひにこしらへて
〇夏
發句 題しらず。脇 水雞。第三 雨。
そらまめの花咲きにけり麥の緣
晝の水鷄のはしる溝川
上張を通さぬほどの雨ふりて
發句 夏の月。脇 門涼。第三 時節。
市中は物の匂ひやなつの月
暑し〳〵と門々の聲
二番草とりも果さず穗に出でゝ
〇秋
發句 蜻蛉。脇 蘆の穗。第三 霧。
蜻蛉の壁をかゝゆる西日かな
潮落ちかゝる蘆の穗のうへ
霧の外の鐘を隔つる松こみて
發句 きり〳〵す。脇 秋夜。第三 居所。
灰汁桶の雫やみけりきり〳〵す
油かすりて宵寢する秋
新疊敷きならしたる月影に
發句 初茸。脇 谷川。第三 替地。
初茸やまだ日數へぬ秋の露
青き薄に濁る谷川
野分から居村の替地さだまりて
〇冬
發句 初時雨。脇 木の葉。第三 旅人。

鳶の羽もかひつくろひぬ初時雨
　ひとふき風の木の葉しづまる
股引の朝から濡るゝ川越えて
　發句霜。脇橋。第三景情。
霜に今行くや北斗の星の前
　笛の音こほる曉の橋
ひと番ひ鶴の來て寢る松經りて

たばこ盆の說。

一四句目より揚句迄は、三物と違うて附句千變萬化也。地皮肉骨の習ひあり。前句を耳に聞かずして眼に見るべし。然る時は、其形現はれ、附くべきもの、打越あしき物あきらか也。おもひ量ると見るとの違ひ也。たとへば

　先づ眞中に煙草盆おく
あまくだる紫雲の小袖上草履

されば、此の烟草盆の眞中に置くといふを、耳に

聞かずして目に見る時は、尋常にはあらで遊廓の初會などゝ見ゆる也。かの薄雲・小紫ともいへるものゝ、ゆるぎ出でたる風情ならん歟。

又

　ひきずるやうな銅たばこ盆
使者たてゝ小坊ぐるみ掃きなぐり

何某侯の使者の間の掃除、句上にあきらか也。

又

　銀のかな具の提げたばこ盆
尼君は淺黃綸子に丸頭巾

御庭めぐりの尼公つき添ひ切り、禿やうのものゝ提げたるたばこ盆の風情なり。

又

　鐵釘締めの大多葉粉盆
腰懸けて將棊の向ふ半合羽

壹一しきのり居眠りにゆるされたる商家の見世先なり。

又

埃だらけの提げたばこぼん
　葺替へてさあ降ればふれ吹かばふけ

會津ものゝ埃だらけなるは、葺替へ仕廻うたる行水前なるべし。

又

ほこりだらけの塗りたばこ盆
　麥秋のころは御寺のあげ疊

同じく埃だらけながら、塗烟草盆とあれば風姿かはり、田舎寺抔の麥秋さもあるべきか、されば煙草盆と耳に聞く所は一色ながら、目に見る所はひとつ〳〵にわかりて、附句もそれに隨ふべし。

戀上中下。

一戀は貴となく賤となく、只一情ながら、和歌にも逢ふ戀、あはぬ戀、逢ひてあはざる戀など、趣きさま〴〵なり。俳諧の附句とても、上中下、初中後なきにしもあらず。

上　品

來べき宵とてゆふがほの蜘
　うしろから鏡の機嫌なぐさめて

上臈の人待ち給ふ夕化粧也。「我がせこが來べき宵也さゝかにの蜘のふるまひかねてしるしもと、右近の君などの慰さめ申したる、夕顔の宿の風情もあらん歟。

中　品

頭は出口の柳枯れ〳〵
　嘘かりに來る手に筆を持ちながら

川竹の風情なり、此の文の返り事いかにと、姉女郎などに囁きたる、年波の有様ならん、僞りのうちに誠有りて、中品の戀といはん歟。

下　品

田植に色の白き雁人
　居風呂に水さす戀と焚く戀と

「君は小田巻麻の糸思ひ合はせてよるばかりと、麥搗き唄の鄙ぶり、戀なほ哀れふかし、やもめ女の雁人見る心地せらる、「馬に出ぬ日は内で戀するといへる附句も、此あたり歟。

初　戀

押しやられてもはてぬ初戀
蟲干しの摸樣も鴛のをしへ鳥

はつ草のねよげながら、顏うちあかめたるあとなき戀なり、中だち初むる女も、さゝめきたる蟲干のかいまぎれと附けたり。

父母愛㆓少女㆒　女是聰明子
生不㆑識㆓鴛鴦㆒　繡出鴛鴦是

是等の餘情歟。

中　戀

裂いて捨てるがなほ起請なり
吉原をこちらの髪に梳直し

昨日綾羅の仇なるより、けふの紬の實ならんこそと、始め終りを含みて、中の戀ともいはんか。

後　戀

枕の文を解きてなぐさむ
髮結うた幽靈ひとりなつかしく

楊貴妃歸つて唐帝のおもひ、李夫人去つて漢皇のなさけとありし、雨月のつれ〴〵ならば、かの反魂の薫もあらまほしき歟、猶戀の姿情此の六種に盡し難し。依つて爰に諸集のうちより拔萃す、是れを讀みて工夫すべし。

前句　樣々に品替はりたる戀をして
附　浮世の果ては皆小町なり

前句　うは置きの干菜刻むもうはの空
附　馬に出ぬ日は内で戀する

前句　藥をはこぶ簾中の秋
附　此の戀は兄が合點を待つばかり

前句　それそこへそよぐ萩の迦陵嚬
附　眼鏡へかはる戀もはる〲
前句　我が物おもひ浮世一人
附　此の戀をいはんとすれば吃りにて
前句　泣いてしまうた跡は寢られず
附　下紐のむすびめ高きわすれ草
前句　我が年にあはねど娘盜出し
附　戀にかならず戀の友達
前句オサメ　長女使の御返事を待つ
附　かくし題思ふ方にもよみまさん
前句　口紅粉凄き石佛の顏
附　啞の戀涙こぼして見せにけり
前句　傾城どのを御客あしらひ
附　疱瘡のけふは髮梳くもの好み
前句　しとやかに朽葉鹿子の古狐
附　封もそのまゝ師直が文

附合三儀。

一寄合　前句に對して趣向を定むる事。
一句作　前句に對して新古虛實の事。
一てには　前句に對して枝折の事。

附合四道。

一轉　前句の人情、或ひは其場其時の一轉なり。放の附句に差別あるべし。
一隨　前句の姿情を動かさず隨ふなるべし。
一放　前句に對して風雨、寒暖、陰晴、四時の働きと見るべし。
一逆　前句の姿情を見直し、多くは放したる

附句としるべし。

執中之法。

一芭蕉翁廿五條の內、附句に執中三儀の寄合の法あり、執中とは中をとるといふこと也。案じ方の肝要とす、源氏物語などの大部なる物も、須磨の左遷より筆をたてゝ、前後は枝葉なりとぞ、淨瑠璃の五段續きも、先づ三段目の面白き所を作して、偖初後は寄せもの也。附句も左の如く、前句に對して附くべき物は、一字二字三字には過ぎず、是を辨へざれば、句に向つて趣向を求むる事遲し、爰に至りて執中の法を用ふべし。其一字二字に、てにはを加へ、延べもし縮めもして、二句連綿する事也。附句は蓮の莖を切りはなして、中に糸を引くがごとく、情のかよひたるを上品とす。つらねうたといふも此の心にや。

へし折る枝のからき肉桂

扨は夢座敷なくなる草枕

附は夢の一字。

糊強き袴に秋を打うらみ

鬢の白髮を今朝見付けたり

附は老の一字。

手紙を持ちて人の名を問ふ

本膳が出ればおの〱かしこまり

附は振舞。

此の秋も門の板橋崩れけり

赦免にもれて獨り見る月

附左迁。

鳴子おどろく片藪の窓

盗人につれそふ妹が身を泣きて

附盗人の妻。

附句に季をむすぶ事。

一附句の春移り、秋移りに至つて、初心の人先づ

季立より案ずるによつて、前句の全體に附かず、季は前句のしをりにして、附けは例の執中なり。又五三句おもくわたりたる時は、季立斗りにてはしる也。其の時は季に一作有るべし、予一とせ先師と兩吟の歌仙に、

鬼のやうなるやり人泣かせる

燒飯の花もすがるゝ六阿彌陀

此の所打越しに人事あり、殊更半折のはづれなれば、さら／＼と參るべしと。例の堤の若草、或は陽炎やうのもの出でたり。師の曰く。かゝる處は季立のみあしらひなれば、景物に一作あるべしと也。予れ眼を閉ぢて前句のあたりを見れば、花もすがるゝ三月下旬、眼のあたり物こそあれと、

秋を隣りに麥しらみたり

師の云く。其の如く、季立の扱かひ遠きを搜さずして、足下に玉ある事を思ふべしと也。猶季の扱ひ大略を爰に拾ふ、是れを讀みて工夫すべし。

前句 霧立ちのぼる歌に其のまゝ

おとなしうつかへて兒のふぢばかま

附は兒、ふぢばかまはあしらひ也。

同 虜々をさする秋風

新しい鰹なりしが薄紅葉

附はかつを也、薄紅葉はあしらひ也。

同 宮川にすべるやうなる月の影

稻妻よりもきいた剃刀

附は一錢剃也。稻妻はあしらひ也。

同 下手の礁のなほ哀れなり

剃捨てはせいで尾花の九十九髮

附は老女なり。尾花はあしらひ也。

同 いぶすなと勝手を覗く亭主ぶり

此の段殊にあだし野の露

附は講釋なり。露はあしらひ也。

前句
稻荷の茶屋もあかぬ春の日
うなひより乳母がなぐさむ手毬にて
附は乳母也。手毬はあしらひ也。

同
虹の陀羅尼も先づ彼岸から
纜を解きて渡唐の遠霞
附は渡唐也。遠霞はあしらひ也。

同
青きもふまず駕は何事
土産にもまだ春風の奈良團扇
附は土産也。春風はあしらひ也。

月花の事。

一月花の句は一卷の陰陽なり。なくてならぬ道理を知りて、前々の俤ある句なりとも居ゑて、一卷を調ふべしと廿五條にあり、されども其前句によりて、只月の花のと會釋ひては附かぬ句あり、是又附句に季を結ぶが如く、月花を句の用になして動かすべし。此の頃或人の句に、

婆々にわたせば赤子泣きやむ
爰元は花の彌生も蟵の月

斯く附侍れば、一句の趣向は囉ひ乳にして、月と花とは句作の用也　赤子のせばりたるに、蚊のあしらひ餘情かぎりなし。

狂歌も一首出來て名月
鋤鍬に荒れても花の都あと

附は舊都なり、花は句作の用也。花前に至りてかかる傍若無人の前句を出せるを、乙兒が只何となく附けわたして席上皆舌を吐けり。

醫者が遠くて間にあはぬ也
菅笠に花の都と書いて有り

是れも花前の難則なり、附は前句の煩む人をみやこ人と見出して、花の一字は用なり句作也。尾城の巴靜が席上の人に、涙をこぼさせし附句なり。

枕もふたつ鴛鴦にならべる

浮舟をまはす花の瀬月の淀

浮舟は戀のあしらひにして、趣向は舟道遙也。月と花とは句作なり。

籾臼の唄聞きながら我が鼾
月をほしたるほら貝の酒

附は山伏の假枕にして、月は句作なり。

かんにんならぬ七夕の照り
名月の間にあはせたき芋畠

前句七夕の照りとあれば眞晝の句なり。よつて附は芋畠にして月は句作也。

曠野の百合に涙かけつゝ
狼の番して明ける夏の月

附は番人、月はあしらひなり。

ばら〳〵と錢落したる石の上
酒で乞食の成りやすき月

附は乞食、月はあしらひ也。

日は赤う出る二月朔日
初花に伊勢の蚫のとれ初めて

附は伊勢の船にして、花はあしらひ也。

曲突焚付くる妻の尻輕
花の露月の鏡のそれながら

附は櫛笥也。月花は用、髪結ひさして立働く姿明かなり。又月花の句は、前句の作者に功者、不功者、有功者の人、前句へ廻る時はほどよき會釋ひをいだして、附句に骨をらせぬ也。三吟未來記、初折の花前、秋の三句目なるを「庵の雜水をすゝる小男鹿と翁の附けられたり、されば此の鹿は妻乞ふ秋にもあらず。奈良あたりの鹿にして、一句はなしては雜也。よつて秋季に花を附くるむつかしみもなく、すら〳〵と運び侍り、名人の心づかひ後學の作者おもふべし。

色字之事。

一二十五條に曰く。發句附句ともに趣向の浮ばざ

る時は、眼を閉ぢて胸中に畫をなすべしと也。畫は鳥獸、草木、人事の上も、悉く形現はるれば、詩中の畫、畫中の詩ともいふなるべし。

都をば青葉とともに出でしかど
紅葉散りしく白川の關

しら〳〵しらけたる夜の月影に
雪かきわけて梅の花折る

初めの歌は青紅の色字に春秋を盡し、後の詠は白の一字に寒さを含めり。或は詩にも遺却珊瑚鞭。白馬驕不レ行と少年行の綺羅を飾り、以言の詩も、白駒、紅葉の色字にすぐれたりとかや。たとへば貴妃小町といふとも、衣服あしくば心をうごかすべからず、まして五七五七七の風姿も、彩色なければ我れのみしりて人の耳に落ちず。

白　字

綾白々と裝にこぼるゝ

斯くては上﨟の落人などゝ、姿あらはるゝ也。

紅　字

紅絹赤々と裝にこぼるゝ

かくては上﨟とも見えず、舞子、傾城など引具したる雪見などの、一興とも見ゆる也。

青　字

酒盛に青經ひとりかしこまり

下戸とも病後とも、青の字に姿表はれたり。此の丹青を遣ひ得る時は、貴賤老若の姿、四時の風物に至る迄明か也。天地に孕るもの、何か五色を離るる事あらん。發句猶色字を以て風姿定めたる句多し。

邪正之事。

しばりあげたる魚屋の盗人
母の眼にたらぬ眞珠を泣きながら

一白波の冷まじき夜も、斯く附替へ侍れば、忽ち貧者の孝心にひかれて、盗みもいとしはしらく、

かの猛き武士の、心も和らぐるとはかゝる所ならん。是邪を轉じて正に至らしむる也。不孝、不忠、不義の句意愼むべき第一なり。博奕抔いふ句はむかしよりいひ渡り侍れど、骨牌をかくして釋迦のあさのとは、文臺にのすべからず、是俗談平話をただすといへる、俳諧の一益なり。

三句目之事。

一附合の三句目は紛骨有るべき所也。蕉門の作者多くは、二筋立の縞の如く、人情二句續けば、早三句目は冬の、夏の、雨の、雪のと逃げて一卷力なし。古集の骨折を師に學ばざる故也。狐集に、

　　文書くほどのちからさへなき
　羅に日をいとはるゝ御かたち
　　熊野見たきと泣き給ひけり
　たづか弓紀の關守がかたくなに
　　酒で兀げたる天窓なるらん
　　双六の目をのぞく泣暮れかゝり

斯く人事續き侍れど、曾て打越しの沙汰なし。是を貞德の御日記に、逆茂木といふ心は、先に立つ作者の一己の手柄にせず。逆茂木を引除け〳〵後より續く兵を、城際に近付くるが如く、名人の交りたる一卷は如斯く、自他分明にしてはこびやすし。此六句の解をいはゞ、先づ文書く程の力さへなきと云ふ句に自なり。其人の戀する君は、羅にも日をいとふ程の及びなき上臈と附けて他也。是れを花山の上皇抔の御俤と見て、熊野見たきと泣き給ひけりと又他也。關守は迎附にして、酒で兀げたるは關守の上也。双六の句の一座の大勢に附けちらしていはゞ、其場にもあらん。是翁の紛骨なり。三句のはこびは、是等を證句として、工夫すべし。

俤の句幷に故事、故歌の事。

草庵にしばらく居ては打ち破り
命うれしき撰集の沙汰

一翁曰く。俤の句はかくの如く、前を西行能因の境界と見て附くる也。直ちに西行能因と附くるは手づつならん。只俤にて附くべし。又人を定めていふのみにもあらず。

發心のはじめに越ゆる鈴鹿山
内藏頭かと呼ぶ聲は誰れ

いか樣誰れぞが俤ならん、又或席にて宗祇老人、悲莫レ悲兮生別離樂莫レ樂兮新相知此の心をとりて

旅の心を何にたとへむ
ならひとて長き別れはなぐさむに　宗祇

かばかりのかたき事をうち和げてつかはれたり。すべて故事古歌とり等、それときこえぬやうにかすませていたし侍る也。

疊字之事。

韮の柵木に鳶をながめて
鳶の居る花の賤屋とよめりけり

一「鳶の居る花の賤屋の朝もよひ木を割る斧の音ぞ聞ゆる、此の古歌取にして、同物異躰の習ひあり、師によりて習ふべし。

序破急之事。

一去來曰く。表の句、序の序、三の折破、名殘の折急也。初折、二の折、后三の折、にて亂れて。名殘の折にてさら〳〵と申すべし、是れ百韻の法也。今時の盲俳、初折にけやけき事をいひ名殘の折にて重たく苦しく、位ある事云出して判を乞ふに、長短の點を引く、誠に一盲衆盲を引くとや笑はん。

附句に新古なき事。

一支考曰く。附句は句に新古なし、附くる場に新古あり。

蓼云ふ。森羅萬象いかで古からん。いかで新しからん。江戸筏集に運之、

　辨當と先へ來て居る按摩取

　しづこゝろなく花の散るらん

一座案じ方之事。

一其角云ふ。一卷に我が句九句十句ありとも、一二句能き句あらばよし。殘らず能き句をせんと思ふは、却つて不出來なるものなり。未だよき句なからんうちは、隨分よき句をおもふべし。

戀の句數の事。

一芭蕉翁曰く。古しへは戀の句數定まらず宗祇宗長の時か勅巳後二句以上五句となる、是禮式の法也。昔は戀句一句出づれば相手の作者は、戀をしかけられたりと挨拶せり。又五十員百員といへども、戀句なければ一卷といはず、はした物とす。

假名遣ひ之事。

一端のいを下に書く訓し。

　はしのいを下にこそかけかゝろければ

　鯉こい　鯛たい　額ひたい　貝かい　甕もたい　灰はい

一同下に書く聲。

　こゑによむ字の下の字を書く事は

　内々ないへ　細々さいへ　例れい　次第しだいなり

一ほををと讀むかなの事。

　聲はねてよむ字のをにはほをぞ書く

　槿蕣あさがほ　薫かほる　庵いほり　鹽しほ　竿さほ

一端のへのかな　陶物　白妙　歸雁　堪忍

　はしのへはひふへとかよふかなに書く

一同じくひを除ける、入るかなの事。

　思ヒおもふ　願フねがひを　叶フかなへ　伴ヒともなふ

　ひをのぞきゆふるとかよふかなも有り

さかへ（榮ふる ゆ）　をしふる（敎へ ふゆ）　うふる（植へ うゆ）　わきまへ（辨ふる ゆ）

一端のをを上に書く事。
はしのをはちいさく輕きはこのを（緒）や
をの〳〵（各）　をのれ（己）　をぶね（小舟）　をし（鴛）　をと（音）

一奥のおの字。
おくのおはおほ（大）きくおも（重）くおはします（御座）
烏のお（尾）　おほく（多）　おぼしめ（思召）されよ

一をお輕重の事。男はおとこ　女はをんな
おけ（桶）小をけ（小桶）おとこ（男）小をとこ（小男）おる（折）手をる（手折）
おもむく（赴）　をもむき（趣）　おもしろ（面白）うして

一うの字をむに讀むかなの事。
うの假名にむの字をかけば鼻へ入り
むま（馬）　むば玉（烏羽玉）や　むめ（梅）の　むもれぎ（埋木）

一下に書くうの字の事。入聲のうはふ也 同おはほなり。
字の聲のうの字は口のすぼるなり

一うの假名にふの字を書く事。
ほうこう（奉公）　ねうぼう（女房）　れうし（料紙）　せうかう（燒香）
うのかなにふの字をかくは入聲字
しふぎ（祝義）　らふそく（蠟燭）　はふ（法）や　らふ竹（無節竹）

一中のえの假名。江也正字衣也
中のえは中にゆとゆく時にかく
きこえ（聞ゆる）　おぼゆる（覺え）　こえ（肥ゆな）　こゆる（越え）など

一奥のゑ下に書く事。
おくのゑを下に書く字はあまたなし
こゑ（聲）　いゑ（家）　するゑ（末）　つゑ（杖え）　ゑもん（右衞門）さひやうゑ（左兵衞）

一中のゐの事。
中のゐはひゞきすくなき假名ぞかし
くもゐ（雲井）　くれなゐ（紅）　まどゐ（圓居）　しゐしは（椎柴）

一其の字に持ちたる假名の有る事。
そなはりて五音の外のかなもあり
くらゐ（位）に　おゐて（於いて）　とのゐ（宿直）　ゐのしゝ（猪）

右の外に　きくいしう（ひは悪し）にかよふ假名。

明、闇、輕、重、安（ヤスキ　ヤスク　ヤスイ　ヤスシ　ヤスウ）

必ず五つにかよはねども、たとへば　おもひ　かろい　など〻
書く度に此のかなはひ（い）か（ゐ）、など〻思ふ時此のきく
いしうにて知るなり。

歌仙

ひつし田や青くも染めて初しぐれ　蓼太
　山は夕日に紅葉ちる頃　牛家
此の供奉は牛ほろ酔はぬばかりにて　同
　燧袋を置きわすれつゝ　太
月くらき旅のやどりの一寐覽　同
　瀬のふりかはる秋の川音　家
ウ
荻みだれ薄たふれし風の跡　太
　下書とゝのふる目安まち〳〵　家
塞の聟もどらるゝ顔ながら　太
　驗者に惚れて猶哀れなり　家
峯は只白雲ふかき片便り　太
　茄子四ッ五ッ夢に其のまゝ　家
富づける下部まじりの集め錢　太
　江戸に隨ふ江戸の逗留　家
漸しばし碓蹈みて明けがらす　太
　まだきさらぎの霜に入る月　家
花衣脱いで増賀のあか裸　太
　乞食の泪かゝる若芝　同
ナ
酒癖の世はさま〴〵に酌みかはし　家
　城おだやかに囑托の札　太
都からけふ逢ふ戀の輿いれて　家
　帶くる〳〵と手傳うて解く　太
青梅の毛虫に逃ぐる割ばさみ　家
　廐菌匂ふ麥の夕晴　太
倦く時は車二輛のたゝみ庵　家
　とまりに來ませ春中合はせん　太

相傘を別れて走る袖笠に　家
宵に豆腐のきれる庚申　太
挑げても行燈町のうす月夜　家
弦音揃ふ綿弓の秋　同
剃捨てゝ支離角力の奉加帳　太
むか腹たちのついと出て行く　家
蕎麥切の勝手は箸もしどろなり　太
ぞんぶん遣ふ瀧の枝道　同
花まもる神まし〳〵て吉野山　家
笠うち續く春のあけぼの　執筆

去年の冬籠、ひとふた夜の言捨てを、
爰にひろひ侍る。

瓢中四季混雜。

かいしきも時とや鮎の下紅葉　天府
折れ〳〵と折らせて花のあるじ哉　蓼太
歸る夜は人にも告げず春の雁　魚汶

鶯や俊成卿の小柴垣　乳峰
汐見れば月の最中ぞ五月雨　百貢
名月をさすがに不斷櫻哉　松隣
冬瓜や染殘されて猶老いし　愼車
きのふありあした見えけり杜若　富屋
あけぼのゝ青き櫻や郭公　如風
出代や壁に九年の一枚繪　鳳宿
薺の市に隱れて咲きにけり　女 蘭室
寐た人の姿短かしきり〴〵す　和星
涅槃會やひと足遲き顏ばかり　白鳳
かゆ杖や梅こぼさじと打ちはづし　牛家
ひとつづゝ笠のいざよふ躍かな　普成
花ざかり木の間に松を見付けたり　子交
田に配る水も蜘手やかきつばた　龜求
吹いて行く春幽かなり夜の笛　默我
菜の花や竹からあまる村雀　逸賀
灌佛や木々の雫を汐がしら　花口

身のやせるほど嬉しいか鳴く雲雀　南瓜
鐘よりも人さめやすき砧かな　壽鏡
杣の飯こぼれて白し苔の花　人左

○

行く春やこらへかねたる行々子　婆心
しぐるゝや眞葛が原を紙合羽　山幸
荒海の更けてしさるや夜の雪　連丈
萍や春秋しらぬ心より　蓼太
白菊の色に出るまで惜みけり　北魚
しら菊や白きを染むる秋もなし　文母
蕣や影さへ元の水ならず　翠羽
はね返す柳に氣あり春の雪　友鷗
うき草のゆり捨られて暑さかな　白翅
下戸ひとり花の嵐と詠まれけり　盤中
鷹居ゑて草鞋うたする野寺哉　夜兎
いつの間にふた木となりぬ枯柳　夜梧
花咲いてけふ立春と思ひけり　吐江

迷ひ來てまよふ道なし雪の原　長羽
男から先へ着らるゝ袷かな　鳳足
蚊柱も半朽ちけり秋の風　蘭徑
うぐひすや地主權現の花の聲　楚龍
客たてゝ扨居直るやくすり喰　千牛
傘さして肴うるなり春の雨　牛家
方丈の晝寢を埋むさくらかな　雪凍
菜の花も牽子に近き名殘哉　貢雨
喰ひさして女かしまし蕗の薹　蓼人
活返る人のそよぎや夏の月　遊喬
松魚荷の續くや江戸の星月夜　理牛
口をいとふすがた也けり白重　牛家
名月や曉かけてわたし守　仙瓜
駒牽の都へかゝる月夜哉　松把
稻妻に細殿はしる女かな　三思
散る花や打ち散らしたる盤のうへ　班象
枝折れば蜉蝣のこぼるゝ木槿哉　周竹

○

白菊や節句の果ても九十九髮　杉風
菜の花の黄ばみ落ちてや歸る雁　青雨
夕貌や揚鞠翦れて花に風　文來
反りの合ふ草何々ぞ百合の花　梅郎
村雨つ月見つ千々の寢覺哉　蓼太
蕣に熊野が垣根は荒れにけり　蓼房
しみ〴〵と定家がつらに時雨哉　倉鼠
目出たさのゆきゝ幾人墓參り　雪麿
木の葉から別れて出たるひたき哉　季令
はしり過ぎ歸り過ぎては乙鳥かな　流光
引きかへて散るをさかりの花火哉　牛家
ゆふがほの花のせて見る扇かな　時中
我れや鷺鷺や我れかと夕すゞみ　竟平
柴人やさゝやく笹の下すゞみ　子得
落鮎や一瀬々々に老の坂　米夫
てふ〳〵を只ひと口の牡丹哉　李院

水門は形ばかりなり行々子　車童
家土産の馬勃脊負うて童かな　英波
炭うりの俤まで白き翁かな　魚遊
草麥や顛てとろゝにほとゝぎす　梅素
鐵砲に押し分け行くや薄はら　五明
むめが香や門にイむ琵琶法師　蘭甫
千早振る夜の錦や神樂舞　牛家
一面に手拭白き十夜かな　石意
爐に組し炭も連理の契りかな　闘牛
初ものゝ百味揃ふや靈祭　鷺川
雫して青田を出づる螢かな　竹條
春雨や雞の啼尾の下雫　豊扇
まぎらはしいづれ彼岸の鐘の聲　曲川
此の君とけふこそ思へ青すだれ　漣風
十六夜の間や葛城の神遊び　彭壽
月涼し海に夕日は在りながら　稻里
箏や蛇に追はるゝ兒ひとり　如水

濡色になやめる花の雨夜哉　牛家
鐘きかぬ舟に至るや雁の聲　五三
音のよき波乗る舟の新酒かな　故友
旅の日の外に三日四日櫻かな　連牛
鵲の橋懸くる間の月夜かな　立冬
分別を碁にせばめけり冬籠　商成
朝霧に垣間見てけり女郎花　女すみ
おのづから鶴遊ぶ也園の菊　女菫路
流れては水となりまた柳かな　女見む
冬の日やけふは何して日の暮るゝ　梅堂
ひとつづゝ名月もてり千松島　牛家
炭竈やけふも殘りて峯の松　吐月

○

棠の花や裏表なき小家がち　錦衣
後の月望にくらべぬ誠かな　深松
姨ひとり宿に捨てけり夏の月　五麗
晝の月見付けて寒さ衜かな　鬼秀

薪ほど折りて呉れけり桃の花　鬼守
鳴立つやまだほのくらき門田より　風馬
戀風に吹かれ歩行きや更衣　鯉毛
藻の花について廻はるや捨小舟　玉斧
鶯や何に啼いても鄙ならず　鳴皐
梅が香や詩人の牛の尾のそよぎ　大斗
臼唄や里は月待つ宵のほど　車時雨
引いて居る我が國の緒よ鳴子繩　祇卜
我が袖もちぎれて飛ぶか秋の雲　意長
ほとゝぎす啼くや春にも振り向かず　班石
陣笠に葛水受けん土用干　鼠大
こほらじと中に焚く火か夜の雪　吏中
年よらぬ月ひとりあり枯尾花　尚美
顔見世や誰れに遠寺の鐘の聲　蓼太
盗人の來べき宵なり子規　求光
山吹や花散りかゝるさらし布　牛家
海苔の香や魚と水との心より　斗水

うぐひすの宵寝はいやし月と梅　汀雨
鶯や宿は柳の靑すだれ　百鏡
山門や般若過ぎたる夕すゞみ　羅光
行く春に京は扇のきぬた哉　宜麥
盜むかとしきりに梅の匂ひかな　子興
うかれ女に傾き易き月見かな　涼花
花ながら物喰ふ萩の折枝かな　鳳道
あらかねの土に照りこむもみぢ哉　頓吾
しら菊にかならず隣る黃菊哉　麻佛
いつの間に松をこえてや朧月　南羅
草の闇木の闇分けて照射かな　山幸
秋風や一筋きれる機の糸　虛舟

玉笥山中

雲早し行く六月と來る秋と　月巣

他鄕

牡丹散りてうちかさなりぬ二三片　洛陽 蕪村
曉の雷晴れて今朝の秋　儿董

我庵の天窓數にも瓢かな　蝶夢
にぎやかに雨もてはやす田植哉　尼 諸九
思ひあまり猫はなちやる雨夜哉　浪花 舊國
風も實に女なりけり奈良うちは　米汁
うごかねばとんとうごかぬ柳哉　石漱
遲櫻梨にまじりて咲きにけり　播州 布舟
畑うちや初雷を聞いてから　伊勢 入楚
炭取りに籠も買ひたしなづな賣　歸白
傘ふせる雪吹や春も後しさり　素因
むめが香におどろく梅の散り日哉　樗良
梅が香や緣に物干す比丘尼寺　伊賀 桐雨
はつものに市人騷ぐ時雨かな　尾張 也有
寒食や始めて見たる火とり虫　蝶羅
打連れて汐木を拾ふ春日哉　曉臺
鎌ほどに月も出でたり麥の秋　伊豫 祇州
きさらぎや川も柱も花曇り　筑前 杏扉
物おもふ身はくだけるや秋の風　蝶酔

山吹や苔の時を實のこゝろ　豐前 此椎
下闇や足の下行く水の音　豐後 蘭里
入相を聞いて居りけり花の下　周防 介羅
實ともなく葉ともなく土筆哉　筑後 官蘭

雪中庵にて

花咲きて雪の中なる庵哉　長崎 李童
晝通ふ道こそなけれ鹿の聲　紀州 湖堂
川音の白きを後の月見かな　八丈島 風宜
虫の音に心も置かず降る夜哉　加賀 千代尼
ひとつ家の猫も啼きゐる春邊哉　半化
小春までこらへかねてや遲櫻　會津 巨石
接穗した石の鳥居や苔の花　仙臺 橙司
袖の香の下戸とは見えぬ花柚哉　綠水
柴刈の脊に蟬ひとつ時雨けり　古道
花に日を添へてかぞへん百日紅　遠江 稻牛
ひとくだりまだ捨てられぬ暦かな　南部 提國
後先をふまへて望の涅槃かな　出羽 投茶

唐錦を假名に崩して牡丹哉　常陸 柳苔
行く秋や藜も杖になりてから　青年
夕立や鳥から晴るゝ人の聲　麻石
入相のとゞかぬ空に雲雀かな　松林
ゆふ顏や窓洩る月も花の數　萬鈴
所々笠に晴れたる田植かな　上總 吏仙
とても散る花には風も面白し　谷戸
十六夜や出直して來る峰の松　可穗
杯に百匹うかむ花柚かな　下總 岷江
葉櫻に誠の雲は殘りけり　巴蓼
初雁や音信山の片だより　巴水
田子の浦打出でゝ見れば照射哉　鷺泊
うごかさで水流れけり冬の月　武藏 歸景
捨舟に躍る魚あり春の水　葛叟
行く春やまだ此頃の年わすれ　西羊
橋ありやなしや朧に鳴く蛙　相模 石髮
貴朝の心をひと木柳かな　遠江 蓼主

口上の笹原はしる粽かな　駿河耳得
隈なくて月さへ見えぬ今宵哉　奇峰
陽炎の中にこそあれけふの月　洛梅
芥子の花けふを五日にして散る歟　兀子
星合や地にあらば又大井川　阿人
かはづ子の蛙に近し佛生會　金皐

俳諧附合小鏡終

大正三年五月三十一日印刷
大正三年六月三日發行
大正十四年七月五日再版發行

俳諧叢書第四卷
○俳論作法集（奥付）
正價金參圓
改正定價 金貳圓

編者 佐々醒雪
編者 巖谷季雄
東京市日本橋區本石町三丁目十六番地
發行者 株式會社博文館
右代表者取締役社長 大橋進一
東京市小石川區戸崎町十三番地
印刷者 多木壽一

不許複製

發行所
東京市日本橋區本石町三丁目
振替貯金口座東京二四〇番
株式會社博文館

（多木印刷所印刷）

文學博士 佐々醒雪
巖谷小波
校訂

俳諧叢書

全七册

高村眞夫畫伯意匠裝幀
菊版總布天金總[illegible]美裝

正價各册金參圓
小包料◆内地◆十八錢

俳壇唯一の典籍

全部完成

◆◆俳諧叢書全部書目◆◆

(1) 俳諧註釋集 上　紙數七六一頁
(2) 俳諧註釋集 下　紙數七七二頁
(3) 名家俳句集 附 附合集　紙數八三四頁
(4) 俳論作法集　紙數七二〇頁
(5) 名家俳文集　紙數七一二頁
(6) 俳人逸話紀行集　紙數六三三頁
(7) 芭蕉翁全集　紙數六五〇頁

文學博士 芳賀矢一
文學博士 佐佐木信綱
校訂

校註謠曲叢書

全三册

高村眞夫畫伯意匠裝幀
菊版總布天金總[illegible]美裝

正價各册 金貳圓六拾錢
小包料◆内地◆十八錢

全部完成

謠曲は武家時代を代表する國樂にして、後世浮曲の淵源を成せるもの、上は中古の文學に基き、下は近世の詞藻を開けり、優雅にして穩健。宜なるかな、今日に於て盛に家庭の間に謳誦せらるゝなり。本書に收めたるものは[illegible]世流の内外二百番を根據とし、貞享元祿版の内外二百番其他各流にわたりての出入を補へるを以て、總計五百數十番に達す、上卷には和漢朗詠集をはじめ宴曲諸集を蒐集して、郢曲の全觀を得せしめんとす。いづれも新に標註を施したれば江湖初見の善本なりとす。

第壹卷　紙數八二四頁
第貳卷　紙數七五二頁
第參卷　紙數六八〇頁